空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊

空港跡地遺跡 Ⅳ

第 1 分 冊

2 0 0 0 . 3

香 川 県 埋 蔵 文 化 財 研 究 会

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊

空港跡地遺跡 Ⅳ

第 1 分 冊

2 0 0 0 . 3

香 川 県 埋 蔵 文 化 財 研 究 会

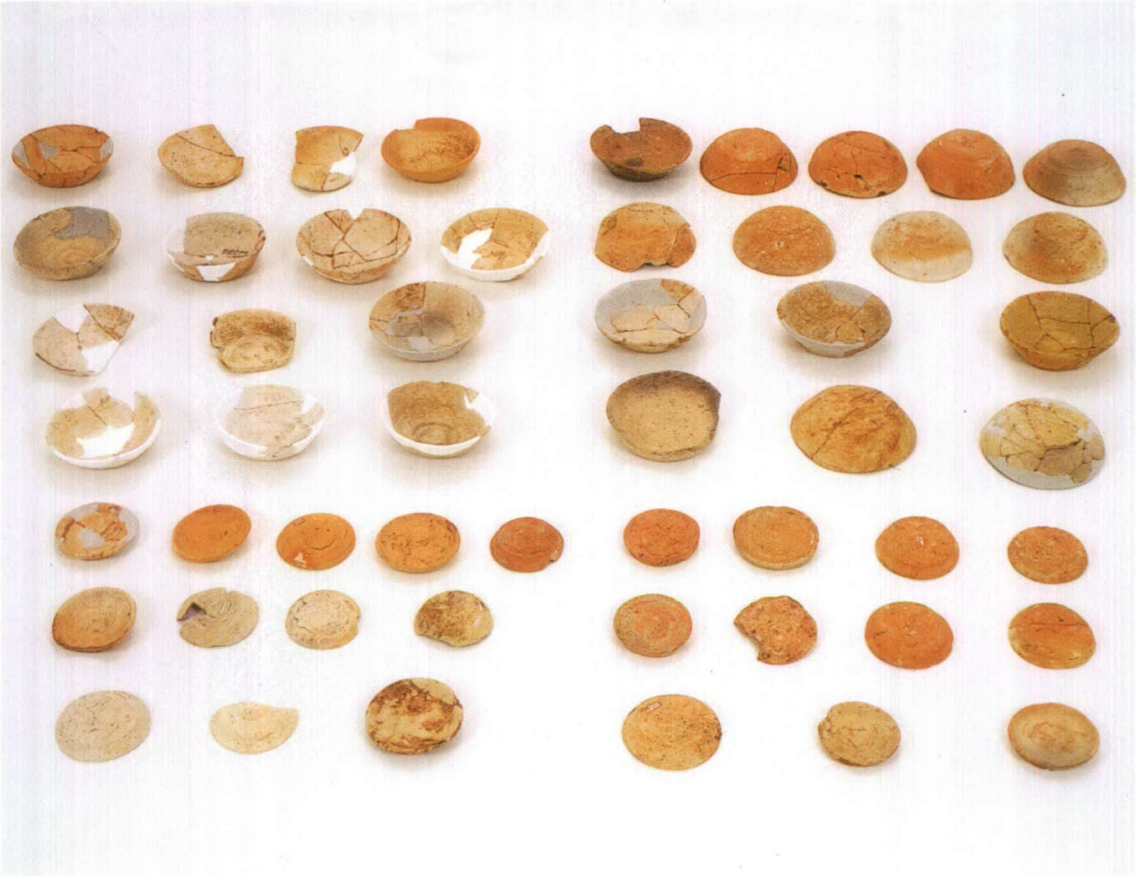
SKf01　石器出土状況

SKf01　出土石器接合資料

SBf06　全景

STf02　遺物出土状況

SDf83　呪符木簡出土状況



区画１　出土土師質土器（左側：ヘラ切り底、右側：糸切り底）

序　　文

平成元年12月の新高松空港の開港に伴って高松市林町の高松空港跡地は，研究情報機能及び文化機能を有する技術・情報・文化の複合拠点，香川インテリジェントパークとして生まれ変わることになりました。

香川県教育委員会では，高松空港跡地の整備事業に伴い，平成２年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してきたところであります。また，平成６年度からは同センターにおきまして，出土文化財の整理研究業務を行っており，その成果につきましても，平成８年度から調査報告書の刊行を行い，今後順次継続する予定にいたしております。

このたび，「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ」として刊行いたしますのは，香川県土地開発公社により委託されました，空港跡地遺跡東半部の調査についてであります。同地域の調査では，弥生時代後期の集落と石器接合資料，12世紀から16世紀にかけての居館・集落とこれに伴う中世土器群，近世からの灌漑用水路などが出土しています。特に中世の遺構・遺物は，当該期の集落構成の変遷を具体的に示しており，中世村落研究の基準資料となると考えられます。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間，香川県土地開発公社及び関係機関並びに地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成12年３月31日

香川県教育委員会
教育長　折原　守

例　　言

1．　本報告書は，空港跡地開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第４冊であり，香川県高松市林町に所在する空港跡地遺跡（くうこうあとちいせき）の報告を収録した。

2．　発掘調査は，香川県教育委員会が香川県土地開発公社から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．　発掘調査は，予備調査を平成２年４月から同年９月まで実施し，本調査を平成２年12月から平成９年11月まで実施した。本報告書に収録された地区については，平成２年12月から平成７年３月まで調査を実施している。

4．　調査および報告書の作成にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。
(順不同，敬称略)
香川県土地開発公社，高松市教育委員会，明善学園高等学校，林地区開発協議会，地元各自治会，地元水利組合

5．　本報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本書の執筆は，第１章第１節３を濱野圭司，第３章第２節３-ＳＫf01-接合資料１・２を佐々木博子，その他の第１章～第３章，第５章を佐藤が担当した。本書の編集は，佐藤が行った。
　なお，出土土器の胎土分析を岡山理科大学自然科学研究所　白石　純氏に依頼し，第４章第２節に掲載した。

6．　発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教示を得た。記して感謝申し上げたい。
(順不同，敬称略)
五十川伸矢，鈴木康之，吉岡康英，亀田修一，小森俊寛，池澤俊之，喜岡茂，片桐孝浩，
大久保徹也，森下英治，乗松真也，陶山仁美

7．　本報告書で用いる方位は，国土座標系第Ⅳ系による。標高はＴ.Ｐ.を基準としている。また，構は下記の略号により表している。

ＳＡ　柵列	ＳＢ　掘立柱建物	ＳＤ　溝	ＳＥ　井戸	ＳＨ　竪穴住居
ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴	ＳＸ　性格不明遺構		

8．　挿図の一部に建設省国土地理院地形図高松北部・高松南部（１：25,000）を使用した。

目　　次

第１章　調査の経過……1
第１節　発掘調査の経過……1
1　発掘調査の経過……1
2　調査方法……1
（1）調査方法……1
（2）調査対象と成果の公表……1
3　現地説明会……6
（1）現地説明会の概要……6
（2）平成５年度現地説明会（Ⅱ－18・19区）……6
第２節　整理作業の体制と経過……8
第２章　歴史的環境……10
第１節　高松平野中央部における中世地域社会……10
1　地形的区分……10
（1）旧河道の変遷……10
（2）海岸線の変化……11
2　文献史料による地域単位の変遷……13
（1）荘園・公領の範囲……13
（2）在地領主……14
（3）中世都市……15
第２節　中世遺跡群の動向……17
第３章　調査の成果……19
第１節　Ｆ地区の層序……19
1　各調査区の層序……19
2　遺構面の起伏と削平・攪乱状況……34
第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物……36
1　概要……36
2　建物……36
3　土坑……45
4　土坑群……70
（1）Ⅲ－14区土坑群……70
（2）Ⅲ－４区土坑群……74
5　溝……76
6　性格不明遺構……79

第３節　中世前半の遺構・遺物…… 87
1　概要…… 87
2　区画１…… 87
3　区画２…… 174
4　その他の遺構・建物…… 183
第４節　中世後半の遺構・遺物…… 192
1　概要…… 192
2　区画３…… 193
3　区画４…… 221
（1）小区画の配置…… 221
（2）小区画ａ（区画４－ａ）…… 222
（3）小区画ｂ（区画４－ｂ）…… 241
（4）小区画ｃ（区画４－ｃ）…… 270
（5）小区画ｄ（区画４－ｄ）…… 292
（6）小区画ｅ（区画４－ｅ）…… 301
（7）区画４周辺の遺構…… 306
4　区画５…… 309
（1）小区画の配置…… 309
（2）小区画ａ（区画５－ａ）…… 310
（3）小区画ｂ（区画５－ｂ）…… 313
5　区画６…… 315
（1）小区画の配置…… 315
（2）小区画ａ（区画６－ａ）…… 322
（3）小区画ｂ（区画６－ｂ）…… 332
6　その他…… 338
第５節　近世～近代の遺構・遺物…… 340
1　概要…… 340
2　溝…… 342
3　建物…… 371
4　土坑…… 373
（1）Ⅱ－18区土坑群(ＳＫf131～139，ＳＸc14)…… 374
（2）Ⅱ－17区土坑群…… 374
（3）Ⅱ－24・25区土坑群…… 379
（4）Ⅲ－１区土坑群…… 387
（5）Ⅲ－４区土坑群…… 387

（6）Ⅲ－7区土坑群…… 389
（7）Ⅲ－8・9区土坑群…… 391
5　井戸…… 391
6　包含層…… 393
第4章　自然科学調査の成果…… 396
第1節　空港跡地遺跡から出土した呪符木簡の樹種…… 396
1　試料…… 396
2　方法…… 396
3　結果…… 396
4　考察…… 397
第5章　まとめ…… 405
第1節　高松平野と周辺地域における中世土器の編年…… 405
1　目的と課題…… 405
2　各器種の分類…… 406
（1）土師質土器杯・小皿の分類…… 406
（2）土師器甕・羽釜の分類…… 408
（3）土師質土器鍋・足釜の分類…… 408
（4）須恵器の分類…… 411
3　高松平野南部における中世前半の土器群…… 418
（1）空港跡地遺跡での対象土器群と出土状況…… 418
（2）形式・型式の組み合わせと組列…… 420
（3）周辺遺跡との比較…… 420
4　生産遺跡での様相の検討～西村遺跡～…… 424
（1）既往の研究…… 424
（2）対象土器群と出土状況…… 427
（3）形式・型式の組み合わせと組列…… 430
（4）杯DⅡと椀AⅡの法量について…… 439
5　丸亀平野での様相と対応関係…… 440
（1）対象土器群と出土状況…… 440
（2）形式・型式の組み合わせ…… 440
6　中世Ⅰ・Ⅱ期の設定と細分…… 452
（1）各地域のパターンの併行関係…… 452
（2）「期」の設定の指標…… 453
（3）中世Ⅰ－1期…… 453
（4）中世Ⅰ－2期…… 455

（5）中世Ⅰ－3期…… 455
（6）中世Ⅱ－1期…… 457
（7）中世Ⅱ－2期…… 458
（8）中世Ⅱ－3期…… 460
（9）中世Ⅱ－4期…… 461
（10）中世Ⅱ－5期…… 461
（11）想定される暦年代…… 462
7　三豊平野における様相…… 465
8　中世後半への見通し…… 466
（1）「口縁部→体部ナデ手法」の土師質土器皿…… 466
（2）楠井産土器群の年代観…… 468
9　おわりに…… 468
第2節　中世区画遺構の変遷…… 469
1　はじめに…… 469
2　時期別の遺構変遷…… 469
（1）中世Ⅰ－3期～Ⅱ－1期（12世紀第1四半期～第4四半期）…… 469
（2）中世Ⅱ－2～4期（13世紀第1四半期～第4四半期前半）…… 470
（3）中世Ⅱ－5期～Ⅲ期前半（13世紀末葉～15世紀前葉）…… 477
（4）中世Ⅲ期後半（15世紀中葉～16世紀中葉）…… 477
3　居館としての区画1・3の機能…… 479
（1）建物配置の企画と機能分化…… 479
（2）区画溝の形態と機能…… 481
（3）「屋敷墓」の存在…… 482
4　区画群の存在形態…… 483
（1）居館＋小規模建物群の分布状況の変遷…… 483
（2）居館＋集落の消長・画期…… 484
5　おわりに…… 485
第3節　土師質土器の生産・流通形態－糸切り底の小皿・杯からみた－…… 486
1　はじめに…… 486
2　糸切り底の小皿・杯の生産技術…… 486
（1）胎土…… 486
（2）小皿の製作技法…… 487
（3）杯の製作技法…… 488
3　分布と編年的位置付け…… 490
（1）分布…… 490

（2）編年的位置付け…… 491
4　系譜…… 491
（1）糸切り技法の採用…… 491
（2）周辺地域との比較…… 491
5　想定される生産・流通形態…… 492
6　おわりに…… 493
第4節　中世林地域の村落景観…… 494
1　灌漑網の遡及的検討と開発単位…… 494
（1）近世～近代…… 494
（2）中世後半…… 501
（3）中世前半…… 502
2　建物群の結合形態と領域…… 502
（1）中世前半（第458図）…… 502
（2）中世後半（第457図）…… 508
3　流通形態…… 510
（1）土器・陶磁器…… 510
（2）鋳造…… 515
（3）流通形態…… 515
4　村落景観の変化と中世林庄・林郷…… 516
（1）村落景観…… 516
（2）林庄との関わり…… 518
第5節　近代遺物からみた林村…… 523
1　はじめに…… 523
2　刻印瓦の検討…… 523
（1）表記内容…… 523
（2）刻印の系列と変遷…… 524
（3）小規模瓦生産地の出現…… 524
3　地図皿の検討…… 525
（1）形態・図柄と製作・廃棄年代…… 525
（2）製作・保有の背景…… 526
4　おわりに…… 526

挿図目次

第１図　調査区割図…… 3～4
第２図　遺跡位置図…… 5
第３図　現地説明会資料…… 7
第４図　報告地区割図…… 9
第５図　中世高松平野（山田・香東・香西郡）の地域単位と旧河道…… 12
第６図　中世遺跡の分布…… 16
第７図　①ライン土層…… 21～22
第８図　②ライン土層…… 23～24
第９図　③・④ライン土層…… 25～26
第10図　⑤ライン土層…… 27～28
第11図　⑥ライン土層…… 29～30
第12図　⑦ライン土層…… 31～32
第13図　旧耕作土下面（近世～近代削平面）の標高と等高線図……33
第14図　空港跡地東西方向断面図（Ｃ・Ｆ・Ｉ地区）……35
第15図　ＳＨf01平・断面図…… 37
第16図　ＳＨf01遺物出土状況平面図…… 38
第17図　ＳＨf01出土遺物(1)…… 40
第18図　ＳＨf01出土遺物(2)…… 41
第19図　ＳＨf01出土遺物(3)…… 42
第20図　ＳＨf01出土遺物(4)…… 43
第21図　ＳＢf01平・断面図…… 43
第22図　ＳＢf02平・断面図…… 44
第23図　ＳＢf03平・断面図，出土遺物…… 45
第24図　ＳＢf04平・断面図…… 46
第25図　ＳＫf01平面図…… 47
第26図　ＳＫf01遺物出土位置(1)…… 48
第27図　ＳＫf01遺物出土位置(2)…… 49
第28図　接合資料１の剥片剥離過程(Ｉ工程)… 50
第29図　接合資料１の剥片剥離工程…… 51～52
第30図　接合資料の剥片剥離過程(Ⅱ工程)…… 53
第31図　接合資料１の剥片剥離過程(Ⅲ工程)… 53
第32図　接合資料２の剥片剥離過程…… 54
第33図　接合資料２の剥片剥離工程…… 55～56
第34図　ＳＫf01出土遺物(1)…… 58
第35図　ＳＫf01出土遺物(2)…… 59
第36図　ＳＫf01出土遺物(3)…… 60
第37図　ＳＫf01出土遺物(4)…… 61
第38図　ＳＫf01出土遺物(5)…… 62
第39図　ＳＫf01出土遺物(6)…… 63
第40図　ＳＫf01出土遺物(7)…… 64
第41図　ＳＫf01出土遺物(8)…… 65
第42図　ＳＫf01出土遺物(9)…… 66
第43図　ＳＫf02平・断面図…… 66
第44図　ＳＫf02上層出土遺物…… 67
第45図　ＳＫf02下層出土遺物…… 68
第46図　ＳＫf03平・断面図…… 69
第47図　ＳＫf03出土遺物(1)…… 69
第48図　ＳＫf03出土遺物(2)…… 69
第49図　ＳＫf06平・断面図…… 70
第50図　ＳＫf06出土遺物…… 70
第51図　ＳＫf07・08平・断面図…… 70
第52図　Ⅲ－14区土坑群…… 71
第53図　ＳＫf13・22・23断面図…… 72
第54図　ＳＫf21平・断面図，出土遺物…… 72
第55図　ＳＫf27平・断面図…… 72
第56図　ＳＫf27出土遺物…… 73
第57図　ＳＫf28平・断面図，出土遺物…… 74
第58図　Ⅲ－４区土坑群…… 75
第59図　ＳＫf31・34・38・39断面図……76
第60図　ＳＤf01～03断面図，出土遺物…… 76
第61図　ＳＤf06・07・09断面図…… 77
第62図　ＳＤf10断面図，出土遺物…… 77
第63図　ＳＤf11断面図，出土遺物…… 78
第64図　ＳＤf12断面図…… 78
第65図　ＳＸf01平・断面図…… 80
第66図　ＳＸf02平・断面図…… 81
第67図　ＳＸf03平・断面図，出土遺物…… 82
第68図　ＳＸf05平・断面図…… 83
第69図　ＳＸf07平・断面図…… 83
第70図　ＳＸf08平・断面図…… 84
第71図　ＳＸf09平・断面図…… 84
第72図　ＳＸf10平・断面図…… 85
第73図　ＳＸf11平・断面図…… 86

第74図　ＳＸf12平・断面図…… 86
第75図　区画１概略図…… 88
第76図　ＳＤf16西辺部(Ⅲ－１区部分)
断面図 …… 89
第77図　ＳＤf16・107断面図……91～92
第78図　ＳＤf16南辺陸橋部平・断面図…… 93
第79図　ＳＤf16遺物出土状況(1)…… 94
第80図　ＳＤf16遺物出土状況(2)…… 95
第81図　ＳＤf16上層出土遺物(1)…… 96
第82図　ＳＤf16上層出土遺物(2)…… 97
第83図　ＳＤf16上層出土遺物(3)…… 98
第84図　ＳＤf16上層出土遺物(4)…… 99
第85図　ＳＤf16中層出土遺物(1)…… 103
第86図　ＳＤf16中層出土遺物(2)…… 104
第87図　ＳＤf16中層出土遺物(3)…… 105
第88図　ＳＤf16中層出土遺物(4)…… 106
第89図　ＳＤf16下層出土遺物(1)…… 108
第90図　ＳＤf16下層出土遺物(2)…… 109
第91図　ＳＤf16層位不明出土遺物…… 110
第92図　ＳＤf16(Ⅲ－２区)出土遺物…… 111
第93図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(1)…… 113
第94図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(2)…… 114
第95図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(3)…… 115
第96図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(4)…… 116
第97図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(5)…… 117
第98図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(6)…… 118
第99図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(7)…… 119
第100図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(8)…… 120
第101図　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(9)…… 121
第102図　ＳＤf17断面図…… 124
第103図　ＳＤf17出土遺物…… 124
第104図　ＳＤf18断面図…… 125
第105図　ＳＤf18出土遺物(1)……127
第106図　ＳＤf18出土遺物(2)……128
第107図　ＳＤf18出土遺物(3)……129
第108図　ＳＤf18出土遺物(4)……130
第109図　ＳＤf18出土遺物(5)…… 131
第110図　ＳＤf18出土遺物(6)……132
第111図　ＳＤf18出土遺物(7)……133
第112図　ＳＤf19出土遺物(1)…… 135
第113図　ＳＤf19出土遺物(2)…… 136
第114図　ＳＤf19出土遺物(3)…… 137
第115図　ＳＤf20・21断面図，出土遺物… 138
第116図　ＳＤf19・22・23断面図，
ＳＤf22出土遺物…… 139
第117図　ＳＤf23出土遺物(1)…… 140
第118図　ＳＤf23出土遺物(2)…… 141
第119図　ＳＤf24断面図，出土遺物…… 142
第120図　ＳＤf25出土遺物(1)……143
第121図　ＳＤf25出土遺物(2)……144
第122図　ＳＤf26～30断面図，出土遺物… 145
第123図　ＳＢf05平・断面図…… 147
第124図　ＳＢf06出土遺物…… 148
第125図　ＳＢf06平・断面図……149～150
第126図　ＳＢf07平・断面図……151
第127図　ＳＢf08平・断面図…… 152
第128図　ＳＢf09平・断面図…… 153
第129図　ＳＢf10平・断面図…… 154
第130図　ＳＢf11平・断面図……155
第131図　ＳＢf12平・断面図…… 156
第132図　区画１掘立柱建物出土遺物…… 157
第133図　区画１ピット出土遺物(1)……158
第134図　区画１ピット出土遺物(2)……159
第135図　ＳＫf53平・断面図…… 160
第136図　ＳＫf54平・断面図，出土遺物…… 160
第137図　ＳＫf55平・断面図，出土遺物…… 160
第138図　ＳＫf56平・断面図，出土遺物……161
第139図　ＳＴf01平・断面図…… 162
第140図　ＳＴf01出土遺物…… 163
第141図　ＳＴf02平・断面図…… 164
第142図　ＳＴf02遺物出土状況…… 166
第143図　ＳＴf02出土遺物(1)……167
第144図　ＳＴf02出土遺物(2)……168
第145図　ＳＴf02出土遺物(3)……169
第146図　ＳＤf31断面図，出土遺物…… 170
第147図　ＳＤf32断面図…… 170
第148図　ＳＤf32出土遺物…… 171
第149図　ＳＤf33断面図…… 172

第150図　ＳＤf36断面図，出土遺物…… 172
第151図　ＳＤf37断面図，出土遺物…… 173
第152図　ＳＢf13平・断面図…… 174
第153図　ＳＢf14平・断面図…… 175
第154図　ＳＢf15平・断面図…… 175
第155図　ＳＢf16平・断面図…… 176
第156図　ＳＢf17平・断面図…… 176
第157図　ＳＢf18平・断面図…… 177
第158図　ＳＢf19平・断面図…… 177
第159図　ＳＢf20平・断面図…… 178
第160図　ＳＢf21平・断面図…… 179
第161図　ＳＢf22平・断面図…… 179
第162図　ＳＢf23平・断面図…… 179
第163図　区画２掘立柱建物出土遺物…… 180
第164図　区画２ピット出土遺物…… 181
第165図　ＳＫf57平・断面図，出土遺物…… 182
第166図　ＳＫf58出土遺物…… 182
第167図　ＳＢf24平・断面図…… 183
第168図　ＳＢf25平・断面図…… 183
第169図　ＳＢf25出土遺物…… 184
第170図　ＳＢf26平・断面図…… 184
第171図　区画１・２以外のピット出土遺物… 185
第172図　ＳＫf59平・断面図，出土遺物…… 186
第173図　ＳＤf39断面図…… 186
第174図　ＳＤf31・40・41・42・44
断面図，出土遺物…… 187
第175図　ＳＤf45断面図，出土遺物…… 187
第176図　ＳＤf46断面図，出土遺物…… 188
第177図　Ⅱ－11区中世包含層出土遺物(1)… 189
第178図　Ⅱ－11区中世包含層出土遺物(2)… 190
第179図　Ⅱ－11区中世包含層出土遺物(3)… 191
第180図　Ⅲ－14・44区包含層出土遺物…… 191
第181図　区画３概略図…… 192
第182図　ＳＤf48断面図…… 194
第183図　ＳＤf48上層出土遺物…… 195
第184図　ＳＤf48下層出土遺物(1)…… 196
第185図　ＳＤf48下層出土遺物(2)…… 197
第186図　ＳＤf48出土遺物(層位不明)(1)…… 198
第187図　ＳＤf48出土遺物(層位不明)(2)…… 199
第188図　ＳＤf48出土遺物…… 200
第189図　ＳＤf49断面図…… 201
第190図　ＳＤf49遺物分布図…… 202
第191図　ＳＤf49上層出土遺物(1)…… 203
第192図　ＳＤf49上層出土遺物(2)…… 204
第193図　ＳＤf49上層出土遺物(3)…… 205
第194図　ＳＤf49上層出土遺物(4)…… 206
第195図　ＳＤf49上層出土遺物(5)…… 207
第196図　ＳＤf49上層出土遺物(6)… 209～210
第197図　ＳＤf49上層出土遺物(7)…… 211
第198図　ＳＤf49上層出土遺物(8)…… 212
第199図　ＳＤf49下層出土遺物…… 213
第200図　ＳＤf50断面図…… 214
第201図　ＳＤf50出土遺物…… 215
第202図　ＳＤf51出土遺物(1)…… 216
第203図　ＳＤf51・52断面図，出土遺物… 217
第204図　Ⅱ－１・Ⅲ－２区
中世包含層出土遺物(1)…… 219
第205図　Ⅱ－１・Ⅲ－２区
中世包含層出土遺物(2)…… 220
第206図　Ⅱ－１・Ⅲ－２区
中世包含層出土遺物(3)…… 221
第207図　区画４概略図…… 222
第208図　小区画ａ（区画４－ａ）平面図…… 223
第209図　ＳＤf53～56断面図…… 223
第210図　ＳＤf54・55・67出土遺物…… 224
第211図　ＳＡf02平・断面図…… 225
第212図　ＳＡf03平・断面図…… 225
第213図　区画４－ａピット出土遺物…… 227
第214図　ＳＢf27平・断面図…… 228
第215図　ＳＢf28平・断面図…… 229
第216図　区画４掘立柱建物出土遺物…… 230
第217図　ＳＥf01平・断面図…… 231
第218図　ＳＥf01出土遺物…… 232
第219図　ＳＫf60～62・64平・断面図…… 233
第220図　ＳＫf60・70・75・79・85
出土遺物…… 234
第221図　ＳＫf65全体図…… 234
第222図　ＳＫf65平・断面図…… 235

第223図　ＳＫf65出土遺物(1)…… 237～238
第224図　ＳＫf65出土遺物(2)…… 237～238
第225図　ＳＫf66平・断面図…… 239
第226図　ＳＫf66出土遺物…… 240
第227図　小区画ｂ（区画４－ｂ）平面図……241
第228図　ＳＤf57～60，ＳＫf67・68
平・断面図…… 242
第229図　ＳＤf57南辺部出土遺物(1)…… 243
第230図　ＳＤf57南辺部出土遺物(2)…… 244
第231図　ＳＤf57南辺部出土遺物(3)…… 245
第232図　ＳＤf57南辺部出土遺物(4)
…… 247～248
第233図　ＳＤf57南辺部出土遺物(5)…… 249
第234図　ＳＤf57東辺部出土遺物(1)…… 250
第235図　ＳＤf57東辺部出土遺物(2)…… 251
第236図　ＳＤf57東辺部出土遺物(3)…… 252
第237図　ＳＤf57東辺部出土遺物(4)…… 253
第238図　ＳＤf57・58合流部出土遺物…… 253
第239図　ＳＤf58出土遺物…… 254
第240図　区画４－ｂ・ｃピット出土遺物…… 255
第241図　ＳＢf29平・断面図…… 257
第242図　ＳＢf30平・断面図…… 257
第243図　ＳＥf02断面図…… 258
第244図　ＳＥf02平・断面図…… 259
第245図　ＳＥf02上層出土遺物(1)…… 261
第246図　ＳＥf02上層出土遺物(2)…… 262
第247図　ＳＥf02上層出土遺物(3)…… 263
第248図　ＳＥf02上層下位・下層出土遺物
…… 265
第249図　ＳＥf02出土石製品・木製品…… 266
第250図　ＳＫf69平・断面図…… 267
第251図　ＳＫf69・ＳＤf57・58平・断面図
…… 268
第252図　ＳＫf69出土遺物…… 269
第253図　小区画ｃ（区画４－ｃ）平面図…… 270
第254図　ＳＤf61～66断面図…… 271
第255図　ＳＡf05平・断面図…… 272
第256図　ＳＡf06平・断面図…… 273
第257図　ＳＢf31平・断面図…… 274
第258図　ＳＢf32平・断面図…… 275～276
第259図　ＳＢf33平・断面図…… 275～276
第260図　ＳＢf34平・断面図…… 275～276
第261図　ＳＢf35平・断面図…… 277
第262図　ＳＢf36平・断面図…… 278
第263図　ＳＫf70～74・84・85平・断面図
…… 279
第264図　ＳＫf75～78・83・88・89
平・断面図…… 280
第265図　ＳＫf79～82・92～95平・断面図
…… 281
第266図　ＳＫf96～99平・断面図…… 282
第267図　ＳＫf101・102平・断面図…… 283
第268図　ＳＫf101出土遺物(1)…… 284
第269図　ＳＫf101出土遺物(2)…… 285
第270図　ＳＫf102出土遺物…… 286
第271図　ＳＫf103全体図…… 287
第272図　ＳＫf103平・断面図…… 288
第273図　ＳＫf103出土遺物…… 289
第274図　ＳＰf98出土遺物…… 290
第275図　ＳＫf104平・断面図…… 291
第276図　ＳＫf90・104出土遺物……291
第277図　ＳＫf105平・断面図…… 292
第278図　ＳＫf105出土遺物…… 292
第279図　小区画ｄ(区画４－ｄ)平面図…… 293
第280図　区画４－ｂ・ｃピット出土遺物…… 294
第281図　ＳＤf69～74断面図…… 295
第282図　ＳＤf64・69・73・75－ｂ
出土遺物……296
第283図　ＳＢf37平・断面図…… 297
第284図　ＳＢf38平・断面図…… 298
第285図　ＳＢf40平・断面図…… 298
第286図　ＳＢf39平・断面図…… 299
第287図　ＳＫf106～111平・断面図…… 300
第288図　小区画ｅ（区画４－ｅ）平面図…… 301
第289図　ＳＤf75断面図…… 302
第290図　ＳＢf41平・断面図…… 302
第291図　ＳＫf100・112～115・118
平・断面図…… 303

第292図　ＳＫf116・117・120～122
平・断面図…… 304
第293図　ＳＫf99・100・110・115・116・118
出土遺物…… 305
第294図　ＳＫf126・127平・断面図，
出土遺物…… 307
第295図　Ⅱ－24・25区中世包含層
出土遺物(1)…… 308
第296図　Ⅱ－24・25区中世包含層
出土遺物(2)…… 309
第297図　区画５概略図…… 310
第298図　ＳＤf76・77断面図，出土遺物… 311
第299図　ＳＡf07平・断面図…… 312
第300図　ＳＢf42平・断面図…… 313
第301図　ＳＢf42出土遺物…… 313
第302図　ＳＢf43平・断面図…… 313
第303図　ＳＢf44平・断面図…… 314
第304図　ＳＡf08平・断面図…… 314
第305図　ＳＢf45平・断面図…… 315
第306図　ＳＢf46平・断面図…… 315
第307図　区画６概略図…… 316
第308図　ＳＤf84断面図…… 317
第309図　ＳＤf84出土遺物(1)…… 318
第310図　ＳＤf84出土遺物(2)…… 319
第311図　ＳＤf83出土遺物(1)…… 320
第312図　ＳＤf83出土遺物(2)…… 321
第313図　ＳＤf83断面図，出土遺物(3)
…… 323～324
第314図　ＳＤf81断面図，出土遺物…… 325
第315図　区画６ピット出土遺物…… 326
第316図　ＳＢf47平・断面図…… 327
第317図　ＳＢf48平・断面図…… 327
第318図　ＳＢf49平・断面図…… 328
第319図　ＳＢf50平・断面図…… 329
第320図　ＳＢf51平・断面図…… 330
第321図　ＳＢf52平・断面図…… 331
第322図　ＳＢf53平・断面図…… 332
第323図　ＳＢf54平・断面図…… 332
第324図　ＳＢf55平・断面図…… 333
第325図　区画６掘立柱建物出土遺物…… 333
第326図　ＳＫf128平・断面図，出土遺物… 334
第327図　ＳＢf56平・断面図…… 335
第328図　ＳＢf58平・断面図…… 335
第329図　ＳＢf57平・断面図…… 336
第330図　ＳＫf129平・断面図，出土遺物… 337
第331図　ＳＫf244平・断面図，出土遺物… 338
第332図　ＳＤf86断面図，出土遺物…… 339
第333図　ＳＤf89断面図，出土遺物…… 340
第334図　ＳＤf92出土遺物(1)…… 341
第335図　ＳＤf92出土遺物(2)…… 342
第336図　ＳＤf92出土遺物(3)…… 343
第337図　ＳＤf92出土遺物(4)…… 344
第338図　ＳＤf92出土遺物(5)…… 345
第339図　ＳＤf92断面図，出土遺物(6)…… 346
第340図　ＳＤf92出土遺物(7)…… 347
第341図　ＳＤf95平面図…… 348
第342図　ＳＤf95出土遺物(1)…… 349
第343図　ＳＤf95出土遺物(2)…… 350
第344図　ＳＤf95出土遺物(3)…… 351
第345図　ＳＤf95出土遺物(4)…… 352
第346図　ＳＤf95出土遺物(5)…… 353
第347図　ＳＤf95出土遺物(6)…… 354
第348図　ＳＤf94出土遺物(1)…… 355
第349図　ＳＤf94出土遺物(2)…… 356
第350図　ＳＤf96・ＳＸf14断面図，
出土遺物…… 357
第351図　ＳＤf98断面図，出土遺物…… 358
第352図　ＳＤf97断面図，出土遺物(1)…… 359
第353図　ＳＤf97出土遺物(2)…… 360
第354図　ＳＤf97出土遺物(3)…… 361
第355図　ＳＤf99断面図，出土遺物…… 361
第356図　ＳＤf106出土遺物(1)…… 362
第357図　ＳＤf106出土遺物(2)…… 363
第358図　ＳＤf106出土遺物(3)…… 364
第359図　ＳＤf106出土遺物(4)…… 365
第360図　ＳＤf100・106交差部出土遺物… 365
第361図　ＳＤf100断面図，出土遺物…… 366
第362図　ＳＤf107・108出土遺物(1)…… 367

第363図　ＳＤf107・108出土遺物(2)…… 368
第364図　ＳＤf107・108出土遺物(3)…… 369
第365図　ＳＤf107出土遺物…… 370
第366図　ＳＢf59平・断面図…… 371
第367図　ＳＢf60平・断面図…… 371
第368図　ＳＢf61平・断面図，出土遺物…… 372
第369図　ＳＢf62平・断面図…… 373
第370図　ＳＫf133平・断面図，出土遺物… 373
第371図　ＳＫf136平・断面図…… 374
第372図　ＳＫf136出土遺物(1)…… 375
第373図　ＳＫf136出土遺物(2)…… 376
第374図　ＳＫf141平・断面図，出土遺物… 377
第375図　ＳＫf150平・断面図，出土遺物… 378
第376図　ＳＫf165・166平・断面図，
出土遺物…… 378
第377図　ＳＫf156・158平・断面図，
出土遺物…… 379
第378図　ＳＫf160平・断面図，出土遺物… 380
第379図　ＳＫf167平・断面図，出土遺物… 380
第380図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図(1)
…… 381
第381図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図(2)
…… 382
第382図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図(3)
…… 383
第383図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図(4)
…… 384
第384図 Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図(5)
…… 385
第385図　ＳＫf172・177・178・182出土遺物
……386
第386図　ＳＫf226平・断面図，出土遺物… 388
第387図　ＳＫf228・229平・断面図，
出土遺物…… 388
第388図　ＳＫf232平・断面図，出土遺物… 388
第389図　ＳＫf246平・断面図，出土遺物… 389
第390図　Ⅲ－８区土坑群平・断面図…… 390
第391図　ＳＥf03平・断面図…… 391
第392図　Ⅲ－１区包含層出土遺物(1)…… 392
第393図　Ⅲ－１区包含層出土遺物(2)…… 393
第394図　その他の包含層出土遺物，
出土地点不明遺物(1)…… 394
第395図　その他の包含層出土遺物，
出土地点不明遺物(2)…… 395
第396図　K_2O-CaO散布図　空港跡地遺跡出土
小皿・杯の技法別による比較…… 401
第397図　Sr-Rb散布図　空港跡地遺跡出土小皿・
杯の技法別による比較…… 401
第398図　K_2O-CaO散布図　空港跡地遺跡出土
鍋の生産地推定…… 402
第399図　Sr-Rb散布図　空港跡地遺跡出土鍋の
生産地推定…… 402
第400図　K_2O-CaO散布図空港跡地遺跡
出土擂鉢・甕の生産地推定…… 403
第401図　Sr-Rb散布図　空港跡地遺跡出土擂鉢・
甕の生産地推定…… 403
第402図　対象遺跡位置図…… 405
第403図　器種分類図(1)…… 409
第404図　器種分類図(2)…… 410
第405図　器種分類図(3)…… 411
第406図　器種分類図(4)…… 412
第407図　器種分類図(5)…… 415
第408図　器種分類図(6)…… 416
第409図　器種分類図(7)…… 417
第410図　ＳＰil22出土遺物…… 419
第411図　ＳＰil21出土遺物…… 419
第412図　ＳＫc77出土遺物…… 421
第413図　東山崎・水田遺跡Ｅ区ＳＤ03
出土遺物…… 422
第414図　六条・上所遺跡ＳＢ03出土遺物
…… 423
第415図　前田東・中村遺跡ＳＸ04出土遺物
…… 423
第416図　薬王寺遺跡ＳＥ03出土遺物…… 424
第417図　百相坂遺跡ＳＸ08出土遺物…… 425
第418図　西村遺跡西村２号窯跡灰原
出土遺物…… 426
第419図　西村遺跡西村北地区Ｎ３－ＳＫ01

出土遺物(1)…… 427
第420図 西村遺跡西村北地区N3－SK01
出土遺物(2)…… 428
第421図 庄屋池3号窯跡灰原採集遺物…… 429
第422図 西村遺跡川北地区
N31・32－SD01出土遺物…… 430
第423図 西村遺跡西村1号窯跡
焚口・灰原出土遺物…… 431
第424図 西村遺跡西村北地区N2－SK02
出土遺物(1)…… 432
第425図 西村遺跡西村北地区N2－SK02
出土遺物(2)…… 433
第426図 西村遺跡川北地区N35－SK25
出土遺物(1)…… 434
第427図 西村遺跡川北地区N35－SK25
出土遺物(2)…… 435
第428図 西村遺跡山原地区S20－SD01
出土遺物…… 436
第429図 西村遺跡山原地区S16－SK16
出土遺物…… 437
第430図 西村遺跡川北地区S33－SK01
出土遺物…… 438
第431図 西村遺跡西村北地区S5－SK01
出土遺物…… 439
第432図 下川津遺跡SDⅢ03出土遺物(1)… 441
第433図 下川津遺跡SDⅢ03出土遺物(2)… 442
第434図 下川津遺跡SDⅢ05出土遺物…… 443
第435図 下川津遺跡SDⅢ75
中央部上位出土遺物…… 444
第436図 龍川四条遺跡A地区SR01
出土遺物…… 445
第437図 川津元結木遺跡SD10
第1溝出土遺物…… 446
第438図 北内遺跡SD26出土遺物，(上段)佐古川
・窪田遺跡井戸2出土遺物(下段)
…… 447
第439図 下川津遺跡SDⅢ71東部
出土遺物(1)…… 448
第440図 下川津遺跡SDⅢ71東部
出土遺物(2)…… 449
第441図 川津二代取遺跡SD28出土遺物… 450
第442図 川津二代取遺跡SK05出土遺物… 450
第443図 飯野東二・瓦礫遺跡SP459(上段)・龍
川四条遺跡A地区SP01(中断)・郡家原
遺跡SP45(下段)出土遺物…… 451
第444図 三豊平野における特徴的な中世土器
…… 464
第445図 空港跡地遺跡SKc74出土遺物… 467
第446図 中世Ⅰ－3期～Ⅱ－1期の
遺構配置図(1/800)…… 471～472
第447図 中世Ⅱ－2～4期の遺構配置図(1/800)
…… 473～474
第448図 中世Ⅲ期後半の遺構配置図(Ⅱ－5期～
Ⅲ期前半を含む:1/800)…… 475～476
第449図 区画1－a割付図(1/400)…… 478
第450図 区画1割付図(1/800)…… 480
第451図 土師質土器皿CⅡ型式の技法的特徴
…… 487
第452図 土師質土器皿CⅡ形式の製作工程の復元
…… 488
第453図 土師質土器杯EⅢ形式のバリエーション
…… 489
第454図 土師質土器杯EⅢ形式の技法的特徴
…… 490
第455図 近世～近代の溝・溜池……495～496
第456図 『順道図絵』記載の「上畑」「下々田」
の分布…… 497
第457図 中世後半の溝と集落…… 499～500
第458図 中世前半の溝と集落…… 503～504
第459図 古代の溝と集落…… 505～506
第460図 区画4における鋳造関係遺物出土地点
…… 513～514
第461図 中世林地域の景観概念図…… 517

表　目　次

第１表　発掘調査工程表…… 2
第２表　Ｆ地区整理作業工程表…… 9
第３表　高松平野における中世遺跡の消長…… 17
第４表　ＳＨf01出土石器重量別数量…… 39
第５表　ＳＫf01出土石器重量別数量…… 47
第６表　胎土分析値一覧表(%)ただしSr,Rbはppm…… 404
第７表　高松平野各遺跡における形式・型式の組み合わせ…… 420
第８表　西村遺跡における形式・型式の組み合わせ…… 440
第９表　丸亀平野各遺跡における形式・型式の組み合わせ…… 452
第10表　高松・丸亀平野，西村遺跡の各群別の対応関係…… 453
第11表　区画４の屋敷地(小区画)の規模…… 508
第12表　区画１と周辺遺跡での中世土器組成…… 511
第13表　『南海通記』記載の領主一覧…… 520

写　真　目　次

写真１　呪符木簡試料の顕微鏡写真…… 398

図版目次

図版1　Ⅱ－18区航空写真
図版2　Ⅱ－17区航空写真
図版3　Ⅱ－25区航空写真
図版4　Ⅱ－24区航空写真
図版5　Ⅲ－2区航空写真
図版6　Ⅲ－4区航空写真
図版7　Ⅲ－1区航空写真
図版8　Ⅲ－7区航空写真
図版9　Ⅲ－6区航空写真
図版10　Ⅲ－9区航空写真
図版11　Ⅱ－18区全景(西)
ＳＨf01(南東)
ＳＨf01・P3土層(南)
ＳＨf01中央土坑(西)
ＳＨf01遺物出土状況(報2)(南東)
ＳＢf03(西)
ＳＢf03－1根石(西)
ＳＫf01遺物出土状況(北西)
図版12　ＳＫf02遺物出土状況(西)
ＳＫf03(南)
ＳＸf10(東)
ＳＤf12b－b′土層(西)
Ⅲ－4区土坑群(東)
ＳＫf40土層(南)
ＳＤf16西辺(北)
ＳＤf16南西屈曲部(西)
図版13　ＳＤf16・107・108(東)
ＳＤf16・109(東)
ＳＤf16南辺陸橋部(北)
ＳＤf16西辺b－b′土層(南)
ＳＤf16南辺b－b′土層(西)
ＳＤf16下層遺物出土状況(西)
ＳＤf16南辺遺物出土状況(西)
ＳＤf16南辺遺物出土状況
図版14　ＳＤf16南辺遺物出土状況
ＳＤf17(東)
Ⅲ－6区全景(南西)
ＳＤf19遺物出土状況(南東)
ＳＢf05(東)
Ⅲ－6区全景(南)
ＳＢf09(南)
ＳＢf10・11(南)
図版15　ＳＢf09～11(南東)
焼土面(南)
ＳＴf01灰層検出状況(西)
ＳＴf01敷石検出状況(西)
ＳＴf01完掘状況(西)
ＳＴf01遺物出土状況(西)
ＳＴf02・ＳＤf19～21(南西)
ＳＴf02(東)
図版16　ＳＴf02遺物出土状況(北)
ＳＤf31土層(西)
ＳＤf32土層(西)
ＳＤf32遺物出土状況(東)
ＳＤf37(北)
ＳＤf37土層(南)
ＳＢf22－1遺物出土状況
ＳＤf49～51(東)
図版17　ＳＤf48(西)
ＳＤf49d－d′土層(西)
ＳＤf50(東)
Ⅱ－25区全景(西)
Ⅱ－25区全景(南西)
Ⅱ－24区全景(西)
Ⅱ－24区全景(南)
ＳＤf54土層(北)
図版18　ＳＤf57c－c′土層(北)
ＳＤf57遺物出土状況(東)
ＳＤf69a－a′土層(西)
ＳＫf60土層(西)
ＳＫf88土層(南)
ＳＫf113～117(南)
ＳＫf110紅皿出土状況(北)
ＳＫf65(北)

図版19　ＳＫf65(東)
ＳＫf65遺物出土状況(南)
ＳＫf103(西)
ＳＫf101鉄滓出土状況(南)
ＳＥf01上層断面(西)
ＳＥf02(西)
ＳＥf02上層断面(北)
ＳＥf02上部石積み・下部石積み(北)
図版20　ＳＥf02下部石積み(北西)
ＳＥf02下部石積み内遺物出土状況(北)
ＳＤf95(南)
Ⅲ－37区全景(北東)
ＳＫf129土層(南)
ＳＤf83土層(西)
ＳＤf83漆器椀(報1875)出土状況
発掘体験学習
図版21　ＳＨf01出土遺物(1)
図版22　ＳＨf01出土遺物(2)
図版23　ＳＫf01出土遺物(1)
図版24　ＳＫf01出土遺物(2)
図版25　ＳＫf01出土遺物(3)
図版26　ＳＫf01出土遺物(4)
図版27　ＳＫf01出土遺物(5)
図版28　ＳＫf01出土遺物(6)
図版29　ＳＫf27出土遺物
図版30　ＳＤf16上層出土遺物(1)
図版31　ＳＤf16上層出土遺物(2)・中層出土遺物(1)
図版32　ＳＤf16中層出土遺物(2)
図版33　ＳＤf16中層出土遺物(3)
図版34　ＳＤf16中層出土遺物(4)・下層出土遺物(1)
図版35　ＳＤf16下層出土遺物(2)
図版36　ＳＤf16下層出土遺物(3)
図版37　ＳＤf16下層出土遺物(4)
図版38　ＳＤf16下層出土遺物(5)
図版39　ＳＤf16(Ⅲ－２区)出土遺物(1)
図版40　ＳＤf16(Ⅲ－２区)出土遺物(2)
図版41　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(1)
図版42　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(2)
図版43　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(3)
図版44　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(4)
図版45　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(5)
図版46　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(6)
図版47　ＳＤf16(Ⅲ－８区)出土遺物(7)
図版48　ＳＤf17出土遺物
ＳＤf18出土遺物(1)
図版49　ＳＤf18出土遺物(2)
図版50　ＳＤf18出土遺物(3)
図版51　ＳＤf18出土遺物(4)
図版52　ＳＤf19出土遺物(1)
図版53　ＳＤf19出土遺物(2)
図版54　ＳＤf19出土遺物(3)
図版55　ＳＤf19出土遺物(4)
図版56　ＳＤf23出土遺物(1)
図版57　ＳＤf23出土遺物(2)
図版58　ＳＤf23出土遺物(3)
図版59　ＳＤf23出土遺物(4)
図版60　ＳＤf24出土遺物
ＳＤf25出土遺物(1)
図版61　ＳＤf25出土遺物(2)
ＳＢf06出土遺物
区画１ピット出土遺物(1)
図版62　区画１ピット出土遺物(2)
区画２ピット出土遺物
図版63　区画１・２以外のピット出土遺物
図版64　ＳＴf01出土遺物(1)
図版65　ＳＴf01出土遺物(2)
ＳＴf02出土遺物(1)
図版66　ＳＴf02出土遺物(2)
図版67　ＳＴf02出土遺物(3)
図版68　ＳＴf02出土遺物(4)
ＳＤf31出土遺物(1)
ＳＤf32出土遺物(1)
図版69　ＳＤf32出土遺物(2)
ＳＤf37出土遺物

図版70　区画２掘立柱建物出土遺物
ＳＫf57出土遺物
ＳＤf31出土遺物(2)
ＳＫf59出土遺物
図版71　Ⅱ－１区中世包含層出土遺物(1)
Ⅱ－１区中世包含層出土遺物(2), ＳＤf49出土遺物(1)
図版72　Ⅱ－１区中世包含層出土遺物(3), ＳＤf49出土遺物(2)
Ⅱ－１区中世包含層出土遺物(4)
図版73　ＳＤf48出土遺物(1)
図版74　ＳＤf48出土遺物(2)
図版75　ＳＤf48出土遺物(3)
ＳＤf49出土遺物(3)
図版76　ＳＤf49出土遺物(4)
図版77　ＳＤf49出土遺物(5)
ＳＤf50出土遺物
ＳＤf51出土遺物(1)
図版78　ＳＤf51出土遺物(2)
ＳＤf67出土遺物
図版79　ＳＤf54出土遺物
図版80　ＳＥf01出土遺物(1)
ＳＫf79出土遺物
ＳＫf65出土遺物
図版81　ＳＤf57出土遺物(1)
図版82　ＳＤf57出土遺物(2), ＳＤf58出土遺物
図版83　ＳＤf57出土遺物(3), ＳＫf101出土遺物
図版84　ＳＤf57出土遺物(4)
ＳＥf02出土遺物(1)
図版85　ＳＥf02出土遺物(2)
図版86　ＳＥf02出土遺物(3)
ＳＫf69出土遺物(1)
図版87　ＳＫf69出土遺物(2)
ＳＫf103出土遺物
図版88　ＳＫf105出土遺物
ＳＫf99出土遺物
区画４-aピット出土遺物
区画４掘立柱建物，区画４-b･cピット出土遺物
図版89　区画４-a，４-b･cピット出土遺物
区画４-b・cピット出土遺物
Ⅱ－24･25区中世包含層出土遺物
ＳＤf84出土遺物(1)，ＳＤf100･106交差部出土遺物(1)
ＳＤf84出土遺物(2), ＳＤf106出土遺物，ＳＤf100･106交差部出土遺物(2)
図版90　ＳＤf83出土遺物(3), ＳＤf106出土遺物(1)
図版91　ＳＤf83出土遺物(4)
ＳＤf83出土遺物(5), ＳＤf106出土遺物(2)
区画６ピット出土遺物
図版92　ＳＫf128出土遺物
ＳＫf129出土遺物
図版93　ＳＤf49出土遺物(6)
ＳＫf110出土遺物
図版94　ＳＰf98出土遺物(1)
図版95　ＳＰf98出土遺物(2)
図版96　ＳＰf98出土遺物(3)
ＳＥf01出土遺物(2)
図版97　ＳＤf86出土遺物
ＳＤf107出土遺物(1)
その他の包含層出土遺物・出土地点不明遺物(1)
図版98　ＳＤf83出土遺物(6)
ＳＤf48出土遺物(4)
区画１掘立柱建物出土遺物
図版99　鋳造関係遺物(1)
図版100　鋳造関係遺物(2)
図版101　ＳＤf92出土遺物(1)
ＳＤf95出土遺物(1)
ＳＤf94出土遺物(1), Ⅲ－１区包含層出土遺物(1)
図版102　ＳＤf94出土遺物(2)
ＳＤf97出土遺物(1)
ＳＤf106出土遺物
ＳＤf107･108出土遺物(1)

図版103　ＳＤf107出土遺物(2)
Ⅲ－１区包含層出土遺物(2)
図版104　Ⅲ－１区包含層出土遺物(3)
その他の包含層出土遺物・出土地点不明遺物(2)
図版105　ＳＤf92出土遺物(2)
ＳＤf97出土遺物(2),Ⅲ－１区包含層出土遺物(4)
ＳＤf94出土遺物(3), ＳＫf177出土遺物
図版106　ＳＤf108出土遺物
図版107　ＳＤf95出土遺物(2),　ＳＥf02出土遺物(4)
ＳＤf95出土遺物(3)
図版108　区画１想像復元模型

第１章　調査の経過

第１節　発掘調査の経過

調査に至る経緯や予備調査，また本調査での各年度の体制・経過については，報告書Ｉに詳述されているので割愛し，ここでは本報告で取り扱うＦ地区の個別的な調査体制と経過について，記述する。

１．発掘調査の経過

Ｆ地区は，発掘調査時の調査区名であるⅡ－１・11・17・18・23・24・25区，Ⅲ－１・２・４・６・７・８・９・14・37・38・44区を含む大区画である。Ｆ地区の発掘調査は平成２年度から始まり，平成６年度をもって終了した。５カ年にわたる調査の総面積は，27,836㎡に及ぶ。発掘調査は，埋文センターの直営調査と，工事請負調査の２つの方法で行った。請負業者は，平成２年度は㈱松村組，平成３年度は㈱松村組・㈱大日本土木，平成５年度が㈱松村組であった。通常の発掘調査とは異なり，空港跡地内で任意の作業ヤード・排土置き場の設定が可能であったため，結果としては概ね効率的な作業工程で調査が進捗した。発掘調査の体制は空港跡地Ｉで記述しているため，ここでは各調査区の担当者と工程を示しておく。

２．調査方法

(1) 調査方法

詳細は『空港跡地遺跡Ｉ』を参照されたい。Ｆ地区においても，道路センター杭を起点とした空港全体の区画割（20ｍメッシュ）を採用して，遺物の取り上げ等を行った。グリッドの名称とグリッド北西隅の杭の名称とは一致する。調査区全体の図化は，業者に委託して航空測量し，1/100，1/50，1/20の縮尺で製図した。主要な遺構については，1/20ないし1/10の縮尺で実測作業を行った。土層図についても，縮尺1/20で実測作業を行い作図した。

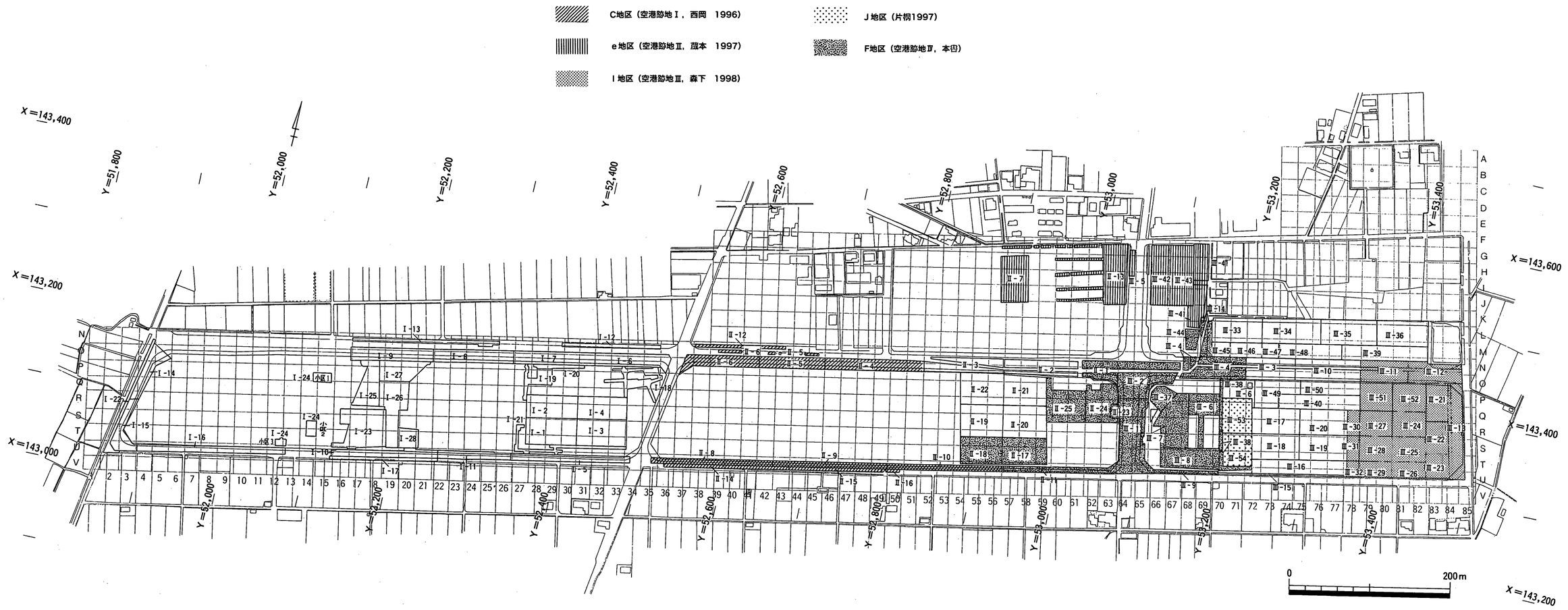
(2) 調査対象と成果の公表

平成３年度には発掘面積が拡大し，調査体制も前年度の１班から７班に拡充された。多くの調査員が調査に携わる過程で，実態はともかく行政上の「同一遺跡」への認識をどのように共有していき，また成果を公表していくのか，ということについて，いくつかの議論を経ながら調査が進行した。

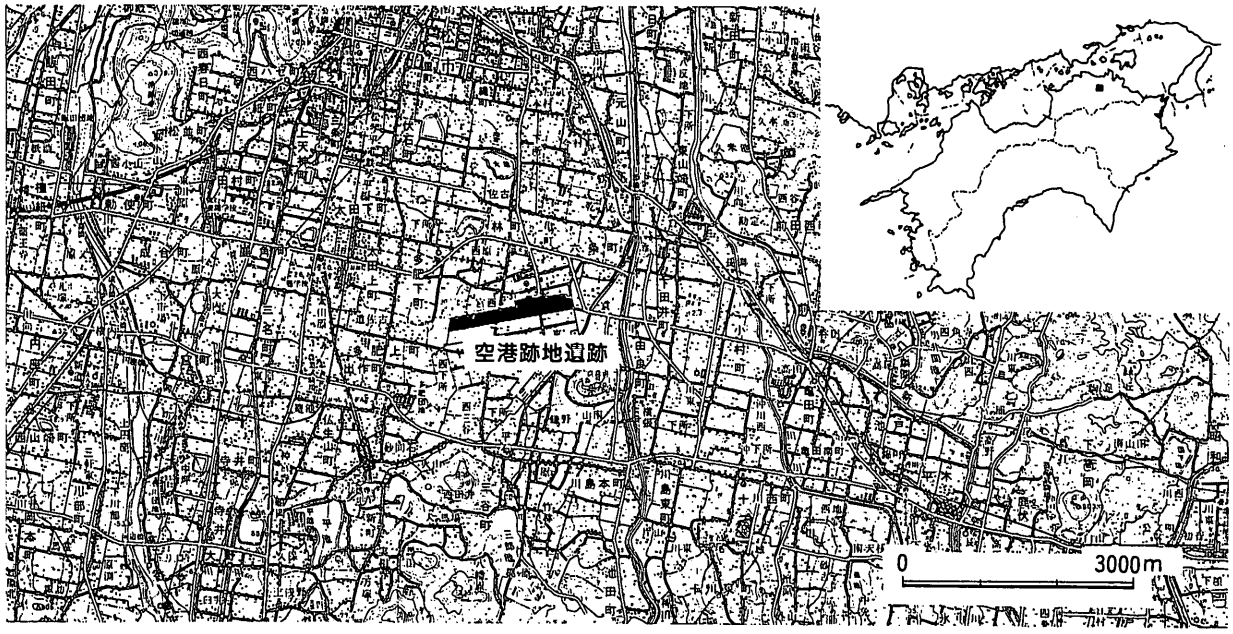
空港跡地の調査以前の埋蔵文化財調査センターでは，四国横断自動車道（高松～善通寺間）と高松東道路の２大発掘業務を行っており，各事業内でも別「遺跡」の調査に追われていた。そこでは隣接調査区を含めた全体（地域）としての遺跡群の調査方法・認識・評価を担当者間で共有することは，全く存しなかったわけではないが困難であった。空港跡地遺跡という東西1.7㎞，南北0.3㎞の面的な発掘調

調査区	調査担当者	H.2			H.3												H.4												H.5												H.6				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
Ⅲ－1区	佐藤・渡邊																																												
Ⅱ－1区	木下・渡邊・多田																																												
Ⅲ－2区	木下・渡邊・多田																																												
Ⅲ－4区	木下・佐藤ほか																																												
Ⅲ－6区	植松・佐藤																																												
Ⅲ－7区	植松・佐藤																																												
Ⅲ－8区	植松・佐藤																																												
Ⅲ－9区	植松・佐藤																																												
Ⅱ－11区	森下英・大西																																												
Ⅲ－14区	西岡・真下・白川																																												
Ⅲ－37区	西岡・山元ほか																																												
Ⅲ－38区	山元・土佐・安藤																																												
Ⅱ－17区	佐藤・濱野・松村																																												
Ⅱ－18区	佐藤・濱野・松村																																												
Ⅱ－23区	山元・山本・森澤																																												
Ⅲ－44区	蔵本・高月・高橋																																												
Ⅱ－24区	蔵本・中川・陶山																																												
Ⅱ－25区	蔵本・中川・陶山																																												

第1表　発掘調査工程表


C地区（空港跡地Ⅰ，西岡　1996）
e地区（空港跡地Ⅱ，蔵本　1997）
I地区（空港跡地Ⅲ，森下　1998）
J地区（片桐1997）
F地区（空港跡地Ⅱ，本田）
X=143,400
X=143,200
X=143,000
X=143,600
Y=51,800
Y=52,000
Y=52,200
Y=52,400
Y=52,600
Y=52,800
Y=53,000
Y=53,200
Y=53,400
0
200m

第1図　調査区割図



第２図　遺跡位置図（1/10万）

査にあたってまず問題化したのは，従来通りの「完結した調査区」で個別に調査を進めた結果生じた，調査員の認識の不整合であった。

調査は，センターの直営調査と工事請負調査の２方式があり，また同時に調査を行っていた地点もそれぞれが離れており，「同一遺跡」を発掘しているという意識が各担当でも比較的希薄であった。しかし，一定度調査が進捗するのに伴い，「遺構」と「攪乱」の認識の違いが次第に明確になってきた。調査区では，高松平野全体に認められる条里型地割の坪界線に開削された溝が良好に遺存していたが，昭和19年（1944）の陸軍飛行場建設の際に埋め戻されたものが大半であった。このため，これを遺構を破壊した「攪乱」とみて調査対象から除外するか，「遺構」と認識して調査対象とするか，ということが問題になったのである。

結局は，昭和19年埋没溝も何らかのかたちで調査対象とすることで，担当者間の合意が得られた。その最大の理由は，これらの溝の多くが条里型地割の坪界線上に存在したことにある。横断道や高松東道路の調査では，坪界線上は現在でも水路や道路として利用されており，実際には全掘が困難であった。ところが空港跡地遺跡では，これらの坪界上の施設は昭和19年に廃絶していることから，発掘上の諸制約が全く存在しないという事情があった。したがって，高松平野における条里型地割の変遷について，発掘調査を踏まえた遡及的な検討材料が提示できると考えられたのである。そして溝が近代に限定できるものか，より古い時期の開削なのかは，具体的な調査方法は別として「掘ってみないとわからない」という側面があった。このことは他の遺構についても同様である。このような認識で平成３年度以降，昭和19年埋没とみられる遺構についても調査対象とするようになった。

また下半期には，調査成果をいかに早く公表し遺跡の評価へと及ぼしていくか，ということも問題になってきた。これについては，現地説明会や発掘体験学習のような，一般向けの普及活動をまず行った。それとともに，細分された調査区の成果を総合することで，遺跡の全体像を一定度整理した発掘調査概報の作成が行われた。

3．現地説明会

(1) 現地説明会の概要

空港跡地遺跡の発掘調査は，平成２年度より継続して行われてきた。その間，埋蔵文化財の普及・啓発を目的とするさまざまな取り組みがなされてきた。例えば，香川県庁ギャラリーで毎年開かれてきた香川県埋蔵文化財発掘調査速報展での成果報告や，平成３年度より毎年実施されている現地説明会，平成４年度に実施された地元小学生を対象とした発掘体験学習などがそれにあたる。

発掘体験学習の概要については，『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ』(1994)において既に報告している通りである。当時，発掘体験学習を担当した職員全員にとって初めての経験であり，100％満足のいくものではなかった。参加した小学生は13名と少ないが，彼らが十分とは言えないまでも，発掘調査についてある程度の理解を得られたことは意義深いことと言えるだろう。発掘体験学習は，調査工程や安全面などでの制約が多く，一定の条件が揃わないと実現が難しい。しかし現在の学校教育現場への普及・啓発活動は充実しているとは言えず，発掘体験学習のような企画は，そのアプローチ方法の一つとして，今後も機会を設けて行く必要があるのではないか。

現地説明会は，普及・啓発活動としては最もポピュラーなものであり，空港跡地遺跡においても平成３年度より毎年開催されてきた。発掘調査に対する地元の関心は高く，いずれも盛況であった。過去３回の現地説明会の概要をまとめると以下のとおりである。

まず会場は，平成３年度からⅠ区・Ⅲ区・Ⅱ区の順に行われており，空港跡地遺跡の西部・東端部・中央部とほぼ全域でバランス良く開催することができた。しかし報告した遺跡の内容については，３回とも弥生時代後期の遺構が中心であり，他の時期の遺構が少なく，時代に偏りがみられる。ただし個別にみると，竪穴住居・掘立柱建物・出水状遺構・円形周溝墓というようにその種類はバラエティーに富んでおり，現地説明会のマンネリ化は避けられた。

また，平成４年度では遺構説明の前に遺構検出のデモンストレーションを行い，平成５年度ではそれに加え，調査員製作の弥生土器による炊飯の実演を行った。このような企画は，参加者にとって印象に残るものであり，その反応も良好であった。

さて参加者の発掘調査に対する関心は高く，毎回各遺稿の説明や調査方法に関する質問を数多く受けた。特に「どのようにして，これらの遺構を見つけたのか」といった遺構検出に関する質問が多かったようである。平成４・５年度は遺構検出のデモンストレーションを行ったのであるが，それでも参加者全員に十分理解させるには至らなかったらしく，説明会終了後に同様の質問を繰り返し受けた。従来より現地説明会は，遺構の説明に力点が置かれ，またはそれのみに終始することも多いが，参加者からの質問にはむしろ調査方法に関するものの方が多かったような印象を持っている。今後現地説明会を企画する際には，このような意見をより一層反映させる必要があるだろう。

(2) 平成５年度現地説明会（Ⅱ－18・19区）

平成５年10月９日にⅡ-18・19区を会場として，現地説明会が実施された。「弥生時代の林ムラ」というテーマで，弥生時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・自然河川などによる小集落から，当時の一般的

なムラの姿を理解してもらうことを念頭に置き説明をした。特に竪穴住居は，出土遺物の位置などから想像した室内スペースの利用まで踏み込んで説明した。

紹介した遺構では，完形に近い土器がほとんど出土しなかった。そこで，調査員自身で弥生土器を焼き，それら説明に用いることになった。焼成中に破損するものが多く，失敗を重ねながらも当日にはかろうじて壺・甕・高杯・器台を用意することができた。これらを竪穴住居跡に置き，参加者に当時の生活をイメージしてもらった。この他の事前準備としては，パンフレット作成がある。パンフレットは，昨年同様中学生に理解できる程度の平易な内容を心がけ，遺構実測図は1点のみにして，他はすべて想像復元図を用いた。パンフレットは参加者にはおおむね好評であった。

第3図　現地説明会資料

当日は天候も良く，参加者は120名に達した。まず最初に空港跡地遺跡全体の概要説明を行った後，調査員が作った弥生土器の甕を使って炊飯の実演を行った。次に，遺構検出のデモンストレーション，各遺構の説明を行い，最後に土器で炊いたご飯を調査員が試食して説明会を終えた。とりわけ土器による炊飯は非常に人気が高く，試食を希望する参加者も多かった。

平成４年度同様，現地説明会に関するアンケートを実施した。参加者120名のうち回収できたのは50名分であり，回収率は41％であった。アンケートの自由意見の中で，「家の近くにこんなものがあるとは知らなかった。また暇があったら見に来たい。」(11歳・男性)といった小学生の意見を数多く聞くことができた。彼らが歴史に興味を持ち，埋蔵文化財への理解を深めるスタートとなれたなら，今回の現地説明会は有意義であったといえるだろう。その他にも周知方法や説明上の問題など，数多くの貴重なご指摘をいただいており，今後現地説明会を企画・実施する上での参考としたい。

第２節　整理作業の体制と経過

Ｆ地区の整理作業は，平成10年４月１日から平成11年９月30日まで，職員１名・整理員１名・整理補助員４名・整理作業員３名の体制で実施された。各作業の工程は，第２表に示した通りである。

整理対象となった調査区は，調査年度・担当者が異なっており，当然の結果として遺構の性格・機能や年代観に違いがみられることとなった。このため，個別の遺構・遺物の記述は比較的容易であったが，調査区全体にわたる同時併存を前提としたセットとしての遺構群の把握は，特に中世に関して困難な面もあった。ただその際，各調査年度の概報作成作業を通じて暫定的な案としての全体像の提示が多少なりとも存在したことが，担当職員の理解を助けることとなった。

また，遺構名については，空港跡地Ⅰ～Ⅲでの方法を踏襲して，調査時の名称を変更し新規に付与した。具体的には遺構の種別を検討した上で，所属時期と位置関係を考慮して通し番号を付した。遺構種別と番号の間には，Ｆ地区の遺構であることを示すため，「f」を入れた（ＳＫf01など）。

整理作業の体制は，次の通りである。

香川県教育委員会文化行政課

課　　長	小原　克己
課長補佐	北原　和利（～平成11.3.31.）
課長補佐	小国　史郎（平成11.4.1.～）
副 主 幹	渡部　明夫（～平成11.3.31.）
副 主 幹	廣瀬　常雄（平成11.4.1.～）

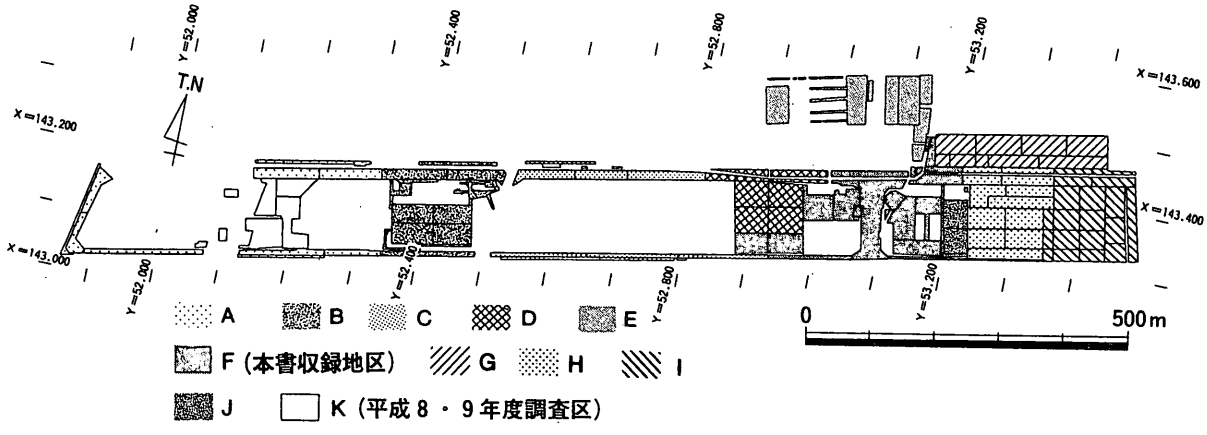
(財)香川県埋蔵埋蔵文化財調査センター

所　　長	菅原　良弘
次　　長	小野　善範（～平成10.3.31.）
次　　長	川原　裕章（平成11.4.1.～）
副主幹兼係長	田中　秀文
主任主事	細川　信哉
主任文化財専門員	廣瀬　常雄（～平成11.3.31.）
主任文化財専門員	大山　真充（平成11.4.1.～）
文化財専門員	北山　健一郎（～平成11.3.31.）
文化財専門員	木下　晴一（平成11.4.1.～）
文化財専門員	佐藤　竜馬
整 理 員	東條　俊子
整理補助員	若山　淳子
整理補助員	陶川　真由美
整理補助員	岡野　雅子
整理補助員	佐々木博子
整理補助員	赤澤　佳代子（～平成10.6.30.）
整理作業員	久保　礼子（～平成10.7.31.）
整理作業員	乃村　恵美（平成10.5.1.～）

整理作業員　　渡辺　美穂（平成10.8.1.～）
整理作業員　　高橋　美保（平成10.10.1.～平成11.2.19.）
整理作業員　　西村　由美子（平成11.4.1.～8.31.）

作業内容	平成10年度												平成11年度					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
遺物注記																		
遺物接合																		
遺物実測図作成																		
遺物写真																		
浄書																		
原稿出筮																		
編集																		

第2表　F地区整理作業工程表



第4図　報告地区割図

第２章　歴史的環境

第１節　高松平野中央部における中世地域社会

空港跡地遺跡の地理的・歴史的環境については，既に『空港跡地遺跡Ｉ』において記述されている。このため全ての時代にわたる内容は報告書Ｉに譲り，本報告での遺跡の評価に関わる中世の状況について，まとめることとした。

１．地形的区分

高松平野の成因や地形条件の変化は，高橋1992で詳細に検討されている。また，縄文時代晩期～弥生時代の微地形の変化について，大久保1995でまとめられている。さらに近世の海岸線の変化（干拓）については，森下1992に詳しい。ここでは，これらの成果に依拠しつつ，近年公表が進んだ発掘調査のデータを加えて，中世高松平野の地形的な地域区分を概観する。

(1) 旧河道の変遷

香東川　高松平野中央部では，香東川に連なる複数の旧河道の存在が指摘されており（高橋1992），多くが弥生時代には河道として機能していたか，埋積がさほど進まない低地であったことが発掘調査で確認されている。すなわち河川を主水源とする灌漑網が，河道や低地によって分断され微高地単位で完結せざるを得なかったとみられ，このことが弥生時代の集団関係の在り方を規定していたと指摘されている（大久保1995）。また弥生時代中期以降に香東川の主流路が，林町付近の旧河道Ａから伏石町付近の旧河道Ｂに変化したことが想定されている（高橋1992）。

旧河道Ａは，浴・松ノ木遺跡では９～10世紀と12～13世紀の水田層が認められ，古代～中世に埋積が進行していたことがわかる。しかし多肥・宮尻遺跡では，石積みの護岸を施した大規模な近世の溝が検出されており，上流の方が埋積がかなり遅れるという時間差が指摘できる。

旧河道Ｂは，居石遺跡で検出されており，古墳時代前期に埋積が進んだＳＲ01から，８～９世紀と12世紀の２時期の流路があるＳＲ02への変遷が看取できる。しかしその後は河道はほぼ完全に埋没し，土地の平準化が達成される。

発掘調査の成果からは，旧河道ＡからＢへという主流路の変化は，大局的には支持し得るものの，旧河道Ａの埋積の時間差を考慮すると，その変化は極めて漸移的であったといえる。旧河道Ａの緩やかな埋積は，香東川からの土砂の供給量が減少したことによるとみられるが，旧河道Ａを塞ぐ下池の構築はこのような時間差の積極的な利用形態の可能性があろう。遅くとも13世紀には旧河道Ｂも埋積が進み，河道としての機能を停止しているが，多肥付近の旧河道Ａではいくばくかの断絶期を介して近世にも流路が継続している。付近は旧河道Ａを湧水点とした出水が多く，下池をはじめとする「谷池」の水源が維持されたためであろう(1)。近世以前の上限が問題となるが，池の構築は中世まで遡る可能性は十分にあろう。

香東川の旧河道は，この他に現・御坊川とほぼ一致する流路（仮に旧河道Ｃとする）がある。この旧河道は室山南東麓までは錯綜しながら同一方向に流下するが，それより北側では現・御坊川と同じ方向のものと北～西に大きく屈曲して現・摺鉢谷川へと至る流路がある。ただし，両流路の中間である高松市街は都市化が進み旧河道が読み取れないだけであり，高松城跡（西の丸町）の中世遺構面下位の厚い砂礫層（弥生土器や５～７世紀の須恵器を包含）の堆積を考慮すると，本来は摺鉢谷川から御坊川まで旧河道が連続しているとみた方がよい。この旧河道の発掘データは僅かだが，最も西側の流路が弥生時代後期の埋没であることが松並・中所遺跡で確認され，また最も東の流路（現・御坊川）に合流する古川が弥生時代後期と近世の所産であることが上天神遺跡で確認されている。このことから，旧河道Ｃは東の流路が次第に固定化の方向に向かったことが推測される。

以上を総合すると，香東川の旧河道は弥生時代には旧河道Ａ～Ｃの３者が併存していたものの，古代～中世には旧河道Ａ下流の埋積が進み，13世紀には旧河道Ｂがほぼ完全に埋没・平準化した。その後は旧河道Ｃ東端の流路（現・香東川）に河道の固定化が進み，近世の香東川の付け替えに至ったという大まかな変遷が考えられるのである。旧河道Ａが完全には埋没せず，むしろ出水などの水源を利用しながら「谷池」として利用されていくのに対し，旧河道Ｂは平坦化の方向で埋没が進むという，新たな土地条件が明確化するのが中世高松平野の中央部の在り方といえよう。

春日川・新川　高松平野東部を流れるこの河川は，香東川流域とは異なった地形環境にあったことが想定できる。六条・上所遺跡東半部（Ｆ・Ｇ区）と東山崎・水田遺跡では，遺構面下の礫層の凹凸が著しく香東川流域に近い状況ともいえるが，13世紀頃までにはこの起伏はある程度まで平準化され，小規模な集落が展開する。しかし，両遺跡とも13世紀の遺構面は春日川に由来すると考えられる砂層に覆われ，六条・上所では砂層の上面に18世紀以降の畑が，東山崎・水田では16世紀の集落が形成されている。すなわち中世以降も広域に河川堆積が進行していたのであり，比較的高燥な環境にあった高松平野中央部と対照的である。

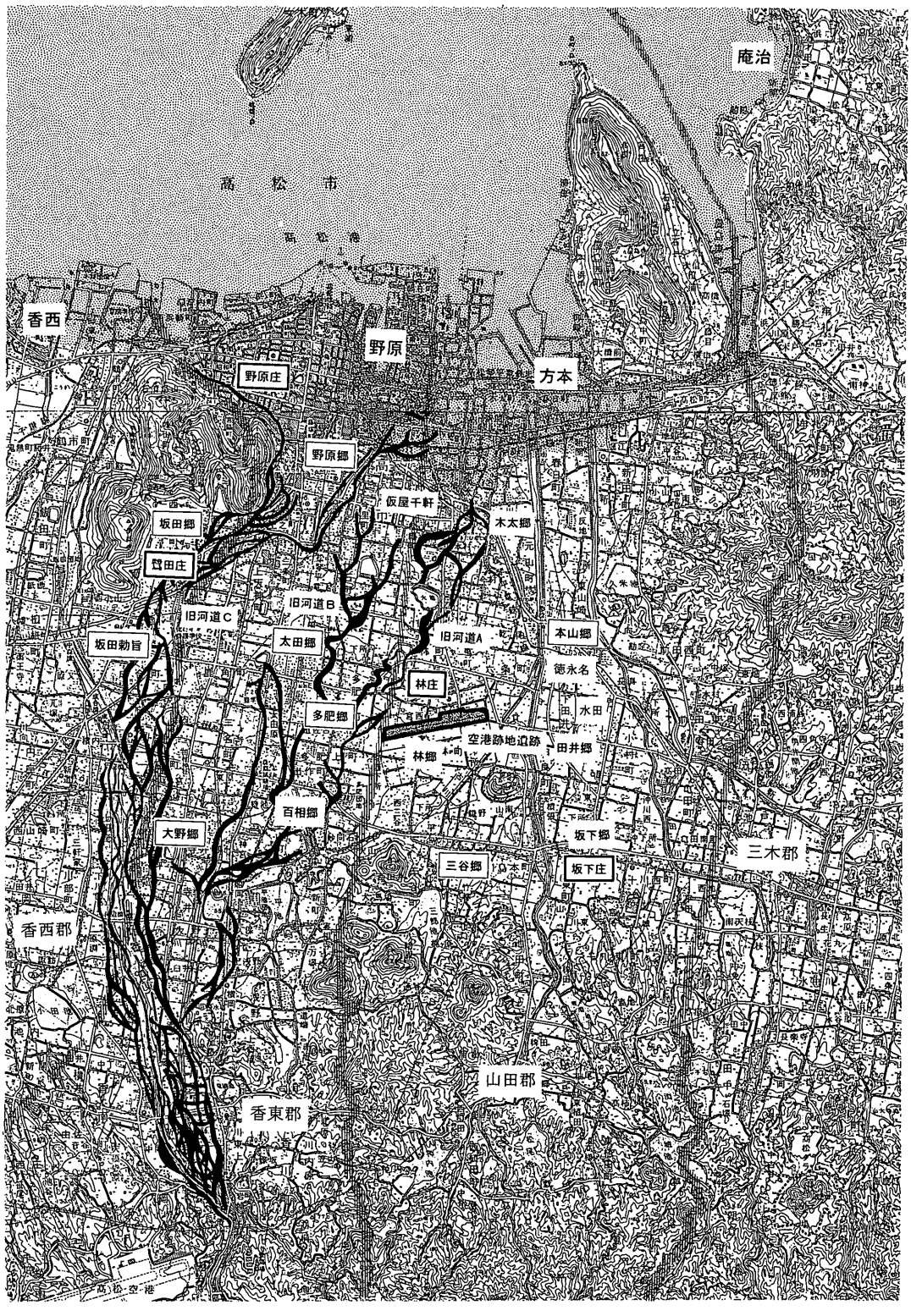
(2) 海岸線の変化

中世末～近世初頭の海岸線については，『寛永十年讃岐国絵図』や『南海通記』に描写・記載がみられる。森下友子氏が明らかにしたような近世干拓範囲から想定される17世紀初頭の海岸線と，『南海通記』巻之十五・巻之廿に記載された16世紀の海岸線の位置は若干異なる。

明確な海岸線は発掘調査では検出されていないが，高松城跡（西の丸町）では先述した古代の礫層埋没後の12世紀代には砂州状の微高地がみられ，その北側斜面に石積み護岸と杭列が施されていた。さらに，この護岸を覆うシルト層堆積後，高松城内の建設が始まっている。最も海に突出した高松城跡東ノ丸でも，砂堆上に形成された15～16世紀の墓地の被覆層上面に城関係の遺構が構築されている。つまり付近は，古代には香東川河口付近の海であったが12世紀までに砂堆状に陸地化が進み，さらに16世紀末の高松築城までに砂堆間の低地の埋積・平準化がある程度達成されたという図式が一応想定できる。

高松城跡以外での知見を蓄積させる必要があるが(2)，こうした状況は『南海通記』巻之十五に記された「海ノ中道」の状況と一致する(3)。また同書巻之十には木太郷は「深江多クシテ」と記されている(4)。香東・春日・新川が集まる河口部は，干潟が発達し，やや沖に「海ノ中道」と称される幅の広い砂堆が

形成されていたことが窺えよう。中世前半を中心とする時期の著しい陸地化への動きは，高橋氏のいう完新世段丘の形成（高橋1992）と連動しているとみられるが，細かなタイム・スケールでの海岸線の変動と，具体的な土地利用形態については全く今後の課題とせざるを得ない。



第5図　中世の高松平野（山田・香東・香西郡）の地域単位と旧河道（1/10万）

2．文献史料による地域単位の変遷

1．での検討を踏まえ，中世の地域単位がどのように編成されていたのかを概観する。史料としては，古代末～中世前半は庄園・公領関係の断片的な文書があり，中世後半には『南海通記』がある。『南海通記』は，享保4年（1719）に香西成資が寛文年間（1661～1672）著した『南海治乱記』を増補したものであり，同時代の史料ではない。記載内容の史料的価値が問題となるが，記載を検証できるだけの中世文書は多くなく，体系的な編纂物としてはほとんど唯一の史料である(5)。

(1) 庄園・公領の範囲

高松平野は，令制下では山田郡と香河郡に編成されていた。山田郡は『和名抄』では11郷（植田・池田・坂本・蘇河（十河）・三谷・拝師（林）・田井・本山・高松・宮処・木太）であるが，中世文書や『南海通記』には12郷とされる。これは，三木郡庵治郷が山田郡に編入されたためだとされている。香河郡は『和名抄』では12郷で中世にも引き継がれるが，11世紀頃には東条・西条に分割されたようであり，14世紀には「香東郡」「香西郡」の呼称が定着した（徳山・丸尾1989）。香東郡は，野原（笑原）・太田・多配・百相・大野・井原の6郷が，香西郡は坂田・成相・河辺・中間・笠居・飯田の6郷と考えられている。高松平野中央部における庄園と公領は，第5図で示した通りである。その領域（四至）を明確化できるのは12世紀の野原庄のみであり，他は現在の地名を関連文書や『寛永十年讃岐国絵図』と対照させて遡及的に推測するしかない。

平野中央部南半（金田1989の香川郡条里15里・山田郡条里11里より南）では，近世初頭での田井・林・多配・太田・大野・百相・成相の各郷が旧河道で区切られた微高地単位で領域設定されている。この地域の旧河道には，中世には埋没し低地状の形態をとるものもあり(6)，さほど大きな障壁とはならなかったことも考えられる。恐らく，微高地単位の集団関係が影響力をもっていたであろう，古代の立郷時の形態を引き継いでいるものと思われる。林庄や公領の多配郷・大野郷，さらに太田郷の南半は，このような領域を逸脱するものではなかったとみてよかろう。

これに対して，平野中央部北半の各郷の在り方が興味深い。近世初頭の郷域は，実際に河道として存在した御坊川にこそ規制されるが，他の旧河道の起伏にはとらわれずに領域が設定されているのである。中世太田郷の範囲を示唆する史料として，岡山県妙圀寺蔵鰐口銘文（永享9年：1437）に「讃州香東郡大田郷松直権現若一王子」とあり，松縄（『寛永十年讃岐国絵図』では大田松縄）が中世太田郷に含まれていたことがわかる（植村・木原ほか1989）。またこのことから，太田・松縄の間にある伏石・立石も近世段階と同じく太田郷に包括されていた可能性が高い。中世太田郷は，遅くとも15世紀前半には旧河道Bを越えて山田郡木太郷と境を接していたことになる。

野原郷は，康治2年（1143）の野原庄の四至の北・東・西が「野原郷」と表記されていることから，少なくとも上記3方は野原庄よりも広い範囲の領域であった可能性がある。応永19年（1412）の文書からは，現在の西宝町から浜ノ丁付近と西春日町，太田付近に「野原」を冠する寺院がある。また天正11年（1583）の文書には「野原野潟之寺内」とみえ，現在の今新町・御坊町付近も野原郷の範囲であったことがわかる(7)。旧河道C河口部の陸地化により，北および東へ郷域が拡大したものと思われる。一方野原庄は，康治2年文書の四至では紫雲山の北麓から東麓にかけての地域が庄域とされ，延慶2年

(1309) の大般若経箱書には「讃岐国香東条野原庄　石清尾八幡宮」とみえることから，14世紀初頭には山麓沿いに西側へ拡大していることが窺える。以上から，野原庄が紫雲山の北～東麓にあり，野原郷がより海側（現・高松市街地）を領域としていたことが窺える。ただ，15世紀末には野原庄が香西氏により代官請負されていること，また16世紀初頭には野原・木太郷にまで香西氏の勢力圏に組み入れられていたことを考えると，16世紀代には野原「郷」「庄」という別個の領有関係は実態としては解消され，同一地域単位となっていた可能性も否定できない。

木太郷は，近世初頭には屋島の西片本も含んでおり，湾入していた干潟を挟んだ両岸が同一郷域に包括されていたことになる。これが中世まで遡るとすれば，干潟を利用する塩田開発の進捗を前提とするか，もしくは片本港の経営に関わる措置である可能性があろう。いずれにしても，野原郷同様の新たな不動産への「囲い込み」という性格をもつのではなかろうか。

(2) 在地領主

庄園・公領の本家・領家や知行主については，『香川県史２　中世』に詳しい。在京領主に代わって現地支配を行った庄官・郷司の実態はよくわかっていないが，13～14世紀の多配郷での公文職をめぐる争いと，15～16世紀に実質的な領域支配を達成した香西氏と配下の土豪の動きが注目される。

多配郷公文職をめぐる争いは，13世紀末葉に藤原重光と源兼尚，次いで藤原重光と西阿との間で行われ，鎌倉御家人であった兼尚に対して重光は「種々狼藉，或壊取住宅致追捕，或苅取」という実力行使に出たため，兼尚は守護所に訴え出ている。また西阿の継子が地頭代であり，郷内に所領をもっていた御家人中沢氏（丹波大山庄を本拠とする）が地頭であった可能性が指摘されている（田中1997)。２－(1)で述べたように，多配郷は旧地形に規制された古代の郷域を継承していたようであり，小規模な地域単位ということができるが，その中でも庄官の地位を争う複数の在地勢力が存在していたことがわかる。現在の多肥地域における水掛りは，出水を水源として５・６町から20数町にとどまる狭小な灌漑単位の連続からなっている。こうした灌漑網は『池泉合符録』より近世まで遡ることは確実であり，中世段階での在り方も規定するものである。したがって，このような狭小な灌漑単位が村落領主の分立・競合を促した，という事情も考慮の内に入れることができるかもしれない。

在地勢力の対立・抗争はこの他に，山田郡坂下庄における地頭・地頭代と領家の争論（寛元２年：1244以前)，由佐氏と「凶徒太田左近将監遠忠」との抗争（貞和４年：1348)，また鷺田庄における細川定禅の挙兵（建武２年：1335）などがある。さらに空港跡地周辺の林庄では，寛元３年（1245）の史料に預所性寛阿闍梨の名がみえ，領家による庄内のより強力な支配が指向された形跡がある。林庄の四至ならびに支配形態の問題は，空港跡地遺跡の中世の動向とも関わる問題であり，第４章第５節において再度検討したい。

『南海通記』巻之六と巻之八には，16世紀前葉のこととして香西氏配下の小領主とその居城が列記されている。また巻之十には，16世紀後葉の小領主が記されている（第14表)。巻之六では「土居構ノ小城持」(a)と「塹セヲ構ヘタル者」(b)の２者が区別され，巻之十では「城持ノ旗下」(c)・「其村主タル者」(d)・「香西城下名アル村主」(e)の３者が区別されている。若干の違いはあるが，a・c・d（以上Ⅰ群)，b・e（Ⅱ群）が対応関係にあり，その存在形態の一端を窺うことができる。Ⅰ群の土豪は，土塁と堀を備えた城館に住み，半ば独立した在地支配を行っていたとみられる(8)。これに対してⅡ

群の土豪は，本拠には塹セ（区画溝？）程度の備えの居館をもち，16世紀後葉には香西城下（佐料）で生活していることから，Ⅰ群よりも独立性の希薄な香西氏直臣といえよう。彼らの本拠の分布によって，16世紀には香東郡の大半と山田郡の北部は，香西氏の勢力圏に含まれていたことがわかる。また野原郷（庄）と太田郷に在地領主の分布が集中しており，上記２郷の領域の拡大と軌を一にしていること，さらに領域の拡大とともに内部の分割が進行していたことを想定させ，近世村落の前提が整いつつあったことを推測させる。

山田郡南半は，国人領主植田氏一族の勢力圏にあった。植田氏については，『南海通記』で植田衆として植田・三谷・十河・池田・神内の各氏がみえる程度であり，実態は明確でない。ただ，同族間の等質的な結合を基礎としているようであり，その内部に香西氏ほどの階層序列が読み取れないのが特徴である。山田郡北部への香西氏の進出に抗し切れず，また阿波三好氏の介入を招いたのは，このような在地支配形態に一因が求められるかもしれない。

なお，彼ら小領主層の多くは，16世紀末葉の長曽我部元親の讃岐侵攻や，秀吉による四国経営ならびに九州侵攻を経て没落し，近世の在地支配層（庄屋など）として成長するのはごく僅かであった。

(3) 中世都市

実態不明なものがほとんどである。しかし，高松築城前に野原郷に多数の寺院が存在したこと，また香東川旧河道Ｃの一部にあたる御坊川河口部に「仮屋千軒」が存在したとされること（川野・武田1989）などから，野原郷は河口部付近の港湾施設周辺に商業空間や門前的な地域を含んだ都市的景観が形成されていた可能性が指摘できる。その直接的な管掌者は明確でないが，こうした地域に香西氏配下の小領主が複数居館を構えていることを考慮すると，いずれかの小領主が該当するとみられる。

註

(1) 旧河道Ａ・Ｂを遡ると，香川町船岡付近の現・香東川に至る（高橋1992）。この付近にあたる百相坂遺跡では，埋没河道の上面に14世紀の水田が認められた（片桐1997）。これは，旧河道Ａ・Ｂの河道としての廃絶時期と矛盾しない。

(2) 川南西遺跡（高松市春日町）は，『南海通記』で海岸線が湾入していたとされる「小山」（高松市新田町）の西側下方にあたる。最近公表された報告書（高松市教委1998）によると，16世紀末～17世紀の集落が立地する基盤層は砂地であり，近世初頭にようやく土地条件が安定したことが推測されている。

(3) 「春日ノ里ニ至ル，此所ハ屋島山，石清尾山両山ノ間，入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル，遠干潟ナレバ春日里ト木太郷ノ間，海ノ中道アツテ通用ス。元親是ヲ渉テ香河郡ヲ越ヘ」とある。

(4) 「元亀三年冬三好長治讃州ニ鷹狩センカ為ニ十河ノ城ニ来リ，国中ノ諸将来集ス。山田郡木太郷ハ深江多クシテ，雁鴨多ク群ル所也」とある。

(5) 『南海通記』『南海治乱記』編纂の原史料については明らかではないが，植松・片山氏など香西家ゆかりの人物や，三谷氏のような国人領主の子孫など，元亀年間に生まれた人物から話を採録しており，また自身も香西氏に関わりのある人物であるとみられ，香西氏関係の記載が詳しいことから，聞き取り以外にも独自に原史料の収集を行ったと考えられる。したがって，史料批判という作業は

当然必要ではあるが，批判的に検証・活用していく方向が中世後半の地域史復元のために欠かせないであろう。

(6) 林・坊城遺跡ＳＲ01流路Ｂや居石遺跡ＳＲ02がある。

(7) 『南海通記』巻之廿には，高松築城直前の「笑原郷」は「地ヨリ八町沖ニ白沙集リ，須賀ヲ生シ野原庄ニ相続キ，西浜東浜トテ漁村有」と記されている。

(8) ｃ・ｄの違いは，香西氏による東方戦略上の重要度を反映しているとみられ，在地領主としての基盤の強弱を示すものではないと考えられる。

第6図　中世遺跡の分布（1/10万）

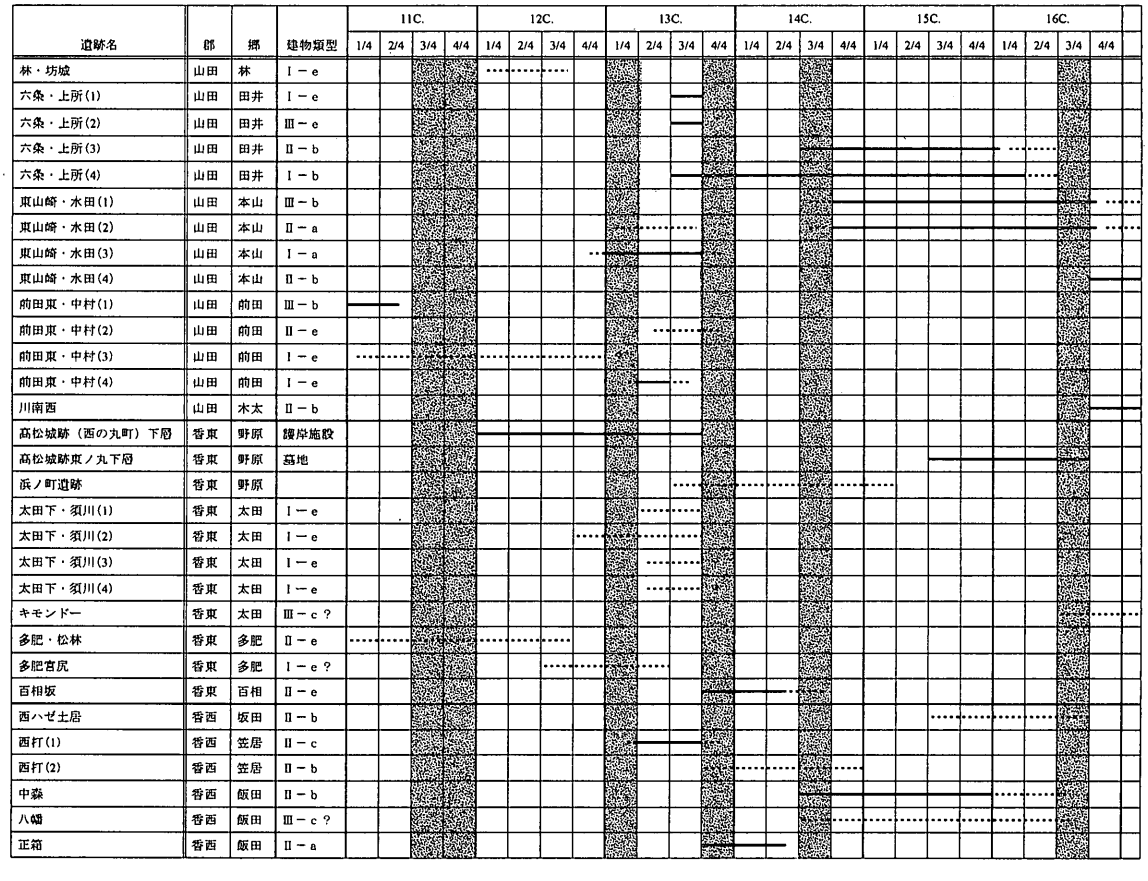
第２節　中世遺跡群の動向

中世集落と城館伝承地の分布状況は，第６図に示した通りである。高松市街部の発掘調査は進んでおらず，平野南部における資料が中心となる。各遺跡の内容については，報告書・概報を参照されたい。ここでは全体的な消長と，集落群（村落）の形態からみた画期を指摘するのにとどめる。

集落の消長を第３表に示した(1)。先行する９世紀後半～10世紀代には，前田東・中村遺跡Ｅ区建物群や汲仏遺跡建物群のような，40㎡を超える面積の大型建物から構成される集落が存在する。これらは開発や交易を主導し，地方支配の末端に連なる富豪層の居宅と推測されるが，10世紀代のうちないし11世紀前半を下限とする。丸亀平野での事例（買田岡下遺跡，下川津遺跡，郡家原遺跡）でも同様であり，古代後半の集落が11世紀前半を超えて継続しない点において，単一の地域にとどまらない明瞭な断絶が指摘できる。

11世紀後半の状況は不明瞭だが，12世紀前半には高松城跡（西の丸町）下層で，搬入品を主体とした多量の土器廃棄を伴う護岸施設が検出されている。当地は野原郷（ないし野原庄）の一角に位置しており，中世前半では最も瀬戸内海に突き出た砂堆の後背湿地状の地形を利用して護岸を構築していることから，交易拠点としての港湾施設であった可能性が高い。また，本書で報告する区画２と隣接するＪ地区（区画７と仮称）でも，当該期に開始する集落を認めることができる。小～中型建物を中心として明瞭な区画施設を伴わない小規模な建物群構成をとる。

13世紀代には，六条・上所(1)集落・(2)集落，東山崎・水田(3)集落，前田東・中村(4)集落，西打(1)集落などが出現する。また，空港跡地の区画２・７はこの時期にも継続し，大型建物を中心とした区画



第３表　高松平野における中世遺跡の消長

1が出現する。なお，太田下・須川(1)～(4)集落は当該期の可能性はあるが，遺物が僅少であり，明確な時期比定は難しい。空港跡地区画1や西打(1)集落は，比較的規模の大きな区画溝を伴う居館と考えられる。また六条・上所(2)集落も50㎡を超える束柱をもった大型建物を中心としており，有力階層の居住は間違いないと思われるが，付随する建物構成が貧弱であり，明瞭な区画施設も伴わない点で前2者とは異なる要素をもつ。他者は，小～中規模の建物が単独ないし数棟集合して，区画施設を伴わないものであり，極めて散在的な存在形態を示す。各集落の出現時期は一律ではなく，比較的長期に継続する類型（空港跡地区画1・2・7，東山崎・水田(3)集落）と，極めて短期間のうちに廃絶する類型(六条・上所(1)・(2)集落，前田東・中村(4)集落，西打(1)集落）の2者に大別できる。しかしいずれにしても，13世紀第4四半期にはほぼ全ての集落が廃絶している点は，看過できない。高松城跡下層の護岸施設もこの時期に廃絶するようである。居館・小集落・交易拠点の3者が一定の時期幅をもちつつも相前後して廃絶・移転しており，高松平野全体に共通した大きな画期といい得る。

上記集落の廃絶を承けて，13世紀第4四半期には百相坂遺跡，正箱遺跡で集落の形成が始まる。また，空港跡地においても区画3・4・6で集落が出現する。区画3・4・6については本報告の第3章で記述しているが，居館（区画3）＋ブロック状に集中する集落（区画4・6）というセット関係が成立するようであり，前代までの散在的な村落景観とは異質な凝集が先駆的に始まるようである。

14世紀後半には，正箱・百相坂の集落が廃絶し，六条・上所(3)集落，東山崎・水田(1)・(2)集落，中森遺跡で集落の形成が始まる。また，空港跡地区画3・4・6も継続する。いずれも集落の周囲と内部を溝で区画し，複数の単位が凝集するという形態を明瞭に示しており，その景観が空港跡地と東山崎・水田では居館あるいは有力階層の居住域を中心としている点が注目される。中心となる集落（居館）は，大規模な堀・土塁を備えた城館よりも規模・区画施設の形態などの点で劣るが，付随する集落との格差は明確に指摘でき，村落（集落群）を構成する上位階層の居住域であると想定して大過なかろう。詳細は第5章第2節で検討するが，小地域の領主（第1節(2)で記述したⅡ群領主に該当するか）を求心力とした地域開発や生産・流通の再編が，このような村落景観として現出した可能性がある。そしてこれらの集落が，以後15世紀を超えて16世紀中葉頃まで継続すること，また16世紀後葉までには概ね廃絶して近世村落へと継承されないこと，の2点に高松平野全体を覆う地域社会の変動過程をみることができよう。

註

（1）建物群の類型化は，森格也氏の分類（森1993）によった。以下のとおり。

建物群	Ⅰ型　中小の建物数棟のみ
	Ⅱ型　主屋1，中規模の副屋1，小規模な納屋2～3
	Ⅲ型　大規模な主屋1，副屋2～3，納屋数棟
区画施設	a型　幅1m未満の溝
	b型　幅1～3mの溝
	c型　幅3m以上の溝
	d型　柵
	e型　なし

第３章　調査の成果

第１節　Ｆ地区の層序

１．各調査区の層序

Ｆ地区は，Ｂ地区からＣ地区にかけての地域に相当する微高地（空港跡地Ⅱでいう Ｂ微高地）頂部の東側にあたる。このため巨視的には，東側に向かって傾斜する基盤層上に遺構が掘り込まれ，また包含層が堆積していることになる。ただ調査区全体を横断・縦断する土層図がないため，基盤層の起伏や遺存状況については断片的な知見が得られるのにとどまり，広域の面的な発掘というメリットを必ずしも生かし切れていない憾みはある。そこでまず，延長距離の長い土層図を個別に記述した後，そこから想定される遺構面の起伏や削平状況，また包含層の遺存状況について，まとめることとする。

①ライン土層（第７図）

Ⅱ－17・18区の北壁部分にあたる。遺構面は西端で標高16.6ｍであり，東端では標高15.5ｍにある。つまり，総長105ｍの間に1.1ｍ下がっており，平均10‰の勾配を示している。ただしより仔細にみると，遺構面の傾斜は一定したものではなく，Ⅱ－17区ＳＤf92（近世～近代の坪界溝）を境にして，その東側で一挙に0.5ｍ近い段差を伴っている。上記勾配は，この箇所での大きな段差を含んだ数値である。また，西端から54ｍと70ｍの地点でも，遺構面が0.1～0.15ｍ程度の段差を伴っており，その前後の遺構面は比較的平坦になっていることがわかる。この遺構面直上には，近世以前の遺物包含層は認められず，飛行場造成前とみられる旧耕作土・床土層が直接堆積していた。したがって遺構面は，近世ないし近代の水田造成に伴う削平を著しく受けているといえる。西端から４ｍ付近で検出されたＳＨf01の壁面が，僅かに0.15ｍ程度しか遺存していなかったのは，以上のような事情との関わりで理解できる。なお飛行場の造成土は，このような水田面の段差を平坦に均しているが，ＳＤf92の西側（つまり標高の高い方）は耕作土の層厚が薄いことから，標高の高い側の耕作土表層が低い側に移動・整地されたことが窺える。ＳＤf92の埋没が西側からの堆積によって進行したと読み取れることも，この想定と矛盾しない。またこのことは，飛行場造成時に西側から東側へと土を運搬して高低差を均したとする証言と，部分的に一致する所見といえよう。

②ライン土層（第８図）

Ⅱ－25区西壁とⅡ－17区東壁にあたるが，Ⅱ－25区部分は先行して調査されたⅡ－20・21区の土層図を使用する。遺構面の標高は，北端が15.5ｍ，南端も15.5ｍ前後であり，ほぼ水平な状態にある。南端から24ｍ付近には，0.15ｍ程度の北側に下る段差がある。直上に堆積しているのは飛行場造成前の旧耕作土・床土層であり，ここでもやはり水田造成に伴う削平が顕著に行われたことがわかる。

③ライン土層（第９図）

Ⅱ－24区西壁の土層である。特筆すべきは，中世後半の遺物包含層が良好に遺存していたことであ

る。すなわち，南端から６ｍ付近にあるＳＤf94（近世～近代の坪界溝）より北側に，0.2～0.3ｍの層厚で褐色粘質シルトを主体とする遺物包含層がほぼ水平堆積しており，多量の中世後半の土器・陶磁器が出土したのである。この包含層は，第４節で報告する区画４に伴うものである。遺構面との関係をみると，ＳＤf94以南では標高15.2ｍ付近であるが，ＳＤf94以北では標高14.85ｍ前後であり，ＳＤf94を介して0.35ｍもの北側に低くなる高低差が存在したことがわかる。これに対して近世～近代の耕作土・床土層の標高は，上面で15.4～15.5ｍ，下面で15.2ｍ（ＳＤf94以南）・15.0ｍ（ＳＤf94以北）であり，ＳＤf94を超えて高低差が緩和もしくは解消されている。つまり，近世以降の水田造成にあたっては，ＳＤf94以南は面的な削平を行い，以北は逆に盛り土を施すことで坪界を超えた平坦化を達成したのであり，このことが中世包含層の遺存をもたらしたといえる。

④ライン土層（第９図）

Ⅱ－24区東壁とⅢ－１区西壁の土層である。遺構面の標高は，南半部が15.2ｍ前後で一定しているが，南端より47ｍ付近で段差を伴い15.0ｍ前後に下がる。また北端より15ｍ付近では，幅の広い出水状遺構（ＳＤf96・ＳＸf14）がある。遺構面直上には飛行場造成前とみられる旧耕作土・床土層があり，やはり近世～近代の水田面造成に伴う面的な削平が看取できる。なお，北端より30ｍ付近より北側は，旧耕作土が遺存しておらず，空港造成に伴うバラス層が遺構面上に及んでおり，これに影響されたとみられる遺構面の変色が顕著に認められた。この部分の耕作土は，北側のＳＤf96・ＳＸf14を埋める土として削り取られたのであろう。

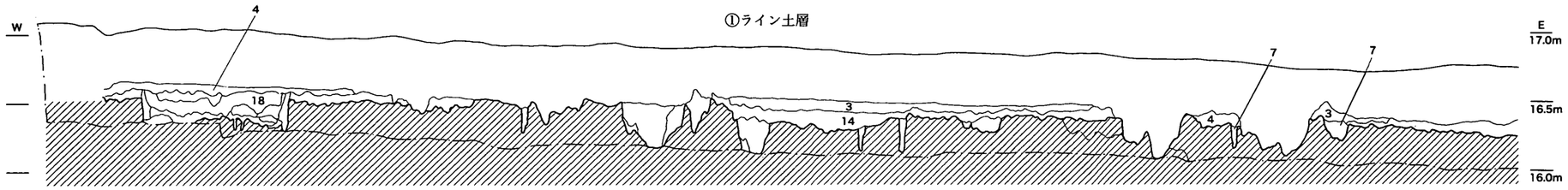
⑤ライン土層（第10図）

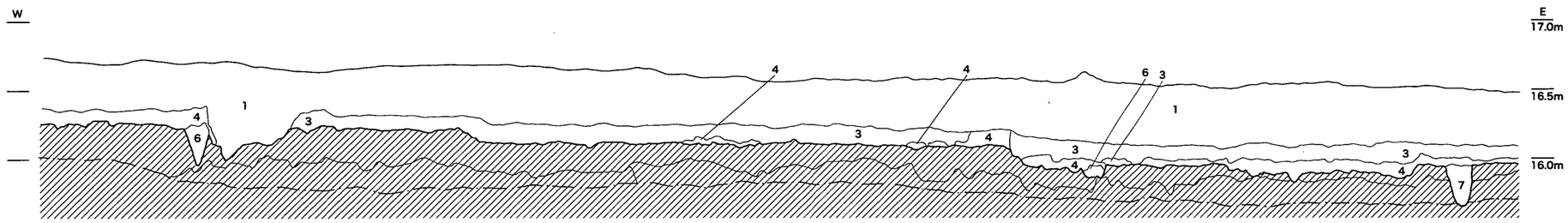
Ⅲ－６区西壁とⅢ－７区東壁の土層である。遺構面は若干の起伏を伴うが，標高14.7～14.8ｍの間で概ね一定している。直上には飛行場造成前の旧耕作土・床土が堆積しており，付近で検出された中世の建物群（区画１・６）に伴う遺物包含層は全く認められなかった。近世～近代の面的な削平を被っていることがわかる。

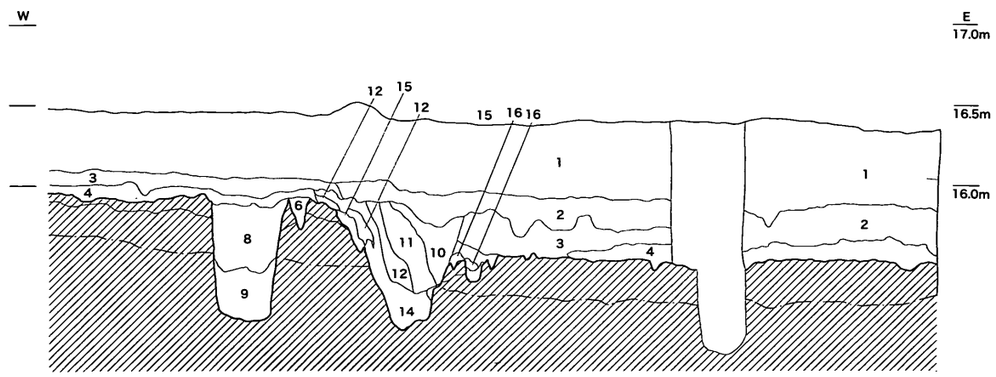
⑥ライン土層（第11図）

Ⅱ－１区・Ⅲ－２区北半部南壁，Ⅲ－４区南壁の土層である。Ⅱ－１区とⅢ－２区西半部では，遺構面直上まで空港に伴うバラス層が堆積しており，特に西端から19～75ｍの間は周囲よりも0.2～0.4ｍ低い，標高14.4～14.6ｍ付近までバラス層が分厚く堆積していた。この部分は旧高松空港のエプロンならびに滑走路に至る誘導路にあたるため，空港の整備過程で特に著しい掘削・削平を受けたものと考えられる。この範囲を除いた遺構面の標高は，西端から19ｍ付近までが14.7～14.9ｍで緩やかに東に傾斜し，西端から75ｍ以東は14.3～14.5ｍでほぼ水平であり，東端部で0.2ｍ下がって14.0ｍ前後となる。いずれも直上に旧耕作土・床土層が堆積しており，近世～近代の水田造成によって削平されていることがわかる。

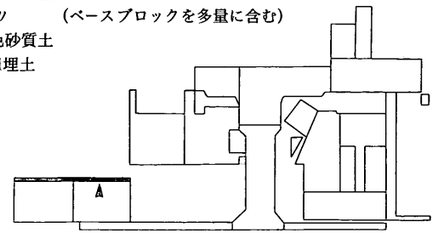
なおⅢ－２区では，幅の広い溝状遺構（ＳＤf49，発掘時の名称「ＳＸ01」「茶灰色シルト落ち」）が検出されているが，その平面形態については一部不明瞭な部分があった。これは，ＳＤf49埋土に近似した土層が周囲に堆積しているためである（第24・25層）が，土層断面図によれば，第22層と第24・25層の境界は北側に屈曲したＳＤf49の東肩部の延長上にあたり，この部分をＳＸf49東辺部北





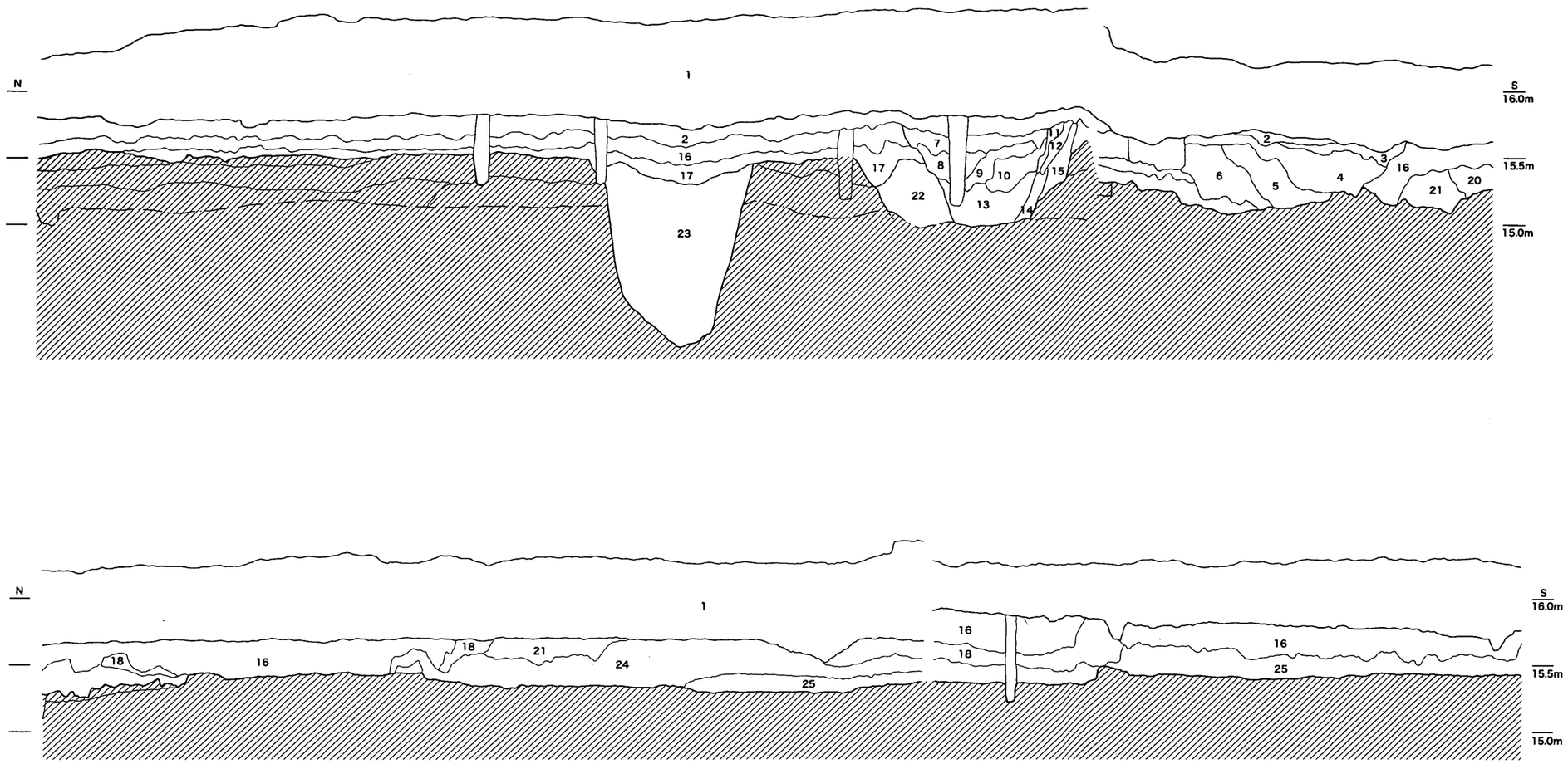


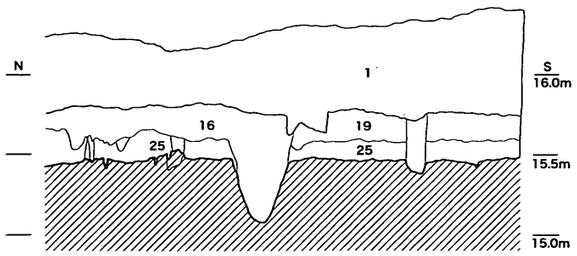
1. 盛土
2. 旧耕土
3. 旧床土
4. 淡灰色シルト（ベースブロックを含む、中世溝埋土）
5. 淡黒褐色粗砂（レキを含む）
6. 淡灰色砂質土（ベースブロックを含む）
7. 〃　（　〃　多量に含む）
8. 〃　（レキを多量に含む）
9. 淡黒褐色砂質土
10. 〃　（レキを多量に含む）
11. 淡褐色砂質土（レキを少量含む）
12. 濁黒褐色粘土（ベースブロックを含む）
13. 淡褐色シルト
14. 〃　砂質土
15. 〃　（ベースブロックを多量に含む）
16. 淡灰色砂質土
17. SHf01埋土



第7図　① ライン土層（縦1/40、横1/160）

②ライン土層

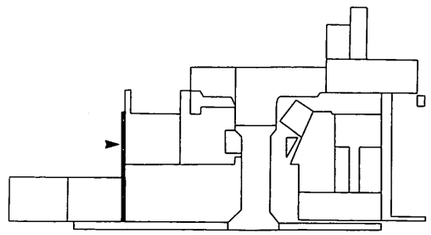




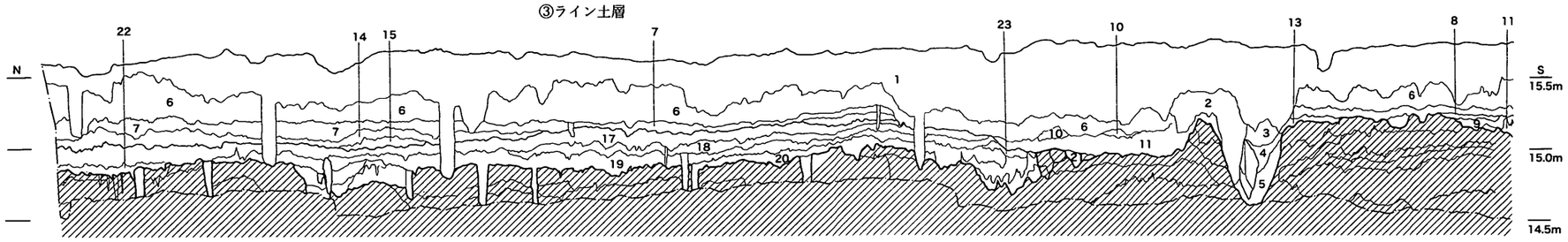
第8図　② ライン土層（縦1/40、横1/160）

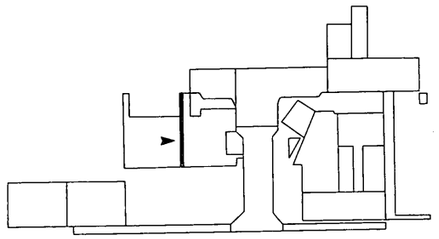
1. 盛土
2. 旧表土
3. 濁茶褐色砂質土（地山ブロックを含む）
4. 淡灰色砂質土（地山ブロックを含む）
5. 淡灰色砂礫層
6. 暗灰茶色砂質土（弥生包含層をブロック状に含む）
7. 淡褐色砂質土（やや濁った色調）
8. 淡黒褐色砂質土（地山ブロックを少量含む）
9. 黒灰色細砂
10. 淡褐色砂質土
11. 〃
12. 暗黒褐色粘質土（地山ブロックを含む）
13. 暗褐色砂質土
14. 〃　（地山ブロックを少量含む、砂がラミナ状に入る）
15. 濁灰褐色砂質土（礫を少量含む）
16. 旧耕土（淡黒褐色砂質土）
17. 床土（淡赤褐色砂質土）
18. 淡黒灰色砂質土
19. 濁褐色砂質土（地山ブロック、埋土を含む）
20. 淡灰褐色砂質土
21. 濁灰褐色砂質土
22. 淡褐色砂礫層（土抗埋土）
23. 濁茶褐色粘質土（地山ブロックを含む）
24. 濁褐灰色砂質土
25. 淡褐色砂質土（地山ブロックを含む）

SDf94埋土



③ライン土層





1. 盛土・撹乱
2. 灰黄褐色砂礫土（ベースブロックを含む）
3. 暗灰黄色粘質シルト（炭粒・植物遺体含む）
4. 黄褐色細～中砂、黄灰色粘土、黄灰色粘土

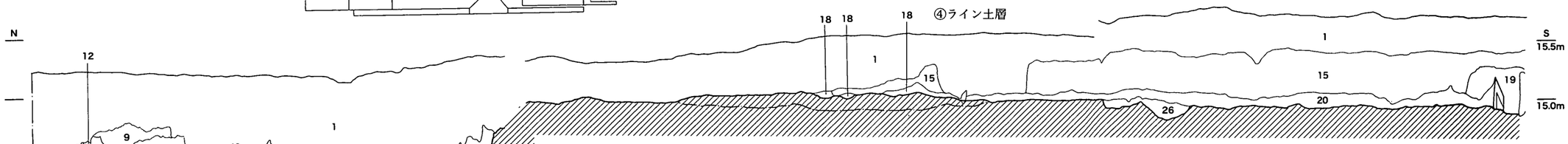
SDf94埋土

5. 黄灰色粘土（小礫含む）
6. 旧耕土
7. 旧床土
8. 暗褐粘質シルト（鉄分を含む。旧床土）
9. 黒褐色粘土（強粘質）
10. 暗灰黄色シルト（旧床土）
11. 灰黄褐色シルト（旧耕土）
12. 明褐色粘質シルト（鉄分を含む。旧耕土）
13. 暗灰黄色シルト（ベースブロックを含む。旧床土）
14. 褐色粘質シルト（砂混じり。旧床土）
15. 灰黄褐色粘質シルト
16. 黄褐色砂混じり粘土
17. 褐色シルト（マンガン、鉄分を含む）
18. 明褐色シルト（マンガン、鉄分を含む。17層より明るい）
19. 灰黄褐色粘質シルト（マンガン、鉄分、ベースブロックを含む）
20. 暗灰黄色粘質シルト（マンガン、鉄分を含む）
21. にぶい黄褐色粘質シルト（鉄分、ベースブロックを含む）

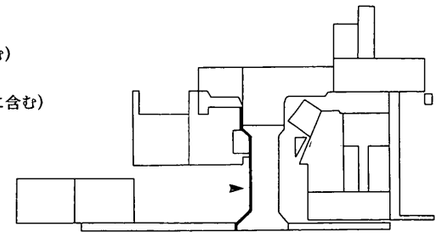
中世包含層

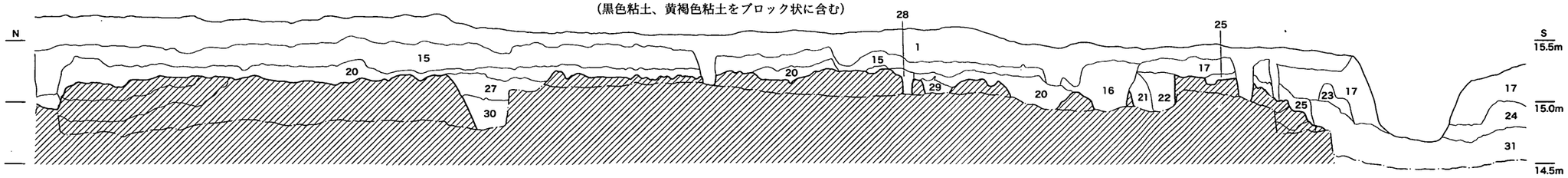
22. 褐灰色砂混じり粘土（炭粒を含む）
23. 褐灰色粘土（マンガン、ベースブロックを含む）

④ライン土層

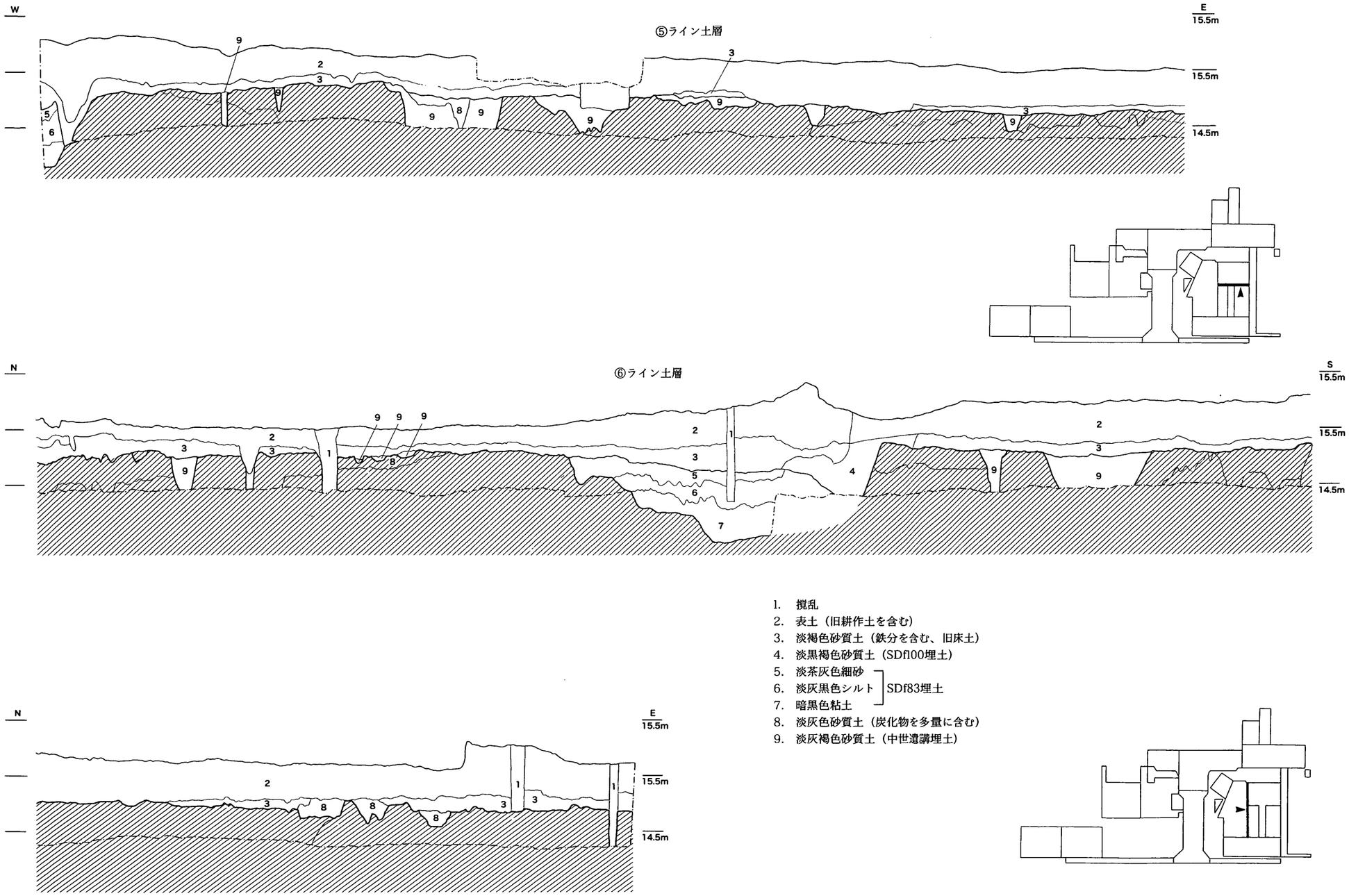


1. 盛土（淡褐色砂質土・バラス）
2. 黒色砂礫（30cm以下の礫を含む）
3. 青灰色粘質シルト（5cm大の小礫を含む）
4. 灰色粘土（鉄分を含む）
5. 明緑灰色シルト、暗青灰粘土（ラミナ状）
6. 暗赤褐色礫
7. 灰色シルト、灰白細砂（ラミナ状、植物遺体を多く含む）
8. 青灰色砂混り粘土（10cm大の礫を多く含む）
9. 褐灰色シルト（鉄分を含む）
10. 黄灰色シルト、灰白色細砂（ラミナ状、鉄分を含む）
11. 灰色粘土（ややシルト質）
12. 灰色粘土、灰白色シルト（ラミナ状、鉄分を含む）
13. 灰色粘土（鉄分を含む）
14. 旧耕土
15. 黒褐色シルト質細砂（旧耕土）
16. 赤灰白色シルト質細砂
（黒色粘土、黄褐色粘土をブロック状に含む）
17. 灰白色シルト質細砂（鉄分を含む）
18. 濁黄褐色シルト（旧床土）
19. 黒色シルト質細砂（旧耕土）
20. 濁黄褐色シルト（旧床土）
21. 灰白色シルト質細砂（粗砂を多量に含む）
22. 灰白色シルト質細砂
（黒色粘土、黄褐色粘土をブロック状に含む）
23. 淡赤灰色シルト質細砂（礫を含む）
24. 淡灰色粘土
25. 淡灰色シルト質細砂（鉄分を含む）
26. 黒色粘土
27. 黒色粘土（砂を含む）
28. 濁黄色粘土（黒色粘土をブロック状に含む）
29. 暗灰色粘質土
30. 暗青灰色細砂（バラス含み、やや黒色を呈す）
31. 淡黒色粘質土





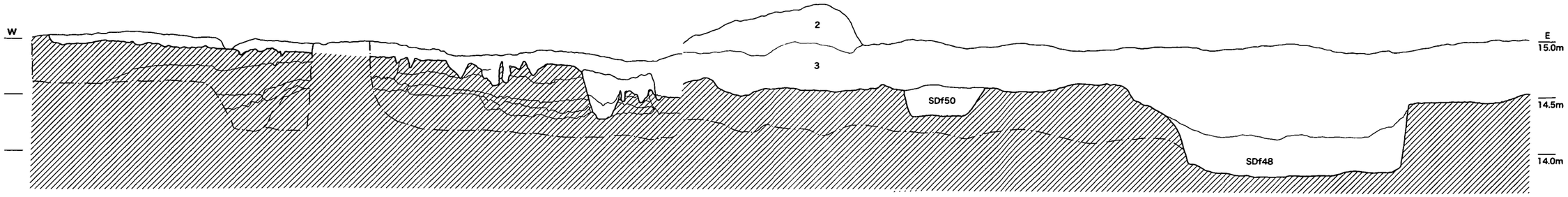
第9図　③・④ライン土層（縦1/40、横1/160）



1. 撹乱
2. 表土（旧耕作土を含む）
3. 淡褐色砂質土（鉄分を含む、旧床土）
4. 淡黒褐色砂質土（SDf100埋土）
5. 淡茶灰色細砂 ┐
6. 淡灰黒色シルト │ SDf83埋土
7. 暗黒色粘土 ┘
8. 淡灰色砂質土（炭化物を多量に含む）
9. 淡灰褐色砂質土（中世遺構埋土）

第10図　⑤・⑥ ライン土層（縦1/40、横1/160）

⑦ライン土層



1. 表土
2. バラス
3. 青灰色砂質土（旧耕土）
4. 灰色礫
5. 灰色細砂（鉄分を少量含む）
6. 灰色シルト（鉄分、ベースブロックを含む）
7. 灰色細砂（礫を少量含む）
8. 明灰色シルト（旧耕土、鉄分を含む）
9. 明灰色砂質土（旧耕土、鉄分を含む）

SDf97埋土

10. 灰色シルト（旧耕土、鉄分、マンガンを含む）
11. 明灰色砂質土（旧耕土、鉄分を含む）
12. 灰色シルト（鉄分を含む）　SDf100埋土
13. 暗茶灰色粘質土（礫を多量に含む）
14. 暗茶灰色粘質土（鉄分を含む）

SDf83埋土

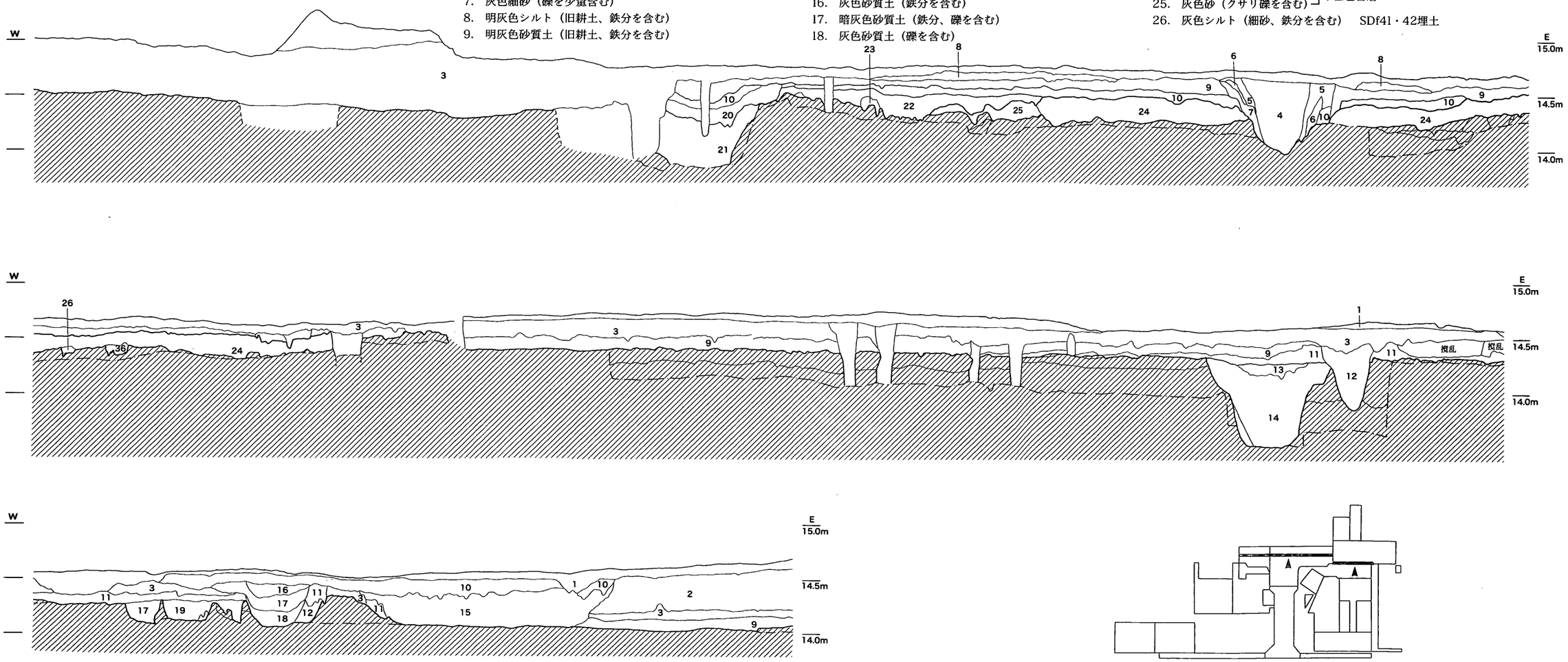
15. 暗茶色粘質土（青灰色粘質土をブロック状に含む）
16. 灰色砂質土（鉄分を含む）
17. 暗灰色砂質土（鉄分、礫を含む）
18. 灰色砂質土（礫を含む）
19. 暗灰色砂質土
20. 茶灰色シルト（小礫を少量、鉄分、マンガンを多量に含む）
21. 暗茶黒色粘質土（鉄分、マンガンを含む）
22. 茶灰色シルト
23. 黒色粘質土（細砂をわずかに含む）

SDf49埋土

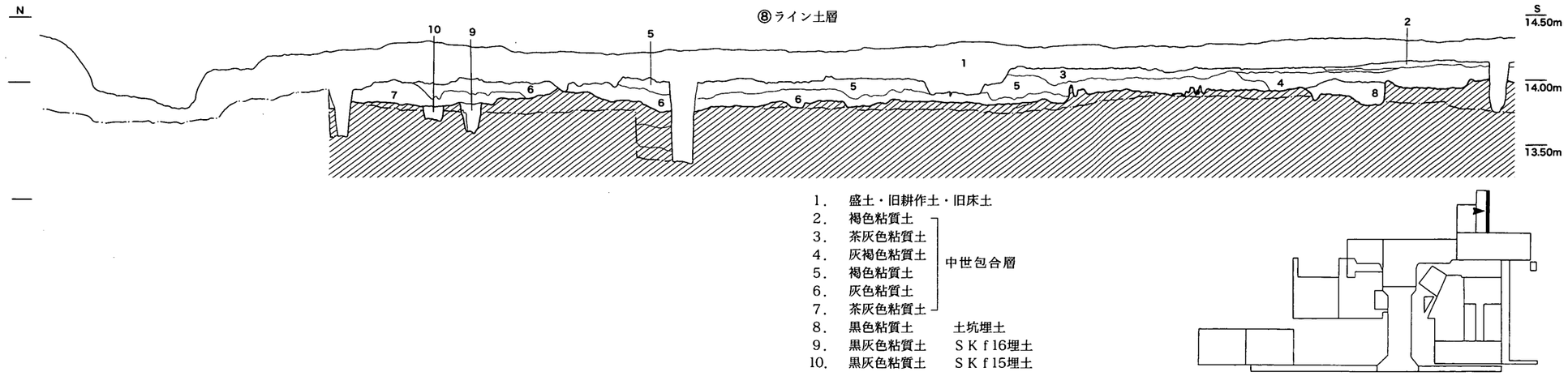
24. 茶色シルト
25. 灰色砂（クサリ礫を含む）

中世包含層

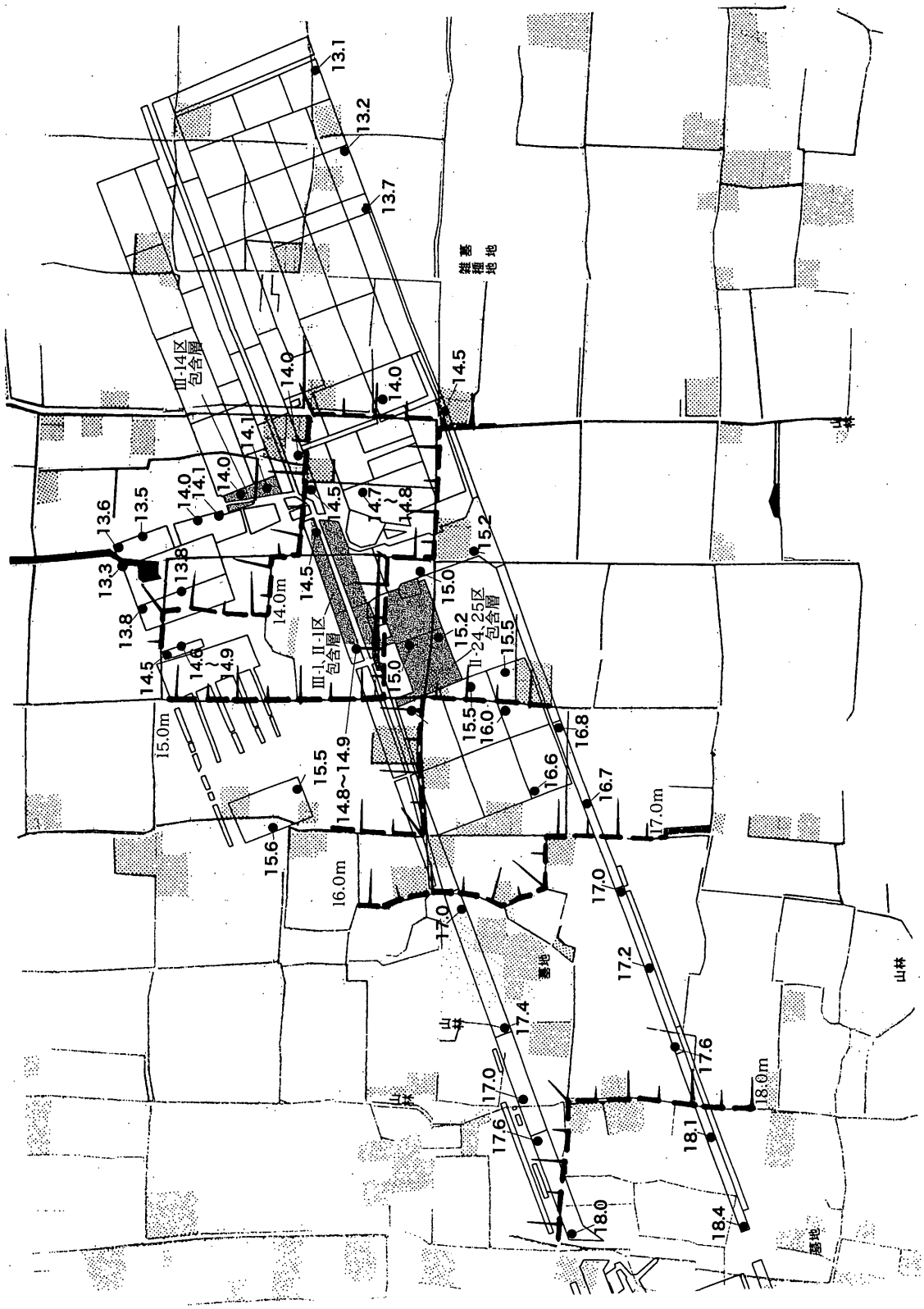
26. 灰色シルト（細砂、鉄分を含む）　SDf41・42埋土



第11図　⑦ ライン土層（縦1/40、横1/160）



第12図　⑧ライン土層（縦1/40,横1/160）



第13図　旧耕作土下面（近世～近代削平面）の標高と等高線図

半の東肩と見なすことが可能である。また，この土層図には見えないが、Ⅱ－１区でもＳＤf49埋土に近似した土層があり，遺物は「茶灰色シルト相当層」という名称で取り上げられている（遺物番号**1178～1214**)。遺物は10～12世紀を主体としており，それ以降のものは認められないため，ＳＤf49とは明確に異なる時期である。Ⅱ－１区「茶灰色シルト相当層」は、遺構埋土とするよりも面的に広がる遺物包含層と捉える方が妥当と考えるため，Ⅱ－１区中世包含層と呼称することとする。

以上の理解に立つと，Ⅱ－１区・Ⅲ－２区では上記した遺構面（第１遺構面）の下に，中世前半の包含層を介して下位に別の遺構面（第２遺構面）が存在することになる。Ⅲ－２区では，第２遺構面上でＳＤf41・42が検出されており，併走するＳＤf40の出土遺物などから，中世前半のうちに第１遺構面の形成が進んだことが窺える。Ⅱ－１区の包含層下の第２遺構面では，遺構は検出されなかった。Ⅲ－２区では第２遺構面は東に向かって上昇し，第１遺構面と同一面になることから，第２遺構面はⅡ－１区とⅢ－２区付近に広がる中世前半ないしそれ以前の低地部である可能性が指摘できる。ただし，そのプランについては，周辺の攪乱が著しいこともあり，明確なかたちで検出することはできなかった。

⑦ライン土層（第12図）

Ⅲ－14区東壁の土層である。遺構面は２面確認された。上位の第１遺構面は，南端から15ｍ付近までは標高14.1ｍ前後であり，南端から15ｍ以北は段差を伴って標高14.0ｍ前後になる。直上には空港造成土を交えた旧耕作土・床土層が堆積しており，近世～近代の削平と考えられる。第２遺構面は，第１遺構面を構成する褐色系の粘質土（９世紀後葉～14世紀前葉の遺物を包含する）の下位で検出された。遺構面の標高は，南端で14.0ｍ，北端で13.85ｍであり，北に向かって緩やかに傾斜している。この遺構面では弥生時代後期～古墳時代前期初頭とみられる土坑群が検出された。

２．遺構面の起伏と削平・攪乱状況

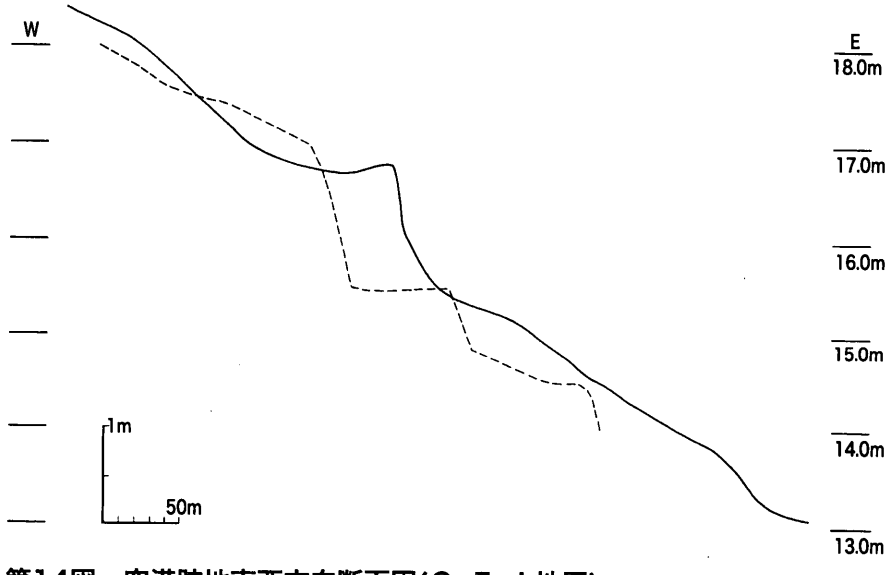
以上のように，全ての地区にわたって例外なく近世～近代の水田造成に伴う面的な削平が行われていることが明確である。陸軍飛行場や旧高松空港の造成・整備に伴う削平・攪乱はむしろ少なく，昭和19年当時の景観の上に盛り土・整地が行われたことがわかる。また，水田造成は単に削平を伴うだけではなく，標高の低い地点には盛り土を行い嵩上げを行っていることが，③ラインの土層堆積状況から窺い知ることができる。いずれにしても，大規模な地形改変による遺構面の削平は，近世～近代に飛躍的に進行したことが指摘できる。

Ｃ・Ｅ・Ｉ地区で公表された土層図をもとに，空港跡地遺跡東半部における耕作土層下面の標高を集成して模式的な等高線図を作成したのが第13図である。近世～近代の削平状況を示すのが目的であるため，中世包含層が遺存する場合にはその上面（削平面）での標高を示した。一部に乱れがあるものの，条里型地割の坪界線に沿って等高線が回ること，換言すれば坪界溝ないし坪界以外の幹線水路沿いで水田面に段差が生じていることを看取できる。坪界溝とその他の幹線水路は，第５節で報告するように，ほぼ例外なく近世まで遡る可能性が高い。近世～近代の耕地開発が，坪界線ないしそれ以上の細かな単位への幹線水路の開削と，面的な削平・盛り土をセットで行っていることが推測でき，逆に飛行場造成前の耕地景観が近世より古くは遡らないことを示唆していよう。

ところで中世以前の包含層が遺存していた箇所（Ⅱ－１区，Ⅲ－２区，Ⅲ－14区）は，近世～近代

の削平面の等高線によれば，浅い谷状の窪地にあたることになる。周囲が基盤層まで削平されていることを考慮すると，本来はこの谷状の窪地の起伏はより明瞭なものであったといえ，その方向は巨視的には弥生時代後期初頭のＳＤfl2・ＳＤfl13とＳＤel15（空港跡地Ⅱで報告）の流路と概ね一致するようである。つまり，弥生時代後期に大溝（あるいは小規模な自然河川か）が埋没した後も，窪地は連続した地形面として残存し中世後半まで至るが，近世になり灌漑網の整備に支えられた大規模な耕地造成をもってしても，その影響は水田面の段差として遺存したとみることができるのである。

以上から，弥生時代後期の集落（ＳＨf01，ＳＢf01～04，Ⅱ－18区ピット群）は，上記した窪地南側の微高地に位置することになる。また中世前半の区画１は窪地東側の微高地に，区画２は窪地に面した傾斜面に設定されており，中世後半の区画５・６は微高地上，区画３・４は窪地傾斜面に営まれたことになろう。また，空港跡地Ⅱで提示された微高地の範囲とは若干異なる所見となる。



第14図　空港跡地東西方向断面図(C・F・I地区)

第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

１．概要

当該期の遺構は，Ｆ地区南西部（Ⅱ－17・18区）で竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・性格不明遺構が集中しており，Ｆ地区中央部（Ⅲ－１区）で溝，北東部（Ⅲ－４・14区）で土坑群が確認されている。

Ⅱ－17・18区で検出された遺構群は，一部調査区外に及ぶものの，弥生時代後期初頭の小規模集落１単位の全体を概ね窺うに足る資料として捉えられる。また竪穴住居や隣接する土坑からは，サヌカイト剥片・砕片が多量に出土している。その中には接合資料９個体が含まれており，サヌカイトの集落への流入形態，剥片の加工技術について具体的なデータを提示することができた。

Ⅲ－４・14区で検出された土坑群は，Ｇ地区（Ⅲ－33・34・45～47区）で検出された弥生時代後期後葉の土坑群（総数800基前後）の南西側（Ⅲ－４区）・西側（Ⅲ－14区）の縁辺にあたる。土坑群そのものの性格や変遷過程については，近い将来に行われるであろうＧ地区の正報告に譲ることとし，ここでは事実報告にとどめた。

２．建物

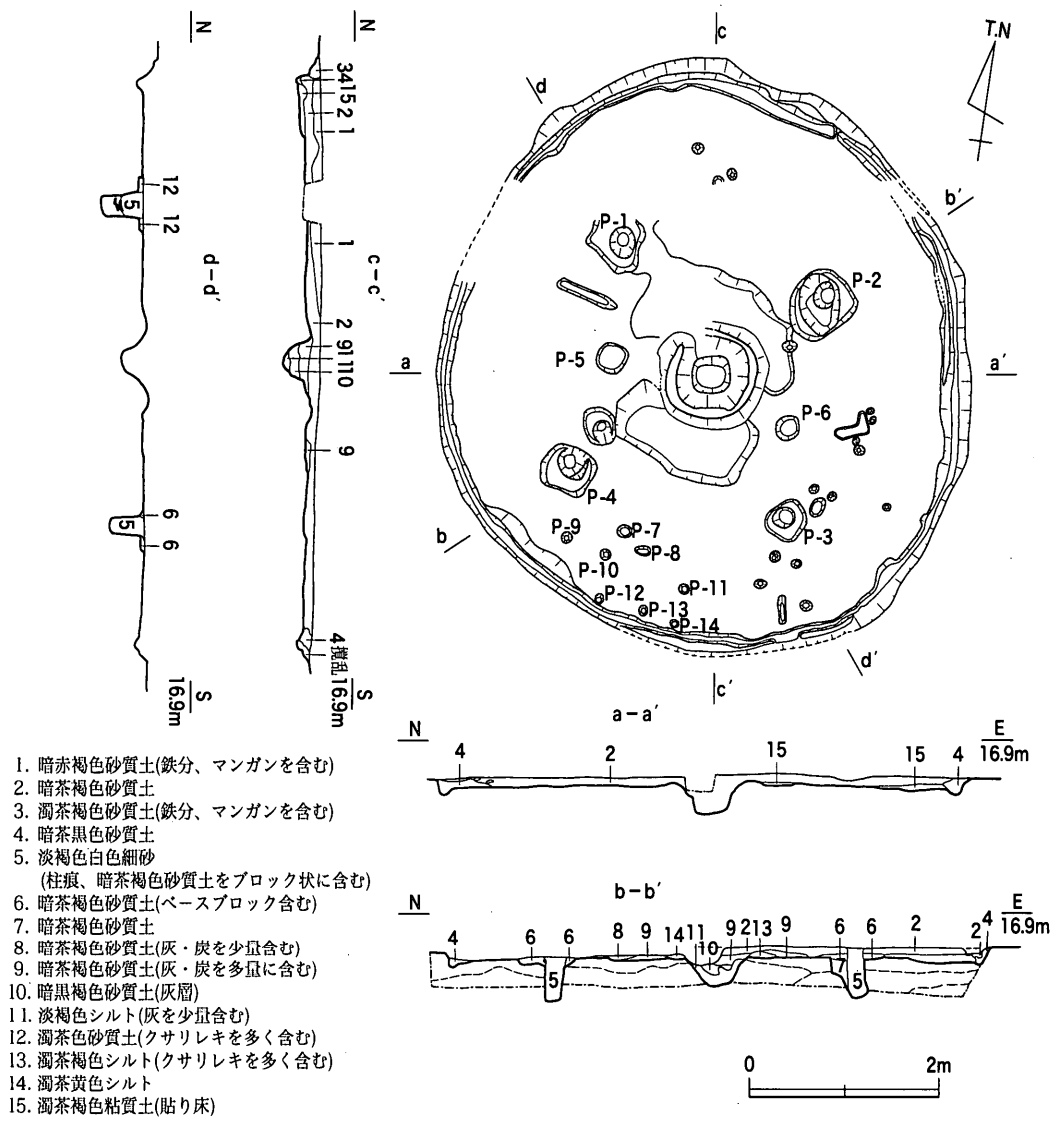
ＳＨf01（第15～20図）

Ⅱ－18区北西部（一部Ⅱ－19区にかかる）で検出された竪穴住居である。北西部は古墳時代前期のＳＫf04によって破壊されているが，ほぼ全形を検出・調査することができた。検出面は全体に中世以降の削平が顕著であり，残存深度が浅い。

形態・規模　平面形態は，南北方向にやや長い円形を呈する。規模は南北6.23ｍ，東西5.62ｍ，床面までの深さ0.08～0.18ｍを測る。北東端～東端部にかけて，最大0.08ｍの層厚で貼り床（濁茶褐色粘質土）がみられる。

壁面際には幅0.1～0.2ｍ，床面からの深さ0.1ｍの壁溝が全周する。壁溝の上面は，長さ0.35～0.7ｍの直線的なプランが多角形状に屈折しながら連続しており，一部では屈折部が明瞭に喰い違っていた。こうした状況は，あたかも板材が据え付けられていたようにも見受けられるが，平面・断面ともに明確な板材の痕跡を見出すことはできなかった。また南端部と北端部では，壁溝と竪穴壁面との間に幅0.1ｍ前後の間隙が存在していた。また，幅0.06～0.1ｍ，深さ0.03ｍの小規模な溝が３本検出された。

主柱穴は４箇所である。柱穴掘り方は平面隅丸方形を呈しており，大きさは不揃いである。最大はＰ－２であり，一辺0.61×0.72ｍ，深さ0.07ｍを測る。最小はＰ－３であり，一辺0.38×0.43ｍ，深さ0.04ｍを測る。いずれも平面的な規模に比して極めて浅い掘り方である。柱痕は径0.18ｍ前後であり，掘り方底面よりも0.38ｍ前後深くなっている。またＰ－１とＰ－４の中間，Ｐ－２とＰ－３の中間に，主柱穴よりもやや小振り（径0.24～0.32ｍ，深さ0.03～0.07ｍ）で浅い柱穴Ｐ－５・６が検出された。この２個の柱穴は主柱穴を結ぶ線よりもやや内側にあり，中央土坑外周の浅い溝が途切れる箇所に対応している。棟木を支える補助柱の可能性が指摘できる。



第15図　SHf01平・断面図(1/80)

南半部の床面を中心に，径0.1～0.16ｍの小規模なピットが検出された。その具体的な組み合わせや構造については明確にし得ないが，竪穴住居の南側に分布することを念頭に置くと，出入り口に関わる施設（梯子穴など）を構成することも考えられる。ただし，関東地方で検出されている梯子穴とは形状・大きさ・深度ともに異なっている。

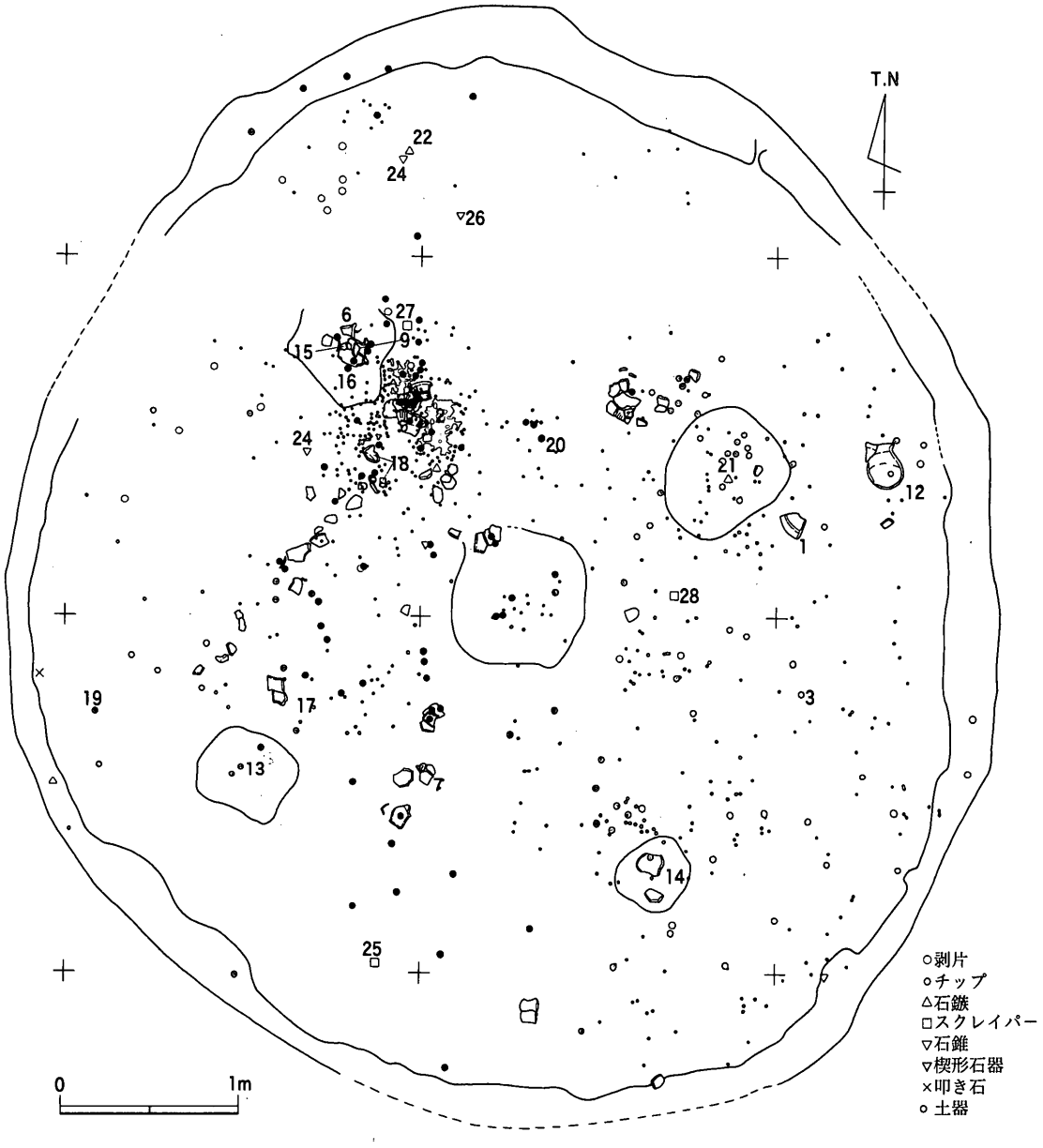
中央土坑は，隅丸方形に近い円形プランの掘り込みと周辺の土堤，その外周を取り巻く溝状の浅い落ちからなる。土坑の規模（土堤部分を除く）は，径0.66ｍ，深さ0.3ｍを測る。断面は逆台形を呈しており，埋土が３層認められた。最下位の第11層は灰を少量含む淡褐色シルト層であり，その直上に灰層（第10層）が堆積する。第10層は土坑内に溜められたオキと推測されるため，直下で底面の第11層は自然堆積層ではなく除湿目的で人為的に入れられた可能性も考慮する必要があろう。なお，土坑内の壁面には明瞭な被熱の痕跡を認めることはできなかったし，埋土中への焼土塊の混在も認められなかった。土坑周辺の土堤状の盛り上がりは，幅0.2～0.29ｍ，高さ0.07ｍを測り，基盤層がやや濁ったような濁茶褐色シルトよりなる。おそらく土坑掘削土を盛り上げたのであろう。土堤の周囲には，幅0.55ｍ前後，深さ0.03ｍを測る浅い溝状の落ち込みが巡るが，土堤西側と東側で途切れる。この途切れた部分に先述した主柱穴の中間柱が存在する。

土層堆積状況　床面上に堆積した埋土は，細別は可能であるが基本的には暗赤褐色砂質土の単一層といえる。ただし，壁溝付近と主柱穴付近で異なる状況が観察できた。

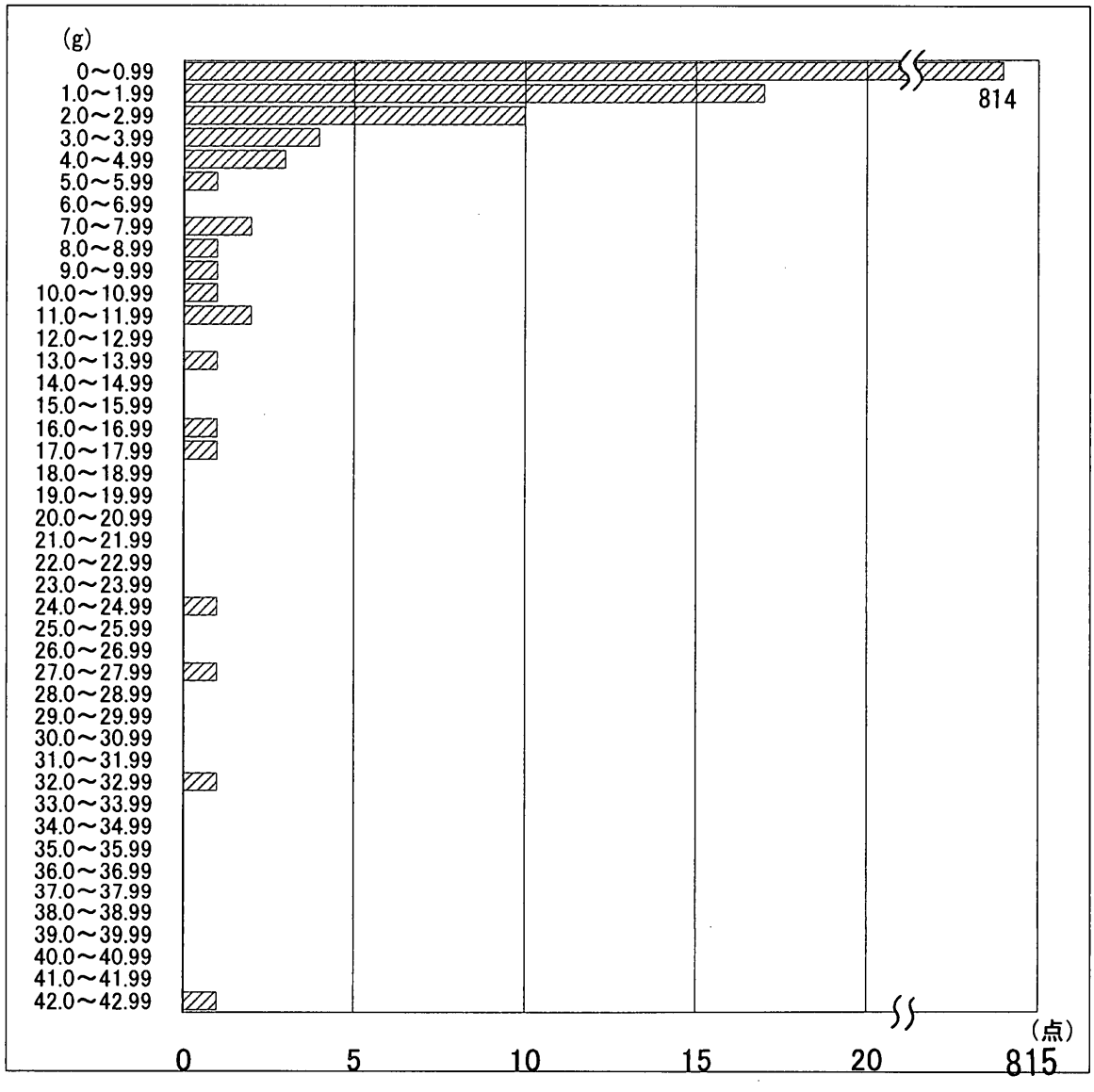
壁溝付近の埋土は，暗茶黒色砂質土や濁茶褐色砂質土のように，床面上の埋土よりも暗いか濁った色調を呈しており，これが壁側から床面側に斜め方向に堆積していた。通常の埋没過程初期の埋土とみるのが穏当であろうが，壁溝部の構造に関わる土（例えば板材の裏込め土）である可能性も考慮しておきたい。

主柱穴（Ｐ－３）上の埋土は，柱穴掘り方内から柱痕（第５層：淡褐灰色細砂）が連続しており，検出面にまで及んでいる。平面的にも上面検出時に柱痕を確認できた。第１・２層は壁溝・中央土坑を覆っているため，貼り床構成土とは考えられず，竪穴住居廃絶後の埋積土とみるのが妥当である。したがってＰ－３の柱材は，竪穴廃絶後も少なくとも下端部が床面から出た状態にあったことになる。

遺物出土状況　埋土中や床面直上から，多量の弥生土器・サヌカイト製石器が出土した。残存深度が



第16図　SHf01遺物出土状況平面図(1/40)

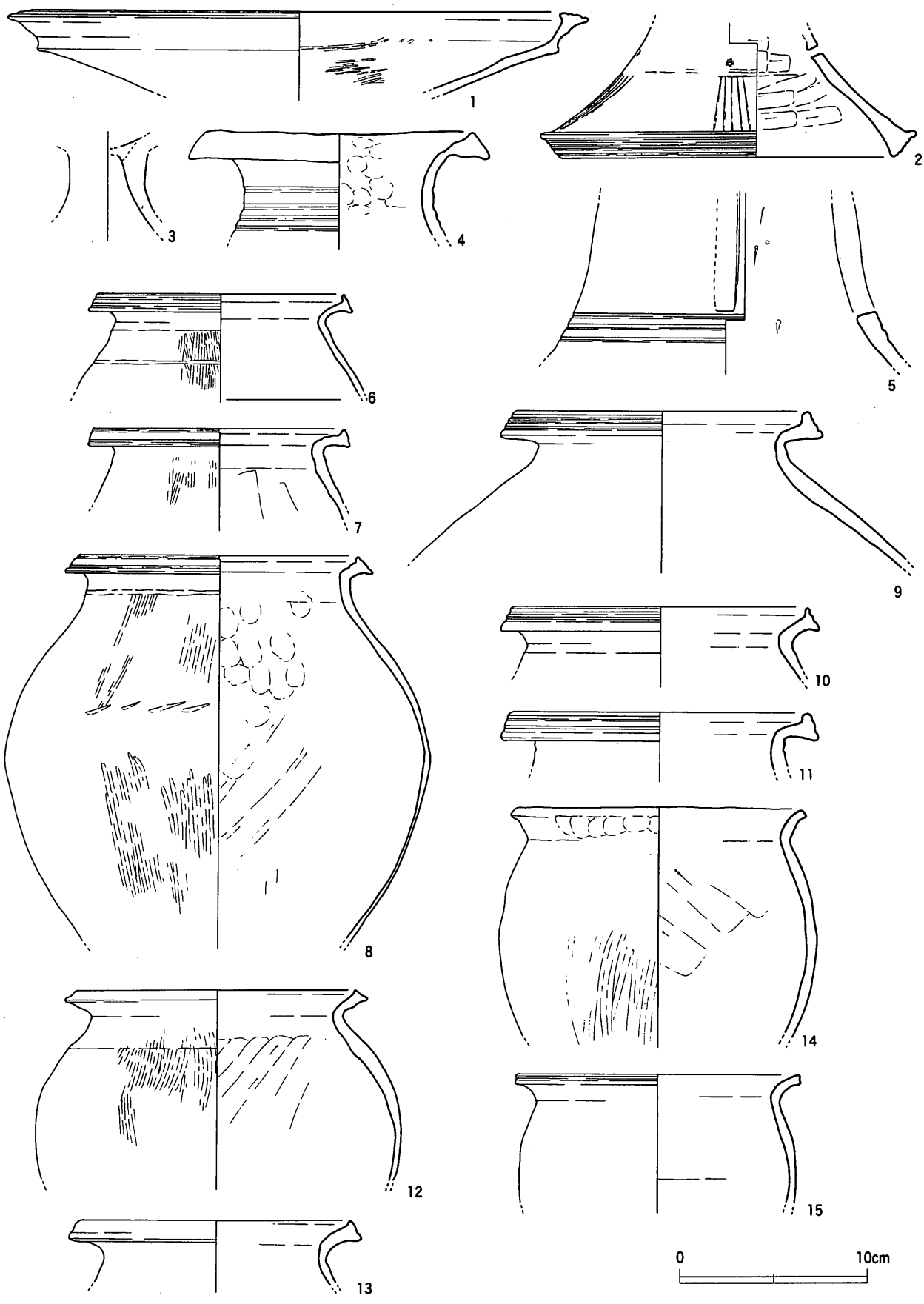


第4表　ＳＨｆ01出土石器重量別数量

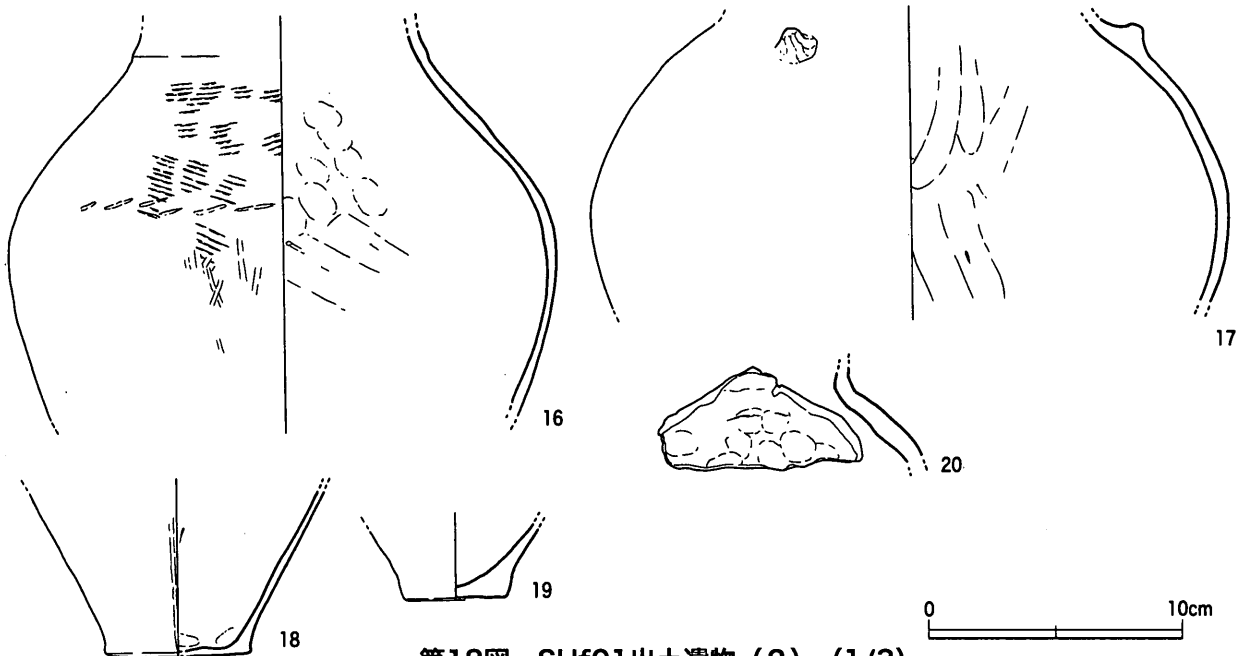
浅いため，埋土中と床面直上の出土遺物を明確に分離することは困難であり，ここでは一括して平面的な分布について記述する。

弥生土器片は，ほぼ全域にわたって分布していた。特に大型の破片が集中するのは，中央土坑の西側からＰ－１・４の間にかけての範囲に高杯（**2**）・甕（**7・11・13・17・18・19・20**），中央土坑北東側のＰ－２周辺に高杯（**1**）・壺（**4**）・器台（**5**）・甕（**8・10・12**）である。またＰ－１の柱痕内には，甕４個体分の破片（**6・9・15・16**）が折り重なって遺存していた。この他，Ｐ－３の周辺にも甕（**14**）が認められた。

サヌカイト製石器は，827点出土した。その分布範囲はほぼ全体に及んでいるが，主柱穴Ｐ－３・４を結ぶ線よりも南側の範囲にはほとんど分布していない。これは，土器片の分布とも一致する傾向である。石器が最も集中するのは，Ｐ－１と中央土坑との間の径0.85ｍ程度の範囲である（石器集中部と呼称する）。器種別に分布状況をみると，石器集中部には砕片が極めて多く，その他に石鏃の先端部片１点，剥片１点が含まれる。また石器集中部１の西側～北西側にあたる竪穴住居北西部では，石鏃１点（**22**），石錐１点（**24**），スクレイパー１点（**27**），楔形石器２点（うち１点は**26**），剥片12点が



第17図　SHf01出土遺物(1) (1/3)



第18図　SHf01出土遺物（2）（1/3）

出土している。砕片の集中部と製品・剥片の分布が重複しないことが指摘できる。接合関係で石器集中部と周辺の石器分布域をみると，石錐（**24**）は石器集中部を中心とした関係を看取することができ，石器集中部が石器製作の場であったことを首肯できる。この他，砂岩製石器として，径約10㎝の砂岩製敲き石が石器集中部の北側に隣接して出土しており，石器製作の道具として位置付けられる。また北側壁溝に近接した床面上で，15㎝大の摩滅痕のある砂岩礫が出土した。摩滅の度合いが弱いが，石皿の可能性もある。さらに南東部壁溝に接して砂岩製台石，西側壁溝に接して被熱痕のある砂岩礫が出土した。

以上の遺物分布を床面遺構の状況と対応させると，土器片・石器ともに希薄な分布範囲に小規模なピットや小溝があることが明確であり，何らかの屋内利用形態の在り方を示唆するものと思われる。

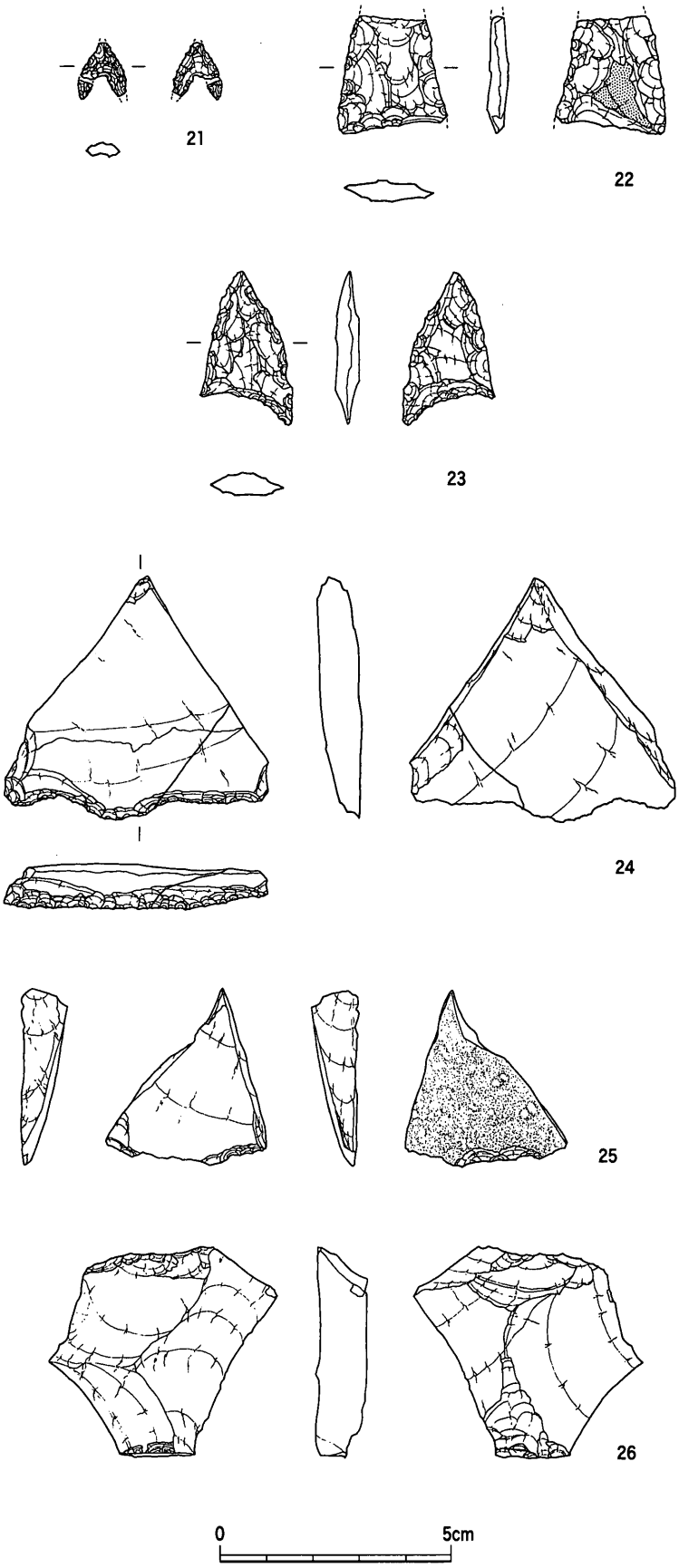
出土遺物　弥生土器高杯（**1**～**3**）・壺（**4**）・器台（**5**）・甕（**6**～**20**），サヌカイト製石鏃（**21**～**23**）・石錐未製品（**24**）・スクレイパー（**25**・**27**・**28**）・楔形石器（**26**）がある

弥生土器には，いわゆる胎土１類のもの（**1**～**8**・**10**・**12**・**16**～**18**・**20**）が多い。**1**は，口縁部が両側に拡張し，拡張部上面に３条の凹線文を施す。底部内面には分割磨きがかろうじて観察できる。**2**は，ハの字形に大きく開く高杯脚部であり，脚端部は上下に肥厚し凹線文が施される。また脚部中位に４方向の円孔が空けられており，その直下に３条程度の凹線文と縦方向の沈線（５本１単位）が施されている。**4**は，下方に主に拡張・肥厚する口縁端部と，緩やかに外反する頸部をもつ。頸部外面中位には４条の沈線がみられる。**5**は，幅の狭い長方形透かしを穿孔しており，透かしの直下に３条の沈線が施される。内面には縦方向の削り調整が施される。**6**～**8**・**10**は上下への拡張が明瞭な口縁端部に凹線文がみられる。内傾して屈曲が明瞭な頸部（**8**・**10**）と屈曲が不明瞭な頸部（**6**・**7**）がある。**8**は体部最大径の部位に右上がりの刺突文が施される。また体部外面下半は縦方向のヘラ磨き調整がみられる。いずれも頸部より下は，ヘラ削りによって薄い器壁となっている。**9**・**11**は，上方に拡張して丸く太く収まる口縁部外面に凹線文がみられる。胎土１類の甕（**6**～**8**）よりも厚い器壁をもつ。**12**は上方に僅かに拡張する口縁部をもつ。**14**・**15**は口径と体部最大径がほぼ等しい小型の甕である。いずれも非胎土１類であり，口縁端部は拡張しない。**17**は肩部上位に瘤状の突起を有する。

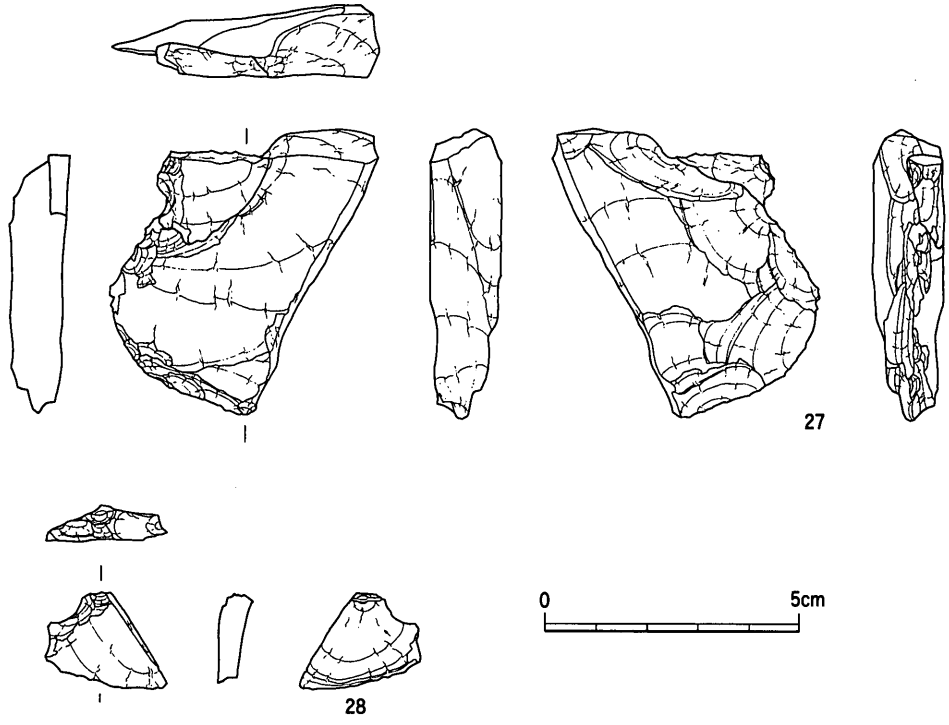
21は小型の長脚鏃であり，調整剥離も極めて細かく丁寧である。縄文時代早期頃の石鏃が混入したのであろう。**22**は先端部と基部の一部が欠損している。また素材面には摩滅の痕跡がみられるが，器面の皺の凸部のみが摩滅しており，また全体にロウを塗ったような平滑面がみられることから，打製石包丁の摩滅痕に近似する。したがって，打製石包丁を素材としている可能性があろう。**23**は左右非対称の形態であり，先端部の調整加工がほとんどみられないことから，石鏃の未製品と考えられる。**24**・**25**・**27**とも側縁部が裁断面で構成される剥片を加工している。**24**は下縁の一端を調整して石錐状の先端部を作出する。ポジ面の右端は折損しているが，これは，右端先端を加撃した際に折れたものと考えられる。**25**は鋭利な下縁を両側から調整する。片面に自然面を残す。**27**は裁断面のある剥片の片側側縁を加工してスクレイパー状にしている。側縁加工の際に生じた砕片が**28**である。

ＳＢf01（第21図）

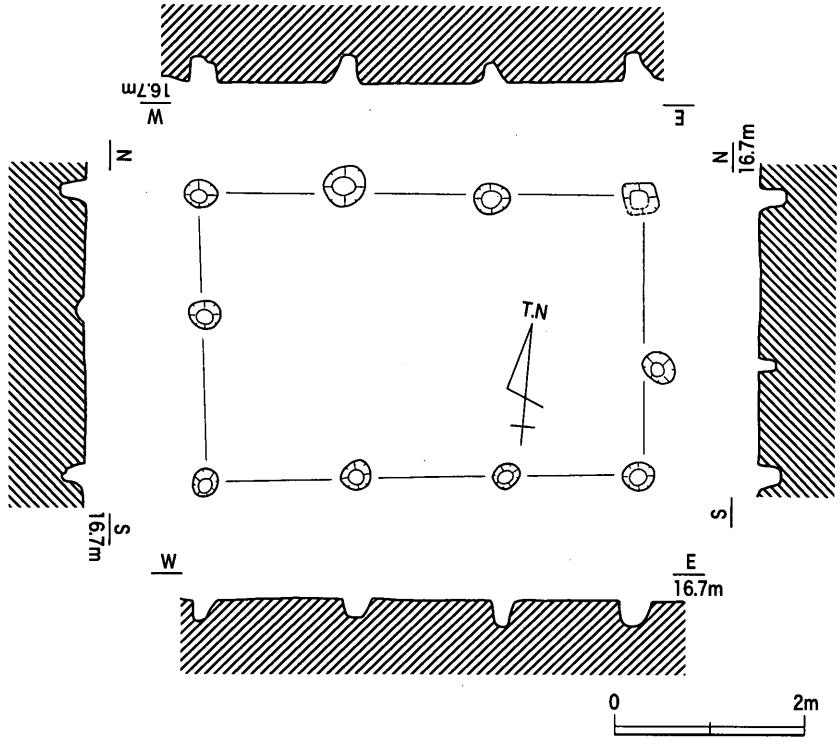
Ⅱ－18区北西部，ＳＨf01南東側に隣接して検出された掘立柱建物である。２×３間（梁間2.92～3.04ｍ，桁行4.62ｍ，床面積13.81㎡）を測り，主軸方向はＷ－５°－Ｓである。柱筋は直線的に通っている。梁間の中間柱の位置は，東側梁間と西側梁間とでは大きくずれており，棟持ち柱ではないと考えられる。柱穴の平面形態は円形であるが，北東隅の柱穴のみ方形を呈する。底面のレベルは桁方向の柱穴は



第19図　SHf01出土遺物（3）（2/3）



第20図　SHf01出土遺物（4）（2/3）



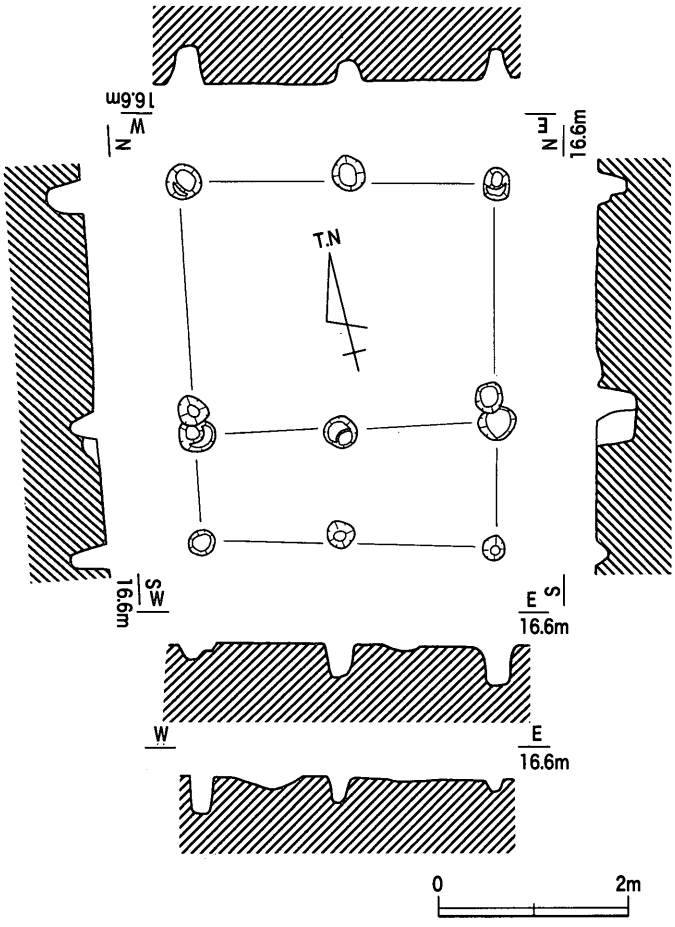
第21図　SBf01平・断面図（1/80）

揃っているが，梁間の中間柱穴はやや浅い。埋土は暗茶褐色シルトである。

遺物は出土していないが，柱穴埋土の特徴から弥生時代と考えられる。

ＳＢf02（第22図）

Ⅱ－18区西半部中央で検出された掘立柱建物である。ＳＨf01・ＳＢf01の南東約10ｍの地点に位



第22図　SBf02平・断面図（1/80）

置しており，ＳＤf06埋土を掘り込む。南側に１間分庇状に延びるが，建物全体としては庇にみえる部分の柱筋を南辺とみた方がプランの歪みが少ない。庇付き建物とみるか，中間柱の位置が一方に偏しているとみるか，判断が難しいが，庇付きとみた場合の規模は，１×２間（梁間2.4～2.6ｍ，桁行3.1～3.3ｍ，床面積8.01㎡）となる。主軸方位はＮ－３°－Ｅである。柱穴の平面形態は円形である。埋土は暗茶褐色シルトであり，他の弥生時代の遺構埋土に近似する。

遺物は弥生土器細片が出土しており，埋土の特徴とも併せ考え弥生時代としておく。

ＳＢf03（第23図）

Ⅱ－18区中央部で検出された掘立柱建物である。ＳＤf06・07に挟まれ，ＳＢf02の東側約４ｍの地点にある。規模は１×２間（梁間2.5ｍ，桁行3.7ｍ，床面積9.25㎡）を測り，主軸方位はＷ－14.5°－Ｓである。柱穴は円形プランを呈しており，径0.4～0.65ｍ，深さ0.2～0.3ｍを測る。掘り方内には暗黒灰色シルトの柱痕が明瞭にみられ，柱痕周囲には拳大の砂岩礫が詰まっていた。特にＰ－１では，４個の礫平坦面が内側に向けられた状態で柱痕を囲んでおり，根石として機能していたことが明確である。Ｐ－３では，柱痕が遺存していたにもかかわらず，掘り方内に礫は認められなかった。柱痕の直径は，0.1ｍ前後である。またＰ－１と一部重複するＰ－２の掘り方内は，暗黒褐色シルトブロックと暗灰色シルトが互層に堆積しており，Ｐ－１掘削にあたって人為的に埋められた可能性がある。

遺物は弥生土器細片が出土していることと，埋土の特徴から弥生時代としておく。

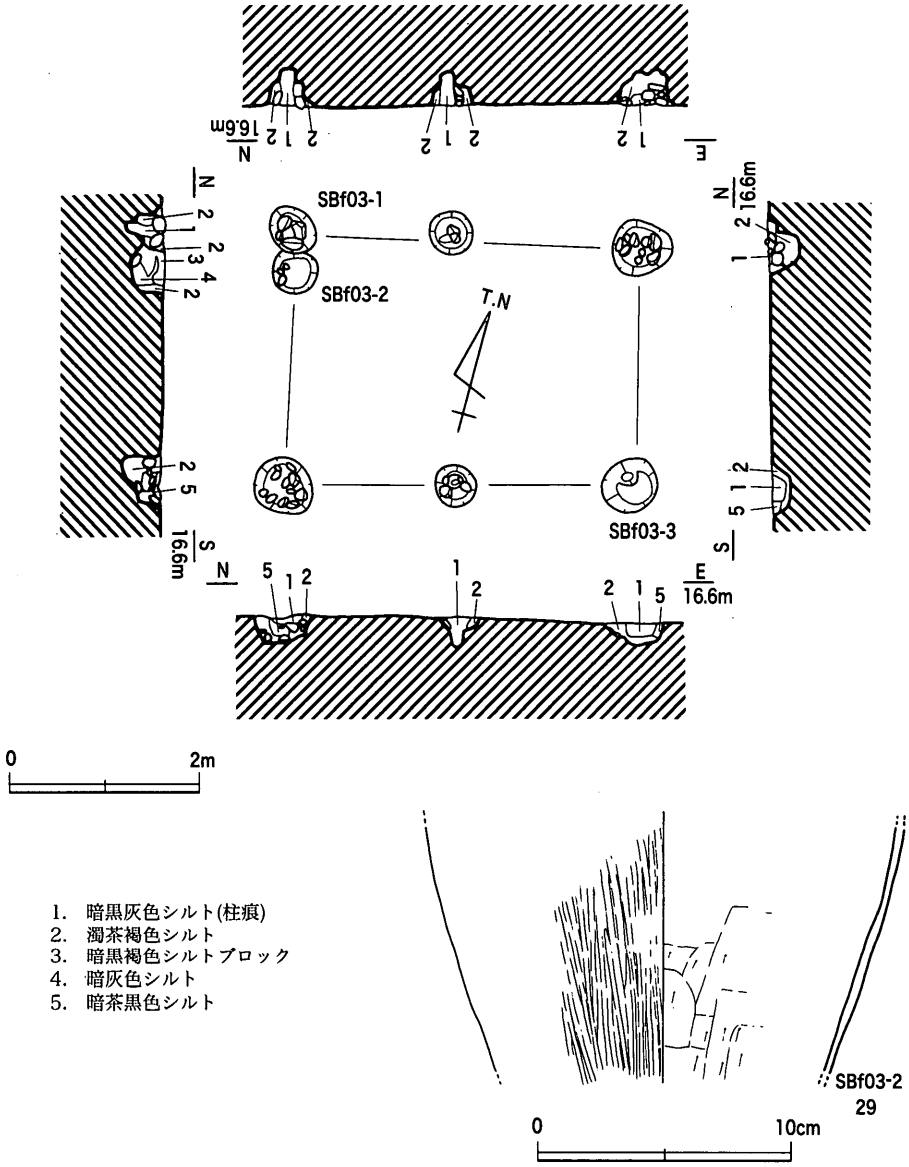
ＳＢf04（第24図）

Ⅱ－18区中央部南端で検出された掘立柱建物である。ＳＢf03の南東側約８ｍの地点にある。規模は１×２間（梁間3.2～3.4ｍ，桁行4.05～4.15ｍ，床面積14.09㎡）を測り，主軸方位はＷ－0.5°－Ｎである。柱穴は円形ないし楕円形プランであり，径0.25～0.4ｍ，深さ0.1～0.16ｍを測る。掘り方内には径0.15ｍ前後の柱痕がみられたが，ＳＢf03のような根石は検出されなかった。

遺物は出土していないが，埋土の状況から弥生時代と考えておく。

Ⅱ－18区ピット群（付図1）

上記したような掘立柱建物以外にも，暗茶褐色シルトないし濁灰褐色シルトを埋土とするピットが



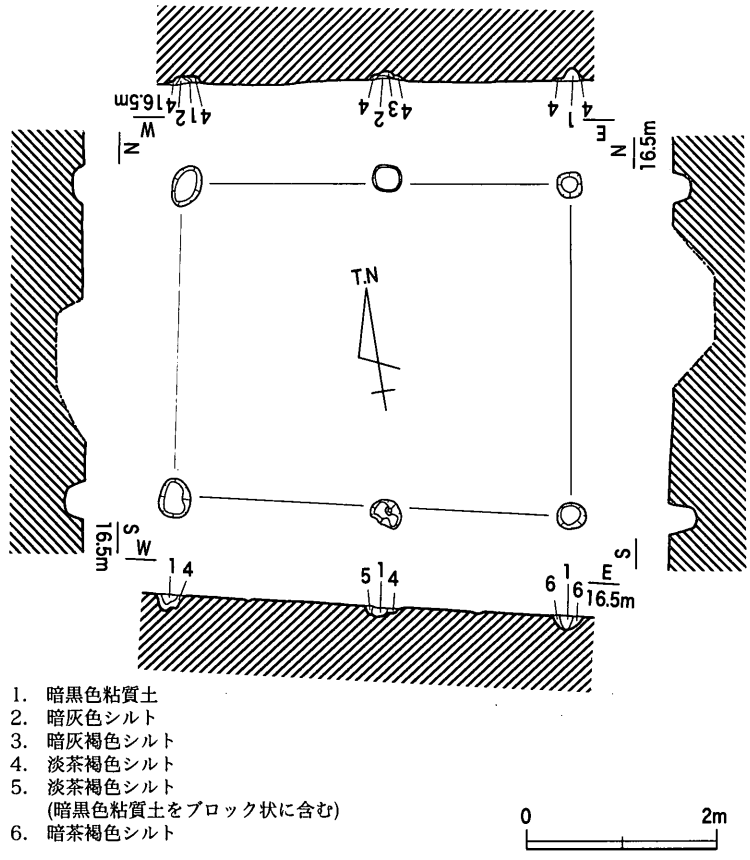
第23図　SBf03平・断面図(1/80)，出土遺物(1/3)

Ⅱ－18区北西部で51個検出された。これらはＳＨf01・ＳＢf01の南側でＳＤf06までの東西15ｍ，南北13ｍの範囲に主に分布しており，建物遺構を構成する可能性が高いが，具体的な復元にまで至らなかった。

3．土坑

ＳＫf01（第25～42図）

形態・規模　Ⅱ－18区北西部で検出された土坑である。ＳＨf01の南東約4.5ｍ，ＳＢf01の南0.5ｍの地点にある。検出当初は長径1.0ｍ，短径0.8ｍの楕円形プランの土坑状を呈していたが，埋土を除去すると当初のプランは極めて緩く浅い落ち込みであり，その中央部で長径0.51ｍ，短径0.36ｍ，深さ0.2ｍの明瞭に落ちる楕円形プランを確認することができた。検出時のプランは，土坑の埋没過程で基盤層が流出した範囲を示しており，土坑本来の形態を示すものではないと考える。埋土は，暗茶褐色砂質土である。



第24図　SBf04平・断面図（1/80）

遺物出土状況　土坑内から62点以上のサヌカイト製石器が出土した。土器は出土していない。出土状況は，土坑の南東部から東半部にかけて集中しており，大型の剥片・スクレイパーは南東隅に多く認められた。小型の剥片は東半部に多く認められた。**40・45・46**は掘り込み壁面に沿って斜めの状態で遺存していたが，全体的にみて丁寧に置かれたような状況ではなく，南東側から投棄されたような状況を示していた。

出土石器の中には接合資料が８点含まれているため，接合資料別の出土状況をみてみる。ただし石器は全て出土状態で実測したが，調査中に大雨で水没したため，取り上げ番号を付すことができなかったものや，番号に若干の混乱が生じてしまったものがある。このため全ての資料の出土状態の検討にまでは至らないが，大まかな傾向については把握可能である。接合資料１は，土坑南東部に最も大型の**30**があり，その北側0.1m付近に小型の**32・33・34・35・39**が0.1m四方の範囲で散布する。接合資料２は，土坑南東肩部に大型の剥片**40・45・46**が集中しており，その北側0.15m付近に小型の**43・44・49**が0.15m四方の範囲に散布する。大型剥片と小型剥片の散布範囲は，接合資料１とほぼ同じであり，接合資料２の**49**が接合資料１の**33**の直上にあった。接合資料３は，土坑東半部の0.1m四方の範囲に散布する。接合資料５～７は特定の箇所に集中せず散在的な分布状況である。いずれも接合資料１の下側にある。

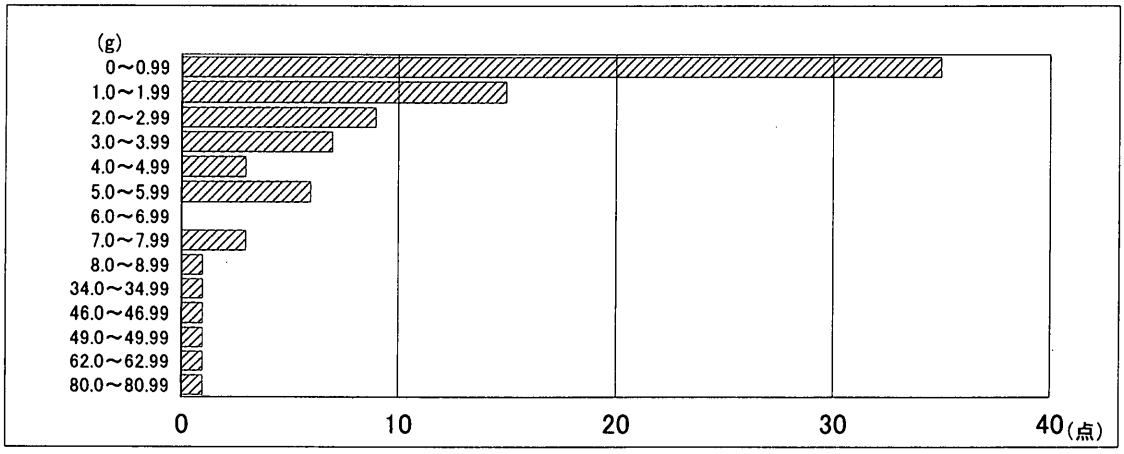
以上の出土状態を上下関係で示すと，以下のようになる（■<▲は，接合資料■の剥片が接合資料▲の剥片の下側にあることを示す）。

接合資料６<接合資料７<接合資料１<接合資料２<接合資料３

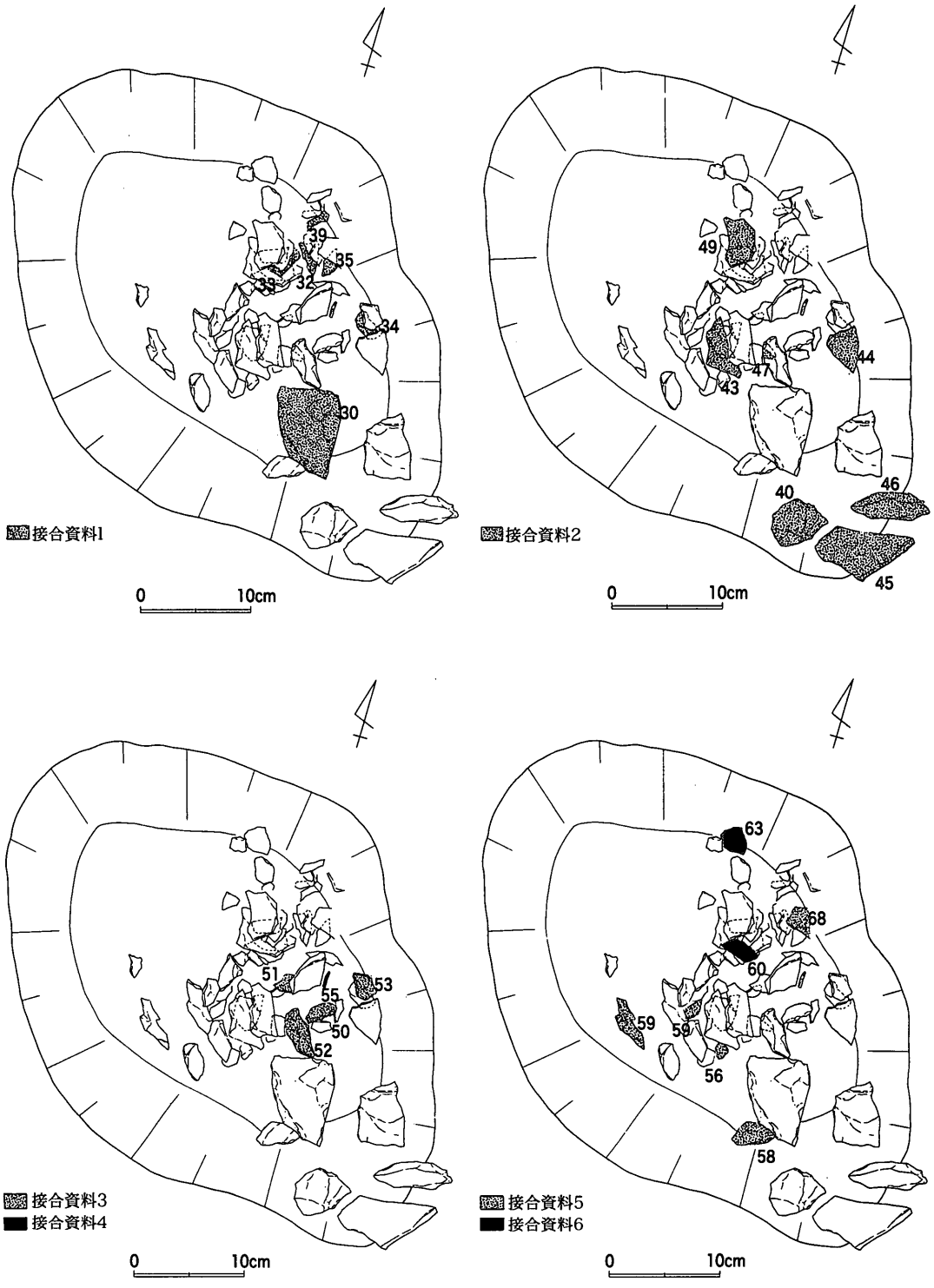
∨

接合資料５

第25図　SKf01平面図(1/4)



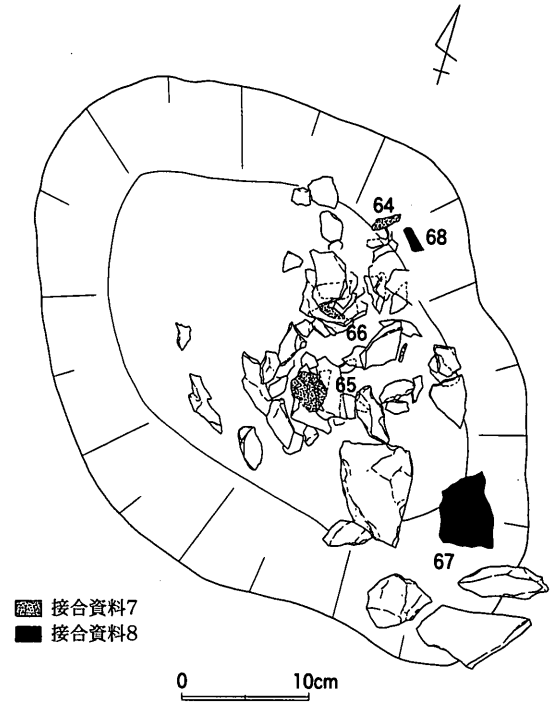
第５表　ＳＫｆ01出土石器重量別数量



第26図　SKf01遺物出土位置(1)(1/6)

全体としての出土状況は投棄された状態であったため，基本的にはこの上下関係が廃棄された順序を示す可能性がある。ただし個別にみていくと，接合資料１・２は大型剥片と小型剥片の散布状況が似ており，両者は同時に廃棄されたとみる方が妥当であろう。また，小型の剥片で構成される接合資料５～７も接合資料１・２の小型剥片の散布範囲に重複している。つまり，重量のある大型剥片と比較的軽い小型剥片の分布範囲が，接合資料別でみても概ね共通していることになり，これらについてもむしろ同時廃棄の可能性が高いと考えている。

出土遺物　８点の接合資料を中心に図示した。接合資料１は，スクレイパー（**30**）・剥片（**31～36**）・砕片（**37～39**）から構成される。接合資料２は，剥片（**40・42～49**）・砕片（**41**）からなる。



第27図　SKf01遺物出土位置（2）（1/6）

接合資料１

〈概要〉

接合資料１は，接合した状態で計測して，現存長11.8㎝，幅6.6㎝，厚さ1.6㎝，重量92ｇをはかる。形状は短冊形で，短辺の一側面に白い風化した自然面をとどめ，主として長辺の二側縁に剥片剥離作業の過程を留める接合資料である。剥片剥離の概要としては，素材面の形成段階，遺存する剥片から想定される遺跡内における剥片剥離の段階，石核分割後の若干の剥片剥離の段階にわかれる。ここで素材の形成過程をⅠ工程，遺跡内で行われた剥片剥離工程をⅡ工程，石核分割後の作業をⅢ工程とする。

以下剥片剥離の流れを詳述するにあたって，第29図に示したように資料の表裏をα・β面と区分し各辺をＡ～Ｄに区分することとする。

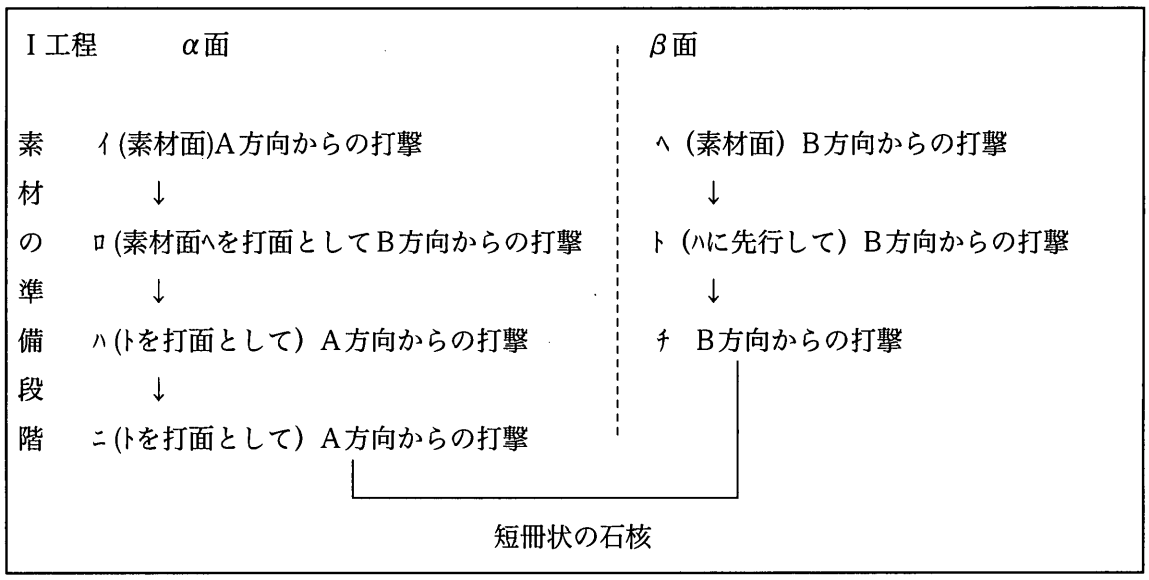
〈素材面の形成（Ⅰ工程）〉

自然面に接する表裏の剥離面（ｲ・ﾍ）は，石理に沿った平坦で大きな剥離面で，ネガ・ポジの判別が困難である。したがって，素材の元の形状は，石理に沿ってはがされた厚さ1.6㎝の板状の剥片であったと推定される。

素材面と考えたｲ・ﾍ面を切る，やや大形の複数の剥離面がある。その形成順序を下図に示す。

ﾛ～ﾆ，ﾄ・ﾁ面はその大きさから約５～７㎝以上の剥片を剥出したネガ面であることがわかる。これらは概ね，ＡないしＢ方向から打撃が加わっており，また剥離面の末端はフェザーで終わるものが多い。これらのことから先の板状の剥片を素材として，表裏交互に５～７㎝大の横長剥片を剥離しているものと考えられる。

なお，当遺跡内で出土した全ての剥片の中で，５㎝を超える大きさの剥片は皆無である。また遺跡内



第28図　接合資料1の剥片剥離過程（Ⅰ工程）

で出土する剥片の末端は，フェザーで終わるものはほとんどみられずヒンジかステップで終わるものが大半を占める。このことからロ～ニ，ト・チは当遺跡外で行われた剥片剥離の工程を示す可能性が高い。なお，遺跡外では先述したように打面と作業面とを交互に入れ替えながら剥片剥離を進める方法である。

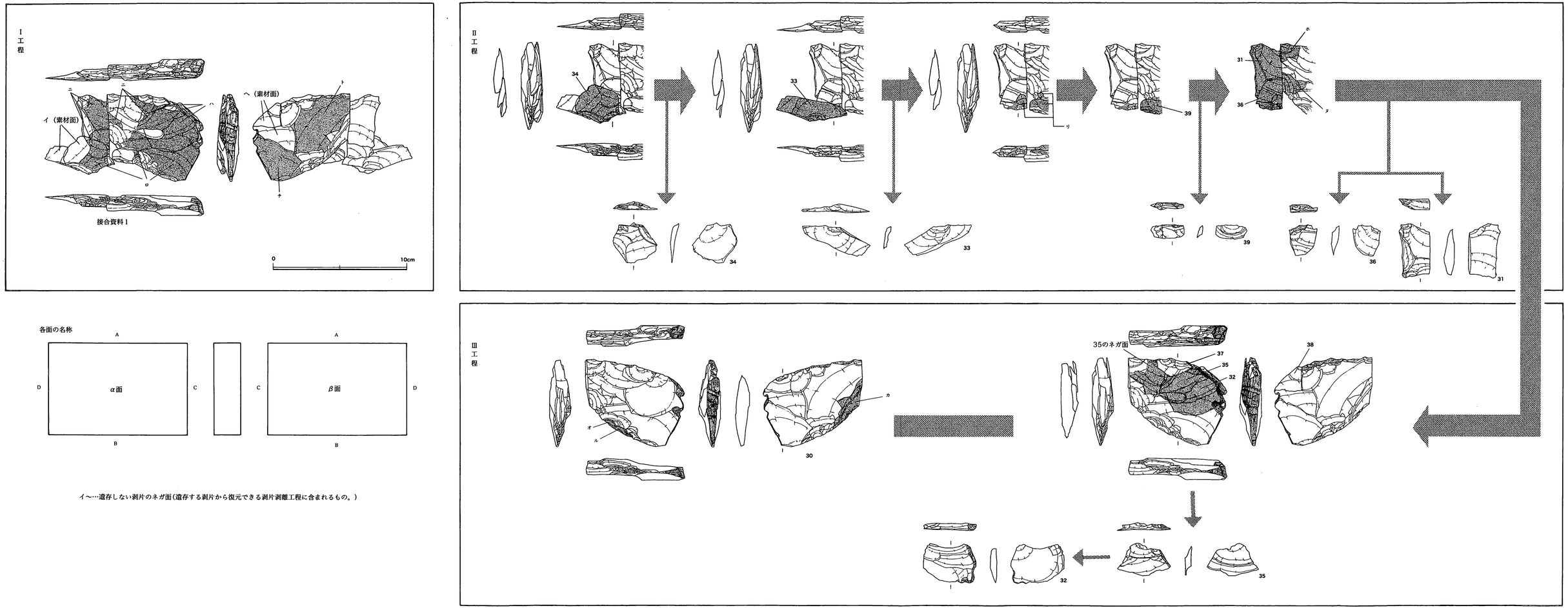
〈剥片剥離の流れ（Ⅱ工程)〉

本工程は遺跡内の工程のうち，石核が分割される以前の剥片剥離工程である。石核の分割は裁断面とそれに接する剥片及び剥離面の観察により工程上の位置が決定される。

石核の分割に関与する剥片，剥離面は剥片**36**・**31**，剥離面ヌ・ホである。このうち剥離面ヌは，剥片**31**+**36**の背面にある素材の面ニとは裁断面を介して段違いとなる。またヌ面は剥片**36**のネガ面と一部，面を共有する部分がある。ホ面は，A方向から垂直に打撃された打点をとどめ，裁断面を介して石核**30**，剥片**31**の両方にまったがってネガ面がみられる。また，裁断面部分には，わずかではあるが面がくい違う箇所がありホ面の形成と裁断面の形成が同時に行われたことを示している。剥片**31**に接合する剥片**36**は明確なバルブをもたず末端部で剥片**31**と接合するが，**31**との隙間には，さらに一枚の剥片が想定される。剥片**31**のポジ面（β面）は，A・B両方向から打撃が観察される。したがって，これも同時割れの様相を呈している。以上のことから，石核**30**の裁断面，剥離面ヌ・ホ，剥片**36**，剥片**36**と**31**の隙間にあった剥片，剥片**31**のネガ面部分の剥片は，同時の両極打撃により形成されたものと推定される。

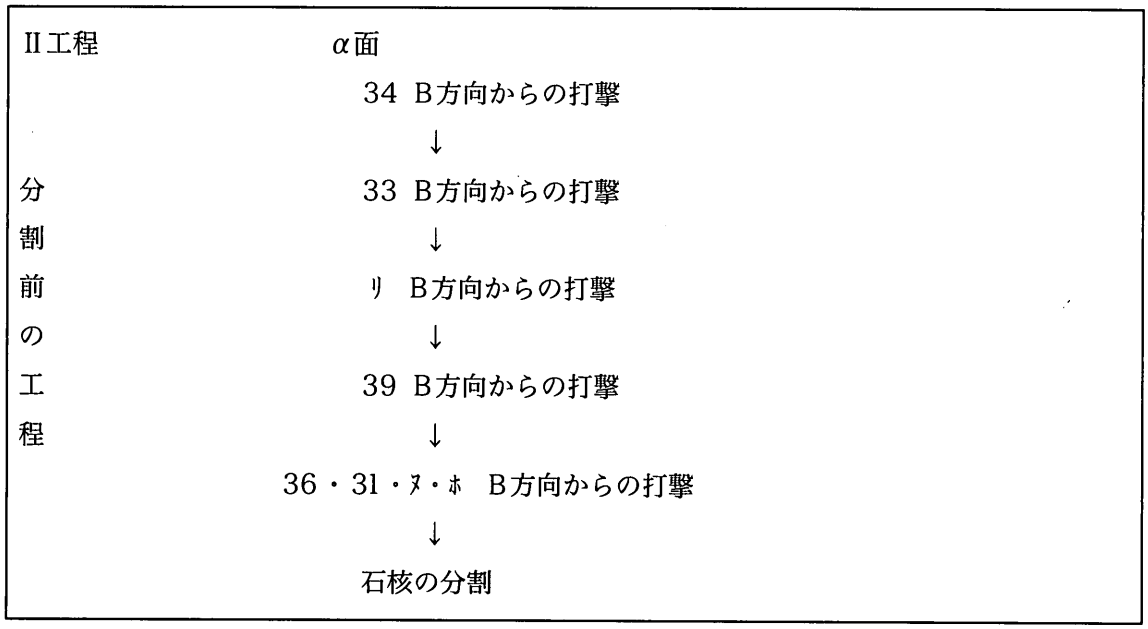
以上の各面に先行する剥片・剥離面は，石核**30**の裁断面から想定される，石核分割前と考えられる。剥片**33**・**34**・**39**，剥離面リは，B方向からの打撃により剥出されており，打点の位置や，剥離面の相対的な位置関係からみて，石核の分割前と考えられる。相互の切り合いから、第30図の順序が想定される。

Ⅱ工程の剥片剥離は打面が点・線状で末端がステップとなるものが多く，先述のようにAまたはB方向からの垂直打撃によって剥離された剥片である。A・B方向の一ヶ所に集中して施されるのでなく左側に打点をずらしながら剥片剥離が推移することから，垂直打撃により素材の薄身化をはかった工程と推測できる。



イ～…遺存しない剥片のネガ面（遺存する剥片から復元できる剥片剥離工程に含まれるもの。）

第29図　接合資料1剥片剥離工程図（1/2）



第30図　接合資料の剥片剥離過程（Ⅱ工程）

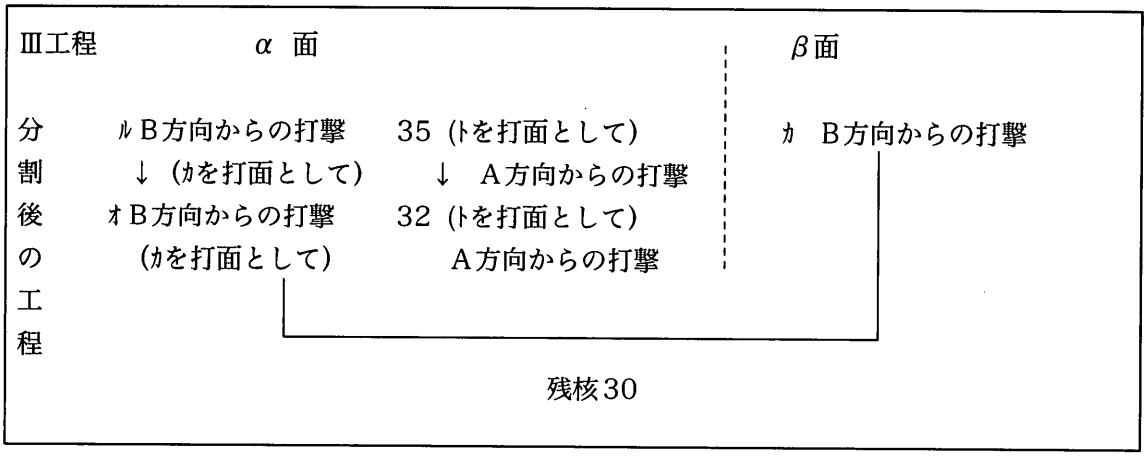
〈石核の分割後の工程（Ⅲ工程）〉

Ⅲ工程は，石核の分割後の剥片剥離工程である。

剥片**35**を剥出した後の剥離面（石核**30**＋剥片**32**）のリングは，剥離面ホの面の稜線を切る形でまわりこんでいるため，剥片**35**は，Ⅱ工程の石核分割時に形成されたホ面に後出することがわかる。

裁断面との切り合いから剥離面カは，分割後に剥出されたと考えられ，剥離面カのα面側の細かい剥離面ル・オは，ネガティブなバルブが確認できることより，カ面の剥出後に施されたと考えられる。なお，α面において，剥離面ル・オと前述の剥片**35**・**32**は，互いに切り合う箇所がなく，前後関係は不明である。

以上のⅢ工程の剥片剥離作業のうち，α面側の細かい剥離面ル・オについては，スクレイパーの刃部加工に類似する。分割後の石核を二次加工し，刃器として成形をおこなっている可能性がある。ただし，刃部の使用痕は認められない。



第31図　接合資料1の剥片剥離過程（Ⅲ工程）

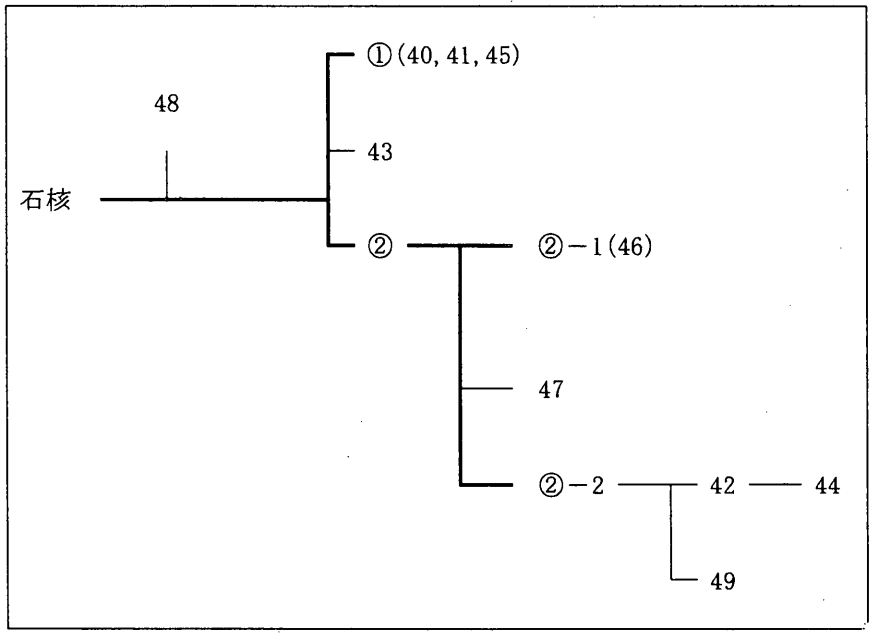
接合資料2

接合資料2は，接合した状態で現存長7.1cm，幅13.85cm，厚3.0cm，重量201.98gをはかる。隣り合う二側縁に白い風化した自然面をとどめる。形状は，自然面を残す短辺側が厚く，向かい合うもう一方の短辺にいくほど薄くなっている。主として自然面を残す短辺の側縁側に剥片剥離作業の過程を留める接合資料である。表裏面は石理に沿い平坦でリングのまわりがゆるい，ネガ・ポジの判別が困難な面に大きく占められている。この面の元の大きさは，現存長，幅を超える大きさの面であったと推測され，素材の面であったと考えられる。なお、接合資料1で既に述べたとおり，当遺跡内で出土した剥片の中で，5cmを超える大きさの剥片は皆無である。このことより，遺跡外にて石理に沿って厚さ3cmの板状の剥片にされたと推定される。また，剥片**47**，**49**，**44**，**42**の存在から，自然面を残す長辺と反対側に伸びるこれらの剥片を剥出した現存しない石核の存在があったと推定できる。

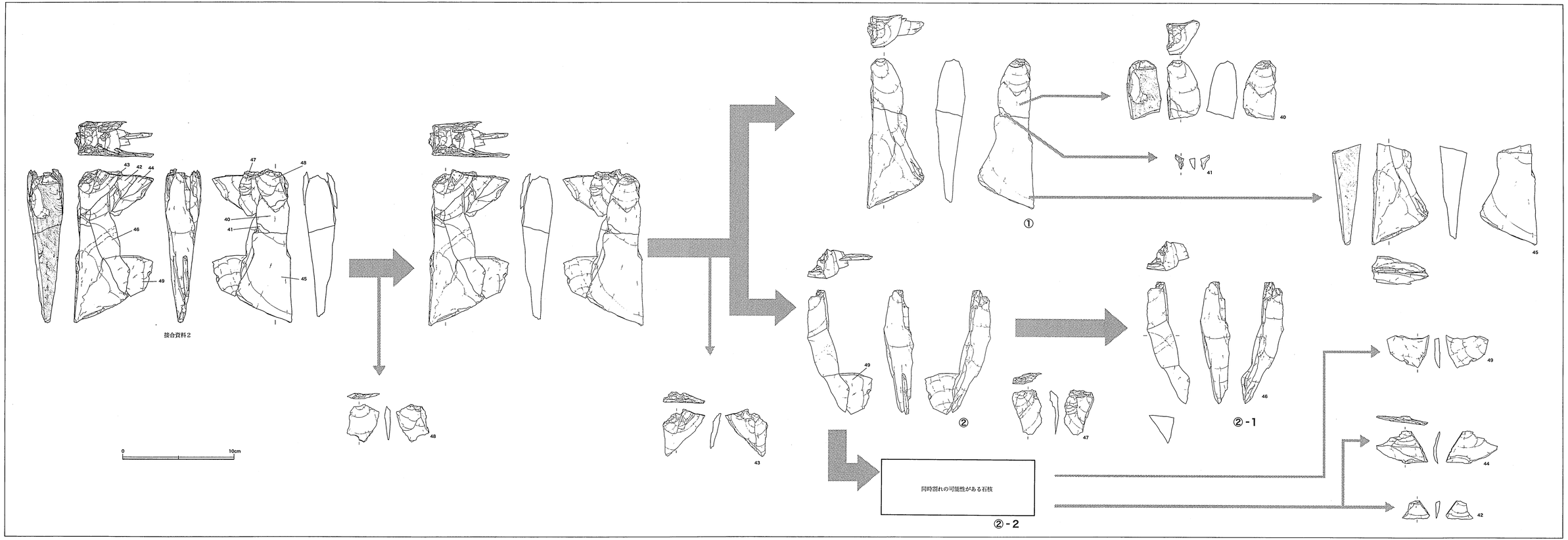
本来の素材の石核が大きく分割した状態を①・②とし，さらに②が割れた状態のものを②－1，②－2として，遺跡内で行われた剥片剥離作業を第32図に示す。

剥片**43**のポジ面側にある稜線と，背面部分を構成している①・②の割れた位置は一致すること，剥片**43**のポジ部分のリングと①・②が接合している面のリングはそれぞれの面で終束していること，この三面のフィッシャーの終束方向が同一であることなどから，同時の割れであると推定できる。その同時割れに先行して，剥片**48**が剥出されたと考えられる。剥片**47**は剥出の際のポジティブなバルブがあり，②－1（**46**）は，バルブが観察されないこと，二つの剥片の間に隙間があるが，リングがそれぞれ終束し，フィッシャーが同じ地点に向かって終束することから打点の位置が同じと考えられる。この打撃により，②は，剥片**47**，②－1（**46**），②－2（前述の隙間の部分）と同時に割れたと考えられる。②－2はこの時点ではまだ，剥片**49**，**44**，**42**を含んだ石核である。その後，位置関係からみて，剥片**42**が剥出，次に剥片**44**が剥出されたと考えられる。剥片**49**に関しては，バルブがなくまた表裏面からはポジ・ネガ面の判別が困難であることより現存しない石核部分との，同時割れの可能性がある。

以上の剥片剥離工程は，主として垂直打撃による同時割れによって行われ，小形の剥片及び大形の剥片を剥出している。小形の剥片はそのほとんどの打点が点・線状で末端がヒンジでおわること，一方向



第32図　接合資料2の剥片剥離過程



第33図　接合資料２　剥片剥離工程図（1/2）

から上下，左に打点の位置を変え剥出されていること，また石核の厚さのほぼ中心を打撃していることから石核の薄身化をはかったと推定できる。その際剥出された良好な小形の剥片を，小形刃器として制作するのが，本来の目的であったと推測される。

接合資料3

接合資料3は，幅4.4㎝，長さ5.95㎝，厚さ1.0㎝，重量11.51ｇを測る。主として一側縁（第38図で図示した上側）に連続的な小剥離をとどめる接合資料である。剥片剥離は，**50→51→52→53**の順になされている。**52**と**53**の接合部が裁断面となっている他は，一応，ネガ面とポジ面が明確な剥離面で接合する。接合資料の状態で一側縁に集中する小剥離は，大半が打点を明瞭にとどめておらず，**50**では剥片剥離に先行する小剥離のみが認められる。つまり，小剥離は剥片の細部調整として行われているのではないことになる。**52**の小剥離は，断面位置でみると加撃方向に対して急角度をなし，階段状の剥離面の連続となっている。また小剥離部のエッジは潰れている。明らかに細部調整としての打撃方法とは異なっており，楔形石器の潰れた連続的小剥離部に酷似する形態である。したがって，楔形石器的な「両極打撃」による剥片剥離過程が想定され，接合資料1でのⅡ工程の作業内容を示すものと考えられる。なお**52**では，小剥離の集中する側縁の両側縁にも若干の小剥離が認められることから，**50・51**剥取後に別の側縁側方向からの「両極打撃」が行われたとみられる。**52・53**接合部の裁断面は，その作業途上での偶発的な割れと考えられる。この割れ以降は**52**に新たな打撃は加えられず，もう一方の折れた剥片から**53**が剥取される。想定される残核の厚みからみて，さらに2個程度の薄い剥片剥離が行われた可能性があるが，これらについては土坑内には遺存していなかった。

接合資料4

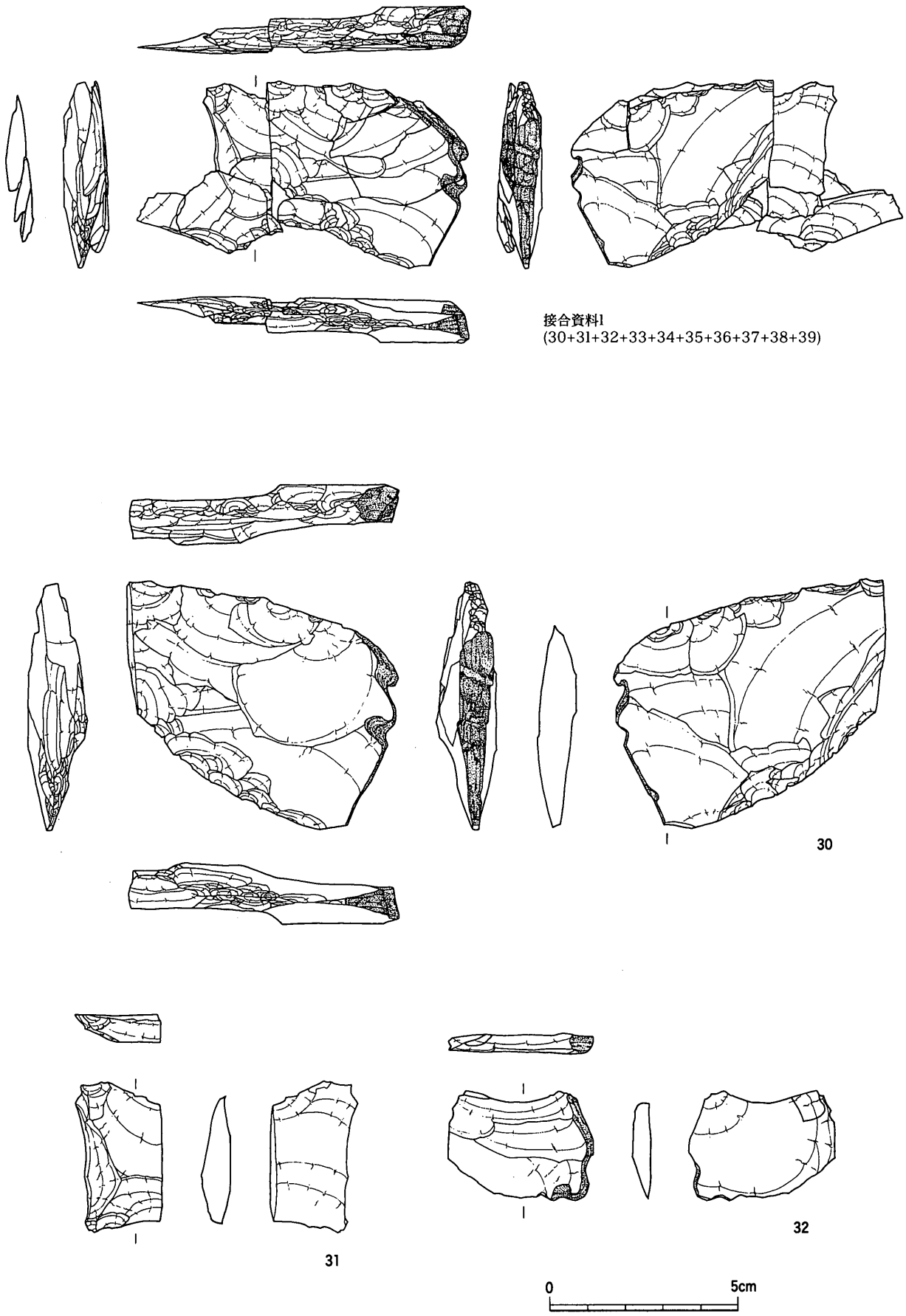
接合資料4は，幅1.8㎝，長さ5.0㎝，厚さ0.3㎝，重量3.22ｇを測る。**54・55**が接合し，接合部は裁断面となっている。図示（第38図）した上側の側縁も裁断面である。ポジ面とみられる面（図示した左側の面）には，**54・55**分割に先行する複数方向の剥離面が認められることから，やはり「両極打撃」による剥片と考えられる。

接合資料5

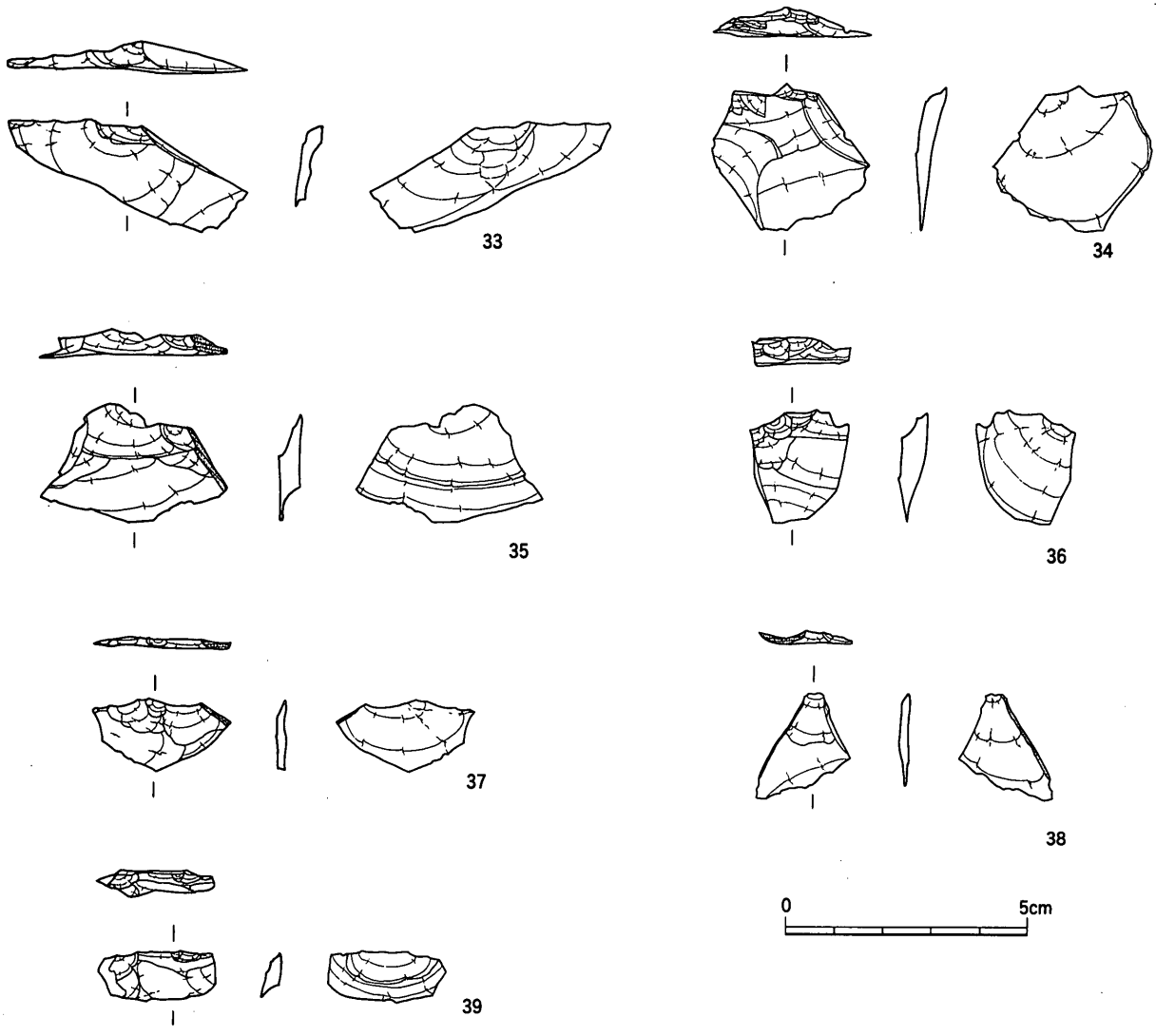
接合史料5は，幅3.3㎝，長さ6.95㎝，厚さ0.7㎝，重量10.57ｇを測る。**56→57→58**の順に剥取されている。接合状態で図示（第39図）した左側面の中央には，**56・57・58**にまたがる広範な剥離面（ポジ面）がみられ，接合資料1でのⅡ工程初期の剥離面もしくはⅡ工程の素材面と考えられる。剥片剥離の手法は，側縁の潰れた小剥離の状況からやはり「両極打撃」と考えられる。以下，接合状態での左側面で説明する。**56・57**の剥取は，右上側の側縁を加撃して行われる。その後に，左上側の側縁を作業面として加撃が行われたことが**58**の小剥離面の状況から読み取れ，最終的に同じ方向からの打撃によって**58**も剥取されている。残った**59**には**58**との接合面に後出する剥離面がなく，また厚さも極めて薄いため，残核として新たな剥離は行われなかったと考えられる。

接合資料6

接合資料6は，幅5.7㎝，長さ3.05㎝，厚さ0.85㎝，重量8.2ｇを測る。接合状態で3つの側縁部に潰れた小剥離面が連続しており，やはり「両極打撃」による剥片剥離が行われたことを示す資料であ



第34図　SKf01出土遺物(1)(2/3，接合資料のみ1/2)



第35図　SKf01出土遺物(2)(2/3)

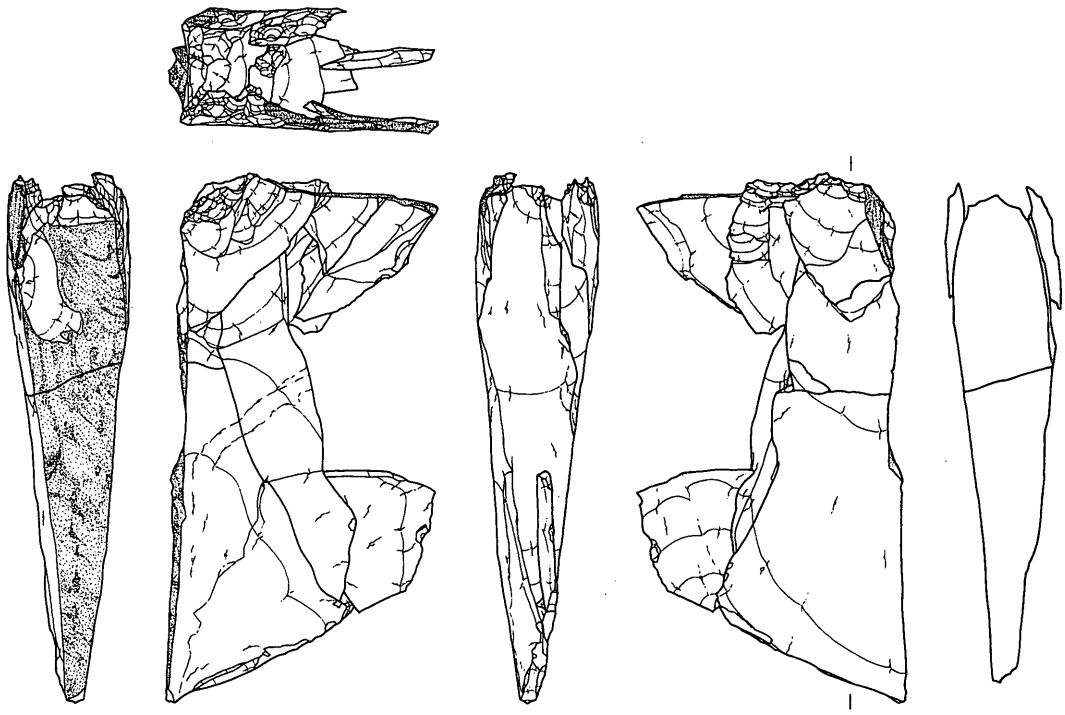
る。また側縁の状況から，素材（接合資料１でのⅡ工程の素材）は長さ4.0㎝以上，幅8.0㎝前後，厚さ1.5㎝前後の長方形の剥片であったことが考えられる。**60**の左側面の最も先行する剥離面は，素材面ないしⅡ工程初期の剥離面とみられる。**60**～**62**の剥取は，接合状態での上下方向からの加撃によるものであるが，それに先行した左右方向からの加撃も行われている。

接合資料７

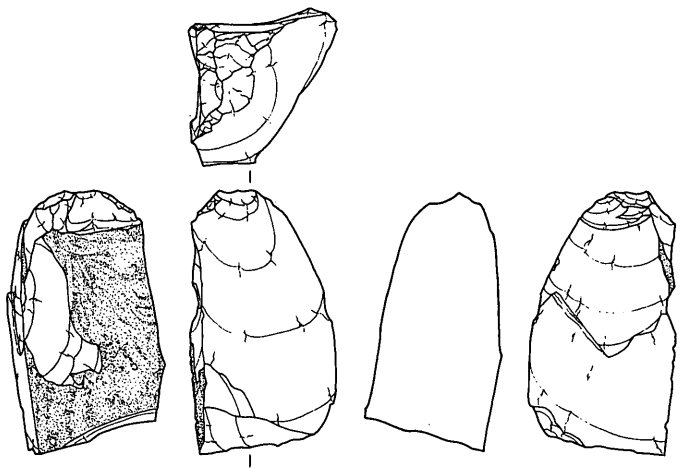
接合資料７は，幅2.5㎝，長さ4.55㎝，厚さ0.7㎝，重量4.28ｇを測る。一側縁に自然面が残り，それを切る潰れた小剥離が連続する。**64**→**65**→**66**の順に剥取されており，Ⅱ工程での「両極打撃」によって生じた剥片であろう。

接合資料８

接合資料８は，幅4.8㎝，長さ4.55㎝，厚さ1.3㎝，重量36.85ｇを測る。一側縁に自然面をとど



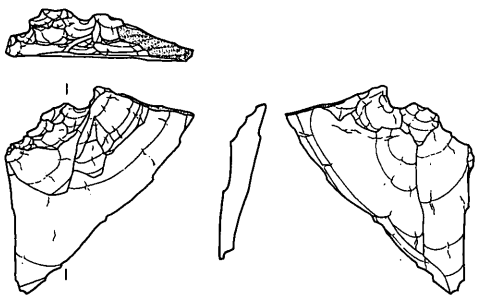
接合資料2(40+41+42+43+44+45+46+47+48+49)



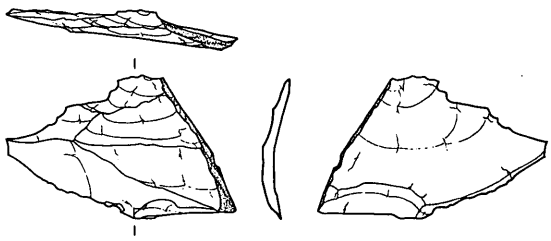
40

41

42



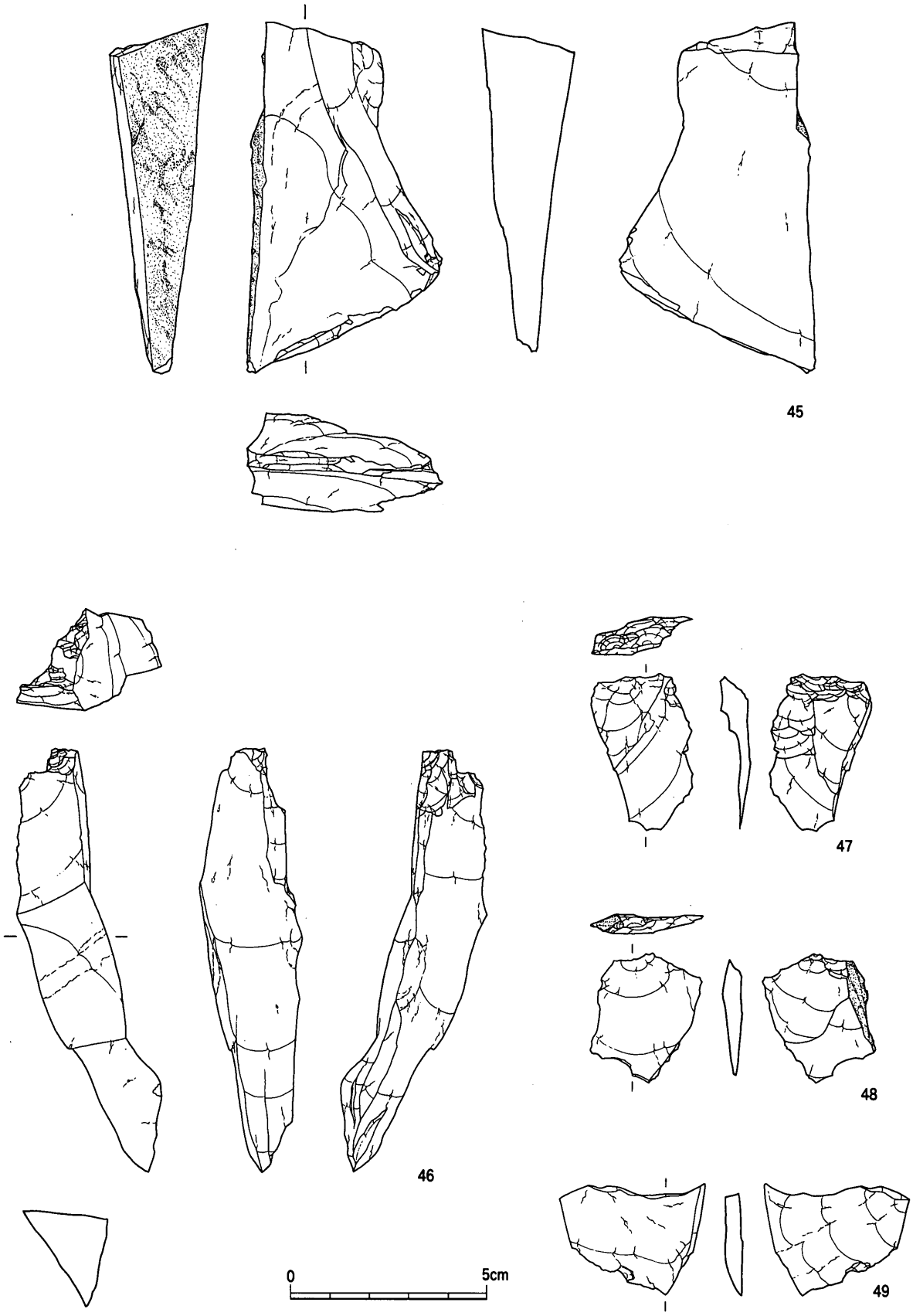
43



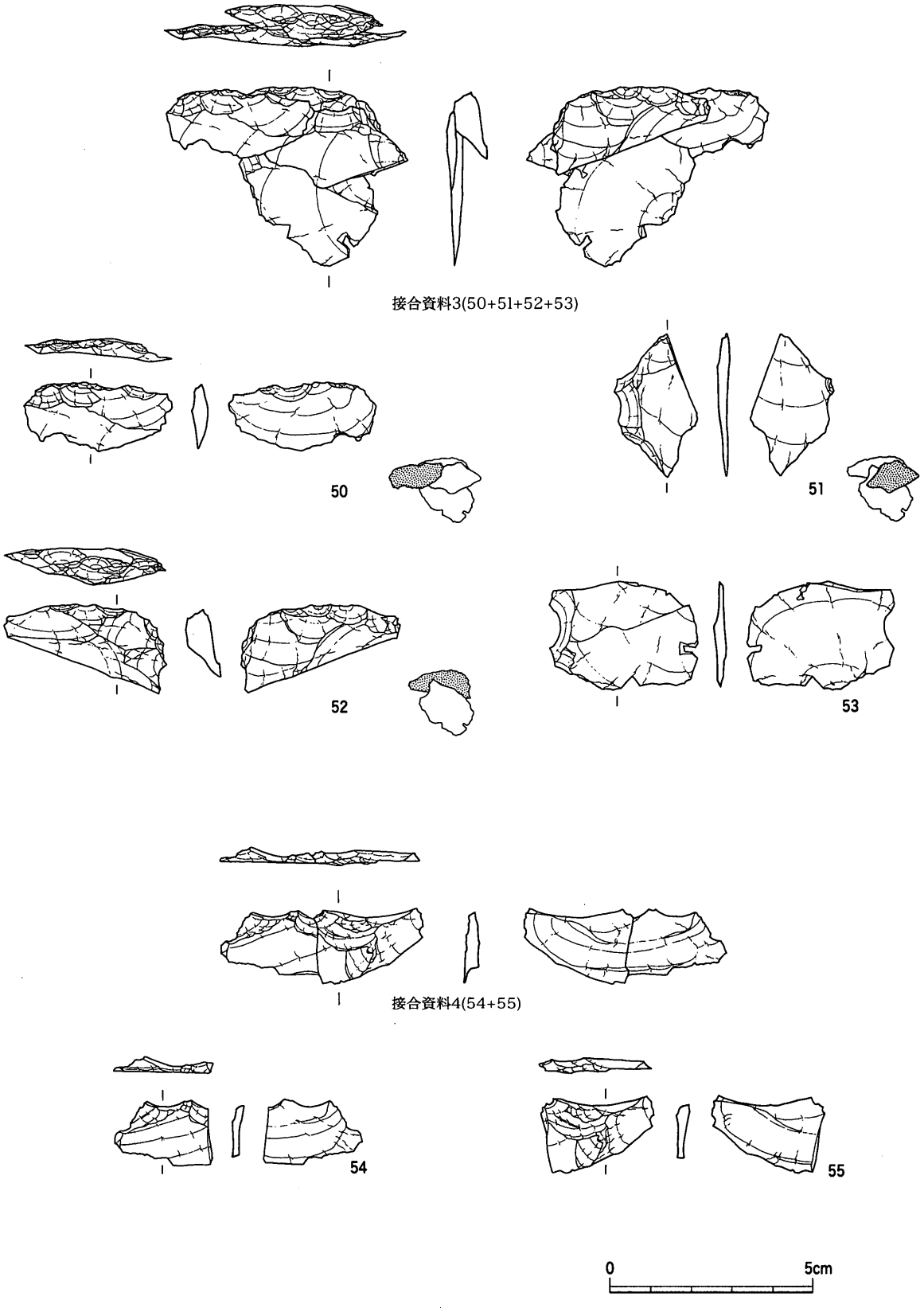
44

0 5cm

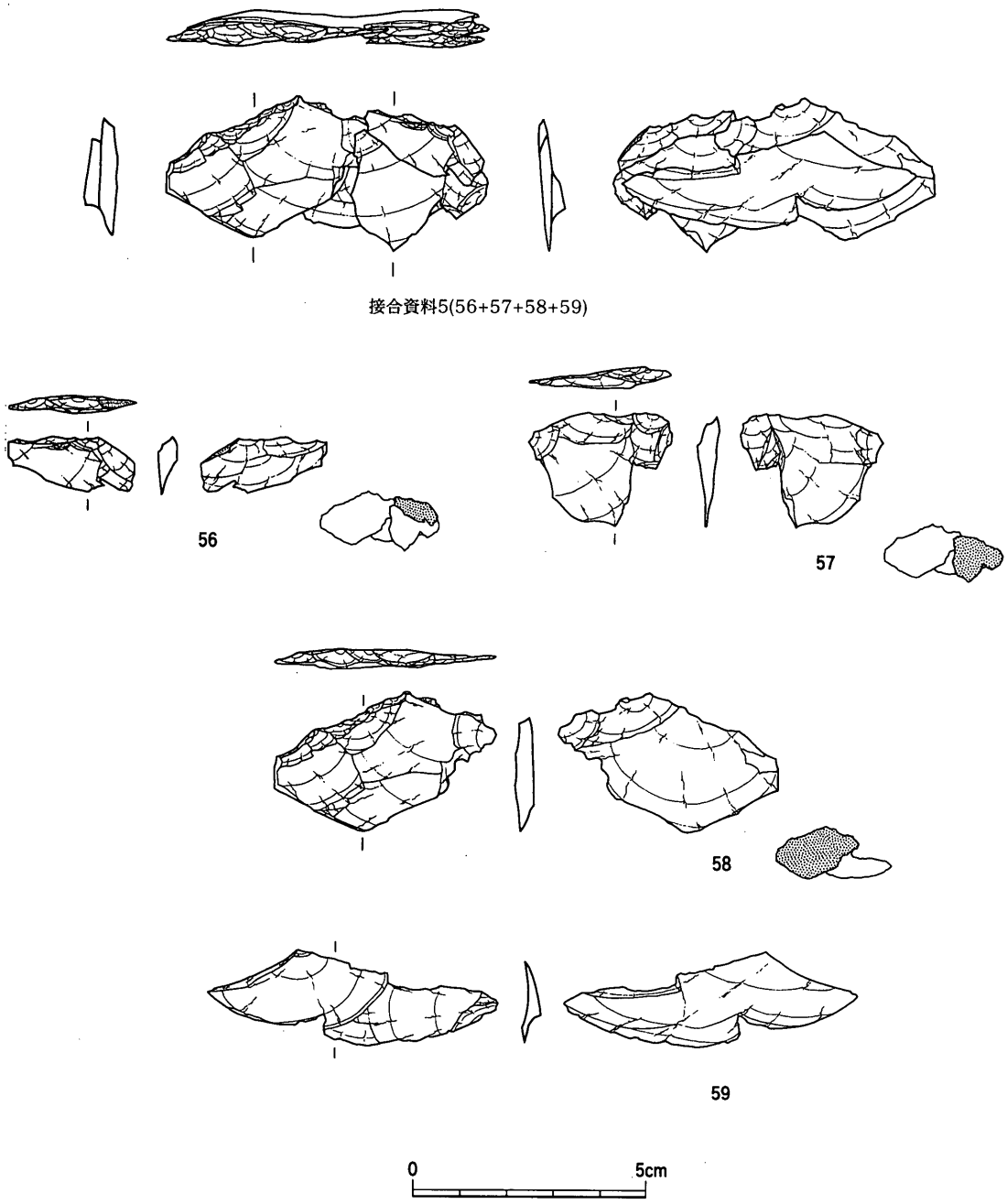
第36図　SKf01出土遺物(3)(2/3，接合資料のみ1/2)



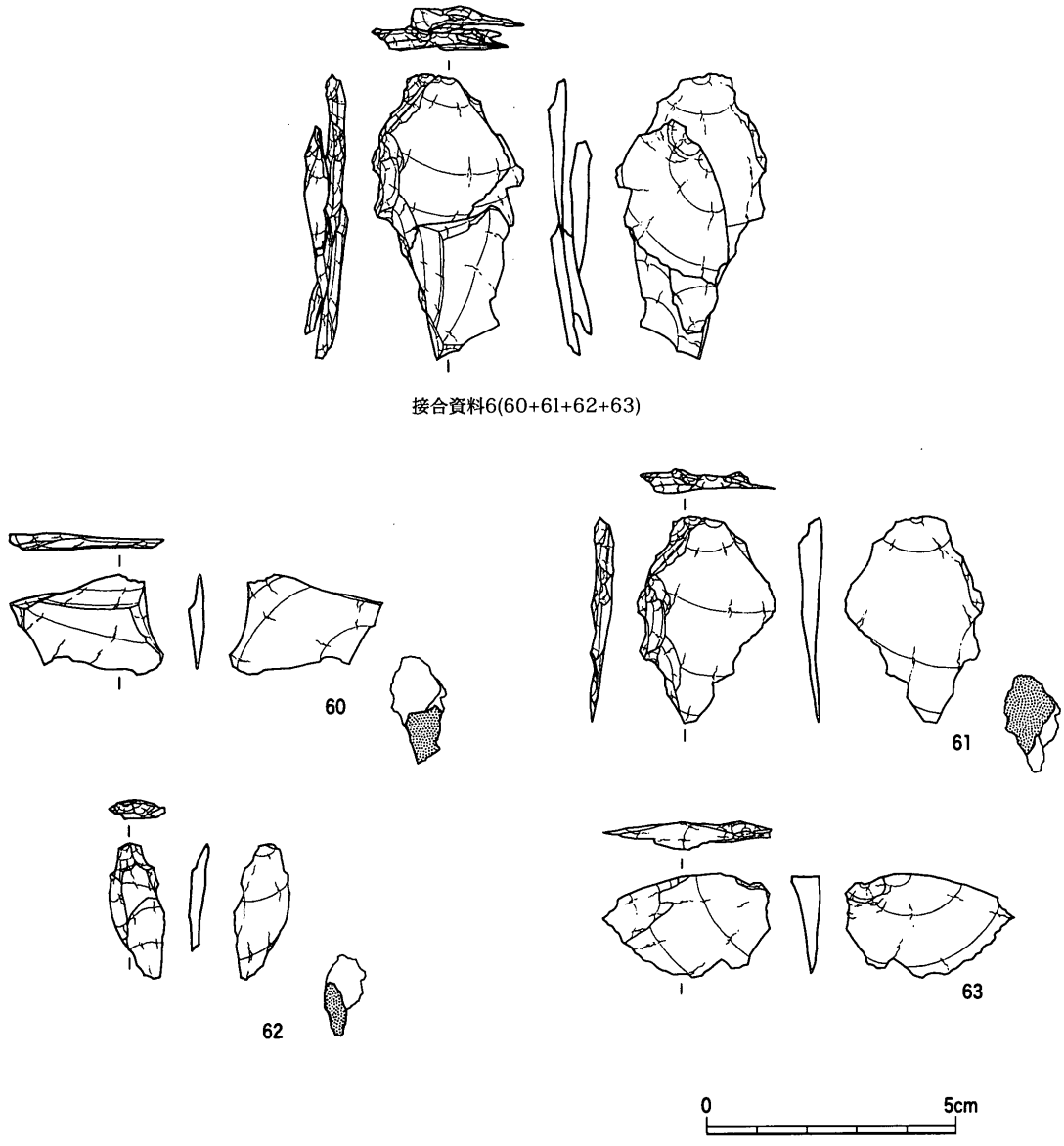
第37図　SKf01出土遺物(4)(2/3)



第38図　SKf01出土遺物（5）（2/3，接合資料のみ1/2）



第39図　SKf01出土遺物(6)(2/3，接合資料のみ1/2)

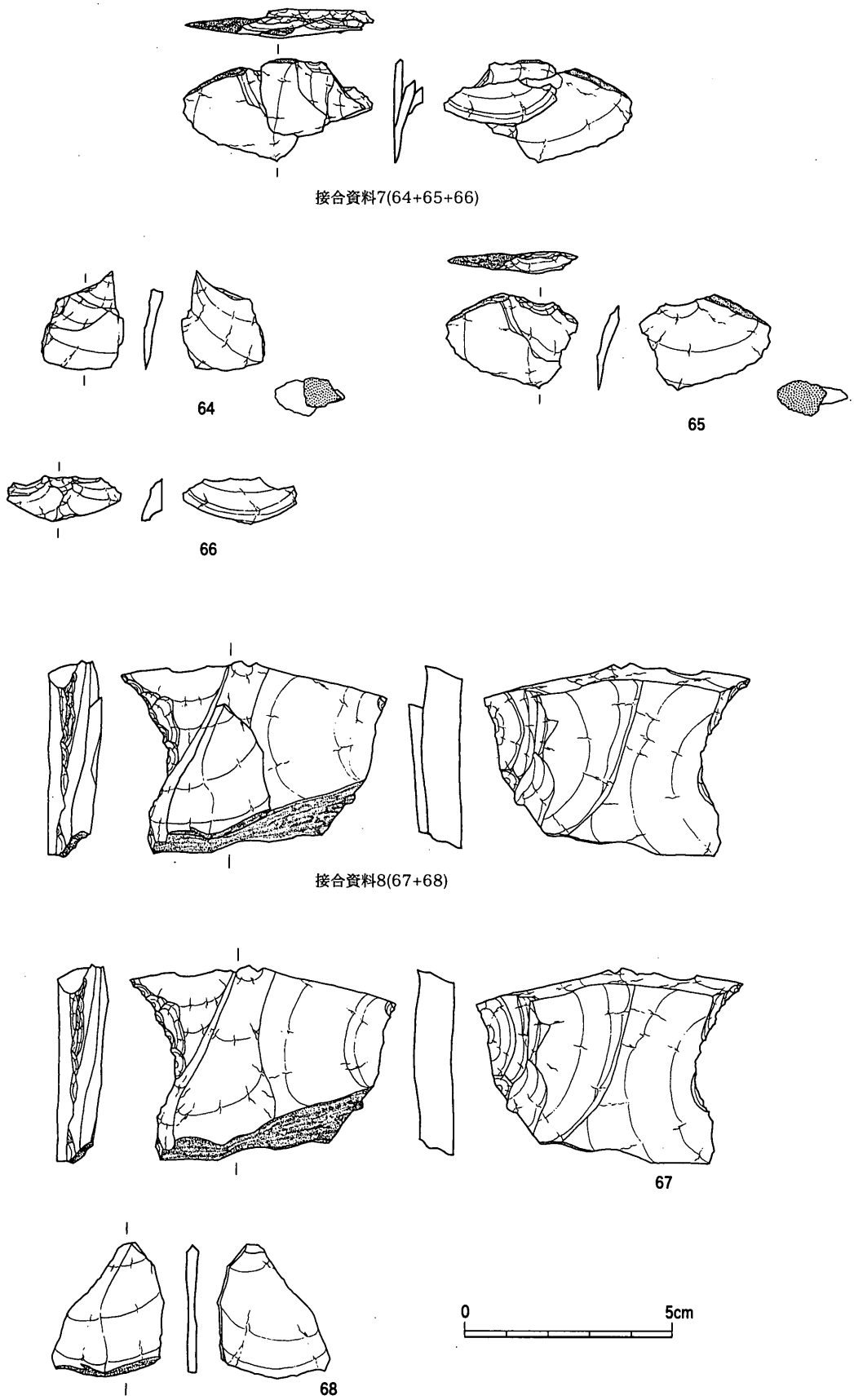


第40図　SKf01出土遺物（7）（2/3，接合資料のみ1/2）

めており，対向する側縁には裁断面がみられる板状の剥片であり，接合資料1でのII工程の素材となるものであろう。**68**を剥取後，早い段階で剥片剥離工程をやめており，残核（67）の一部を細部調整して鋭利な先端を作出している。

その他

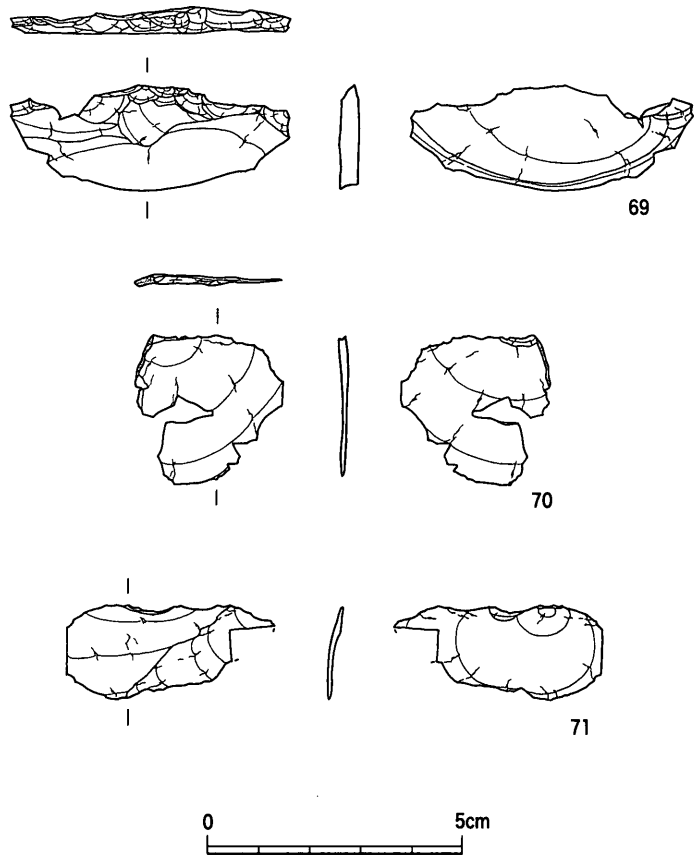
69は一側縁にやや潰れ気味の小剥離が連続しており，「両極打撃」で生じた剥片と考えられる。**70**・**71**も同様の剥片とみられ，厚さが極めて薄い。



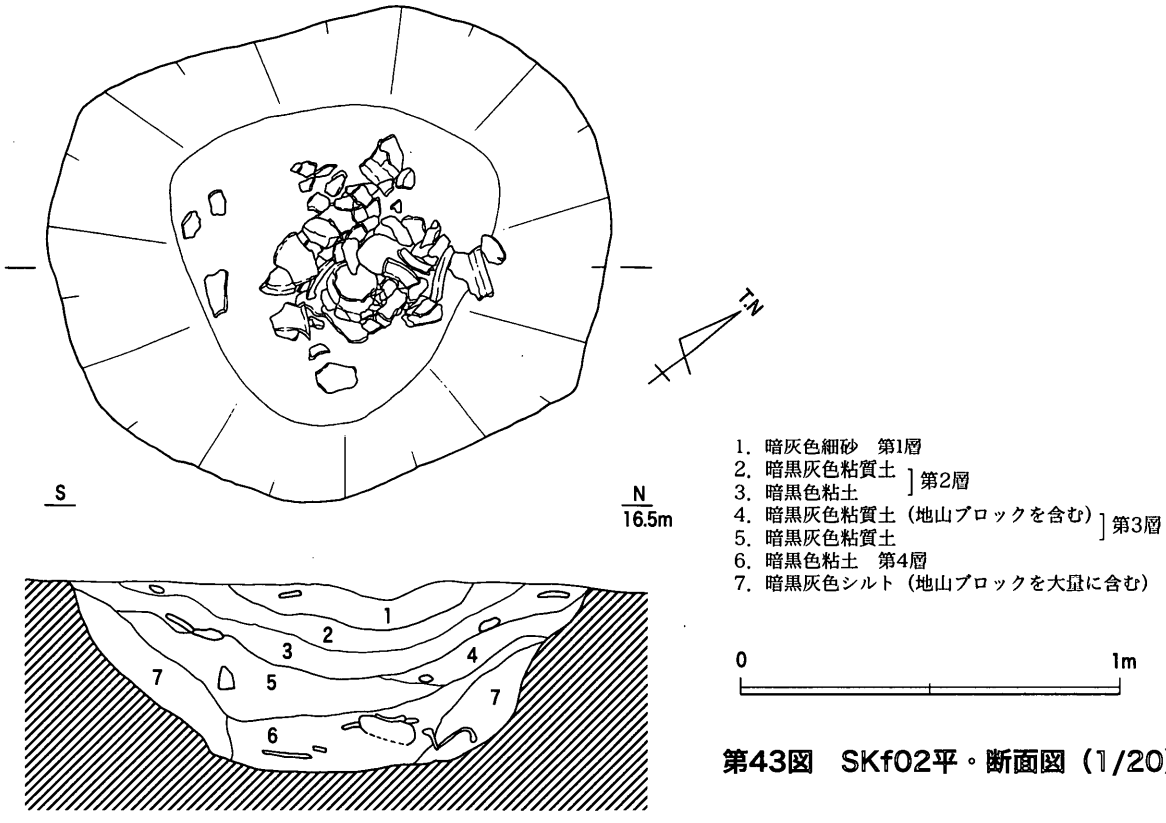
第41図　SKf01出土遺物(8)(2/3，接合資料のみ1/2)

ＳＫf01の性格

以上のように，ＳＫf01には板状の素材を分割・剥離するⅡ工程に伴う剥片が多量に遺棄されていたことがわかった。接合資料１で検討したように，板状の素材剥片は遺跡外で生産され，持ち込まれたと考えられる。同時期とみられる竪穴住居ＳＨｆ01に近接すること，またＳＨｆ01内で石器製作の痕跡が認められることから，出土遺構はＳＨｆ01に付属する施設と推測される。接合状況から，出土資料は一部持ち出された（製品化されたか）残りの素材であることがわかるが，大型の剥片（接合資料１・２）があり，また細部加工して製品化したものが含まれるなど，廃棄を目的とした投棄と捉えるのに躊躇する。一時的な収納施設として本遺構が利用された可能性があろう。



第42図　SKf01出土遺物（9）（2/3）

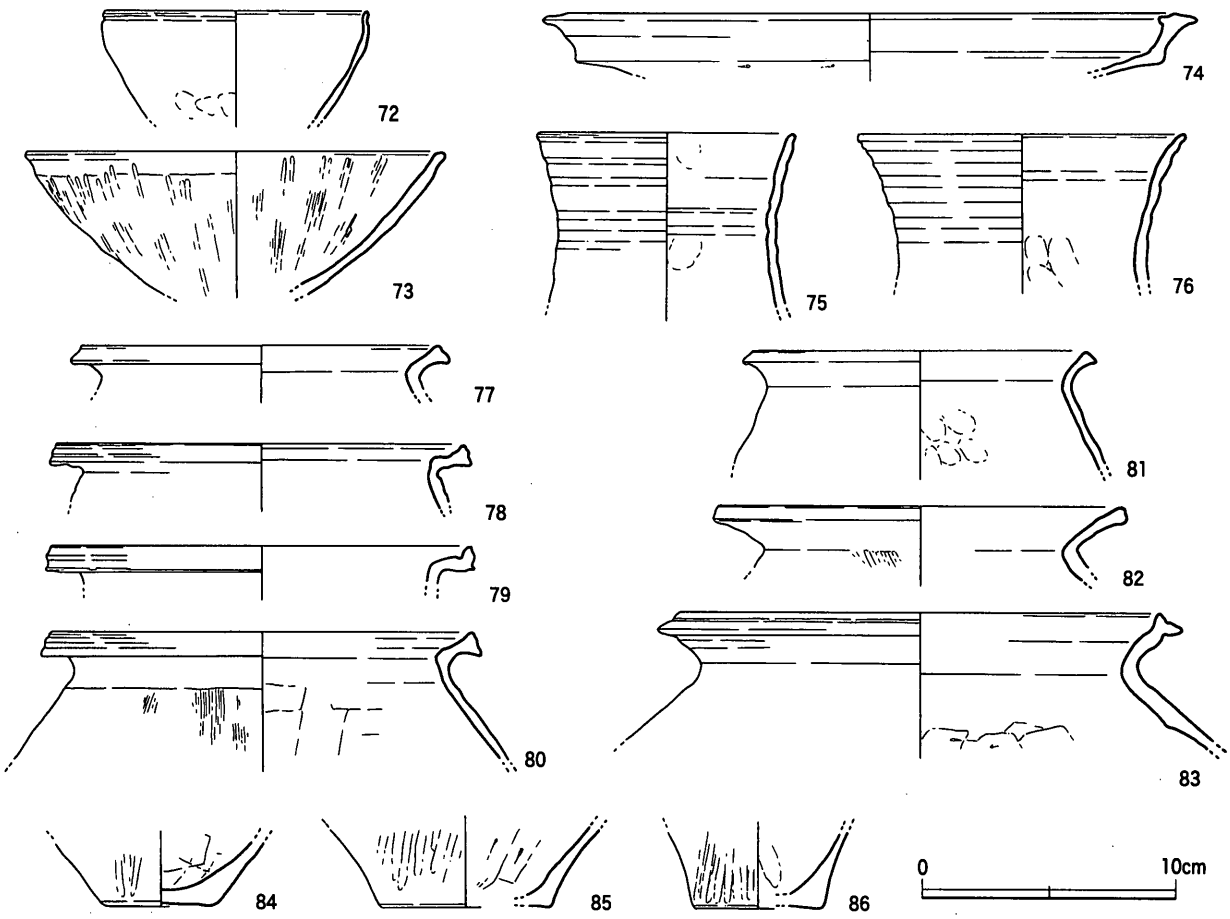


第43図　SKf02平・断面図（1/20）

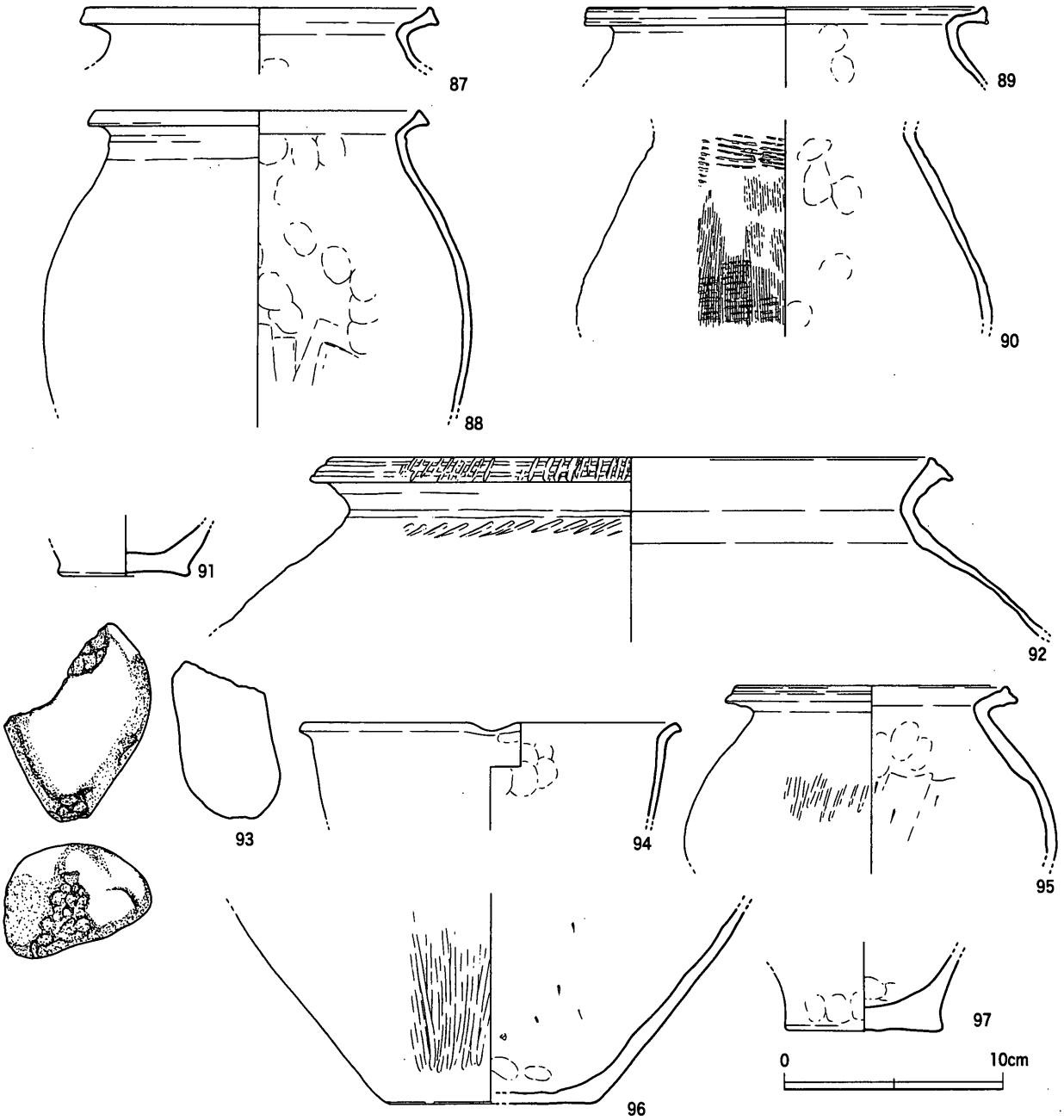
ＳＫf02（第43～45図）

Ⅱ－18区西端部中央のＳＢf05の南側0.5ｍに位置する土坑である。平面形態は隅丸長方形に近い楕円形，断面形態は逆台形を呈しており，長径2.92ｍ，短径2.42ｍ，深さ0.96ｍを測る。埋土は７層に細別され，漸移的な堆積状況を示すが，底面に近い第６層で多量の弥生土器がまとまって出土したため，これより上位の第１～５層を上層，遺物の多く出土した第６層とその両側ないし下位で基盤層ブロックを多量に含む第７層を下層と便宜的に区分できる。

上層出土遺物には，弥生土器鉢（**72**・**73**）・高杯（**74**）・壺（**75**・**76**）・甕（**77**～**86**）がある。このうち**74**・**77**～**80**・**84**・**85**が胎土１類土器である。**72**は薄手の小型鉢であり，外傾する体部から内弯気味に直立する口縁部をもつ。端部は僅かに外反気味に収められる。**73**は外傾する体部から連続的に口縁部に至る。口縁部は外面を中心に強い横ナデ調整が施されるため，若干外反気味な端部の形態をとる。外面には，縦方向のヘラ磨きが内外面ともに施される。**74**は両側に拡張する口縁部をもち，体部外面にはヘラ削り調整が行われる。**75**・**76**は口縁部から頸部にかけて，鈍い凹線文が施される直口壺である。**77**は口縁端部が上下に弱く拡張されるが，端面には施文されない。**78**～**80**は上下に拡張された口縁部端面に鈍い凹線文が施される。**81**・**82**は口縁端部の拡張が微弱であり，特に**82**は全体の形状が肉厚で鈍い端部調整を行っている。**83**は口縁端部を斜め下方に強く拡張させる形態をもつ，やや大型の甕である。**84**～**86**は明瞭な平底形態であるが，内面は底部から体部下半まで比較的連続した器面をもつ。外面には縦方向のヘラ磨き調整が施される。



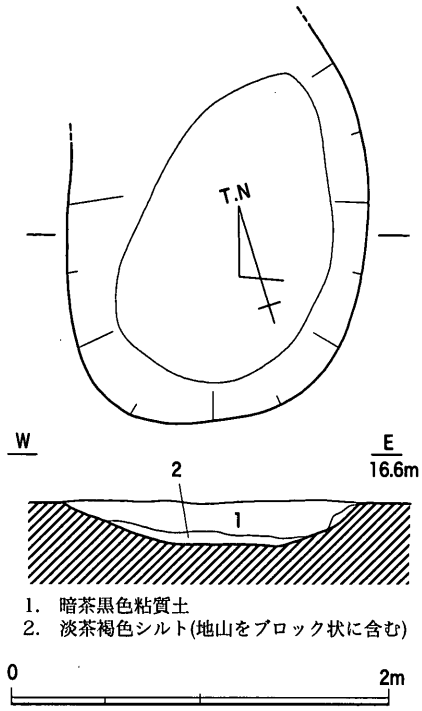
第44図　SKf02上層出土遺物（1/3）



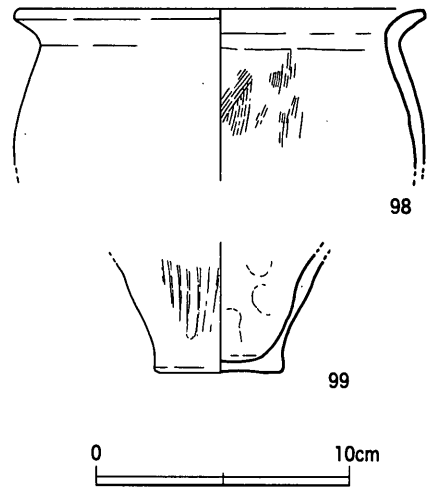
第45図　SKf02下層出土遺物　(1/3)

下層出土遺物には，弥生土器甕（**87**～**92**，**95**～**97**）・鉢（**94**），砂岩製敲き石（**93**）がある。**87**～**89**は口縁端部が上下に拡張する形態であり，**89**には端面に凹線文が施される。**90**は横位の平行叩き目が施されており，頸部直下の叩き目は右下がりの横位であるが，体部中位の叩き目は右上がりの横位であり，いわゆる「叩き締めの円弧」のような連続的な叩き目傾きの変化とは異なる。叩き目は，大部分が縦ハケ調整によって消去されている。**92**は幅広く拡張した口縁端部に凹線文と，これに後出する縦方向の刺突文が施される。また頸部には，斜め方向の刺突文が施される。**94**は外反する口縁部をもち，片口が作出される。**95**は小型甕であり，頸部がよく絞られた形態をもつ。口縁端部は上方に拡張しており，端面に凹線文が施される。

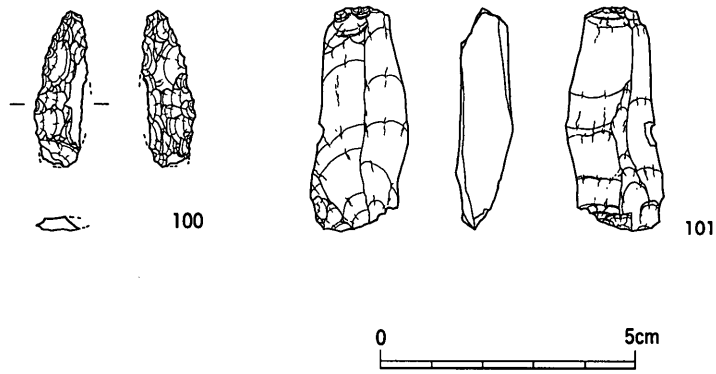
以上の土器群は，上天神遺跡における分類で甕Ａ２類がみられること（**87**・**89**），頸部の不明瞭な甕Ｂ類が存在すること（**81**～**83**）から，上天神遺跡新相（大空遺跡）と考えられ，弥生時代後期初



第46図　SKf03平・断面図(1/40)



第47図　SKf03出土遺物（1）（1/3）



第48図　SKf03出土遺物（2）（2/3）

頭に位置付けることができる。

ＳＫf03（第46～48図）

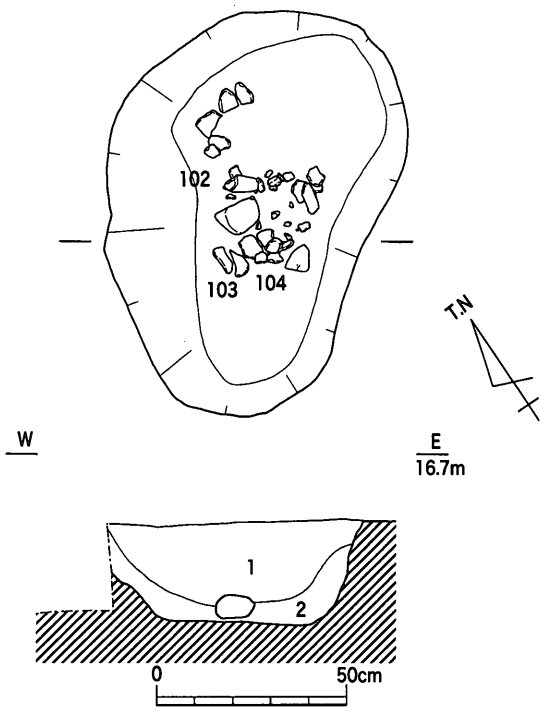
Ⅱ－18区北端部中央で検出された，溝と連結する土坑である。土坑に取り付く溝は，Ⅱ－19区を東西に流れる大溝（Ⅱ－24・25区のＳＤf12と同一遺構）に繋がっている。平面形態は楕円形，断面形態は逆台形を呈しており，長径2.1ｍ，短径1.57ｍ，深さ0.23ｍを測る。特徴的なのは，土坑内に径５～10㎝の小規模なピットが13個検出されたことである。その分布は，土坑底面の中央にはみられず，土坑壁面もしくは底面の縁辺にみられる傾向が指摘できる。こうした状況から，土坑内に何らかの目的（護岸か）で打設された杭の痕跡である可能性が考えられよう。なお，土坑は基盤層下の礫層までは掘削されていないため，湧水を目的とした掘り込みとは考え難く，出水状遺構ではないと判断される。逆にⅡ－19区の大溝から引水して溜める，水溜め的な機能を有していたのではなかろうか。２層に分けられる埋土の大半を占める第１層が暗茶黒色粘質土であり，滞水状態を示すことも，こうした想定と整合する。

遺物は弥生土器甕（**98・99**），サヌカイト製石鏃（**100**）・剥片（**101**）があり，弥生後期初頭頃の所産と考えられる。

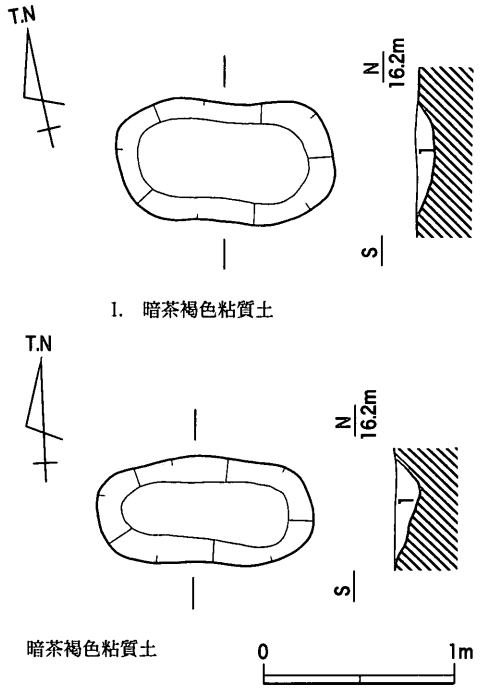
ＳＫf04（第49・50図）

Ⅱ－18区北西部で検出された土坑である。ＳＨf01埋土の北西部を掘り込んでおり，平面形態は北側が幅広い楕円形，断面形態は逆台形を呈する。規模は長径2.09ｍ，短径1.57ｍ，深さ0.53ｍを測る。埋土は２層に分けられ，上層は暗茶褐色砂質土，下層は暗黒色シルトである。

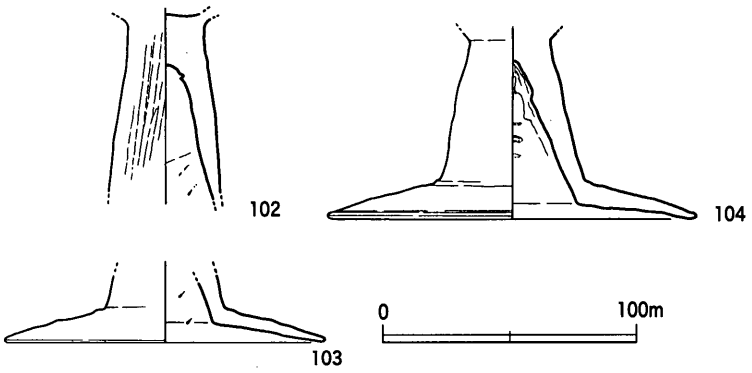
遺物は，下層から土師器高杯の脚部（**102～104**）が出土した。**102**はやや細身で長い脚部をもち，外面に縦方向のヘラ磨き，内面に横方向のヘラ削りが施される。**103**・**104**は，明瞭に強く屈曲してハの字形に強く開く脚端部をもつ。これらは布留式併行期にまで下るものである。



第49図　SKf04平・断面図（1/40）



第51図　SKf07・08平・断面図（1/40）



第50図　SKf04出土遺物（1/3）

ＳＫf07・08（第51図）

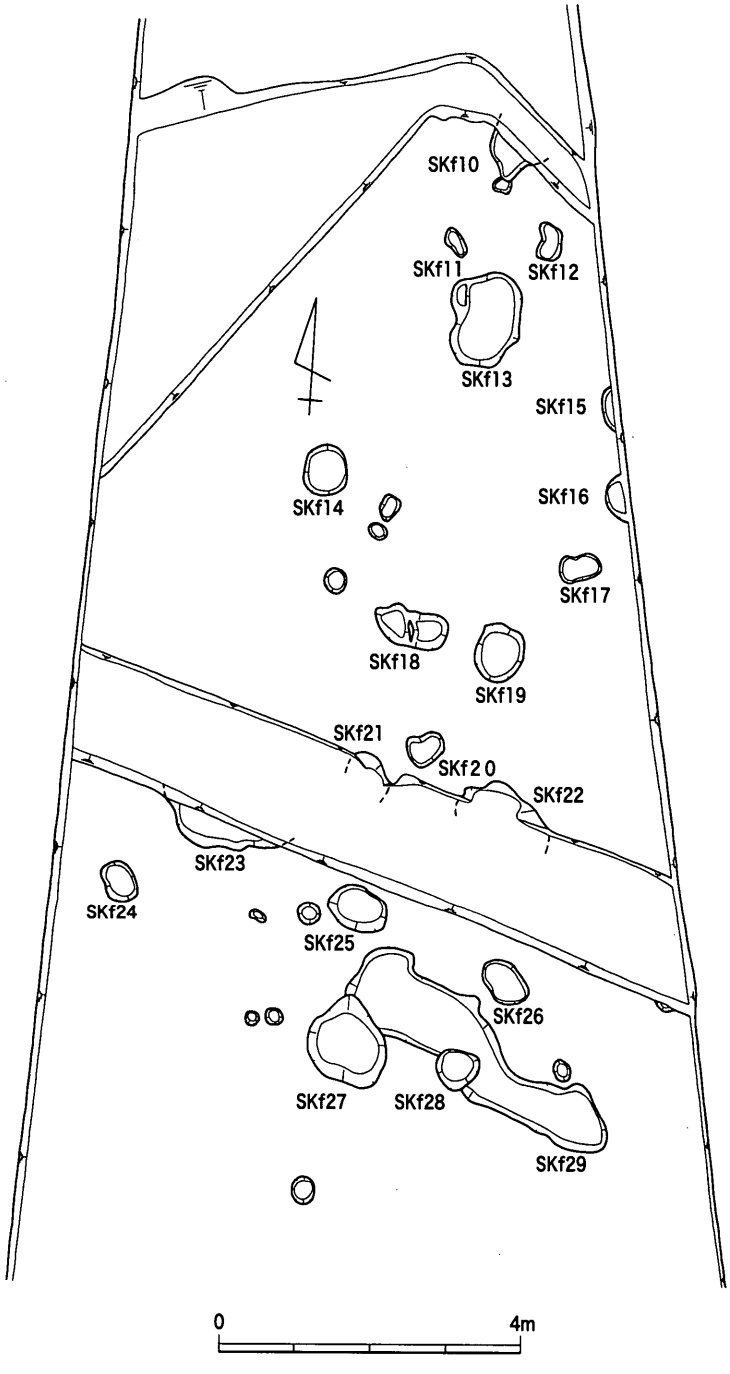
Ⅱ－17区西端部中央で並列して検出された土坑である。平面形態は両短辺が丸味を帯びた長方形，断面形態は浅いＵ字形を呈しており，暗茶褐色粘質土を埋土としている。規模はＳＫf07が長径1.15ｍ，短径0.6ｍ，深さ0.09ｍ，ＳＫf08が長径1.13ｍ，短径0.54ｍ，深さ0.13ｍを測る。遺物は出土していないが，埋土の特徴から弥生時代と考えられる。

４．土坑群

(1) Ⅲ－14区土坑群

Ⅲ－14区の中央部東寄りの範囲を中心に，21基の土坑と13基のピットが検出された。東側に隣接す

るⅢ－33区では，弥生時代後期末を中心とした土坑群が検出されており，全体としてはこの土坑群の西縁部にあたる。Ⅲ－33・34・45～47区では，基盤層と土坑群の分布範囲との明瞭な対応関係が指摘されているが，Ⅲ－14区では基盤層との対応関係は明確でない。土坑の平面形態は，円形もしくは楕円形を呈するものが多いが，不定形なプランを呈するものもある（ＳＫf18・23・29）。また断面形態・深さも一定していない。以下，遺存状況の良好な土坑について報告する。他の土坑については，一覧表を参照されたい。



第52図　Ⅲ－14区土杭群　(1/100)

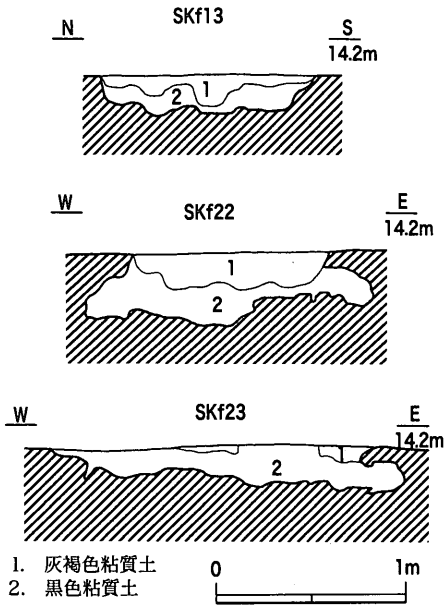
ＳＫf13（第52・53図）

やや不定形な楕円形を呈しており，長径1.27ｍ，短径0.92ｍ，深さ0.21ｍを測る。断面形態は，浅い逆台形を呈しているが，底面は平坦ではなく凹凸が著しい。埋土は２層に分かれ，上層は灰褐色粘質土，下層は黒色粘質土である。

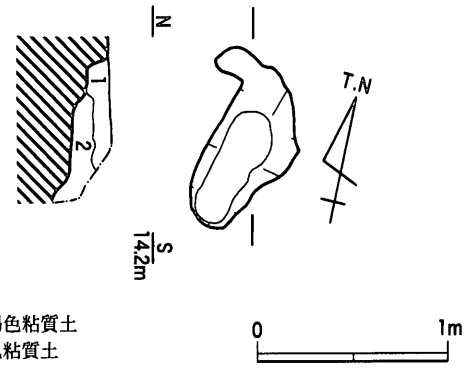
ＳＫf21（第52・54図）

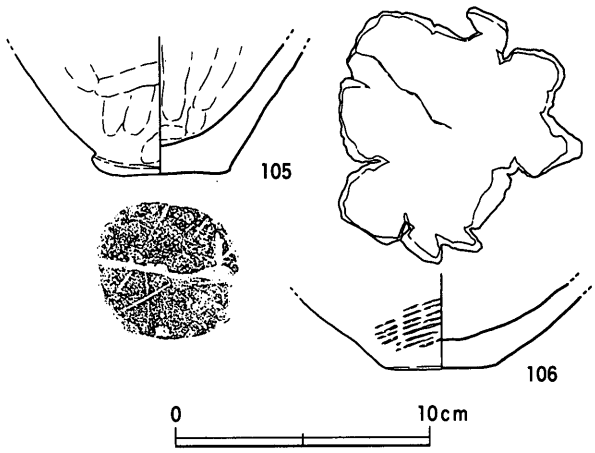
攪乱によって南半部上面を破壊されているが，やや不定形な楕円形を呈する。長径0.84ｍ，短径0.5ｍ以上，深さ0.3ｍを測る。底面形態は，ほぼ平坦な面が３段連続しており，段掘り状の形態をもつ。埋土は２層に分けられ，ＳＫf13と同様である。

遺物には弥生土器甕（**105**・**106**）がある。**105**は明瞭な平底をもつ厚手の甕である。底部外面には，藁状の植物繊維の圧痕がみられる。**106**は底部内面に接合痕らしい亀裂が認められる。外面には，細かな平行叩き目が施される。これらの土器の編年的位置付けは難しいが，概ね弥生時代後期末葉頃とみてよかろう。

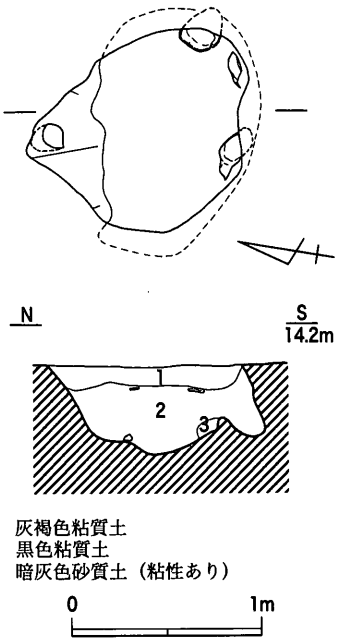


第53図　SKf13・22・23断面図　(1/40)





第54図　SKf21平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第55図　SK27平・断面図（1/40）

ＳＫf22（第52・53図）

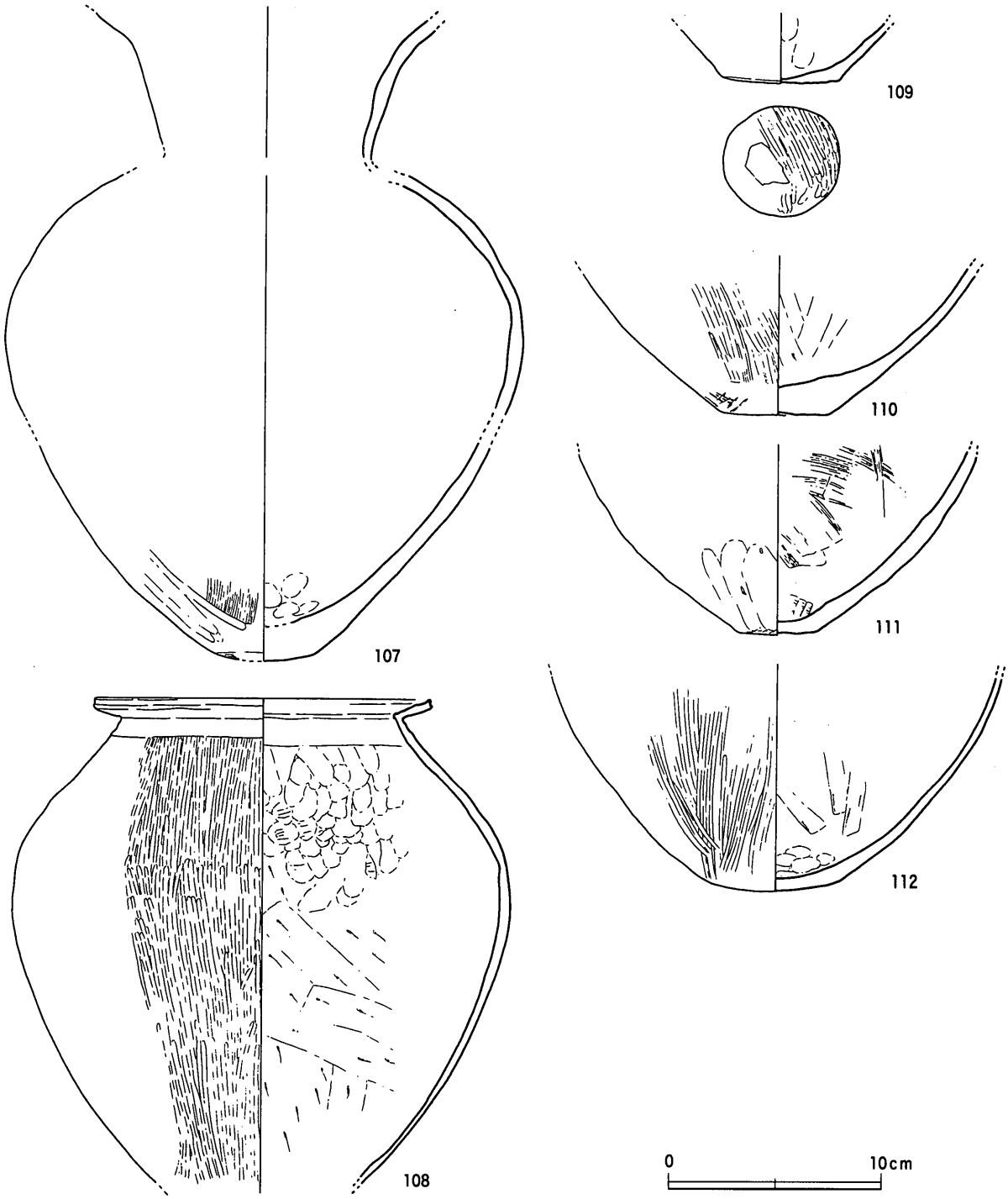
攪乱によって南半部を破壊されている。残存する部分は不定形なプランを呈しており，検出面で東西1.03ｍ，深さ0.38ｍを測る。断面形態は掘り込み壁面の下位が大きくオーバーハングしており，底面幅が上面よりも0.13ｍずつ拡張する。底面形態は平坦ではなく，著しい起伏がある。埋土の状況は，ＳＫf13と同様である。

ＳＫf23（第52・53図）

攪乱によって北半部を破壊されているが，不定形な平面形態を呈している。規模は東西1.6ｍ，南北0.5ｍ以上，深さ0.26ｍを測る。断面形態は，掘り込み壁面の下位が大きくオーバーハングしており，東側底面は上面よりも0.14ｍ広くなっている。また底面形態は平坦ではなく，著しく凹凸が認められる。埋土の状況や平面・断面形態がＳＫf22と極めて近似する。

ＳＫf27（第52・55・56図）

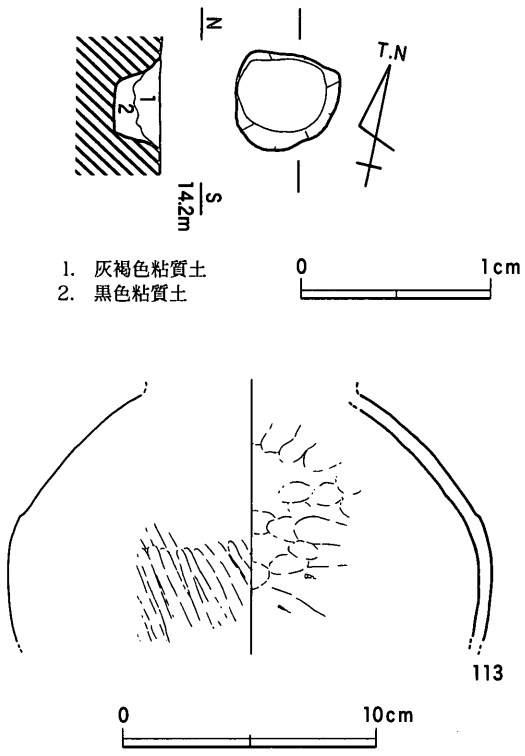
北側に拡張部をもつ，歪な楕円形プランを呈する土坑である。規模は長径1.12ｍ，短径1.08ｍ，深さ0.47ｍを測る。断面形態は南側壁面がオーバーハングしており，底面には若干の凹凸が認められる。



第56図　SKf27出土遺物（1/3）

埋土の状況はＳＫf13と共通する。

出土遺物には，弥生土器壺（**107**）・甕（**108**～**112**）がある。**107**は外傾する頸部と逆ハの字形に開く口縁部をもつ広口壺である。器面の剥落が著しいため，細かな調整については不明であるが，やや突出する底部の外面には縦ハケ調整とそれに後出する縦方向のヘラ磨き調整が認められる。**108**は明瞭に屈曲して直線的に伸びる口頸部と体部上位でよく張る肩部が特徴的な形態であり，口縁端部は上方に短くツマミ出される。体部内面の上半は指ナデや指頭圧痕状の押圧が顕著にみられ，下半には縦位～斜め方向のヘラ削り調整が施される。上半と下半の成形・調整痕の切り合いは明瞭ではないが，外面



第57図　SKf28平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

の縦位の磨き調整は上位→下位の順に施されているようである。なお，内面上半の指頭圧痕状の押圧部分には，指紋よりもより幅広で深い当て具痕に似た条線が数条認められる。**109**～**112**は，甕の底部である。明瞭な平底形態（**109**・**110**）と径の小さな平底（**111**），また底部中央が突出する丸底に近い形態（**112**）がある。**111**の形態は，体部外面下端を縦方向にヘラ削りして器厚をやや薄くしていることと関連する。以上の土器群は，弥生時代後期終末頃の所産であろう。

ＳＫf28（第52・57図）

やや歪な方形プランを呈する土坑である。規模は長径0.55ｍ，短径0.5ｍ，深さ0.24ｍを測り，断面形態が底面の平坦な逆台形である。不定形な平面・断面形態の多い土坑群にあって，比較的均整な形態を呈しているといえよう。埋土の状況はＳＫf13と共通している。

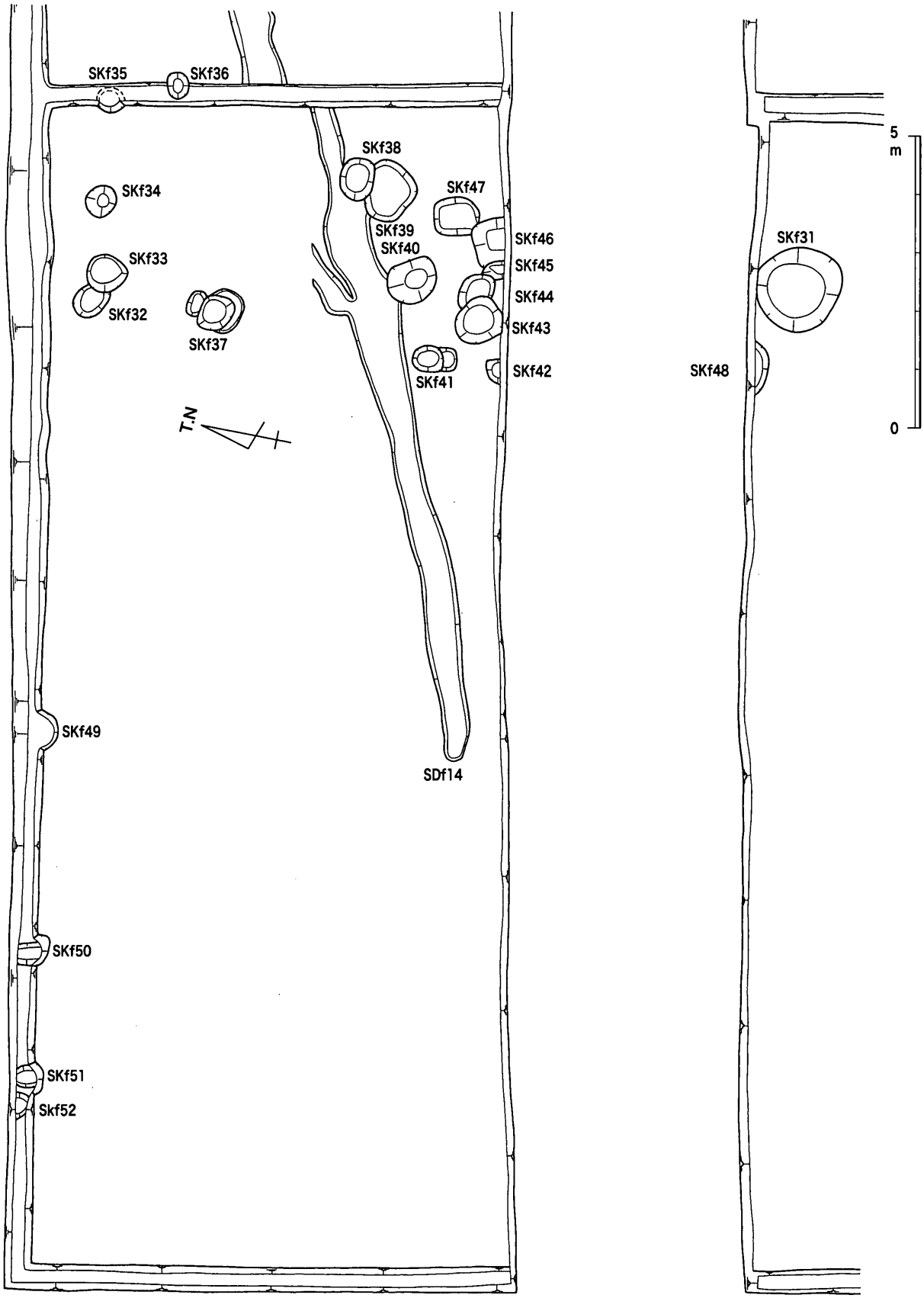
弥生土器甕の体部（**113**）が出土した。肩部よりも下位に縦位のヘラ磨き調整を施す。時期の限定は難しいが，弥生時代後期後葉～終末とみてよかろう。

(2) Ⅲ－４区土坑群

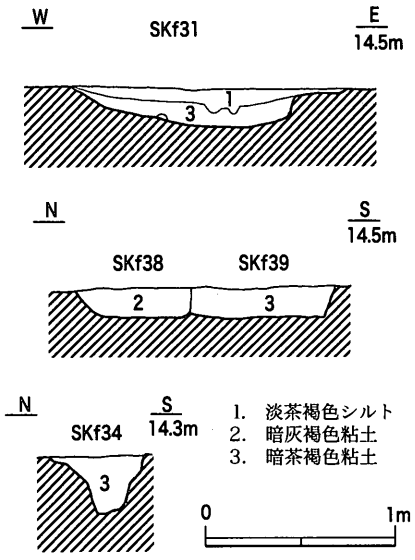
Ⅲ－４区北東部で暗茶褐色ないし暗灰褐色粘土を埋土とする土坑が25基検出された。北側に隣接するⅢ－45～47区で検出された土坑群の南縁辺にあたるものと考えられる。土坑の分布する付近の基盤層は暗茶褐色粘土であり，土坑埋土はこれと極めて近似していた。このため当初は，土坑プランを十分に認識することができず，遺構検出面で比較的明瞭に識別できた箇所を中心に検出面よりもさらに0.1～0.2ｍ程度面的に掘削して土坑の検出に努めた。こうした経緯があるため，最終的に全ての土坑が検出できたか心許ない部分もある。しかしⅢ－４区南半部と東隣のⅢ－３区では，土坑の存在を想定して精査を行ったが，Ⅲ－３区では検出に至らず，Ⅲ－４区南半部では僅かにＳＫf31・48の検出にとどまったため，土坑群分布の東限と南限については明確にし得たと考えている。以下，遺存状況の良好な土坑について，個別に報告する。他の土坑については，一覧表を参照されたい。

ＳＫf31（第58・59図）

平面形態が円形を呈する土坑である。規模は径1.43ｍ，深さ0.2ｍを測り，断面形態は浅いＵ字形を呈しており，土坑壁面は極めて緩やかである。埋土は２層に分けられ，上層が暗茶褐色粘土，下層が



第58図　Ⅲ－４区土坑群　(1/100)



第59図　SKf31・34・38・39断面図（1/40）

関係が確認できる。ＳＫf38は長径7.2m，短径5.8m，深さ0.16mを測り，ＳＫf39は長径1.05m，短径0.85m以上，深さ0.16mを測る。ともに断面形態は壁面が比較的急に立ち上がり，逆台形を呈している。底面は平坦であり，凹凸は認められない。埋土はＳＫf38が暗灰褐色粘質土，ＳＫf39が暗茶褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

5．溝

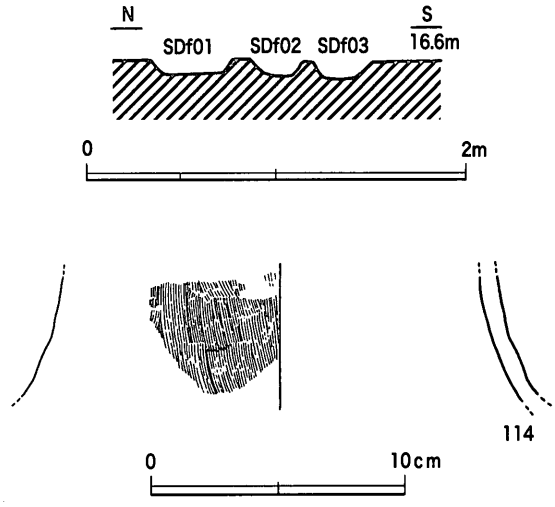
暗灰色粘土である。下層から器種不明の弥生土器細片が出土した。

ＳＫf34（第58・59図）

平面形態が円形を呈する土坑である。規模は径0.49m，深さ0.3mを測り，断面形態は北側壁面上半が緩やかな深い逆台形を呈する。埋土は暗茶褐色粘土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＫf38・39（第58・59図）

平面形態が楕円形を呈する土坑が２基重複した状態で検出された。北側のＳＫf38が南側のＳＫf39を切り込んでおり，ＳＫf39→ＳＫf38という先後



第60図　SDf01～03断面図（1/40），出土遺物（1/3）

ＳＤf01～03（第60図・付図1）

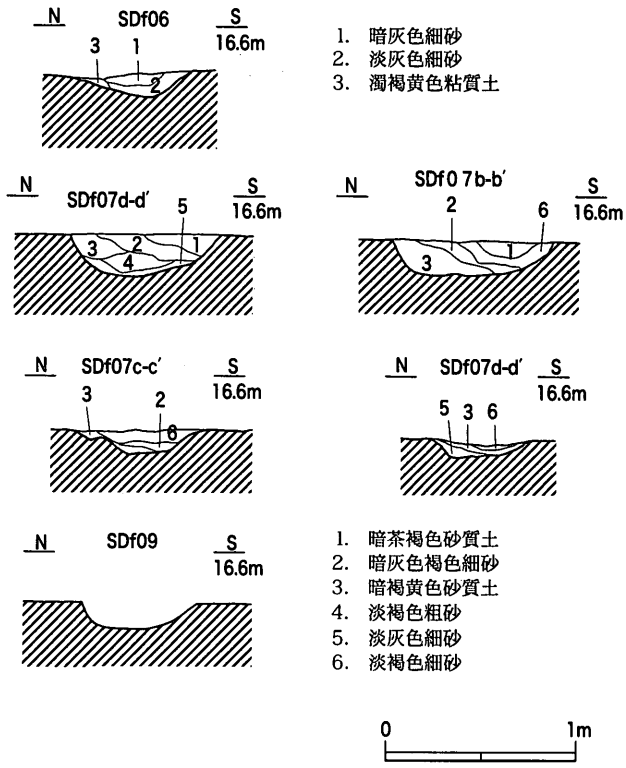
Ⅱ－18区北西部で検出された３条平行して直線的に延びる小溝である。ＳＨf01の南側約1.3mにあり，ＳＢf01と重複した位置にあるが，先後関係は不明である。主軸方位はＮ－50°－Ｅ前後である。検出長は最長のＳＫf03で2.8mにとどまる。埋土は暗茶褐色シルトであり，周辺の弥生時代の遺構と同様である。本来的には，より長い延長距離であったとも考えられるが，周辺遺構の遺存状況からみて，その可能性は低いようである。あるいはＳＨf01に関連する区画的な機能をもつものであろうか。

遺物は，ＳＤf01から弥生土器壺（**114**）が出土している。外面に縦ハケが施されており，大型の広口壺の頸部の破片とみられる。

ＳＤf04・05（付図1）

Ⅱ－18区北端部で検出された小溝である。北側のⅡ－19区の大溝（Ⅱ－24・25区のＳＤf12と同一遺構）に繋がる。平面的な流路の方向は両者ともに同様に蛇行しており，地形的な制約を受けている

可能性がある。詳細はＤ地区の本報告に譲るが，Ⅱ－19区東半部からⅡ－20区にかけて大溝の周囲に包含層状の堆積層（低地の堆積層ないし水田土壌）が面的に広がるため，これらの小溝は微高地縁辺の低地際に開削されている可能性がある。既に報告したＳＫf03に繋がる溝は，これらの溝と同じ流路の方向をもつ。ＳＤf04は幅0.4ｍ，深さ0.06ｍを測り，ＳＤf05は幅0.68m，深さ0.11ｍを測る。ともに断面は緩やかなＵ字形を呈している。埋土は茶褐色系シルトであり，色調の濃淡で２層に細別できる。遺物は出土しなかったが，Ⅱ－19区大溝との同時併存が確認できるため，遺構の時期としては弥生時代後期初頭に比定し得る。



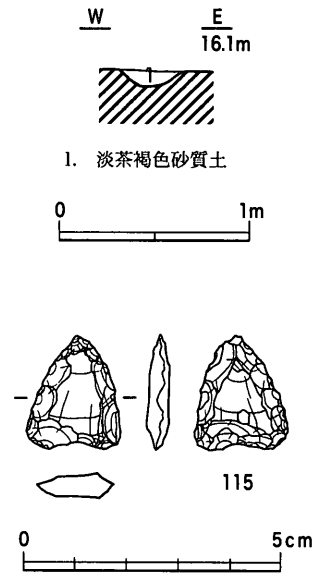
第61図　SDf06・07・09断面図（1/40）

ＳＤf06（第61図・付図1）

Ⅱ－18区西端から中央にかけて検出された。西端部はＳＤf07から分岐してW－20～40°－Ｓの方向に延びるが，東半部でW－10°－Ｓの方向に屈曲して直線的に延びるようになる。底面のレベルは僅かに東側に傾斜しており，東に向かう溝であったと推測される。なお，東半部で南側に短く分岐する箇所があり，ＳＢf03の北辺北側で収束している。東端は平面方形に巡る性格不明遺構ＳＸf01埋土を切り込んで収束している。断面形態は浅いＵ字形を呈しており，幅0.62ｍ，深さ0.13ｍを測る。埋土は３層に分けられ，第１・２層は細砂層であることから，一定の流水状況下で埋没が進行したものと思われる。

ＳＤf07（第61図・付図1）

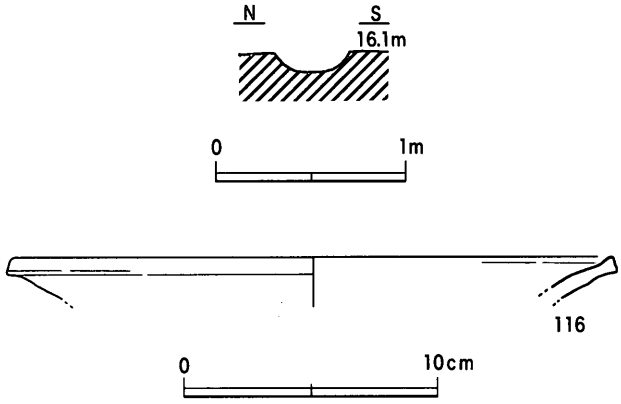
Ⅱ－18区西端から中央部にかけて検出された。直線的な流路をもち，W－5°－Ｓの方向に延びる。底面のレベルは標高16.2ｍ前後で一定しているが，ＳＤf06での状況を踏まえると東に向かう溝であったと考えてよいようである。規模は幅0.52～0.84ｍ，深さ0.1～0.22ｍを測り，断面形態は浅いＵ字形を呈する。埋土は６層に細分でき，ａ－ａ′断面とｂ－ｂ′断面での状況をみると，第１・２・６層と第３・４・５層との間に層位の断絶が認められ，再掘削の痕跡とみることもできる。



第62図　SDf10断面図（1/40），出土遺物（2/3）

ＳＤf09（第61図・付図1）

Ⅱ－18区南西部で検出された，円弧状にカーブして延びる流路をもつ溝である。幅0.6ｍ，深さ0.14ｍを測り，埋土の状況はＳ



第63図　SDf11断面図（1/40），出土遺物（1/3）

Ｄf06・07に似るため，ＳＤf07より分岐する溝である可能性もある。遺物は出土していない。

ＳＤf10（第62図・付図1）

Ⅱ－17区南端中央部で検出された。やや歪な円弧状プランの小溝であり，検出長2.6m，幅0.35m，深さ0.09mを測る。断面形態は，掘り込みの比較的緩やかな逆台形を呈している。埋土は淡茶褐色砂質土であり，弥生時代の遺構と同様である。調査時には竪穴住居の壁溝の可能性も考慮したが，仮に壁溝とすると復元径3.5～4.0m程度になり，小型の部類に入る。これに対して溝掘り込みが緩やかで幅広く，小型竪穴住居の壁溝とするには形状・大きさともに違和感がある。以上から，竪穴住居の壁溝とするのは難しい。

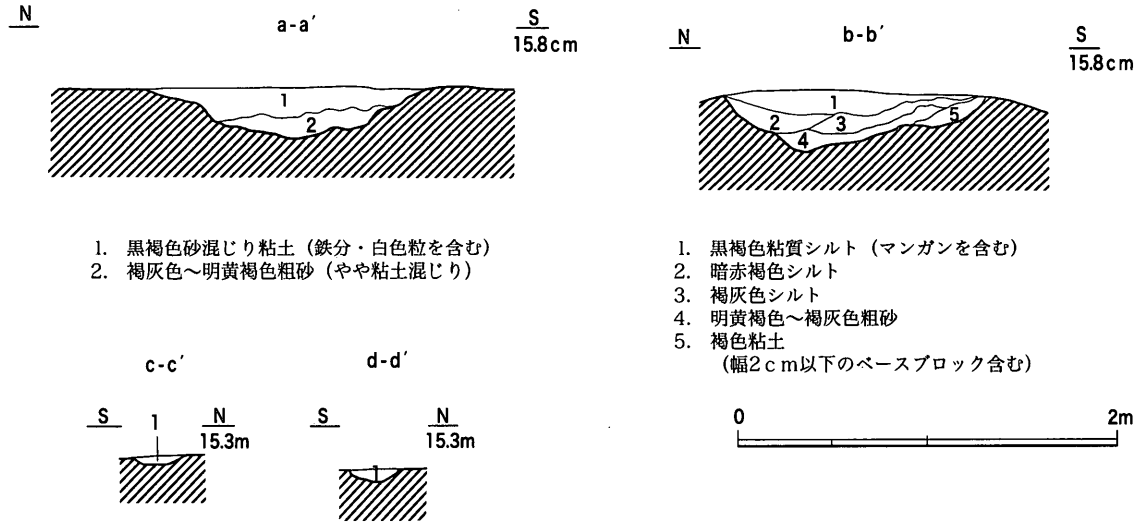
遺物は，凹基式のサヌカイト製石鏃（**115**）が出土している。

ＳＤf11（第63図・付図1）

Ⅱ－17区中央部で検出された直線的な小溝であり，幅0.28m，深さ0.16mを測る。遺物は弥生土器甕（**116**）が出土しているが，周辺の条里型地割と概ね一致する主軸方位をもつため，古代以降の遺構である可能性もある。

ＳＤf12（第64図・付図3）

Ⅱ－24・25区の南端部を東西方向に延びる溝である。Ｄ地区（Ⅱ－19・20区）で検出されたＳＲ01（調査時遺構名）から東側に繋がる同一流路であり，Ⅱ－25区では比較的良好な遺存状態であるが，Ⅱ－24区では近世以降と考えられる削平のため，底面の一部のみが残存する程度でＳＤf90との交差部で途切れる。遺存状況の良好なⅡ－25区での規模は，幅1.38～1.46m，深さ0.28～0.34m



第64図　SDf12断面図（1/40）

を測る。断面形態は，底面に凹凸がある浅いU字形を呈している。底面のレベルは，Ⅱ－25区西半部では標高15.2ｍであるが，Ⅱ－24区東半部では標高15.0ｍであり，東側に向かって僅かに傾斜していることになる。このため，西から東方向への水の流れが想定し得る。埋土は５層程度に細分できるが，大まかには褐色系の粘質土・シルトの上層と，褐灰色系の細砂からなる下層に大別できる。当初は恒常的な流水状態にあったが，埋没が進むにつれて滞水気味な状態へと変化したものと思われる。なお，Ｄ地区では溝の周囲に包含層状に広がる黒色系の粘土層が認められたが，Ⅱ－24・25区ではそのような状況にない。

遺物は，Ⅱ－19区ではかなり多量に出土したが，今回報告部分ではほとんど認められなかった。これは，今回報告部分がⅡ－18区で検出された集落から隔たった位置にあることと関連するものと推測される。時期は，Ⅱ－19区での内容から弥生時代後期初頭としてよかろう。

ＳＤf13（付図3）

Ⅲ－１区で検出された直線的に延びる溝である。流路の主軸方位はＮ－５°－Ｗであり，中世や近世の遺構によって一部途切れるが，総延長78ｍ検出された。断面形態は浅いU字形を呈しており，幅0.2～1.2ｍ，深さ0.04～0.24ｍを測る。埋土は粘性の強い黒褐色粘土であり，ごく少量の弥生土器甕片が出土した。流路の方向からみて，ＳＤel15に繋がる可能性がある。

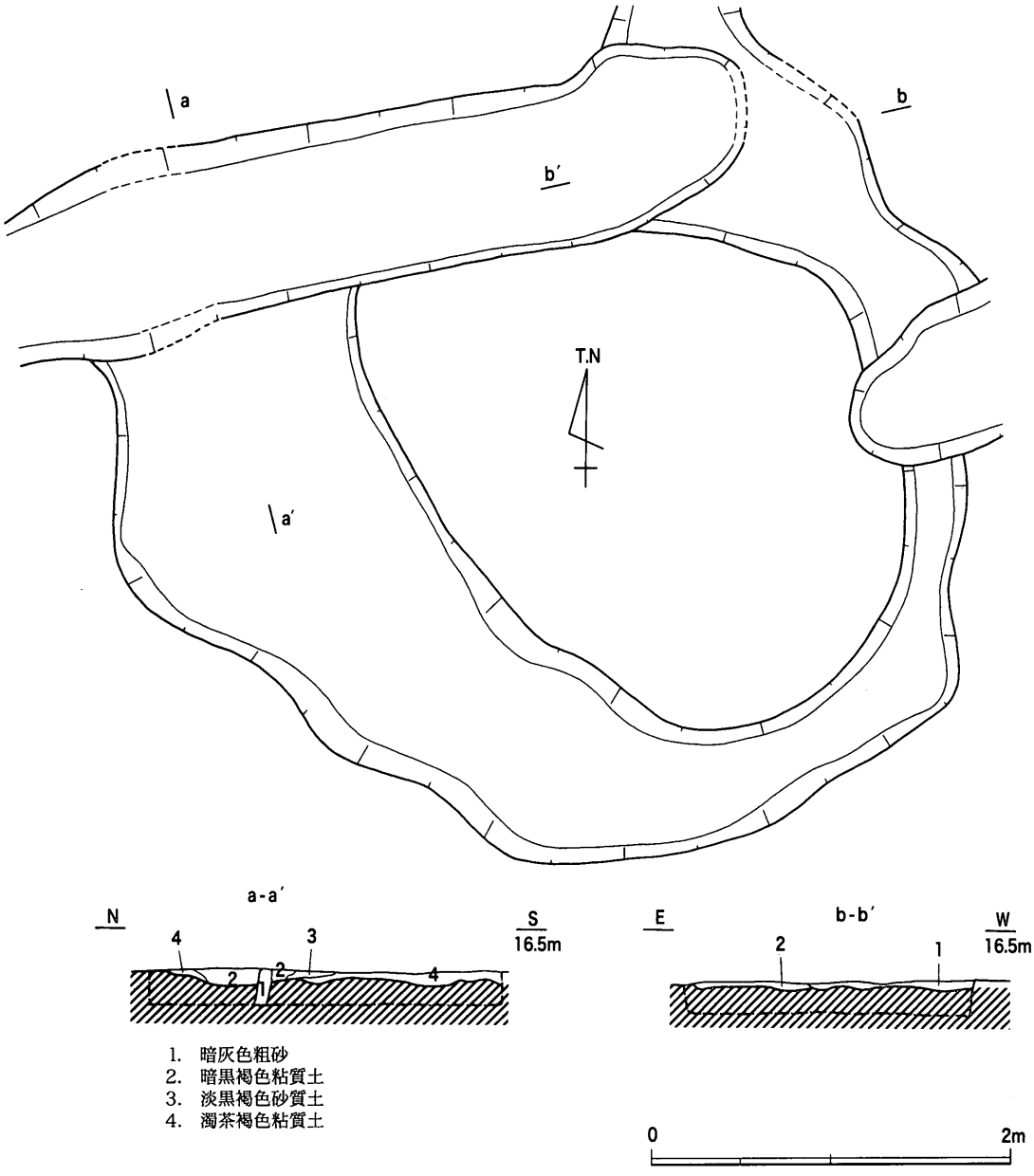
ＳＤf14（第58図・付図4）

Ⅲ－４区で検出された溝である。東側延長はＨ地区（Ⅲ－３・10区）でも検出されている。近世以降の削平によって途切れる部分もあるが，流路は概ね直線的であり，Ｎ－65°－Ｅの主軸方位を示す。Ⅲ－４区土坑群のＳＫf38・49に切られており，土坑群よりも先行することがわかる。埋土は暗茶褐色粘土である。遺物は出土しなかったが，土坑群との切り合い関係から弥生時代後期を下限とすることは明確である。なお西側の延長部は，Ⅲ－２区の中世・近世遺構による破壊で明確でないが，ＳＤf12と繋がると考えることも可能であろう。これは，時期的にも整合性をもつ想定である。

６．性格不明遺構

Ⅱ－17・18区では，竪穴住居・掘立柱建物の分布域の東側縁辺付近で多数の性格不明遺構が検出された。溝状の掘り込みが方形ないし不定形に巡る遺構（ＳＸf01～05・10）や，不定形な溝状で底面の形態が一定しない遺構（ＳＸf06～09・11），さらに浅い方形プランの落ち込み状遺構（ＳＸf12）などである。これらは概して遺物が僅少もしくは皆無であり，厳密には弥生時代後期に限定できるものかどうか，明確ではない。また性格・機能を特定できるだけの，定型的な遺構の存在形態を示すものでもない。具体的には，ＳＸf01～05・10は周溝墓との関係が念頭にあるが，溝の形態，溝内における遺物の有無ないし出土状況，主体部の有無，集落との位置関係など，いずれの属性においても積極的に周溝墓と判断するには足らない内容をもつのにとどまる。同様な遺構はＨ地区などでも検出されているため，今後の良好な事例の蓄積を待ちたい。またＳＸf06～09・11には，人為的な遺構かどうかも疑わしいものも含まれる。

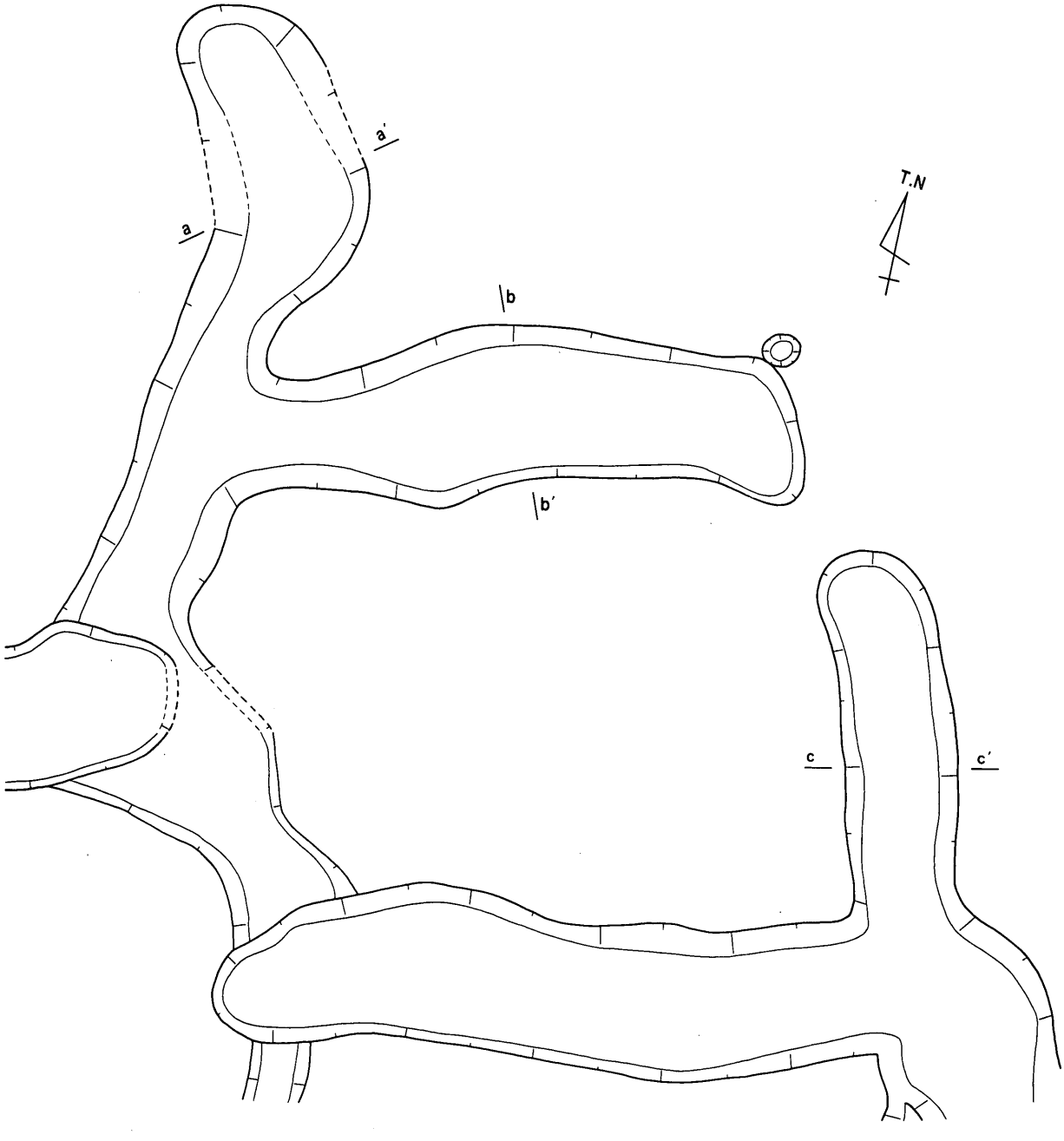
以下，主要な遺構について報告する。他の遺構については，付図を参照されたい。

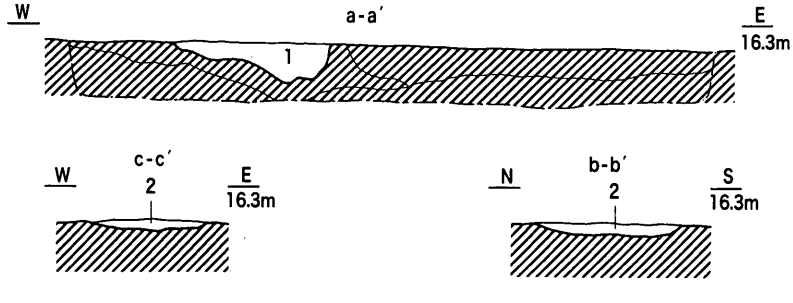


第65図　SXf01平・断面図（1/40）

ＳＸf01（第65図）

Ⅱ－18区中央部で検出した，平面楕円形に溝が巡る遺構である。溝は幅0.3～1.7ｍ，深さ0.04～0.08ｍ，幅が一定していない。溝の埋土は茶褐色系粘質土である。また溝で囲まれた範囲は，長径3.4ｍ，短径2.35ｍを測り，土坑・ピットなどの遺構は認められなかった。北辺部をＳＤf06が切り込んでいるが，両遺構は通常の切り合いのように不整合に交差するのではなく，むしろＳＸf01の北辺溝にＳＤf06がほぼ完全に重複しているように見受けられる。このため，両者を別の時期の無関係な遺構とするよりも，何らかの有機的関連を伴った遺構と捉える余地があるといえよう。遺物は出土していない。





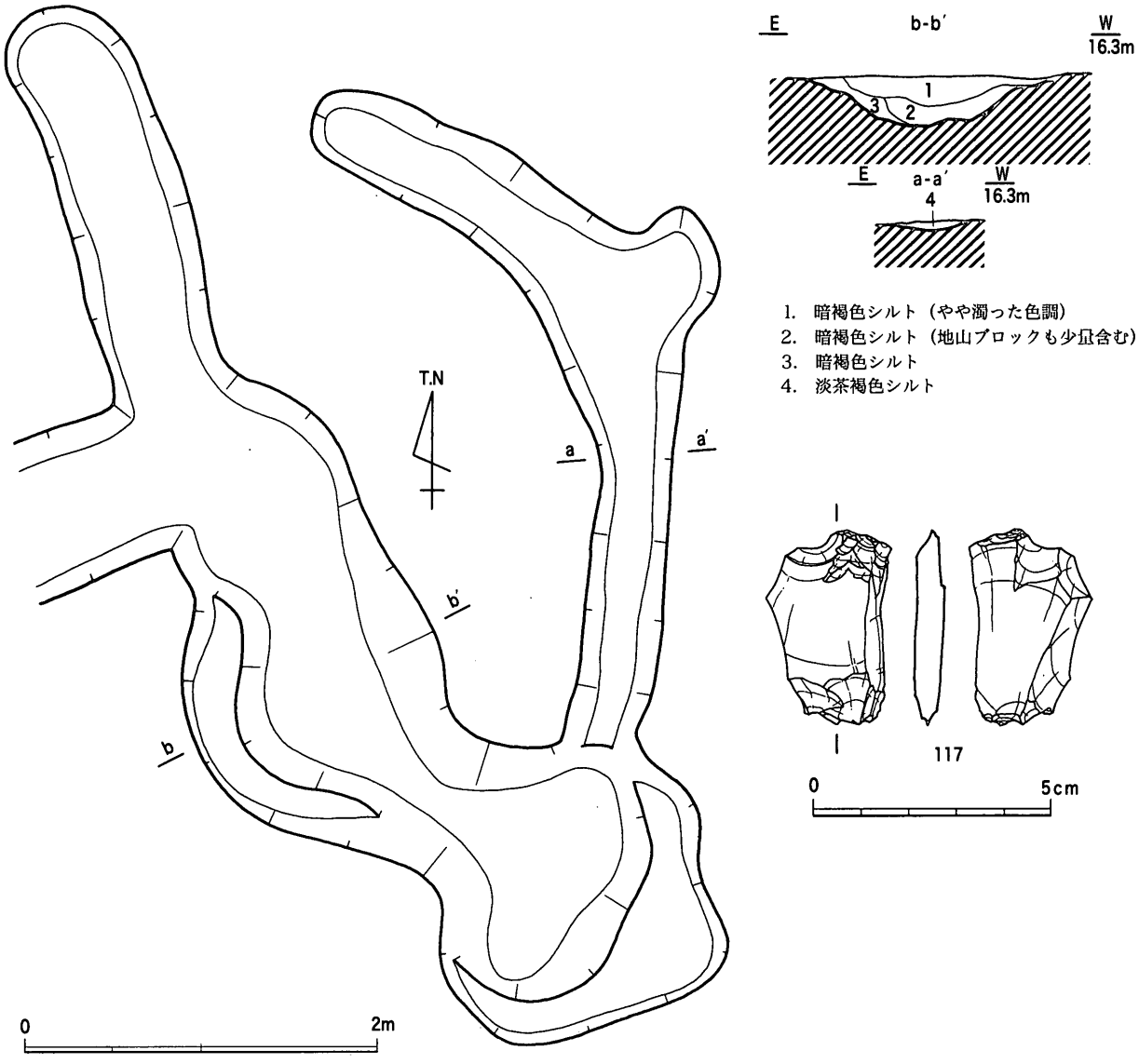
1. 暗灰褐色シルト
2. 暗茶褐色粘質土
a. 暗黄褐色粘質土
b. 暗褐色シルト
c. 暗褐色シルト礫混じり粘土
d. 明黄褐色粘土

0 1m

第66図　SXf02平・断面図（1/40）

ＳＸf02（第66図）

Ⅱ－18区中央部でＳＸf01の東側に隣接して検出された。切り合いを伴った溝が長方形に巡り，その北西部から北側へ分岐する溝もある。溝の幅は0.62～0.82ｍ，深さ0.06～0.22ｍを測り，埋土は暗茶褐色粘質土の単層である。溝内から遺物は出土していない。また溝で囲まれた範囲は長径3.75ｍ，短径2.7ｍを測り，土坑・ピットなどは検出できなかった。

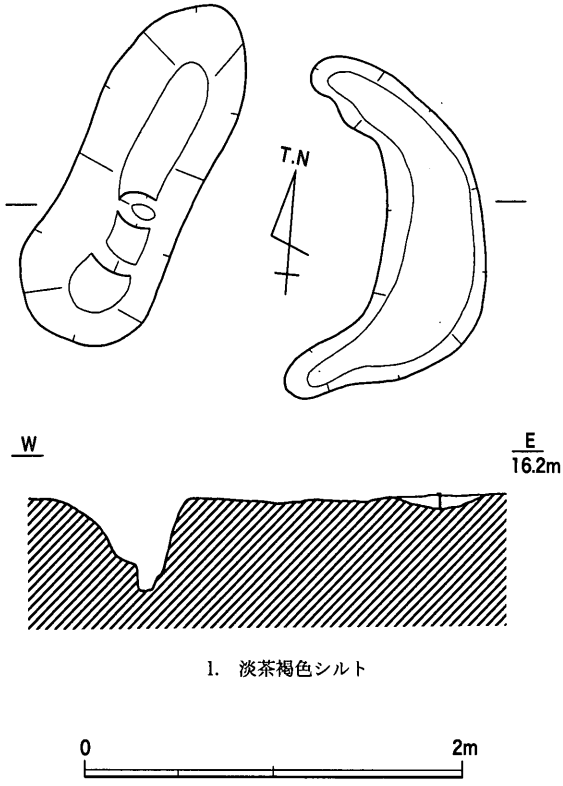


第67図　SXf03平・断面図（1/40），出土遺物（2/3）

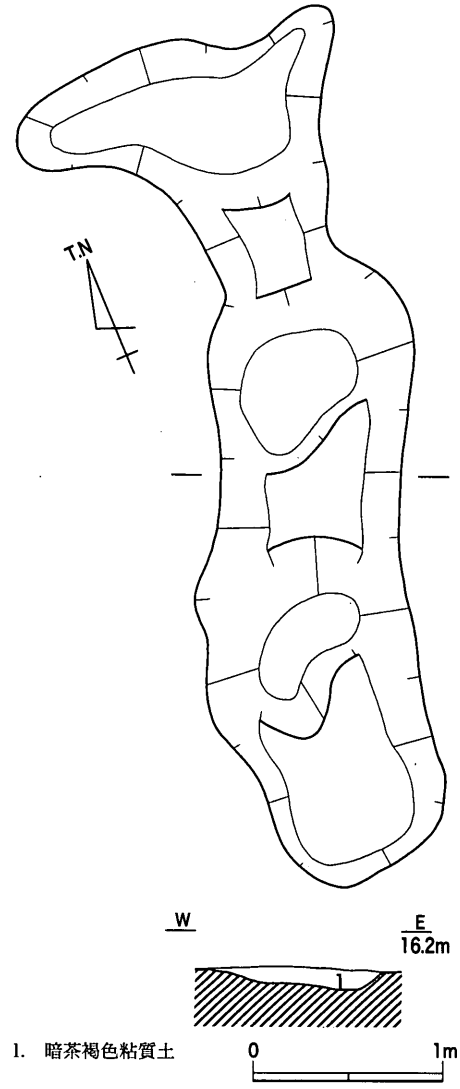
北側に溝が延びる部分の裁ち割り（ｃ－ｃ′断面）では，埋土と基盤層とが漸移的に堆積する状況がみられた。断面観察では，基盤層ｄが北東方向に下がっており，その上に基盤層ｃ→ｂ→ａの順に堆積している状況が認められた。溝の埋土は，基盤層ｂと漸移的な関係にあり，断面形態も両者は近似している。つまり，基盤層の境界付近の窪みに溝状に堆積する遺構が存在するとみることも可能であり，それが人為による偶然なのか，自然堆積の作用によるものか，検討を要する。

ＳＸf03（第67図）

Ⅱ－18区中央部でＳＸf02の東側に隣接して検出された。溝の幅は0.42～1.47ｍ，深さ0.04～



第68図　SXf05平・断面図（1/40）



第69図　SXf07平・断面図（1/40）

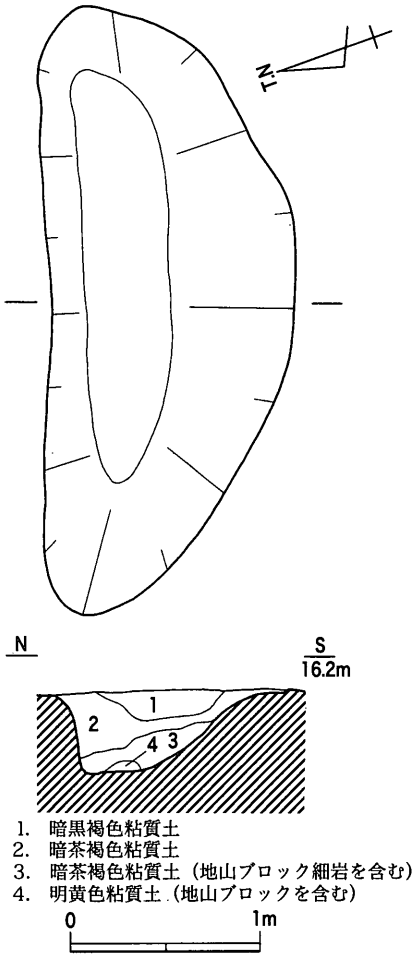
0.27ｍを測り，埋土は基盤層に近似した暗褐色系シルトを主体とする。溝底面は起伏が著しい。溝で囲まれた部分も不定形であり，長径3.65ｍ，短径1.32ｍの歪んだ楕円形を呈する。土坑・ピットは検出されなかった。遺物は，溝埋土中よりサヌカイト製楔形石器（**117**）が出土している。

ＳＸf05（第68図）

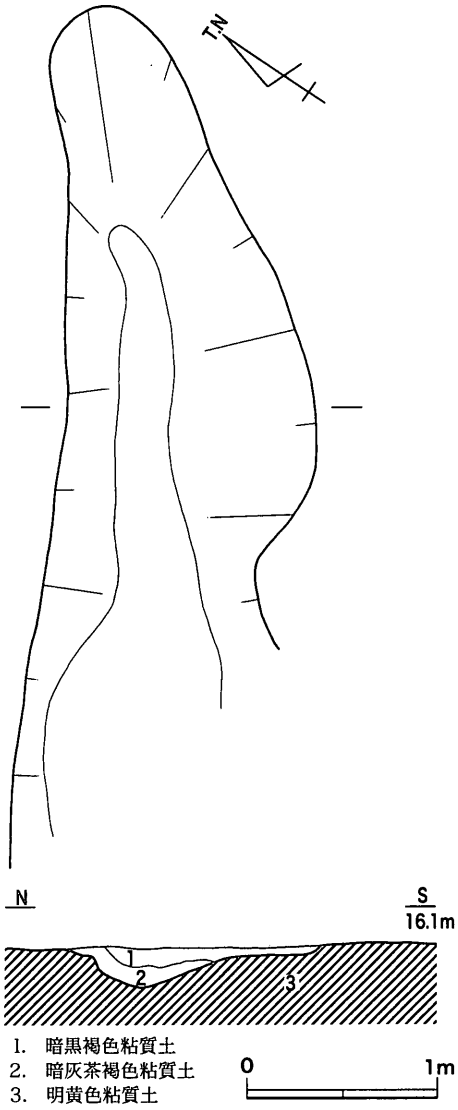
Ⅱ－18区南東部で検出された。細長い土坑状の溝（西側溝：長さ1.9ｍ，幅0.67ｍ，深さ0.47ｍ）と，その東側のコの字プランの溝（東側溝：幅0.56ｍ，深さ0.09ｍ）で，長径1.45ｍ前後，短径1.05ｍの範囲を歪な長方形プランに囲んでいる。西側溝と東側溝は，深さが極端に異なっており，西側溝底面自体，かなり深度に違いがある凹凸面となっている。埋土は淡茶褐色シルトであり，基盤層の表層に近似した色調・土質であった。遺物は出土していない。

ＳＸf07（第69図）

Ⅱ－17区西端部中央で検出された。北端が僅かにＬ字形に屈曲する南北方向の溝であり，検出長4.5ｍ，幅0.9ｍ，深さ0.12～0.29ｍを測る。底面の起伏はかなり顕著である。埋土は基盤層の表層に近似した暗茶褐色粘質土であった。遺物は出土していない。



第70図　SXf08平・断面図（1/40）



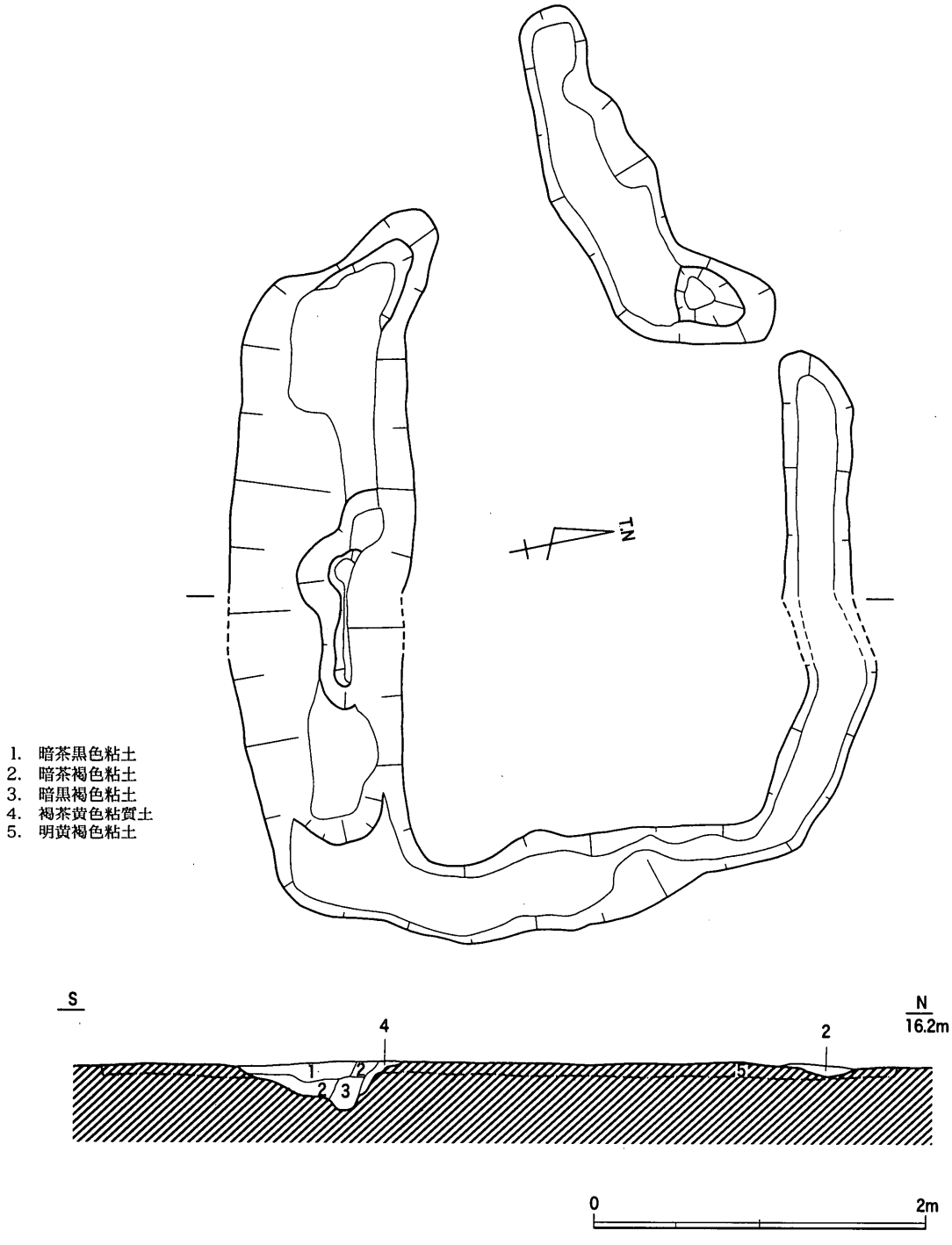
第71図　SXf09平・断面図（1/40）

ＳＸf08（第70図）

Ⅱ－17区西端部中央のＳＸf07の南側で検出された。長径3.15ｍ，短径1.25ｍ，深さ0.43ｍを測り，平面形態は北肩部が直線的であり，南肩部は中央部が膨らむ円弧状のプランを呈している。底面は中央部が最も深くなっているが，特に顕著な起伏は認められない。断面形態は北側壁面が垂直に近く立ち上がっており，南側壁面は緩やかな傾斜となっている。埋土は４層に細分でき，上層（第１・２層）は暗褐色系の粘質土，下層（第３・４層）は基盤層のブロック土を含んだ粘質土となっている。遺物は出土していない。

ＳＸf09（第71図）

Ⅱ－17区西半部で検出された。細長く不定形な土坑状のプランを呈しており，長径4.47ｍ，短径1.32ｍ，深さ0.22ｍを測る。断面形態は浅いＵ字形であり，北西側の壁面が比較的急傾斜となっている。埋土は２層に分けられ，上層は暗黒褐色粘質土，下層は暗灰茶褐色粘質土である。基盤層は明黄色粘質土であるので，埋土と基盤層は明瞭に区別できた。遺物は出土していない。

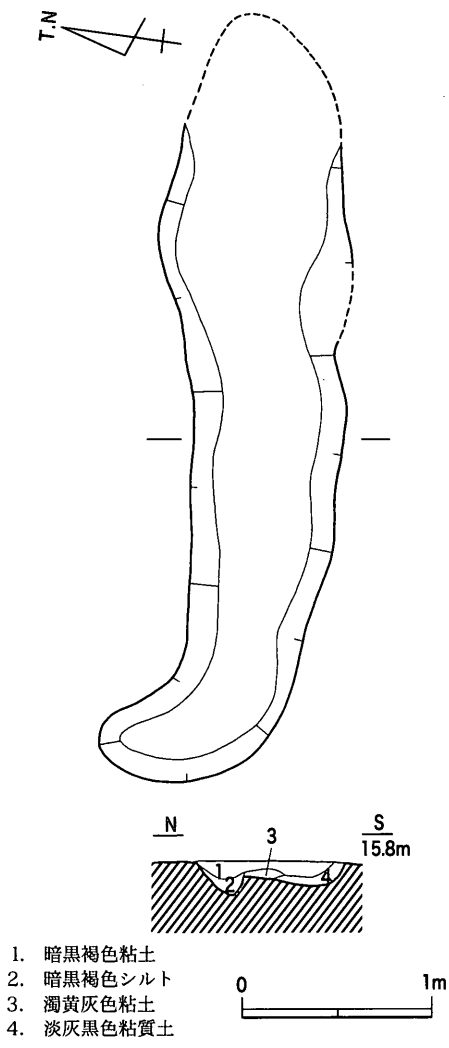


第72図　SXf10平・断面図（1/40）

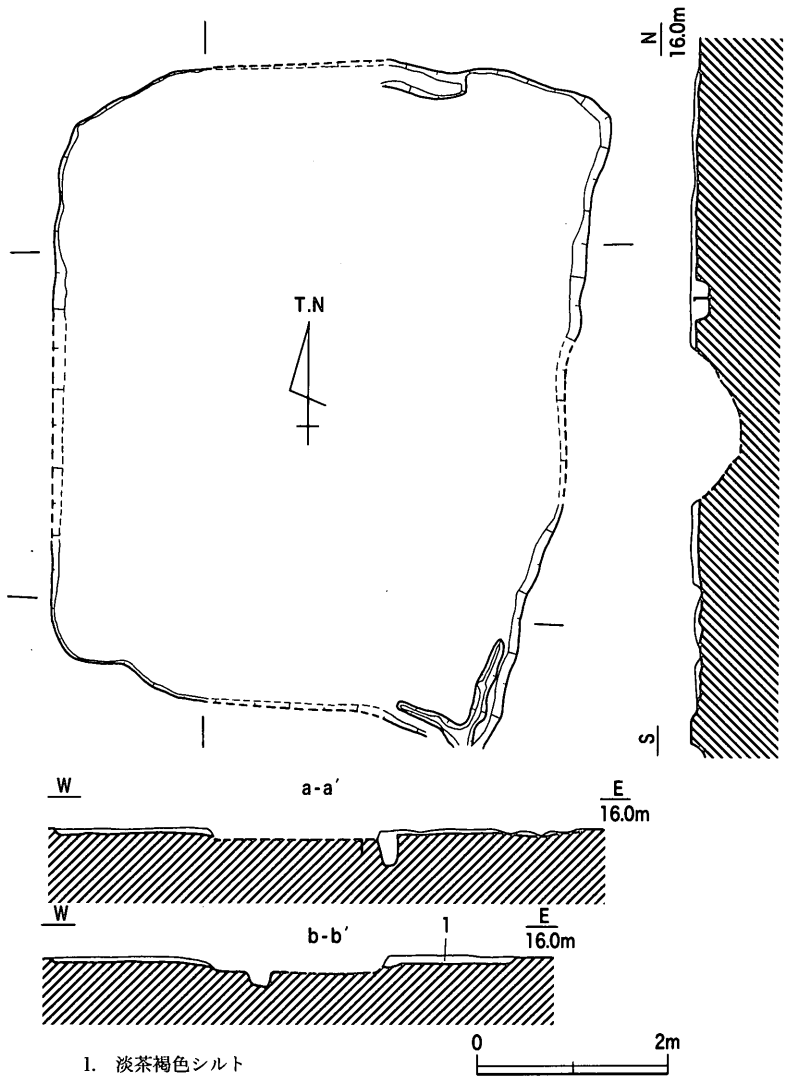
SXf10（第72図）

Ⅱ－17区中央部で検出された。北・東・西３辺を直線的に廻るコの字プランの溝と，西辺のＬ字プランの溝によって，方形周溝状の遺構が形成される。方形周溝は東西に長い長方形であり，長径3.7ｍ，短径2.25ｍを測る。周溝状の内側では土坑・ピットは検出されなかった。

南側周溝は幅0.99ｍ，深さ0.2～0.41ｍを測り，底面は中央部に向かって次第に深くなっている。断面形態は，内側（北側）掘り込み壁面が急傾斜であり，外側は緩やかに立ち上がる。東・北側周溝は幅0.25～0.55ｍ，深さ0.06ｍを測り，南側周溝に比べて幅・深さともに極端に小規模なものになり，北西隅で途切れる。西辺周溝は，北西隅に近い北半部で南北方向に延びるが，西辺中央部で西側方向に



第73図　SXf11平・断面図（1/40）



第74図　SXf12平・断面図（1/40）

屈曲して1.85m程度延びる。埋土は暗茶褐色ないし暗黒褐色系の粘土であり，周囲の基盤層（明黄褐色粘土）とは明瞭に識別できた。遺物は，弥生土器細片がごく少量出土した。

SXf11（第73図）

Ⅱ－17区南東部で検出された，平面L字形に延びる溝状の遺構である。規模は幅0.78m，深さ0.19mを測り，底面には若干凹凸が認められる。埋土は4層に分けられ，上層（第1・2層）は暗黒褐色シルトないし粘土，下層（第3・4層）は基盤層が濁ったような粘土層であった。遺物は出土しなかった。

SXf12（第74図）

Ⅱ－17区南東部で検出された，長方形プランの浅い落ち込み状遺構である。規模は長径6.56m，短径4.95～5.75m，深さ0.09mを測る。削平が著しいことと，中央部が攪乱によって破壊されていることから，遺存状況は極めて悪い。南東隅と北辺中央部では，掘り込みに沿って延びる小溝が検出されており，竪穴住居の壁溝に近似した形態を示す。ただし，主柱穴に相当するピットがみられず，また落ち込み内で検出された暗黒褐色粘土を埋土とするピットは，いずれも埋土の上面から掘り込まれており，底面に伴う柱穴を確認することはできなかった。遺物も皆無である。竪穴住居としての可能性を否定できないものの，性格不明遺構として報告しておく。

第３節　中世前半の遺構・遺物

１．概要

中世前半（11世紀中葉～13世紀後葉）の遺構は，Ｆ区東半部を中心に分布する。発掘時の調査区名ではⅡ－18・23・24区，Ⅲ－１・２・４・６・７・８・９・37・38区が該当する。このうちⅢ－１・２・４・６・７・８区では南北108ｍ，東西125ｍの範囲が大溝で区画されており，その内側に大型建物を含む掘立柱建物群が展開する。これを区画１と呼称する。さらに区画１内は，大溝・小溝によって中心区画（小区画ａ），東側区画（小区画ｂ），西側区画（小区画ｃ）に細分される。出土遺物から，13世紀前葉～後葉（末葉を含まない）の年代が考えられ，掘立柱建物の重複関係や屋敷墓の時期差などから２小期程度の変遷過程を辿ることが可能である。小区画ａにおける多様な建物形態からは，中心区画における建物の機能分化と配置を推測することが可能であり，貴重な調査成果といえる。なお西辺区画溝のⅢ－１区ＳＤf16では，層位的な遺物の取り上げを行った結果，第５章第１節で検討するような編年作業の基準資料としての重要な所見を得ることができた。

区画１西辺溝の外側（西側）にあたるⅡ－23・24区では，南北30ｍ，東西40ｍ程度の範囲に掘立柱建物の集中がみられた。この範囲の西半は中世後半の建物群と重複しているが，柱穴出土の土器などから当該期の建物群を分離することが可能である。明瞭な区画施設は伴わないものの，建物群のまとまりを重視するならば，何らかの分布上の規制が働いていたことが想定できるため，区画２としておきたい。出土遺物は12世紀前葉～中葉に遡るものが存在しており，区画１よりも上限が遡るとみられるが，主体となる時期は区画１と同じであり，また同時に廃絶している点が後続する区画の消長と併せて注目される。

この他，Ⅱ－18区とⅢ－８区でも当該期の建物が検出されており，散在的な集落形態を示している。さらに区画１の東側では，既に報告（空港跡地Ｊ地区）された12世紀前葉～中葉の建物群が検出されており，全体として中世前半の村落景観をよく示す資料との位置付けが可能である。

なお，各遺構の時期決定は，遺構の切り合い関係と遺物の編年観で行った。高松平野における中世土器編年については既に先学の成果もあるが，今回の調査で良好な資料が得られたため，新たに設定した編年案を用いた。編年案については，第５章第１節を参照されたい。

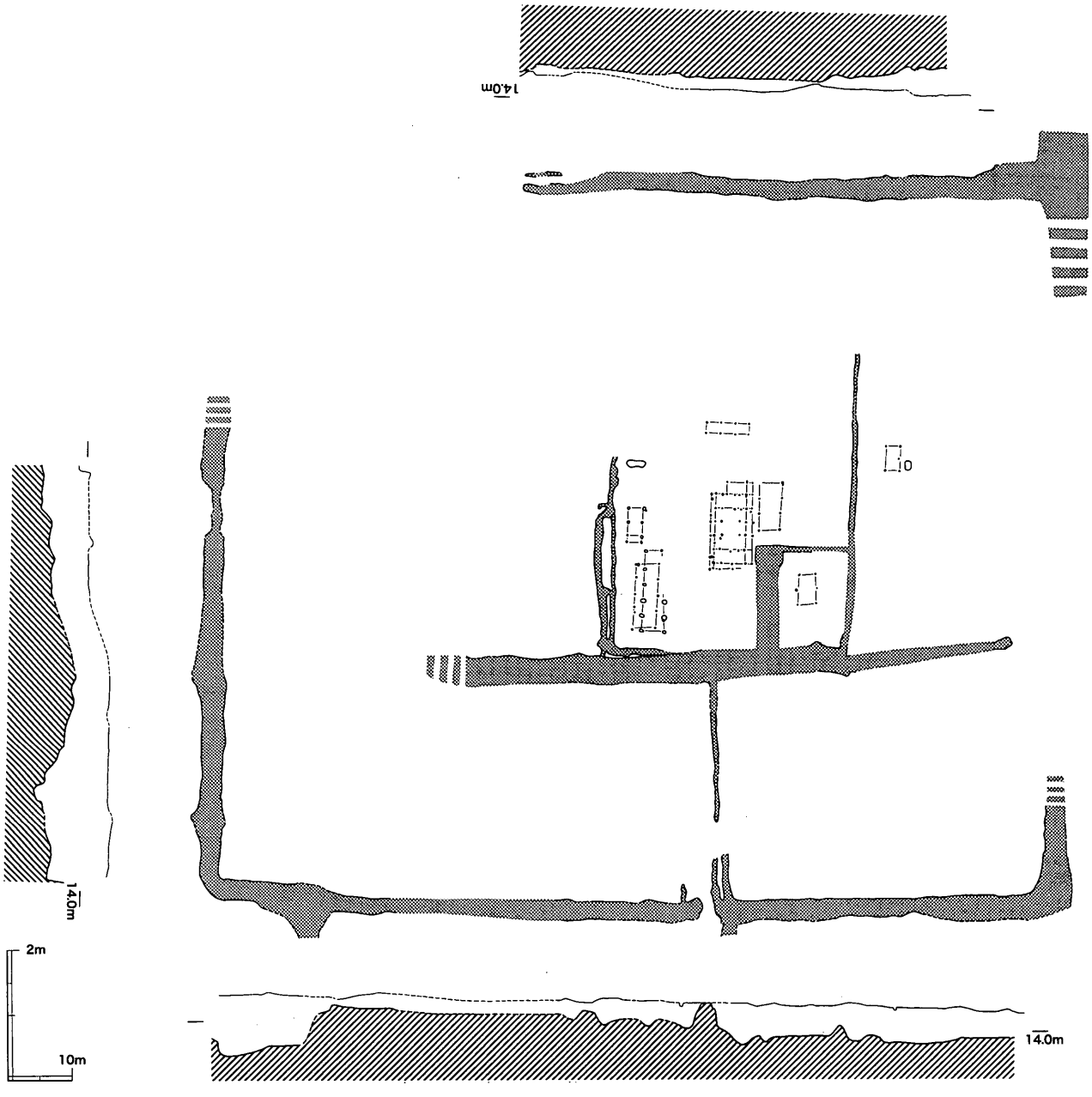
２．区画１

ａ．範囲と規模

北辺をＳＤf17，東辺をＳＤf16，南辺をＳＤf16，西辺をＳＤf16によって区画されており，区画された範囲（区画溝の内側肩部からの計測値）は東西125ｍ，南北108ｍの長方形プランを呈する。区画溝のうち北・東・南の各辺は条里型地割の坪界線と一致しており，１町分＋αの面積を占有していたことになる。東辺部の大半は近世～近代の溝によって破壊されているが，他の辺では区画溝の遺存状況は比較的良好であり，具体的に区画の状況について検討可能である。中でも南辺区画溝の中央で陸橋部が検出されていること，また南西隅部でも同様な陸橋状の底面の盛り上がりが認められる点は，これらの

区画溝が単なる用水路ではなく，屋敷地の大区画溝としての機能も有していたことを端的に示しているといえよう。推定される水流方向は，各区画溝の報告中で記述したい。

区画内の中央部は南側を東西方向の大型溝ＳＤf18によって区画された上に，南北方向の小溝ＳＤf24・ＳＤf19によって３つの小区画（ａ～ｃ）に細分される。小区画ａは，東西36ｍ，南北35ｍの範囲にあり，大型建物を含む７棟の掘立柱建物からなる。小区画ｂは，屋敷墓に伴うとみられる小型建物１棟が検出された。また小区画ｃは，建物の復元には至らなかったが13世紀代の遺物が出土していることから，当該期の小規模な建物群の存在が想定できる。



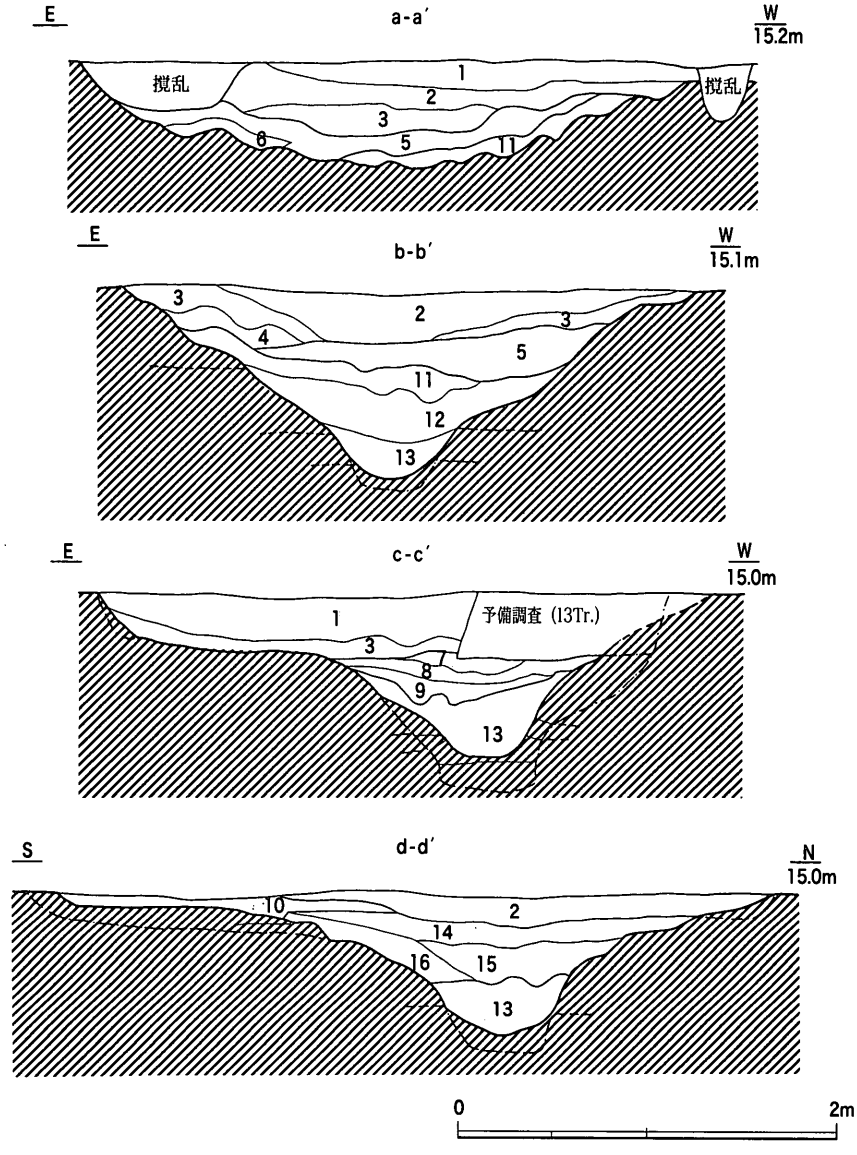
第75図　区画１概略図（平面1/1000，断面垂直方向/100）

b．区画施設

SDf16（第76～101図）

Ⅲ－1・2・8区で検出された。区画1の西辺・南辺・東辺南端の各部を区画する溝であり，南辺部中央で陸橋部により分断されているが，溝相互の切り合い関係がなく出土遺物の年代観も同一であることから，連続した同一遺構とみてよいものである。このため，遺構の形態や土層堆積状況については，統一的に記述する。出土遺物については，調査年度・担当が異なることによる取り上げ方法の違いがあり，全てを整合的に記述することが困難である。このため出土遺物は，層位別に取り上げた西辺部南半～南辺部西端（Ⅲ－1区部分）での状況を報告した上で，西辺部北半（Ⅲ－2区部分），南辺部中央～東端（Ⅲ－8区）を記述することとしたい。

形態・規模　西辺部の検出長65m，南辺部の検出長125m，東辺部の検出長12mを測る。西辺部はN－10°－Eの方向で延びており，坪界線には一致しないが主軸は地割の方向と一致する。南辺部は東半部（Ⅲ－8区部分）でW－10°－Nの方向であり，近世以降の坪界溝と一致した方向をもつが，西辺部へと屈曲す



1. 淡茶褐色シルト質細砂
2. 濁茶褐色シルト質細砂
3. 淡茶灰色シルト質細砂
4. 淡灰褐色シルト質細砂（遺構面の暗茶褐色粘土をブロック状に含む）
5. 淡灰褐色シルト質細砂（砂を部分的に含む）
6. 暗褐色シルト質細砂（砂混じり）
7. 淡褐色細砂
8. 淡茶灰色シルト質細砂（やや粘性帯びる）
9. 淡褐色細砂
10. 淡褐色粗砂
11. 淡灰黒色粘土（鉄分を含む、草根痕か）
12. 暗黒灰色粘土（鉄分を含む、草根痕か）
13. 暗黒色粘土
14. 淡灰黒色シルト
15. 淡褐色細砂（淡青灰色シルトを含む）
16. 暗青灰褐色シルト（やや粘性あり）
17. 暗黒色粘土（遺構面）
18. 淡黄色褐色～暗褐色粘土（地山）
19. 暗黒色粘土（拳大の礫を多量に含む。やや泥炭気味）
20. 暗灰色粗砂（よく締まり、礫を含む）
21. 暗灰褐色シルト～粘土
22. 灰色砂礫

上層　中層　下層

第76図　SDf16西辺部（Ⅲ－1区部分）断面図（1/40）

る西半部（Ⅲ－１部分）ではW－15°－Nと若干北に振った方向をとるようになる。また，坪界線との位置関係をみると，東辺部では近世以降の溝と完全に一致するため肩部がわずかに遺存するのみであるが，南辺部では近世以降の溝から３m程度（最深部での芯々距離）北側を併走しており，完全には一致しない。

溝幅は各辺とも大差ないが，断面形態はかなり異なる。西辺部の中央・南端と南辺部の西端は，断面V字形ないし底幅の狭い逆台形を呈しており，ｃ－ｃ′断面で幅3.02m，深さ0.95mを測る。これに対して西辺部南端と中央の間と西端部を除く南辺部では，浅い台形ないしU字形の断面形態を呈しており，ｂ－ｂ′断面で幅3.2m，深さ0.55mを，ｉ－ｉ′断面で幅2.6m，深さ0.36mを測る。

なお，Ⅲ－２区部分での溝肩部のレベルは14.5m前後であり，Ⅲ－１区部分よりも0.4m程度低くなっている。Ⅲ－２区では遺構面上に旧耕土が堆積しており，このような比高差が少なくとも近世～近代にまで遡ることは間違いない。しかし溝幅がⅢ－２区で狭くなっていること，また近世の出水状遺構を境に遺構面が下がることを考慮すると，このような状況が中世前半まで遡るものとは考え難く，おそらく近世段階での耕地化に伴う削平によるものと考えられる（第２章第１節参照）。したがって，Ⅲ－２区部分での溝の深さは，0.9m以上に及ぶことが推測される。

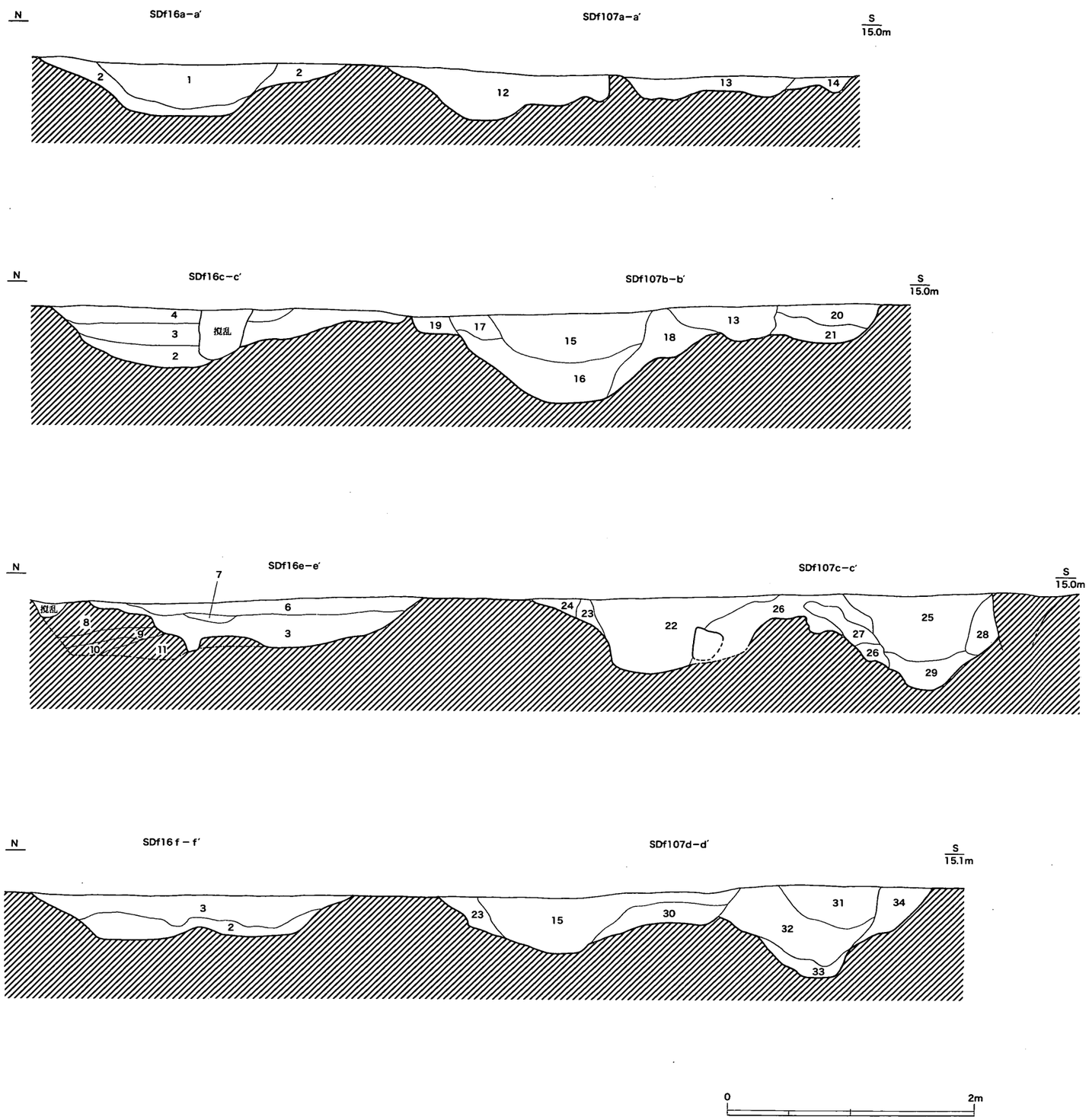
底面形態と傾斜方向　上記した断面形態と規模に関係するが，溝の縦断方向での底面形態と傾斜方向をみておく（第75図）。西辺部は断面U字形の中央部の底面が高く，中央部と南端での底面レベルはほぼ同一である。南辺部では，南側からＳＤf16に繋がるＳＤf16－ｂとの合流部以西（南辺部西端）の底面が深く，西辺部へと連続している。ＳＤf16－ｂ合流部以東の南辺部西半では，底面が急激に浅くなっており，そのまま変化のないまま南辺部中央の陸橋部に至っている。陸橋部以東の南辺部底面は若干深いが，大きな深度の変化もなく東辺部に至る。

土層堆積状況　西辺部～南辺部西端と南辺部中央～東端では，堆積状況が異なる。西辺部～南辺部西端の層序は13層に細別できるが，これらは大別３層にまとめることができる。すなわち，淡茶褐色系シルトを主体とする上層，淡褐色系細砂を主体とする中層，灰黒色系粘土よりなる下層である。各層の成因としては，下層には草根痕とみられる鉄分の集積がみられ，またヘドロ状に粘性のある土質であることから，淀んだ滞水状況を示すものと考えられる。底面の浅くなる西辺部中央では，下層の層厚が極めて薄い。中層は細砂層もしくは細砂層を含むシルト層であり，そのレベルがほぼ一定していることから，底面の起伏が下層の堆積によって平準化され，その結果スムーズな流水状態が生じたものと思われる。上層は，基盤層に近似する土質・土色であることから，中層堆積後の浅くなった溝内に周辺からの緩やかな流れ込みがあったことを想定させる。

南辺部中央～東端では，上位に砂質土が堆積する箇所も一部で認められたが，基本的には褐色系の粘質土が細別２～３層ほぼ水平に堆積していた。細別各層の層厚は厚く，その堆積状況は西辺部の下層に近似している。また再掘削（浚渫）の痕跡は認められず，一定の滞水状況で静穏な埋積過程を経たとみてよかろう。

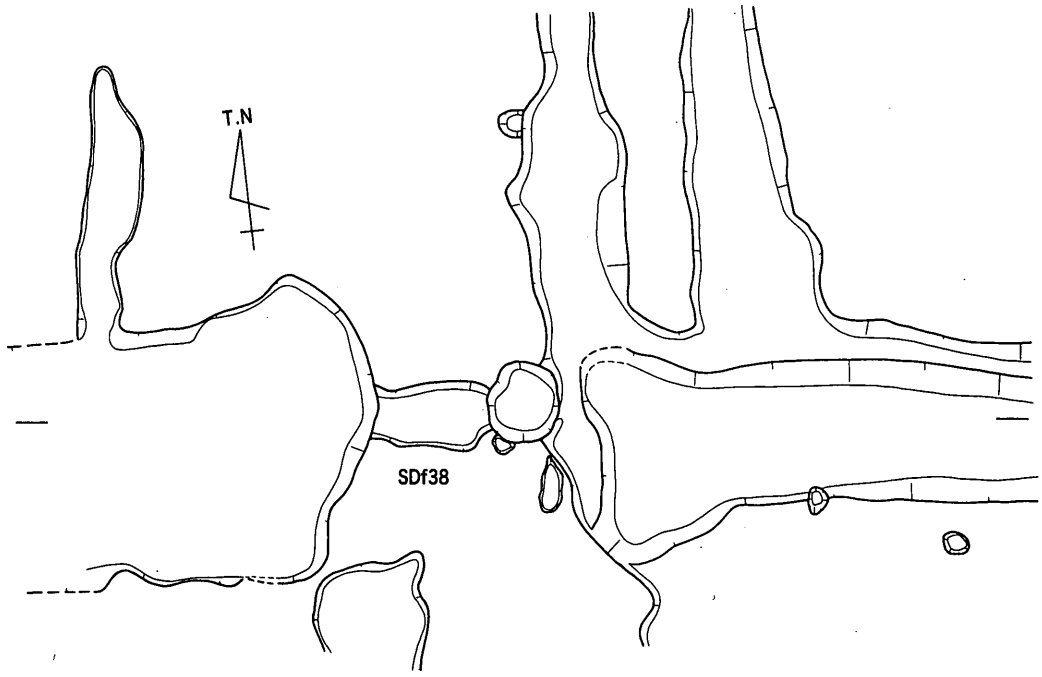
陸橋部　南辺部中央で溝本体を掘り残して作られている。幅2.1～2.85m，高さ0.4mを測る。また，陸橋部の南北両側では側溝状の小溝が検出された。これらについては後述する。

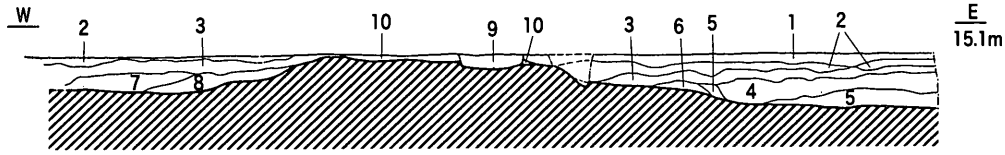
この他，西辺部と南辺部の屈曲部底面は，両側の底面よりも0.25m程度の盛り上がり状に掘り残されており，小規模な陸橋状にもみえる。ただし，この部分の上には下層埋土が堆積しており，滞水時にはみえていなかったようである。



1．　淡赤褐色砂質土（礫を含む）空港の撹乱
2．　淡灰褐色粘質土（鉄分を含む）
3．　淡黒褐色粘質土
4．　淡黄褐色シルト質土
5．　淡黒色粘土質
6．　淡褐色砂質土
7．　暗褐色砂質土
8．　黄灰色粘土（地山）
9．　灰色シルト（地山）
10．　灰色細砂（地山）
11．　濁黄褐色シルト（地山）
12．　濁褐色砂質土（バラスを含む）
13．　淡灰白色砂質土（バラスを含む）
14．　淡赤灰色砂質土
15．　暗濁褐色砂質土（バラスを含む）
16．　暗濁褐色砂質土（バラスを含まない）
17．　淡赤灰色粘質土
18．　淡灰白色粘質土（バラスを含まない）
19．　淡灰黄褐色砂質土
20．　淡灰色粘質土（地山をブロック状に含む）
21．　淡灰色粘質土
22．　淡黒褐色砂質土（バラス花崗土を含む）
23．　淡黄褐色粘質土
24．　淡褐色砂質土
25．　黒色粘土ブロック
26．　淡灰褐色砂質土（礫・鉄分を含む）
27．　黒色粘質土（地山ブロック・淡灰褐色砂質土をラミナ状に含む）
28．　淡灰褐色砂質土（鉄分を含む）
29．　淡灰黒色シルト
30．　淡灰白色砂質土（黒褐色粘質土をラミナ状に含む）
31．　淡灰色粘質土（地山の黒色粘土をブロック状に含む）
32．　淡灰色粘質土
33．　淡黒灰色粘質土
34．　淡灰白色砂質土（鉄分を含む）

第77図　SDf16・SDf107断面図（1/40）





1. 淡褐色砂質土
2. 淡黒褐色砂質土
3. 淡黒褐色粘質土
4. 淡灰色シルト（淡黄褐色細砂と互層になる）
5. 淡灰色シルト
6. 淡黄褐色細砂
7. 淡灰褐色粘質土
8. 淡灰褐色シルト質土
9. 淡灰白色シルト質土（礫を含む）　SKf246埋土
10. 暗茶褐色シルト質土　SDf38埋土

0　2m

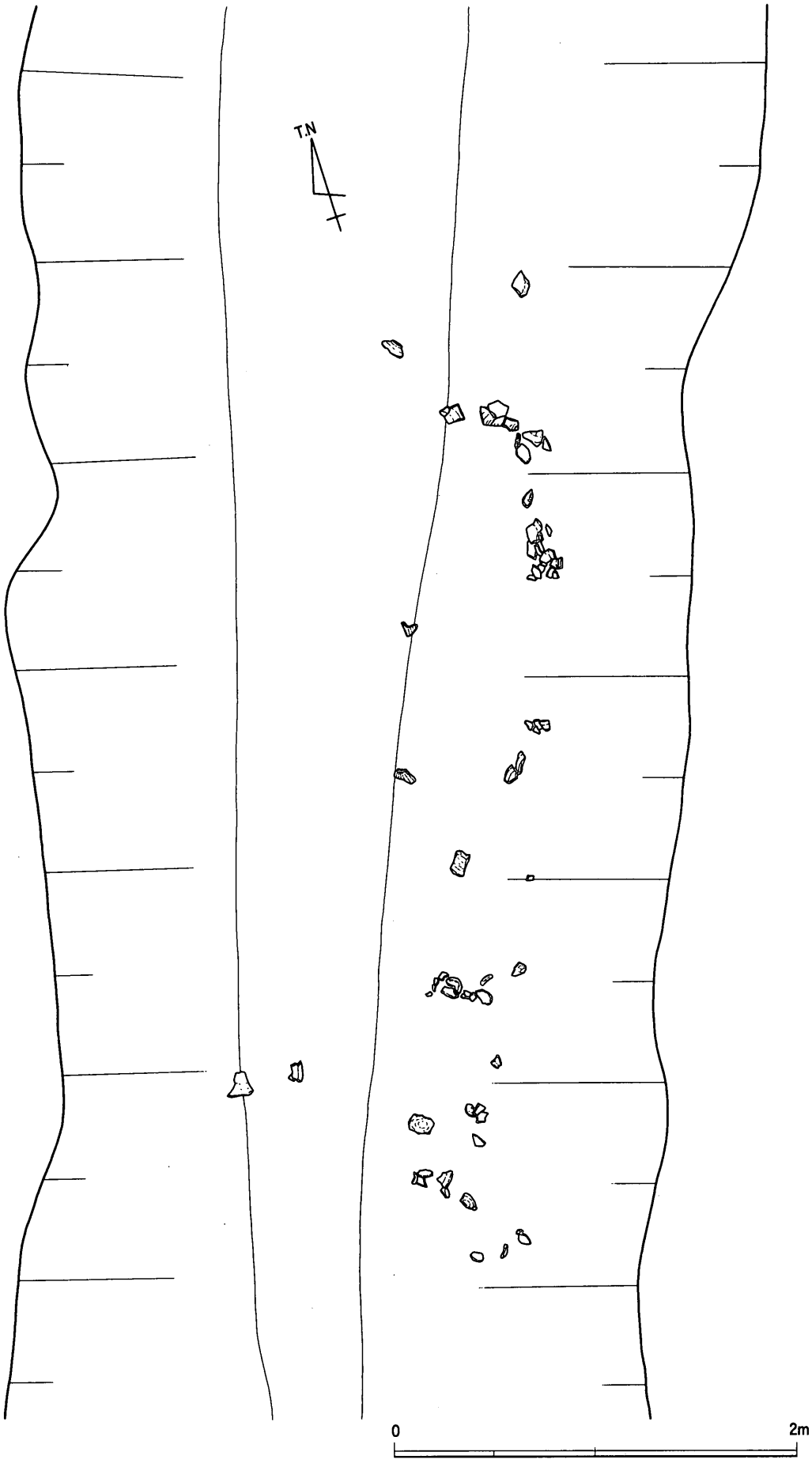
第78図　SDf16南辺陸橋部平・断面図（1/40）

遺物出土状況　コンテナ13箱分の中世土器・陶磁器（西辺部10箱，南辺部3箱）が出土した。遺物は溝内のほぼ全体にわたって出土したが，特に西辺部中央～南端と南辺部中央では相対的に出土量が多い傾向にあった。西辺部中央～南端の上層では，2箇所で土器がまとまって出土したが，いずれも溝の東肩部から底面（中層上面）にかけて分布していた。これは，区画1内側からの投棄を示唆する可能性があろう。また，南西屈曲部の下層からは用途不明の板材が，南辺部東端上層からは馬歯が出土した。

遺物の取り上げ方法は，西辺部～南辺部西端では上記した土層の大別が明確に認識できるものであり，大別層位毎（上層・中層・下層別）に取り上げた。一方，南辺部中央から東端部は一括して取り上げた。このため，層位毎の内容が明確化できるのは西辺部中央～南辺部西端の地点に限られ，資料の提示が必ずしも適切に行えない憾みがある。

Ⅲ－1区部分上層出土遺物（第81～84図）　土師質土器小皿・杯・台付杯・足釜・鍋，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢，吉備系土師質土器椀，亀山焼甕，東播系須恵器甕，白磁碗，青磁碗などのほか，須恵器杯蓋・杯・壺などの古代の遺物，サヌカイト製石器が出土している。

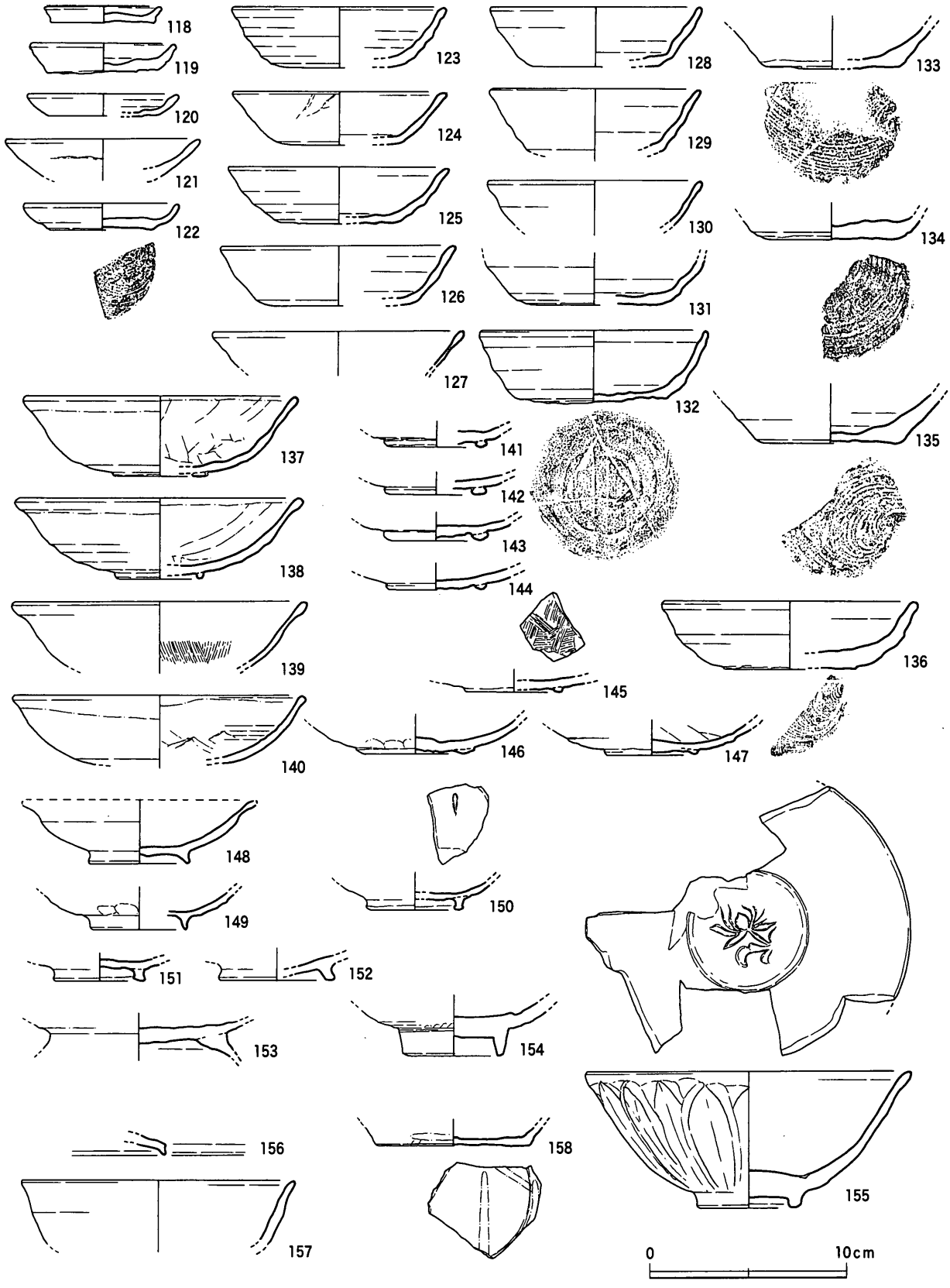
土師質土器小皿（**118**～**122**）には，底部ヘラ切りのもの（**119**～**121**）と，底部糸切りのもの（**122**）がある。**118**は，極端に短く外反する口縁部をもち，見込みが極めて浅いコースター状を呈す



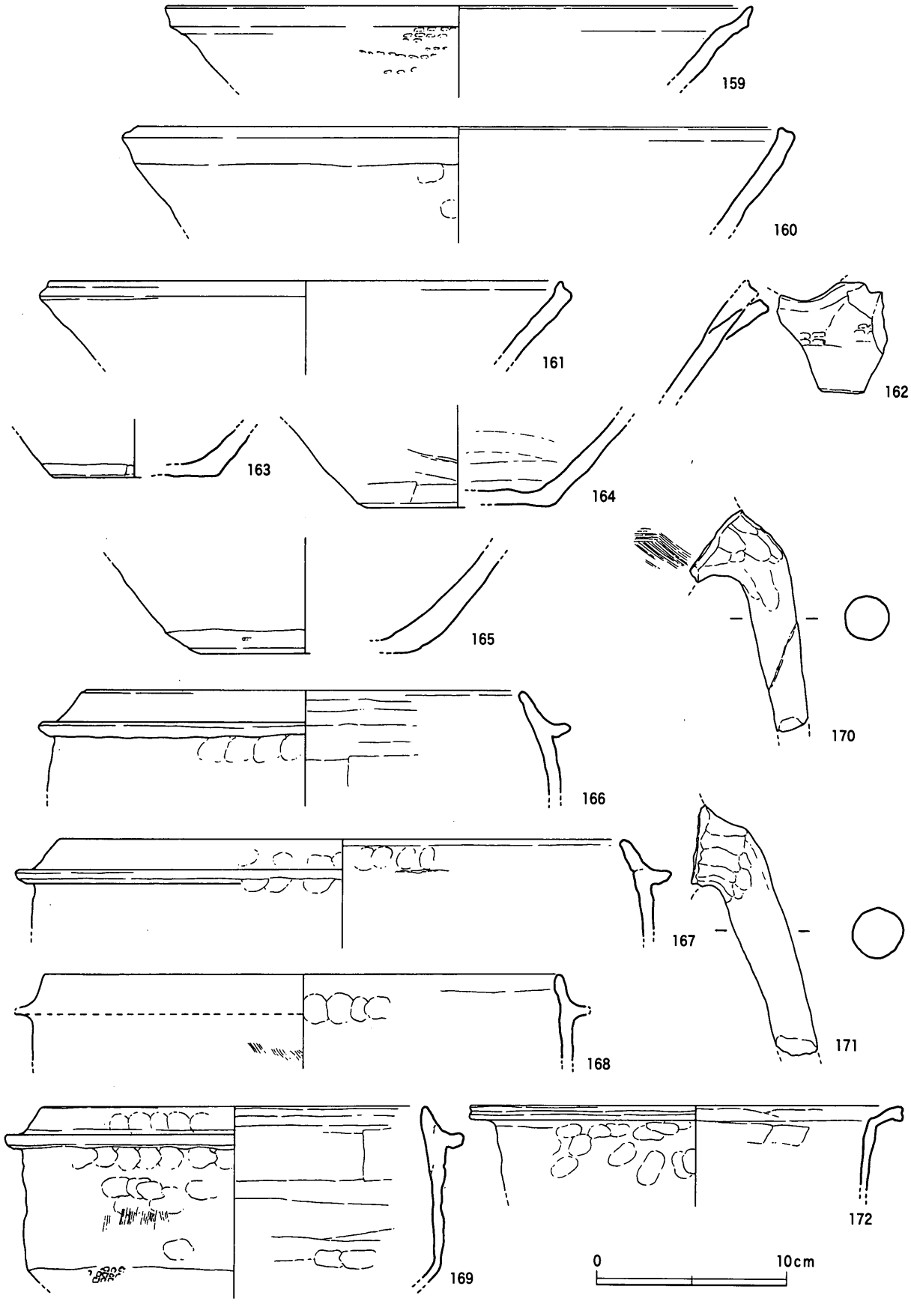
第79図　SDf16遺物出土状況（1）（1/30）

第80図　SDf16遺物出土状況（2）（1/30）

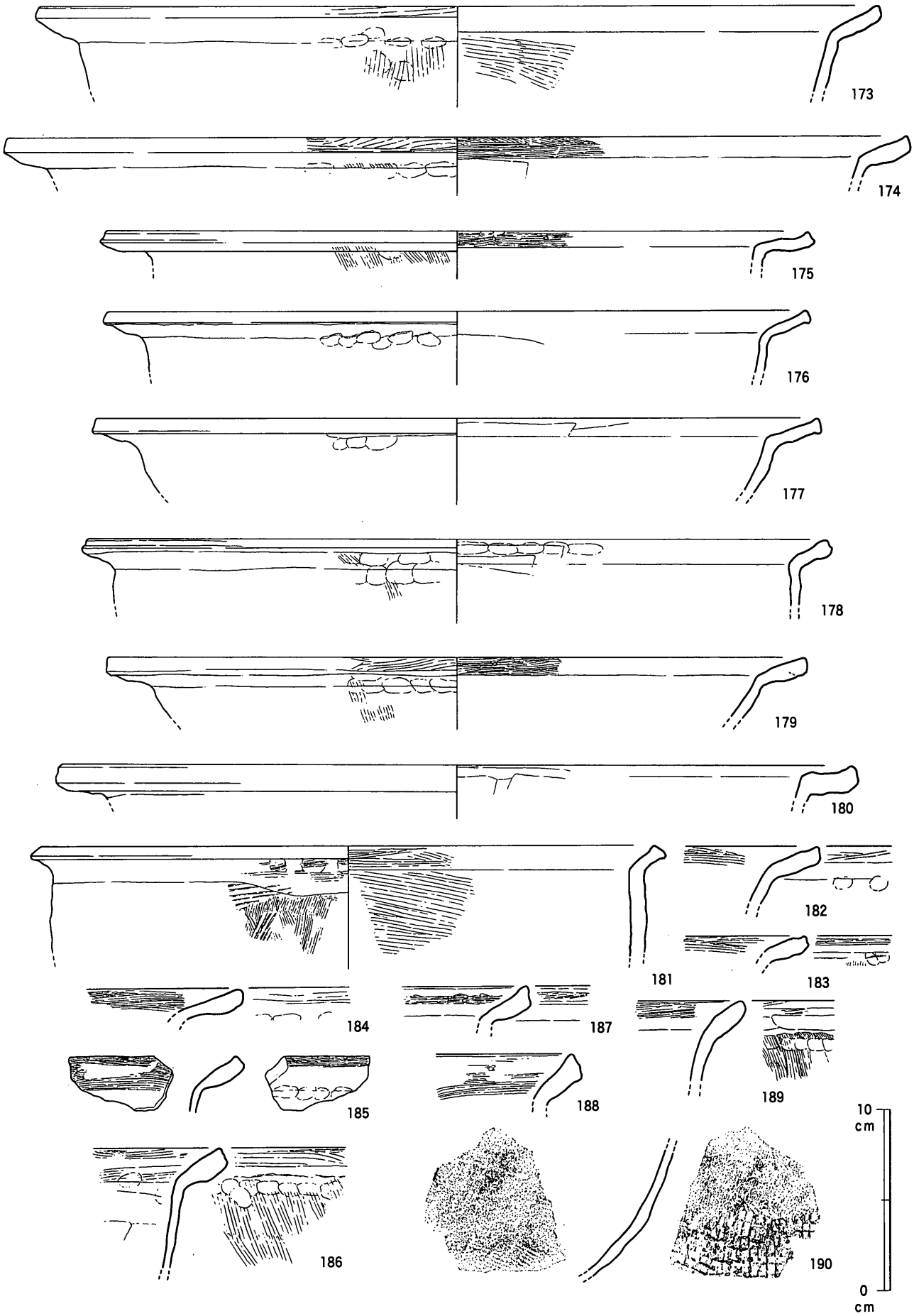
る。このタイプの小皿は，区画１よりも後出する区画３・４から少量出土しており，ＳＤf16の最終埋没時の混入品と捉えておく。**119**は，やや内弯気味に立ち上がる短い口縁部をもつ。区画１－ａに伴う遺構群で最も普遍的な形態のものであり，口径7.5㎝を計る。**120**は器面の遺存状況がよくないが器壁が薄く，やや特異な形態のものである。**121**は，長く外傾する口縁部をもち，より古い時期の所産と考えられる。外面には水平方向の接合痕がみられる。**122**は，強く内弯して立ち上がる口縁部をもち，糸切り底の小皿としては一般的な形態ではない。



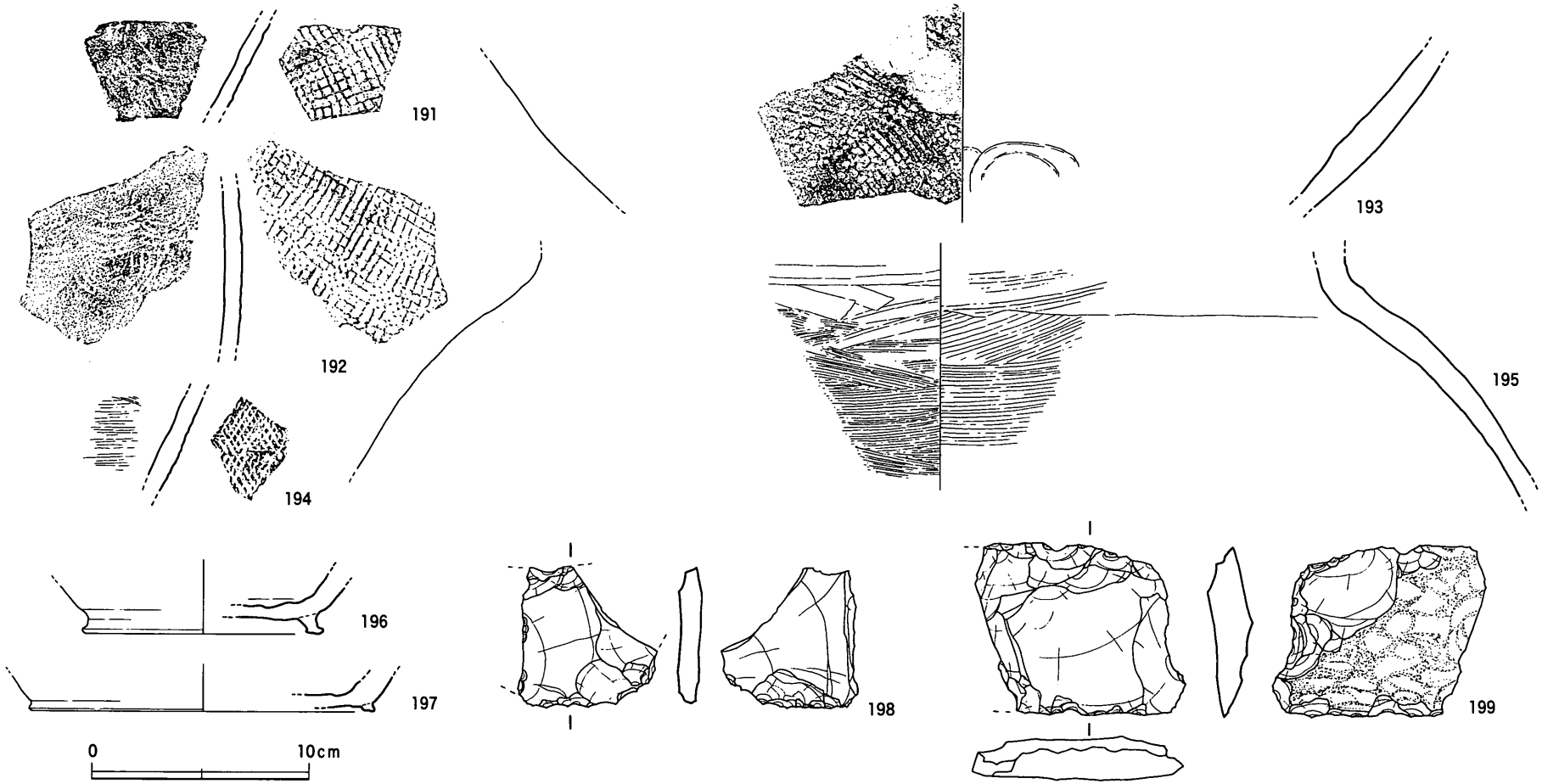
第81図　SDf16上層出土遺物（1）（1/3）



第82図　SDf16上層出土遺物（2）（1/3）



第83図　SDf16上層出土遺物（3）（1/3）



第84図　SDf16上層出土遺物（4）（1/3）

土師質土器杯（**123**～**136**）には，小皿同様に底部ヘラ切り（**123**～**132**）と，底部糸切り（**133**～**136**）の２者が存在する。ヘラ切り底の杯は，胎土の色調が黄褐色から灰白色を呈するものとばらつきがあるが，細かな形態・技法差の指摘までには至らない。口径は10.5～11.0㎝前後に集中する（**123**～**125**・**128**～**130**）。それ以外の大振りな口径をもつものも，**127**は遺存状況が悪く本来的な法量とは異なる可能性があるので一応排除すると，11㎝台のうちに収まることとなる。したがって，全体としてはかなり口径の小さな一群とすることができる。形態は，底部外縁（体部外面下端）が明瞭に屈曲し，やや直線的に内弯する口縁部と体部をもつ。また全体に器壁が薄く作られている。**123**・**125**は，外面のロクロ目が顕著であり，体部中位に弱いアクセントがある。**124**外面には，口縁部から体部中位にかけて，斜め方向の接合痕が認められる。**132**は，底部外面にヘラ切り後に付された板目状の圧痕がある。見込みにみられる回転ナデ後のナデ調整に伴う痕跡と考えられる。底部糸切りの杯は，色調が暗褐色ないし赤褐色を呈するものであり，石英・長石などを比較的多く含む粗質の胎土をもつ。器壁はヘラ切り底に比して厚手であり，底部の糸切り時の回転方向は右回りである。形態的には，直線的に外傾する口縁部・体部をもつもの（**133**・**144**）と，口縁部直下で直立気味に屈曲するもの（**136**）の２者が存在する。後者の技法的特徴は，後述する。

十瓶山窯産須恵器椀（**137**～**147**）は，体部下半が大きく外傾しながら内弯しており，体部中位で緩やかに屈曲して外反する口縁部に至る形態的特徴を有する。内面には板状工具（コテ）による縦方向のナデが施されており（**137**～**141**・**145**・**147**），一部には木目が浮き出て細かなハケ目状となるものもある（**139**・**145**）。底部に貼付された高台は，不整形に潰れたようなものが多く，特に高台の内側基部には無調整のまま接合痕が遺存する場合が多い。**145**～**147**は特に矮小化した高台をもつ。焼成は焼きの甘い須恵質が目立ち，口縁部外面は炭素の吸着による黒色系もしくは直接還元焔に接したことによる暗灰色系の変色帯がみられる。

吉備系土師質土器椀（**148**～**150**）は，比較的きめ細かな胎土の中に数㎜大の石英粒を含むことが特徴である。淡褐色あるいは黄褐色に発色する。口縁部まで遺存するものがないが，断面三角形もしくは潰れた方形の高台を貼付しており，全体に小振りな法量をもつとみられるもののみである。**148**は口縁部直下で屈曲し，外反する口縁部をもつ。また**150**は，見込みに別個体の高台畳付けの痕跡が目跡状に認められる。これらは山本編年Ⅲ－２期の所産とみてよかろう。

土師質土器台付杯(**153**)は，通常の杯よりも大口径の杯に脚台を接合したものである。脚台は，「ハ」の字形に大きく開く形態である。

白磁碗（**154**）は，Ⅳ類碗の底部片である。また青磁碗（**155**）は体部外面に片彫りの鎬連弁を施すもので，Ⅰ－５ｂ類碗にあたる。見込みには草花文（蓮華文）が線彫りされる。釉はやや暗い緑色に発色している。

十瓶山産須恵器捏鉢（**159**～**165**）は，口縁部が外反して端部が直立するもの（**159**）と，口縁部と体部が直線的に連続して外傾するもの（**160**～**162**）の２者がある。前者は堅緻な須恵質焼成であるが，後者は断面が土師質を呈する微弱な須恵質焼成ないし瓦質焼成を呈する。**159**は口縁部の外反が弱く，このタイプの捏鉢としては後出的な特徴をもつ。体部外面には格子叩き目が施される。**160**～**162**は，口縁部端面に回転ナデ調整による顕著な凹面が形成される。器面には回転ナデ調整が行われるが，特に口縁部内外面に強く丁寧に施されている。底体部片（**163**～**165**）は，**160**～**162**の焼成に近く，直線的な口縁部をもつ捏鉢に伴うことが推測できる。底部外縁に横方向の削り調整を施し，

内面には横方向の板ナデ調整を施す。

土師質土器足釜（**166**～**171**）は，口縁部が比較的長く立ち上がり，国分寺楠井遺跡の分類でＢⅡ類に分類されるもの（**166**・**167**）と，口縁部が短くなるＢⅢ類（**168**・**169**）がある。**166**・**167**は口縁部内面直下に接合痕が認められ，楠井窯で指摘した口縁２技法（鍔部屈折法）である可能性が考えられる。

土師質土器鍋（**172**～**190**）は，口縁部が直線的に外反するものであり，楠井窯での分類では鍋Ａ類にあたるものである。口縁部が内弯する鉄鍋形の鍋Ｂ類は存在しない。一応，鍋Ａ類に分類されるものの，その細部形態・技法はかなり多様であり，楠井窯で指摘できたような単一型式のまとまりとは異なる内容をもつ。具体的には，① 口縁部端面にハケ目もしくは横ナデ調整による平坦面があり，器面調整にハケ目を多用するもの。口縁部は肥厚しない（**173**～**175**・**179**・**181**～**183**），② ①と同様な形態であるが，器面調整にハケ目ではなく板ナデ調整が行われるもの（**176**・**177**），③ ①と同様な技法的特徴をもつが，口縁部が肥厚気味になるもの（**184**～**189**）④ 口縁部が太く短く肥厚するもの（**180**），⑤ 口縁部端面に沈線状の凹面があり，その上下が拡張されるもの（**172**・**178**），の５種に分類できる。このうち，楠井窯でその存在が確認できたのは①・②であり，他者はみられなかった。**190**は底体部片であり，外面は体部縦ハケ→底部格子叩き目，内面は体部板ナデ→底部当て具痕がみられる。

亀山焼甕（**191**～**193**）は，外面に正格子叩き目を施し，内面に当て具痕が顕著にみられるものである。焼成は軟質な須恵質ないし瓦質であり，比較的きめ細かな胎土をもつことから十瓶山窯産須恵器甕とは明確に異なる特徴をもっている。**193**は底部叩きを行っており，丸底の大型品であると考えられる。

東播系須恵器甕（**194**）は，細かな平行叩き目を交差させており，底部付近の破片と思われる。

備前焼甕（**195**）は，器高80㎝以上に達する大型品とみられる。焼成は軟質であり，酸化焔焼成によるものの焼き締まりが悪い個体である。体部内外面に横方向のハケ目調整が施され，頸部外面にはこれに後出する横ナデ（回転ナデ？）調整がみられる。

以上の中世土器のほか，古代以前の遺物がみられる。**156**は須恵器杯蓋である。**157**は須恵器杯である。ともに８世紀前葉～中葉頃の所産である。**158**は10世紀前葉とみられる須恵器杯であり，外面に火襷が認められる。**196**・**197**は須恵器壺である。**196**は８世紀代の長頸瓶の底部とみられ，**197**は９～10世紀代の薬壺の底部片と思われる。**198**・**199**はサヌカイト製石器であり，**198**はスクレイパーもしくは石包丁，**199**は石包丁と考えられる。

Ⅲ－１区部分中層出土遺物（第85～88図）　土師質土器小皿・杯・椀・足釜・鍋，黒色土器椀，十瓶山窯産須恵器小皿・椀・捏鉢・甕，吉備系土師質土器椀，常滑焼甕，青磁碗が出土している。

土師質土器小皿（**200**～**207**）には，底部ヘラ切りのもの（**200**～**204**）と，底部糸切りのもの（**205**～**207**）がある。ヘラ切り底の小皿は，口縁部が比較的短い形態であり，口径7.5～8.5㎝の範囲でまとまる（**200**～**203**）。**204**は例外的に口径9.9㎝を計る大振りなものであるが，小振りな口径の一群と同じ型式とみてよいか，明確でない。ヘラ切りの方向は右回りである。**202**は，底部中央が突出して丸底状を呈する。ヘラ切り後に底部が押し出されたのは確実であろうが，それが「底部押し出し技法」と呼称されるような意図的な行為かどうかは，遺跡内での類例に乏しいことから否定的に考えている。糸切り底の小皿（**205**～**207**）は，口縁部が短く端部が細く収まるものである。胎土の特

徴は，糸切り底の杯と共通する。**205**は見込みが口縁部付近まで高く盛り上がっており，わずかに底部と口縁部の境付近が窪んでいるのにとどまる，コースター状の形態をもつ。**207**も底部は薄いものの，ほぼ同様な形態をもつ。**206**は**205**・**207**よりも口径が小さいにもかかわらず，見込みが窪んでいる。

十瓶山窯産須恵器小皿（**208**）は，直線的に短く外傾する口縁部をもち，口縁外面に炭素が帯状に吸着する。底部はヘラ切りである。

土師質土器杯（**209**～**220**）は，ヘラ切り底のもの（**209**～**215**）と糸切り底（**216**～**220**）の２者が存在する。ヘラ切り底の杯は，口径11.0～12.0㎝の範囲に収まり，上層出土のものよりも若干大振りである。器壁はいずれも薄く，体部と底部の境は明瞭に屈曲する。また体部下半にロクロ目が顕著である。ヘラ切りの方向は右回りである。**209**は底部外面に板目状の圧痕がみられる。糸切り底の杯は，体部直下に明瞭な屈曲部をもつもの（**216**～**218**）と，内弯するもの（**219**）があるが，胎土・焼成は共通する。**216**・**218**の屈曲部を観察すると，この部分が器面のナデ調整の境であることが明瞭にわかる。すなわち，体部の回転ナデ調整が口縁部の回転ナデ調整よりも後出しており，体部ナデの上端が口縁部側（上方）にはみ出しているのである。このため，段差状の屈曲部が器面に形成される。口径にはばらつきがあり，ヘラ切り底の杯のような法量的なまとまりに欠ける。**219**は，口縁部外面に接合痕が認められる。

十瓶山窯産須恵器椀（**221**～**228**）は，上層とほぼ同じ形態・技法であるが，上層の極端に矮小化した高台をもつ形態のものは認められない。**227**の高台は，粘土紐が全周していない。

黒色土器椀（**231**）は，十瓶山窯（西村遺跡）産とみられる。黒色土器椀はこの１点のみであり，またこの個体も細片であることから，古い時期に属するものの混入であると考えられる。

吉備系土師質土器椀（**229**・**230**）は，口縁部直下まで横ナデ調整されており，体部との境が屈曲する。断面三角形の高台が貼付されており，山本編年のⅢ－２期の所産とみられる。

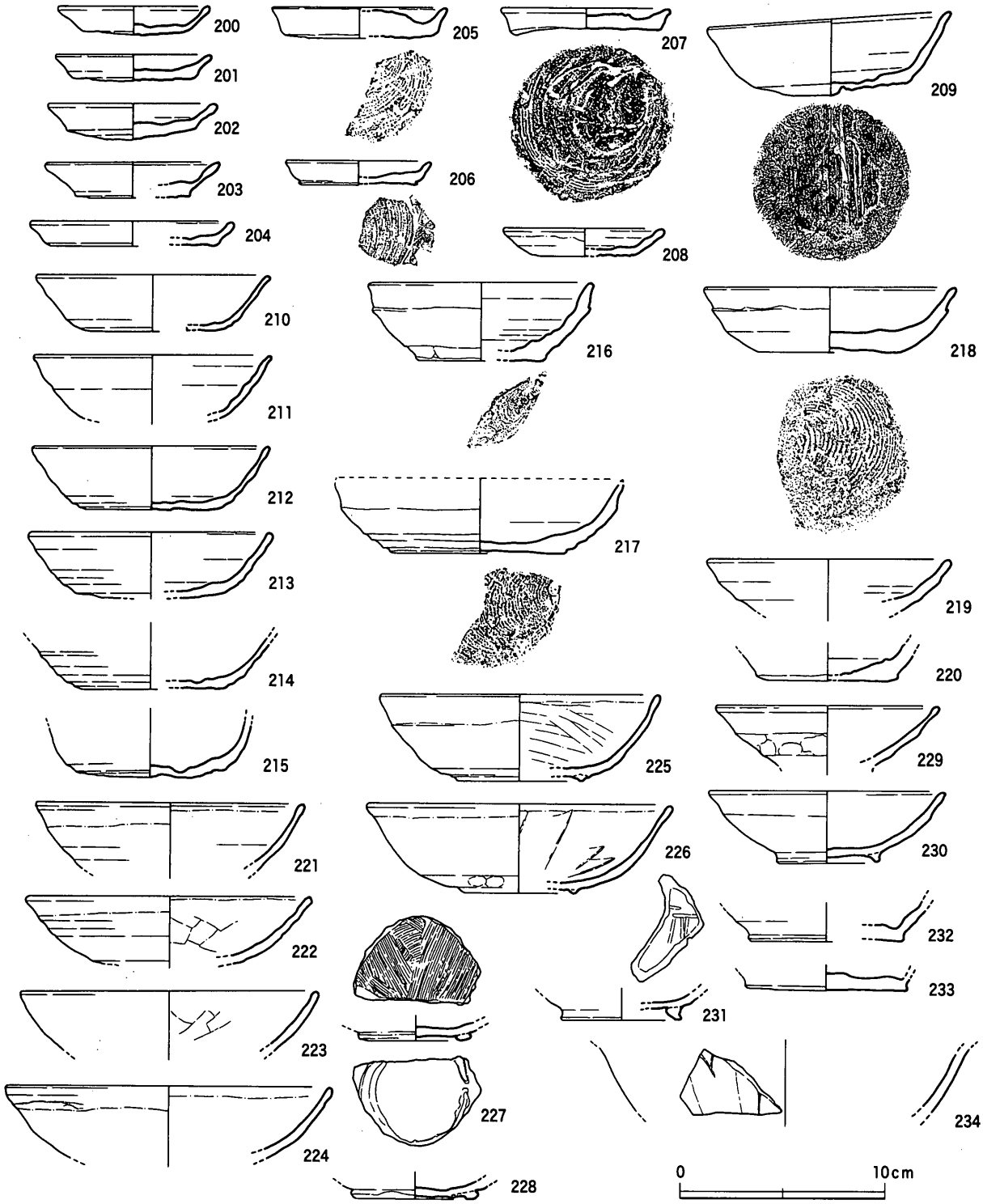
土師質土器椀（**232**・**233**）は，厚さ６～８㎜の底部外縁上端に体部を積み上げた平高台椀である。底部はヘラ切りである。

青磁碗（**234**）は，輪郭の明瞭なシャープな鎬連弁を施すＩ５ｂ類碗である。

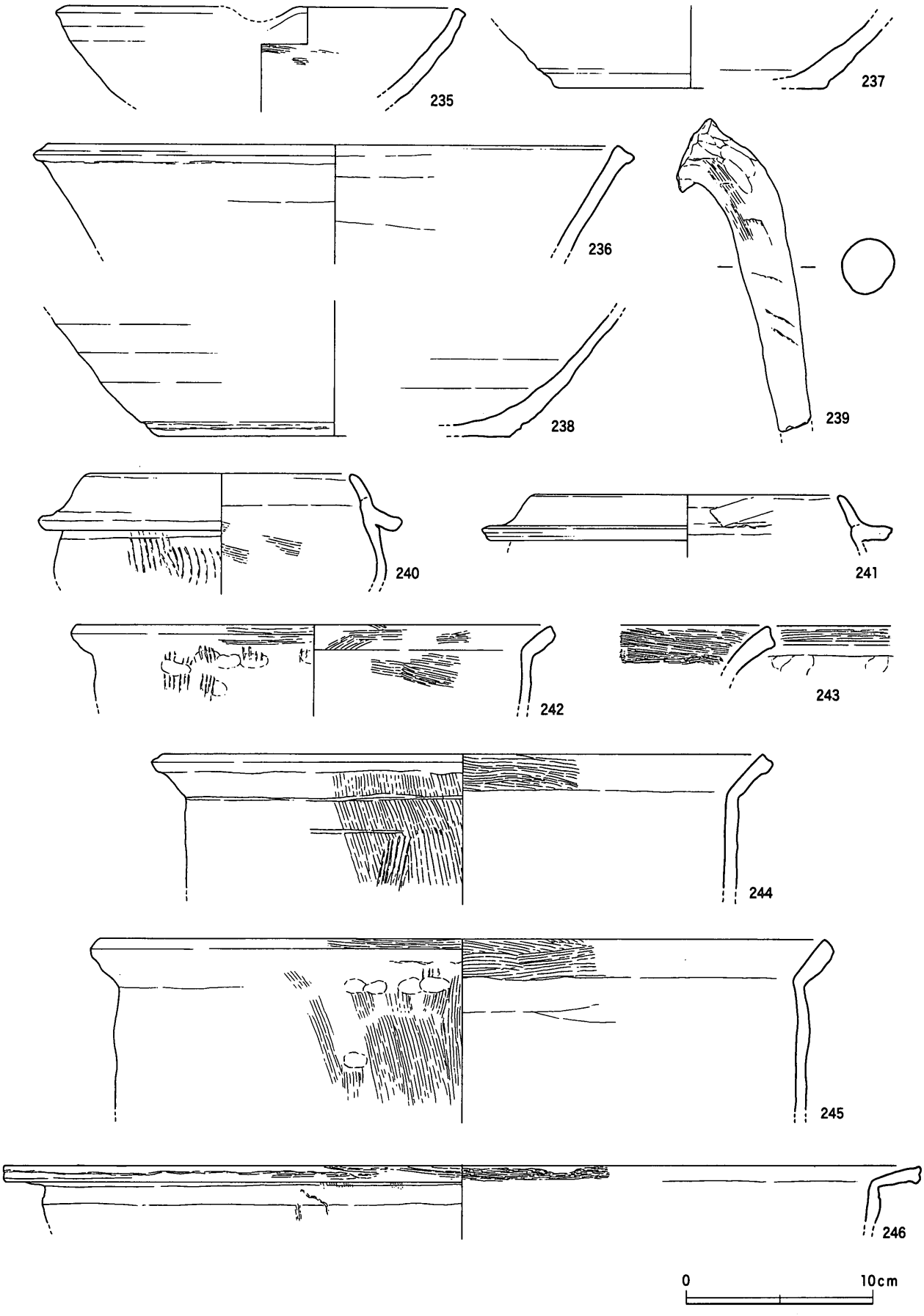
十瓶山窯産須恵器捏鉢（**235**～**236**）は，口縁部が体部から連続して収まる形態のものである。**235**は，口縁部と体部が内弯し，口縁部端面を横方向に挽き出す。内面にはハケ目状に板ナデ調整が施される。**236**は，直線的に伸びる口縁部と体部になり，端部は肥厚気味に横方向に挽き出される。このため，端面には弱い凹面が形成される。体部内外面には板ナデ調整が施される。

東播系須恵器捏鉢（**238**）は，見込み付近の器面が剥落して使用痕となっている。底部外縁には浅い切り込みがみられ，そこに糸切り痕が観察できる。底部切り離し時に通常よりも上側の部位を切りかけて中断し，その後にさらに下側の部位を切り離したと推測される。

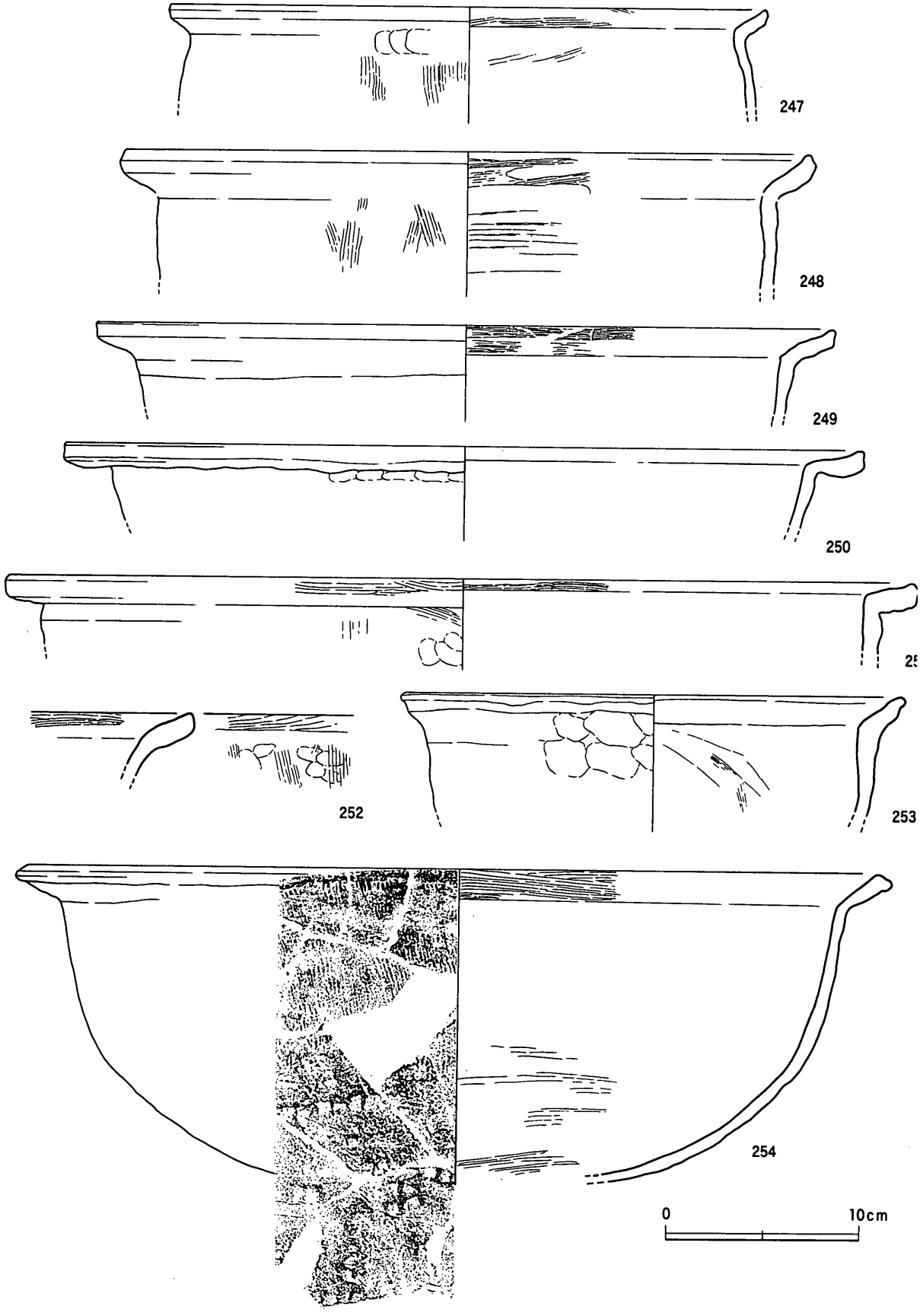
土師質土器足釜（**239**～**241**）は，水平方向に長く伸びて明瞭な端面を有する鍔部をもつのが特徴であり，上層出土遺物とは明らかに異なる鍔部形態である。口縁部直下の内面には接合痕があり，楠井窯の口縁２技法（鍔部屈折法）による口鍔部成形が想定できる。ただし，鍔部端面がハケ目調整で平坦に仕上げられるのではなく，横ナデ調整によるところが楠井窯産の足釜とは異なる。また**240**・**241**ともに足釜としては小振りな口径をもつ。**240**体部外面には粗いハケ目調整が縦方向に施され，その後鍔基部直下に強い横ナデ（回転ナデ？）を施し，鍔部の屈折を行っているようである。



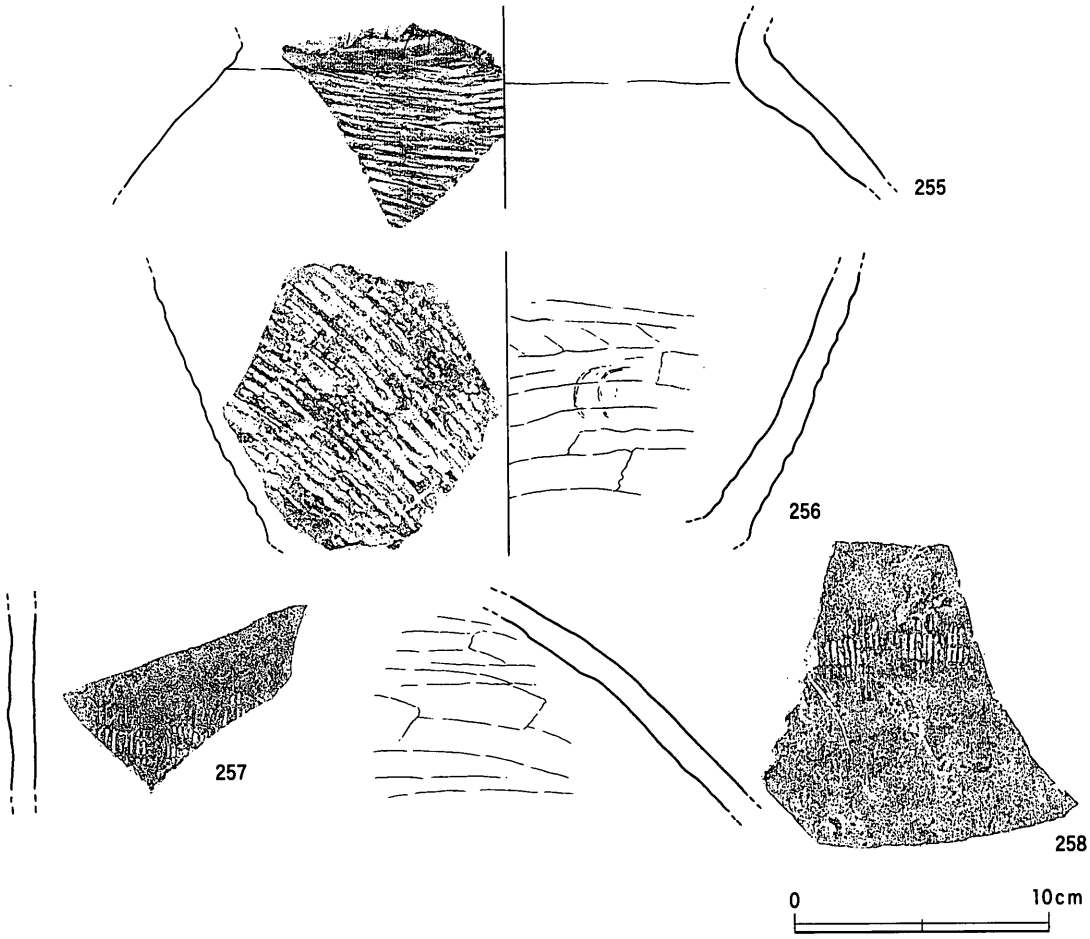
第85図　SDf16中層出土遺物（1）（1/3）



第86図　SDf16中層出土遺物（2）（1/3）



第87図　SDf16中層出土遺物（3）（1/3）



第88図　SDf16中層出土遺物（4）（1/3）

土師質土器鍋（**242**～**254**）は，上層同様に楠井窯分類でのA類にあたるものであるが，やはり細部形態・調整にバリエーションがみられる。上層での類別に対応させると，①が**242**～**249**，②が**250**，③が**252**，④が**251**にあたり，上層とほぼ同じ構成をとることがわかる。ただし，④は口縁部端面にハケ目調整を行っており，この点が上層とは異なる。**242**の体部外面の粗いハケ目と口縁部外面・内面のハケ目とは，原体が異なっているようである。**244**外面の頸部と体部上位には，幅2.0㎜前後の圏線状の横ナデがみられる。この調整痕は，ロクロ回転を利用して付されているように見受けられる。**245**・**246**の外面の縦ハケ調整は，口縁部から体部まで連続しているが，**245**では部分的に頸部の屈曲部の器面にまで連続的に認められ，大部分はハケ目に後出する指頭圧痕によって潰されている。このことから，口縁部～体部のハケ目調整が施された後に，頸部の屈折（外反）作業が行われたものと推測できる。内面調整が口縁部（横ハケ）と体部（横方向の板ナデ）とでは全く異なる原体を用いており，いわば調整の断絶が認められるのも，このような製作工程を念頭に置くと理解し易い。以上の①～④の類別の他に，⑥ 口縁部端面に段状の凹面を作出し，外面に指頭圧痕が顕著で頸部の屈曲が明瞭ではないもの（**253**），⑦ 口縁端部が肥厚気味に横にツマミ出され，粗く深いハケ目調整が顕著なもの（**254**）がある。**254**は，特徴的な口縁部形態とハケ目調整の多用という要素が，吉備系土師質土器鍋に近似していることを指摘し得る。しかし，底部外面に正格子叩き目（7㎜角）が施されており，これはハケ目調整による底部の丸底化を行う吉備系の鍋と異なる。したがって，吉備系鍋を在地の技術で模倣した鍋であるとみるのが妥当であろう。

十瓶山窯産須恵器甕（**255・256**）は，焼成が甘くやや瓦質気味のものである。**255**は体部上半に横位（右下がり）の平行叩き目を施しており，下方の叩き目ほど縦位に近い傾きとなっている。**256**は体部下半から底部にかけての部位であり，叩き目（長格子叩き目）はより縦位に近い右下がりである。内面には当て具痕がわずかに看取できるが，大半は横方向の板ナデ調整によって消去されている。

常滑焼甕（**257・258**）は，肩部に格子目の押印を施す。焼成は堅緻であり，赤褐色に発色する。

Ⅲ－1区部分下層出土遺物（第89～91図）　土師質土器小皿・杯・足釜・鍋，黒色土器椀，土師器羽釜，吉備系土師質土器椀・鍋，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢・甕，東播系須恵器甕，白磁碗，青白磁合子，青磁碗がある。

土師質土器小皿（**259～265**）には，底部ヘラ切り（**259**）と底部糸切り（**260～265**）がある。ヘラ切り底の小皿は，口径8.0㎝を計り，外反する口縁部の下端が直立しているために，見込みが窪んでみえる。同様な形態の小皿は，十瓶山窯の西村遺跡でも認められるが，口縁部下半の屈曲が内面のみでなく外面にも認められることが，西村遺跡の小皿にない特徴である。見込みには回転ナデに後出するナデ調整がみられ，これに対応する底部外面に板目状圧痕が認められる。糸切り底の小皿は口径7.7～9.3㎝と若干幅があるが，口縁端部が細身で外反気味に収まるもの（**260・261・263**）は，口径7.7～8.4㎝とまとまりがある。法量のまとまるこの3個体は，胎土・色調がヘラ切り底の杯と同一であり，上層・中層での糸切り底の小皿とは明瞭に異なるものである。

土師質土器杯（**266～272**）にも，底部ヘラ切り（**266～271**）と底部糸切り（**272**）が認められる。ヘラ切り底の杯は口径12.4～13.8㎝を計り，中層出土の杯よりも大きい。形態的にも底部と体部の境が明瞭に屈曲せずに緩いカーブを描いて立ち上がる特徴があり，内弯気味に立ち上がって口縁部に至る。また法量が大振りなのに対応して，器壁が中層よりも厚手である。確認できる個体では，底部ヘラ切りは右回りである。**267**は内面に，**269**は外面全体に煤が付着している。糸切り底の杯は，わずか1個体にとどまり，形態的にも口縁部直下で屈曲せずに直線的に外傾することから，上層・中層の糸切り底の杯とは異なっている。

十瓶山窯産須恵器椀（**274～277**）は，やや浅手の器体をもつが口径が大振りで，高台も外方に踏ん張る形態をもつもの（**274**）である。**275**は焼成が土師質であるが，須恵器椀の焼成不良品と捉えて大過なかろう。**276・277**は潰れた断面半円形の高台をもっており，中層と共通する。

吉備系土師質土器椀（**278・279**）は，**278**が径が大きく長く伸びる高台をもっており，先行的な様相をもつといえる。また，**279**も断面三角形の高台をもっており，上層・中層よりも古い様相をもつといえる山本編年では**278**がⅡ期，**279**がⅢ－1期に該当しよう。

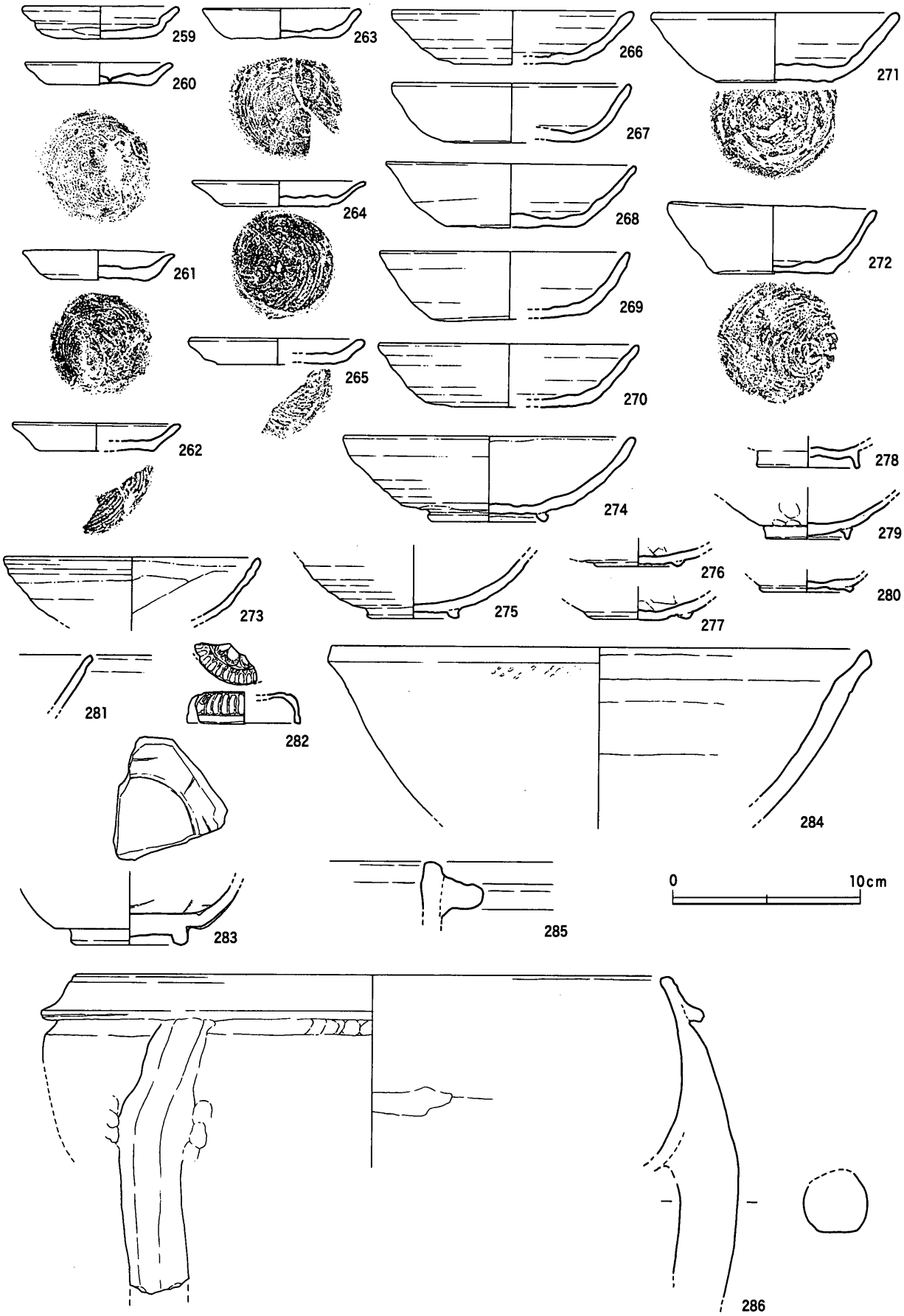
黒色土器椀（**280**）は，矮小化した高台をもつものであり，一応，B類に分類されるものである。時期的な位置付けや，系譜については明らかでない。

白磁碗（**281**）は，直線的に伸びる体部と外反して断面方形に収まる口縁部に特徴がある。釉は薄い白色を呈しており，表面は細かな気泡状の凹凸がみられる。V類碗か。

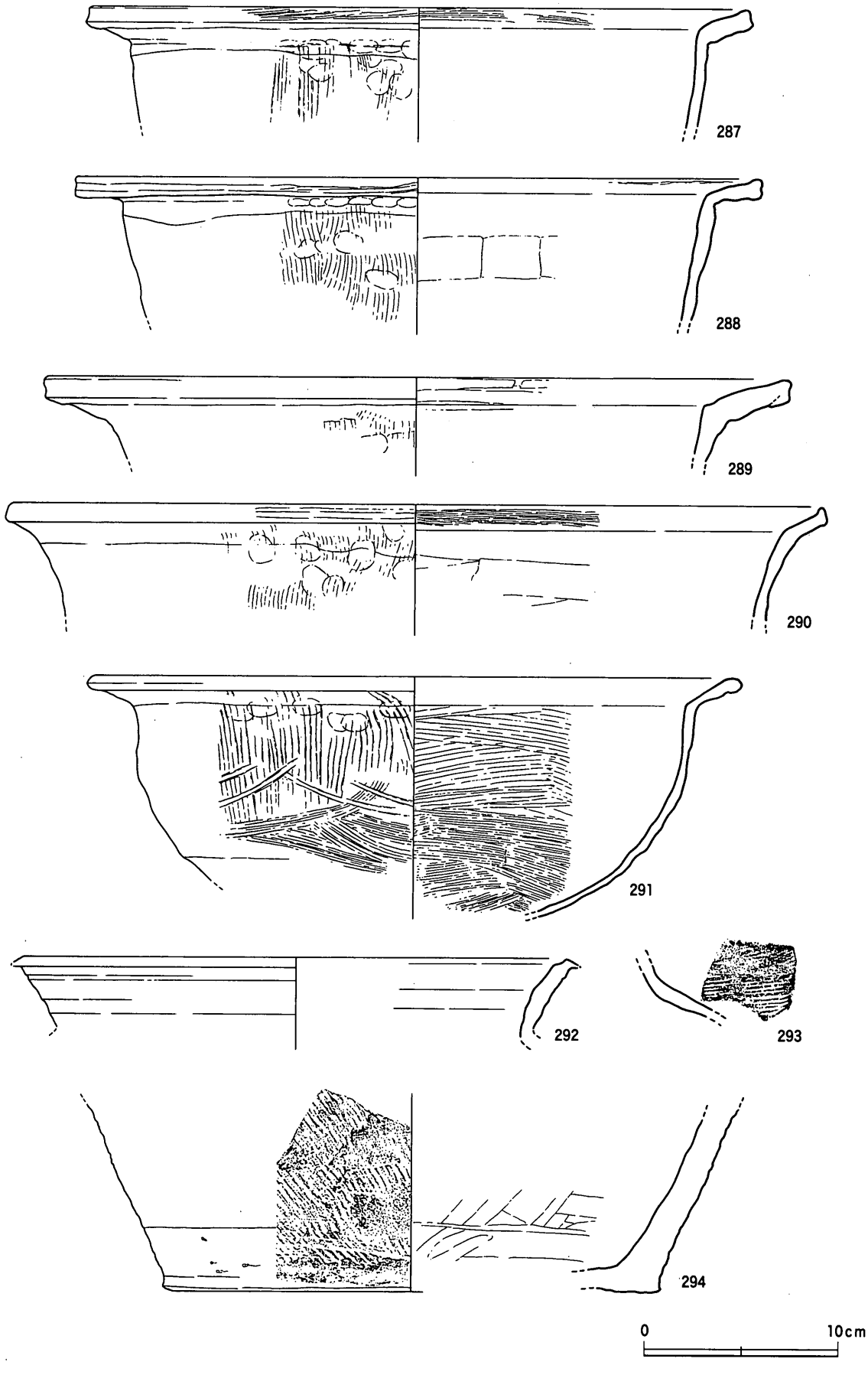
青白磁合子蓋（**282**）は，外面に型押しによる花文がみられる。

青磁碗（**283**）は，Ⅰ2類碗に分類できる。体部内面には線彫りの文様があり，釉には貫入が顕著にみられる。

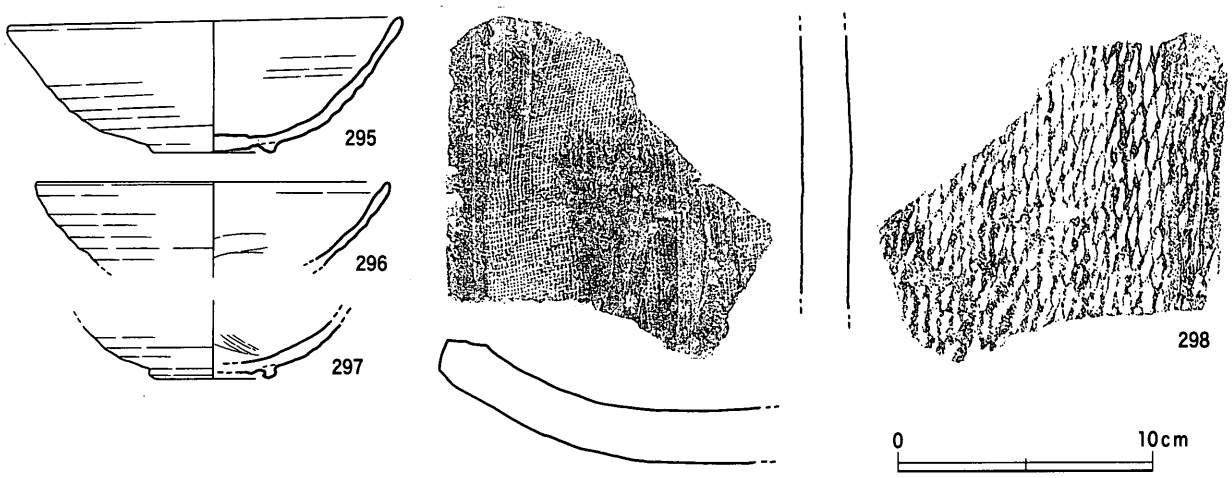
十瓶山窯産須恵器捏鉢（**284**）は，口縁部が外反するタイプのものである。12世紀前半の西村1号窯跡窯跡出土の捏鉢と比較すると，口縁部の外反と端部のツマミ上げが弱く，12世紀中葉～後葉と考



第89図　SDf16下層出土遺物（1）（1/3）



第90図　SDf16下層出土遺物（2）（1/3）



第91図　SDf16層位不明出土遺物　(1/3)

えられる奥下池南窯跡での事例に近い。口縁部直下には右上がりの平行叩き目が施されており，回転ナデで消去される。焼成は甘く，器表に微弱ながら炭素の吸着がみられ瓦質気味である。

土師器羽釜（**285**）は，摂津C型の系譜を引く古代後半の在地製品であるが，細片のため全体の形状が明確でない。あるいは竈の鍔片であろうか。

土師質土器足釜（**286**）は，楠井窯の分類でB類にあたるが，口縁端部に面をもつことと，脚基部が体部に対して斜め方向に接合されることが，楠井窯にはみられない特徴である。同様な形態は，岡山県南部において13～14世紀に散見され，それとの関わりが問題となる。

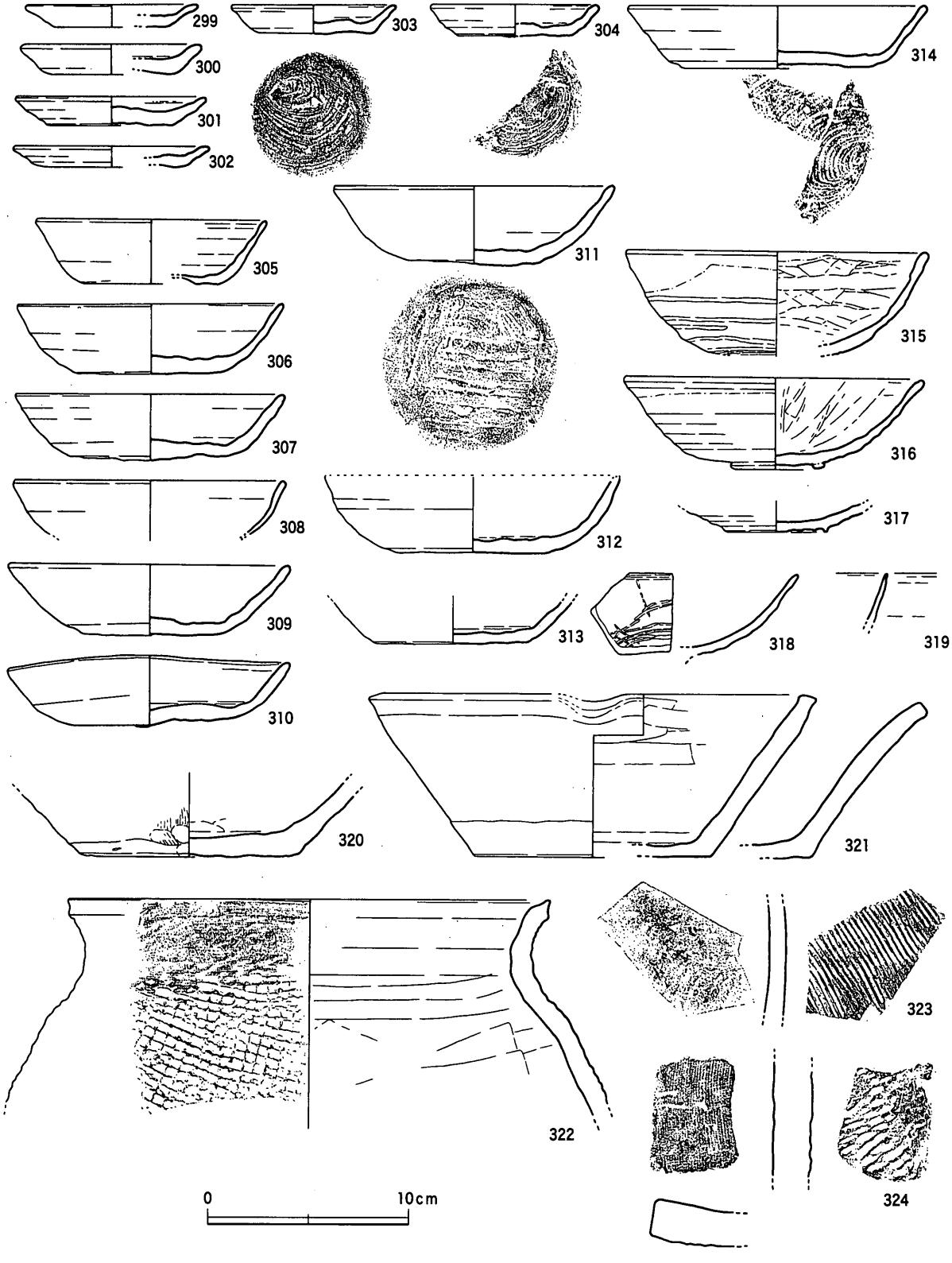
土師質土器鍋（**287～290**）は，上層・中層の類別では①（**287・288・290**）がみられる。いずれも口縁部端面にハケ目調整を施しており，288ではハケ目の端が右上がりになることから，口縁部を複数回分割してハケ目調整作業を行ったことが窺える。このような作業手順は，楠井窯でも明確に指摘できた現象である。この他，やや厚手な器壁をもつ長い口縁部の鍋（**289**）がある。胎土は砂粒を多く含んでおり，古代後半の煮炊具を彷彿とさせる。

吉備系土師質土器鍋（**291**）は，他の土師質土器鍋と異なる明褐色に発色する細かな胎土をもち，また形態・技法が岡山県南部での事例と同一であるため，吉備系土師質土器鍋と判断した。丸味をもって肥厚する口縁端部と，若干張り気味な体部の形態から，山本編年Ⅲ－1期に相当するものと考えられる。ハケ目の切り合いをみると，内外面ともに体部ハケ目が底部ハケ目によって潰されており，底部調整の方が後出することがわかる。底部の丸底化工程に直接関わるか，その後の調整作業として施されたものであろう。中層出土の吉備系類似の鍋（**254**）との底部調整の差異が注目される。

十瓶山窯産須恵器甕（**292・294**）は，焼成が堅緻な個体である。**292**は器壁が薄くロクロ目が顕著な口頸部をもち，口縁端部は横方向に挽き出されている。西村2号窯跡（11世紀中葉～後葉）に類例があり，古い遺物の混入か使用期間の長さを示すのか，断定はできないものの，器表が摩滅して小片となっていることを考慮すると，前者の可能性が考えられる。**294**は体部下半を叩いた後，ロクロ回転を利用して底部外縁付近を削り取っている。内面は板ナデ調整を行うが，回転を利用していない。

東播系須恵器甕（**293**）は，肩部から頸部の破片であり，外面に細い平行叩き目が施されている。

以上のように，Ⅲ－1区上層・中層・下層出土遺物は，土師質土器小皿・杯の形態・法量に一定度の差異を見出すことが可能であり，十瓶山窯産須恵器椀や土師質土器足釜・鍋にも差異が看取できる。区



第92図　SDf16（Ⅲ－２区）出土遺物（1/3）

画溝という性格上，多少の混在は免れ得ないと思われるが，他の土坑や墳墓・小規模な溝などの遺構出土資料と対応させることで，下層→中層→上層という層位的区分に編年の基準資料としての位置を与えることが可能となろう。編年的位置付けを示すと，下層が中世Ⅱ－２期，中層がⅡ－３期，上層がⅡ－４期と考えられる。

Ⅲ－２区部分出土遺物（第92図）　土師質土器小皿・杯，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢・甕，瓦器椀，白磁碗，平瓦が出土している。

土師質土器小皿（**299～304**）は，底部ヘラ切り（**299～302**）と底部糸切り（**303・304**）がある。ヘラ切り底の小皿は，口径8.2～9.4㎝の範囲に収まり，Ⅲ－１区下層と同じか大振りな法量をもつ。糸切り底の小皿は口径8.1～8.2㎝を計り，Ⅲ－１区下層と同様の法量的なまとまりの範疇で捉え得るものである。やはり胎土は，ヘラ切り底の小皿・杯に近似している。

土師質土器杯（**305～314**）も小皿同様，底部ヘラ切り（**305～313**）と底部糸切り（**314**）がある。ヘラ切り底の杯の口径は，①11.3㎝（**305**），②13.2～13.9㎝（**306～311**），③14.8㎝（**312**）に区分することが可能であり，①はⅢ－１区中層に，②はⅢ－１区下層に各々対応する法量と形態的特徴をもつ。**311**は，見込みに回転ナデに後出するナデ調整を施しており，底部外面にはこれにより付されたとみられる板目状圧痕がある。糸切り底の杯は，直線的に外傾する口縁部・体部をもち，ヘラ切り底の杯よりも浅手である。Ⅲ－１区上層・中層でみられる特徴的な杯とは異なる形態・胎土であり，小皿の在り方と共通する。

十瓶山窯産須恵器椀（**315～317**）は，全く異なる型式が混在する。**315**は深手の器体をもち，内面に板ナデ調整，外面に回転ヘラ磨き調整を施すものである。**316**はやや浅い器体で，外傾度の強い体部下半と外反する口縁部をもつ。高台は潰れた断面方形状を呈する。外面には回転ヘラ磨きは施されない。**317**は断面三角形の突帯状の小さな高台が付されている。これらをⅢ－１区での層位に対応させると，**316**は下層に，**317**は上層にみられ，**315**は類例を見出すことができない。

瓦器椀（**318**）は，細片であるが和泉型で内面に粗くヘラ磨き（暗文）を施す。口縁部直下のみ強い横ナデ調整を行い，外反気味の口縁部形態を作出している。尾上編年Ⅲ－２期にあたるものであろう。

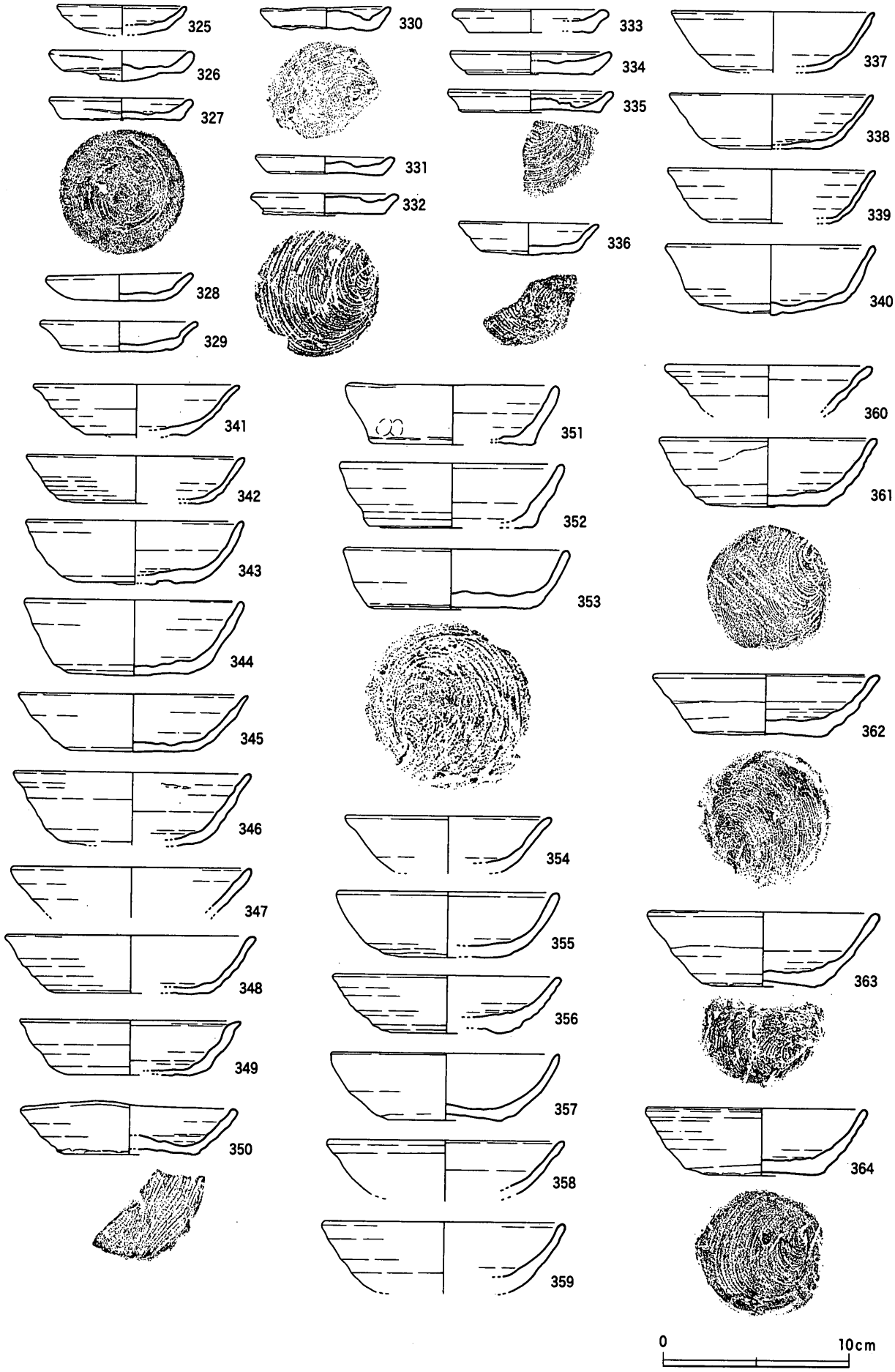
白磁碗（**319**）は，Ⅴ類碗に該当するものと思われる。

十瓶山窯産須恵器捏鉢（**320・321**）は，瓦質焼成品である。**321**は直線的に外傾する体部をもち，口縁部は強い回転ナデ調整によって相対的に弱く肥厚する。また体部内面下半は，使用による器面の摩滅が観察される。

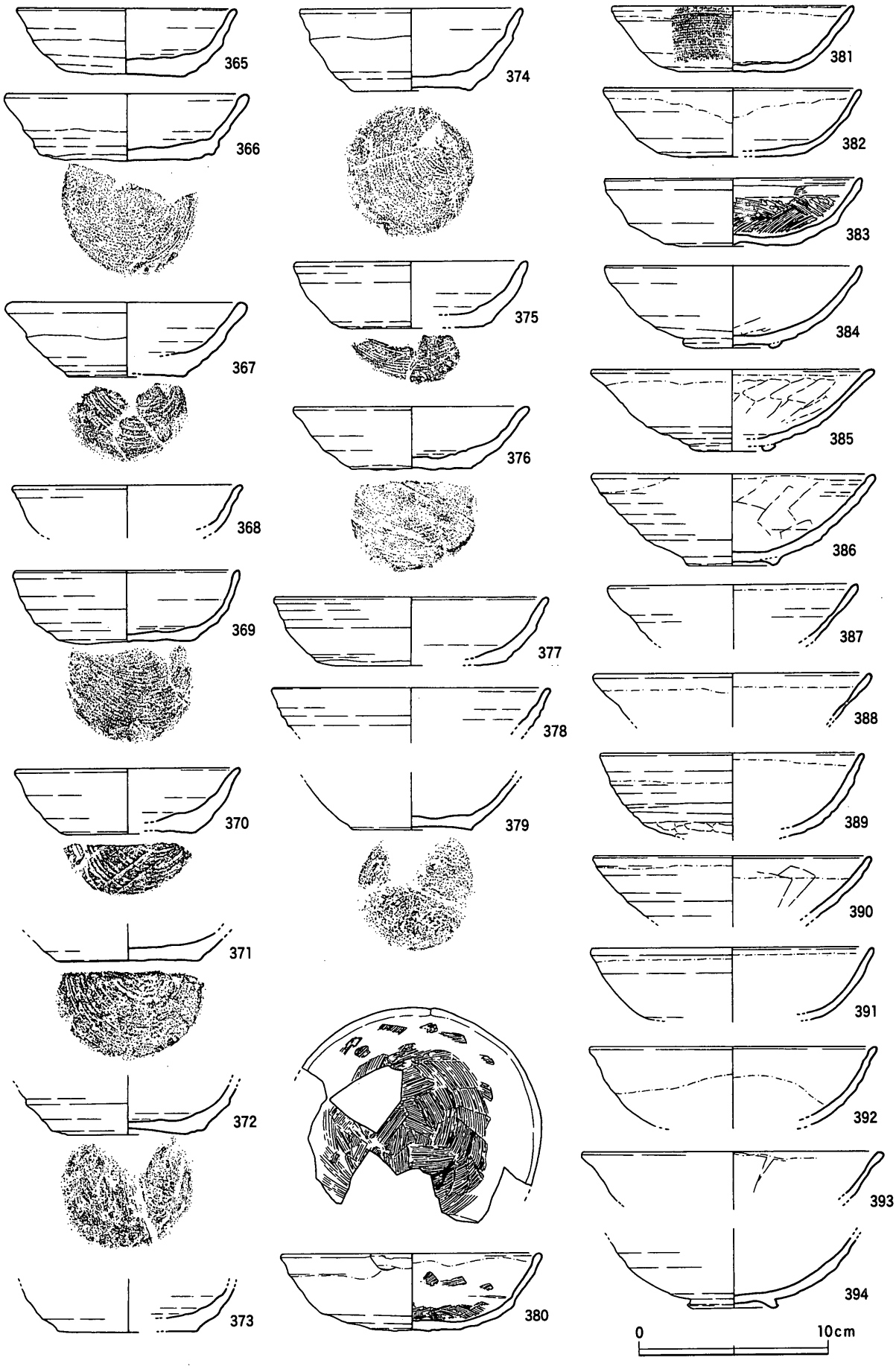
十瓶山窯産須恵器甕（**322・323**）のうち，**322**は体部と頸部の屈曲が弱く緩いカーブを描いて連続する形態をもつ。口縁部端面は直立気味の凹面である。口頸部には右上がりの格子叩き目が施され，その後に横位（右下がり）の格子叩き目が施される。口頸部の叩き目は，最終的には回転ナデ調整によって消去されている。体部内面の板ナデ調整も口頸部の回転ナデによってナデ消されている。**323**は甕体部片であり，外面には右下がりの平行叩き目，内面には同心円状の当て具痕がみられる。

以上のように，この部分の遺物は概ねⅢ－１区下層に対応させることができ，Ⅱ－２期の土器群を主体とすることがわかるが，土師質土器杯（**305**）や十瓶山窯産須恵器椀（**317**）に後出的な要素をみることができる。

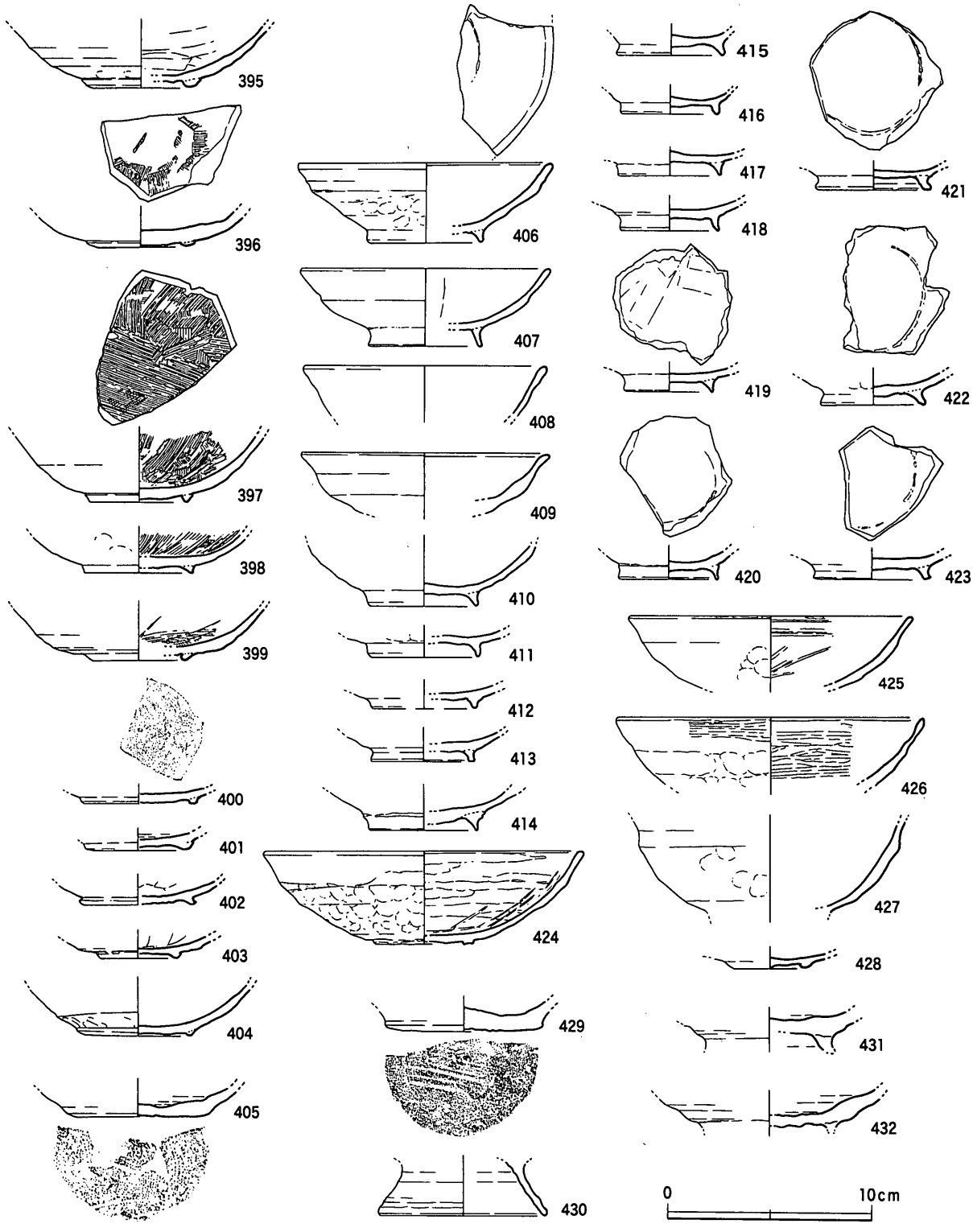
Ⅲ－８区部分出土遺物（第93～101図）　土師質土器小皿・杯・椀・台付皿・台付杯・足釜・鍋，土師器竈，十瓶山窯産須恵器杯・椀・捏鉢・壺・甕，吉備系土師質土器椀，瓦器椀，東播系須恵器椀・



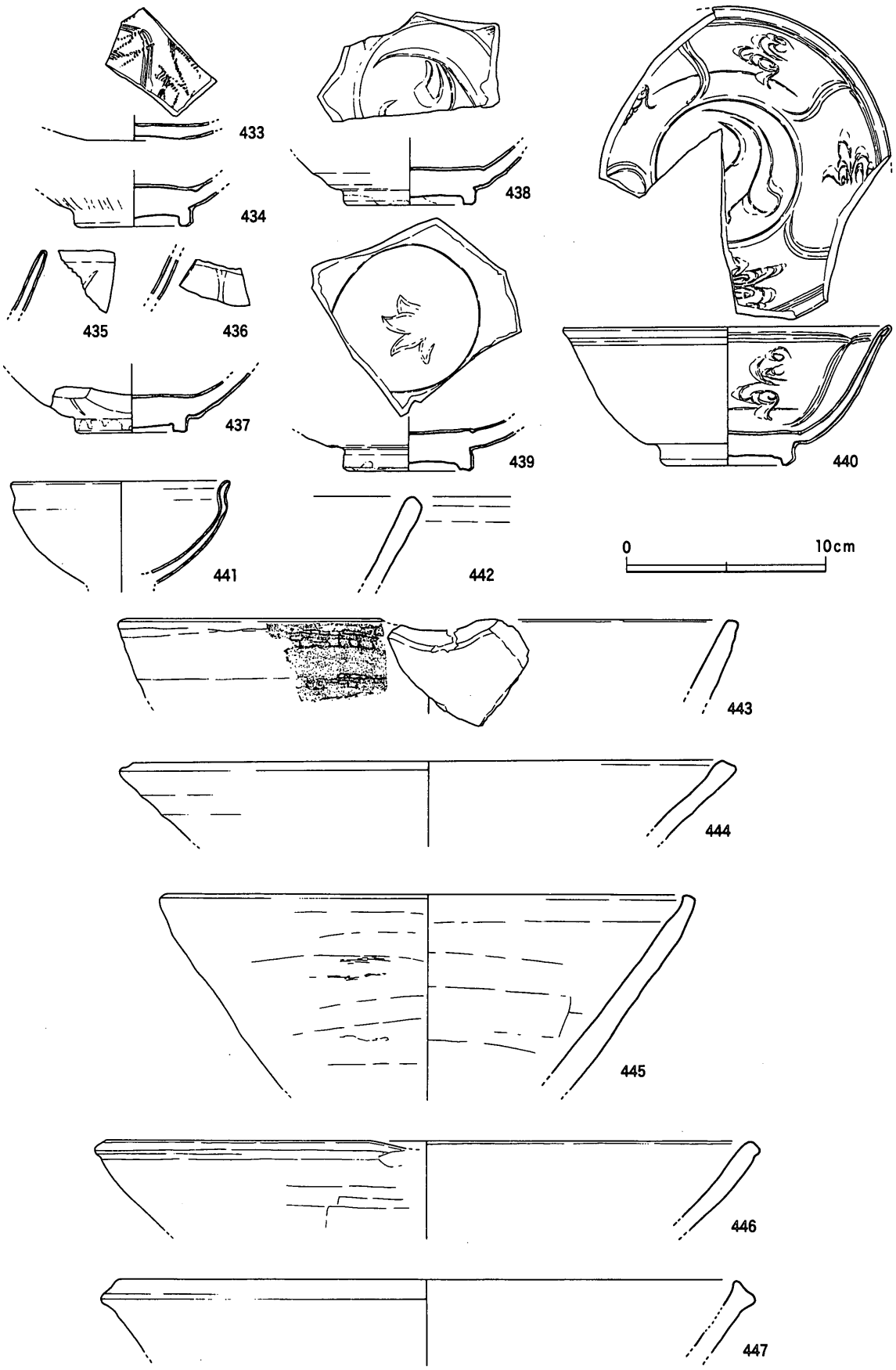
第93図　SDf16（Ⅲ－８区）出土遺物（１）（1/3）



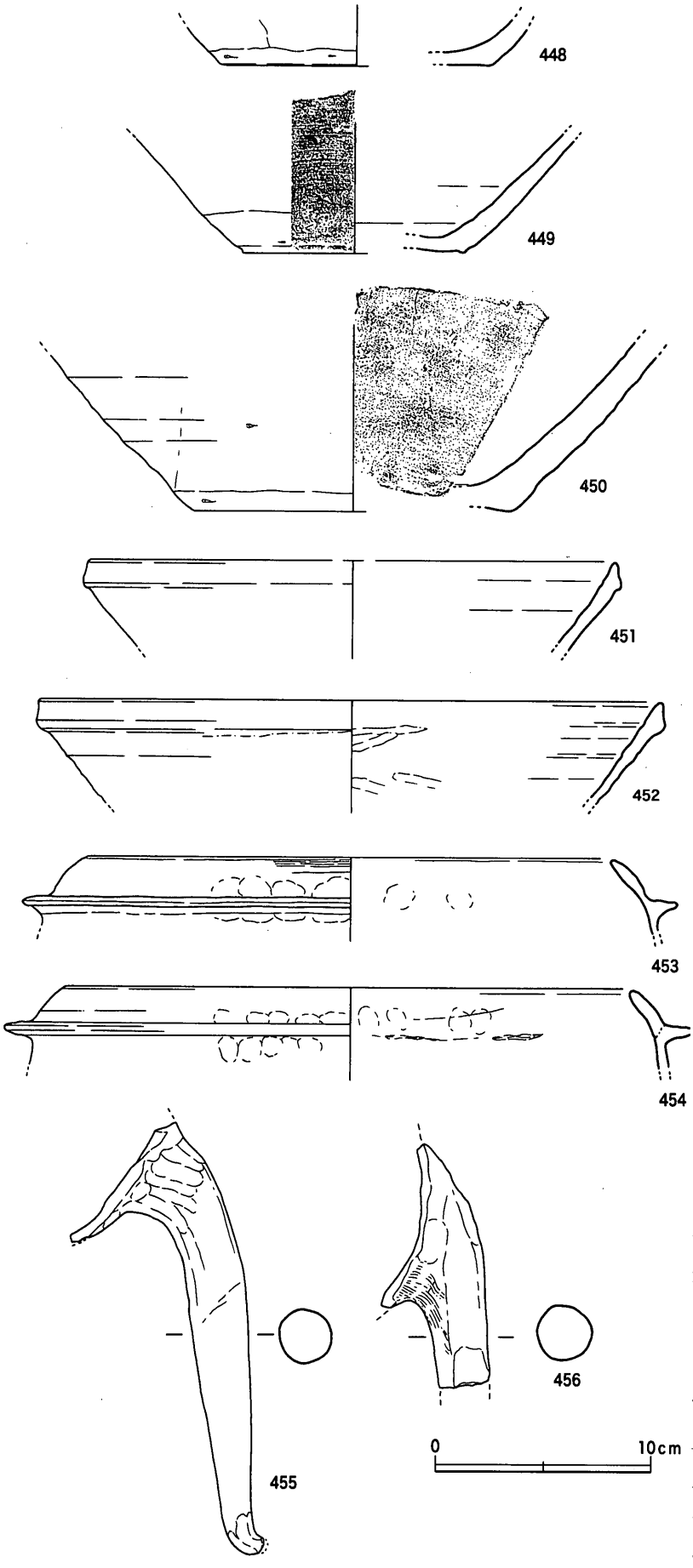
第94図　SDf16（Ⅲ－8区）出土遺物（2）（1/3）



第95図　SDf16（Ⅲ－８区）出土遺物（3）（1/3）



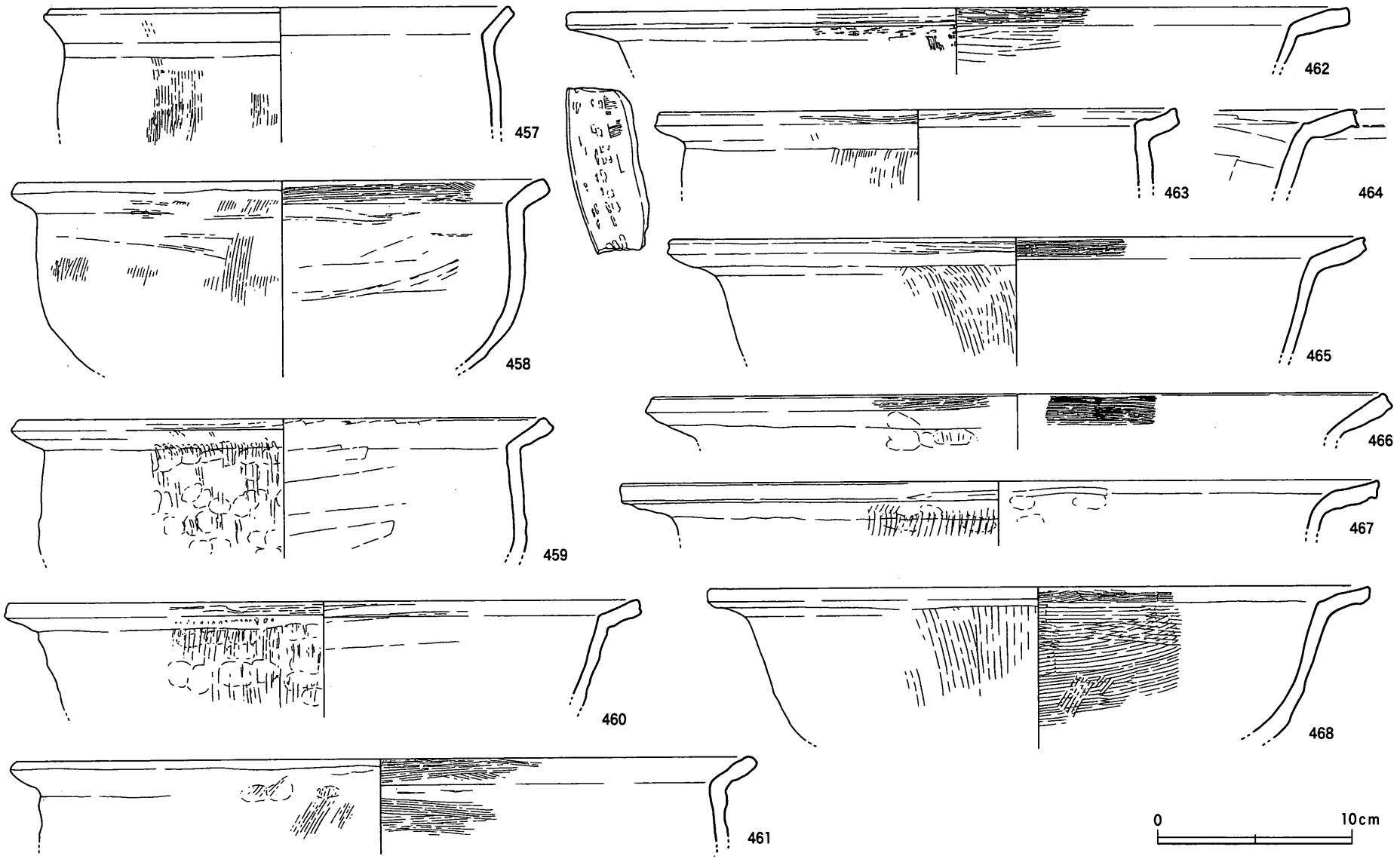
第96図　SDf16（Ⅲ－8区）出土遺物（4）（1/3）



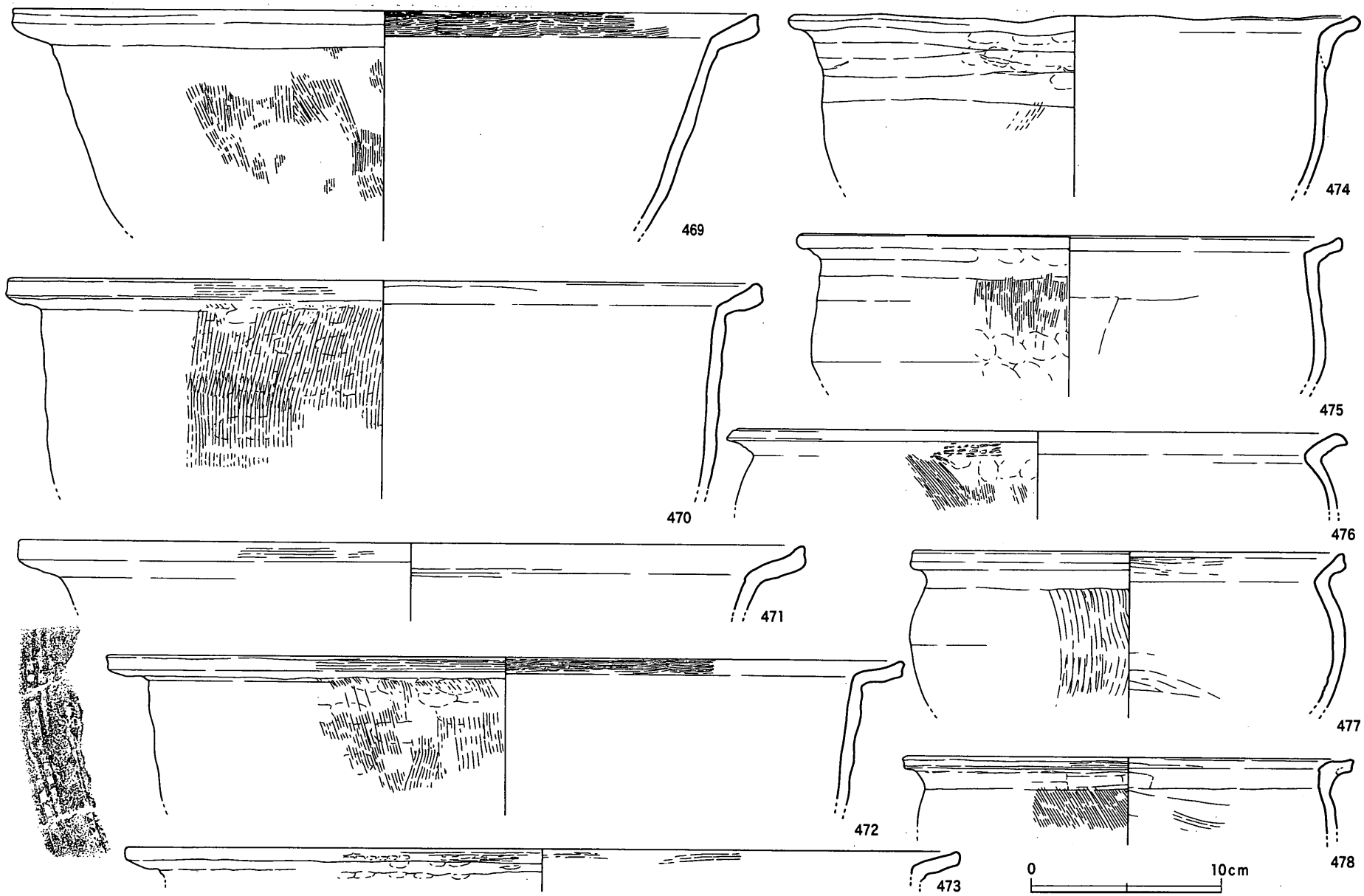
第97図　SDf16（Ⅲ－８区）出土遺物（5）（1/3）

捏鉢・甕，備前焼壺，常滑焼捏鉢，青磁碗，石鍋，丸瓦・平瓦，宋銭が出土している。この他，古代の須恵器杯・甕，古墳時代の須恵器杯身・高杯なども出土している。

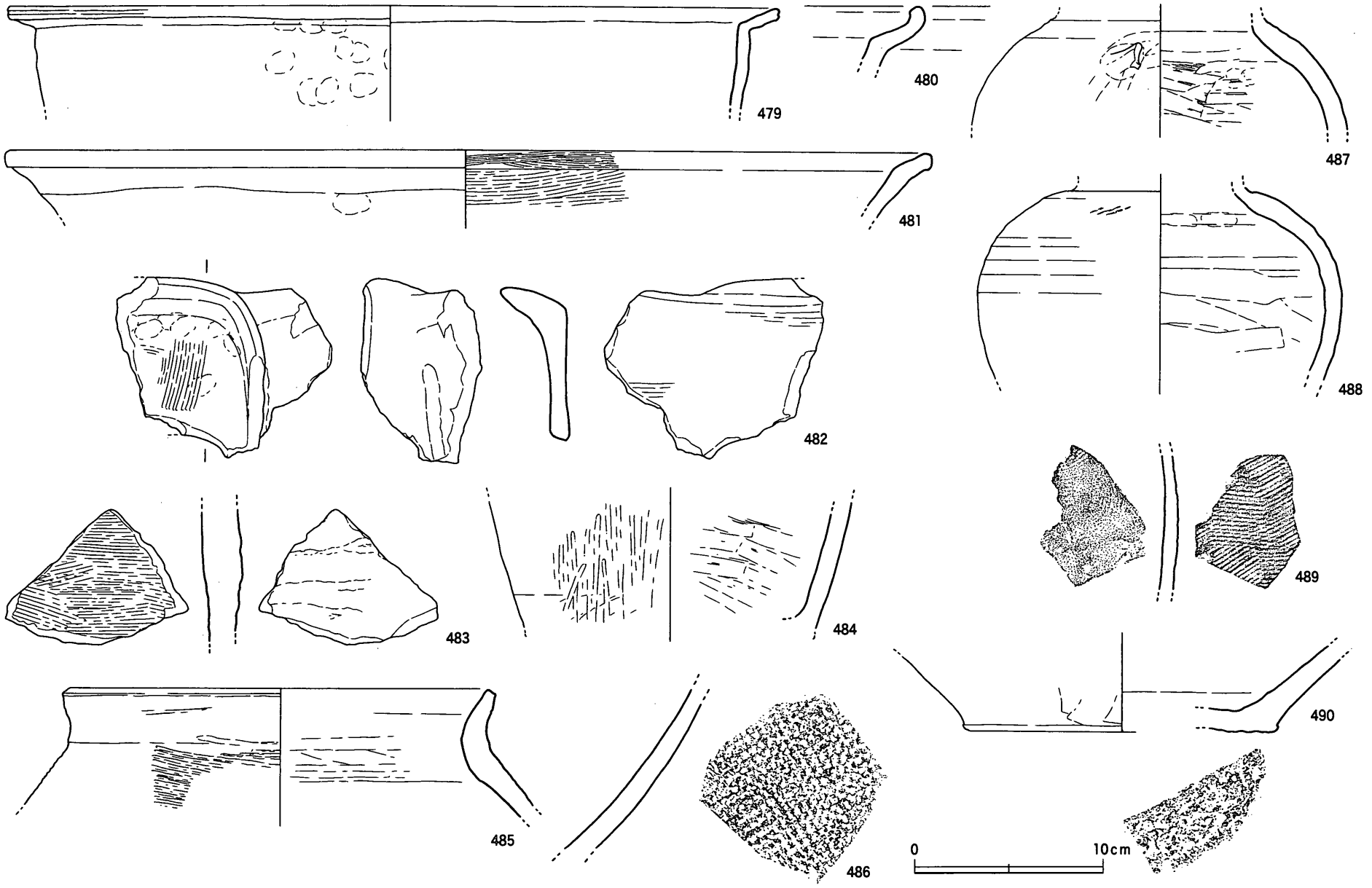
土師質土器小皿（**325**～**336**）には，底部ヘラ切り（**325**～**329**）と底部糸切り（**330**～**336**）がある。ヘラ切り底の小皿は口径6.9～8.3㎝を計り，口縁部が比較的長い形態をもつもの（**325**・**328**・**329**）と，太く短く立ち上がり端部が丸いもの（**326**・**327**）に細別できる。後者の口縁部外面には，底部へと連続する螺旋状の沈線が認められる。これは，底部切り離しの際にヘラが器体に当たっていたことを示しており，意図的な作業痕跡かどうかは判断が難しいものの，区画１の他の遺構や前田東・中村遺跡，あるいは東讃地方の西谷遺跡でも確認できる。糸切り底の小皿は，Ⅲ－１区上層・中層でみられた特徴的な胎土をもつもの（**330**～**335**）と，これとは異なる胎土のもの（**336**）がある。前者は，口径6.8～8.8㎝を計り，法量に若干のばらつきが指摘できる。**330**～**332**・**335**は，見込み中央が口縁端部近くまで盛り上がっており，見込みの外周のみが低く窪むコースター形を呈している。**336**は7.4㎝という小振りな口径にもかかわらず，明瞭に長く立ち上がる口縁部をもっており，明らかに**330**～**335**とは異なる作巧である。



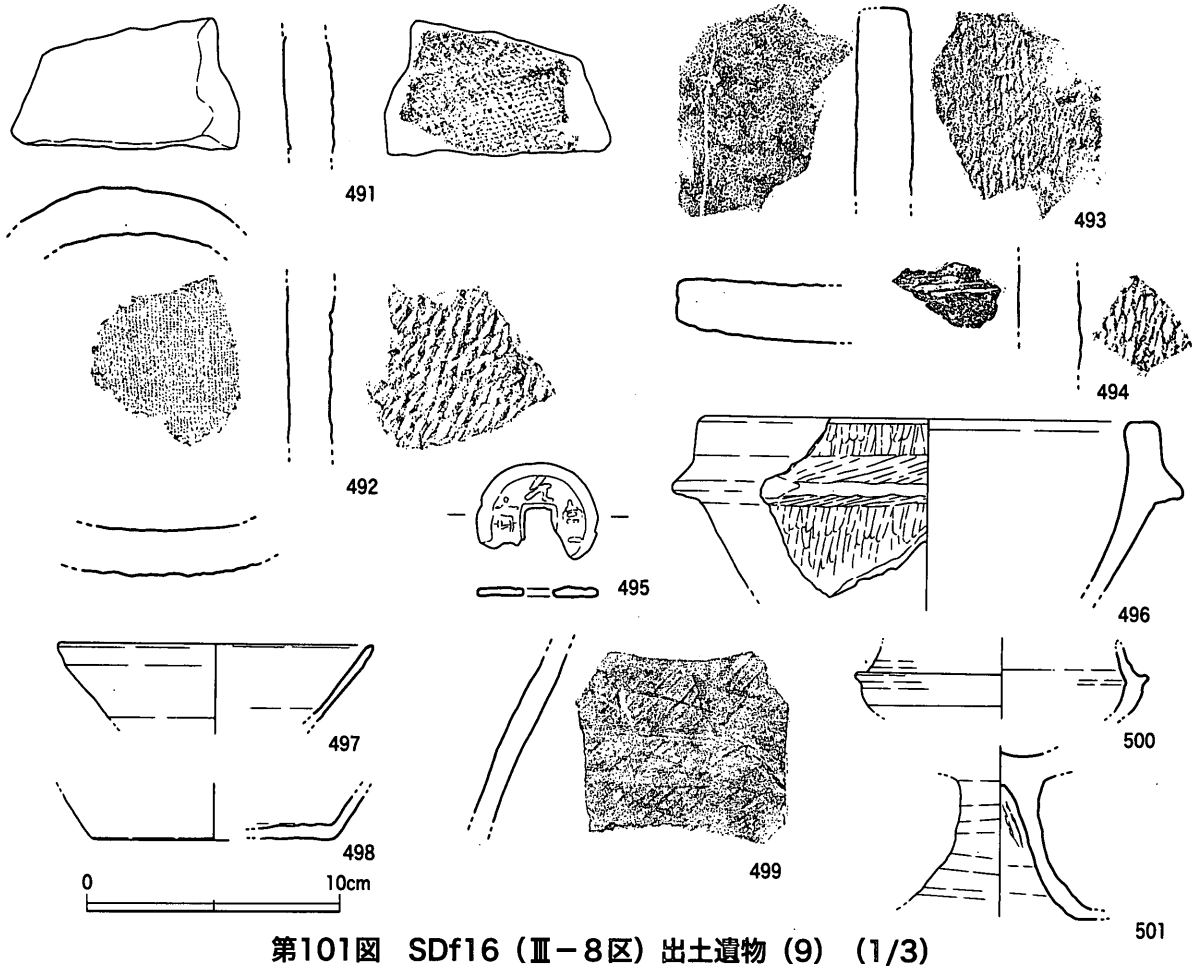
第98図　SDf16（Ⅱ－8区）出土遺物（6）（1/3）



第99図　SDf16（Ⅲ－8区）出土遺物（7）（1/3）



第100図　SDf16（Ⅱ－8区）出土遺物（8）（1/3）



第101図　SDf16（Ⅲ－8区）出土遺物（9）（1/3）

土師質土器杯（**337**～**379**）は，底部ヘラ切り（**337**～**349**）と底部糸切り（**350**～**379**）がある。ヘラ切り底の杯は，底部と体部の境が明瞭に屈曲するもののみで占められ，Ⅲ－1区下層出土のタイプ（**266**～**271**）は存在しない。口径10.8～11.6㎝を計り器壁が薄手のもの（**337**～**342**）と，口径11.6～12.8㎝を計りやや器壁が厚手のもの（**343**～**347**）の2者に細別でき，前者がⅢ－1区下層に，後者がⅢ－1区中層に対応するものと捉えている。**348**は前者の形態であるが細片のため，口径復元に難点があるものであろう。これらは胎土・色調に若干のバリエーションがあるものの，明確に形態・技法との対応関係がみられないため，一応，同一地域（生産地）産の土器と見なし得るものである。**349**は，口縁端部が短く外反する特徴的な形態をもち，他者とは異なる暗褐色の色調を呈することから別系統の製品とも考えられる。糸切り底の杯は，淡黄白色系の色調のもの（**350**～**353**）と，淡褐色ないし赤褐色系の色調のもの（**354**～**379**）に大別できる。後者は，糸切り底の小皿（**330**～**335**）と共通した胎土をもつ，区画1では普遍的な一群である。また前者は，Ⅲ－2区部分でみられた糸切り底の杯（**314**）に近似した胎土をもつ。形態的には，**350**～**353**は直線的に短く外傾する口縁部・体部が特徴であり，**350**のみ静止糸切りである。**354**～**379**は，連続的に内弯する口縁部・体部をもつもの（**354**～**359**）と，直線的に外傾する口縁部直下にナデの断絶に伴う器面の段が付くもの（**360**～**367**），内弯する口縁部・体部にナデの断絶に伴う器面の段がみられるもの（**368**～**370**，**374**～**378**）の3者に細別できる。**362**・**363**・**366**・**367**・**372**・**374**は，明確に口縁部ナデ→体部ナデという先後関係が指摘し得る。また体部下半にロクロ目が顕著なものも多いが，これは薄手

のヘラ切り底の杯のような器面の仕上げ調整とは異なり，むしろ器面を粗く掻き取るような状態として観察される。

十瓶山窯産須恵器杯（**380**～**383**）は，口径13.6㎝を計るもの（**380**・**382**・**383**）と，口径12.6㎝のもの（**381**）の２法量が存在する。前者は，体部下半から底部にかけて内弯し，特に**380**は本来平坦であったヘラ切り底が丸く突出しており，突出する底部外面には指の当たった痕跡がみられる。これは底部と体部の境が明瞭な後者とは異なる。前者の調整痕を観察すると，器面の剥離が著しい**382**を除き，体部から底部にかけての内面に斜め方向の板ナデをみることができる。後者の内面には，このような板ナデ調整をみることはできない。つまり，底体部の内弯と内面の板ナデ調整とは，相関関係にある可能性が考えられるのである。この調整痕に対する整合的な説明としては，いわゆる「底部押し出し技法」が想定されているが，片桐孝浩氏が想定するような内型を用いた「押し出し」ではなく，内面の板ナデ（コテ当て）作業によって丸底化されたとみるべきであろう。

十瓶山窯産須恵器椀（**384**～**404**）は，出土量がかなり多い。Ⅲ－２区部分でみられたような回転磨き調整を施す個体はみられない。**384**・**385**・**386**・**394**～**398**はⅢ－１区上層・中層でみられるものであるが，**399**・**400**・**404**はⅢ－１区上層のみに存在したものである。ことに**404**は，非常に矮小化した不整形な高台を伴う。

東播系須恵器椀（**405**）は，痕跡的な糸切りの平高台をもつ。器面の損傷が著しく，直接的に共伴遺物の年代観を示すものではない可能性がある。

吉備系土師質土器椀（**406**～**423**）は，山本編年Ⅲ－２期のみで構成される。椀形態としては量的に十瓶山窯産須恵器椀に次ぎ，瓦器椀よりもかなり多い割合を占める。**406**は直線的に外傾する体部と，そこから明瞭な屈曲をもって立ち上がる口縁部からなる。器体が小振りであるのと対照的に高台は比較的高く作られている。体部外面には接合痕がやや右上がりの横位にみられ，指頭圧痕によって潰される。見込みには乾燥時とみられる他個体の高台畳付が付着しており，同様な痕跡は**420**～**423**とかなりの高頻度で認められる。**407**もほぼ同様な形態だが，体部が内弯する点に若干の差異がある。

瓦器椀（**424**～**428**）は，全て和泉型である。**424**は，体部から口縁部にかけて右上がりの接合痕を残す。高台は低く歪んだ作巧であり，内面の磨き調整（暗文）は見込みの平行線が体部磨きに後出する。**426**は口縁部外面にも磨きが及んでおり，内面の磨きも比較的緻密である。これらから，尾上編年のⅢ－２～３期と考えられるが，**428**の外傾した痕跡的な高台はⅣ－１期まで下る可能性もある。

土師質土器椀（**429**）は，ヘラ切りの平高台を有する。本遺構の時期を直接示さない，より先行する時期の遺物の混入とも考えられる。

土師質土器台付皿（**430**）は，脚台部の破片であり全体の形状は明確でない。ただし，台付皿が盛行するのは12世紀代までであり，やはり古い遺物の混入である可能性を否定できない。

土師質土器台付杯（**431**・**432**）は，底部糸切りの杯（**354**～**379**のタイプ）に脚台を貼付したものであり，脚台は比較的低い高台形であったともみられる。

輸入磁器は青磁（**433**～**440**）のみであり，白磁は認められない。横田・森田氏分類による同安窯系青磁Ⅰ－１ｂ類皿（**433**），龍泉窯系青磁Ⅰ－５ｂ類碗（**434**）・Ⅰ－５ａ類碗（**435**～**437**）・Ⅰ－４ａ類碗（**438**・**439**・**440**），Ⅲ－３類碗（**441**）がある。下限年代を示すのは碗Ⅲ－３類であり，山本編年Ｆ期（13世紀中葉～14世紀初頭）にあたる。

十瓶山窯産須恵器捏鉢（**442**～**450**）は，口縁部と体部が直線的に連続する形態である。口縁端部

が肥厚せずに断面方形に収まるもの（**442～444**），端部が内側に挽き出されるもの（**445**），端部が外側に挽き出されるもの（**446**），端部が内側・外側両方に挽き出されて肥厚するもの（**447**）に細別できる。**443**・**447**は外面に格子叩き目が施される。体部下半から底部の部位（**448～450**）は，底部外縁に回転ヘラ削り調整を施す。また**448～450**内面には，使用による横方向の擦痕と器面の摩滅が認められる。

東播系須恵器捏鉢（**451**・**452**）は，直立気味の端面をもち，断面三角形を呈する口縁部形態のものである。山仲編年のＣ２類にあたるものと考えられる。

土師質土器足釜（**453～456**）は，鍔端部に明瞭な面が形成されないものであり，Ⅲ－１区上層出土例（**166**・**167**）と同一の形態・技法をもつ。**454**は鍔基部に対応する内面に接合痕がみられ，楠井窯での口縁２技法（鍔部屈折法）による製作が考えられる。足釜脚部（**455**・**456**）には２形態あり，大多数が脚基部が横方向に踏ん張り，そこから下方に脚部が伸びる形態のもの（**455**）である。これに対して，脚基部が斜めないし垂直方向で体部に接合され，踏ん張りがなく太い基部の形態をとるものがある（**456**）。後者は，畿内もしくは岡山県南部の事例と近似する形態である。

土師質土器鍋（**457～481**）は，口縁部形態・法量・技法が多様な在り方を示す。Ⅲ－１区上・中・下層での類別をあてはめると，類別①すなわち，口縁部端面にハケ目調整もしくは横ナデ調整による平坦面があり，器面調整にハケ目を多用し，口縁部は肥厚しないもの（**457～473**）が圧倒的に多い。ただし技法的には，口縁部の屈折を指で行うものが一般的だが，叩き作業によって屈折させるとみられるものが少量認められる（**462**・**471**・**473**）。口縁部外面には格子叩き目が遺存しており，特に**473**では口縁部端面にも叩き目が認められる。これは，十瓶山窯（西村遺跡）での鍋に近似する技法であるが，端面に叩き目がみられる事例は西村遺跡では未見であり，岡山県の亀山窯にはみられる。いずれにしても①とした類別中に口縁部の屈折技法を異にする２者が存在することは，これらが複数の生産地よりもたらされたことを示唆しているといえる。なお①の法量は，Ⅰ．口径23.6㎝（**457**），Ⅱ．口径26.4～27.2㎝（**458**・**459**・**463**），Ⅲ．口径32.4～35.6㎝（**460**・**465**・**468**），Ⅳ．37.6～42.8㎝（**461**・**462**・**467**・**469～472**），Ⅴ．43.8㎝（**473**）の５種類程度に分けられる。この他Ⅲ－１区での類別にない形態としては，⑧ 丸い口縁端部をもつもの（**474**・**475**），⑨ 口縁部端面が外側にツマミ出され，体部が張るもの（**476**），⑩ 直立する口縁部端面をもち体部が球形に張るもの（**477**・**478**）がある。⑧は口径Ⅱに近く，⑨は口径Ⅲに，⑩は口径Ⅰに近い法量をもつ。⑩は口径や鍔端部の形状，体部の張りや調整方法が，Ⅲ－１区下層出土の足釜（**240**・**241**）の鍔部と体部の形状にほぼ一致しており，鍔部屈折後で口縁部貼り付け以前の製作途上の足釜の形態を彷彿とさせる。**480**は口縁部が内弯するタイプの鍋であり，搬入品の可能性もあろう。

十瓶山窯産須恵器壺（**484**）は，体部外面に縦方向のヘラ磨き調整を施しており，広口瓶の体部下半にあたるものと思われる。

十瓶山窯産須恵器甕（**485**・**486**）のうち，**485**は頸部の屈曲が緩やかで短い口頸部が外反する。端部は比較的シャープな平坦面が作出されている。体部上半には横位に近い右下がりの平行叩き目がみられる。**486**は格子叩き目が交錯して施されており，大甕の底部にあたるとみられる。

備前焼とみられる壺（**487**・**488**）は，若干張った丸い肩部をもち，**487**には横方向に貼付された環状の把手がある。また**488**には，かろうじて叩き目の痕跡が看取できる。焼成は甘く，備前焼と断定するのは困難であるが，十瓶山窯には類例がなく，形態的には備前焼の可能性を考えておくのが最も

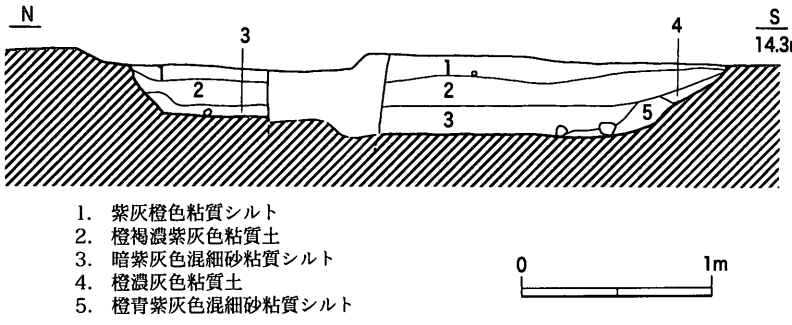
妥当であろう。

東播系須恵器甕（489）は，外面に綾杉状の細かな平行叩き目，内面にやはり細かな当て具痕がみられる。焼成は瓦質気味である。

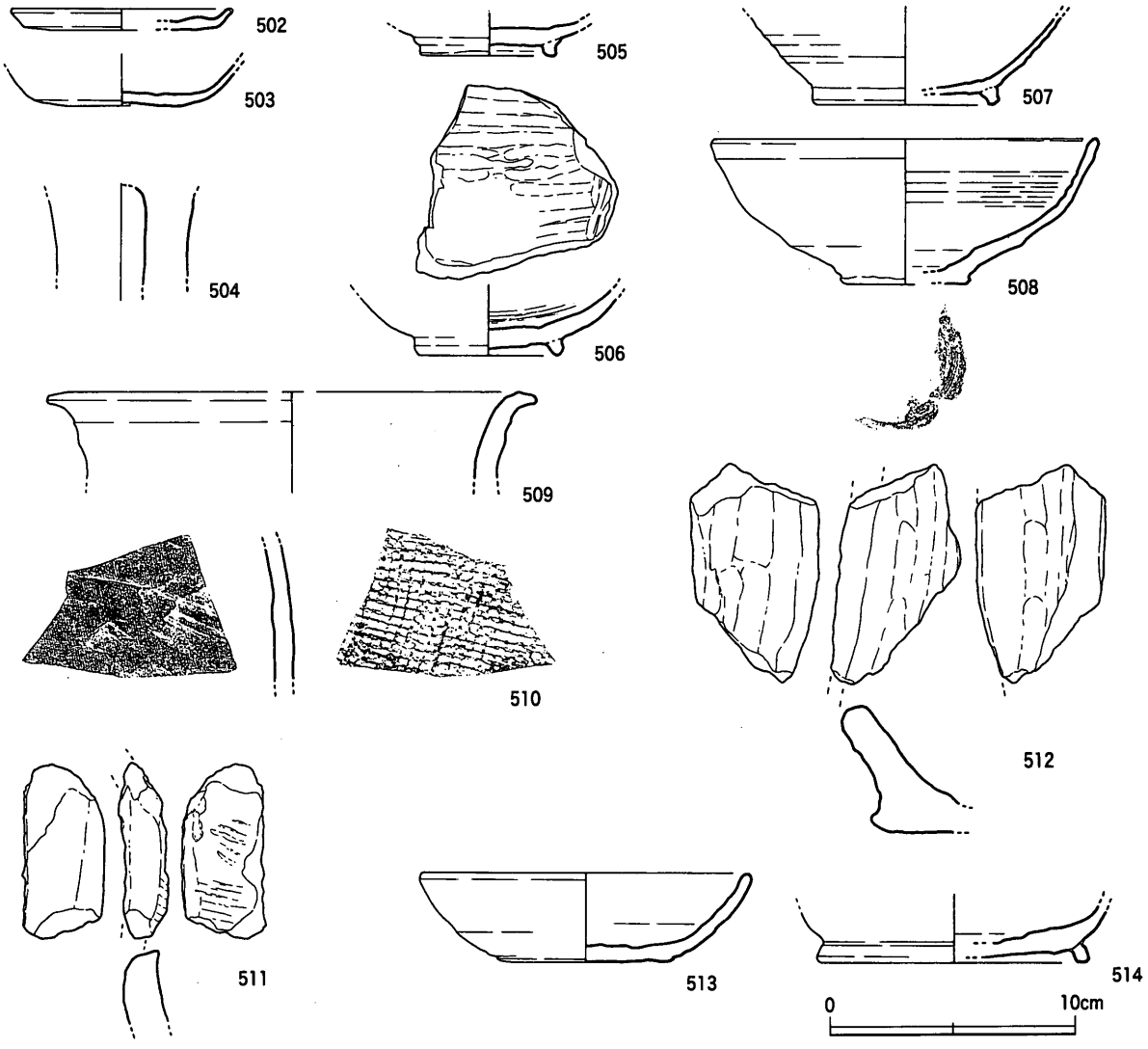
常滑焼甕（490）は，赤褐色を呈して非常に堅緻な焼成である。捏鉢の可能性もあろう。

滑石製の石鍋（496）は，分厚い口縁部と断面台形に短く突出する鍔部から，木戸編年のⅢ－ａ－２類に相当するものである。木戸編年では12世紀後半頃の年代観となり，時期的にやや遡る遺物といえる。ただし，破断面には研磨などの転用の痕跡は認められない。

以上から，出土土器群は中世Ⅱ－３・４期を主体とすることが考えられる。同一遺構とみられるＳＤf16西辺部下層に対応する土器は，土師



第102図　SDf17断面図（1/40）



第103図　SDf17出土遺物（1/3）

質土器小皿・杯ともに皆無に近い。

ＳＤｆ17（第102・103図）

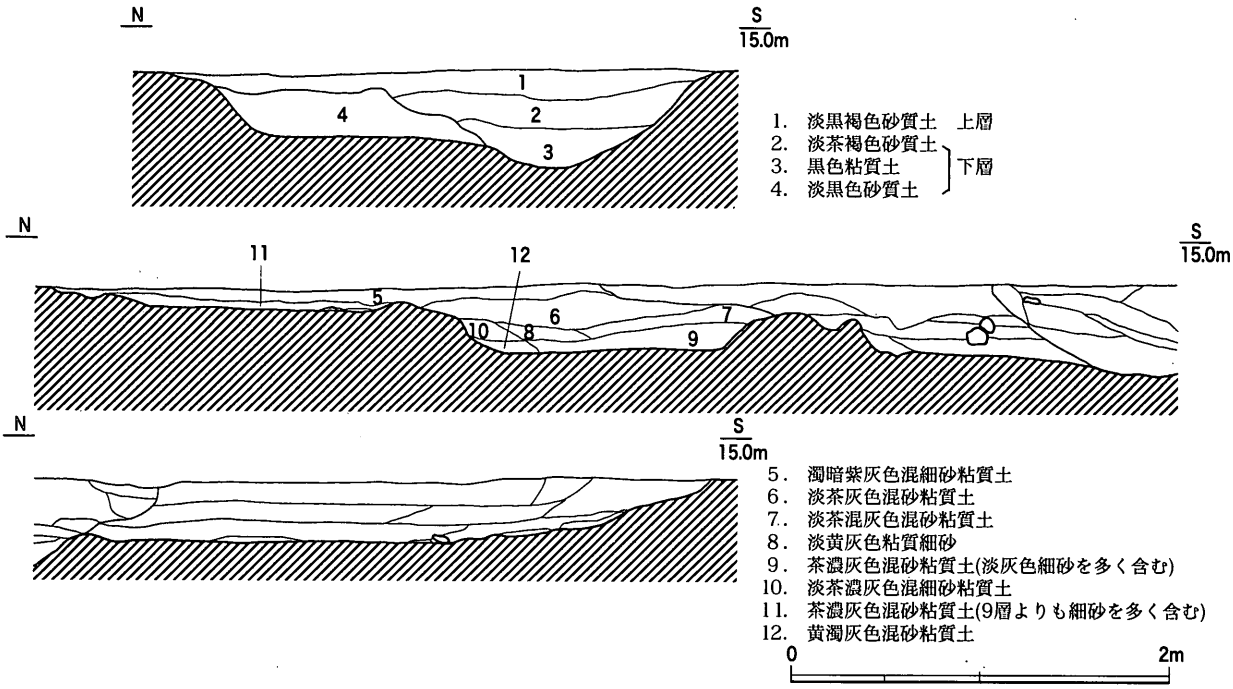
Ⅲ－２・４区で検出された。坪界線にほぼ合致しており，検出した西端部は底面が浅くなり収束する。溝の断面形態は逆台形を呈しており，幅2.75ｍ，深さ0.21ｍを測る。肩部でのレベルは14.2ｍ前後であるが，このレベルは近世～近代のＳＤｆ99以北の削平された高さである。したがって削平前は，0.8～0.9ｍ前後ないしそれ以上の深さを有していたものと推測され，西端部で途切れる形状も本来的なものか明確ではない。埋土は淡茶灰色粘質土であり，一定度の滞水状況にあったことが想定される。

出土遺物は少量だが，土師質土器小皿・杯，土師器高杯・竈，黒色土器椀，十瓶山窯産須恵器杯・甕，東播系須恵器椀がある。土師質土器小皿（**502**）は，口径9.0㎝を計り，口縁部は短い。土師質土器杯（**503・513**）は口径10㎝前後の**503**と，口径13.4㎝の**513**の２者があり，前者はⅢ－１区上層に，後者はⅢ－１区下層に各々対応する法量・形態をもつものである。黒色土器椀（**505・506**）は，比較的厚手の器壁と短く踏ん張る高台をもち，十瓶山窯（西村遺跡）産とみられる。須恵器杯（**507**）は，直線的に外傾する体部をもっており，９世紀後葉～10世紀前葉に位置付けられる十瓶山窯産製品である。東播系須恵器椀（**508**）は，見込みが窪む糸切りの平高台をもち，口縁部には炭素の吸着が認められる。

出土状況も明瞭でなく，これらのみで本遺構の時期を判断するのは難しいが，黒色土器椀と東播系須恵器椀など12世紀前半の土器が認められることから，他の区画溝よりも上限は遡る可能性はある。一方，土師質土器杯の２者から，他の区画溝との併存関係も一応首肯してよいであろう。

ＳＤｆ18（第104～111図）

Ⅲ－６・７区で検出された東西方向（Ｗ－10°－Ｎ）に延びる溝である。ＳＤｆ16・ＳＤｆ17によって囲繞された区画１の中央部に位置しており，区画１－ａ・ｂの南側縁辺を画する。東西55ｍを検出



第104図　SDf18断面図（1/40）

したが，中世後半のＳＤf83・ＳＤf84，近世～近代のＳＤf106に埋土が切り込まれており，周辺の溝との連続関係や延長形態などは不明瞭である。

断面形態は逆台形を呈しており，北側肩部は非常に緩い傾斜で下る。これは，埋没過程で当初の肩部が崩れた形状を示すものであり，本来的な肩部ではない。Ⅲ－６区部分では他の遺構と切り合っておらず，幅2.88ｍ，深さ0.52ｍを測る。底面はⅢ－７区部分で14.4ｍ前後，Ⅲ－６区部分で14.25ｍ前後であり，東側に向かって底面が傾斜していることがわかる。

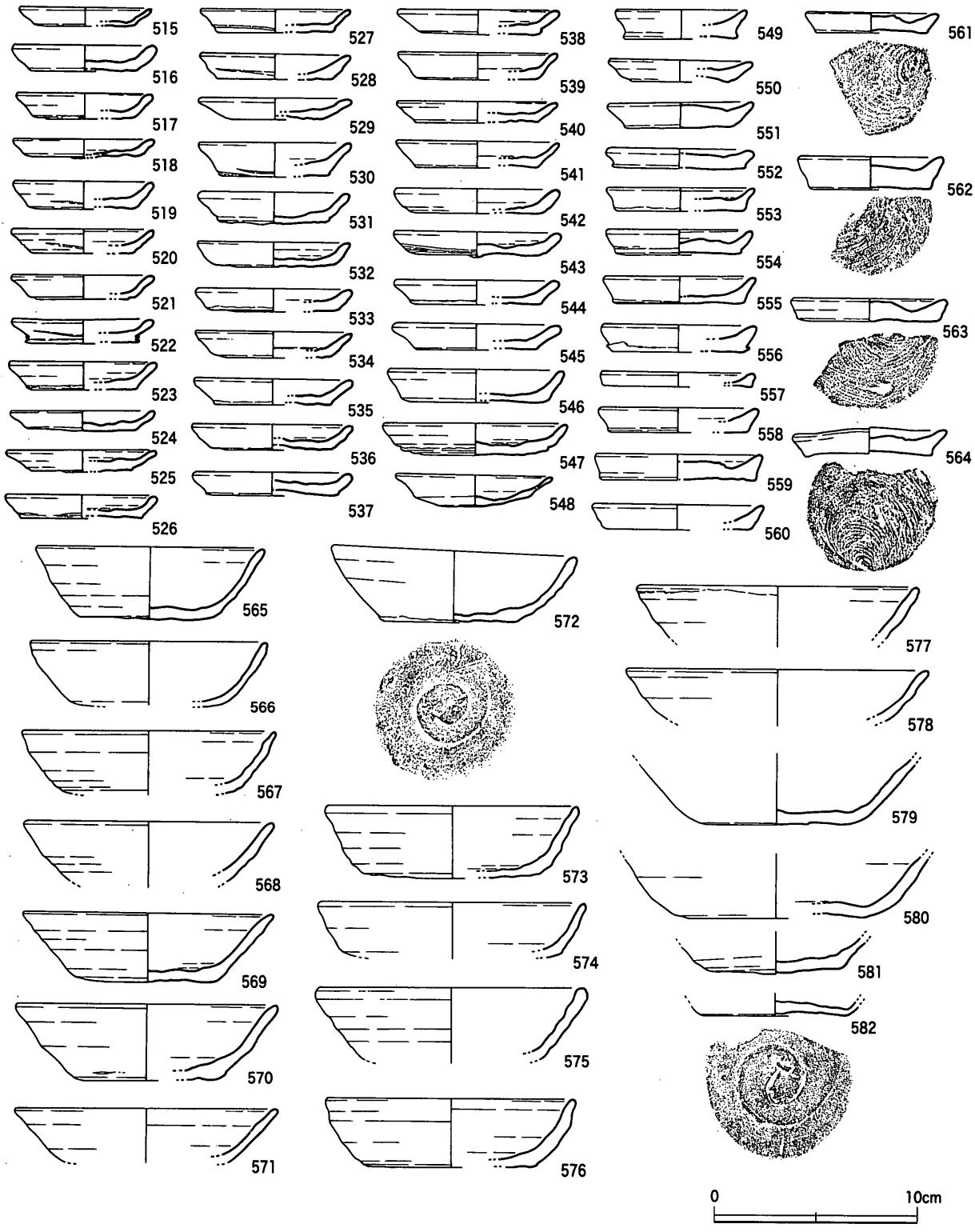
埋土は，淡茶灰色系の砂質土を主体としている。ａ－ａ′断面では，４層の堆積後にこれを切り込んで１～３層が堆積する状況が観察でき，溝内の再掘削が行われたことが窺える。再掘削によって，当初は逆台形であった溝の断面形態が，Ｕ字形に変更されていることも看取できる。

出土遺物はコンテナ２箱分出土した。遺物の分布範囲は，特定の箇所には集中しておらず，ほぼ全体にわたってみられた。上記のように再掘削が確認された箇所もあったが，遺物は一括して取り上げた。

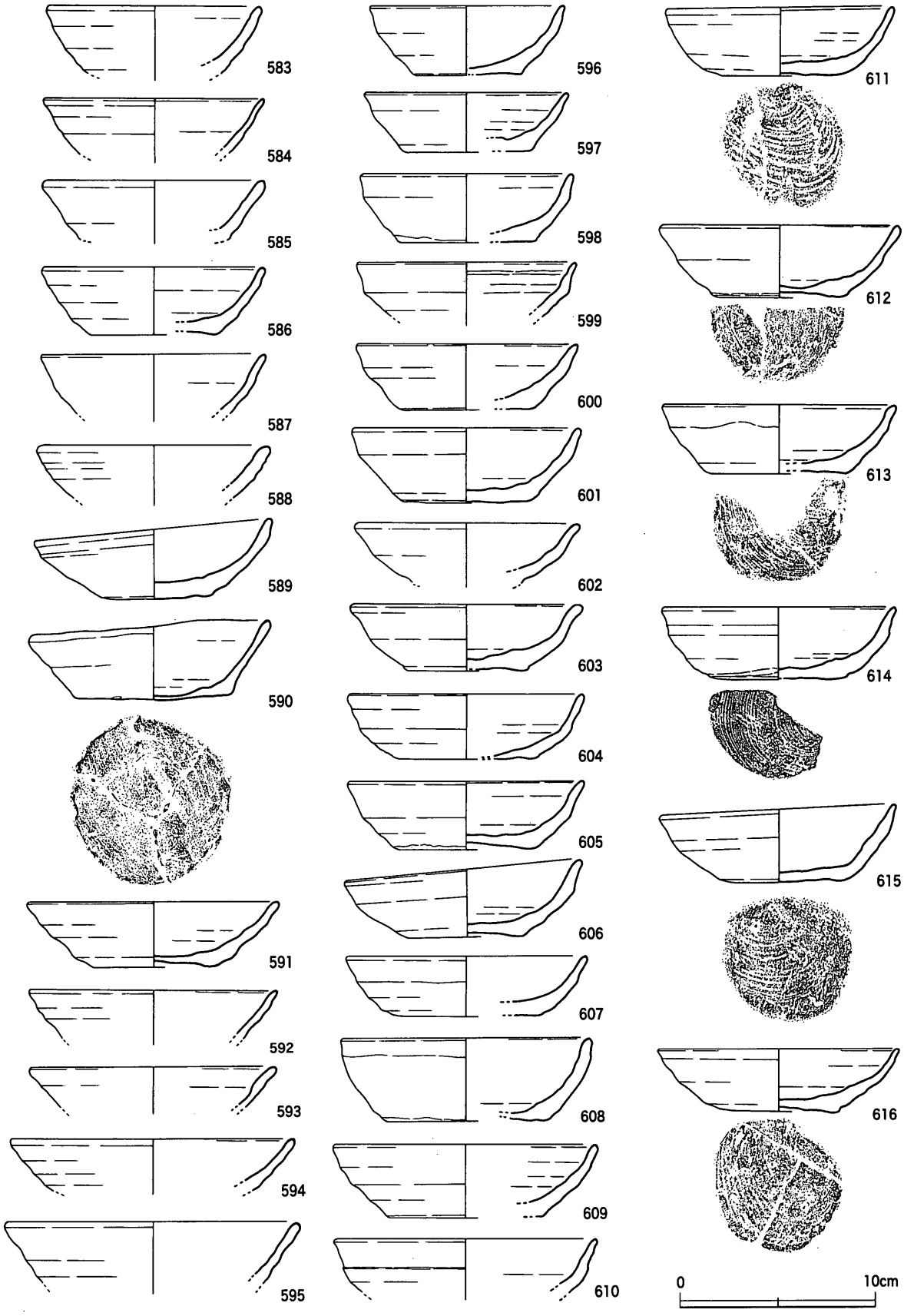
土師質土器小皿・杯・足釜・鍋，土師器竈，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢，吉備系土師質土器椀，東播系須恵器捏鉢，亀山焼捏鉢・甕，備前焼甕，瓦器椀，常滑焼甕，古瀬戸瓶，白磁碗・青磁碗，平瓦，土錘などの中世遺物の他，古墳時代後期の須恵器杯蓋，古代の須恵器皿，サヌカイト製石器が出土している。

土師質土器小皿（**515～564**）は，底部ヘラ切りのもの（**515～548**）と底部糸切りのもの（**549～564**）の２者がある。ヘラ切り底の小皿は，口径6.4～9.0㎝と法量に幅があるが，これらの法量は漸移的であり，複数のタイプに明確に分離できるものではない。また，**515～547**は近似した胎土・色調をもち，同一系譜の土器と捉えることが可能である。**519**・**520**・**522**・**527**・**528**・**530**・**543**は底部外縁にヘラ切り痕と連続する右下がりの沈線が認められる。底部切り離し時の作業痕跡であろう。**548**は吉備系土師質土器椀に近似した胎土をもつものであり，ヘラ切りされた底部が下方に突出し，ヘラ切り痕をナデ調整している。これらの特徴から，底部が押し出されたことは明らかであり，Ⅲ－１区中層出土の**202**で観察できたような偶発的な在り方とは異なる。したがって，いわゆる「底部押し出し技法」の事例として捉えてよいかもしれない。糸切り底の小皿は，底部に接する口縁部下端の器壁がヘラ切りの個体よりも厚く，断面三角形状を呈する。**551**・**553**・**559**・**561**・**563**・**564**は，見込みが口縁部付近まで盛り上がっており，底部の断面形態が台形を呈している。

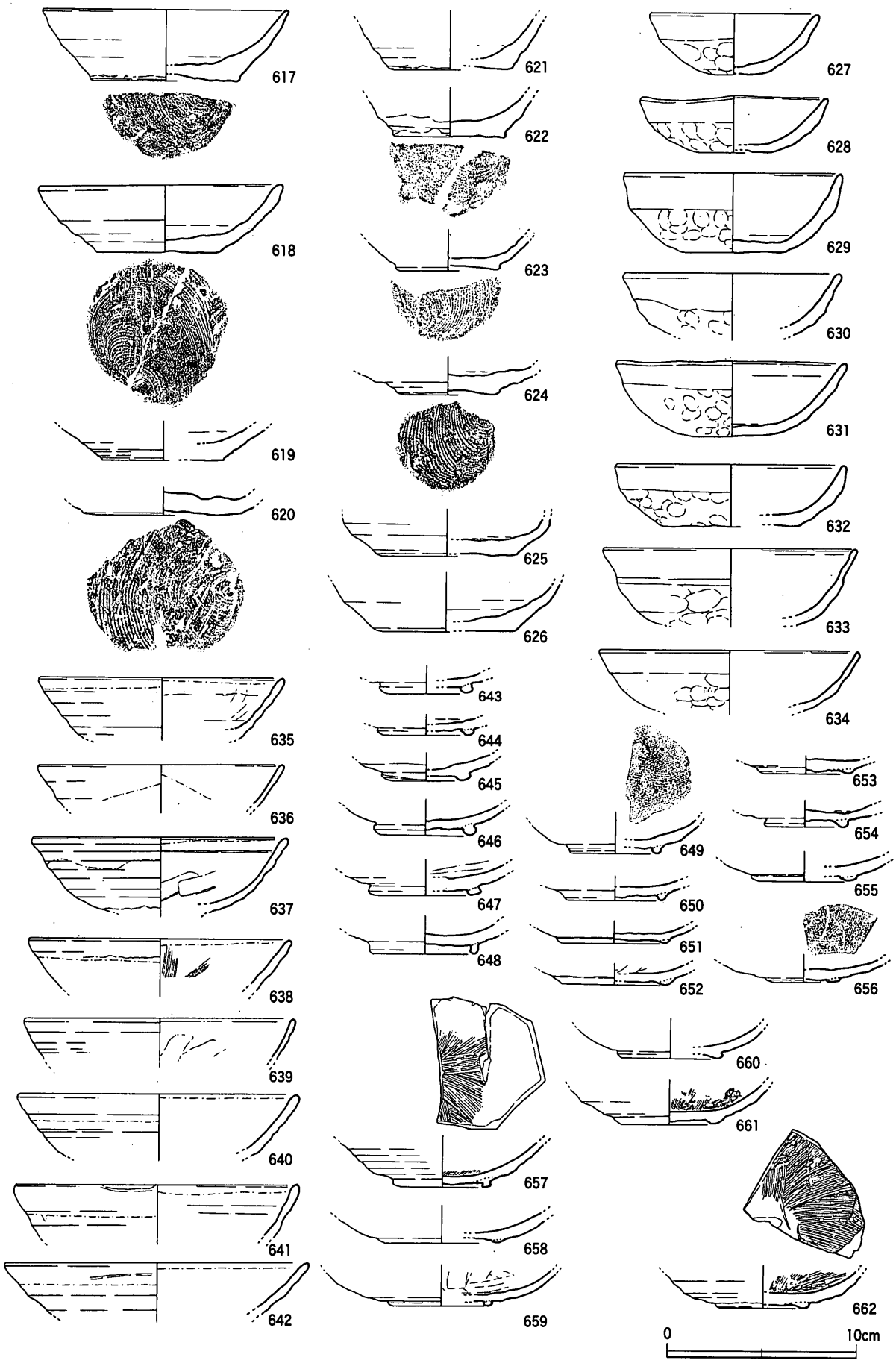
土師質土器杯（**565～634**）は，底部ヘラ切りのもの（**565～582**），底部糸切りのもの（**583～626**），手捏ねのもの（**627～634**）の３者が存在する。手捏ね杯が少量ながらみられることが，ＳＤf16ではなかった大きな特徴といえる。ヘラ切り底の杯は，法量・形態からいくつかに細分できる。① 口径11.2～12.4㎝で，薄い器壁と体部の外傾度が若干弱い形態のもの（**565～567**）。② 口径12.0～12.8㎝で，体部の外傾度が比較的強いもの（**568～572**）。③ 口径12.4～13.0㎝で，体部が直立気味に立ち上がり，口縁端部外面に丸味を帯びた面をもつもの（**573**・**574**）。④ 口径13.0㎝で丸く太い口縁端部をもつもの（**575**）。⑤ 口径12.2㎝で，口縁部外面が強いナデによって窪み，外反するもの。糸切り底の杯と同一の形態をもつ（**576**）。⑥ 口径13.8～14.6㎝で，緩いカーブを描いて屈曲する底体部をもつもの（**577～580**）。これらは⑤が糸切り底の杯と同一の胎土・色調をもち，形態の特徴とも一致する。その他は③が灰白色を呈するものの，砂粒の混入状況や色調という点での胎土の明確な群別は困難である。①は，ＳＤf16Ⅲ－１区部分中層出土例に，⑥は同下層出土例に各々近似した法量・形態がみられる。糸切り底の杯は，燈色ないし赤燈色に発色し，砂粒を多く含んだ胎土をも



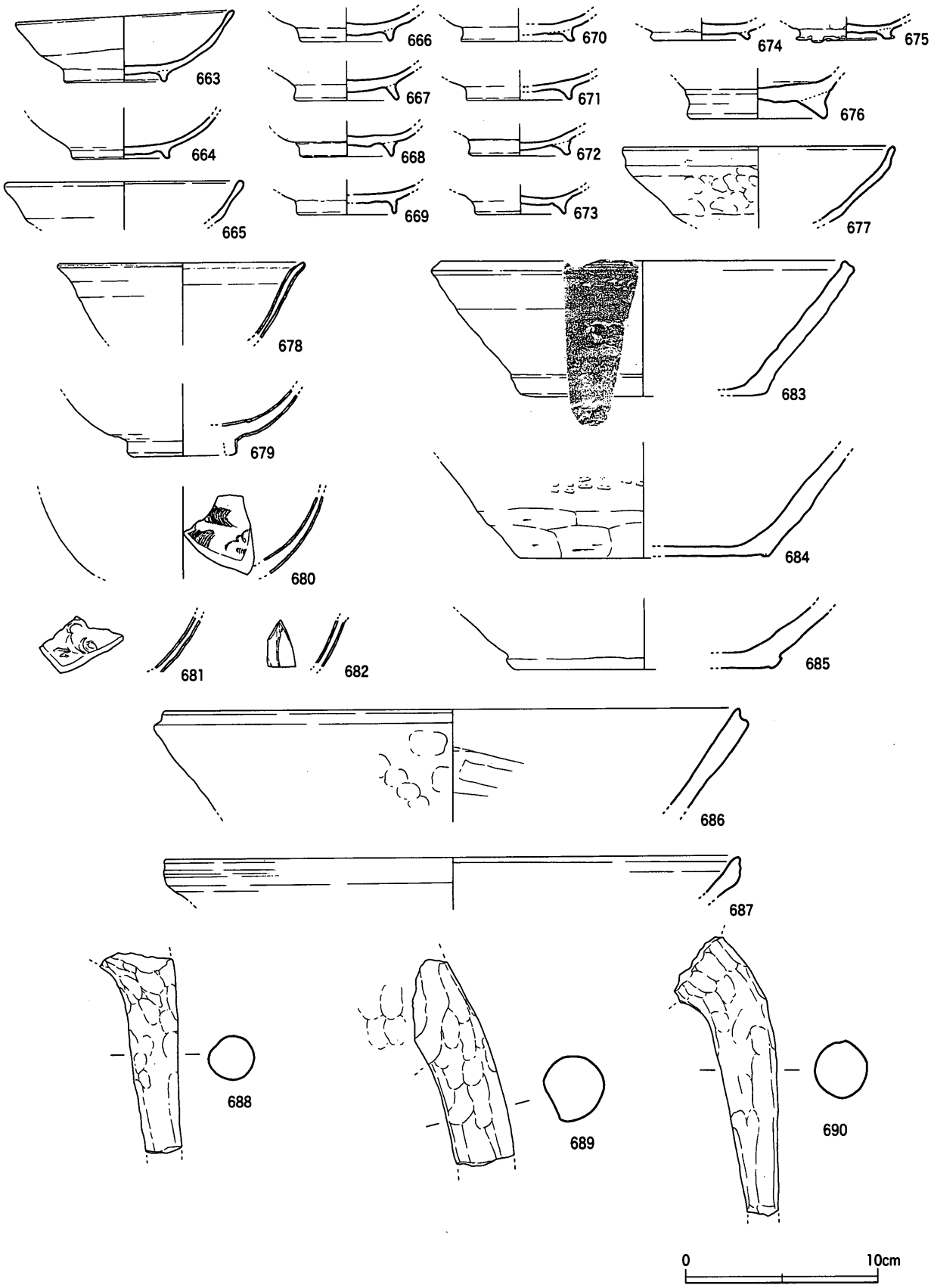
第105図　SDf18出土遺物（1）（1/3）



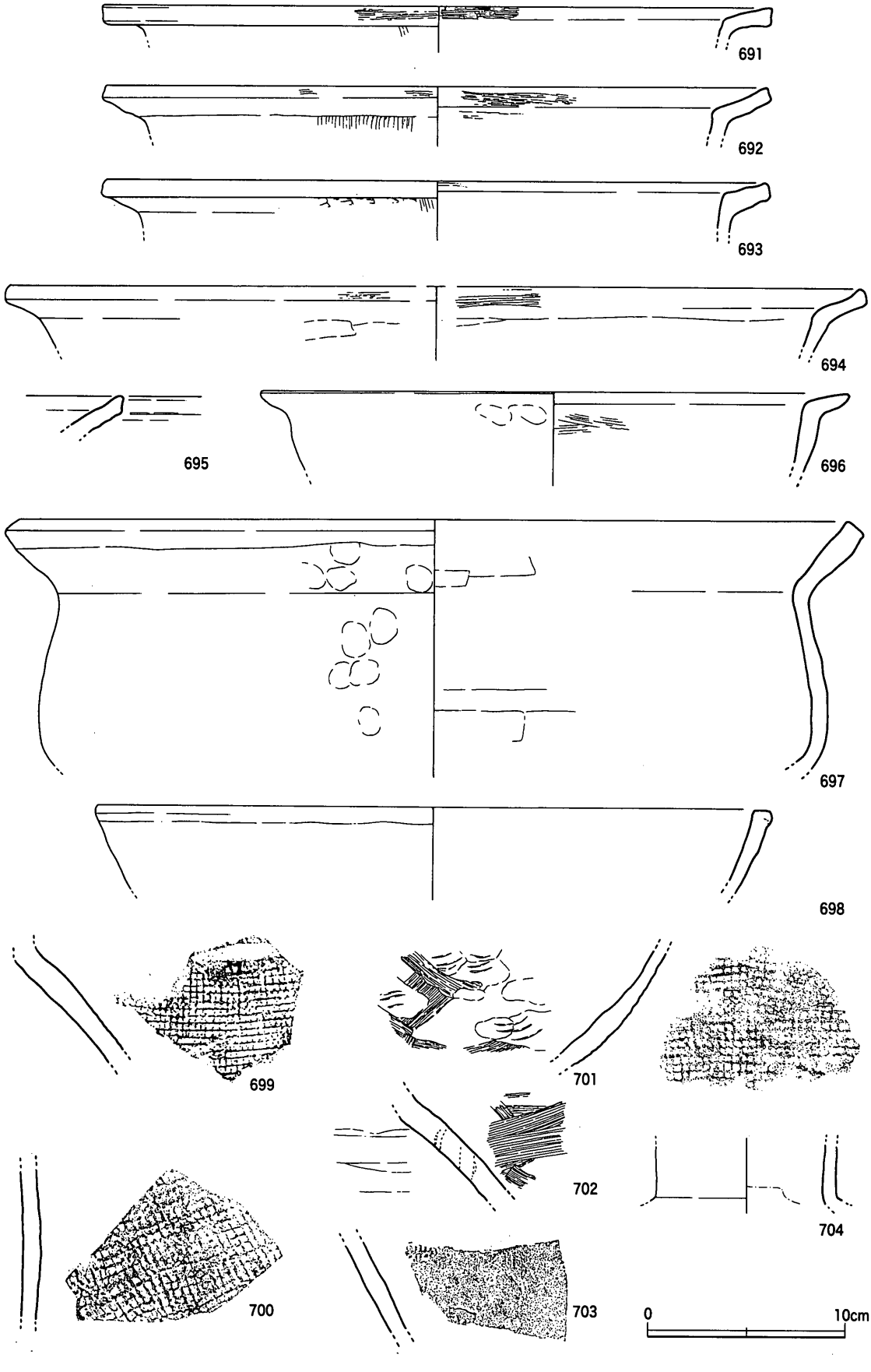
第106図　SDf18出土遺物（2）（1/3）



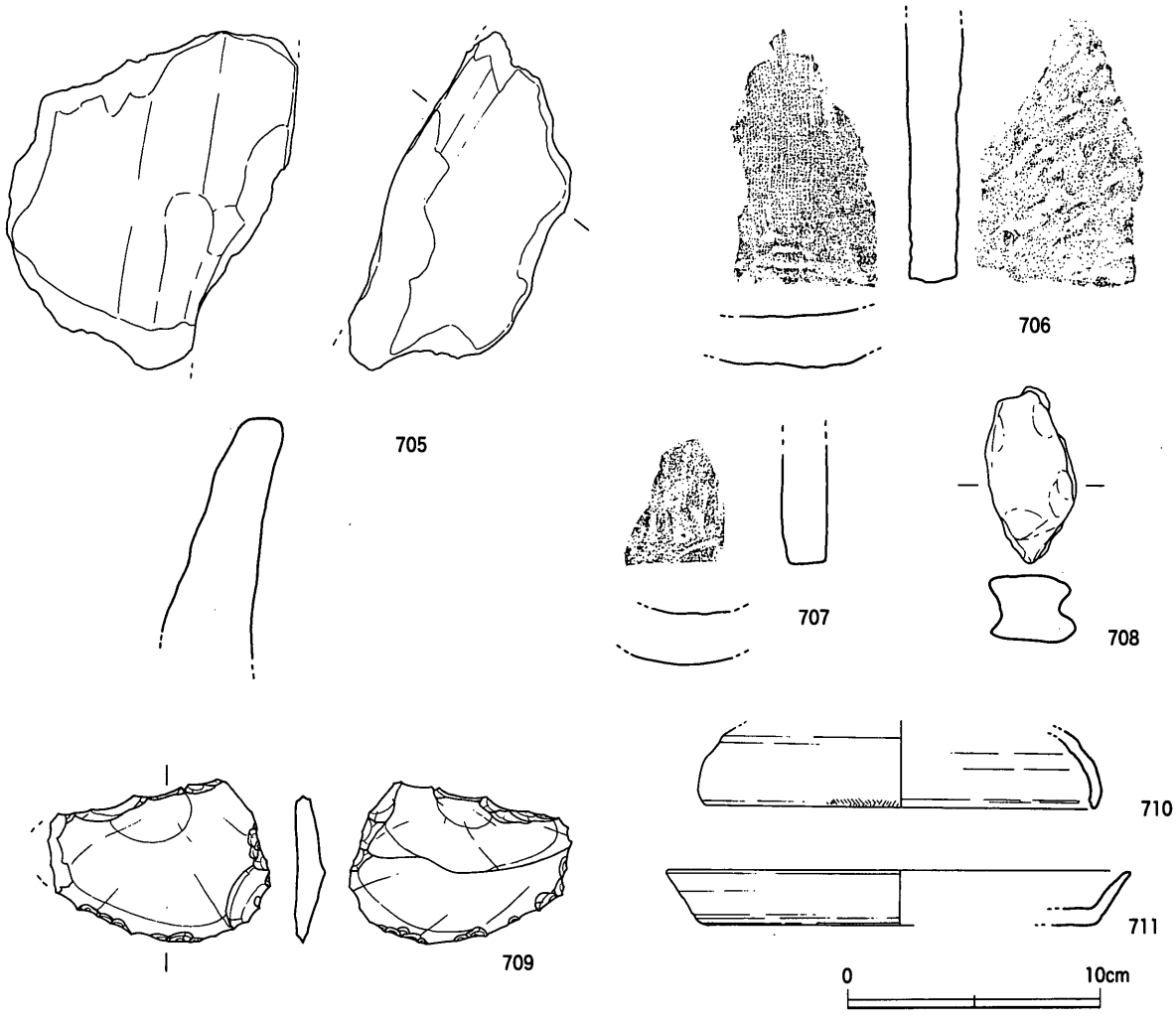
第107図　SDf18出土遺物（3）（1/3）



第108図　SDf18出土遺物（4）（1/3）



第109図　SDf18出土遺物（5）（1/3）



第110図　SDf18出土遺物（6）（1/3，709は2/3）

つものでまとまっており，区画１の同種の杯としては普遍的に存在するものである。口縁部から体部にかけての形態は，ＳＤf16Ⅲ－７区部分と同様にいくつかに細分可能である。すなわち，① 連続的に内弯する口縁部・体部をもつもの（**583～589・611・616・617・618**），② 直線的に外傾する口縁部と体部をもつもの（**590～595**），③ 内弯する口縁部・体部にナデの断絶に伴う器面の段がみられるもの（**596～610・612～615**），の３者である。一応このような細分ができるが，相互の形態差はかなり漸移的であり，厳密な区分は困難な部分もある。手捏ねの杯は，丸い底部・体部と直立ないし外反する口縁部からなる。体部から底部にかけての外面には，指頭圧痕が不規則に認められ，口縁部には強い横ナデ調整がみられる。口縁部のナデは垂直方向に若干の振幅があり，ロクロ回転を利用した調整ではなさそうである。これらは胎土・色調が糸切り底の杯と共通することから，搬入品ではなく在地色の強い土器と捉え得る。

十瓶山窯産須恵器椀（**635～662**）は，楕円形ないし潰れた方形を呈する断面形態の高台を貼付するもの（**643～657**）と，さらに矮小化した低い高台をもつもの（**658～662**）に分けられる。口縁部から体部の破片（**635～642**）を含めて内外面にヘラ磨き調整を行うものは皆無である。ＳＤf16Ⅲ－１区部分上・中層出土例と共通する。

吉備系土師質土器椀（**663～675**）は，山本編年Ⅲ－２期のものがみられる。**663**は底部中央からややずれた部位で高台を貼付する。**675**は高台畳付にヘラ状工具が当たり，歪んだ形態となっている。

土師質土器高台付杯（**676**）は，底部糸切りの杯に「ハ」の字形に太く踏ん張る高台が貼付されたものである。

瓦器椀（**677**）は，口縁部が直立することがやや異質であるが，法量からみて尾上編年Ⅲ－３期の和泉型と考えられる。

白磁碗（**678**）は，横田・森田分類のⅨ類碗（口禿碗）である。口縁部の釉は回転を利用して掻き取られている。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として用いられたと考えられる。

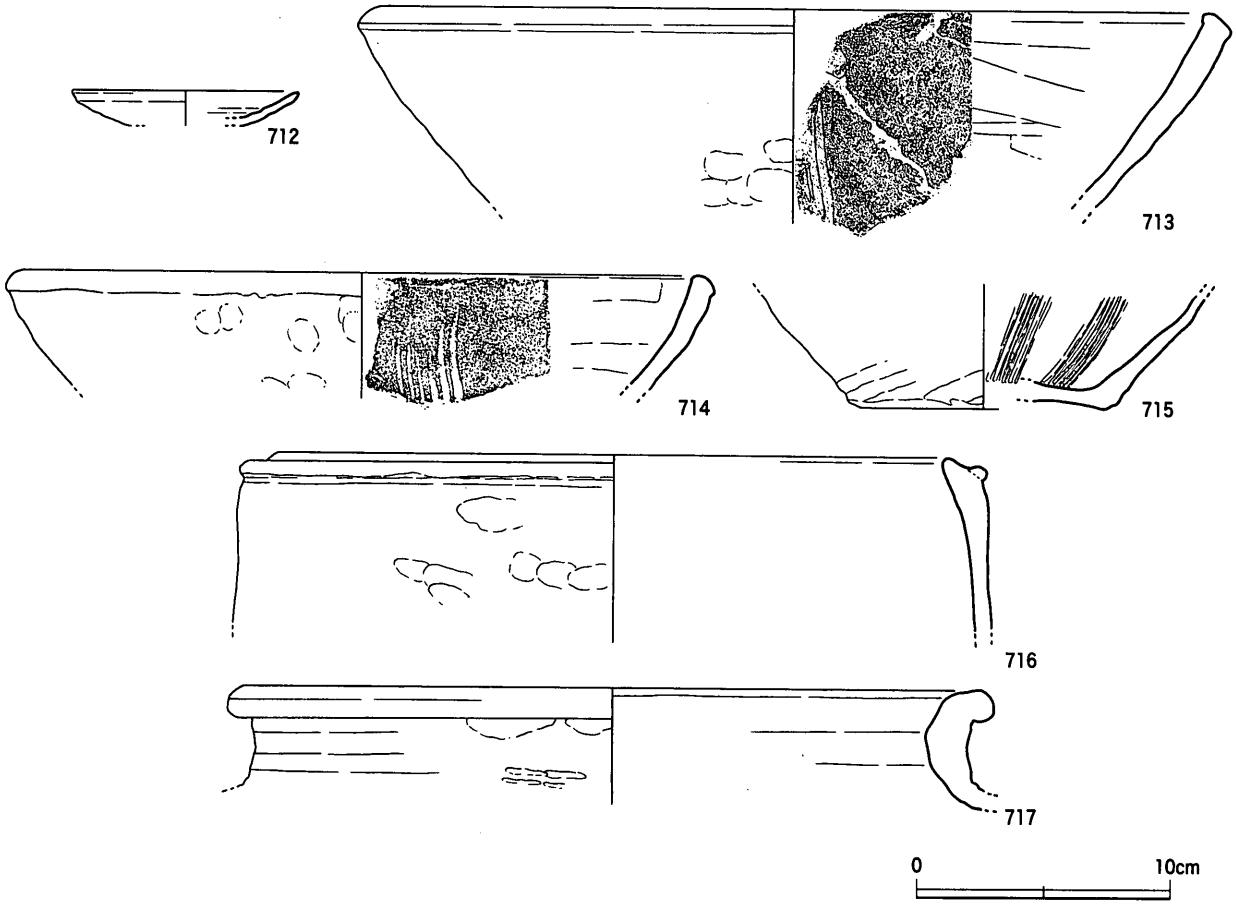
青磁碗（**679～682**）は，横田・森田分類のⅠ－４ａ類（**679・681**），Ⅰ－３類（**680**），Ⅰ－５ａ類（**682**）がある。

十瓶山窯産須恵器捏鉢（**683～685**）は，口縁部が体部から直線的に連続して外傾するタイプのものである。**683**は，口縁端部が上方に弱く拡張する。口縁部直下には，回転ナデに消去された格子叩き目が認められる。底部外縁は**685**と同様に削られないため，外側に底部の円盤が突出したような形態になっている。**684**は底部外縁を２段にわたって削り取っているため，底部円盤が外側にはみ出していない。体部には格子叩き目がみられる。

亀山焼捏鉢（**686**）は，十瓶山窯産捏鉢よりもきめの細かな粘り気のある胎土をもち，瓦質焼成を呈する。口縁部端面には明瞭な凹面が形成される。

東播系須恵器捏鉢（**687**）は，山仲分類のＣ２類にあたると思われる。

土師質土器足釜（**688～690**）は，基部が横ないし斜め下方に踏ん張る形態のもの（**688・690**）と，基部から脚部先端に向かって直線的に伸びるもの（**689**）がある。後者は他の遺構でも散見され



第111図　SDf18出土遺物（7）（1/3）

るが，在地産（楠井窯や西村遺跡など）の製品とは異質な脚部接合形態といえる。

土師質土器鍋（**691**～**698**）は，ＳＤf16Ⅲ－1区部分での類別に対応させると，①が多い（**691**～**694**）。この他，口縁端部が丸く収まるもの（**696**），類別の②に似るが体部下半に張りがあるもの（**697**），鉄鍋模倣の内弯する口縁部をもつもの（**698**）がある。

亀山焼甕（**699**～**701**）は，正格子叩き目を外面に施す。**701**内面には，ハケ目状の板ナデ調整に消去された当て具痕が認められる。備前焼甕（**702**）は，内外面に板ナデ調整を施す。色調は赤褐色を呈するが，焼き締めが十分に進んでいないものである。常滑焼甕（**703**）は，外面に格子状の押印が付される。古瀬戸四耳壺（**704**）は，藤澤編年古瀬戸前Ⅲ期の所産とみられる。外面全体と頸部内面に施釉される。

土師器竈（**705**）は，粗砂粒を多量に含んだ胎土をもっており，古代後半の竈の系譜を引くことが明確なものである。土錘（**708**）は，有溝土錘である。須恵器杯蓋（**710**）は，口縁部と天井部の境に退化した稜を施し，口縁部内面には段が作出される。６世紀中葉～後葉の所産であろう。須恵器皿（**711**）は底部と口縁部の境が明瞭に屈曲する形態であり，口径18.4㎝と比較的大振りなものである。９世紀代の十瓶山窯産とも考えられるが，断定はできない。

以上の土器群は，中世Ⅱ－２～４期の時期幅をもつものとして捉えられよう。

第110図はＳＤf18出土遺物として取り上げているが，明らかに中世後半に位置付けられるものである。隣接するＳＤf84や，切り合い関係を伴って直交するＳＤf83などと混乱して取り上げてしまった遺物と考えられる。**730**は堺近郊産の瓦質土器甕であり，玉縁状に肥厚しつつ外反する口縁部と，体部外面の粗い平行叩き目が特徴的である。15世紀代の所産であろう。

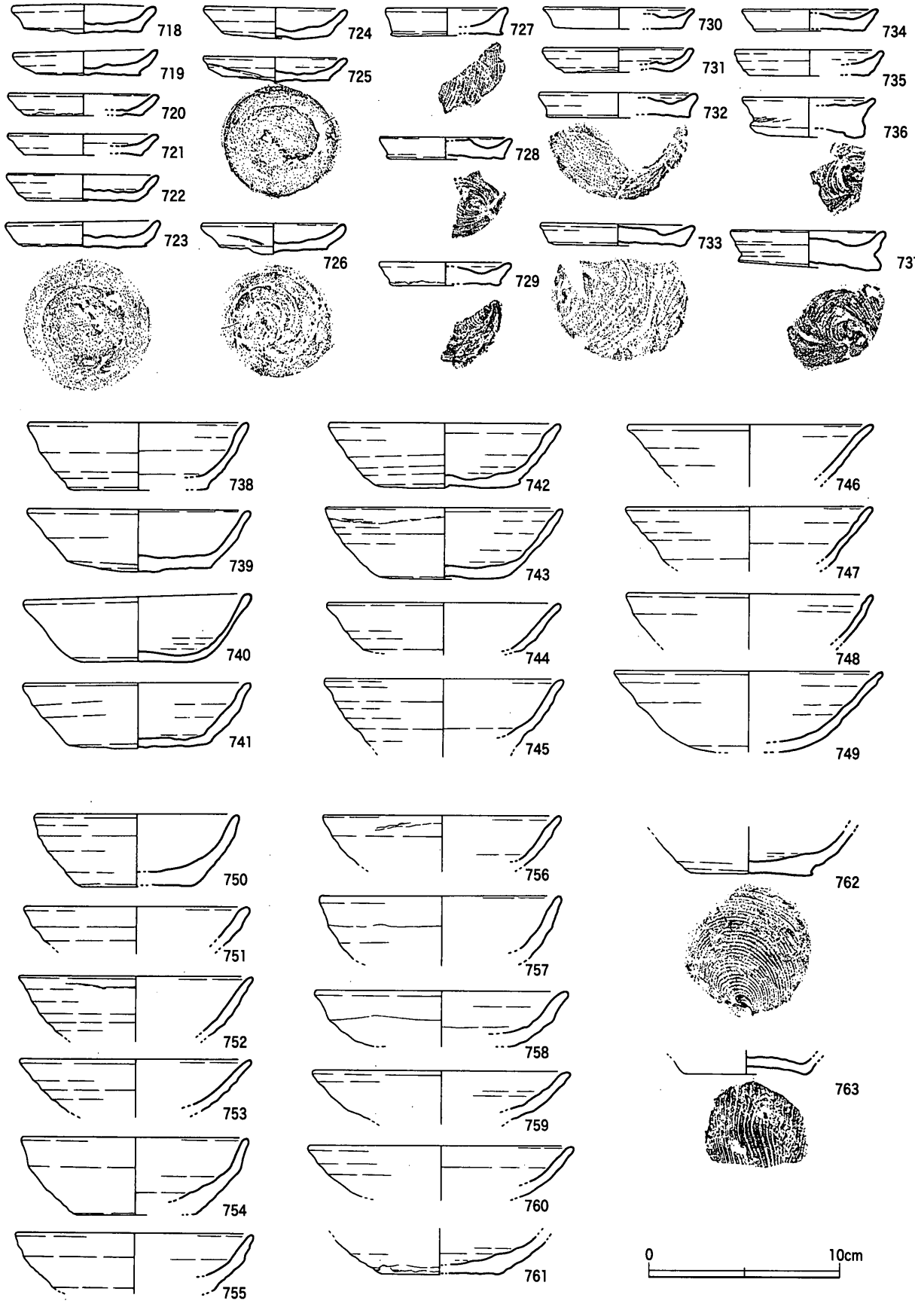
ＳＤf19（第112～114・116図）

Ⅲ－７区で検出された。ＳＤf18の北側でこれと直交する南北方向（Ｎ－６°－Ｅ）に延びる小溝であり，区画１－ａ・ｂを分割する位置関係にある。検出長33ｍ，幅0.5～1.4ｍ，深さ0.06～0.25ｍを測り，断面逆台形ないし浅いＵ字形を呈する。埋土は淡灰褐色砂質土であり，再掘削の痕跡は認められなかった。

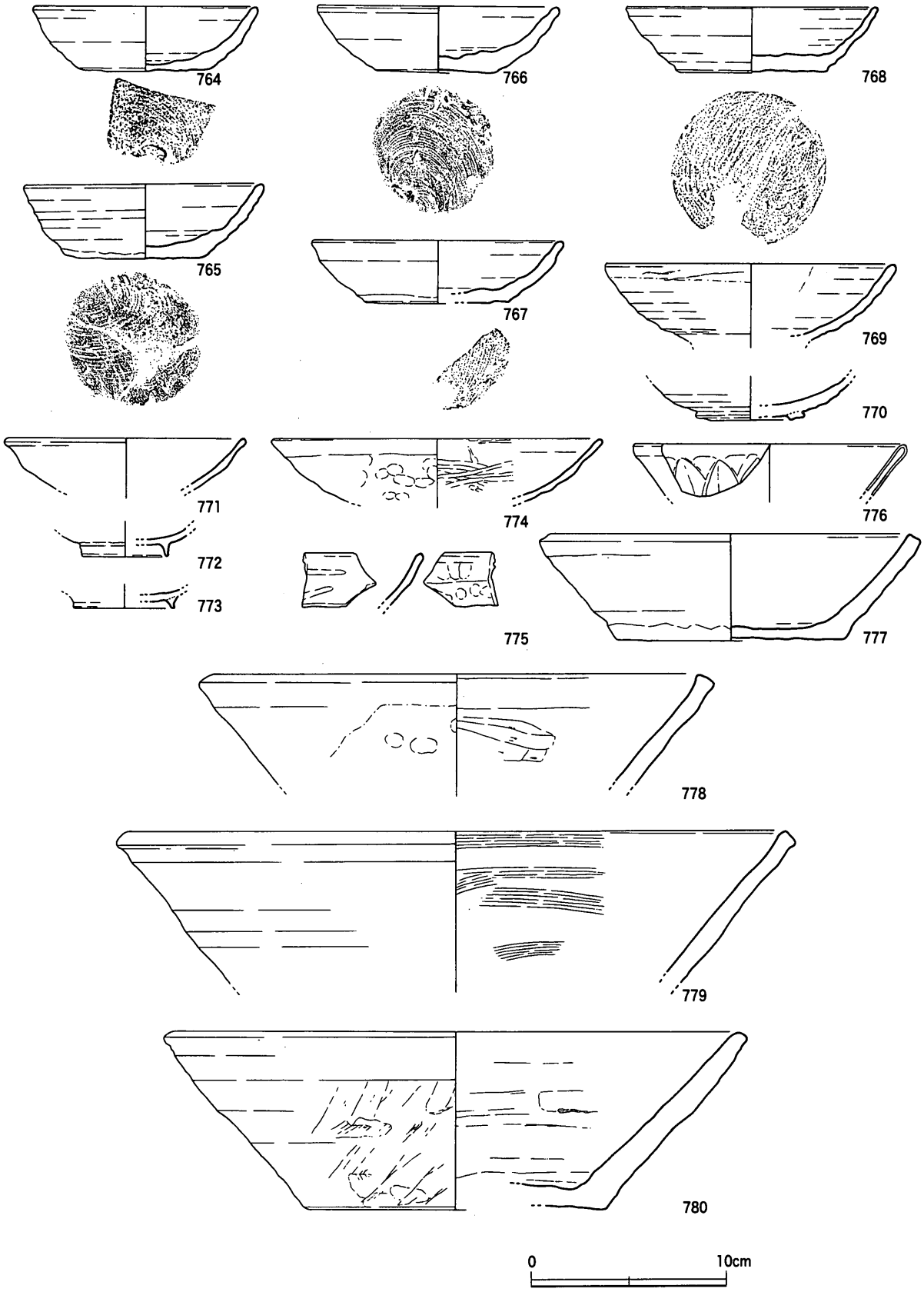
平面での走向形態をみると，検出部北端から12ｍの地点で鍵状に屈曲している。この屈曲部をそのまま延伸するのが本溝によって切り込まれたＳＤf22であり，ＳＤf19は先行溝（ＳＤf22）を一部付け替えて開削されていることがわかる。

遺物は，コンテナ1箱分出土した。溝が小規模であるのに比して，遺存状況が良好な個体が多いことが特徴であり，投棄後にさほど大きく動いていないものと考えられる。ある程度限定された時間幅に収まる土器群として捉えることが可能であろう。遺物の内容としては，土師質土器小皿・杯・鍋，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢，吉備系土師質土器椀，瓦器椀，常滑焼捏鉢，青磁碗，平瓦がある。

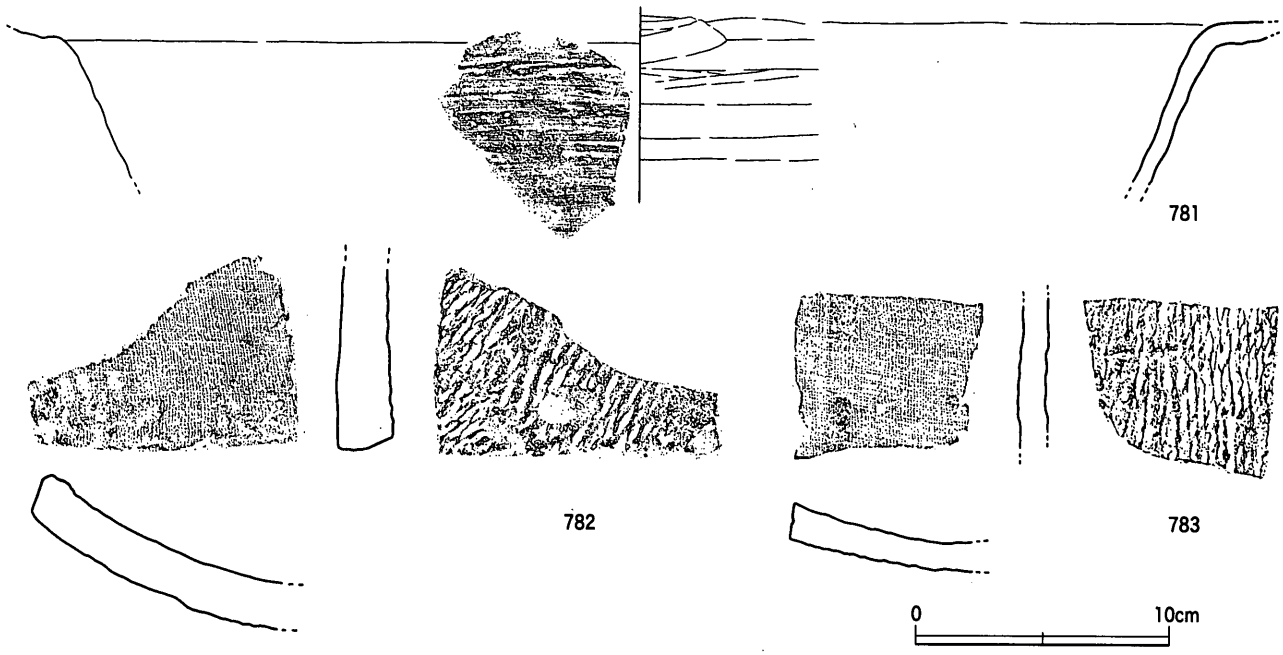
土師質土器小皿（**718**～**737**）には，他の遺構でもみられたように底部ヘラ切り（**718**～**726**）と底部糸切り（**727**～**737**）の２者が存在する。ヘラ切り底の小皿は，口径7.4～7.8㎝と法量的なまとまりが良好に認められる。形態的にも，やや内弯気味に短く外反して丸く収まる口縁部をもち，まとまった属性からなるといえる。ヘラ切りの進行方向は右（すなわちロクロ回転も右方向）であり，**715**・**726**はヘラ切りへと連続する螺旋状の沈線が口縁部外面にみられる。底部が完存する**723**・**725**・**726**でみると，切り離し面の工具痕には多少の違いがあるものの，いずれも１周半程度で切り



第112図　SDf19出土遺物（1）（1/3）



第113図　SDf19出土遺物（2）（1/3）



第114図　SDf19出土遺物（3）（1/3）

離し作業を終えるという共通点が指摘できる。**723**・**725**底部外面中央には，ヘラ切り終了後に引き抜いた工具痕が認められるが，こうした切り離し痕の在り方は，底部切り離し時にはロクロ（回転台）が低速回転であったことを示唆するようである。糸切り底の小皿は，口径6.2～8.1㎝を計り，ヘラ切り底の小皿程の法量的なまとまりは看取できない。底部内面の外縁が窪み中央部が断面台形に盛り上がる形態（**728**～**730**・**732**～**734**・**737**）でみても，口径6.8～8.1㎝であり，1.3㎝の幅が存在することになる。その理由としては，ヘラ切り底の輪郭がヘラ切り底よりも歪であるという口径・底径復元時の誤差も当然見込む必要はあるだろう。しかしその点を考慮しても，全体的な形態にも指摘できるばらつきや，糸切りによって決定される底部の形態・厚みのばらつき（**736**・**737**などの極端に厚い底部の存在）などは，伴出したヘラ切り底の小皿では認められない現象である。口径・形態・底部切り離しの熟練度（あるいはクセか）などの属性による限り，糸切り底の小皿は個体差が顕著であるとみて大過なかろう。

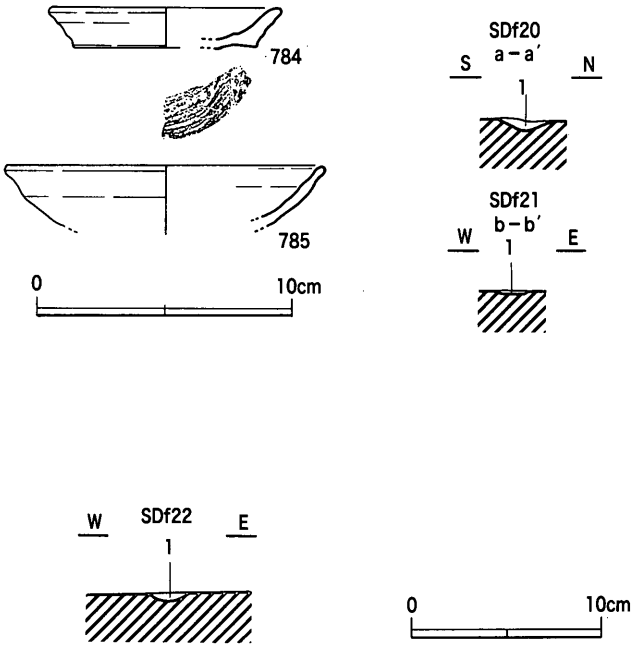
土師質土器杯（**738**～**768**）は，小皿と同じく底部ヘラ切り（**738**～**749**）と底部糸切り（**750**～**768**）が存在する。ヘラ切り底の杯には，ＳＤf18での類別に対応させると①（**738**～**745**）と②（**746**～**749**）の２者が存在する。①は口径11.4～12.4㎝，底径7.0～7.7㎝，器高3.2～3.7㎝と比較的まとまった法量をもち，空港跡地遺跡で最も普遍的な系統であるといえる。**743**の口縁部外面には，水平方向の接合痕がみられる。②は口径12.8～14.0㎝を計り，図示した４点のうち３点（**746**～**748**）が口径12.8㎝でまとまることから，この数値が中心的な法量であるといえる。**749**は製作時の補修により口径が大振りになっている。糸切り底の杯は，ＳＤf18での類別①～③に対応する形態のものがみられるが，ＳＤf18でも指摘したように形態の変異幅（個体差）が漸移的であり，明確な区分が難しい場合もある。また，法量についても口径10.5～13.8㎝とかなりばらつきがあり，かつ多くが特定の範囲に集中するという傾向も明確でない。これらに共通するのは，燈色ないし赤燈色の色調をもつ粗質の胎土と，一部で口縁部直下の段として顕在化する口縁部ナデ→体部ナデという器面調整の順序であり，これらの共通項以外の個体差はむしろ著しいように観察される。

十瓶山窯産須恵器椀（**769・770**）は，底部から体部にかけて内弯して立ち上がっており，ＳＤf16Ⅲ－１区部分上層でみられた杯形の器体をもつものではない。ヘラ磨き調整消失直後の型式と考えられ，ＳＤf16Ⅲ－１区部分下層・中層でみられるものと共通する。

他地域からの搬入土器椀もある。吉備系土師質土器椀（**771～773**）は，山本編年Ⅲ－２期の所産である。和泉型瓦器椀（**774～775**）は，尾上編年Ⅲ－３期もしくはⅣ－１期のものである。青磁碗（**776**）は，Ⅰ－５ｂ類である。

十瓶山窯産須恵器捏鉢（**777～779**）は，口縁部端面に凹面を作り拡張しないもの（**777**），平坦な端面がわずかに拡張するもの（**778・779**）がある。いずれも瓦質に近い軟質な焼成である。法量的には，口径20㎝未満で器高の低い小型品が存在する。

常滑焼捏鉢（**780**）は，硬質な焼き上がりであり内面には胡麻状の降灰が認められる。また体部外面には縦方向に板ナデ調整が粗く施され，口縁部付近に強い回転ナデ調整がみられる。中野編年６ａ型式と考えられ，13世紀第３四半期に位置付けられる。



第115図　SDf20･21断面図（1/40），出土遺物（1/3）

土師質土器鍋（**781**）は，やや硬質な土師質焼成であり，他の土師質土器鍋とは異なる。口縁部から体部にかけての外面には，平行叩き目が施されるが回転ナデ調整によって消去されている。こうした技法的特徴は十瓶山窯（西村遺跡）における鍋と同一であり，十瓶山窯産である可能性を示唆する。本例は蛍光Ｘ線分析の対象試料であり，その成果については第３章第１節を参照されたい。

平瓦（**782・783**）は，凸面にやや細かい縄目叩き目を施しており，中世前半の所産とみてよいものである。ただしその出土量は区画１全体でもごく少量にとどまっており，区画内に瓦葺建物が存在したことを積極的に示すものではない。

以上の土器群は，出土状況や土師質土器小皿・杯の形態・法量のまとまりから，中世Ⅱ－３期の基準資料として位置付けられる。

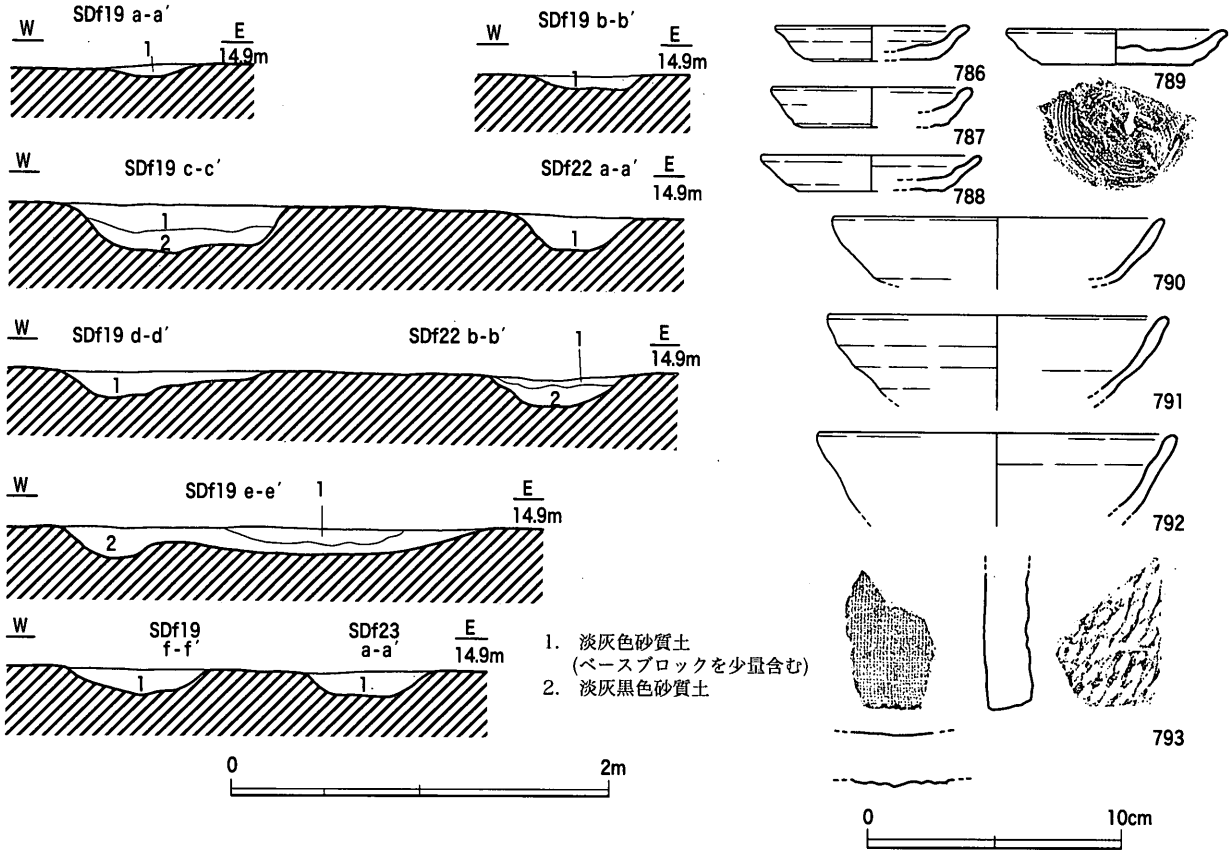
ＳＤf20・21（第115図）

ＳＤf19北端部から東側に分岐して併走する溝である。幅0.1～0.26ｍ，深さ0.01～0.05ｍを測り，断面は浅いＵ字形ないし台形を呈する。埋土は淡灰色砂質土である。

土師質土器小皿（**784**）・杯（**785**）が出土している。

ＳＤf22（第116図）

ＳＤf19・ＳＤf23と重複し，一部でＳＤf19と併走する小溝である。主軸方位はＮ－８°－Ｅであ



第116図　SDf19・22・23断面図（1/40），SDf22出土遺物（1/3）

る。調査時には，東西方向に延びるＳＤf31にも切り込まれていると判断したが，ＳＤf31→ＳＤf16という切り合い関係を前提とすると出土遺物の時期が明確に逆転する。このため，ＳＤf31を切り込む遺構と判断しておく。

断面形態は逆台形を呈しており，幅0.64～0.68ｍ，深さ0.14～0.18ｍを測る。

土師質土器小皿（**786～789**）・杯（**790～792**），平瓦（**793**）が出土している。小皿はヘラ切り（**786～788**）と糸切り（**789**）があり，形態・法量ともにＳＤf16Ⅲ－１区部分下層に近似する。杯は胎土・色調から底部ヘラ切りのものとみられ，口径13.0㎝以上を計ることからやはりＳＤf16Ⅲ－１区部分下層と共通しており，中世Ⅱ－２期に位置付けられる。

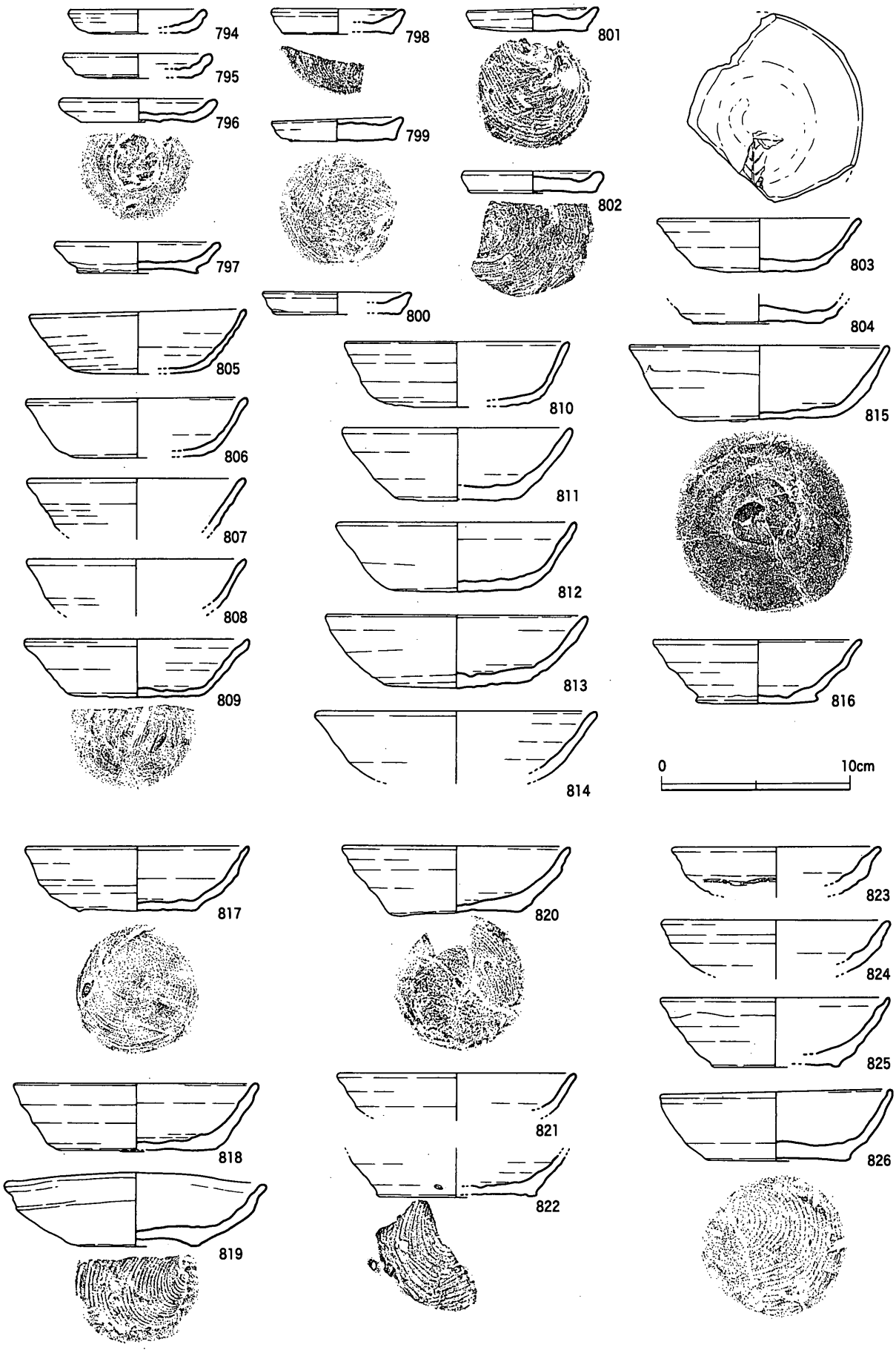
ＳＤf19との重複関係と出土遺物の相対的な位置付けからみて，ＳＤf22はＳＴf01などとともに区画１の中では最も遡る遺構とみてよかろう。

ＳＤf23（第116～118図）

ＳＤf19から分岐してＮ－８°－Ｅの方向で併走する小溝である。北端部ではＳＤf22の埋土を切り込む。また，南端部では東西方向に屈曲する。ＳＤf18の北側肩部埋土よりも先行する切り合い関係にあるが，これはＳＤf18肩部が埋没の最終段階で崩壊し平準化したために生じた，見かけ上の重複である可能性が指摘できる。少なくとも出土遺物の示す時期幅はＳＤf18の時期幅の一部と重複する。

土師質土器小皿・杯・足釜・鍋，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢・甕，吉備系土師質土器椀，東播系須恵器甕，青磁碗が出土した。

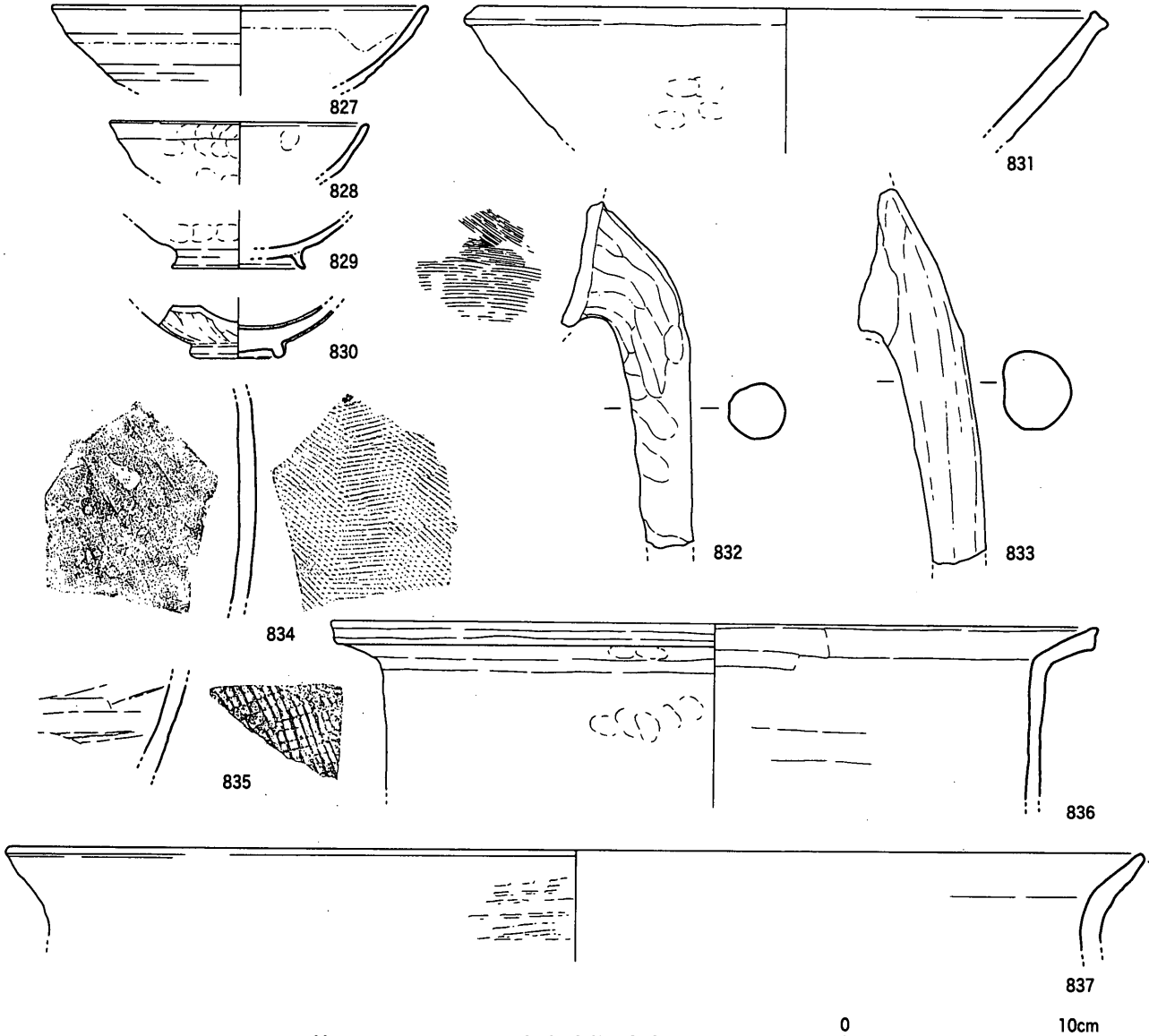
土師質土器小皿（**794～802**）には，底部ヘラ切り（**794～796**）と底部糸切り（**797～802**）



第117図　SDf23出土遺物（1）（1/3）

の２者がある。前者は口径7.2～8.0㎝を計り内弯気味に立ち上がる太い口縁部をもつもの（**794～796**）と，口径8.6㎝を計り比較的長く外傾する口縁部をもつもの（**797**）の２者がある。後者は口径6.8～7.8㎝を計り，断面三角形の短い口縁部をもつ。いずれも見込みが相対的に盛り上がる形態のものである。

土師質土器杯（**803～826**）は，底部ヘラ切り（**803～816**）と底部糸切り（**817～826**）の２者がある。ヘラ切り底の杯には，口径10.5㎝で器高の低い形態のもの（**803**）も存在するが，口径11.4～12.6㎝で直線的な体部をもつもの（**805～812**）が多い。また口径13.7～14.6㎝と大振りで底体部が緩やかに屈曲するもの（**813～815**）もみられる。主体をなす**805～812**は，口径の範囲が若干ずれるがＳＤf16Ⅲ－１区部分中層に概ね対応するものとみてよい。また大口径の**813～815**は，同下層に対応するとみてよかろう。**803**見込みには，木葉（コナラか）２枚分の圧痕がみられる。圧痕を観察すると，木葉には虫食いの痕跡が認められず，また落葉後の乾燥状態を示す辺縁のめくれ上がりも認められない。このことから，新芽に近い段階の木葉の圧痕であることが推測され，初夏ないし夏期の土器製作が考えられる。木葉を土器椀にプレスした事例はいくつか報告されており，香川県でも西村遺跡山原地区Ｎ23－ＳＫ01出土の須恵器椀に木葉２枚の圧痕が認められる。**816**は平高台状に

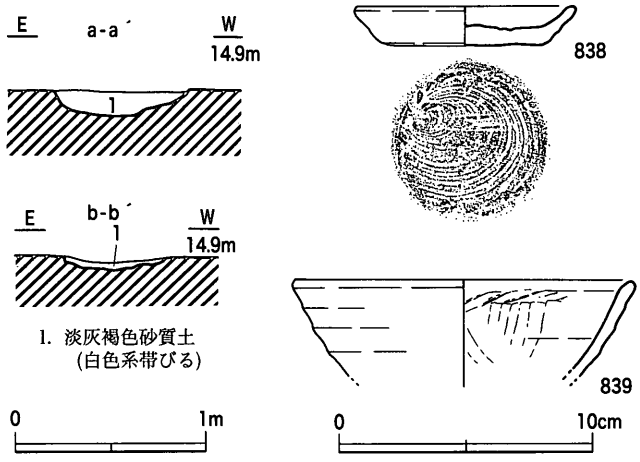


第118図　SDf23出土遺物（2）（1/3）

底部を作出する杯である。糸切り底の杯は，胎土・色調が区画１に普遍的なものであり，「口縁部ナデ→体部ナデ」という手法も共有する。形態的にはＳＤf18・19で指摘したように，口縁部直下の屈曲状況に漸移的なバリエーションが認められ，厳密な細別は難しい。**822**体部外面下端には，脱穀前とみられる籾圧痕がある。

十瓶山窯産須恵器椀（**827**）は，口径が16㎝を超える大振りなものである。底部が欠損しているため明確ではないが，杯形の器体をもち高台の矮小化したものではないと思われる。

吉備系土師質土器椀（**828・829**）は，山本編年Ⅲ－２期にあたる。青磁碗（**830**）は小振りなＩ－５ｂ類碗である。



第119図　SDf24断面図（1/40），出土遺物（1/3）

十瓶山窯産須恵器捏鉢（**831**）は，口縁端部がわずかに拡張する形態をもつ。

土師質土器足釜（**832・833**）は，脚基部が横方向に出るもの（**832**）と，下方に伸びるもの（**833**）の２者があり，後者は在地製品ではみられない形態である。

東播系須恵器甕（**834**）は，平行叩き目を綾杉状に施す。十瓶山窯産須恵器甕（**835**）は，長方形の格子叩き目を施す。

土師質土器鍋（**836・837**）には，ハケ目調整を行わず板ナデ調整とナデ調整を施すもの（**836**）がある。また**837**は，口縁部外面に横位（若干右上がり）の格子叩き目を施しており，その後に回転ナデ調整を行っているようである。十瓶山窯（西村遺跡）産の鍋と考えられる。

以上の土器群は，中世Ⅱ－３期を主体とし，一部中世Ⅱ－４期のものも含むとみられる。

ＳＤf24（第119図）

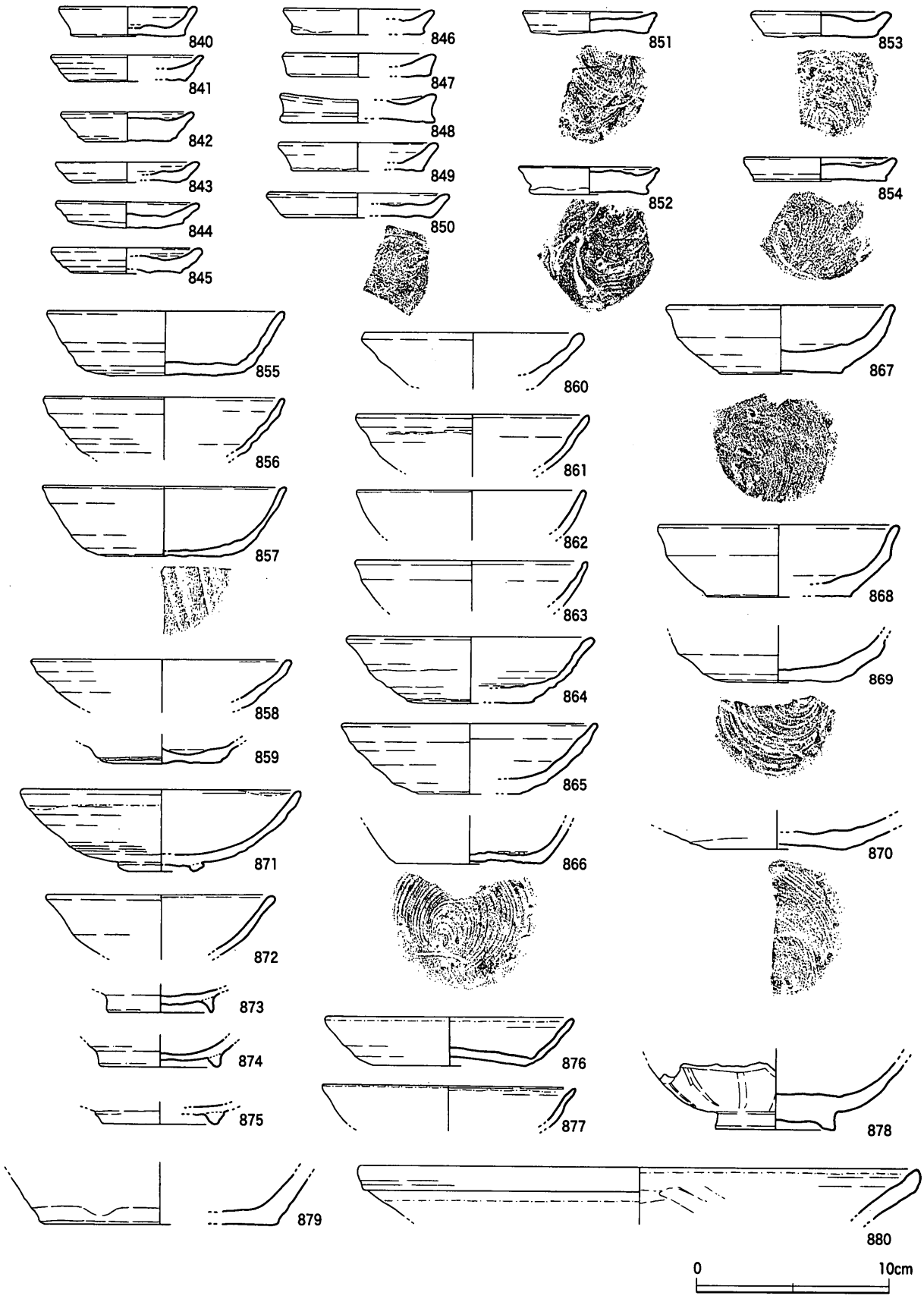
Ⅲ－６区で検出した小溝であり，区画１－ａの東側縁辺を画する。Ｎ－11°－Ｅの主軸をもち，一部調査区外もあるが46ｍの延長が確認できた。南端部はＳＤf18（再掘削後の１～３層部分）から分岐している。断面形態は浅いＵ字形を呈しており，幅0.52～0.68ｍ，深さ0.04～0.12ｍを測る。埋土は淡灰褐色砂質土の単層である。

遺物は極めて少量である。土師質土器小皿（**838**）と十瓶山窯産須恵器椀（**839**）が出土している。ＳＤf16Ⅲ－１区部分中・下層に対応する遺物とみてよく，中世Ⅱ－２・３期に位置付けられる。

ＳＤf25（第120・121図，付図7）

Ⅲ－６区で検出された小溝であり，ＳＢf06東側とＳＢf07南側に隣接してＬ字プランに延びる。他遺構との重複関係は不明だが，南側はＳＤf18に東側はＳＤf24に繋がり，ＳＢf08を囲繞する小区画を形成していた可能性が想定できる。埋土は淡灰褐色砂質土である。

検出範囲が狭小であるにもかかわらず，遺物はコンテナ1.5箱分と比較的多く出土した。その内容としては，土師質土器小皿・杯・足釜・鍋，十瓶山窯産須恵器椀・捏鉢・甕，吉備系土師質土器椀，亀山



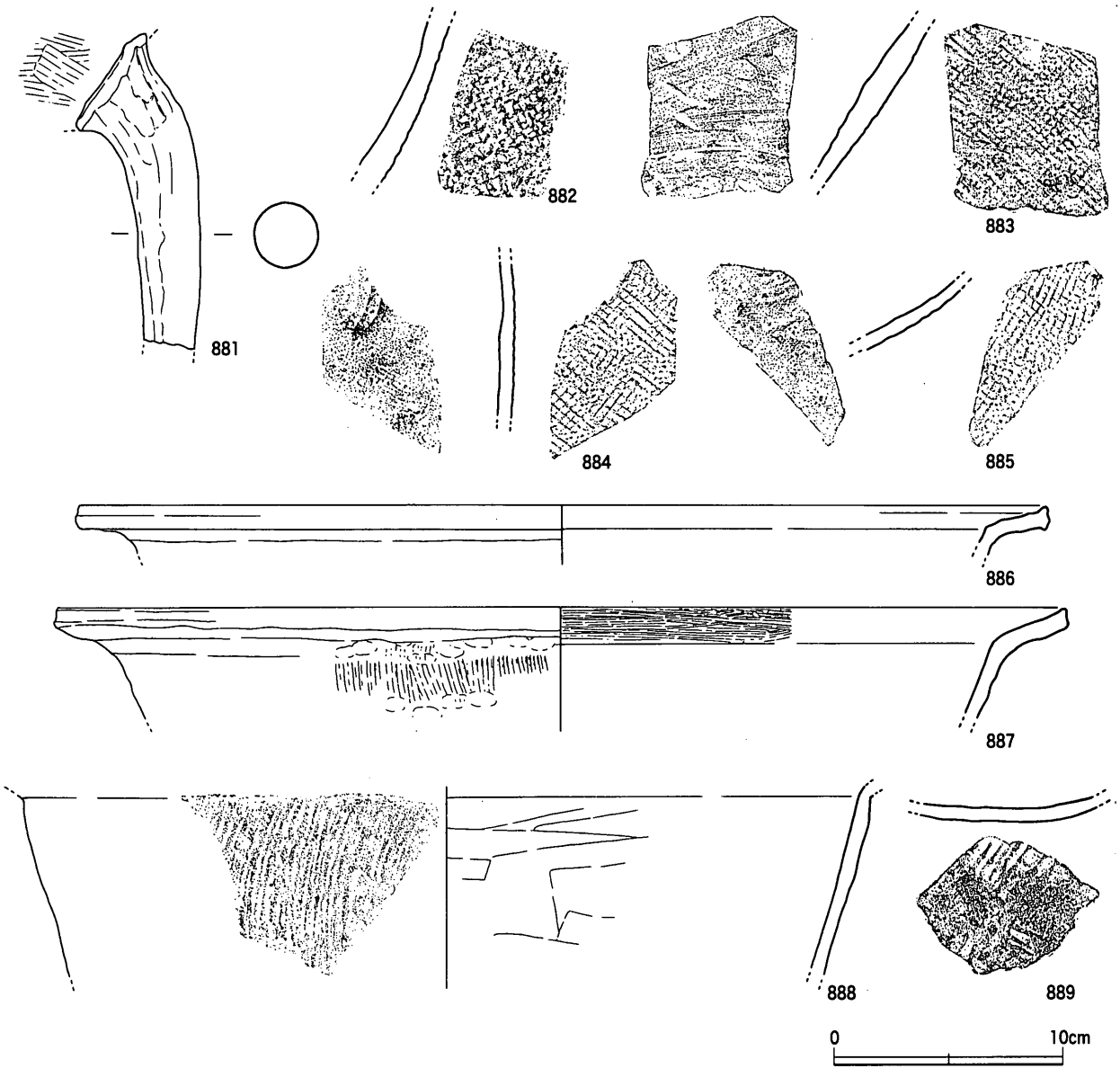
第120図　SDf25出土遺物（1）（1/3）

焼甕，東播系須恵器捏鉢，白磁皿，青磁碗がある。

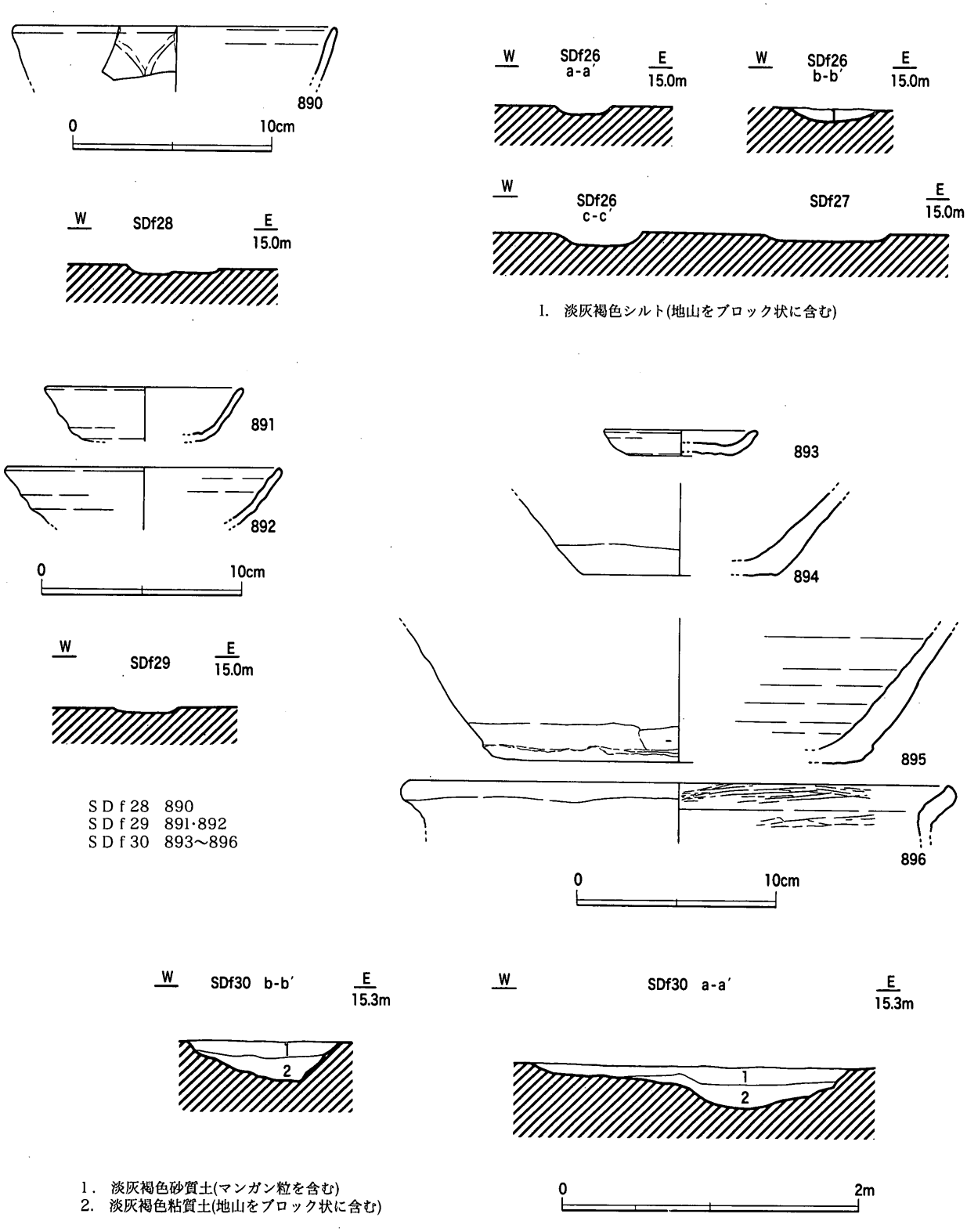
土師質土器小皿（**840**～**854**）には，底部ヘラ切り（**840**～**845**）と底部糸切り（**846**～**854**）が存在する。**841**・**842**は見込みが浅く口縁端部が細い形態をもち，糸切り底の小皿に近似する。**843**～**845**は区画１で普遍的な系統であり，口径7.2～7.6㎝を計る。**846**～**848**，**851**～**854**は口縁部の立ち上がりが短く，見込みが盛り上がる形態をもっている。

土師質土器杯（**855**～**870**）も小皿同様，底部ヘラ切り（**855**～**859**）と底部糸切り（**860**～**870**）の２者がある。**855**～**857**は口径12.2～12.6㎝と，まとまった法量と形態をもつ。**866**は回転ナデ調整を丁寧に行い薄い器壁をもつことと，胎土・色調が通有の糸切り杯とは異なることから，別系統の製品と考えられる。**867**・**868**は口縁部直下に「口縁部ナデ→体部ナデ」によって生じた明瞭な屈曲を伴う。器壁はヘラ切り杯に比して非常に厚手である。

十瓶山窯産須恵器椀（**871**）は，口径14.4㎝とやや小振りであり，底部には断面が潰れた方形を呈する高台が貼付される。吉備系土師質土器椀（**872**～**875**）は，山本編年Ⅲ－２期に位置付けられる



第121図　SDf25出土遺物（２）（1/3）



SDf28 890
SDf29 891·892
SDf30 893～896

第122図 SDf26～30断面図（1/40），出土遺物（1/3）

ものである。**872**は口縁部直下に明瞭な屈曲を伴う。

白磁皿（**876・877**）は，横田・森田分類で白磁Ⅸ類皿とされるものである。口縁部は施釉後に掻き取られた「口禿」と呼称されるもので，底部外面にも厚く施釉されている。青磁碗（**878**）は鎬をもたない蓮弁文が施されるⅠ－５ａ類碗である。

十瓶山窯産須恵器捏鉢（**879**）は，底部外縁を強いナデによって調整する。内面には使用による摩

滅が認められる。東播系須恵器捏鉢（**880**）は，山仲分類Ｃ２類にあたる。

以上の土器群は，中世Ⅱ－３期の所産と考えられる。

ＳＤf26・27・28（第122図）

ＳＤf16陸橋部から北に延びる小溝である。陸橋部東側にはＳＤf26・27があり，西側ではＳＤf28が検出された。ただし，陸橋部西側の肩部が北に若干拡張したようなプランを呈しているため，ＳＤf28の東側にもう１条小溝が存在した可能性は高い。また，ＳＤf26が一部途切れながらＳＤf18に合流していることから，検出時には削平されていたものの，本来的には陸橋部幅と同じ2.0ｍ程度の空閑地を挟んで東西２条ずつの小溝が南北に延びる形態であったものと思われる。つまり，陸橋部から区画１－ａに至る通路の側溝としての性格を想定することができよう。

ＳＤf26は断面Ｕ字形を呈しており，幅0.58ｍ，深さ0.08ｍを測る。埋土は淡灰褐色シルトの単層であり，基盤層をブロック状に含むことから人為的な埋め戻しが行われた可能性もある。

出土遺物は僅少であり，わずかに青磁碗（**890**）を図示し得るのみである。**890**は横田・森田分類のＩ－５ａ類碗である。

ＳＤf29（第122図）

ＳＤf16南辺東半部から北側に分岐する小溝である。断面形態は極めて浅い逆台形を呈しており，幅0.42ｍ，深さ0.06ｍを測る。付近には中世前半の遺構がなく，溝の機能については明確でない。

出土遺物として土師質土器杯（**891**・**892**）を図示した。**891**は口径9.8㎝を計る器壁の薄い小型の杯である。区画１の他遺構では出土しておらず，むしろ後出する区画３でみられるタイプである。したがって中世後半の遺構である可能性もある。

ＳＤf30（第122図）

ＳＤf16南辺陸橋部の外側（南側）で南北方向（Ｎ－10°－Ｅ）に延びる溝である。ＳＤf16との間に近世のＳＤf107・108が存在するため，ＳＤf16との関係は明確にできないが，おそらく陸橋部東側でＳＤf16に合流するものと推測される。検出した南半部では，幅1.0ｍ，深さ0.26ｍの断面Ｖ字形を呈するが，ＳＤf16南辺部に近い北半では幅1.3ｍ，深さ0.28ｍの浅いＵ字形を呈する。埋土は上下２層に分かれ，下層が粘性を帯びた埋土をもつ。

遺物は少量であるが，土師質土器小皿（**893**）・鍋（**896**），十瓶山窯産須恵器捏鉢（**894**・**895**）がある。

ｃ．建物

ピットの分布状況

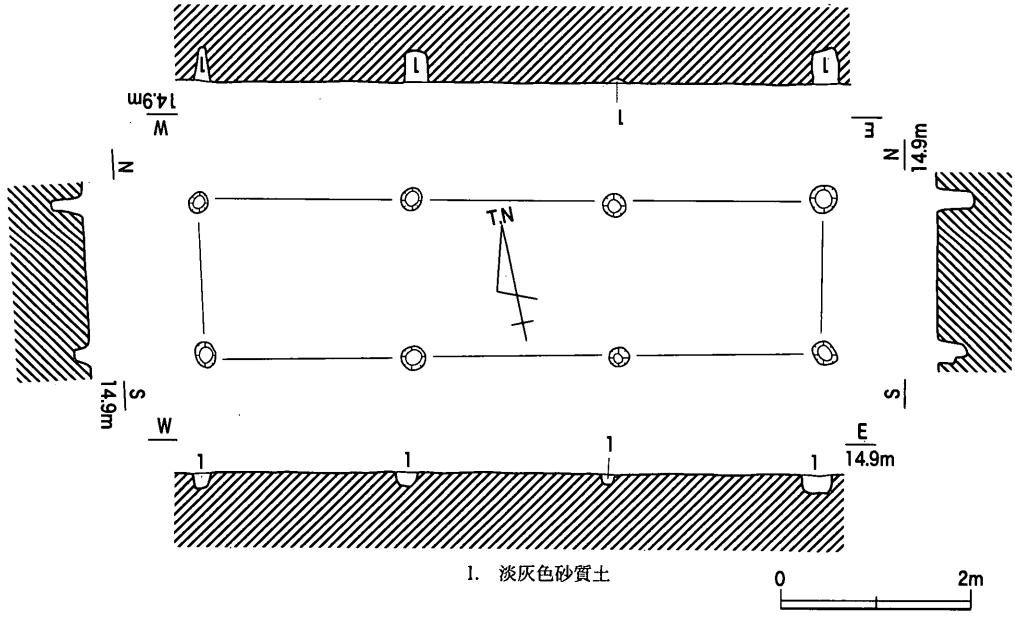
区画１－ａで279個，区画１－ｂで50個以上の中世前半と考えられるピットを検出した。区画１－ａでは，大半のピットが掘立柱建物やその付属施設として復元できた。ＳＢf09周辺には建物として復元できなかったピット群があり，なお検討の余地を残す。しかし，機能分化したとみられる多様な建物構成の在り方は，ほぼ明確化できたといえよう。また区画１－ｂでは，Ⅲ－37区を中心に中世前半の

ピットが分布するが，当該期の建物を復元することは困難であった。しかし，区画１－ａのような大型・中型建物の配置状況を想定することはできず，小型建物数棟が存在した可能性を指摘し得る程度である。ピットの出土遺物については後述する。

掘立柱建物の配置

区画１－ａでの建物配置を概観しておく。南辺をＳＤf18，東辺をＳＤf24，西辺をＳＤf19・22・23で区画された範囲のほぼ中央に総柱の大型建物（ＳＢf06）が位置しており，その東に隣接して北辺を揃えた中型建物（ＳＢf07）が存在する。これらの建物の北側に，細長い小型建物（ＳＢf05）がある。小区画内の西縁辺には細長いプランの中型建物（ＳＢf10・11）がある。２者ともほぼ同じプランであり，同一の性格をもった建物が継続的に営まれたことを示唆する。ＳＢf10・11の北側では，ＳＢf06と対向する位置に礎板を用いた小型建物（ＳＢf09）がある。ＳＢf06の西側と南側はピットの分布が希薄なようにみえ，空閑地であった可能性がある。また，小区画南東隅のＳＤf16・25・24で囲まれた箇所には，不揃いな柱並びの小型建物（ＳＢf08）がある。

建物配置のより厳密な企画性については，第４章第２節で検討する。ここでは区画１－ａがＳＢf06



第123図　SBf05平・断面図（1/80）

を中心とした建物配置をとることを指摘しておく。

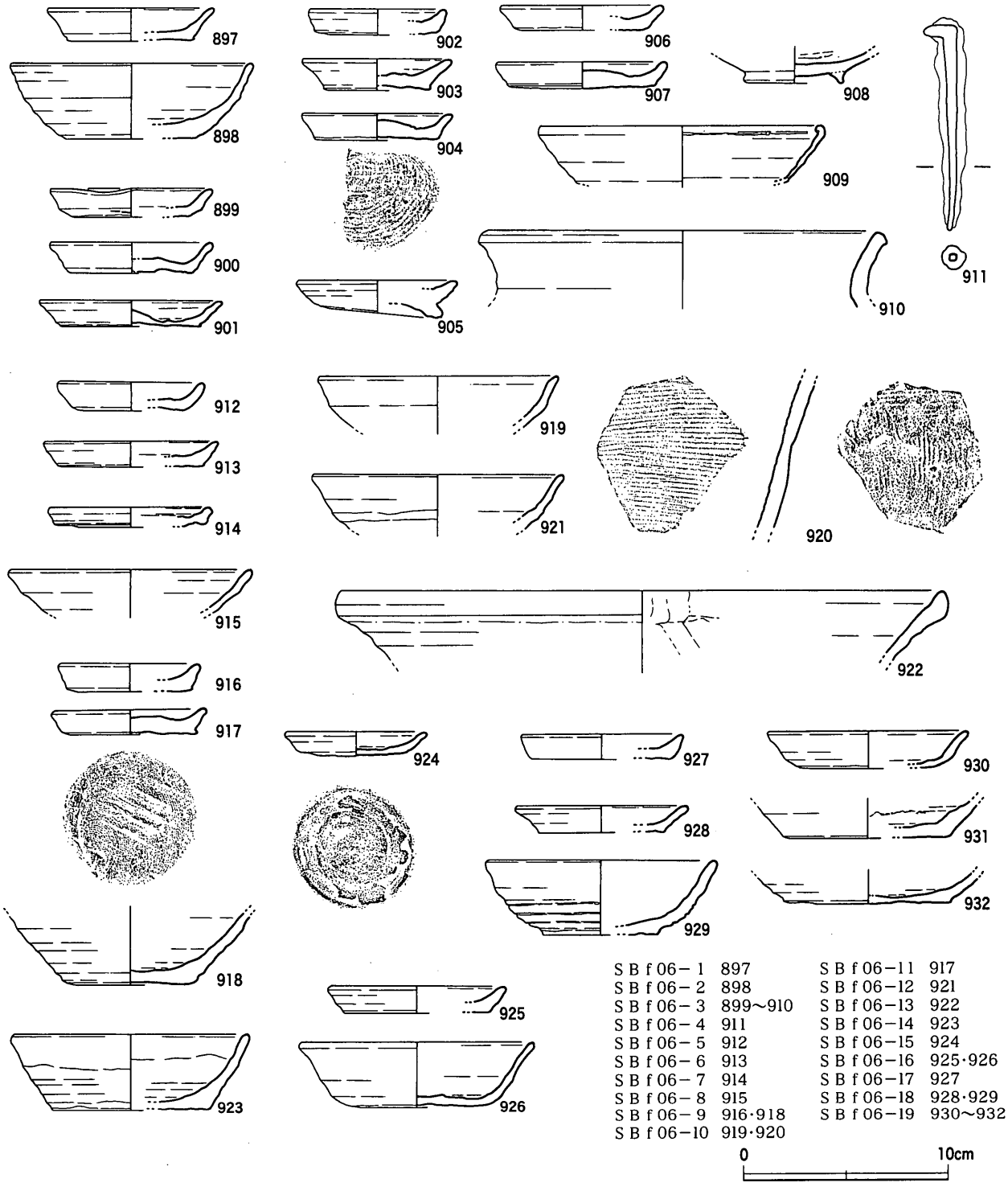
ＳＢf05（第123図）

Ⅲ－６区で検出された。東西方向（W－11°－N）の主軸をもつ，１×３間（梁間1.6ｍ，桁行6.5ｍ，床面積8.84㎡）の側柱建物である。柱穴は，ほぼ直線的に揃っており，平均柱穴距離は桁行2.16ｍである。柱穴底面のレベルは一定しておらず，また柱穴の大きさも不揃いである。

遺物は出土していないが，柱穴埋土の特徴から中世前半と考えることができる。

ＳＢf06（第124・125図）

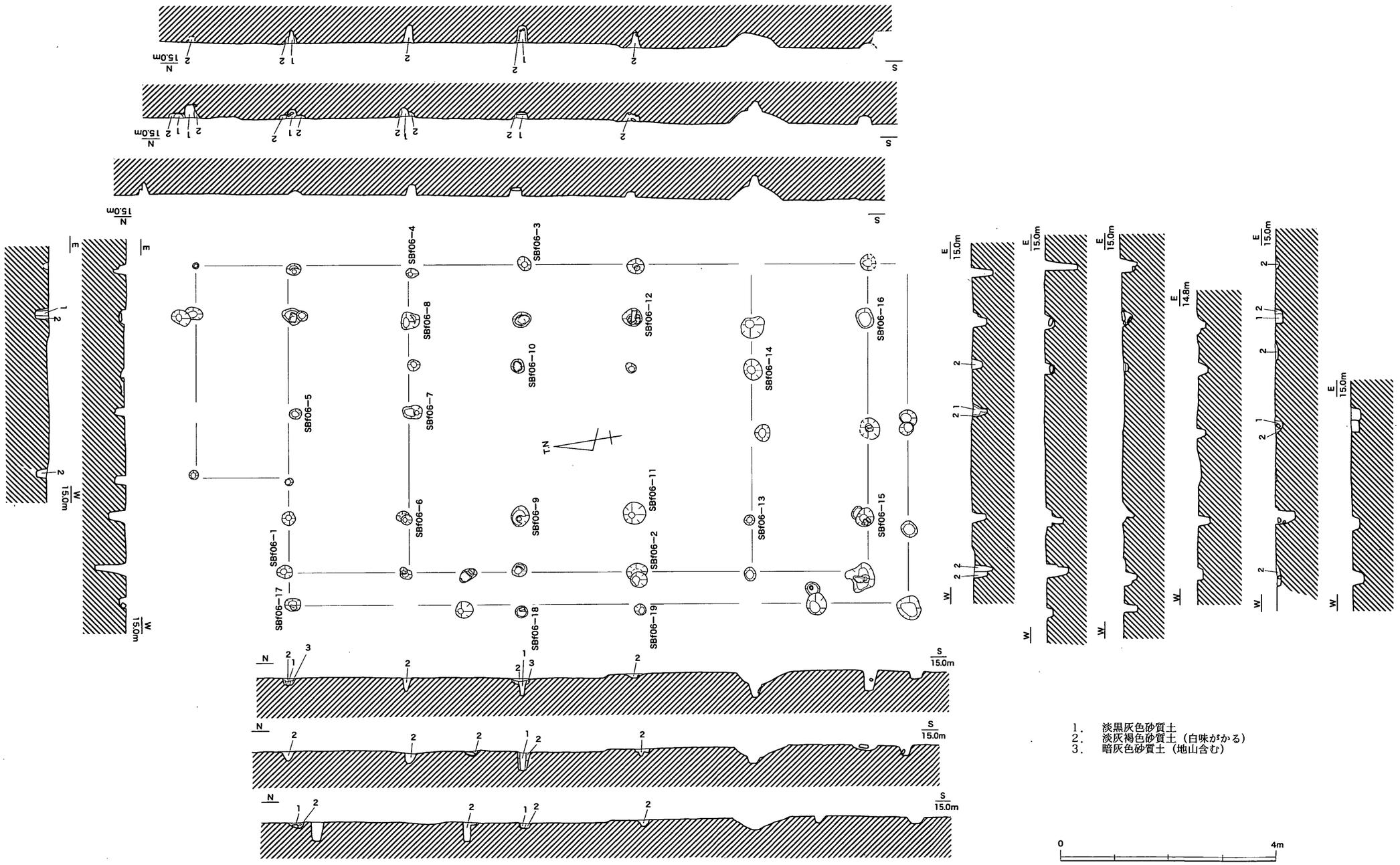
Ⅲ－６区ＳＢf05の南７ｍの地点で検出された。やや変則的な柱穴配置をとるが，一応，３×５間



第124図　SBf06出土遺物（1/3）

（梁間5.75m，桁行10.65m，床面積61.23㎡）の大型の総柱建物とすることができる。西辺と南辺には庇もしくは縁状の張り出しがあり，北辺には1×2（3）間の付属屋的な張り出しがみられる。これらを含めると，建物の面積は79.12㎡となる。

身舎部分での柱穴配置は，桁行に関しては等間隔に5間（平均柱間距離2.13m）並ぶが，梁間方向ではかなり変則的な配列状況を示す。梁間の柱穴は中軸から両側に1間ずつ（平均柱間距離1.88m）



第125図　SBf06平・断面図（1/80）

延び，さらにその両側半間程度の位置に壁柱とみられる柱穴がある。つまり，中軸からみると両側に1.5間ずつ延びる柱配置を基本としていることになる。さらに中央部では，中軸上の柱から半間程度の位置に柱穴が認められる。なお，梁間の中軸柱は北１間分と南１間分とでは少しずれており，柱並びが揃わない。その間の中央部３間分の柱配置が上記のように異なるため，中央３間分と南北各１間分は異なった空間（間取り）であった可能性がある。

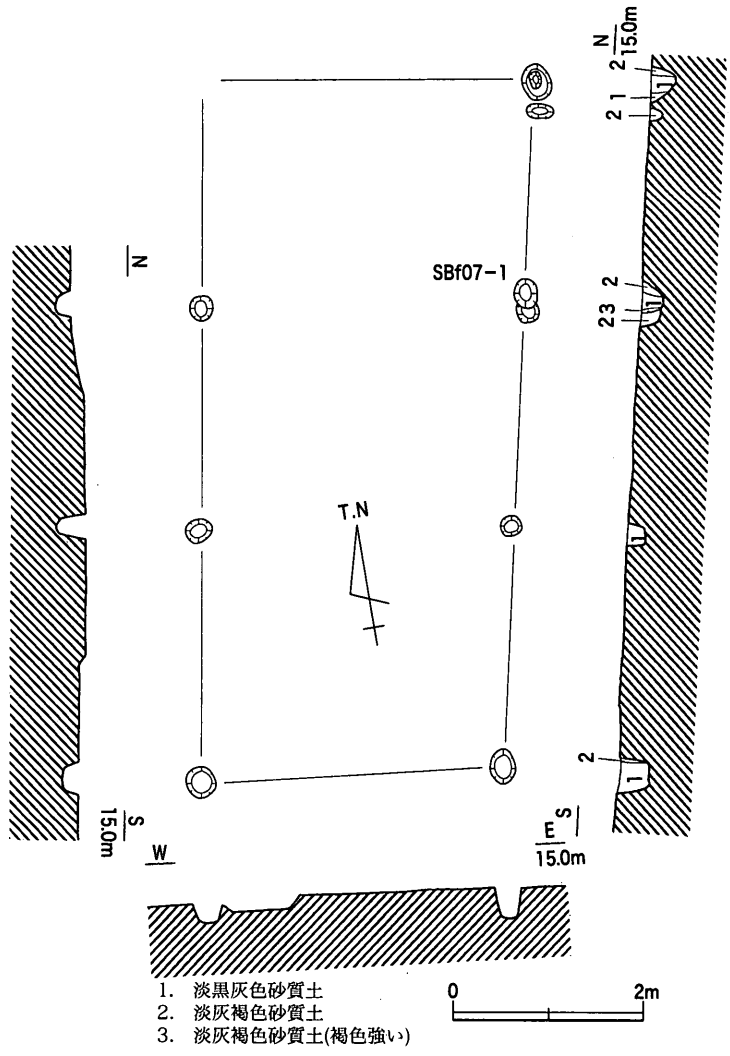
柱穴底面のレベルは不揃いであるが，身舎の輪郭を構成する柱穴は概ね深く掘り込まれている。反対に庇ないし縁とみられる柱穴は相対的に浅く，また中軸より半間東の柱穴列も浅い。これらは束柱として捉えることが可能であろう。なお一部の柱穴内には，扁平な礫を用いた根石がある。柱穴内には径10～15㎝の円形プランの柱痕がみられる。また柱穴が重複する箇所があり，部分的な修復が行われた可能性がある。

遺物は柱穴内より少量出土したが，意図的な埋納形態は認められなかった。土師質土器小皿・杯，十瓶山窯産須恵器甕，吉備系土師質土器椀・鍋，東播系須恵器捏鉢，鉄釘がある。土師質土器小皿に，底部ヘラ切り（**897・899～901・906・907・912・924・925・927・930**）と，底部糸切り（**902～905・913・914・916・917**）の２者があるのは，区画１の他の遺構と同様である。ヘラ切り底の小皿には，口径8.0～9.0㎝のものが比較的多く，ＳＤf16Ⅲ－１区部分下層での状況に近似する。**924**は，区画１で普遍的なヘラ切り底の小皿とは異なる系統と考えられる。

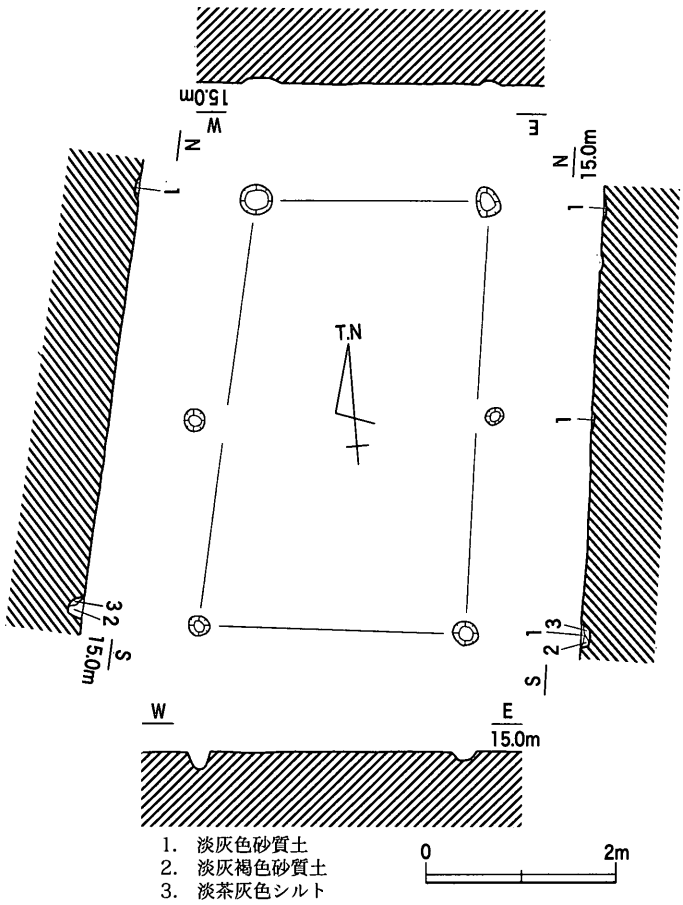
土師質土器杯も，底部ヘラ切り（**926**）と底部糸切り（**898・918・919・921・923・929**）がある。前者は口径11.4㎝であり，ＳＤf16Ⅲ－１区部分中層やＳＤf19での状況に対応する法量と形態をもつ。後者もＳＤf16Ⅲ－１区部分上層ないし中層に対応するとみてよい。なお，**909**は口縁端部を内側に巻き込み，薄い器壁をもつなど，特徴的な形態を呈している。今回整理作業を行ったＦ地区では，他に見出すことができない系統の杯である。

土師質土器鍋（**920**）は，器面を引っ掻くようなハケ目調整から，吉備系鍋である可能性が考えられる。

東播系須恵器捏鉢（**922**）は，山仲分類Ｃ２類にあたるものである。



第126図　SBf07平・断面図（1/80）



第127図　SBf08平・断面図（1/80）

以上の遺物は，柱痕と掘り方埋土のいずれに伴うものか明確でなく，必ずしも限定的に建物の時期を判定する材料とはいえない。しかし，部分的な柱穴の重複状況などを考慮するならば，一定の時間幅は見込んでもよいと考える。したがって，ＳＤf16Ⅲ－１区部分下層から中層もしくは上層に至る幅（すなわち中世Ⅱ－２～４期）の中で捉えておきたい。

ＳＢf07（第126・132図）

Ⅲ－６区でＳＢf06の東側に隣接して検出された。１×３間（梁間3.2ｍ，桁行7.3ｍ，床面積23.36㎡）の側柱建物であり，主軸方向はＮ－10.5°－Ｅである。柱穴は各辺とも直線的に揃っているが，南辺は他の辺に対してやや歪んで延びている。また北辺が南辺よりも幅が広い。平均柱間距離は梁間3.2ｍ，桁行2.46ｍを測る。柱穴底面のレベルは概ね一定している。隣接するＳＢf06との位置関係をみると，ＳＢf06東辺から0.9ｍ（半間）の位置にＳＢf07西辺があり，また北辺はＳＢf06・07ともに直線的に揃っている。このため，ＳＢf06・07は一定度の企画性をもちつつ併存していた可能性が高い。

遺物は柱穴から白磁碗（**945**）が出土している。

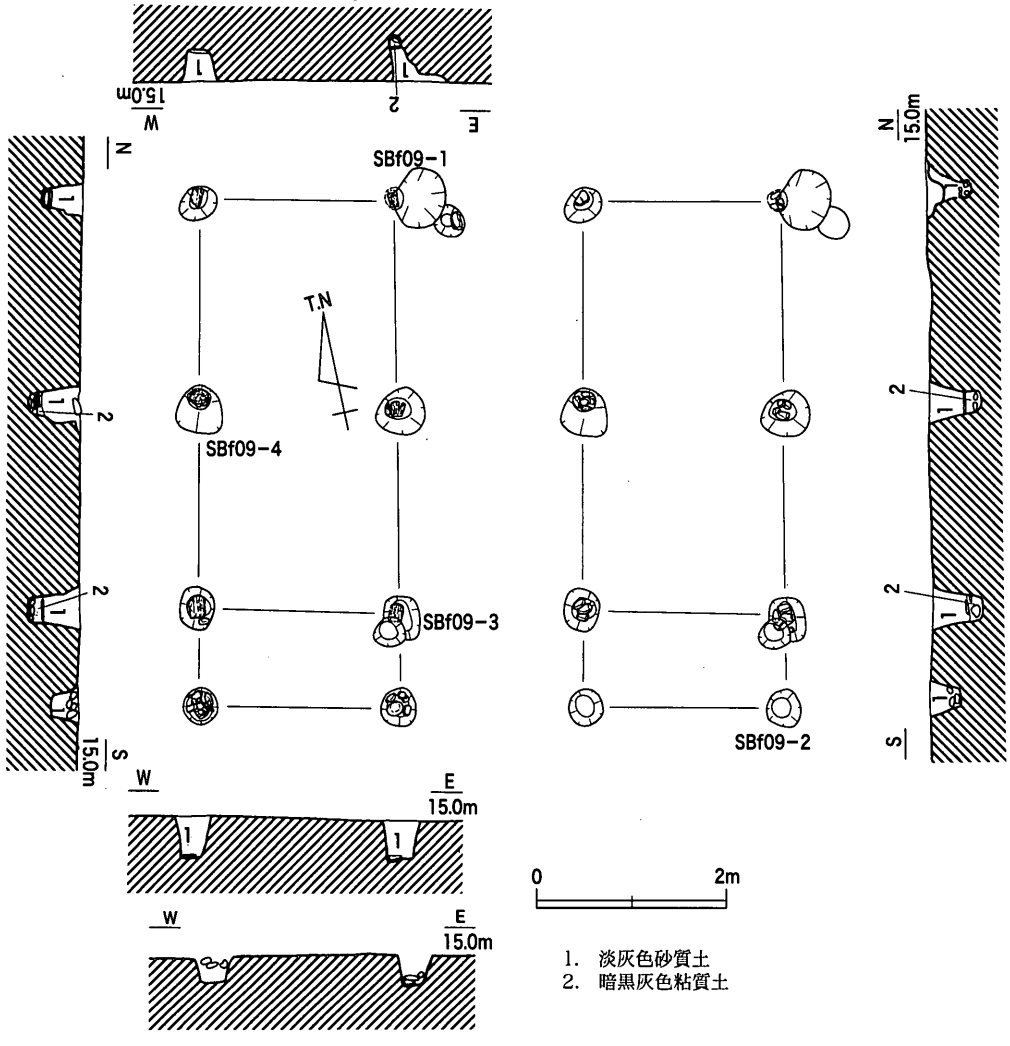
ＳＢf08（第127図）

Ⅲ－６区でＳＤf18・25・24に囲まれた箇所で検出された。柱穴配置が不揃いであり，多少異なった組み合わせも考えられるが，一応，第126図のように復元した。１×２間（梁間2.45～2.82ｍ，桁行4.48ｍ，床面積11.8㎡）の側柱建物であり，主軸方位はＮ－10°－Ｅである。柱穴底面のレベルは一定していない。遺物は出土していないが，周辺の溝との関係を前提とすると，ＳＤf16Ⅲ－１区部分上層ないし下層に対応する，中世Ⅱ－３・４期が想定される。

ＳＢf09（第128・132図）

Ⅲ－７区で検出された，１×２間（梁間2.13ｍ，桁行4.27ｍ，床面積9.09㎡）の側柱建物であり，南辺から半間程度の間隔で庇が付く。主軸方位はＮ－11°－Ｅである。柱穴配置は，梁間・桁行ともに2.13ｍを１間とした企画性が看取できる。柱穴の平面形態は隅丸方形もしくは不整円形である。

柱穴底面のレベルは若干異なるが，底面に10～20㎝大の根石を詰め，その上にやや厚手の板材を礎



第128図　SBf09平・断面図（1/80）

板として置くことで，15.35ｍ前後にレベルを揃えている。礎板は１枚のみの柱穴が多いが，ＳＢf09－４のみ板目を直交させるかたちで２枚重ねられていた。ＳＢf09－２の礎板のレベルは，上側の板材上面で他の柱穴礎板と一致しており，レベルの調節という意図で重ねられたものと推測される。庇部の柱穴底面は他者よりも浅く，根石のみ充填されている。なお，いずれの柱穴も埋土中に柱痕を認めることができず，また礎板が遺存していたにもかかわらず，柱材は出土しなかった。ただし抜き取り痕も認められなかったため，廃絶時に柱が取られたかどうか，明確でない。

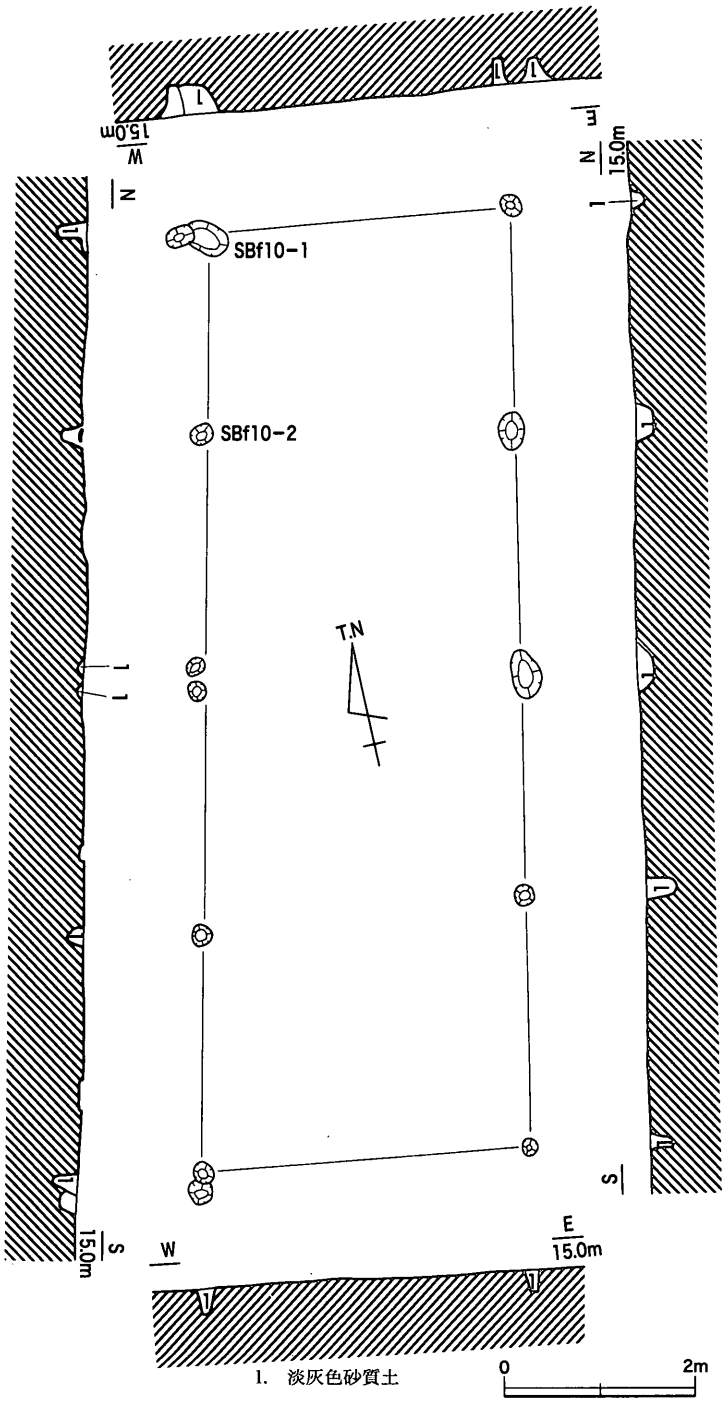
出土遺物はごく少量であり，時期を判定するものとしては土師質土器小皿（**933**）・杯（**934**）を図示し得るのにとどまる。**933**はＳＤf16Ⅲ－１区部分中層ないし上層に対応するものと思われ，**934**は同下層出土遺物に近似した口径をもつが，形態的には底体部の屈曲が明瞭で体部下半が内弯しない特徴をもち，同中層ないしＳＤf19に近い要素を指摘し得る。このため，一応は中世Ⅱ－３期と考えておく。また，礎板の多くは取り上げ時に破損したが，ＳＢf09－３出土礎板（**935**）は良好な遺存状態であった。長辺19㎝前後，短辺14㎝前後，厚さ３㎝前後の長方形の板材である。

ＳＢf10（第129・132図）

Ⅲ－７区のＳＢf09南側で検出された，１×４間（梁間3.2～3.46ｍ，桁行9.75ｍ，床面積

33.73㎡）の側柱建物である。主軸方位はN－12.5°－Eである。柱穴は直線的に並んでいるが，柱穴の間隔にはかなりのばらつきがある。また各辺が直角でないために，全体としては細長い平行四辺形プランを呈する。柱穴は円形ないし楕円形プランを呈しており，大きさや底面のレベルが不揃いである。

遺物はごく少量であり，わずかに十瓶山窯産須恵器捏鉢（**936**・**937**）を図示し得た程度である。両者は同一個体の可能性もあるが，異なる柱穴から出土したため別個に図示した。ともに口縁端部が外側にシャープに拡張しており，**937**内面下半には使用による摩滅が認められる。また**937**体部外面上半には，部分的に布目がみられる。口縁端部の形態は，ＳＤf16Ⅲ－１区部分中層出土のものに対応し，中世Ⅱ－３期に位置付けられる。



第129図　SBf10平・断面図（1/80）

ＳＢf11（第130・133図）

ＳＢf10とほぼ重複した位置でわずかに東側で検出された，１×５間（梁間3.3ｍ，桁行12.14ｍ，床面積40.06㎡）の側柱建物である。主軸方位はN－10°－Eである。東辺柱穴列は，中世後半のＳＤf83によって破壊されており，特に同北半部は柱穴が全く残存していなかった。柱穴掘り方はＳＢf10に比べて大きく，東西方向に長い楕円形プランを呈する。柱間距離は，桁行方向の中央３間分が2.4ｍであるが，北側１間分は2.75ｍ，南側１間分は2.25ｍを測る。

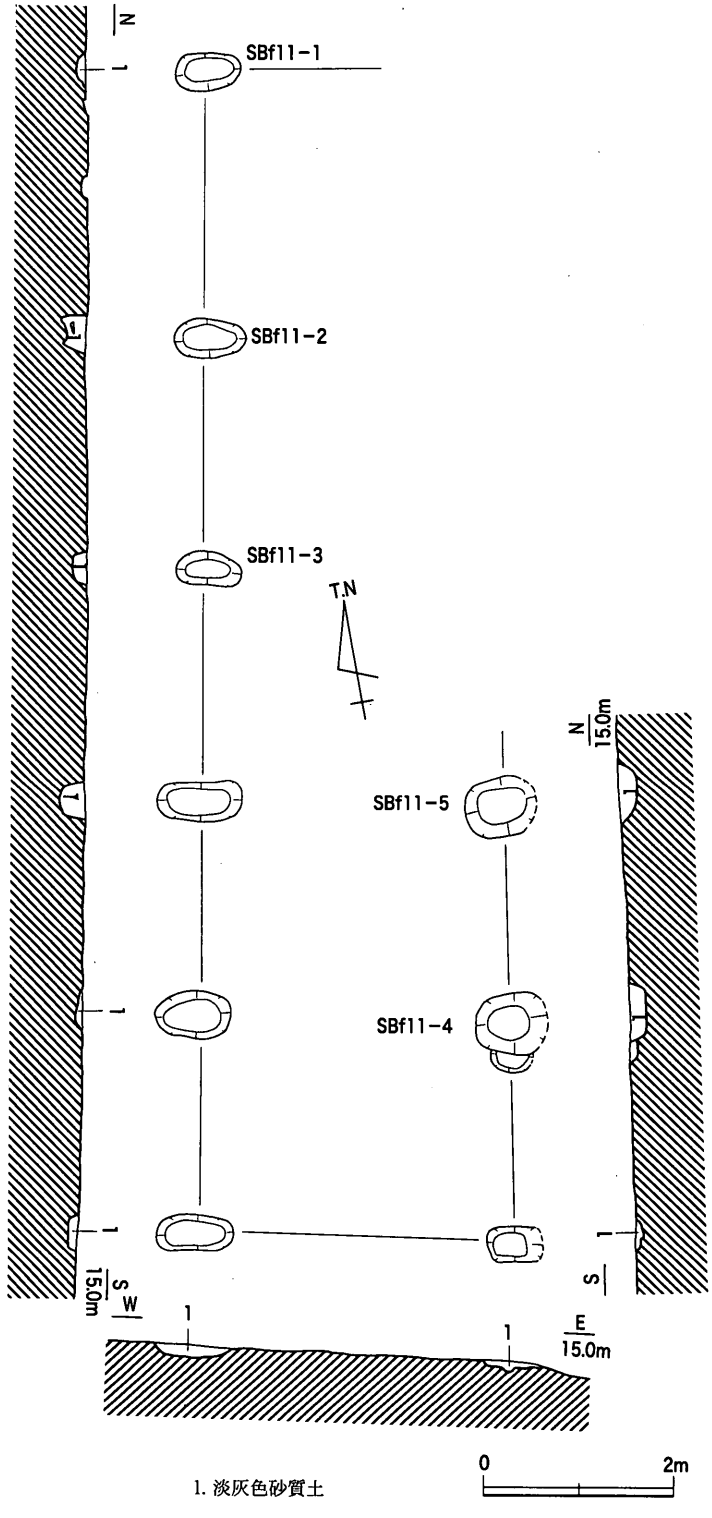
遺物は，土師質土器小皿（**938**・**940**・**941**）・杯（**939**・**942**），吉備系土師質土器椀（**943**），十瓶山窯産須恵器甕（**944**）がある。**938**はヘラ切り底の小皿で，口径9.0㎝を計り長く立ち上がる口縁部をもつことから，ＳＤf16Ⅲ－１区部分下層出土例に対応するものと考えられる。**939**は口径

13.2㎝を計るヘラ切り底の杯であり，やはり同下層に対応する法量である。**940**・**941**は糸切り底の小皿・杯であり，同中層ないし上層に対応する時期が考えられる。**943**は山本編年Ⅲ－２期の吉備系土師質土器椀である。遺物に若干の時期幅があるが，**940**・**941**から中世Ⅱ－４期に下る可能性を考慮しておきたい。つまり，先後関係としては，ＳＢf10→ＳＢf11の可能性が指摘できるのである。

ＳＢf12（第131・132図）

Ⅲ－６区東端部で検出された，１×２間（梁間2.18ｍ，桁行3.7ｍ，床面積8.06㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－11°－Ｅである。西辺部では桁行の中間柱穴がみられず，南北両端部の柱穴の外側（対角線上の延長部）で庇状の柱穴が検出された。また柱穴内には，径15㎝前後の円形プランの柱痕が明瞭に看取できた。

遺物としては，土師質土器小皿（**946**）がある。口径8.1㎝を計るヘラ切り底のものであり，口縁部が長く外傾度がやや強いことから，区画１に普遍的な系統ではなく，ＳＤf32出土土器（**1112**・**1113**）の系統であるといえる。ＳＤf32出土小皿と比較すると，わずかに口径が縮小傾向にあるといえ，後出的な要素が指摘できる。したがって，ＳＤf16Ⅲ－１区部分下層に対応する時期の所産と考えられ，東側に隣接し有機的な位置関係にあるとみられるＳＴf01とほぼ同時期（中世Ⅱ－２期）とすることができる。



第130図　SBf11平・断面図（1/80）

ピット出土遺物（第133・134図）

その他のピットの出土遺物としては，

土師質土器小皿・杯・鍋・足鍋，十瓶山窯産須恵器椀・壺，吉備系土師質土器椀・鍋，東播系須恵器甕，和泉型瓦器椀，白磁碗，青磁碗，石鍋，平瓦，鉄釘がある。

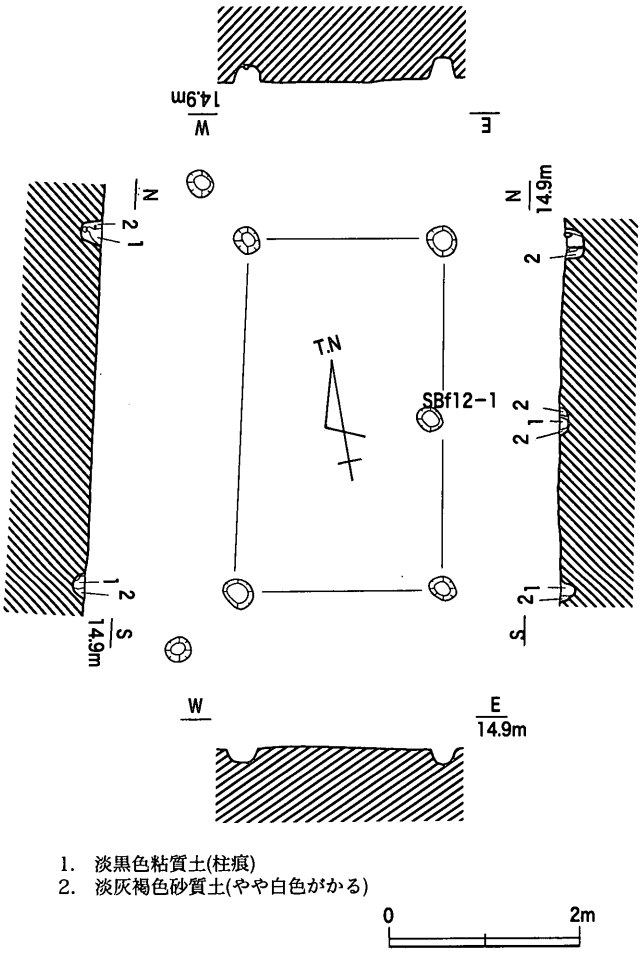
960は滑石製の石鍋である。鍔部付近の細片であるが，おそらく木戸分類のⅢ－ｂ類にあたるものと思われる。**966**は体部外面に右下がりの格子叩き目を施し，回転ナデ調整によって消去している。回転ナデ調整を多用するのは壺（広口瓶）に多いが，本例は壺としてはやや大きな体部径をもつ。伴出した土師質土器杯（**964**・**965**）は口径10.0～10.4㎝であり，薄い器壁をもつことから，中世Ⅱ－５期もしくはより後出する14世紀の所産である可能性もある。**976**は吉備系土師質土器鍋とみられるが，より下る中世後半の所産かもしれない。

982は東播系須恵器甕である。外面に綾杉状の平行叩き目がみられる。**986**は十瓶山窯産須恵器椀であり，見込みには右回りの板ナデ（コテ当て）調整が施される。高台は断面三角形で低く矮小化したものである。**987**は区画１に通有な糸切り底の杯である。外面にはロクロ目が顕著であり，口縁部の一部が歪んでいる。歪みは焼成によるものではなく，乾燥前に生じたことが器面の潰れた状況から窺える。**992**は尾上編年Ⅳ－１期の和泉型瓦器椀である。**993**は土師質土器足鍋である。短く外反する口縁部とよく張った体部をもち，内面全体に粗いハケ目調整を，体部外面に細かいハケ目調整を施す。脚部は基部が強く横方向に踏ん張るかたちで接合されている。足鍋は，讃岐の在地土器の組成に含まれておらず，県内でも下川津遺跡ＳＤⅢ144，東山崎・水田遺跡Ｅ地区第１面ＳＫ02などで見出せる程度である。これらは体部の張りが弱く，吉備系の足鍋に近似した形態であるが，**993**はこれとは異なる形態をもつ。**1004**は，体部外面下半に籾圧痕がみられる。**1011**・**1012**は，横田・森田分類の白磁Ⅸ類碗である。

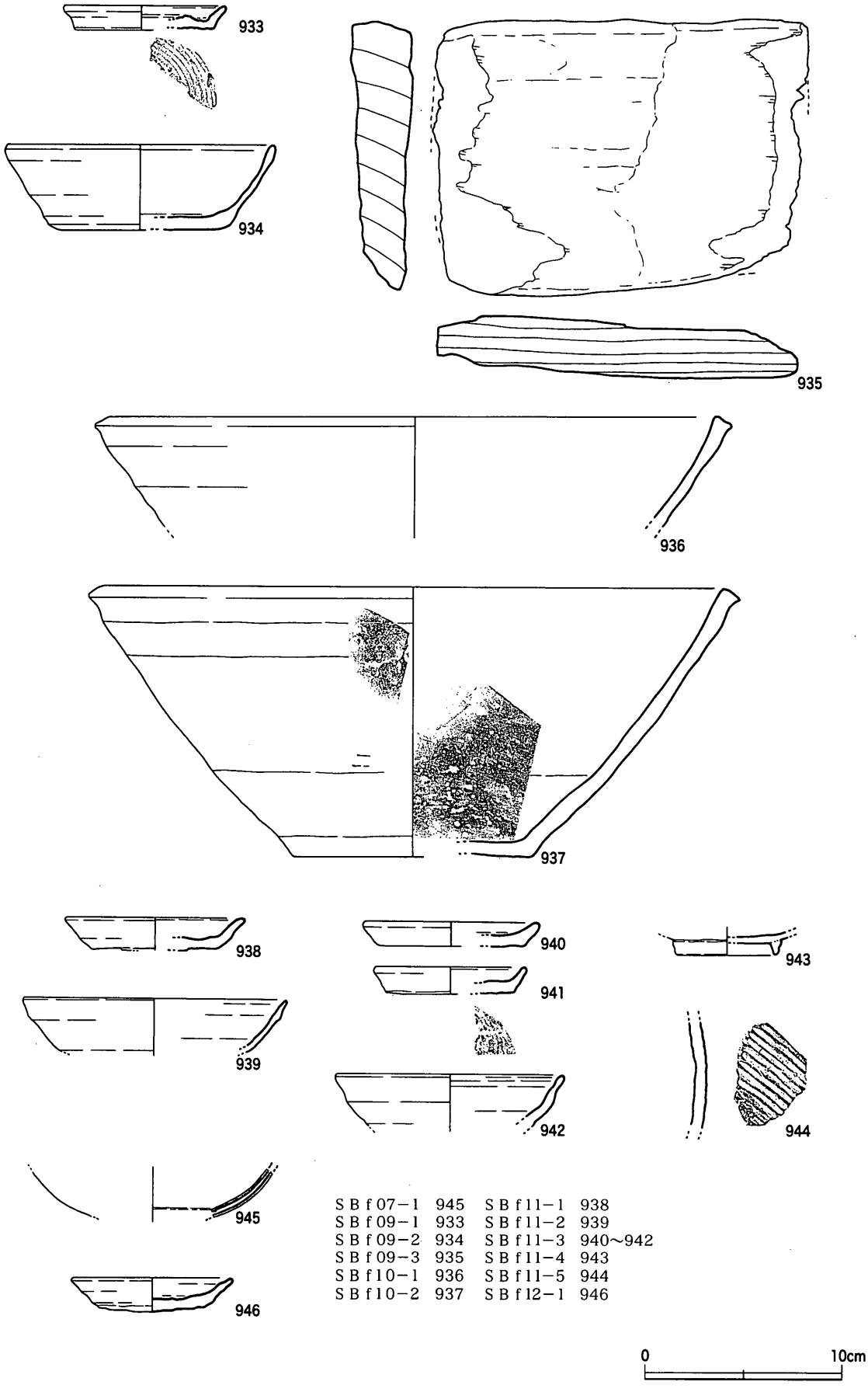
ｄ．土坑

分布状況

当該期の土坑は，少数が極めて散漫に分布する傾向にあり，特定の範囲に集中するような在り方は全く認められない。ＳＫf53・54・55のように，単基で建物に隣接する土坑もあるが，遺物をほとんど含んでおらず，廃棄土坑のような性格をそこに見出すことは困難である。また，陸橋部では不定形な浅い土坑（ＳＫf56）が検出されたが，これも性格については不明とせざるを得ない。

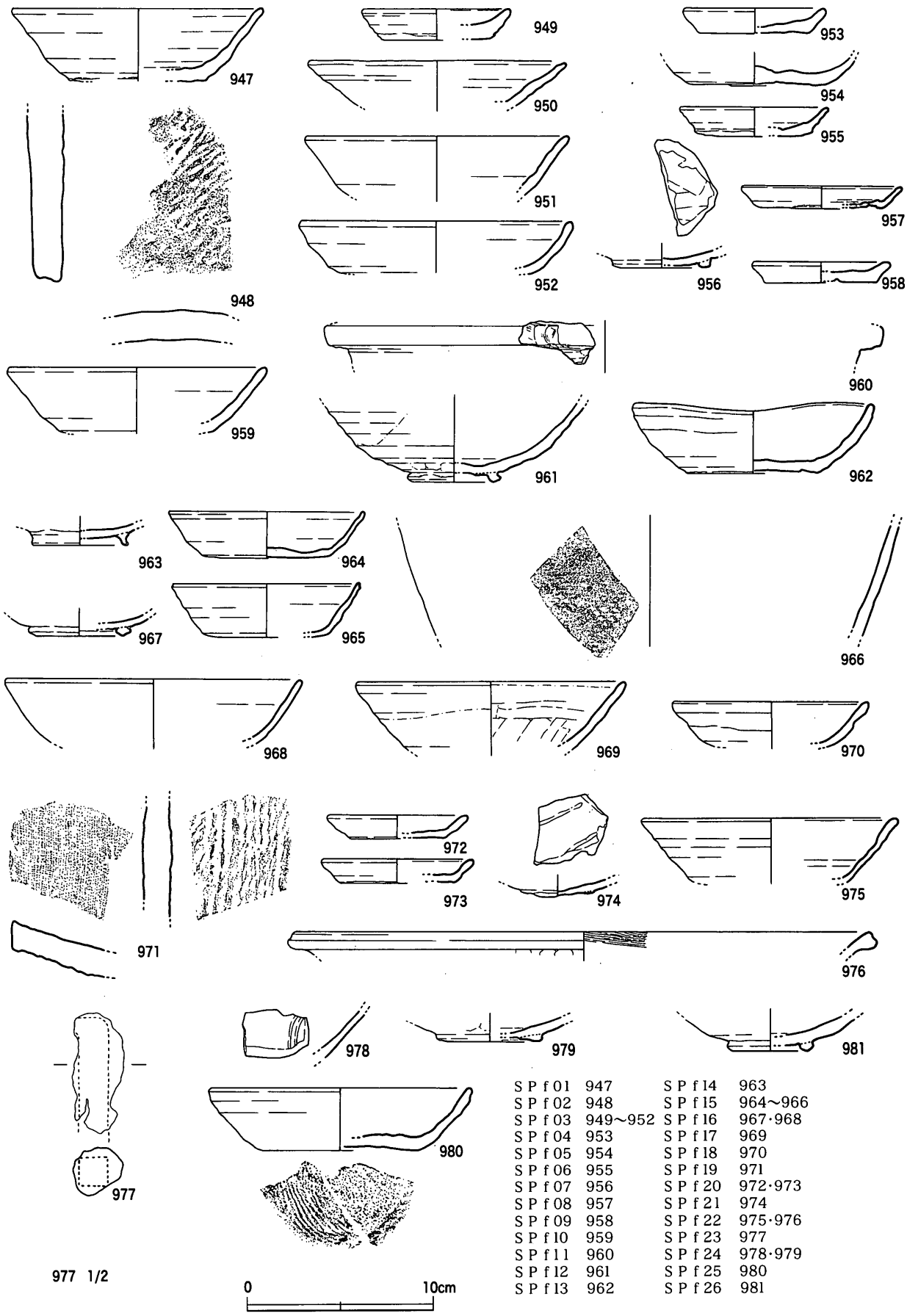


第131図　SBf12平・断面図（1/80）



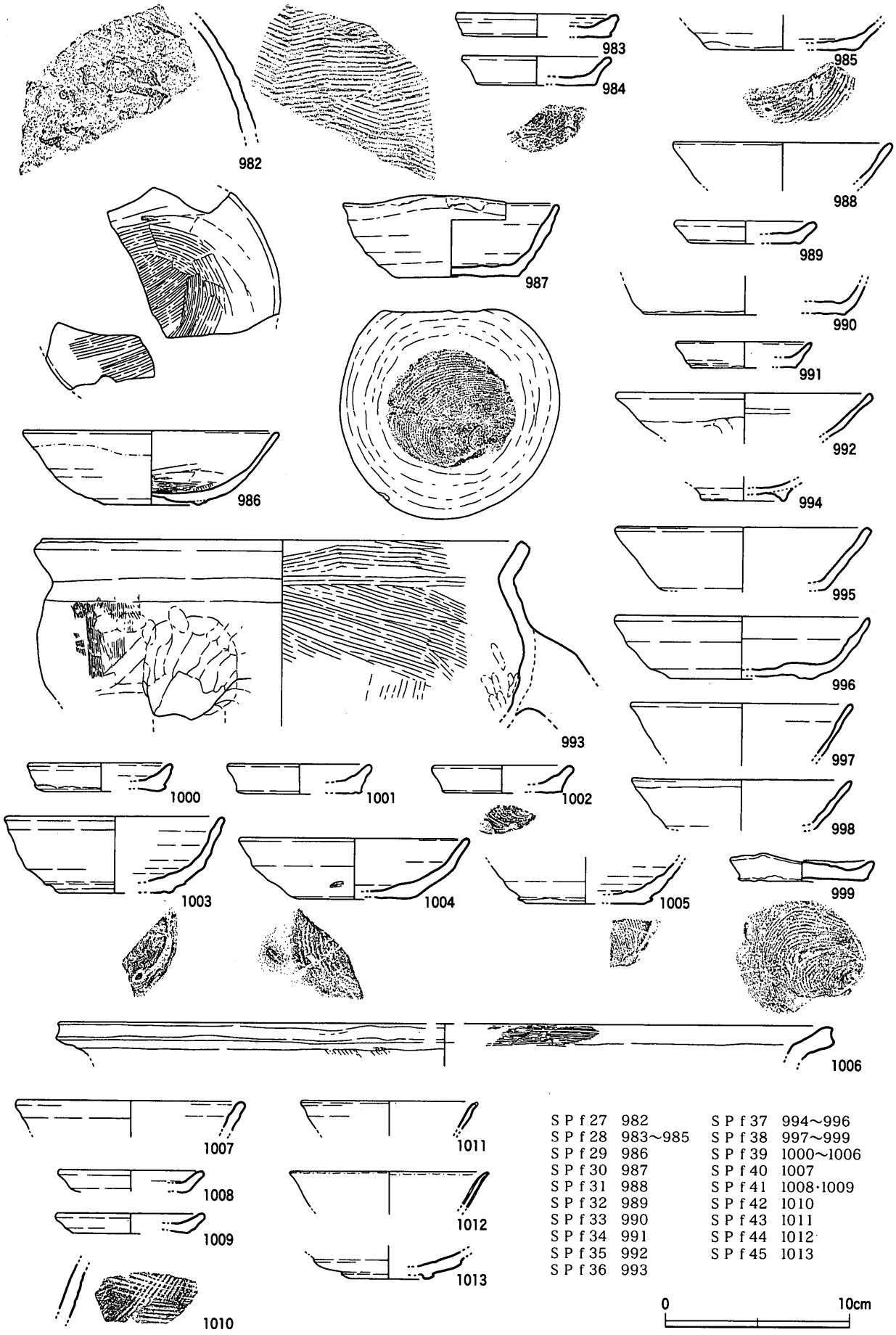
SBf07−1	945	SBf11−1	938
SBf09−1	933	SBf11−2	939
SBf09−2	934	SBf11−3	940～942
SBf09−3	935	SBf11−4	943
SBf10−1	936	SBf11−5	944
SBf10−2	937	SBf12−1	946

第132図　区画1掘立柱建物出土遺物（1/3）



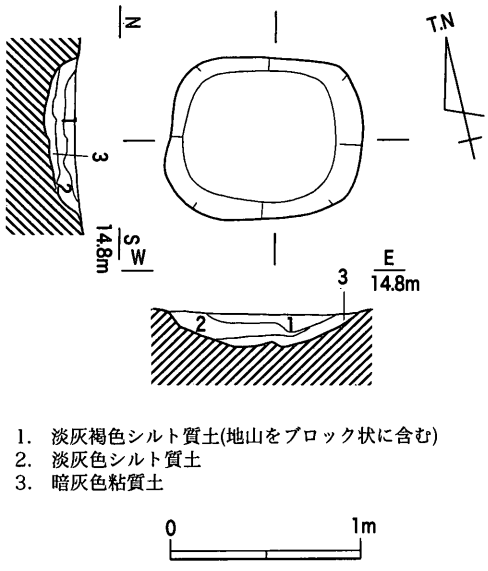
S P f 01	947	S P f 14	963
S P f 02	948	S P f 15	964～966
S P f 03	949～952	S P f 16	967・968
S P f 04	953	S P f 17	969
S P f 05	954	S P f 18	970
S P f 06	955	S P f 19	971
S P f 07	956	S P f 20	972・973
S P f 08	957	S P f 21	974
S P f 09	958	S P f 22	975・976
S P f 10	959	S P f 23	977
S P f 11	960	S P f 24	978・979
S P f 12	961	S P f 25	980
S P f 13	962	S P f 26	981

第133図　区画1ピット出土遺物（1）（1/3）

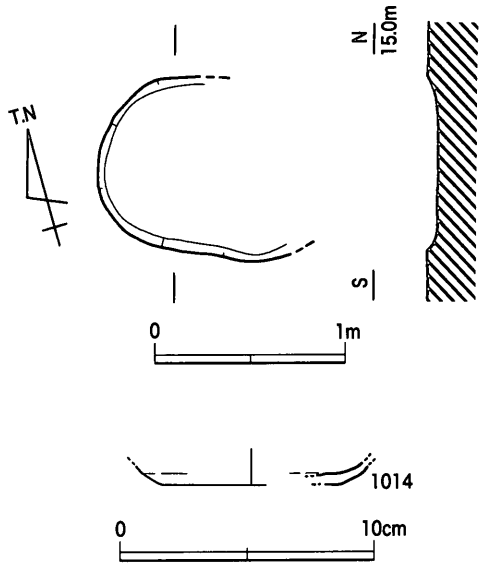


S P f 27	982	S P f 37	994～996
S P f 28	983～985	S P f 38	997～999
S P f 29	986	S P f 39	1000～1006
S P f 30	987	S P f 40	1007
S P f 31	988	S P f 41	1008·1009
S P f 32	989	S P f 42	1010
S P f 33	990	S P f 43	1011
S P f 34	991	S P f 44	1012
S P f 35	992	S P f 45	1013
S P f 36	993		

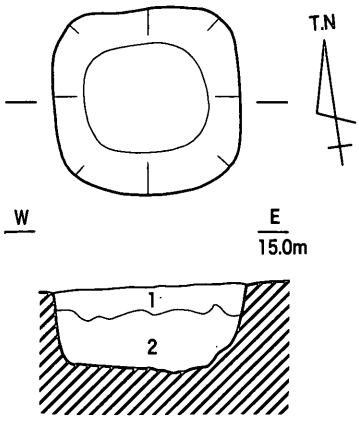
第134図　区画1ピット出土遺物（2）（1/3）



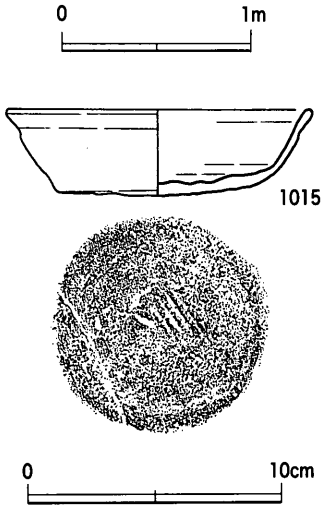
第135図　SKf53平・断面図（1/40）



第136図　SKf54平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



1．淡灰色砂質土
2．淡灰褐色砂質土
(ベースブロックを多量に含む)



第137図　SKf55平・断面図（1/40）
出土遺物（1/3）

ＳＫｆ53（第135図）

Ⅲ－６区でＳＢｆ06の西側１ｍ程度の地点で検出された。隅丸長方形プランを呈しており，東西1.02ｍ，南北0.84ｍ，深さ0.18ｍを測る。断面形態は浅い皿形であり，掘り込み壁面は緩やかに立ち上がる。３層に細別される埋土の第１層には基盤層のブロックが含まれており，人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

遺物が出土しなかったため，時期を限定することは難しいが，埋土の特徴から中世前半と推測する。

ＳＫｆ54（第136図）

Ⅲ－６区でＳＢｆ08の東側に隣接して検出された。平面楕円形を呈しており，断面形態は極めて浅い逆台形である。長径1.0ｍ以上，短径0.9ｍ，深さ0.05ｍを測る。

土師質土器杯（1014）が出土しているが，細片のため時期の限定は難しい。器壁が比較的薄く，口径が13㎝以上に及ぶとは考えられないことから，ＳＤ01中層ないし上層に対応する時期（中世Ⅱ－３・４期）に位置付けておきたい。

ＳＫｆ55（第137図）

Ⅲ－７区で検出された。平面隅丸長方形，断面逆台形を呈しており，一辺0.95ｍ，深さ0.46ｍを測る。埋土

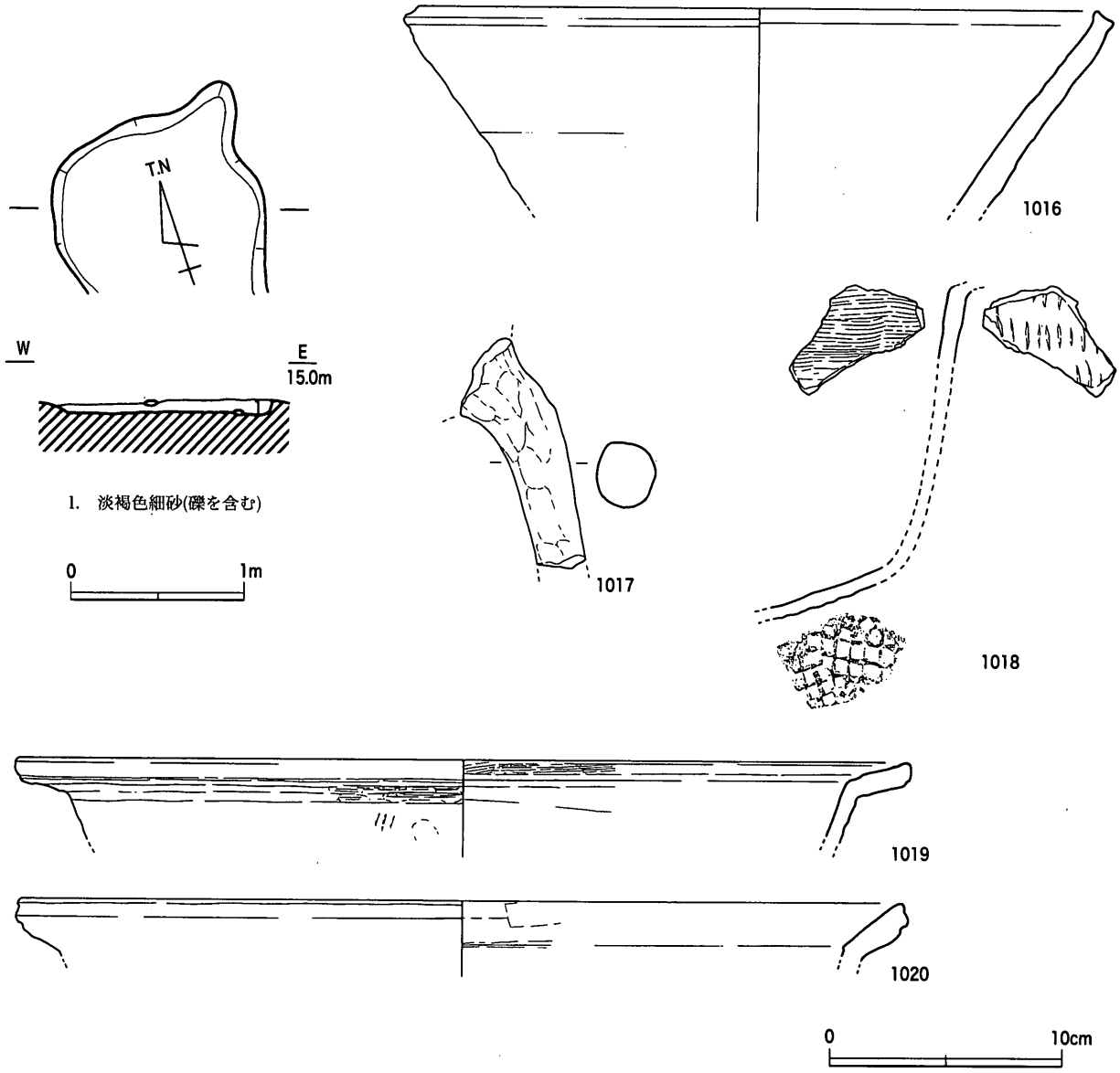
は２層に分かれ，上層には基盤層のブロックが多く含まれていたことから，人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物はほとんど出土しなかったが，図示したヘラ切り底の土師質土器杯（**1015**）は，比較的良好な遺存状況であった。口径12.0㎝を計り，底体部は明瞭に屈曲し直線的な体部に至る形態をもつ。中世Ⅱ－３期の所産と考えられる。

ＳＫf56（第138図）

Ⅲ－８区のＳＤf16陸橋部で検出された。不定形なプランを呈しており，断面形態も緩傾斜の掘り込み壁面をもつ極めて浅いものである。規模は長径0.58ｍ以上，短径0.58ｍ，深さ0.08ｍを測る。

遺物はごく少量みられ，土師質土器足釜（**1017**）・鍋（**1018～1020**），十瓶山窯産須恵器捏鉢（**1016**）の他，図示しなかったが馬歯が出土している。これらのみで時期を限定することは困難であるが，他の区画１の遺構群と同じ時間幅の中で捉えることが可能である。



第138図　SKf56平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

e．焼土面（付図5）

Ⅲ－7区のＳＤf19の東側で検出した。明確な掘り込みはなく，南北0.68ｍ，東西0.6ｍの範囲の基盤層の被熱部分として確認した。焼土面の中央は暗褐色酸化層を形成しており，その周囲が淡褐色酸化層となっていることから，中央部の焼土層が本来の構造物の面を反映しているものと思われる。

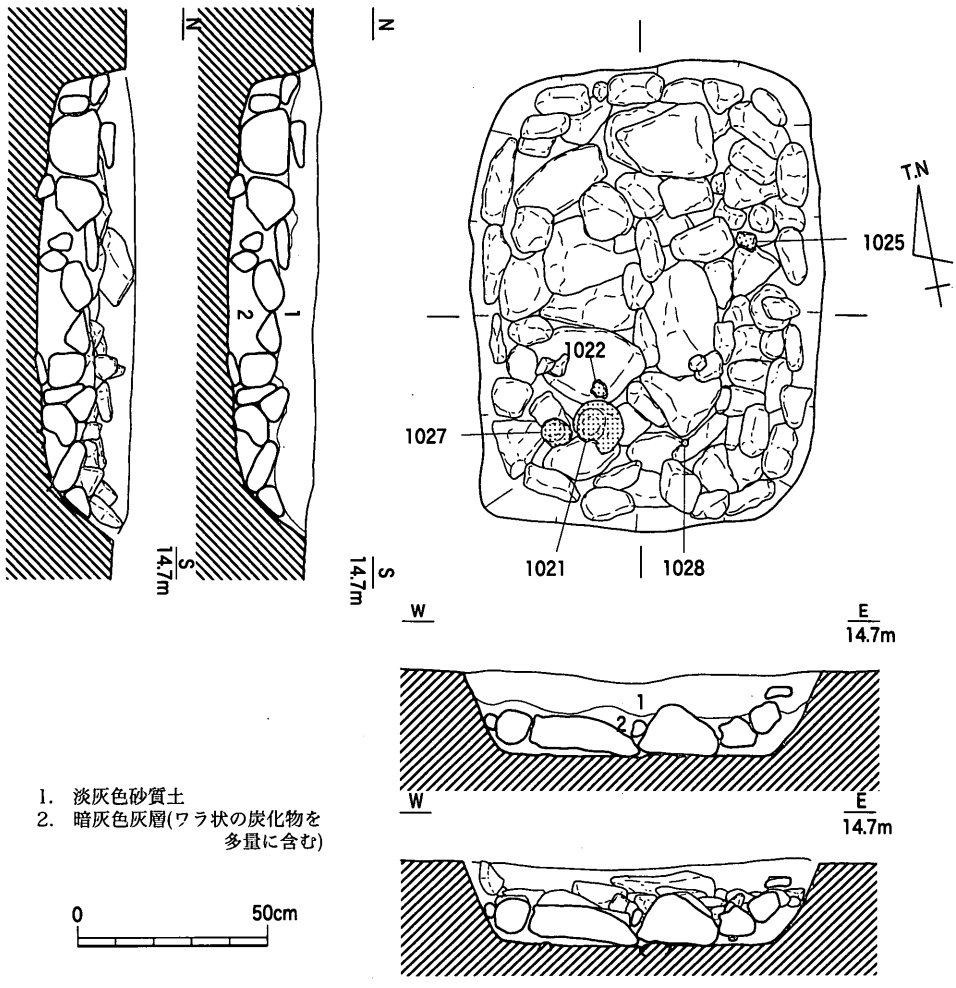
周囲から遺物が出土していないため，これが中世前半に限定できる確証はない。また，遺存状況が極めて悪いために構造や性格については明確にし得ない。

f．墳墓

ＳＴf01（第139・140図）

Ⅲ－6区でＳＢf12の東側に隣接して検出された。礫敷きの火葬土坑を墳墓としたものと考えられる。ＳＢf12との位置関係を仔細にみると，ＳＢf12東辺の南1間分に近接しており，相互規制的な位置にあるといえる。

土坑（墓壙）は，平面長方形，断面逆台形を呈しており，長径1.21ｍ，短径0.91ｍ，深さ0.21ｍを



第139図　STf01平・断面図（1/20）

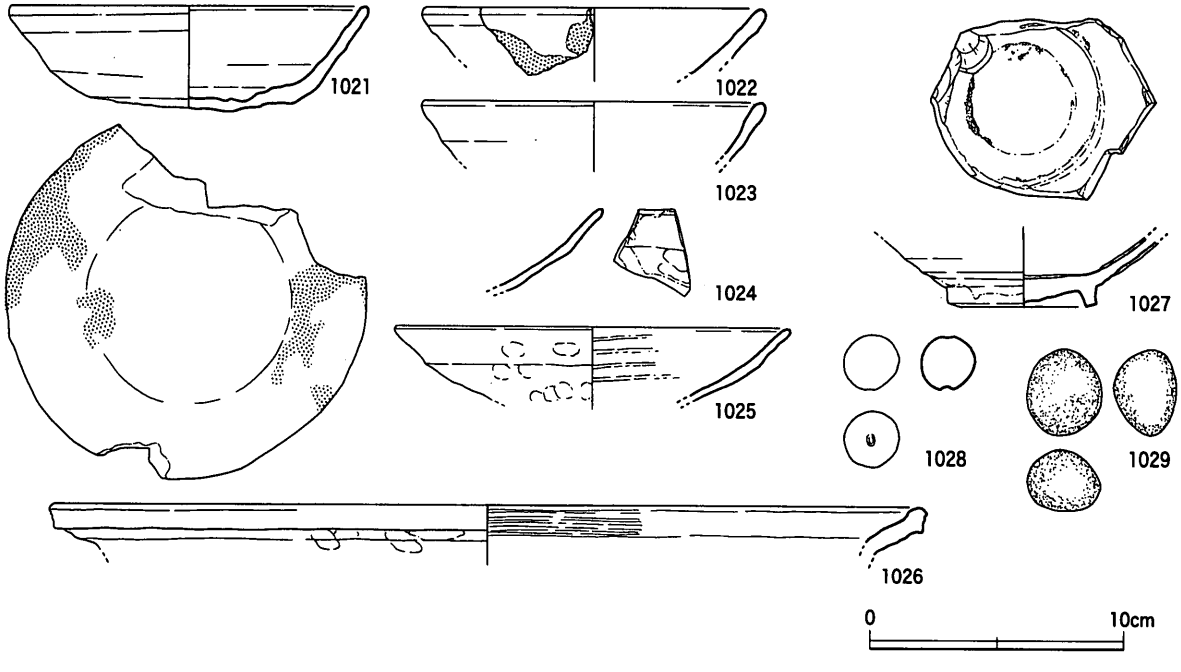
測る。底面に５～30㎝大の円礫ないし亜円礫を敷き並べており，東辺部南半では壁面にもたせかけるような状態で礫が積まれている箇所がある。おそらく本来は，壁面全体に礫が積まれていたと推測される。底面ならびに壁面には，被熱による焼土層の形成は認められなかった。

礫敷きの上面には，ほぼ全面にわたって炭灰層が薄く堆積していた。炭化物に木材はなく，藁状の植物繊維片が多量にみられた。炭灰層の上には，淡灰色砂質土が堆積していた。

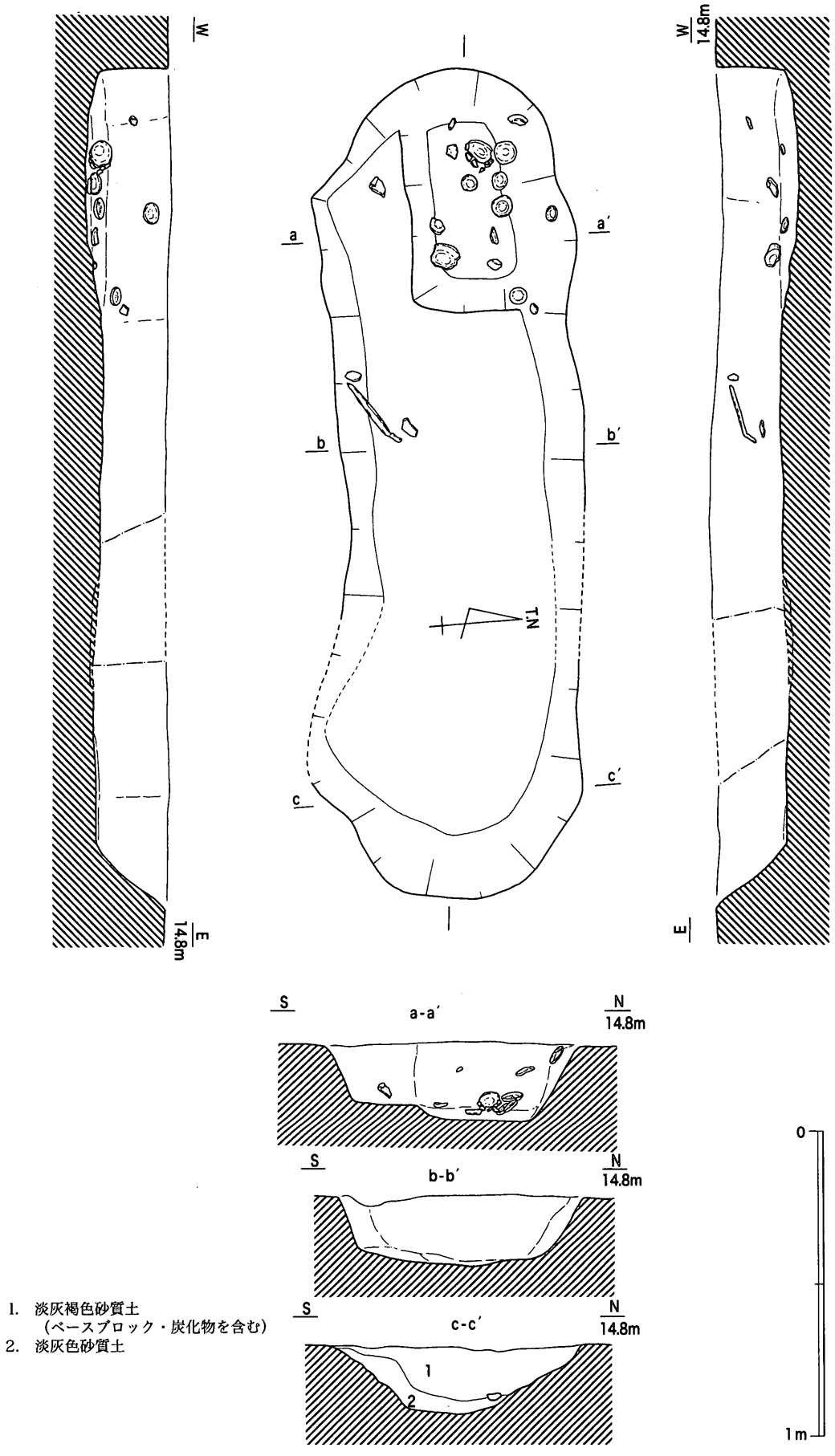
遺物は土坑内の南端部に集中して出土した。南端部西半では，伏せた状態の土師質土器杯（**1021**）と上向きの白磁碗（**1027**）が並んで検出され，近接して別個体とみられる土師質土器杯細片（**1022**）が出土した。また南端部中央では，土製丸玉（**1028**）や被熱した小円礫（**1029**）が出土した。東辺部中央では瓦器椀片（**1025**）が出土した。**1021**・**1028**・**1025**は炭灰層直上で出土したが，他はやや浮いた状態であった。なお，人骨片は遺存しておらず，鉄釘など木棺の存在を示唆するものも出土しなかった。

出土遺物を概観する。土師質土器杯（**1021**～**1023**）は，口径13.2～14.0㎝で底体部が内弯気味に伸びる。**1021**・**1022**は，外面の器面が薄く連続的に剥離しており，斑状に色調の変化がみられることから，二次的に被熱したことが窺える。また**1093**外面には，白色の皮膜状の物質が付着している。和泉型瓦器椀（**1024**・**1025**）は，内面のみにヘラ磨き（暗文）を粗く施しており，尾上編年Ⅲ－３期にあたるものと思われる。器表は二次的な被熱によって変色している。土師質土器鍋（**1026**）は，口縁部内面に横ハケ調整を施した後に口縁端部を横ナデ調整する。白磁碗（**1027**）は，横田・森田分類のⅧ－２類碗である。底部外縁付近で破損しているが，人為的に打ち欠きか，あるいは二次的な被熱による破損か，明確でない。土製丸玉（**1028**）は，両端部に円形の浅い窪みを施しており，穿孔した玉のようにみえる。

土師質土器杯がＳＤf16Ⅲ－１区部分下層出土のものに近似していることから，中世Ⅱ－２期の埋葬と考えてよい。ＳＴf01は区画１の中でも早い時期の遺構とみることができよう。



第140図　STf01出土遺物（1/3）



第141図　STf02平・断面図（1/20）

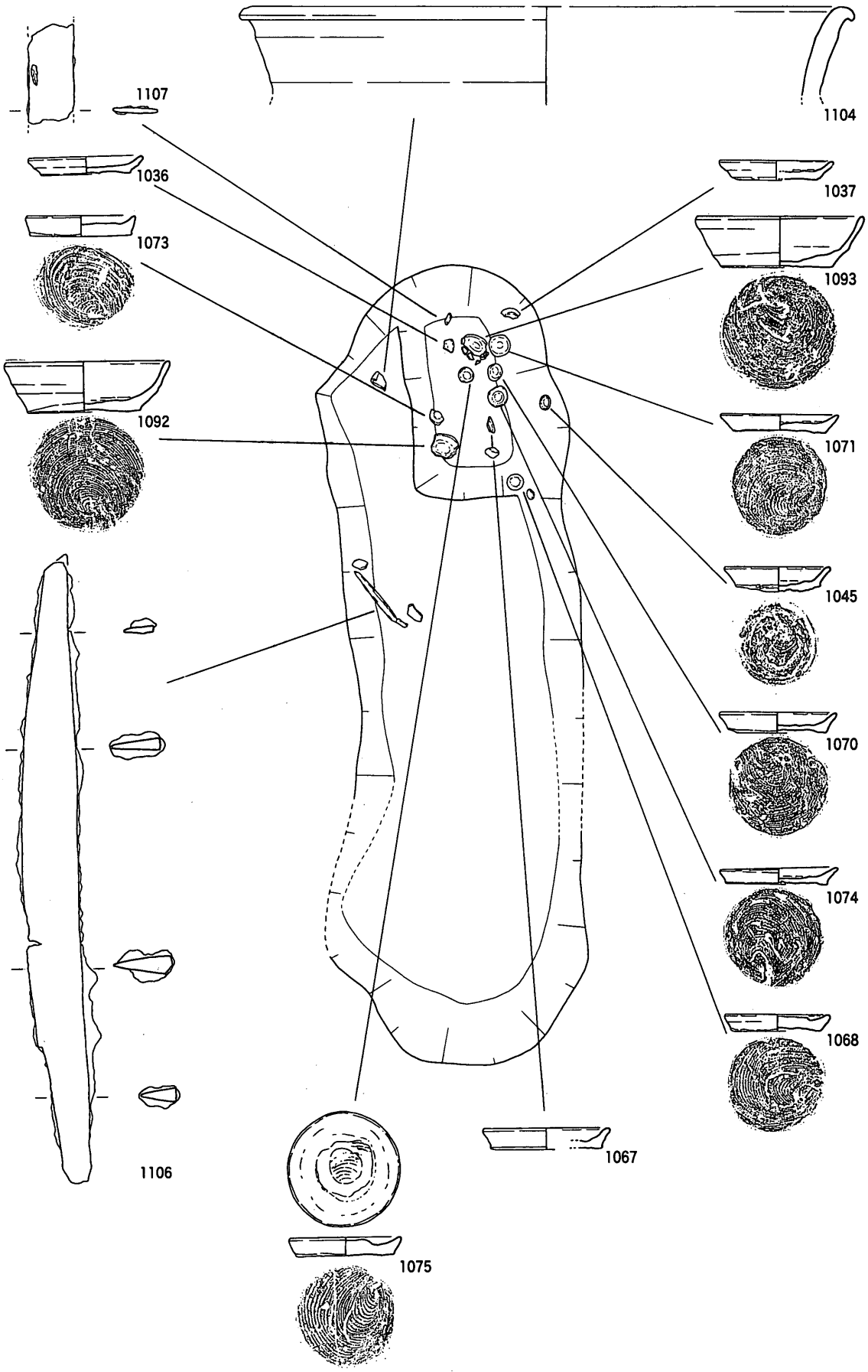
ＳＴf02（第141～145図）

Ⅲ－６・７区で検出された土壙墓である。墓壙の平面形態は，短辺が丸味を帯びた，やや歪な長方形を呈しており，主軸方向はW－10°－Nであり，長径2.68ｍ，短径0.76～0.9ｍ，深さ0.23ｍを測る。墓壙の壁面は，比較的緩やかに掘り込まれており，断面逆台形を呈する。墓壙底面は概ね平坦であるが，西端部で長さ0.6ｍ，幅0.35ｍ，深さ0.05ｍの長方形プランの落ち込みが検出された。この部分を除いた底面長は1.68ｍである。埋土は基盤層のブロックを含んだ淡灰褐色砂質土であり，人為的な埋め戻しを示唆する。埋土中に棺材などの痕跡や鉄釘を見出すことはできなかった。また人骨片も出土していない。

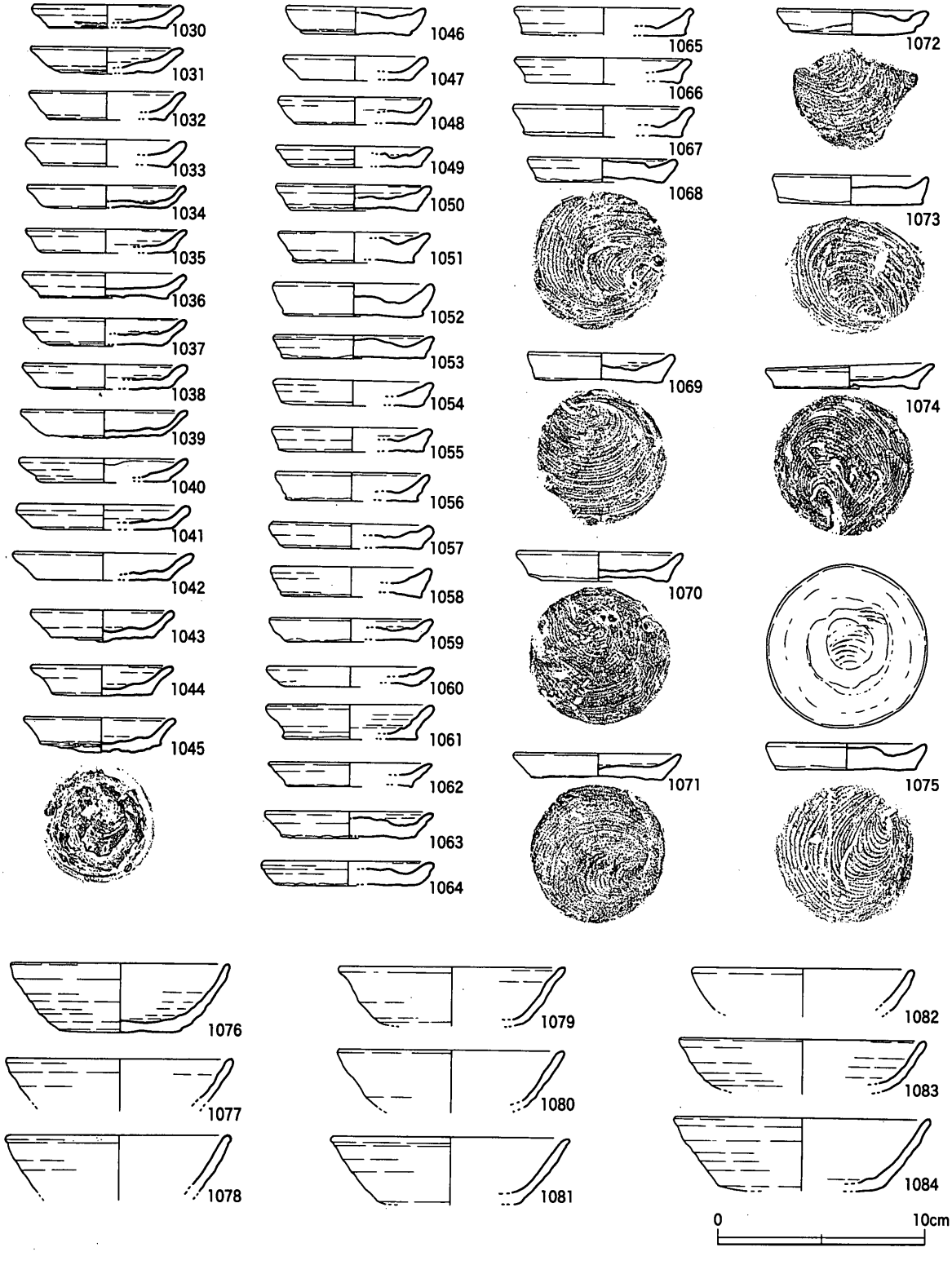
遺物は，埋土中からもかなり多量に出土したが，これらは細片が多いのが特徴である。ただし，他の土坑（例えばＳＢf06直近のＳＫf53など）では埋土中にほとんど遺物を含んでいないのが一般的であり，これらの細片が単に周囲に散在していた「ゴミ」の二次的な混入であると捉えるのには出土量が多すぎるように思われる。何らかの人為的な投棄行為の可能性を考慮することも，不可能ではなかろう。一方，墓壙底面西端では，長方形プランの落ちの範囲内で完形もしくは半損状態の土師質土器小皿10点・杯２点，ならびに短刀片１点が出土した。**1036**・**1045**・**1068**・**1070**・**1071**・**1074**・**1093**は，墓壙の北壁ないし西壁側に底部外面を向けて斜めに置かれていたが，墓壙壁面に直接接しておらず，若干浮いた状態で出土している。墓壙南壁側に底部外面を向ける**1092**も，同様な状況であった。したがって，これらは墓壙の埋め戻し途上で投棄されたと理解せざるを得ない。刀子片（**1107**）も同様な投棄状況として捉えてよかろう。中央部南辺のやや西寄りでは，短刀（**1106**）が切先を西側に向け，また墓壙壁面に立て掛けるような状態で出土した。ただし，茎部側は底面から若干浮いた位置にあり，その下側に容器の痕跡など何ら見出すことはできなかった。短刀の茎部は屈折しており，人為的に折り曲げられた可能性もあろう。

出土遺物には，土師質土器小皿（底部ヘラ切り**1030**～**1045**，底部糸切り**1046**～**1075**）・杯（底部ヘラ切り**1076**～**1084**，底部糸切り**1085**～**1094**）・鍋（**1102**），土師器竈（**1103**），十瓶山窯産須恵器椀（**1095**），吉備系土師質土器椀（**1096**～**1100**），東播系須恵器捏鉢（**1101**），備前焼甕（**1104**・**1105**），鉄製短刀（**1106**），短刀片（**1107**）がある。埋土中の遺物も含めて，かなりまとまった出土状況を示す資料といえよう。

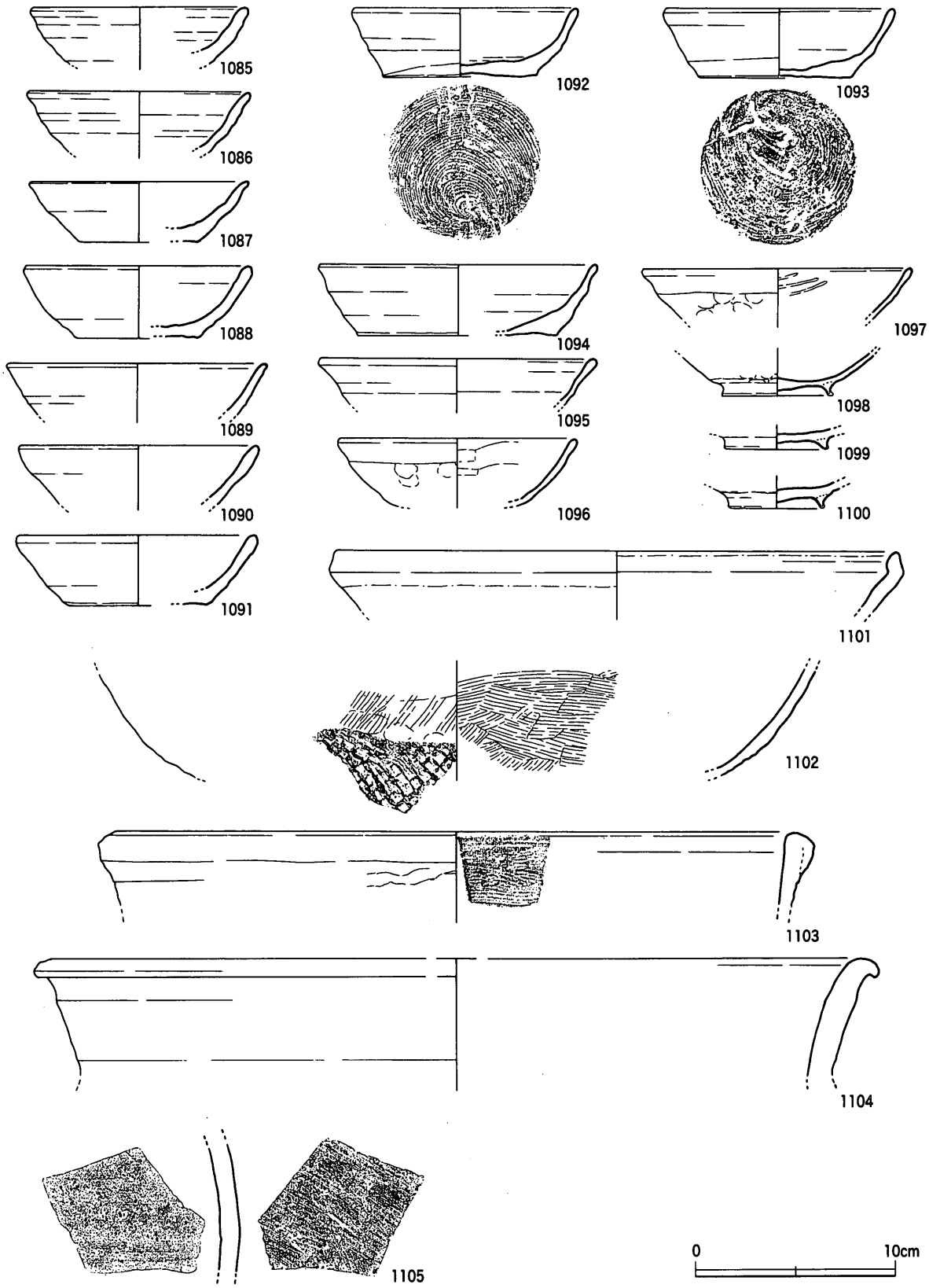
ヘラ切りの土師質土器小皿は，口縁部が太く短く立ち上がるもの（**1030**～**1042**）と，比較的長く立ち上がる口縁部のもの（**1043**～**1045**）がある。前者は，区画１で普遍的な系統である。口径7.0～8.0㎝のものが大半であり，**1041**と**1042**が口径8.0㎝を超える。後者は口径6.8～7.0㎝を測り，小振りな口径である。糸切りの小皿は，口径6.6～8.6㎝とばらつきが著しい。形態的には基部が太く短い断面三角形の口縁部をもつものが大半であるが，**1061**のように明瞭に長く立ち上がる口縁部をもつものも存在する。また，**1049**・**1051**～**1053**・**1063**・**1068**・**1072**・**1075**の見込みは高く盛り上がっており，底体部の境が相対的に低くなっている。**1075**は遺存状態が良好であり，内面の細かな調整痕も観察できる。盛り上がった見込み部分には糸切り痕がかろうじて認められる。見込みの周縁部には，強い回転ナデ調整が施され，糸切り痕は消去されている。またナデで生じた余分な粘土が，口縁部内面下半の回転ナデの擦痕の上に被っている状況が看取できる。これらをまとめると，見込みの糸切り痕→見込み周縁の回転ナデという先後関係と，口縁部内面下半の回転ナデ→見込み周縁の回転ナ



第142図　STf02遺物出土状況（1/40）



第143図　STf02出土遺物（1）（1/3）



第144図　STf02出土遺物（2）（1/3）

デという先後関係が特定できる。製作工程については第５章第３節で検討するが，結論的には円柱作りによる連続的な小皿の製作が想定できる資料である。

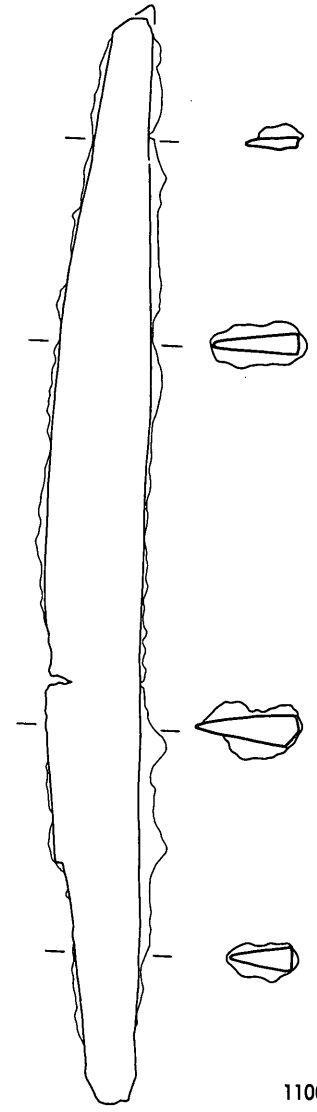
ヘラ切り底の土師質土器杯は口径10.4～12.3㎝を計るが，量的に多いのは口径10.4～11.4㎝である。器面には，ロクロ目が顕著に認められる。**1078・1081・1084**は，口縁端部が外方に丸く肥厚しているのが特徴的である。糸切り底の杯は，内弯もしくは直線的に伸びる口縁部と体部をもち，「口縁部ナデ→体部ナデ」に伴う屈曲が明瞭ではない。口径は10.6～11.8㎝に多くが集中し，**1089・1094**の２点がそれ以上の口径をもつ。

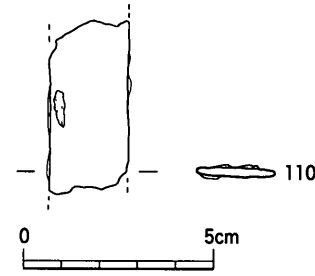
吉備系土師質土器椀は，**1096・1098～1100**が山本編年Ⅲ－２期の所産であり，**1097**が内面にヘラ磨きを施し口径も大振りであることから，やや遡る時期のものとみられる。東播系須恵器捏鉢は，山仲分類Ｃ１類である。

土師質土器鍋（**1102**）は体部外面下半に縦ハケ調整がみられ，底部にはこれに後出する格子叩き目が認められる。内面のハケ目調整も，叩き目に対応する底部ハケ目が体部ハケ目に後出する。備前焼甕（**1104**）は，口縁端部が外反して垂下気味になる形態をもつ。間壁編年Ⅱ期の所産とみられる。

鉄製短刀（**1106**）は，残存長28.4㎝，刃長22.0㎝，刃幅2.6㎝を計る。切先が反らずに直線的であることから鎌倉時代に比定でき，他の土器・陶器の年代観と矛盾しない。

ＳＴf02は，土師質土器小皿・杯の法量や形態から，中世Ⅱ－４期とみられる。





第145図　STf02出土遺物（3）（1/2）

ｇ．区画１に先行する中世遺構

区画１付近で，先行する時期（12世紀代）の中世遺構が若干検出されている。いずれも溝であり，切り合い関係から区画１に伴う区画溝よりも先行することが明確な遺構である。

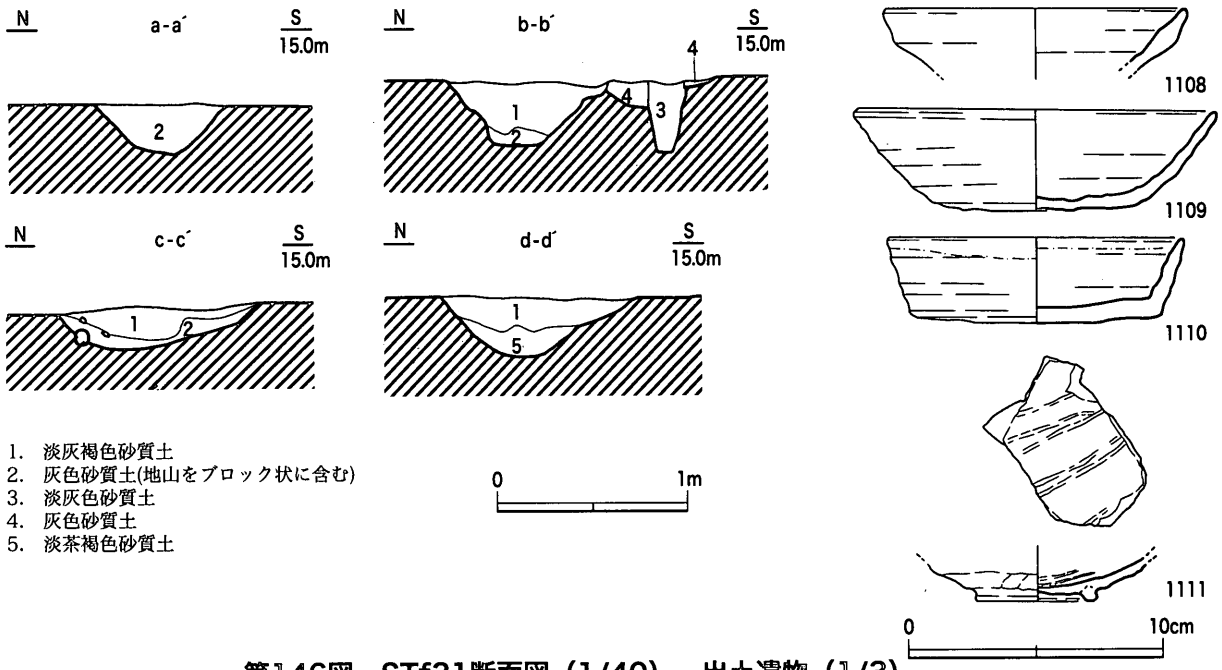
ＳＤf31（第146・174図）

Ⅱ－１・Ⅲ－２・６・７・37区で検出された小溝であり，他遺構による破壊部分も含めて総延長127ｍが検出された。中世前期の遺構との重複関係は，Ⅲ－６区でＳＤf25，Ⅲ－７区でＳＤf19，Ⅲ－２区でＳＤf16に各々切り込まれており，これらよりも先行することが明確である。また調査段階では，Ⅲ－７区ＳＤf22埋土を切り込むと認識し，ＳＤf22→ＳＤf31→ＳＤf19と判断したが，出土遺物の変遷観がＳＤf22とＳＤf31では逆転しており，ＳＤf31→ＳＤf22→ＳＤf19とみるのが周囲の区画溝の年代観とも整合する。このため，後者の先後関係を採ることとする。主軸方位は場所によって

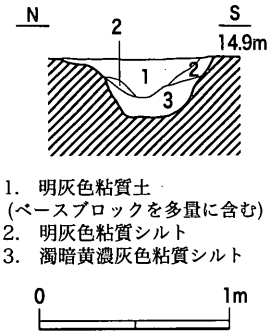
は若干の振幅があるが，全体としてはW－10°－Nであり，周囲の条里型地割の方向と一致している。Ⅲ－7・37区では2条重複しており，南側のＳＤf31－b→ＳＤf31－aの先後関係が確認できる。

ＳＤf31－aの断面形態は，逆台形ないしU字形を呈する。規模は幅0.65～1.0m，深さ0.22～0.32mを測る。埋土は2層に分けられ，下層に基盤層をブロック状に含むことから，少なくともこの層位は人為的に埋め戻された可能性が考えられる。先行するＳＤf31－bはＳＤf31－aよりも浅く，埋土に人為的な埋没の形跡は読み取れない。

遺物はごく少量出土した。**1108・1109**は土師質土器杯である。**1108**は口縁部直下が極端に肥厚し，口縁端部が細身に収まる形態をもち，類例に乏しいものである。**1109**は口径14.0cmを計り，後述するＳＤf32出土土器に近似している。また，ＳＤf16Ⅲ－1区部分下層出土土器よりも深手の器体をもっており，若干先行的な形態をとるといえる。**1110**は8～9世紀の須恵器杯である。**1111**は和泉型瓦器椀で，低い高台と見込みの粗い平行線状のヘラ磨きが特徴である。尾上編年Ⅲ－2～3期頃の所産とみられる。**1172**は東播系須恵器小皿である。直立気味の長い口縁部をもち，糸切り底は平高台状にわずかに突出する。山仲分類のＢ1類，また神出Ⅱ－1期に該当するものと考えられ，12世紀



第146図　STf31断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第147図　SDf32断面図（1/40）

前半頃に位置付けられる。**1173**は須恵器広口瓶である。このタイプの瓶は十瓶山窯でも生産されているが，端部の収め方やロクロ目が顕著であることなど，十瓶山窯産とするには違和感があり，他地域からの搬入品と考えられる。

ＳＤf32（第147・148図）

Ⅲ－6・7区で検出された小溝であり，検出部分での総延長（調査区外も含む）は56.8mを測る。主軸方位はW－10°－Nである。他の中世前半の遺構との重複関係は，Ⅲ－6区でＳＤf24，Ⅲ－7区でＳＤf19・23に各々埋土

が切り込まれており，これらよりも明確に先行する。

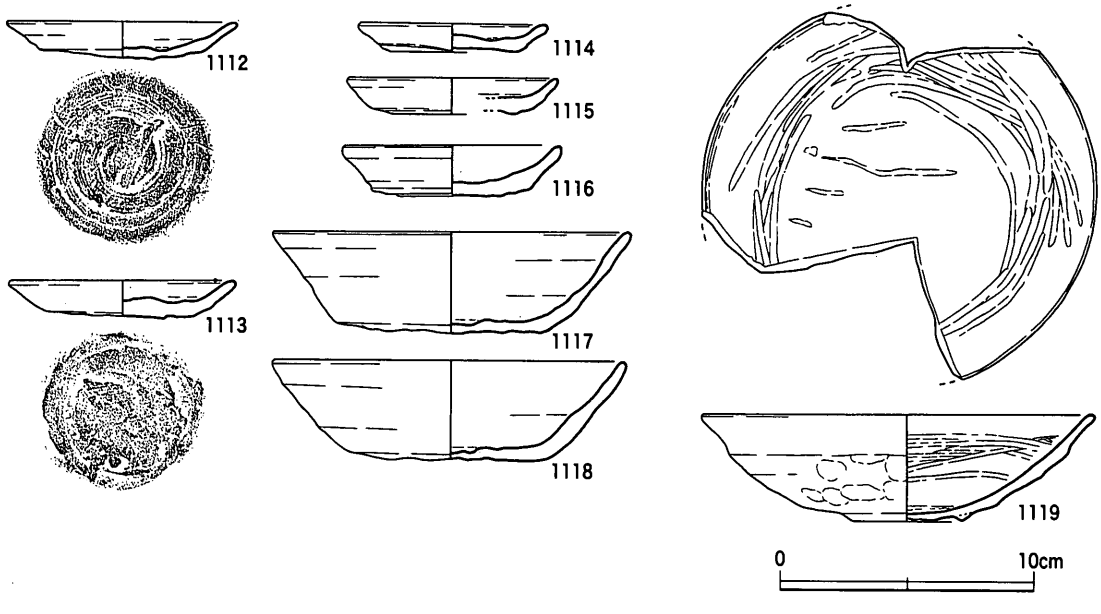
断面形態は逆台形を呈しており，規模は幅0.8m，深さ0.31mを測る。埋土は上下２層に大別できる。上層は基盤層のブロックを多量に含んでおり，人為的な埋め戻しを示唆する。下層は暗灰色粘質土が堆積しており，溝が機能していた段階の自然堆積層と考えられる。

遺物は，Ⅲ－７区部分において**1112・1113・1115・1117～1119**が完形もしくは良好な遺存状況で出土した。**1119**は確実に上層中で出土しており，他の完形遺物も上層形成時に投棄されたことが考えられる。したがって，一括資料に準じた扱いができる土器群といえる。土師質土器小皿（**1112～1116**）は，全て底部ヘラ切りである。**1112・1113**は長く外傾する口縁部をもち，区画１で普遍的なヘラ切り底の小皿とは別系統と考えられる。同様な形態の小皿は，12世紀代の下川津遺跡や川津元結木遺跡，龍川四条遺跡Ａ地区など丸亀平野の遺跡で普遍的にみられるものである。ただし，丸亀平野での事例のほとんどがヘラ切りの方向が左回りであるのに対して，本例は右回りである点が異なる。**1114～1116**は区画１で普遍的な系統である。ただし，**1114**は小振りな口径と太く短い口縁部形態，またヘラ切りへと連続する螺旋状沈線の存在に，時期的に新しい特徴を見出すことができる。周辺のＳＤf18・24出土遺物の取り上げ時の混入の可能性も否定できない。**1115・1116**は，口径8.2～8.5㎝を計る。**1112・1113**よりも口縁部の外傾度が弱いものの，口縁部長は比較的長い。

土師質土器杯（**1117・1118**）は底部ヘラ切りのもので，口径13.8～14.0㎝を計る。比較的深手な器体をもっており，口縁部と体部はＳＤf16Ⅲ－１区部分下層出土例よりも外傾度が強い。底部ヘラ切りの方向は，右回りである。

和泉型瓦器椀（**1119**）は，口縁部外面の幅広い範囲に横ナデ調整が施されており，体部外面にはヘラ磨き調整は認められず指頭圧痕が顕著である。口縁部から体部にかけての内面には横方向の連続的な磨きが粗く施されており，見込みにはやはり粗い平行線状磨きが施されている。尾上編年Ⅲ－２期の所産であろう。

以上の土器群は，ＳＤf16下層よりもより先行的な要素が指摘できるものであり，出土状況を踏まえ

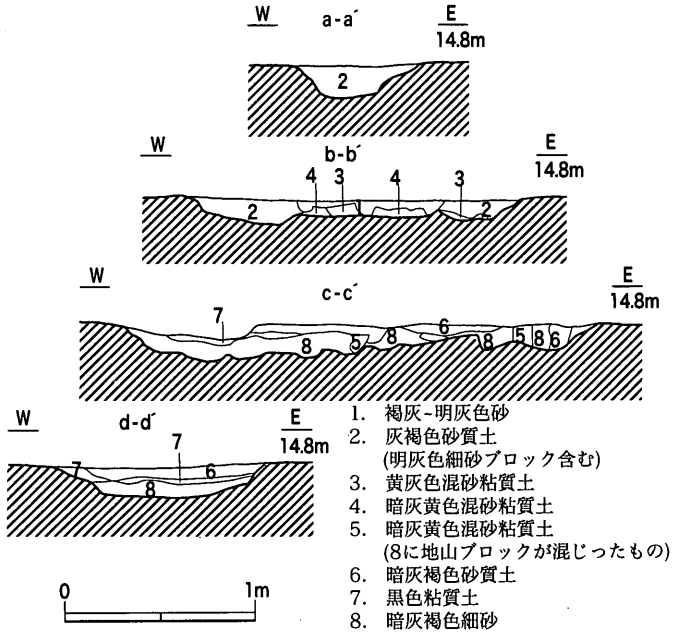


第148図　SDf32出土遺物（1/3）

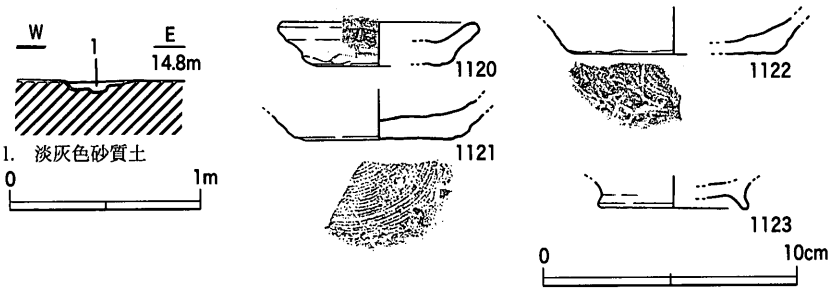
ると，Ⅱ－１期の基準資料としての位置付けが可能である。

ＳＤf33～36（第149・150図）

Ⅲ－６区で検出された南北方向（Ｎ－10°－Ｅ）の小溝群である。ＳＤf33～35は，検出した南端部でＳＤf25・31に埋土を切られており，ＳＤf36は南端でＳＤf25に切られている。ＳＤf31とＳＤf25の先後関係をも踏まえると，ＳＤf33～35→ＳＤf31→ＳＤf25となる。ＳＤf36とＳＤf33～35との関係については，直接の切り合いがないために明確でない。検出当初はＳＤf36とＳＤf25の重複関係が十分識別できず，遺物の取り上げも多少混乱した。



第149図　SDf33断面図（1/40）



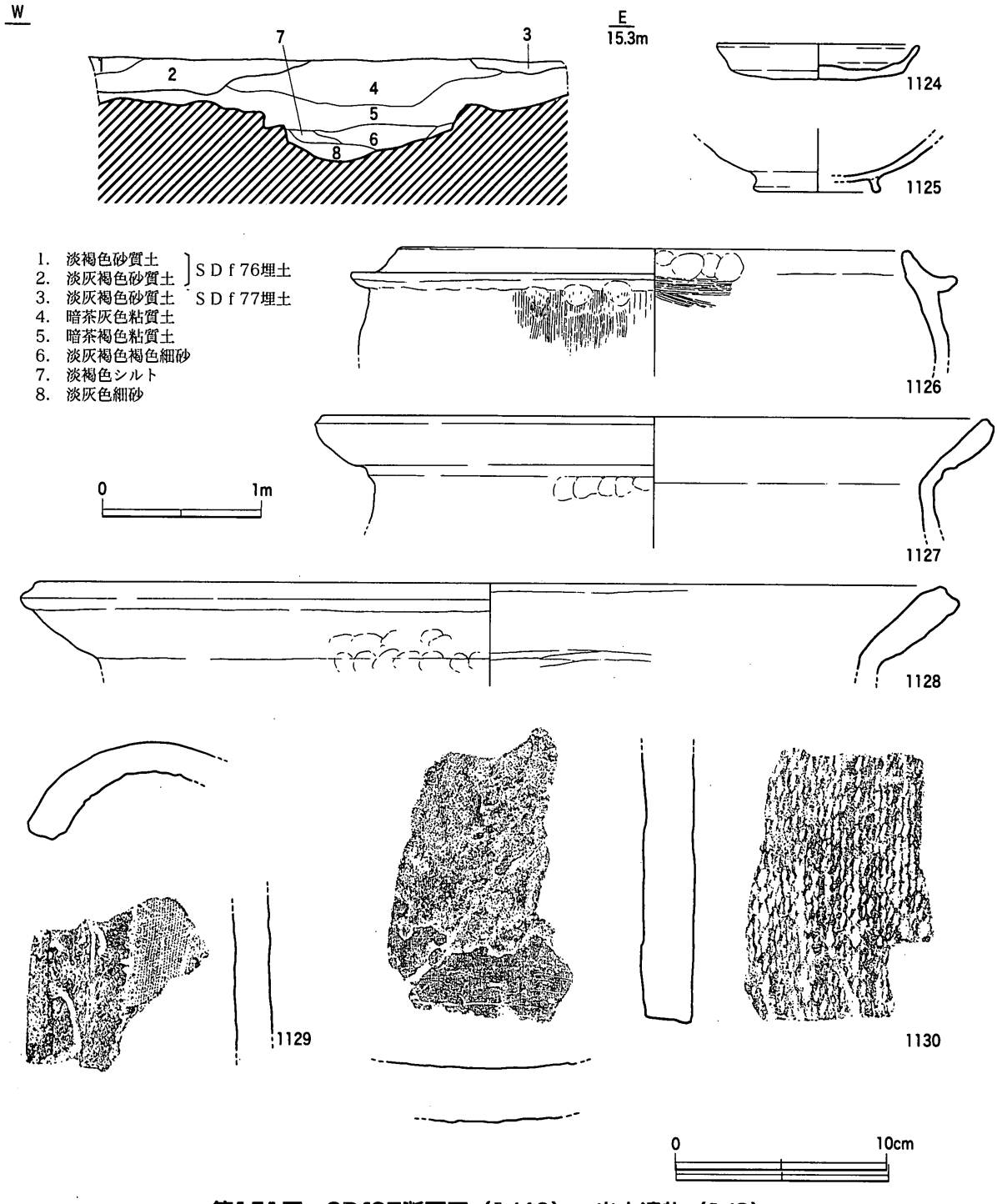
第150図　SDf36断面図（1/40），出土遺物（1/3）

遺物はＳＤf36より少量出土した（第149図）。土師質土器小皿（**1120**）・杯（**1121**・**1122**）・椀（**1123**）がある。小皿・杯は底部糸切りのものであり，**1120**外面に籾圧痕が認められる。いずれも中世Ⅱ－３・４期に対応するものであるが，上記のような検出状況を踏まえるとＳＤf25の遺物が混在している可能性がある。したがって遺構の切り合い関係を重視して，ＳＤf31は区画１以前の中世遺構としておきたい。

ＳＤf37（第151図）

Ⅲ－１区で中世後半のＳＤf76・77の下位で検出された溝である。条里型地割の坪界線上に位置して南北方向（Ｎ－10°－Ｅ）に延びており，断面逆台形ないしＶ字形を呈しており，幅３ｍ以上，深さ0.64ｍを測る。埋土は上下２層に大別でき，上層は暗茶色系粘質土，下層は淡褐色系細砂である。このことから，下層では流水状態，上層では滞水状態であったことを示唆する。なおＳＤf16との関係については，本遺構の検出が部分的にとどまったために明確にし得なかった。

遺物は少量出土しており，土師質土器小皿（**1124**）・足釜（**1126**），土師器甕（**1127**・**1128**），黒色土器椀（**1125**），丸瓦（**1129**）・平瓦（**1130**）がある。**1126**は14世紀後半～15世紀前半頃の所産であり，他者の年代観とは非常に大きな開きがあることから，上位で検出されたＳＤf76・77からの混入であるとみられる。土師質土器小皿は口径9.5㎝を計り，直立気味に短く伸びる口縁部をもつ。また，黒色土器椀は内黒のＡ類であり，器面調整は摩滅のため不明だが，高台は「ハ」の字形に高



第151図　SDf37断面図（1/40），出土遺物（1/3）

く開いており，明らかに古い様相を示す。土師器甕は，直線的に開く口縁部をもち，板ナデによる平滑な内面調整が認められる。この器種は９～12世紀に系譜が追えるものであり，土師質土器小皿や黒色土器椀との組み合わせ関係に矛盾はない。

以上からＳＤf37は，12世紀代に機能・廃絶した可能性が高く，遺物の内容からは明確にＳＤf16よりも先行する時期の遺構であるといえよう。

ＳＤf38（第78図）

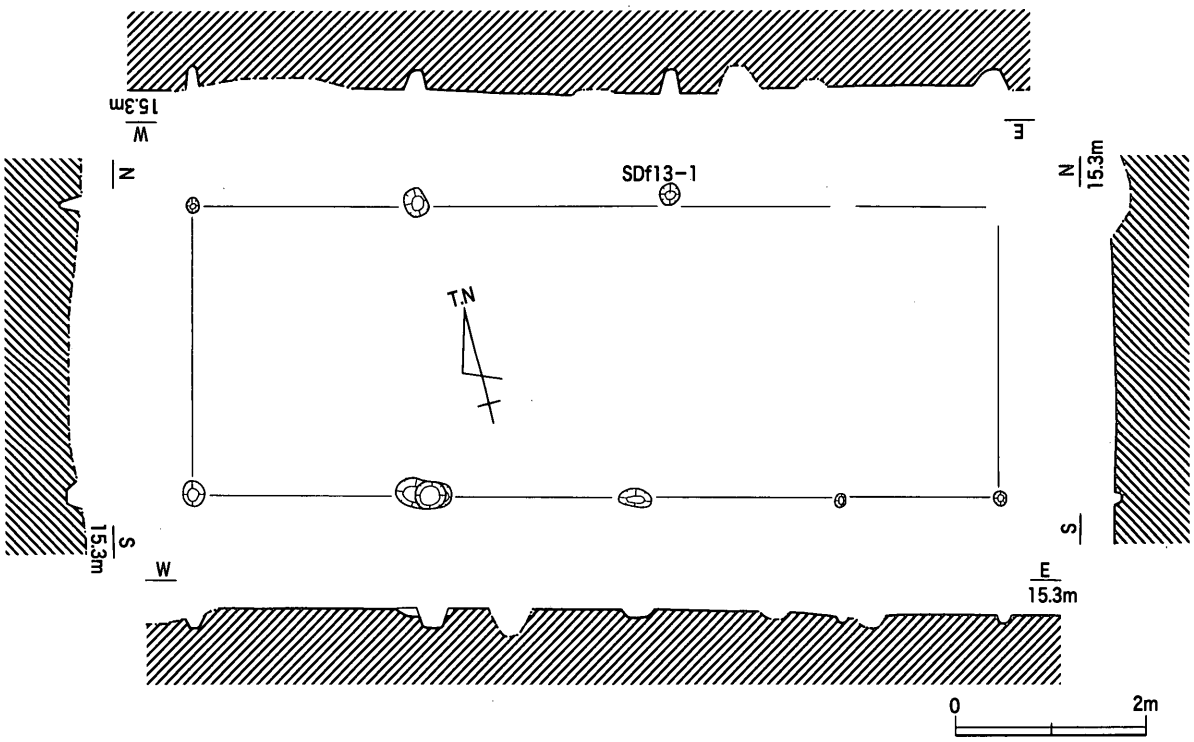
Ⅲ－８区ＳＤf16陸橋部で検出された小溝である。条里型地割の坪界線上にあり，主軸方位はＷ－10°－Ｎである。ＳＤf16によって切り込まれているため，検出長はわずかに1.99ｍを測るのみであった。溝の断面形態は浅い皿形であり，幅0.65ｍ，深さ0.09ｍを測る。埋土は暗茶褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかったため，ＳＤf16以前とすることはできるが，上限については確証はない。ただ，隣接するＨ区では，古代前半の遺構は暗黒褐色粘土を埋土とするため，古代前半まで遡らせることは困難であるといえよう。むしろＳＤf37の上層に近似する埋土である。このため，一応中世前半の幅の中で区画１に先行する時期としておきたい。

３．区画２

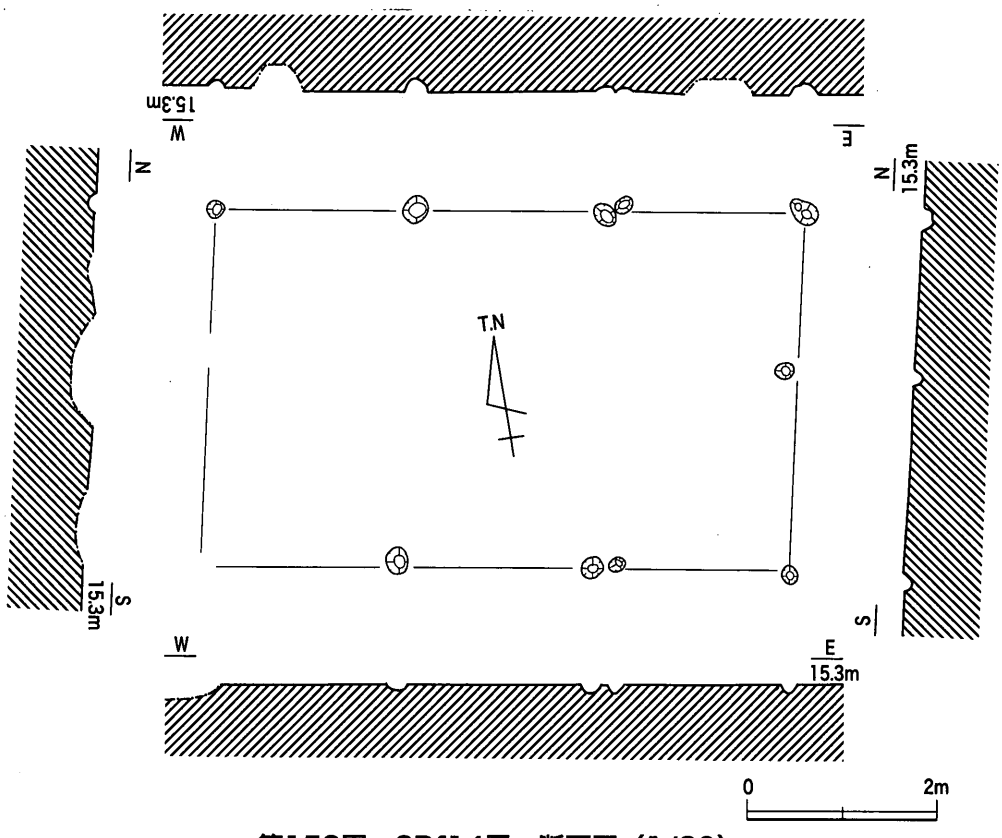
ａ．範囲

Ⅱ－23・24，Ⅲ－１区で検出された建物群である。溝や柵列など，明瞭な区画施設は伴わないため，「区画」との呼称は必ずしも適切ではない。しかし，建物群が比較的限られた範囲に集中しており，周辺地割に規制された分布状況が指摘できること，また東縁部が区画１を囲繞するＳＤf16西辺部によって画されていることから，暫定的に「区画２」と呼称しておく。建物の分布する範囲は東西36ｍ，南北21ｍを測る。

ｂ．建物



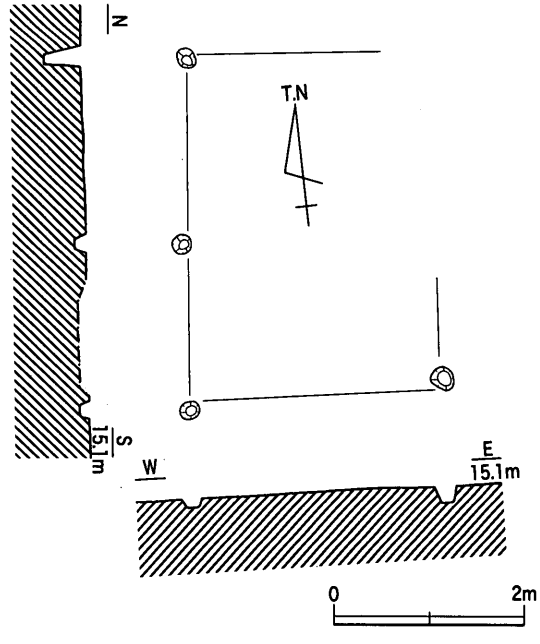
第152図　SBf13平・断面図（1/80）



第153図　SBf14平・断面図（1/80）

ピットの分布状況（付図２・３・５・６）

位置的には中世後半の建物群（区画４－ｄ・ｅ）と一部重複するため，分布するピットを２時期に峻別することは困難である。このため，中世前半のピット数を示すことはできないが，概ね上記の範囲内にやや散漫に分布しているとみてよい。これらから復元できた当該期の掘立柱建物は11棟であり，かなりの高比率で建物の復元に至ったといえる。



第154図　SBf15平・断面図（1/80）

ＳＢｆ13（第152・163図）

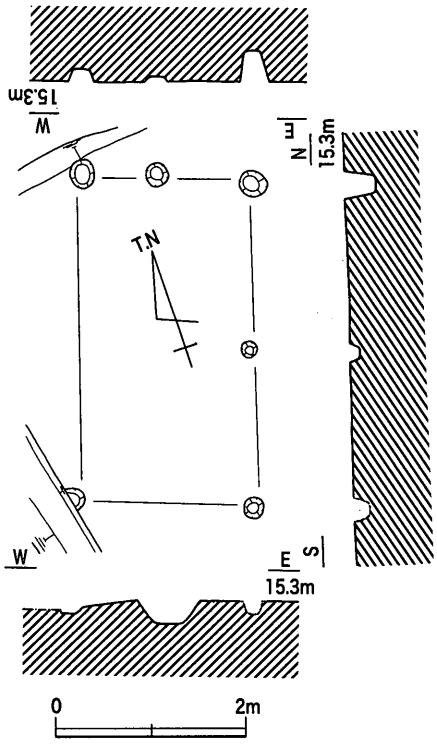
Ⅱ－24区で検出された，１×４間（梁間8.5ｍ，桁行3.07ｍ，床面積26.09㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－14°－Ｎである。柱穴は楕円形プランを呈しており，大きさ・底面レベルとも不揃いであるが，平面的には直線的に並んでいる。柱間距離は桁行方向の東側１間分が狭く1.64ｍを測る。他の３間分は概ね近似した柱間距離であり，平均2.28ｍを測る。

図示できる遺物としては，東播系須恵器甕（**1131**）がある。細かい平行叩き目を外面に施す体部の細片である。年代の特定は難しいが，概ね区画１と併行する時期と考えられる。

ＳＢｆ14（第153・164図）

Ⅱ－24区で検出された，２×３間（梁間3.7ｍ，桁行6.2ｍ，床面積22.94㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－10°－Ｎである。柱穴は円形ないし楕円形プランを呈しており，大きさ・底面レベルともに揃っている。柱穴には２個が接した状態で検出されたものや，１個が楕円形に拡張した状態のものがあり，建て替えないし柱の補修が行われたことを示唆する。平均柱間距離は梁間1.85ｍ，桁行2.06ｍである。

遺物は，建て替え時の柱穴の可能性をもつＳＰf46より吉備系土師質土器椀（1144）が出土している。やや高い高台をもつが，山本編年Ⅲ－２期にあたるとみられ，区画１と併行する時期を想定しておきたい。

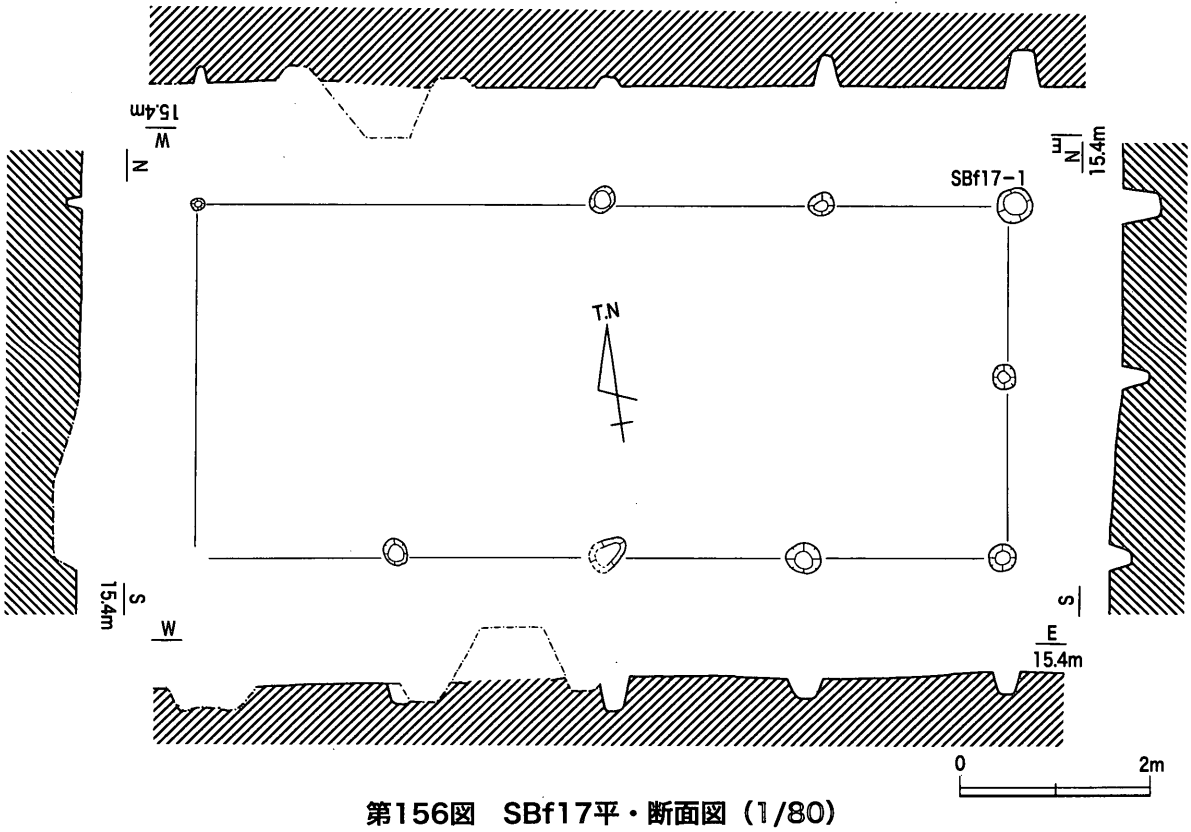


第155図　SBf16平・断面図（1/80）

ＳＢｆ15（第154図）

Ⅱ－24区で検出された，１×２間（梁間2.64ｍ，桁行3.66ｍ，床面積9.66㎡）の小規模な側柱建物である。主軸方位はＮ－６°－Ｅである。柱穴は円形プランであり，底面レベルや柱並びは不揃いである。

遺物は出土していないが，本遺構周辺のピット群は，西側の区画４－ｄとの間に遺構の希薄な空閑地



第156図　SBf17平・断面図（1/80）

を介して分布しており，区画４－ｄとは一応切り離して捉えることができること，また南に隣接して区画２を構成する中世前半の建物・ピット群が集中し，同一遺構群と捉えることが可能なことから，本遺構も中世前半に位置付けておきたい。

ＳＢｆ16（第155図）

Ⅱ－23区で検出された，１×２間（梁間1.82ｍ，桁行3.38ｍ，床面積6.15㎡）の極小規模の側柱建物である。主軸方位はＮ－18°－Ｅである。柱穴は円形プランを呈しており，底面レベルは一定していない。柱間距離は桁行1.69ｍを測る。

遺物は出土していないが，周囲の遺構との関係から中世前半に位置付けておきたい。

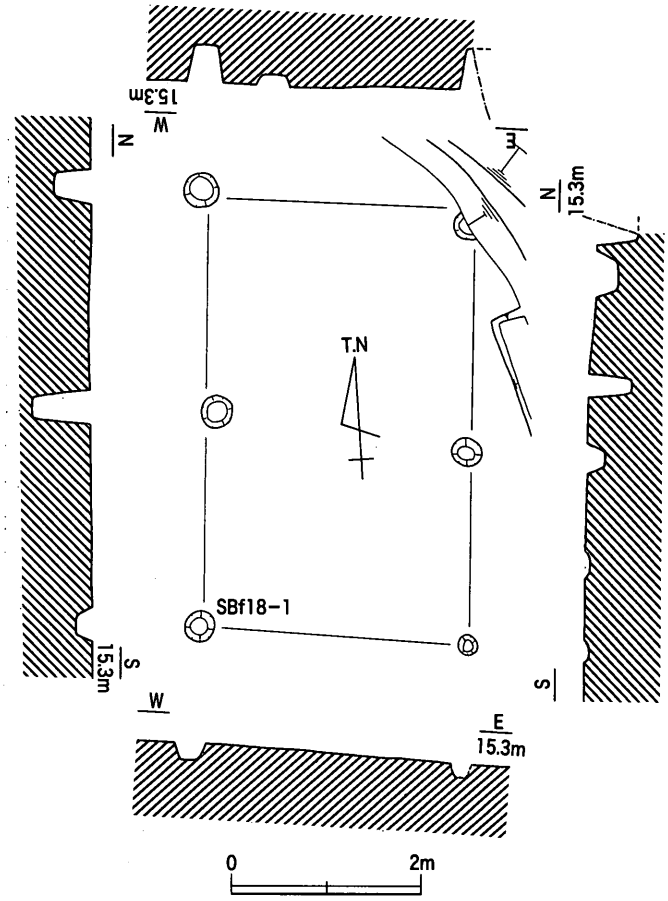
ＳＢｆ17（第156・163図）

Ⅱ－23・24区で検出された，２×４間（梁間3.71ｍ，桁行8.52ｍ，床面積31.6㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－８°－Ｎである。柱穴は円形プランを呈しており，柱穴並びは揃っているが，大きさ・底面レベルともに一定していない。平均柱間距離は，梁間1.85ｍ，桁行2.13ｍを測る。

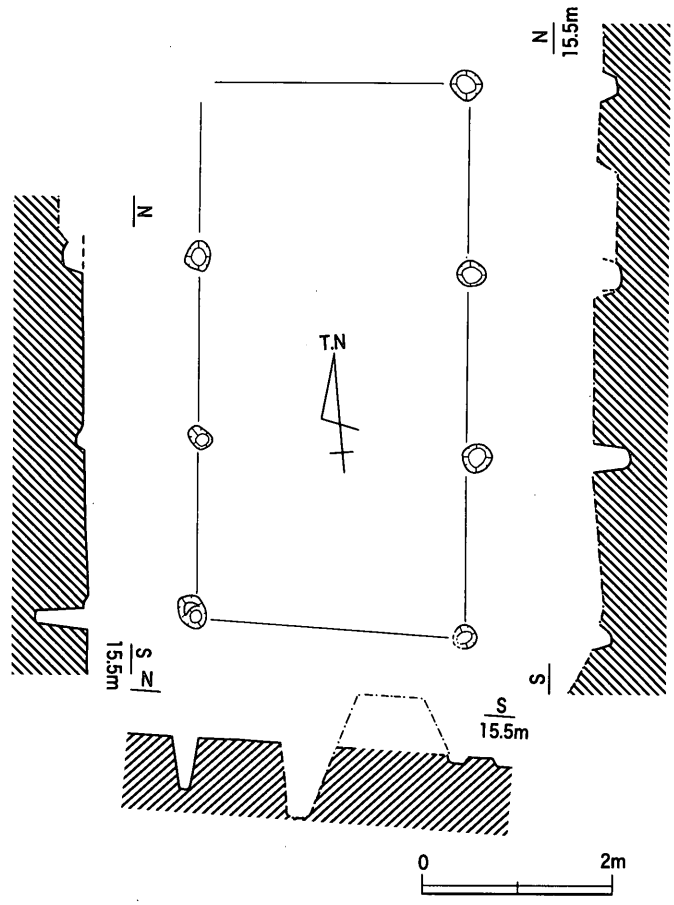
図示可能な遺物として，黒色土器Ａ類椀（**1135**）がある。深手な器体をもち，外面に回転ヘラ磨き調整，内面に分割磨き調整（４分割か）を施す。炭素の吸着による黒色化は，口縁部外面にも及ぶ。西村遺跡（十瓶山窯）産と考えられ，12世紀前半代の所産とみられる（編年的位置付けについては，第５章第１節参照）。

ＳＢｆ18（第157・163図）

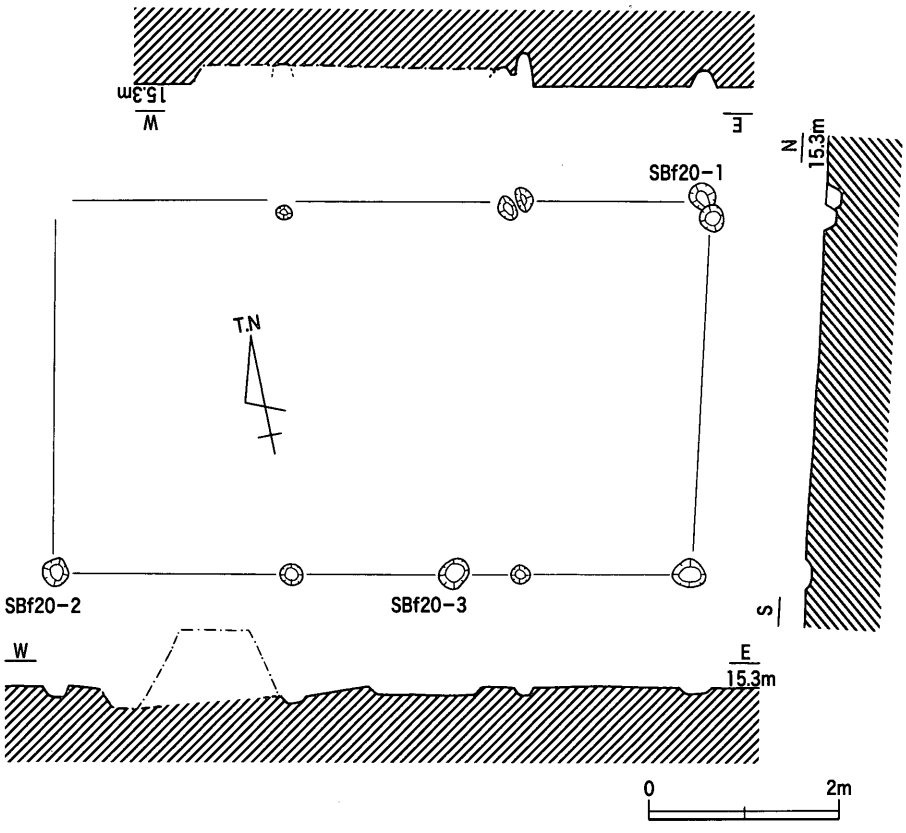
Ⅱ－23区で検出された，１×２間（梁間2.8ｍ，桁行4.48ｍ，床面積12.54㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－4.5°－Ｅで



第157図　SBf18平・断面図（1/80）



第158図　SBf19平・断面図（1/80）



第159図　SBf20平・断面図（1/80）

ある。柱穴は円形プランを呈しており，やや歪ながら柱並びは揃うが，底面のレベルは一定していない。桁行の平均柱間距離は2.24ｍを測る。

図示可能な遺物として，土師質土器小皿（**1136**），緑釉陶器椀（**1137**）がある。**1136**は口縁部が強く外傾する系統のもので，口径8.4㎝を計ることからＳＤｆ32出土の**1112**・**1113**と同時期の所産とみられる。**1113**は口縁端部が外反しており，軟質な土師質焼成の胎土をもつ。釉は非常に薄くかけられており，刷毛塗りされている。９世紀代の京都産緑釉陶器であろう。遺構に本来的に伴うものではないと考えられるが，周囲ではⅢ－２区ＳＤｆ48上層（**1357**）やⅡ－１区中世包含層（**1193**）においても混入のかたちで緑釉陶器が出土している点が注意される。

ＳＢｆ19（第158図）

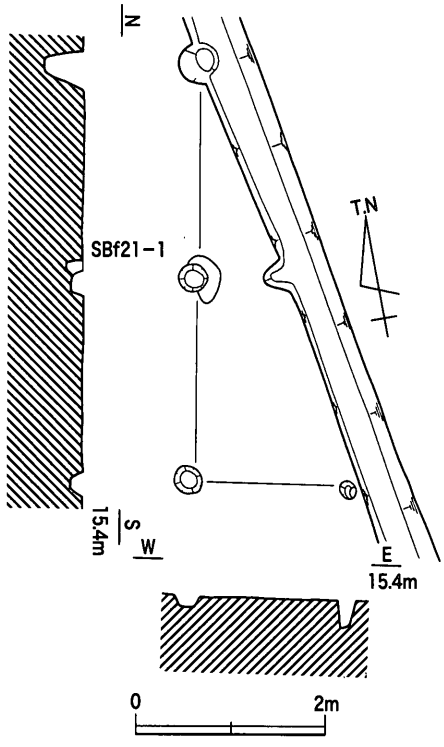
Ⅱ－23・24区で検出された，１×３間（梁間2.83ｍ，桁行5.75ｍ，床面積16.27㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－６°－Ｅである。柱穴は円形プランを呈しており，柱穴底面レベルは不揃いである。桁行の平均柱間距離は1.9ｍを測る。

遺物は出土しなかったが，周囲の建物・ピット群の年代観より中世前半に位置付けるのが妥当であろう。

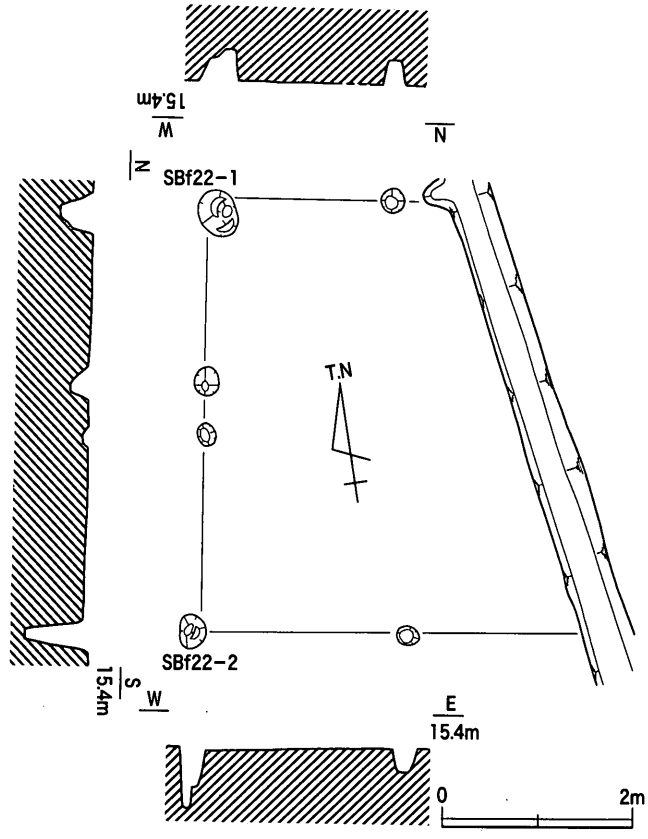
ＳＢｆ20（第159図）

Ⅱ－23・24区で検出された，１×３間（梁間3.85ｍ，桁行6.7ｍ，床面積25.79㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－11.5°－Ｎである。柱穴は円形プランであり，柱穴底面のレベルも概ね揃っている。柱間距離は，桁行東１間分が狭くなっており，1.8～2.05ｍを測る。西側２間分はほぼ等しく，2.41ｍを測る。東側１間分を庇とするには柱間距離が長いため，身舎に含めて考えておきたい。

図示できる遺物として，土師質土器小皿（**1132**・**1133**）・黒色土器椀（**1134**）がある。**1132**はヘラ切り底の小皿であり，口縁端部が丸く太く収まる形態をもつ。**1133**は，口縁部下半が太く見込みが盛り上がる形態をもつ，底部糸切りの小皿である。**1134**は西村遺跡産とみられる黒色土器Ａ類椀

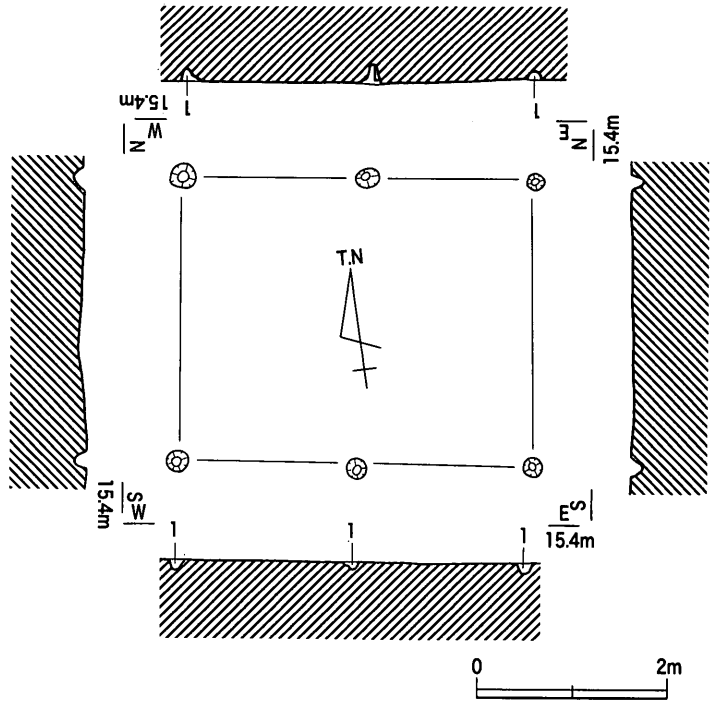


第160図　SBf21平・断面図（1/80）



第161図　SBf22平・断面図（1/80）

である。見込みに平行線状のヘラ磨きが密に施される。これらの年代は，**1134**が12世紀前半代まで遡るが，**1132**・**1133**をそれと併行する時期に置くことは到底できない。この２者は，区画１ＳＤ01上層もしくは中層段階に位置付けるのが妥当であり，建物も13世紀代の区画１と同時期とする。

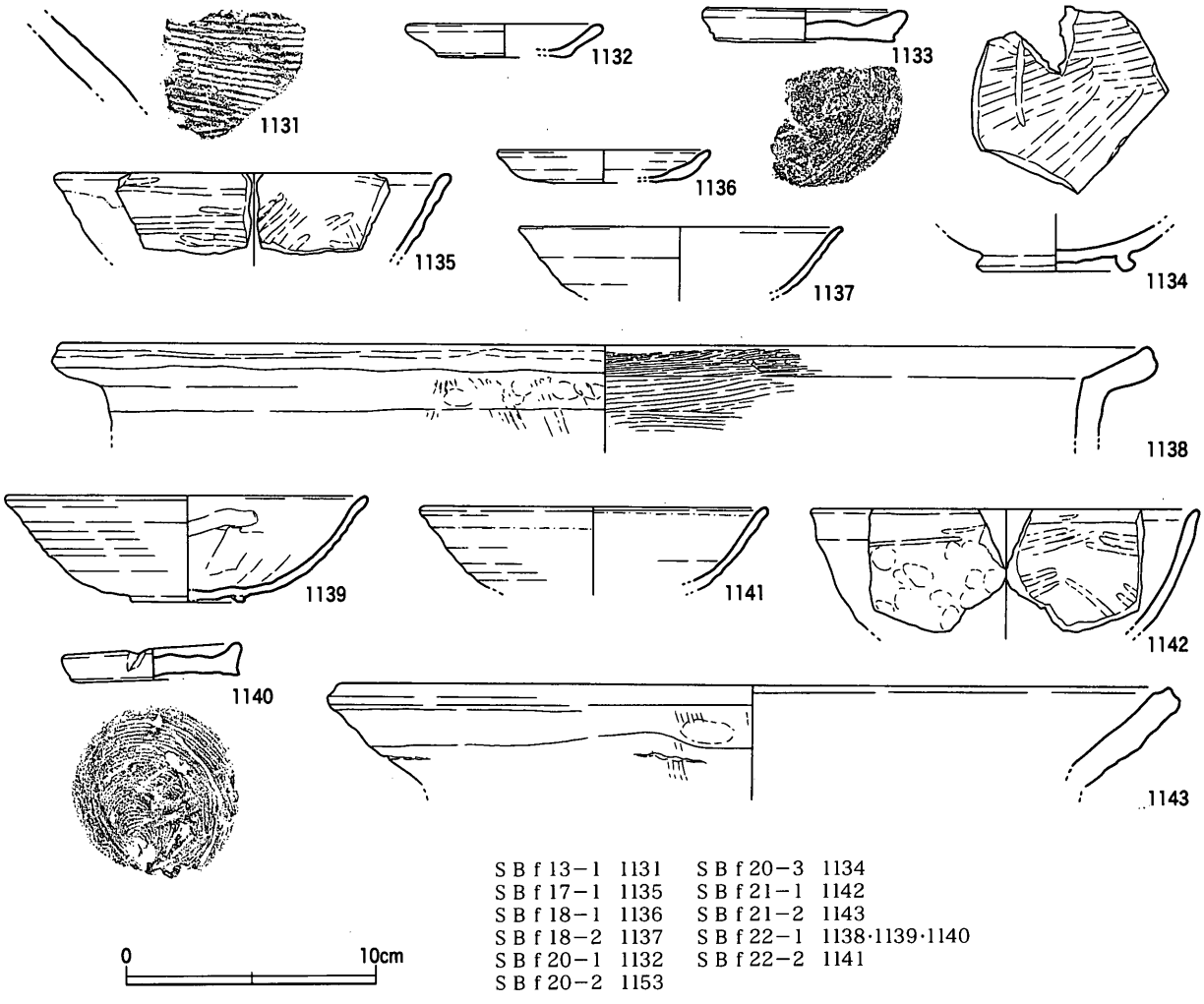


第162図　SBf23平・断面図（1/80）

ＳＢｆ21（第160・163図）

Ⅱ－23区で一部が検出された。建物の西辺と南辺が復元できたのにとどまり，北・東辺は調査区外に及ぶものと考えられる。このため全体の形状・規模は確定できないが，検出した西辺の平均柱間距離は2.18ｍを測り，小規模建物の桁行の数値に該当する。

図示可能な遺物として，黒色土器Ａ類椀（**1142**），土師器甕（**1143**）がある。**1142**は深い器体をもち，外面に横方向のヘラ磨き，内面に分割磨きが施される。**1143**は粗質の胎土をもつ甕である。これらは12世紀前半代もしくは若干遡る頃に位置付けられるものである。したがって建物も，区画１に先行する時期としておく。



SBf13−1	1131	SBf20−3	1134
SBf17−1	1135	SBf21−1	1142
SBf18−1	1136	SBf21−2	1143
SBf18−2	1137	SBf22−1	1138·1139·1140
SBf20−1	1132	SBf22−2	1141
SBf20−2	1153		

第163図　区画2掘立柱建物出土遺物（1/3）

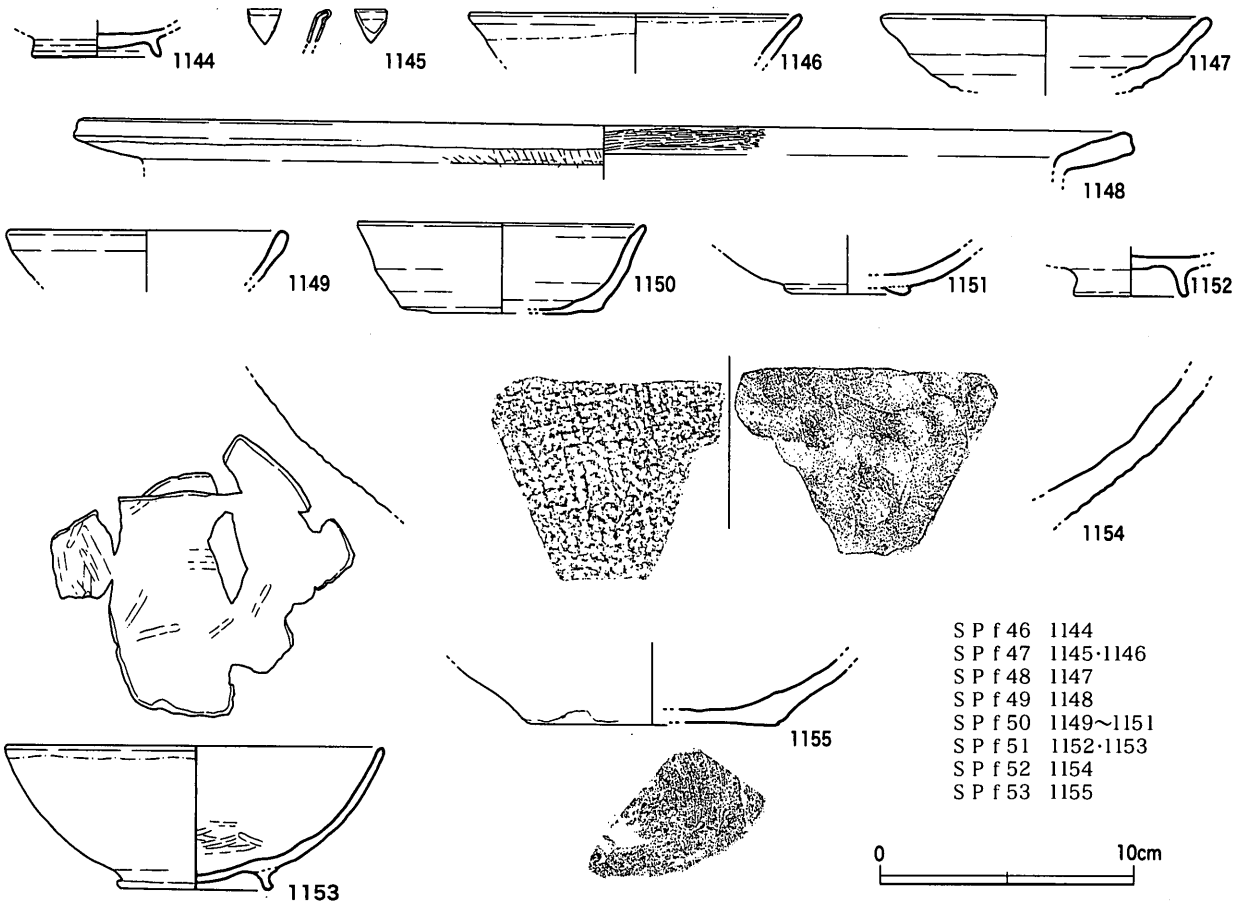
SBf22（第161・163図）

Ⅱ−23区でSBf21と重複する位置で一部が検出された。北・西・南の3辺が復元できたが，東辺については調査区外と考えられる。柱間距離も各辺2.2m前後であり，主軸方向が南北か東西かは明確にし得ない。

柱穴からは比較的多くの遺物が出土した。土師質土器小皿（**1140**）・鍋（**1138**），十瓶山窯産須恵器椀（**1139**・**1141**）などである。**1140**は糸切り底の小皿であり，口縁部には縦方向に亀裂状に接合痕が認められる。**1139**・**1141**の形態も考慮すると，これらは中世Ⅱ−3期の所産とみられる。

SBf23（第162図）

Ⅲ−1区で検出された，1×2間（梁間3.08m，桁行3.72m，床面積11.45㎡）の側柱建物である。主軸方位はW−9°−Nである。柱穴は円形プランを呈しており，柱並び・柱穴底面レベルはほぼ一定している。平均柱間距離は，桁行で1.86mを測る。遺物は出土していないが，周囲の遺構との関係から，中世前半と判断した。



第164図　区画2ピット出土遺物（1/3）

ピット出土遺物（第164図）

区画２で建物を構成しないピットからの出土遺物を図示した。**1145**は白磁碗（横田・森田分類Ｖ－４ｃ類）である。**1146・1151**は十瓶山窯産須恵器椀である。**1147・1150**は底部糸切りの土師質土器杯である。**1149・1150**は底部ヘラ切りの土師質土器杯である。**1148**は土師質土器鍋である。**1152**は土師質土器椀であり，高く「ハ」の字形に立ち上がる高台をもつ。**1153**は黒色土器Ａ類椀である。内面にはヘラ磨き調整が部分的に遺存する。**1154**は亀山焼甕である。**1155**は東播系須恵器捏鉢である。内面全体の器面が摩滅しており，横方向の擦痕が顕著にみられる。

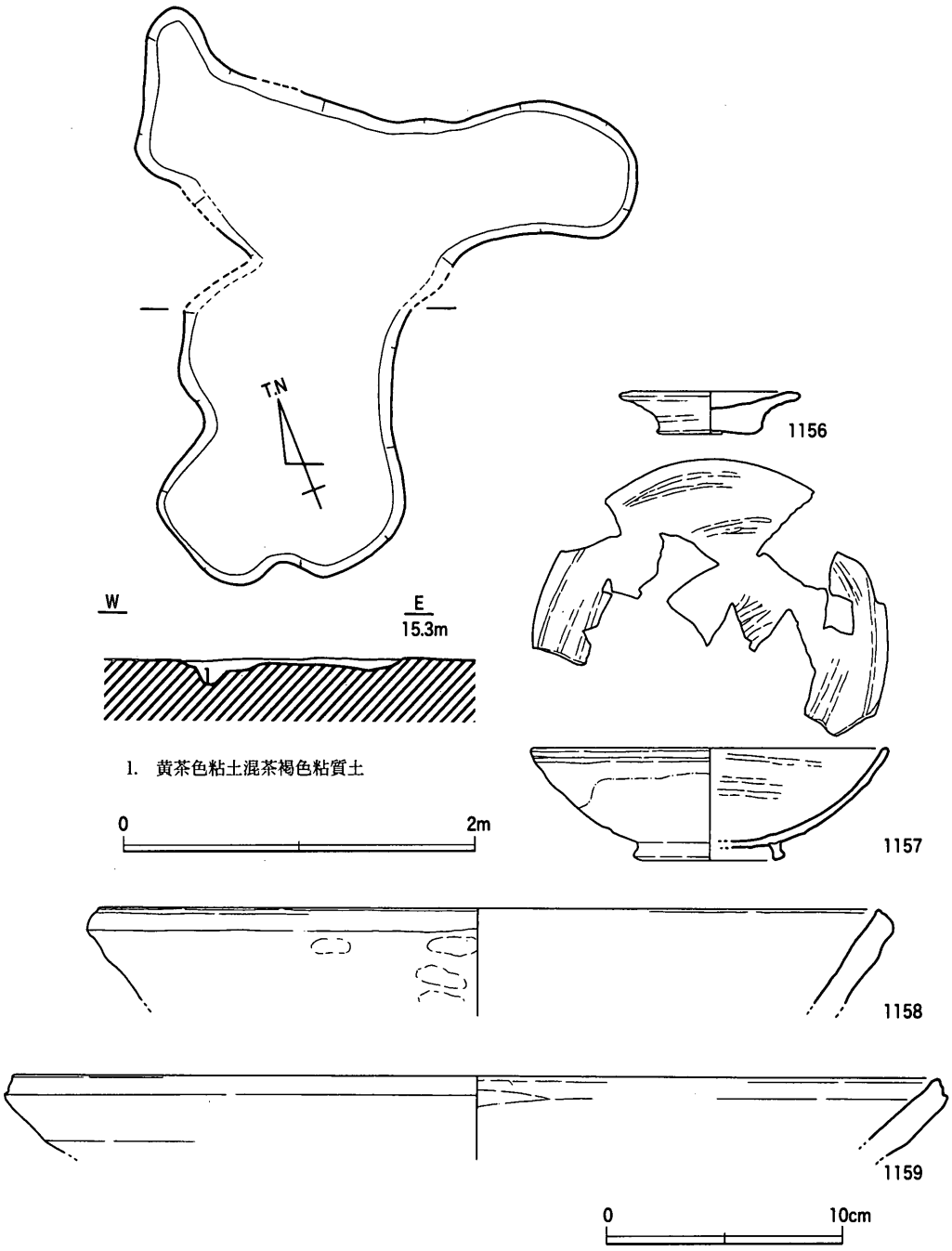
以上の遺物の時期は，**1152・1153**が12世紀代まで遡り，隣接する区画１以前に建物群が展開していたことを示唆する。その他は，区画１と同時期のものであろう。

ｃ．土坑

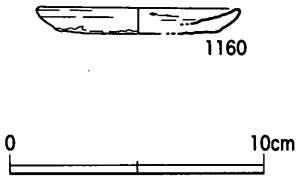
ＳＫf57（第165図）

Ⅱ－23区で検出された，不定形な平面形態と平面形態の土坑である。埋土は基盤層ブロックを含んだ茶褐色粘質土の単層である。

出土遺物には土師質土器小皿（**1156**），黒色土器Ａ類椀（**1157**），土師器甕（**1158・1159**）がある。**1156**は平高台状の底部をもつ形態である。**1157**は，やや器体が浅手であるが，見込みの平行線状磨きと体部内面の分割磨きが密に施されており，高台も比較的高い。**1158・1159**は，砂粒を



第165図　SKf57平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第166図　SKf58出土遺物（1/3）

多く含んだ粗質の胎土をもち，器壁も厚手である。これらは全体としては12世紀前半頃に位置付けてよい土器群であろう。

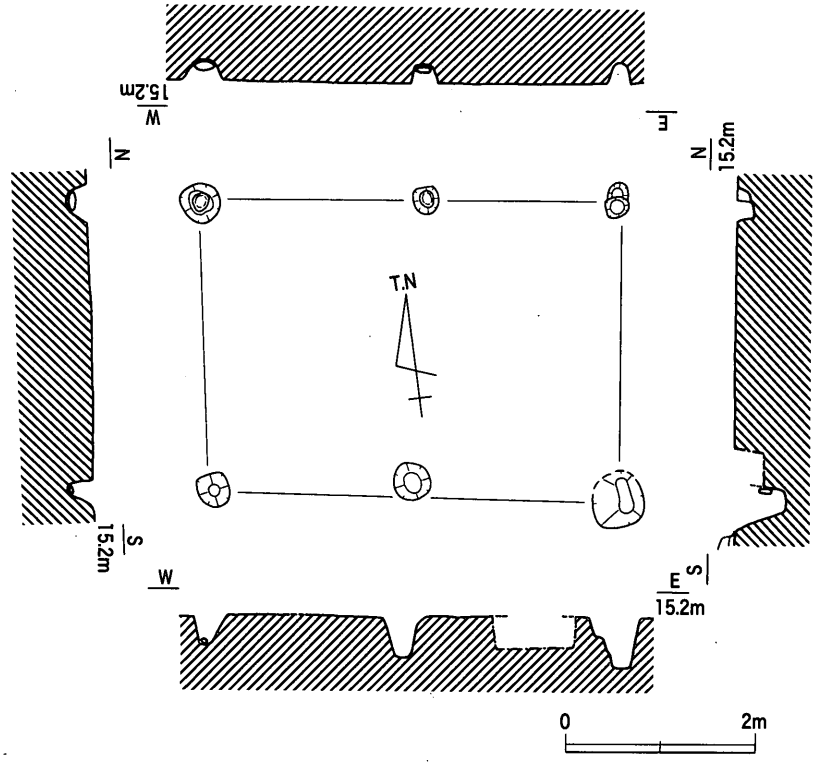
ＳＫf58（第166図・付図6）

Ⅲ－１区で検出された平面隅丸方形の土坑である。長径1.35ｍ，短径1.10ｍ，深さ0.2ｍを測り，断面逆台形を呈する。埋土は基盤層ブロックを含む淡灰色シルトの単層である。埋土の特徴から，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物はごく少量であり，土師質土器小皿（**1160**）を図示し得たのみである。時期的には区画１と併行する13世紀代の所産とみられる。

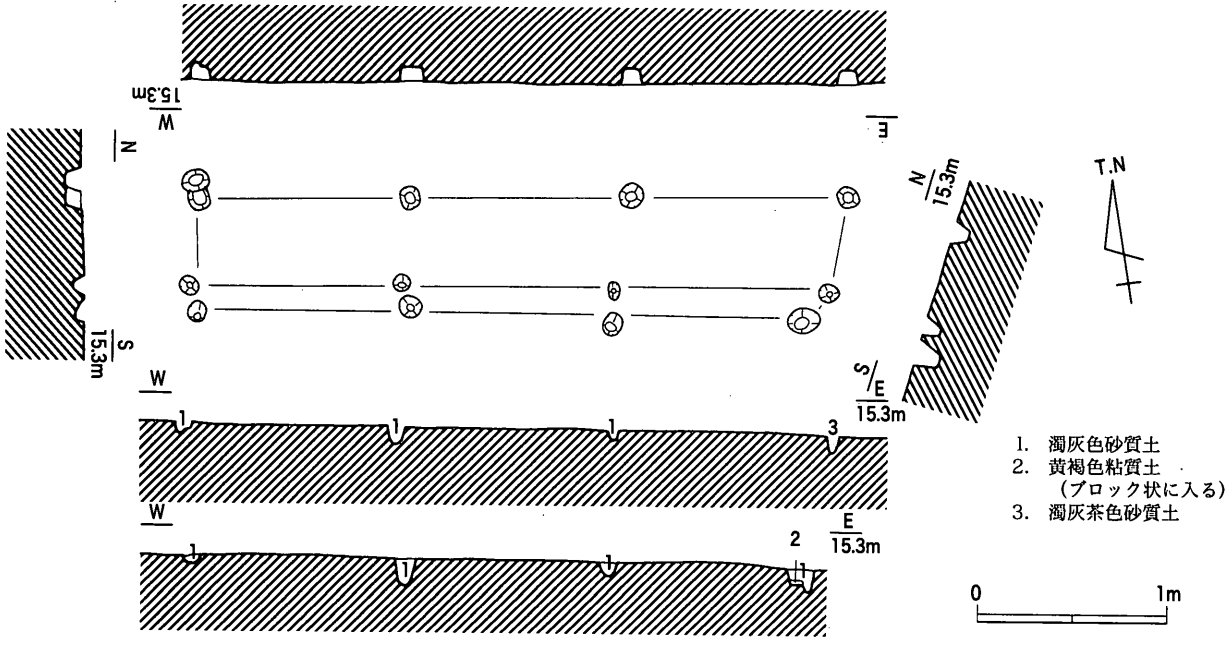
４．その他の遺構・遺物

区画１・２の周辺においても，散在的ながら中世前半の遺構を検出することができた。これらは多くが条里型地割に規制された溝や土坑であるが，建物群を形成しない単独立地の掘立柱建物の存在も認められる。



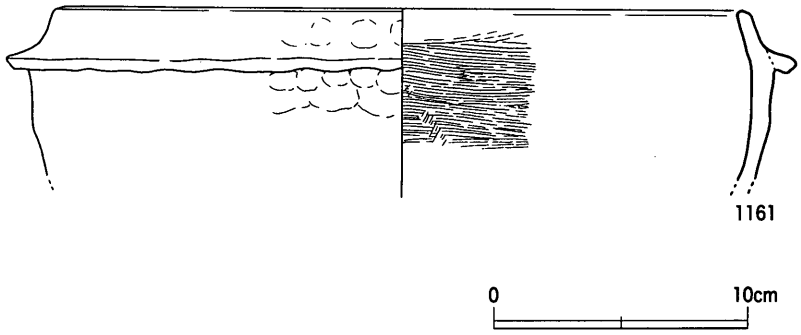
第167図　SBf24平・断面図（1/80）

ＳＢｆ24（第167図）



第168図　SBf25平・断面図（1/80）

Ⅲ－８区で検出された，１×２間（梁間3.1ｍ，桁行4.3～4.5ｍ，床面積12.64ｍ）の側柱建物である。主軸方位はＷ－８°－Ｎである。柱穴は歪な円形プランを呈しており，大きさ・底面レベルともに不揃いである。遺物は土師質土器の細片が出土しており，区画１と併行する時期の建物とみられる。

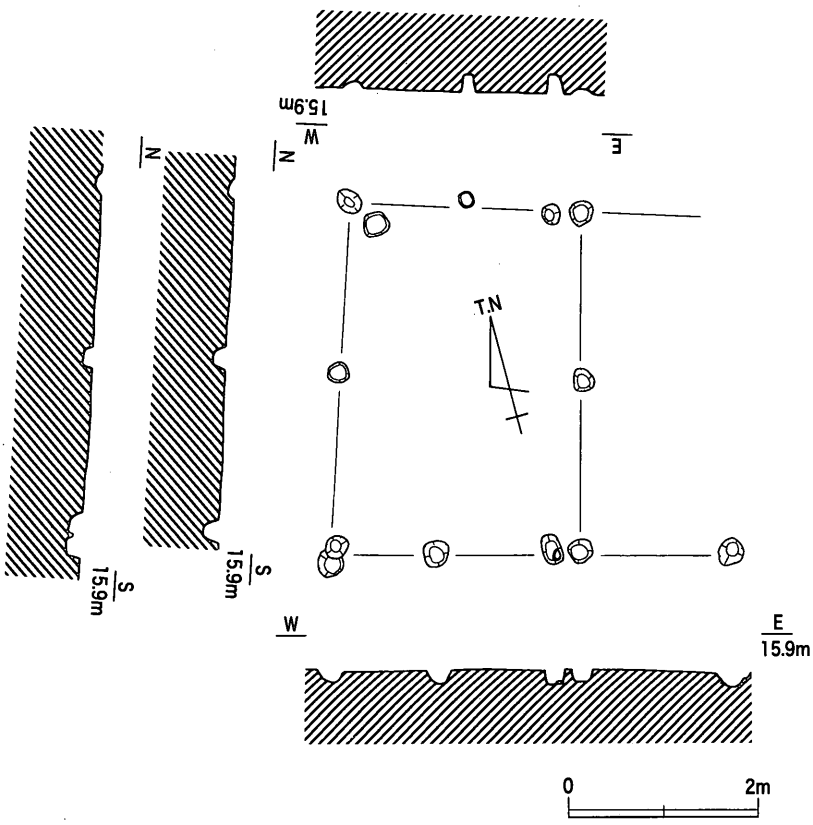


第169図　SBf25出土遺物（1/3）

ＳＢｆ25（第168・169図）

Ⅲ－１区で検出された，１×３間（梁間0.94ｍ，桁行6.7～6.9ｍ，床面積6.48㎡）の非常に細長いプランを呈する極小型の側柱建物である。南辺部で南側に0.25ｍ張り出した庇状のピット列がある。主軸方位はW－8.5°－Nである。柱穴は円形プランを呈しており，大きさや底面のレベルも一定に揃っている。桁行の平均柱間距離は，2.26ｍである。

遺物はごく少量であるが，土師質土器足釜（**1161**）が出土した。長く内傾する口縁部と水平方向に比較的長く伸びる鍔部をもつ。外面にはハケ目などの調整がみられず，その点では後出的な要素をもつが，口頸部形態は古い傾向にあるといえる。区画１よりも若干下る時期（13世紀末葉～14世紀前葉）である可能性も否定できないが，一応，区画１と同時期の遺構と捉えておく。



第170図　SBf26平・断面図（1/80）

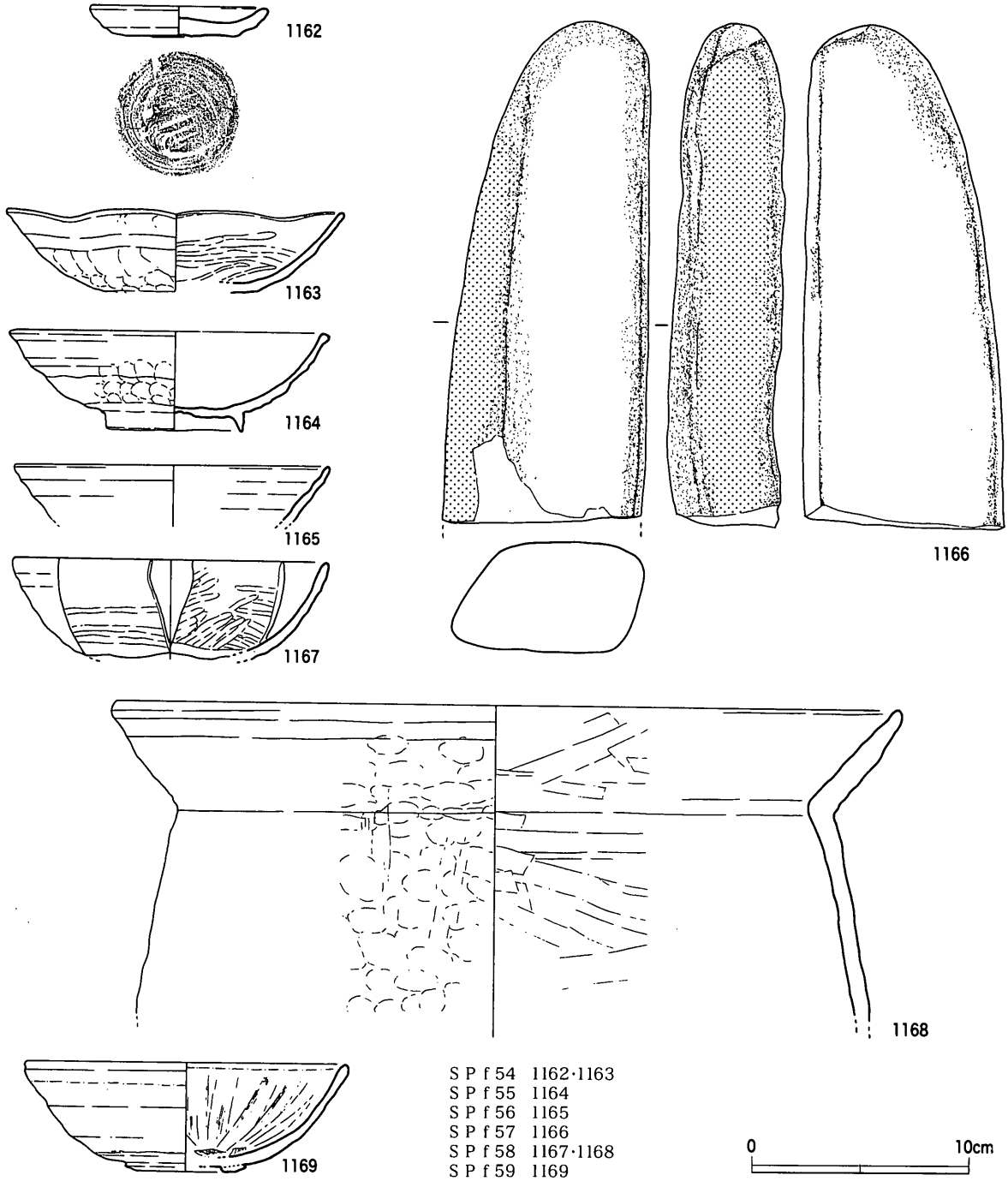
ＳＢｆ26（第170図）

Ⅱ－17区で検出された，２×３間（梁間3.6ｍ，桁行4.2ｍ，床面積15.12㎡）の側柱建物である。主軸方位はW－11°－Nである。柱穴は円形プランを呈しており，底面レベルもほぼ一定である。中央部には中間柱があり，間仕切りを示すものとみられる。

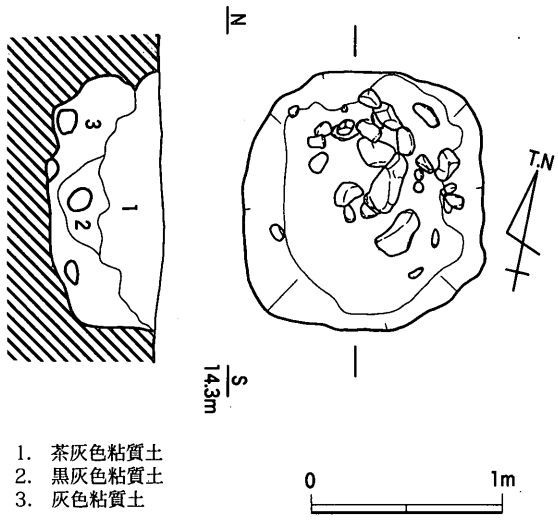
ピット出土遺物（第171図）

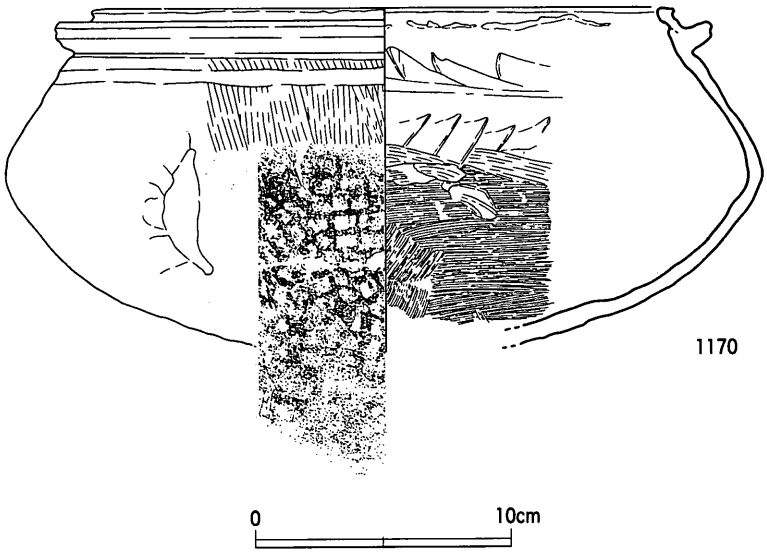
区画１・２以外のピットから出土した遺物を図示した。**1162**は底部糸切りの土師質土器小皿であり，**1163**の和泉型瓦器椀（尾上編年Ⅲ－２～３期）と共伴した。**1164**は吉備系土師質土器椀であり，ＳＰｆ55内からほぼ完形の状態で出土した。外反して丸く肥厚する口縁部形態や長く立ち上がる高台，また大振りな法量は，区画１で多く出土した吉備系の椀よりも古い様相を示している。山本編年Ⅱ期に該当するものであろう。空港跡地遺跡内では，ＳＰｉ121（空港跡地Ⅲ）より山本編年Ⅰ－３期の事例が出土しており，12～13世紀に継続的に吉備系土師質土器椀が搬入されていたことが窺える。**1166**は

摩滅痕のある石器である。Ⅱ－18区で弥生時代後期初頭の集落が検出されているため，それに関連する石器が中世ピットに混入した可能性がある。**1167**は黒色土器A類椀である。外面には回転ヘラ磨き，内面には分割磨きが施されており，西村遺跡産である。**1168**は土師器甕である。長く直線的に外反する口縁部と深手の体部をもつ。内面は横方向の板ナデによって平滑に調整されるが，外面は口縁端部以外はほとんど無調整であり，指頭圧痕が明瞭に残る。

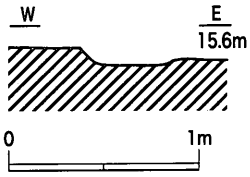


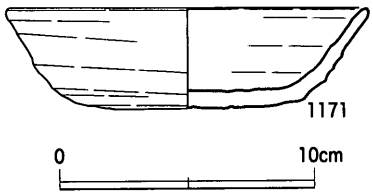
第171図　区画1・2以外のピット出土遺物（1/3）





第172図　SKf59平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）





第173図　SDf39断面図（1/40）

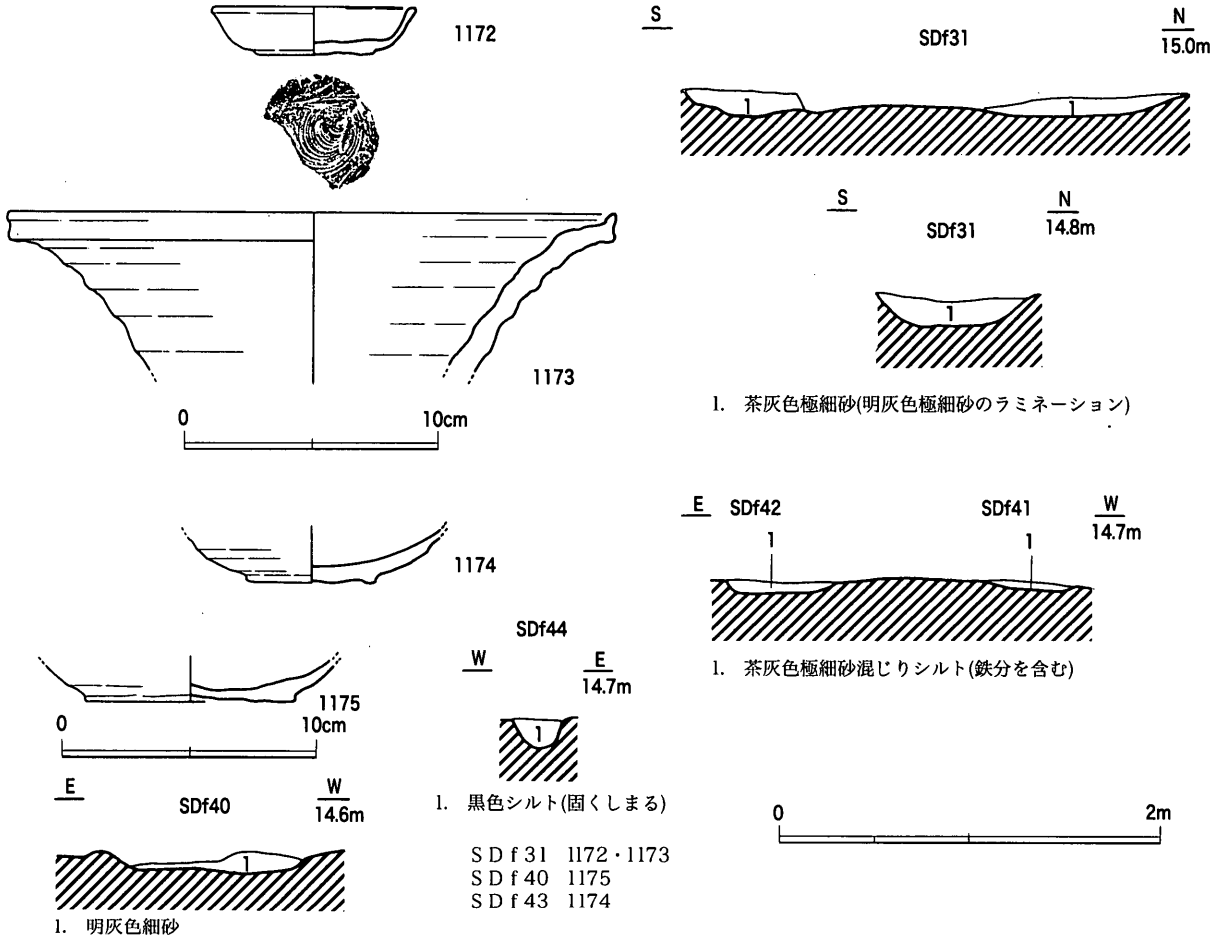
ＳＫf59（第172図）

Ⅲ－14区で検出された。平面隅丸方形を呈しており，長径1.48ｍ，短径1.26ｍ，深さ0.58ｍを測る。土坑壁面は垂直に掘り込まれており，北側壁面では若干オーバーハング気味になる。埋土は３層に分けられ，３層の上面と北側壁面のオーバーハングの箇所が一致するため，３層堆積時に壁面が崩落したものと考えられる。なお２・３層には，５～30㎝大の礫が集積していた。

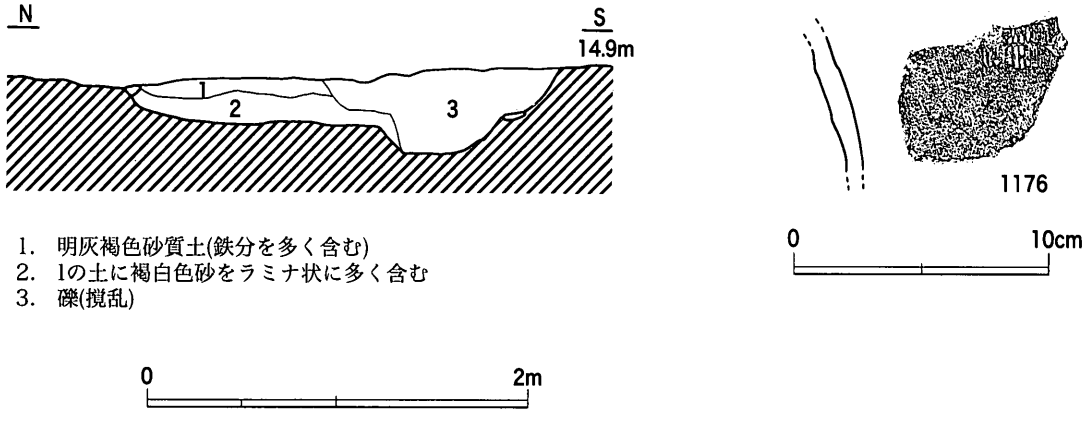
出土遺物には，土師質土器足釜（**1170**）がある。口縁部と鍔部の長さが等しく，両端面に横ナデ調整によって平坦面もしくは弱い凹面が形成されている。鍔部下面から直下の体部外面には，縦ハケ調整が連続的に施されており，また鍔部付近の内面には口縁部を接合した痕跡が認められる。このことから，鍔部は体部上端を外反させて作出されたものと思われる。底部から体部下半の外面には，格子叩き目が施されており，内面にはこれに対応する当て具痕が横ハケ調整によって消去されている。口鍔部の形態や叩き目の範囲の広さなどの要素から，**1170**は楠井Ⅰ期（13世紀代）の所産とみて大過なかろう。

ＳＤf39（第173図）

Ⅱ－17区で検出された。条里型地割の坪界線付近を南北方向（Ｎ－10°－Ｅ）に延びており，次回以降の報告の対象となるⅡ－20区（Ｄ地区）を含めた総検出長は，41.7ｍとなる。断面形態は浅い皿形ないし逆台形を呈しており，幅0.48ｍ，深さ0.1ｍを測る。遺物は少量であるが，土師質土器杯（**1171**）が出土した。口径14.1㎝を計り，底部と体部の境は緩



第174図　SDf31・40・41・42・43・44断面図（1/40），出土遺物（1/3）



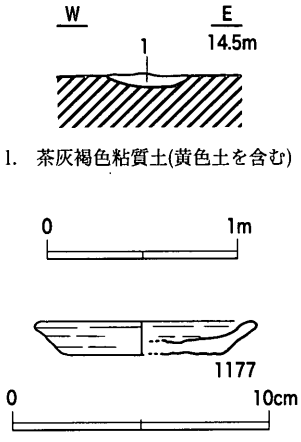
第175図　SDf45断面図（1/40），出土遺物（1/3）

やかに内弯する。ＳＤf32出土杯（**1117・1118**）に近似しており，区画１よりも明瞭に先行する中世Ⅱ－１期の所産であることが考えられる。

ＳＤf40～43（第174図）

Ⅲ－２区で検出された小溝群である。位置的には区画１の北西部にあたるが，溝の方向は条里型地割

とは一致しておらず，緩やかなカーブを描いて延びている。遺物は，ＳＤf40・43より十瓶山窯産須恵器椀（**1174**），土師質土器杯（**1175**）が出土している。これらの遺物は，区画１の年代と大きくは矛盾しない。ただし，層位的位置付けが明確なＳＤf41・42（Ⅲ－２区第２遺構面上）からは時期が明確な遺物は出土していない。また，区画１と第２遺構面遺構との層位的関係も明確にし得なかったため，区画１との年代的整合性についても保留とせざるを得ない。



第176図 SDf46断面図(1/40)，出土遺物(1/3)

ＳＤf45（第175図）

Ⅲ－38区で検出された溝である。幅2.3ｍ，深さ0.38ｍを測る。主軸方向はＷ－８°－Ｎであり，周囲の条里型地割とは異なる。遺物は常滑焼甕（**1176**）が出土している。一応，中世前半の遺構としておくが，中世後半のＳＤf84と繋がる可能性も否定できない。

ＳＤf46（第176図）

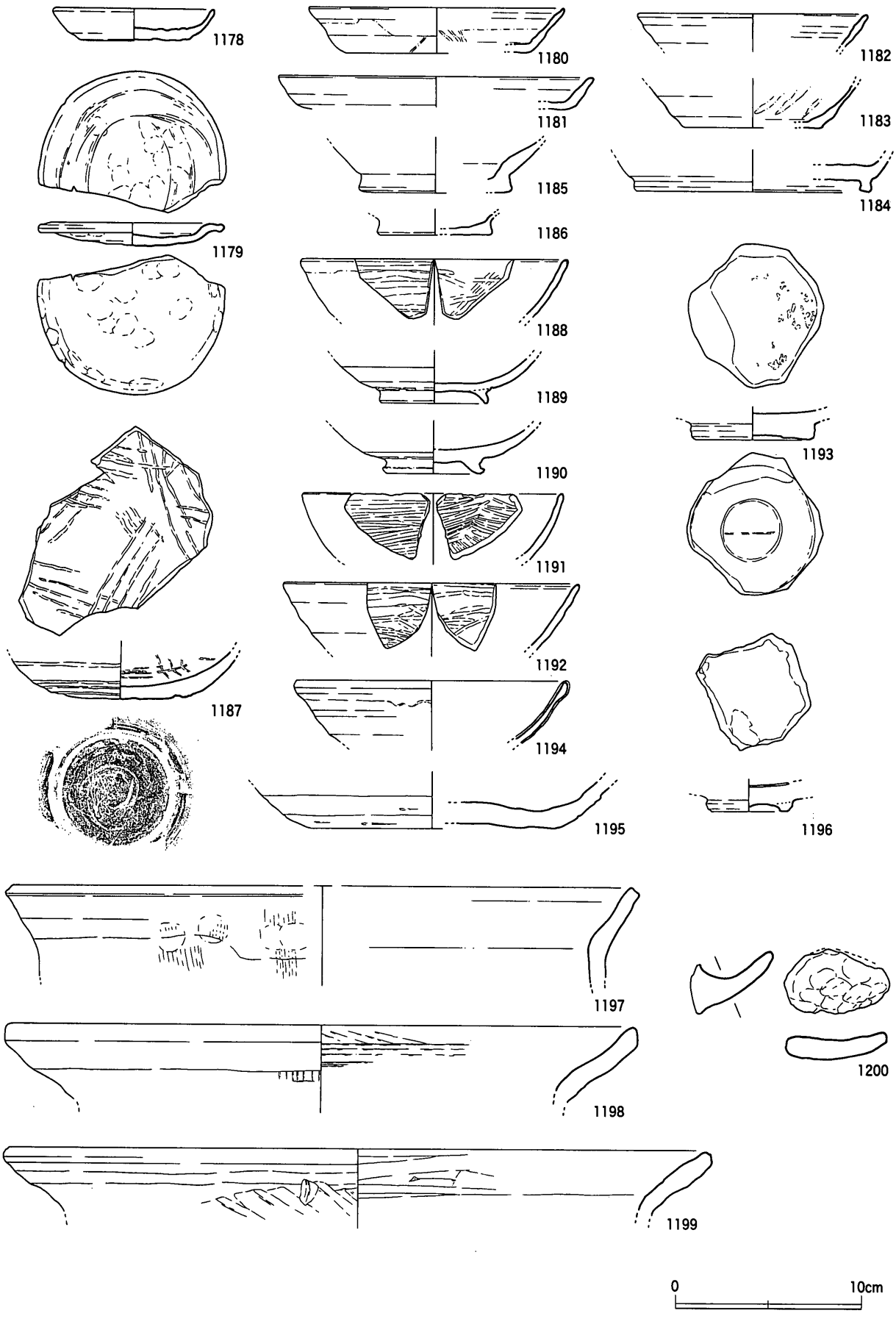
Ⅲ－38区で検出された小溝である。主軸方位はＮ－10°－Ｅであり，東側には同規模のＳＤf47が併走する。出土した土師質土器小皿（**1177**）から，区画１と平行する時期が考えられる。

Ⅱ－１区中世包含層（第177～179図）

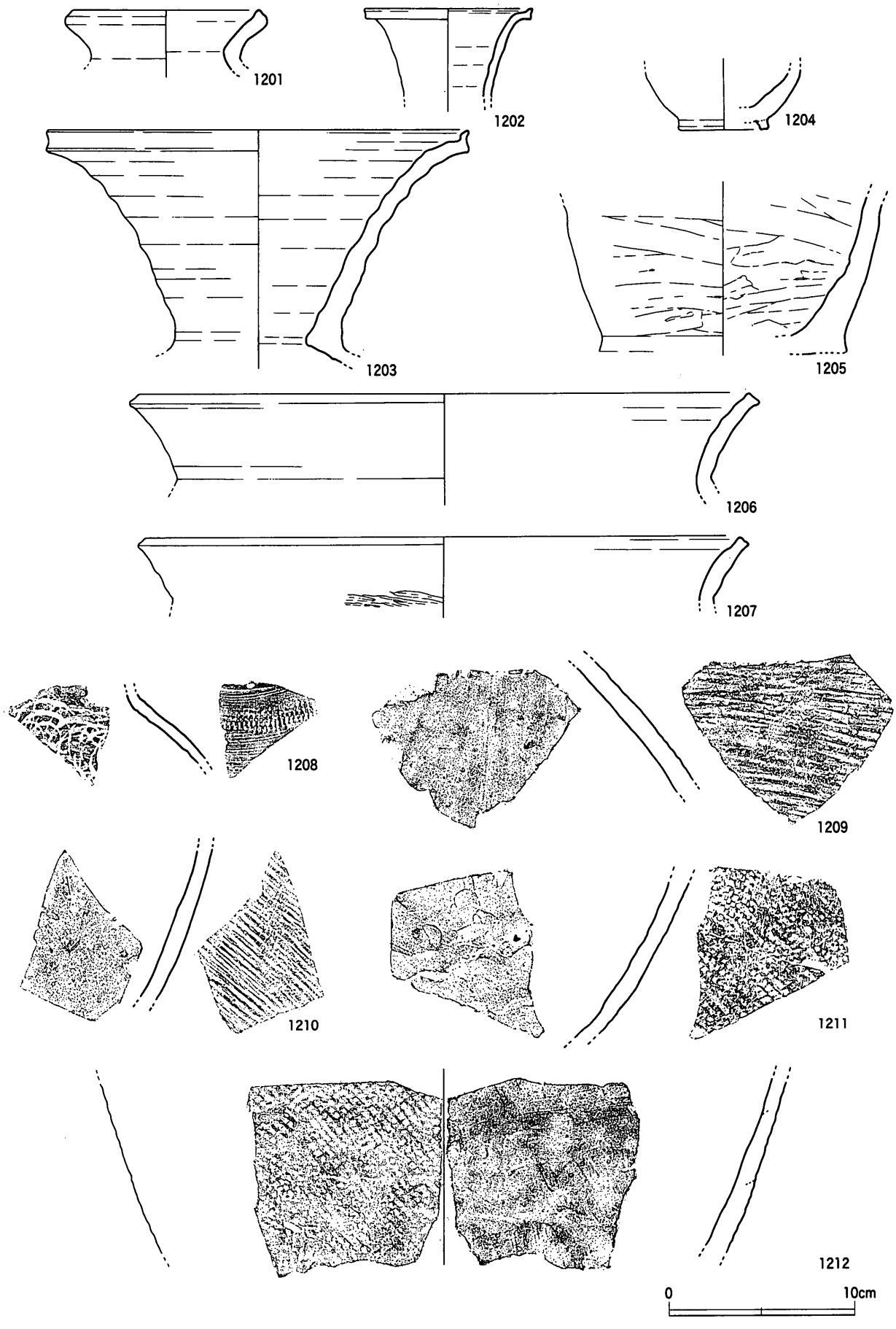
Ⅱ－１区の茶灰色シルト層（第３章第１節参照）から，古代後半～中世前半の土器が出土した。土師質土器小皿（**1178**）・椀（**1185**），土師器甕（**1197～1200**）・竈（**1213**），須恵器皿（**1180・1181**）・杯（**1182～1185**）・椀（**1186**）・捏鉢（**1195**）・壺（**1201～1205**）・甕（**1206～1212**），黒色土器椀（**1187～1191**），京都系土師器皿（**1179**），和泉型瓦器椀（**1192**），白磁碗（**1194**），緑釉陶器椀（**1193**），肥前系陶器碗（**1196**）などがある。

1179はいわゆる「て」の字状口縁の皿であり，胎土はきめ細かで黄白色に発色する。底部外面には指頭圧痕が顕著であり，見込みには時計回りの強いナデ調整が施される。平安京Ⅳ期新（11世紀後葉）の所産とみられる。**1187～1190**は，西村遺跡産とみられる黒色土器Ａ類椀である。**1187**は，底部ヘラ切り（右方向）後に底部外面に螺旋状に沈線を施し，高台部の接合を行っている。体部～底部外面には回転ヘラ磨き調整，体部下半～底部の内面には６分割のヘラ磨きが認められる。**1189・1190**は，高台貼付後に体部下半から底部外縁にかけて回転ヘラ削り調整を施している。**1191**は黒色土器Ｂ類椀である。外面には横方向のヘラ磨きが密に施されており，内面は分割磨きが行われている。外面の磨きは回転磨きではないため，西村遺跡産の黒色土器ではないと考えられる。**1192**は，尾上編年Ⅱ－１期に該当すると思われる。**1193**は，削り出しの蛇の目高台をもつ京都産緑釉陶器である。高台内側にはヘラ描きの刻線「－」がみられる。**1197～1199**は粗質の胎土を用いており，13世紀以降に普遍化する鍋とは明瞭に異なる。

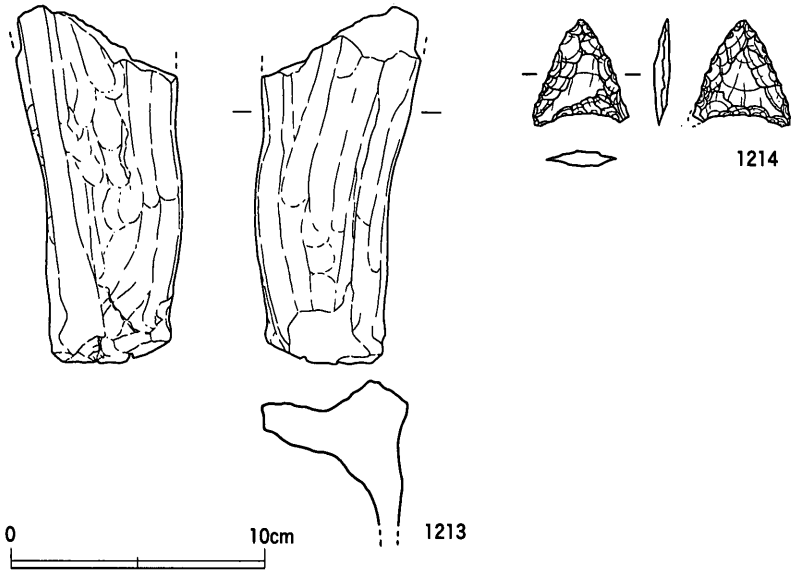
1202は十瓶山窯産とみられる長頸壺であり，10世紀前半頃の所産である。**1203**はＳＤ03－１で出土した長頸瓶（**1173**）と同一個体の可能性がある。**1205**は十瓶山窯産の広口瓶の体部下半である。外面には板ナデ調整が施され，叩き目の痕跡は消去されている。**1206・1207**は十瓶山窯産の甕で



第177図　Ⅱ−1区中世包含層出土遺物（1）（1/3）



第178図　Ⅱ−1区中世包含層出土遺物（2）（1/3）



第179図　Ⅱ－1区中世包含層出土遺物（3）（1/3，1214は2/3）

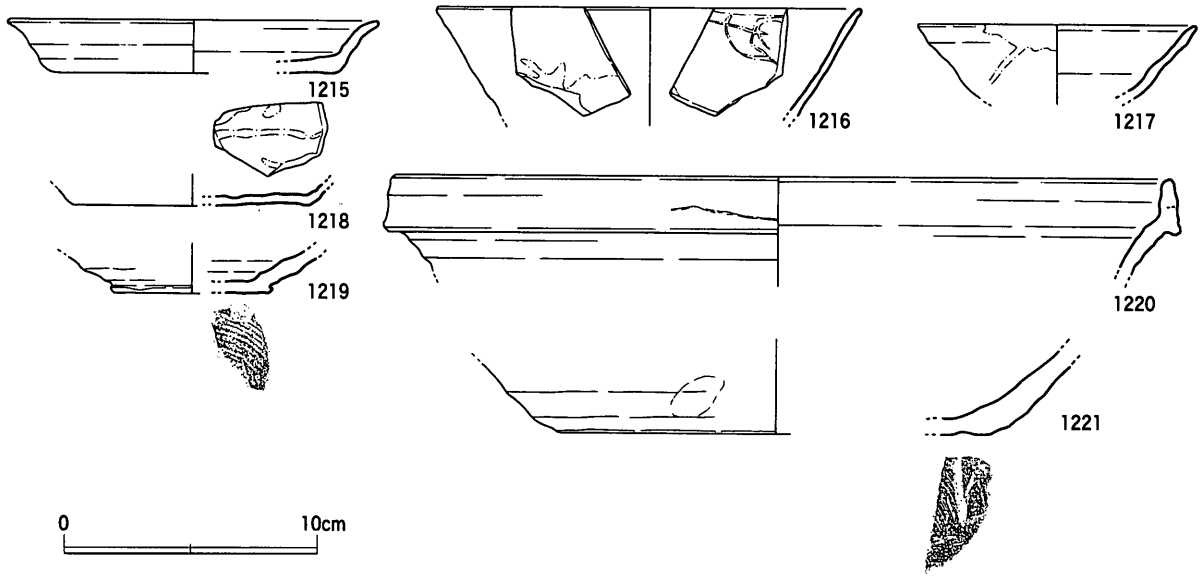
あり，口縁端部が若干横方向にツマミ出されている。西村1号窯跡に類例をみることができ，12世紀前半の所産とみられる。**1208**は古代前半の小型甕である。**1209**～**1212**は十瓶山窯産甕である。

以上の遺物は，7～10世紀のものも少量含まれるが，主体となるのは11世紀後葉～12世紀前半であるといえよう。やや隔たった位置関係にあるが，区画2の居住者を廃棄主体に擬することができるのではなかろうか。

Ⅲ－14・44区包含層（第180図）

第1遺構面を構成する包含層ならびに遺構検出時の主要な遺物を図示した。須恵器皿（**1215**）・杯（**1216**～**1218**），東播系須恵器椀（**1219**）・捏鉢（**1220**・**1221**）がある。

1215～**1218**は，9世紀後葉～10世紀代の十瓶山窯産須恵器である。杯は器壁が薄く火襷が認められるのが特徴である。**1219**は明瞭な平高台をもつことから，山仲分類のA1類もしくは森田分類のⅠ－1期であり，11世紀後葉に位置付けられる。**1220**は山仲分類D1類であり，13世紀末葉～14世紀前半に位置付けられる。



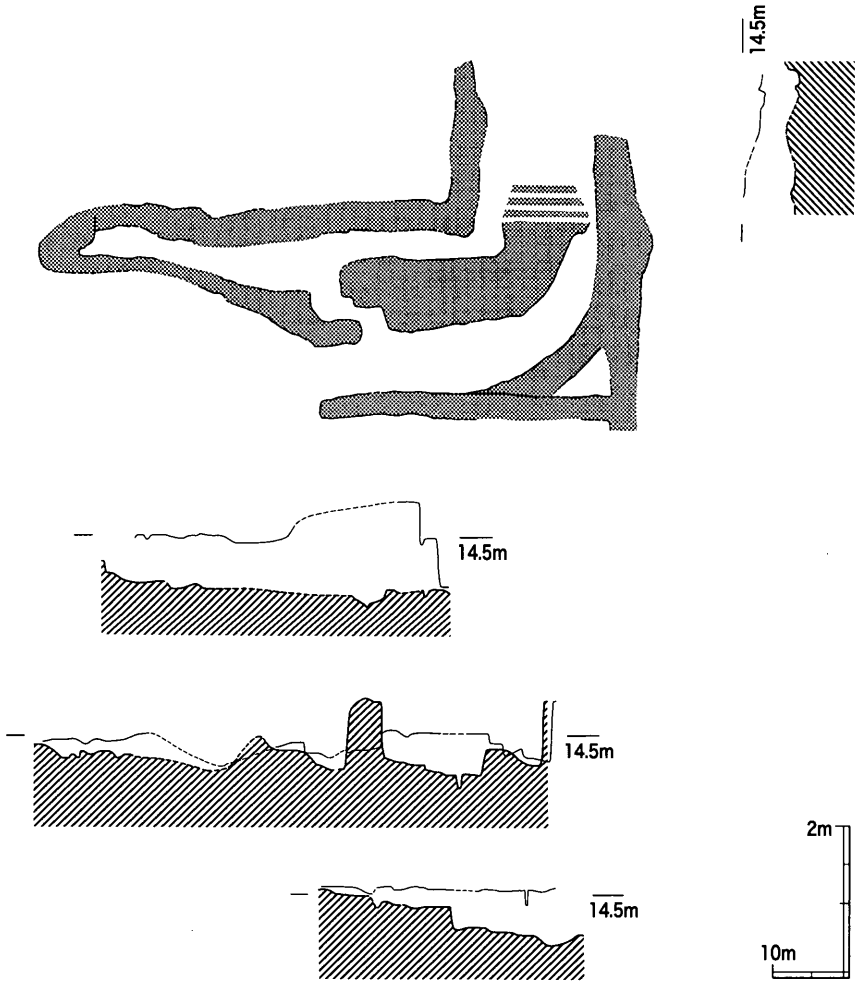
第180図　Ⅲ－14・44区包含層出土遺物（1/3）

第４節　中世後半の遺構・遺物

１．概要

当該期の遺構は，Ｆ区中央部を中心に分布する。発掘調査時の調査区名で表記すると，Ⅱ－１・24・25区，Ⅲ－１・２・７区が該当する。これらは条里型地割に一致した方向・位置関係の区画溝を伴っており，区画３～６に大別される。さらにこれらは小溝や柵列によって細分されており，その各々が独立した単位の屋敷地を形成していたものと考えられるため，各単位をアルファベットで表記した。「区画４－ａ」とは，区画４における最小の単位（小区画ａ）を示す。

各区画の内容は以下に報告することとし，ここでは区画相互の位置関係や存続時期について簡単に触れておく。区画４～６は，短辺20ｍ前後の屋敷地が複数集合して形成されており，区画４と６の間に幅25ｍ程度の空閑地が存在するものの，区画３の南辺と東辺に沿って帯状に配列されていることが窺える。復元された建物の重複状況やピットの密集度からみて，区画４・６が比較的長期間存続していたことが推測でき，これは出土した楠井産擂鉢や陶磁器からみても十分首肯できる。具体的には13世紀末葉～14世紀前葉を上限とし，16世紀前葉～中葉を下限としていると考えられる。これに対して区画



第181図　区画3概略図（平面（1/1,000，断面垂直方向1/100）

４・６の間に位置する区画５は，建物やピットの密集度が散漫であり，長期間の存続は考えにくい検出状況である。出土遺物からも区画４・６の存続期間の後半に区画５が出現したことが推測できる。

区画３は三重の溝に囲繞されており，他の区画よりも大がかりな区画施設をもつといえる。最後まで継続する区画溝には南辺中央に喰い違い構造の陸橋部が伴っており，区画４～６とは異質な大規模な区画施設として機能していたと考えられる。

この他に注目されるものとして，鋳造関連遺物の出土がある。区画４で散在的に出土しており，区画６でも少量確認できる。鉄鍋鋳型があり，日常品の小規模な鋳造作業が限られた一時期に行われていたと考えられる。また，区画３・６南東部の区画溝から呪符木簡が出土している。

なお，出土遺物の編年的位置付けについては，今回の整理作業を通じて他遺跡との比較を行いながら試みたが，中世前半のような良好な成果を得ることができなかった。これは，一括資料ないしそれに準ずる資料が少ないこと，また一括資料が存在しても皿を主体とした単純な組成であり，皿の系統把握が困難なこともあり，相対的な先後関係が確定できなかったことによる。したがって以下では，かつて生産遺跡である国分寺楠井遺跡で提示した楠井産擂鉢・足釜・鍋を主体とした編年案と，搬入品の編年観とを併用して検討した結果の仮の案を提示しておく。なお，当該期の編年に向けての見通しは，第５章第１節を参照されたい。

２．区画３

ａ．範囲と規模

ＳＤf48，ＳＤf49・50，ＳＤf51・52の３条の大溝によって囲繞された区画である。区画の範囲は，内側のＳＤf48で東西46ｍ，南北17ｍ以上である。最も外側のＳＤf51・52によって区画された範囲は，近世以降の溝との重複もあって明確にはできない。また区画の北半部についても，高松空港のエプロン部分によって大きく攪乱・破壊されていたことが予備調査によって確認されており，本調査の対象外とされ明確にできない。しかし明治21年の地籍図によれば，区画３付近の地割は坪界線とは整合しない東西84ｍ，南北86ｍ程度の異質な方形プランを呈している。この方形プランの南辺・東辺とＳＤf51・52の位置は概ね一致する。このことと，以下に報告する溝の形態・規模などから，区画３は方形館の南半部にあたる可能性が指摘できる。

区画溝は重複状況や出土遺物の年代観から，全てが同時併存とは考えられず，ＳＤf48＋ＳＤf49・50＋ＳＤf51（13世紀末葉～15世紀）→ＳＤf49・50＋ＳＤf52（16世紀初頭～中葉）という変遷が想定できる。なお，区画内では遺構が全く検出されていないが，これは近世以降とみられる面的な削平（第１節参照）と空港の攪乱の結果であると考えられる。

ｂ．区画施設

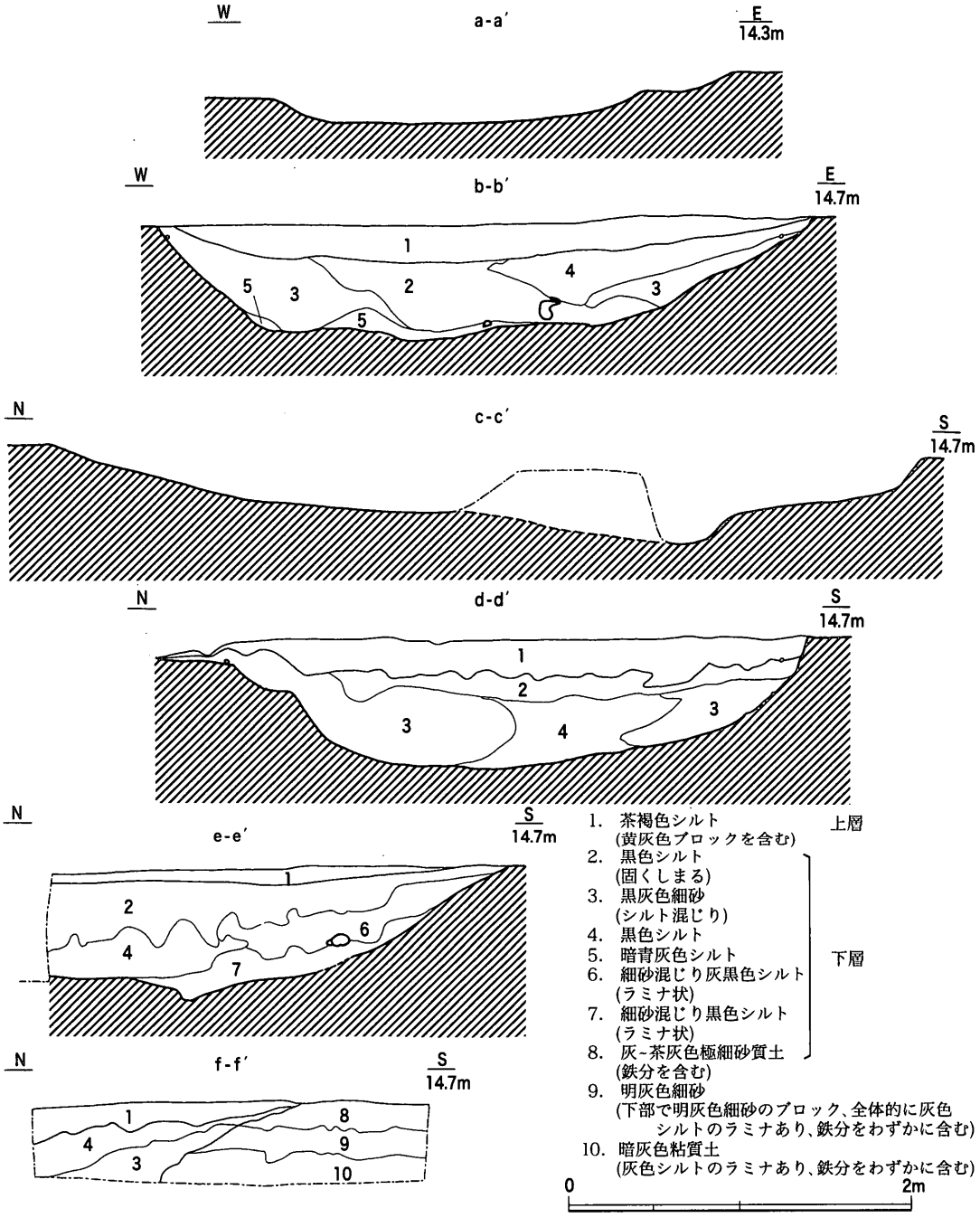
ＳＤf48（第182～188図）

Ｎ－10°－Ｅの方向をもち，条里型地割とほぼ一致する。平面Ｌ字形に走向しており，南辺長49.3ｍ，東辺長23.0ｍ以上を測る。南東隅で中世前半のＳＤf16を切り込んでおり，東辺部はＳＤf16とほ

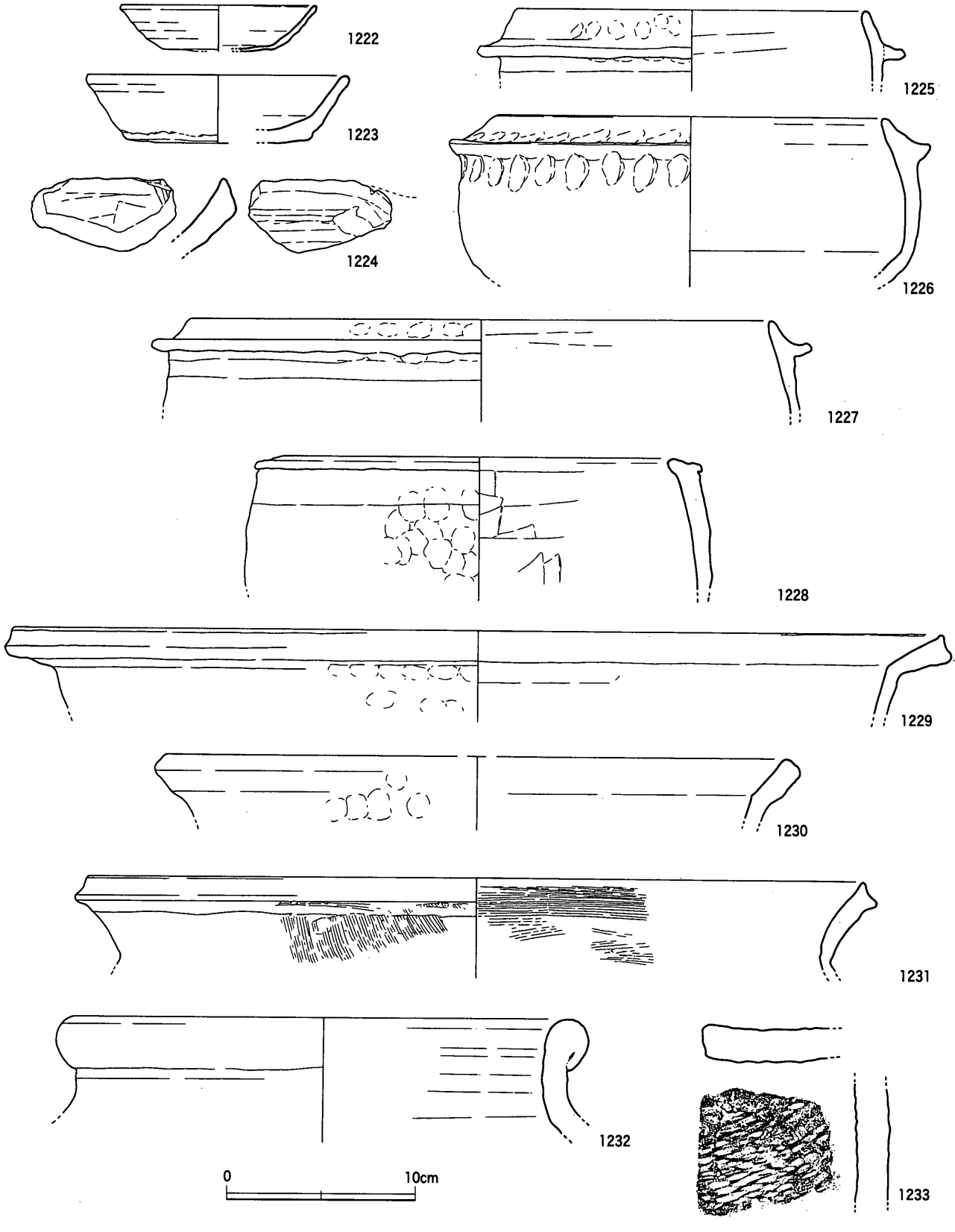
ぼ完全に一致した位置関係にある。また南辺西端部は，埋没後にＳＤf50西辺によって切り込まれている。

断面形態は，やや浅い逆台形を呈しており，底面は平坦でレベルが13.7～13.9ｍとほぼ一定して連続する。遺存状況が良好なｂ－ｂ′・ｄ－ｄ′断面では，幅3.77ｍ，深さ0.67～0.74ｍを測る。壁面の立ち上がりは，区画内側すなわち東辺では西肩，南辺では北肩の方が急であるが，南辺東部で溝幅が広がる箇所（ｃ－ｃ′断面付近）ではかなり緩やかな落ちとなっている。

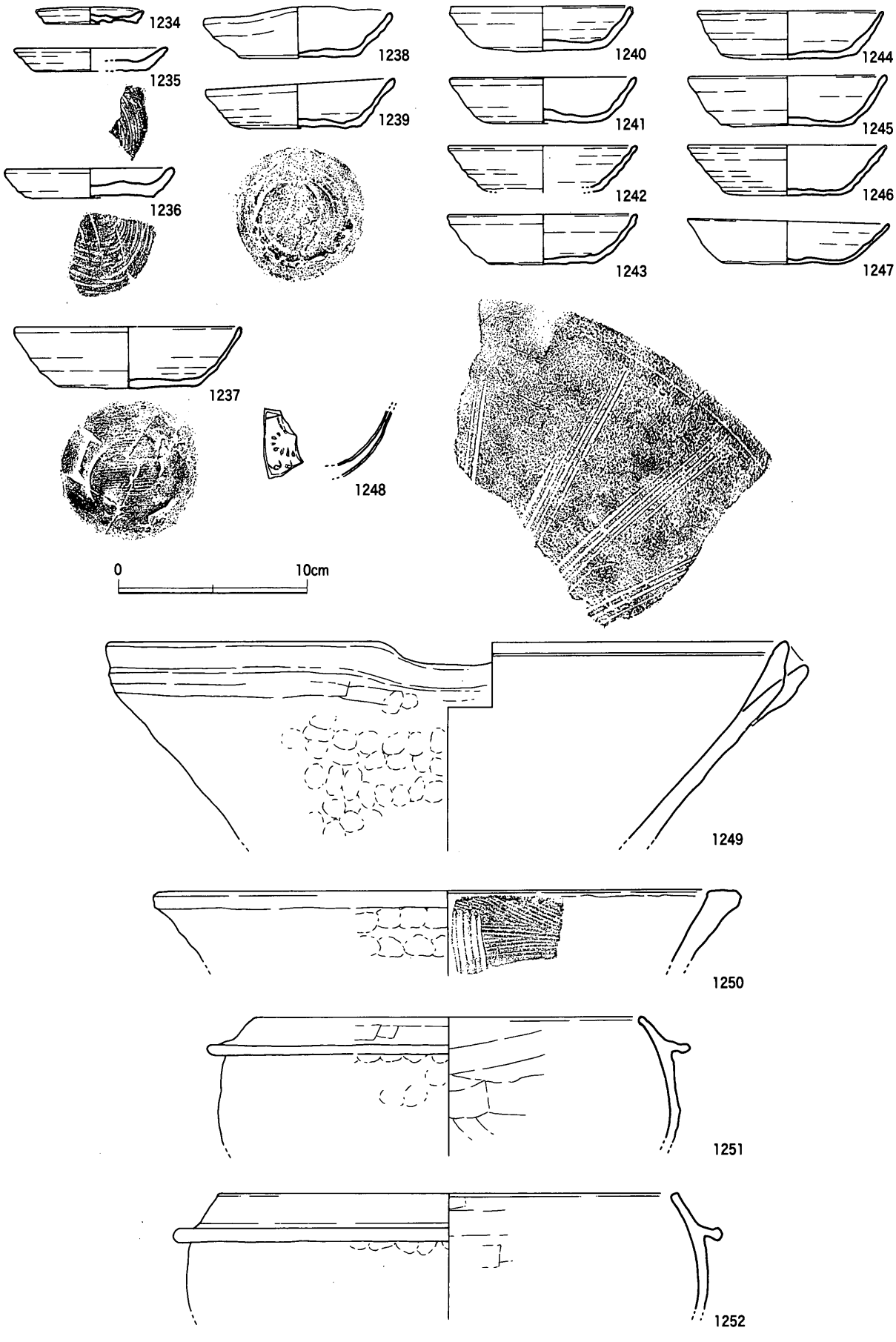
埋土は２層に大別できる。上層は基盤層のブロックを多量に含んであり，人為的な埋め戻し・整地が行われたことを示唆している。下層にも基盤層ブロックを含む層（３層）が部分的に認められるが，細砂がラミナ状に堆積する層（６・７層）もあることから，下層は一定度の緩い流水状況と滞水状況を繰



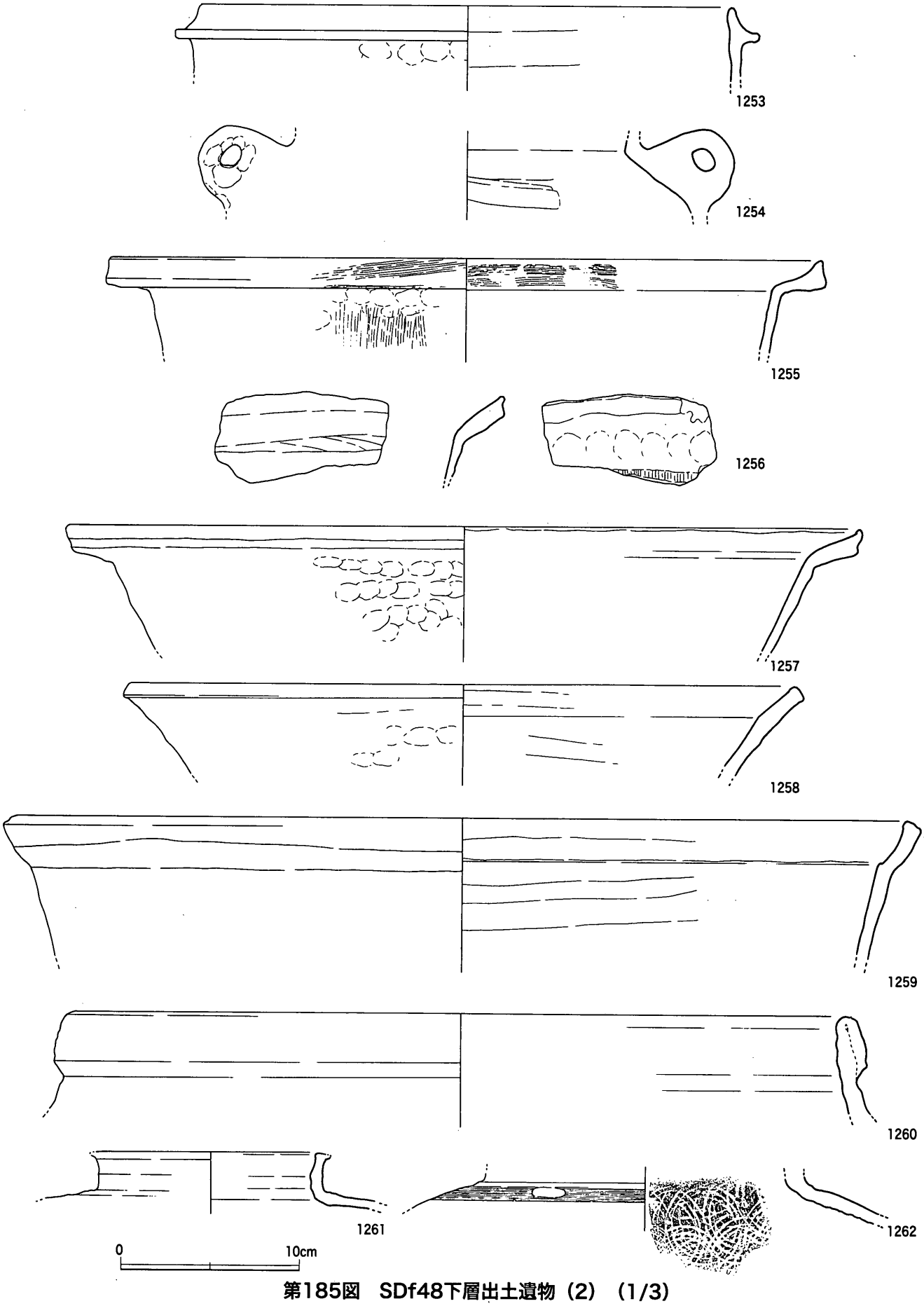
第182図　SDf48断面図（1/40）



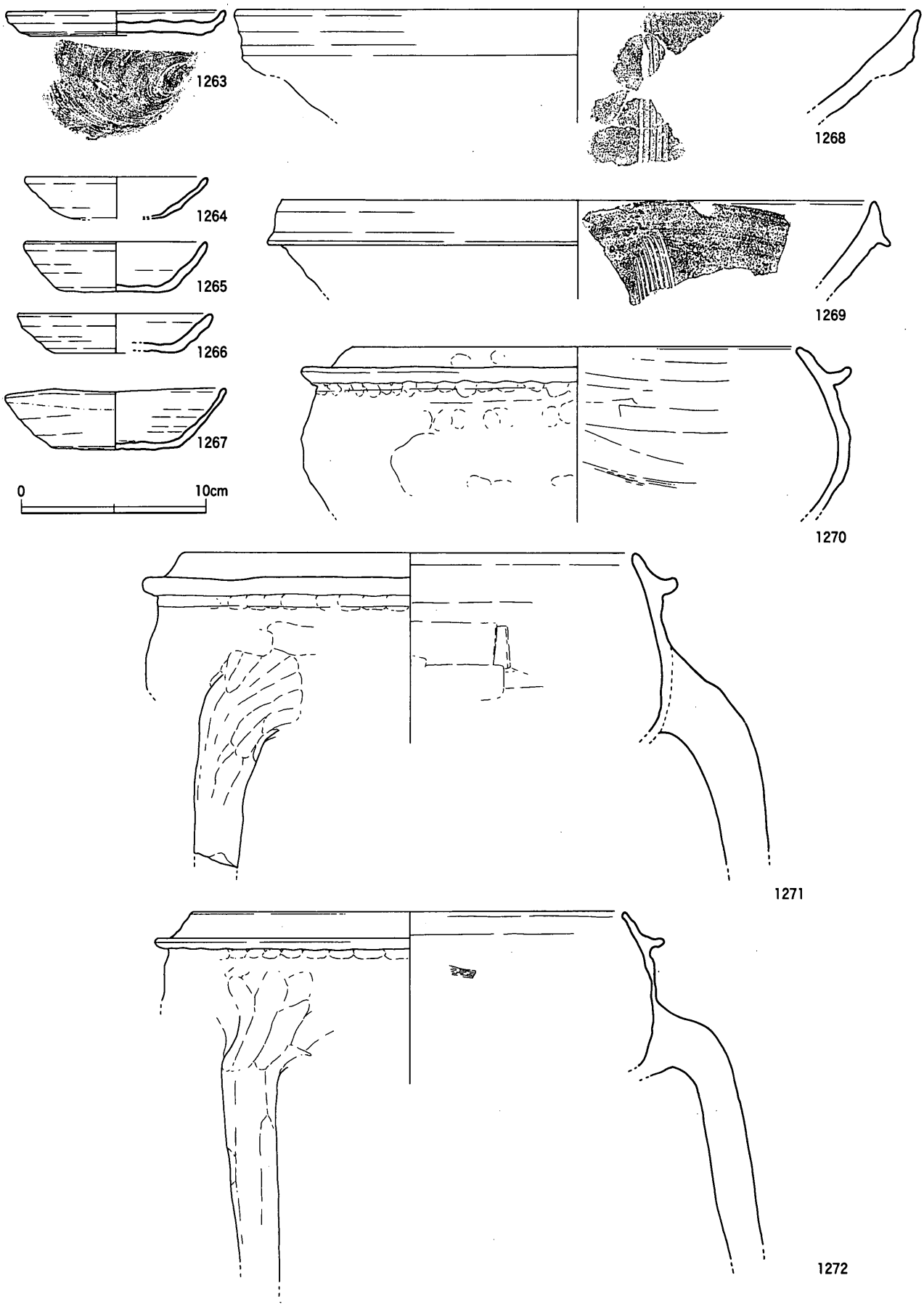
第183図　SDf48上層出土遺物（1/3）



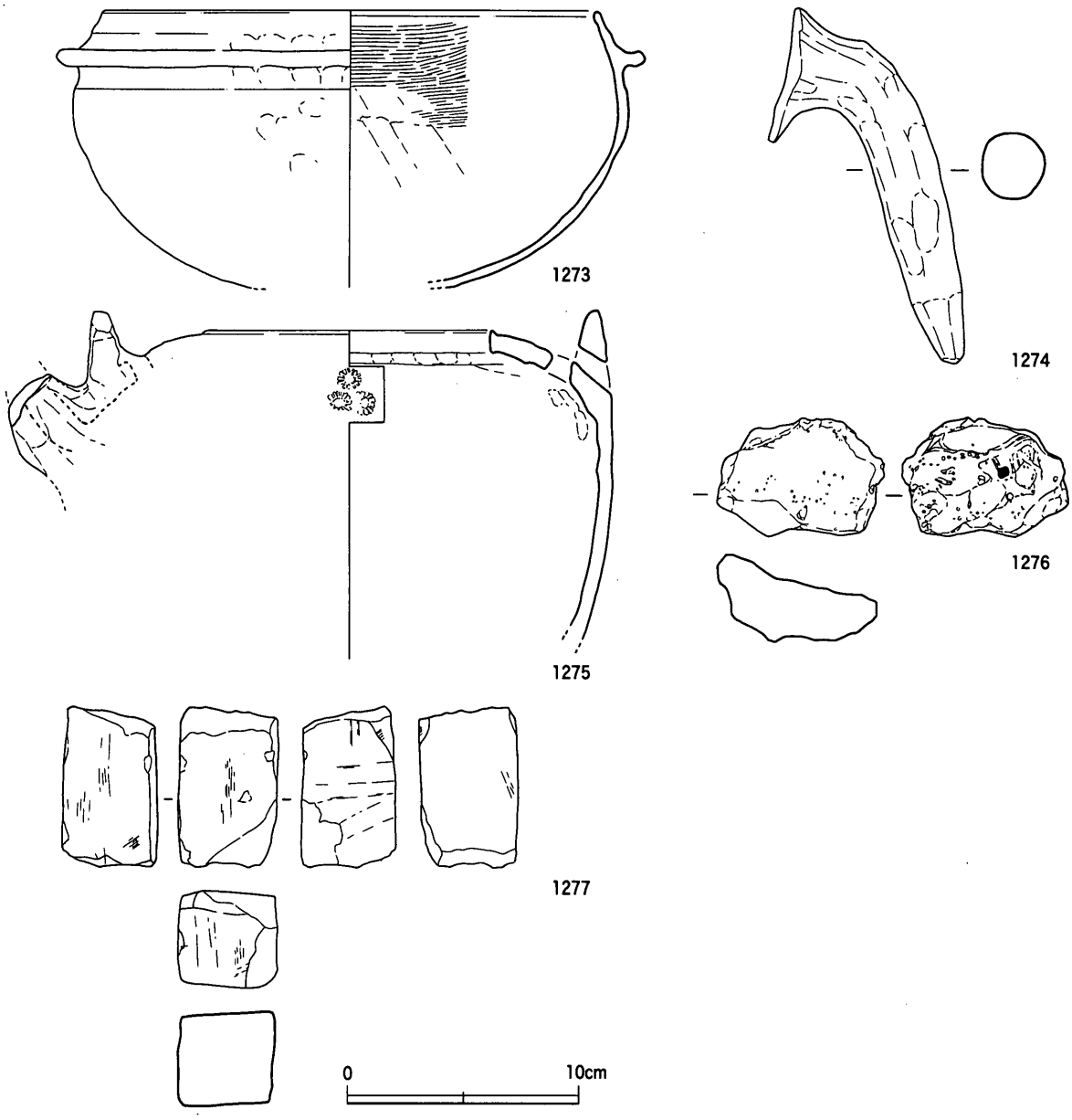
第184図　SDf48下層出土遺物（1）（1/3）



第185図　SDf48下層出土遺物（2）（1/3）



第186図　SDf48出土遺物（層位不明）（1）（1/3）



第187図　SDf48出土遺物（層位不明）（2）（1/3，1276は1/2）

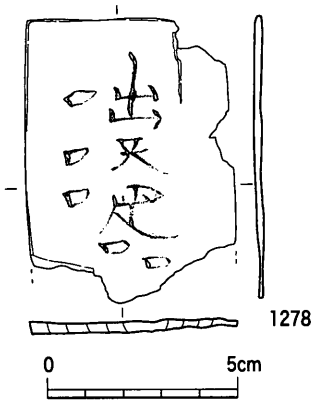
り返しつつ堆積したことが窺える。再掘削の痕跡は認められず，また４・６層の上面に凹凸（踏み込みか）があることから，ある程度の期間，ヘドロ状の底土がオープンな状態で堆積したことがわかる。

遺物は主に下層で出土し，下層の中位では完形品もしくはそれに近いものもみられた。コンテナ４箱分と量的には少ないが，上記のような出土状況から直近に遺物の廃棄主体の存在が想定され，区画内に関わる生活関連遺物としての評価ができる。遺物は図示した土器・陶器類が多いが，この他に曲物の底板や用途不明の板材，あるいは荷札状の木製品が出土している。上層出土遺物（第183図）には，土師質土器杯や足釜・鍋，在地産擂鉢，備前焼甕などが多く，特に煮炊具が目立つ存在である。小破片が多く，埋め戻しの際に周囲から二次的に移動してきた遺物が多いと考えられる。**1224**は楠井産擂鉢ＡⅡ類であり，楠井Ⅱ－２期に位置付けられる。土師質土器足釜には楠井窯の分類でＢⅡ類（**1225**）・ＢⅢ類（**1226**）・ＢⅣ類（**1227**）の３者が存在しており，楠井Ⅱ－１期とⅡ－２・３期の資料が混在している。土師質土器鍋には，内外面ともに頸部の屈曲が強いもの（**1229**）と頸部外面の屈曲が緩やかになりつつあるもの（**1230**）の２者があり，やはりこれも時期差を示す可能性がある。亀山焼甕

（**1231**）は，草戸千軒町遺跡Ⅳ期に相当するものである。備前焼甕（**1232**）は，間壁編年Ⅳ期前半の特徴をもつ。

下層出土遺物（第184・185図）には，土師質土器小皿・杯・擂鉢・足釜・鍋，楠井産擂鉢，備前焼甕，青磁碗などがある。小皿には，中世Ⅱ－３・４期にみられる糸切り底のもの（**1235**・**1236**）もあるが，これは1/4～1/8の残存率の小片であり，古い資料の混入とみられる。**1234**は，口縁部の立ち上がりが太く短いものであり，口径の縮小化傾向も顕著であり，ヘラ切り底の小皿としては最新の特徴をもつものといえる。杯には完形もしくは残存率の良好なものが多く，下層中位の時期を直接的に示す資料とみてよい。法量的には中世前半のＳＤｆ16上層出土資料よりも小振りな10㎝前後のものが大半であるが，口径12㎝を計るものも１点みられ，法量分化が指摘できる。形態的には体部の外傾度が強い浅手のものである。口縁端部外縁には上方もしくは横方向の微弱な段が認められるが，これは「口縁端部→口縁部直下～体部」という回転ナデ調整の順序によって生じる調整痕である。**1237**～**1243**・**1246**には，この調整痕が明瞭に観察でき，土器群を特徴付ける手法ということができる。底部切り離し手法は，いずれも回転ヘラ切り（右方向）である。楠井産擂鉢（**1249**）は，直立気味に長く伸びる端面をもつＡⅢ類がみられる。**1250**は非楠井産の土師質土器擂鉢であり，水平方向の平坦面をもつ肥厚する口縁部が特徴的である。内面には極めて粗いハケ目調整がみられ，器面を掻き取り平滑化するような手法で施されている。土師質土器足釜には，口縁部の長い楠井ＢⅡ類（**1251**・**1252**）と，口縁部の短い楠井ＢⅣ類（**1253**）がみられる。**1254**は，肩部に縦方向の環状把手を付したもので，おそらく中世後半に散見される茶釜形の釜ではないかと考えられる。土師質土器鍋には，口縁部が直線的に外反して伸びる楠井Ａ類（**1255**～**1258**）と，口縁部が内弯して伸びる楠井Ｂ類（**1259**）の２者がある。ただし，**1255**・**1258**は楠井窯でみられない形態である。**1255**は口縁部端面にハケ目調整を施しており，中世Ⅱ期（すなわち区画１の時期）的な手法をもつが，口縁端部は上方に肥厚しており，より新しい形態的特徴をもっている。**1256**・**1257**は，口縁部器壁に斜交した直立する端面をもつことから，楠井ＡⅡ－２類にあたる。**1258**は，頸部の屈曲が内面では明瞭であるが，外面では極めて不明瞭な形態が特徴である。**1260**は備前焼甕である。内傾する口頸部と細長く潰れた玉縁状口縁をもち，間壁編年のⅣ期後半の所産である。この他，古代の遺物も少量みられた。**1261**は８～９世紀頃の須恵器小型甕もしくは直口壺，**1262**は７世紀頃の須恵器甕である。

層位不明の遺物（第186・187図）は，出土状況の記録写真による限りでは大半が下層出土とみてよいものである。大口径の土師質土器皿（**1263**）は，やや特異な存在であり，本来の帰属時期を判断するのが難しい。十瓶山窯産須恵器杯（**1267**）は，記録写真からは下層中位出土とみてよいものである。同じ層準から出土した土師質土器杯のような口縁部調整がみられず，別系統の手法をもつといえる。土師質土器杯（**1264**～**1266**）・足釜（**1270**～**1273**），楠井産擂鉢（**1268**）は，下層出土遺物と同様である。備前焼擂鉢（**1269**）は，口縁部端面の下端が斜め下方に拡張しており，間壁編年Ⅳ期前半の製品である。**1275**は瓦質の土瓶である。短く直立する口縁部と五角形に面取りされた２個一対の把手，横方向に伸びた後に斜め上方に立ち上がる注口部などの形態的特徴が，鉄瓶の模倣形態であることを端的に示



第188図　SDf48出土遺物（1/2）

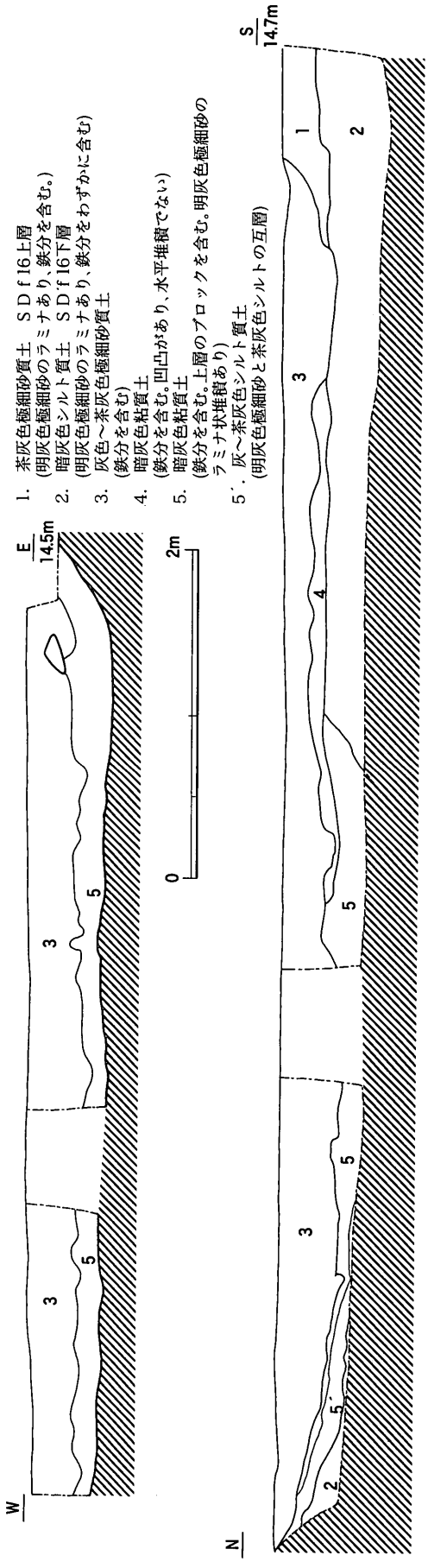
す。肩部には３個１組の菊形の印花文がみられ，１個分の施文原体を３回押捺していることがわかる。また把手部には円孔が開けられるが，把手接合部に近い肩部にも垂直方向に穿孔が施されており，在地産の茶釜形鍋と同様の穿孔方法をもつといえよう。類例は，国分寺楠井遺跡土器溜まり１・Ｃ－４区包含層，西村遺跡にみられる。**1276**は，鉄滓である。表面が緩いカーブを描くことから，炉壁に付着していたものが剥離した可能性がある。また木炭粒を含んでいる。

ＳＤf48出土遺物の年代観を示すと，下層は多くが14世紀代のうちに収まるようであるが，**1260**の備前焼甕はⅣ期後半であり，15世紀後半代を中心とした時期に比定せざるを得ない。また，土師質土器足釜ＢⅣ類（**1253**）も15世紀前半頃に年代の中心があるものと思われる。頸部の屈曲が不明瞭な土師質土器鍋（**1258**）については，明確な編年的位置付けが難しいが，後述する区画４で多くみられる形態であり，やはり15世紀以降の所産と考えられる。ただし，14世紀前半までとみられる土師質土器杯や十瓶山窯産須恵器杯が主に下層中位で完形もしくはそれに近い遺存状態で出土していることを考慮する必要があろう。これらは，より新しい時期に「ゴミ」として混入したとは考えられないからである。したがって，15世紀代の遺物の出土層位・レベルが明確ではないものの，下層下位～中位は14世紀前半までに堆積したものと想定し，下層上位が主に15世紀代に堆積したものと考えておきたい。上層出土遺物で最も新しい年代観を示すのは，草戸千軒町遺跡Ⅳ期の亀山焼甕（**1231**）であり，15世紀後半～16世紀初頭であり，この時期に埋め戻し・整地が行われたのであろう。

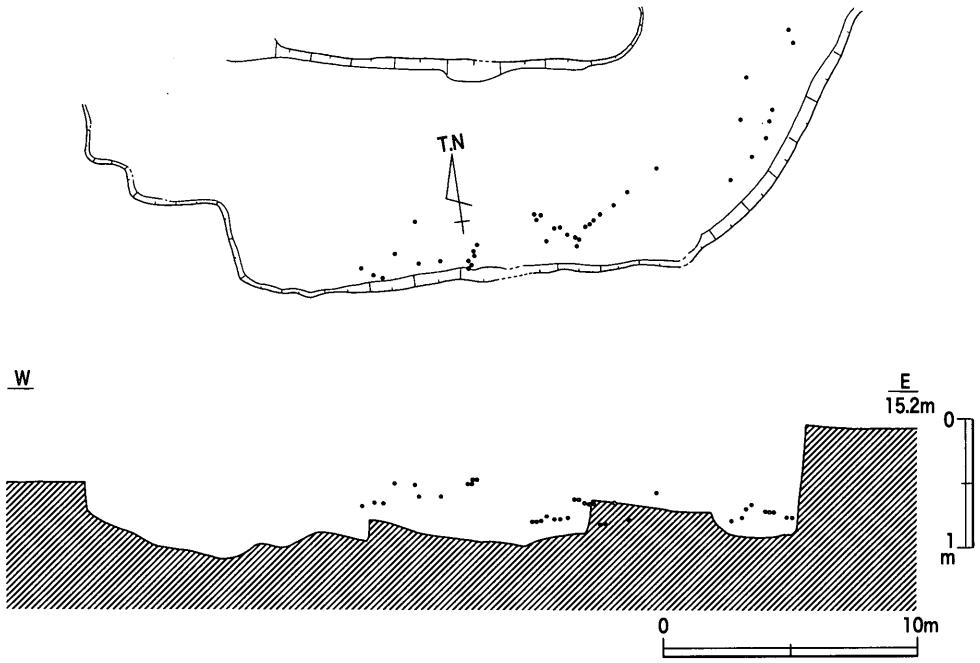
ＳＤf49・50（第189～201図）

Ｗ－10°－Ｎの主軸をもつ区画溝である。鍵形プランの基盤層の掘り残し（陸橋部）がみられ，これより東側をＳＤf49，西側をＳＤf50とする。両溝は形態・規模がかなり異なる。両溝を合わせた規模は，東西（陸橋部を含む）67.5ｍであり，ＳＤf49東辺長12ｍ以上，ＳＤf50西辺長７ｍ以上である。以下，ＳＤf49，ＳＤf50，陸橋部に分けて記述する。

ＳＤf49　平面Ｌ字形を呈する大溝である。南辺での



第189図　SDf49断面図（1/40）

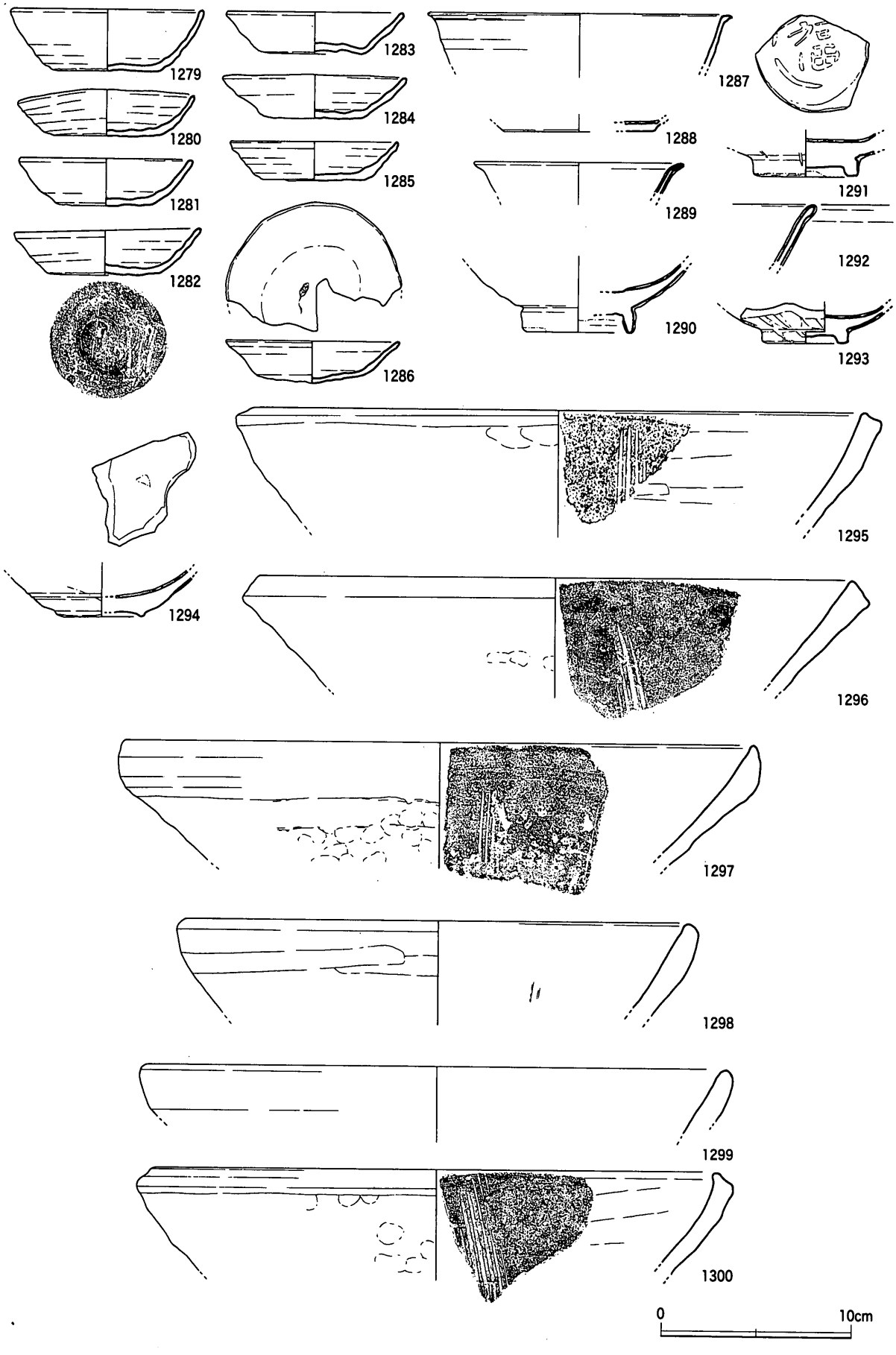


第190図　SDf49遺物分布図（1/300）

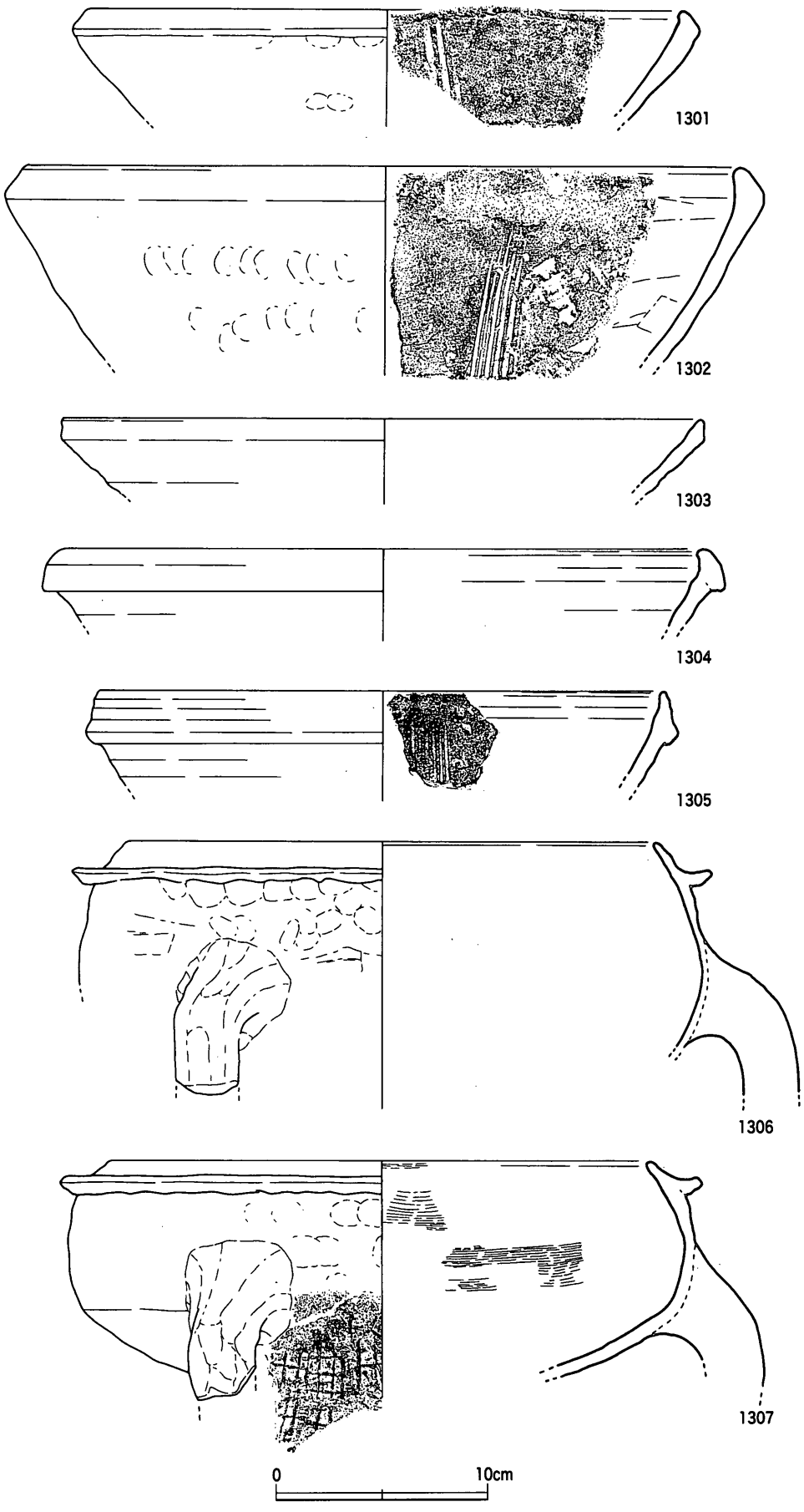
幅9.0m，深さ0.35～0.55mを測り，東辺での幅9.2m以上，深さ0.4mを測る。南辺と東辺はほぼ直角に屈曲するが，屈曲部の外側（南・東肩部）は半径13mの円弧状に緩いカーブを描く。東辺部は検出部分の北端で先行する遺物包含層との識別が困難であり，また近世遺構や空港造成時の攪乱が広範囲に及ぶこともあって，明確な肩部のラインの検出には至らなかった。ただし，Ⅲ－２北調査区まで埋土が連続していたため，本来は調査区北端まで延長することは確実である。他の遺構との重複関係は南辺でみられ，埋没したＳＤf16（中世Ⅱ期）を切り込んでいる。

断面形態は浅い逆台形もしくは皿形を呈しており，壁面（掘り込み部）は比較的急に立ち上がる。また底面はほぼ平坦であるが，南辺北側（内側）の底面が一段深くなっている。埋土は２層に大別できる。上層は鉄分を多く含んだ茶灰色極細砂質土であり，下層は暗灰色粘質土である。下層は細砂と粘質土がラミナ状の互層堆積をなしていることから，わずかな流水と滞水状況を繰り返しながら埋没が進んだことが窺える。本遺構に水を供給する溝がみられないことから，下層の流水は一時的なものであり，淀んだ滞水状況が常態であったと考えられる。また，このような層序から埋没は長期間にわたって徐々に進んだことが想定される。これに対して上層は基盤層に似た均質な土層の堆積であり，ブロック状の堆積はみられなかったものの，人為的な整地が行われた可能性も考えられよう。

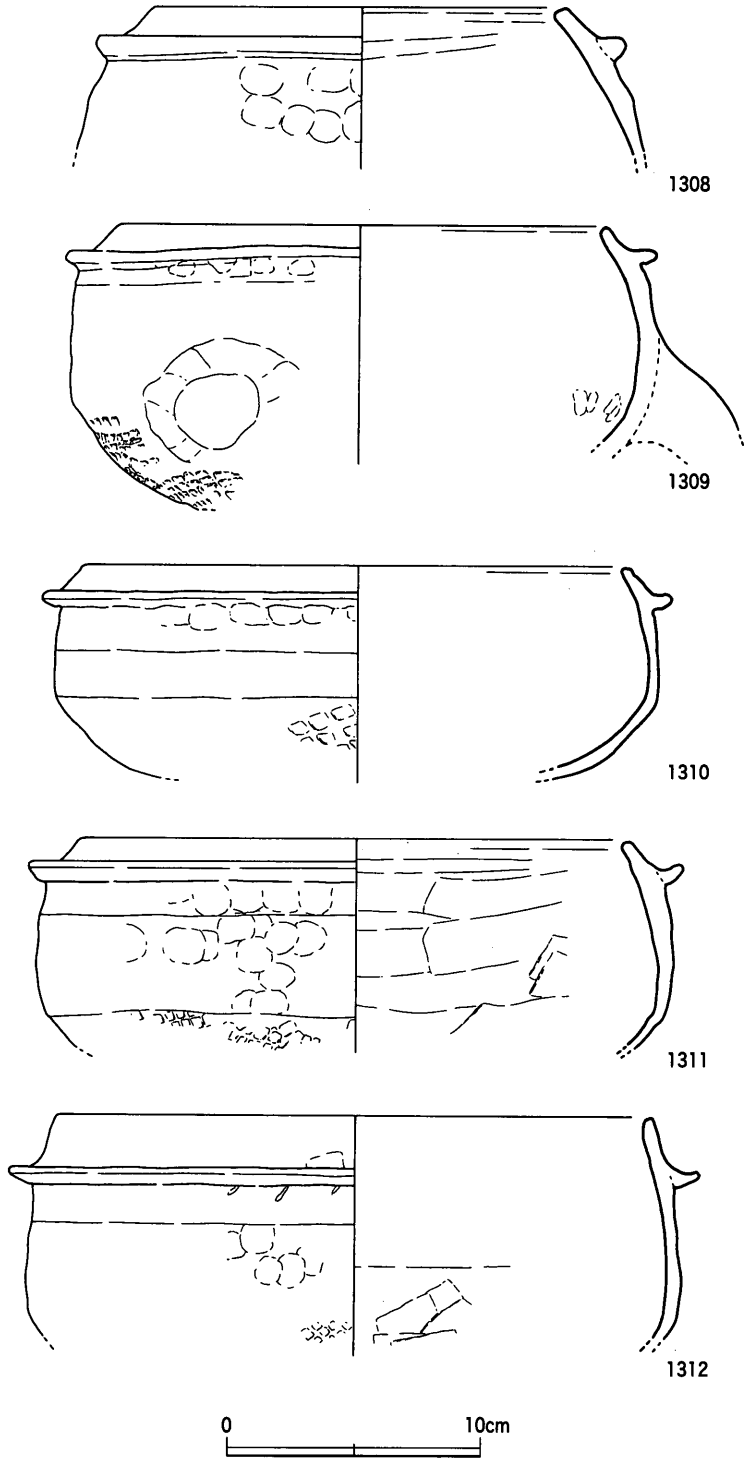
遺物は上層・下層ともに出土したが，特に上層下位（下層との境界近くのレベル）で遺存状況の良好なものが検出された。上層下位の遺物は，南肩部近くに集中しており，南もしくは南東側すなわち区画６からの投棄が推測できる。上層出土遺物（第191～198図）には，土師質土器杯・皿・擂鉢・足釜・把手付鍋・鍋・鉢，楠井産擂鉢，東播系須恵器捏鉢，備前焼擂鉢・壺，楠井窯産甕，白磁碗・皿，青磁碗，肥前系陶器碗，平瓦などがある。土師質土器杯は，やや浅手で器壁の薄いヘラ切り底のものが多く，ＳＤｆ48下層出土のものに近似する。ただし，口径がより小振りな９cm台のものが多いように見受けられる。また，より体部が外傾して浅手になった皿形態もみられる（**1286**）。体部中位で大きく外反しており，口縁端部には体部に先行するナデ調整が行われる。また見込みには稲籾の圧痕がみられる。形態的には，空港跡地Ｉで報告したＳＫc74出土土器に近く，やや大振りであることから若干先行す



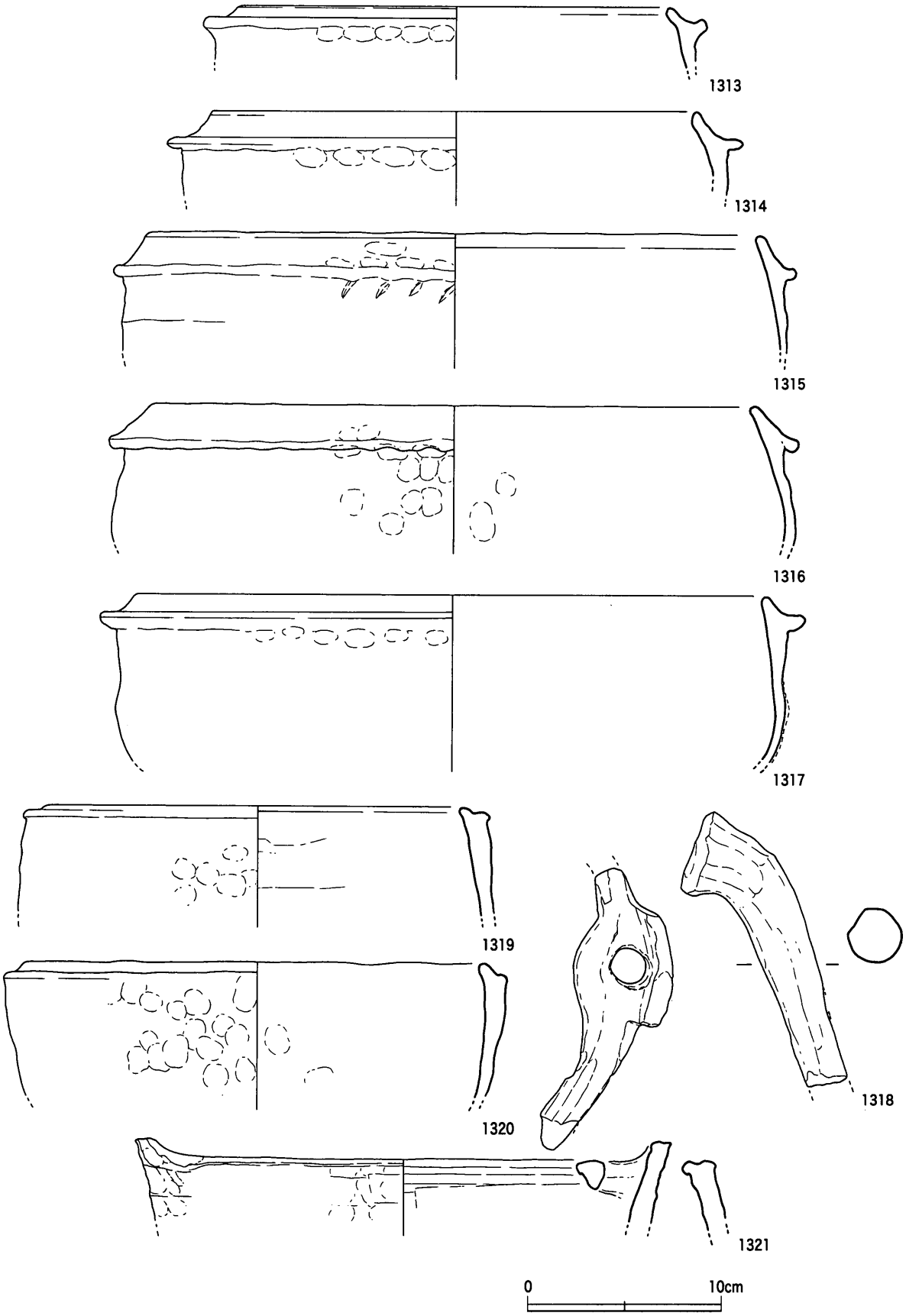
第191図　SDf49上層出土遺物（1）（1/3）



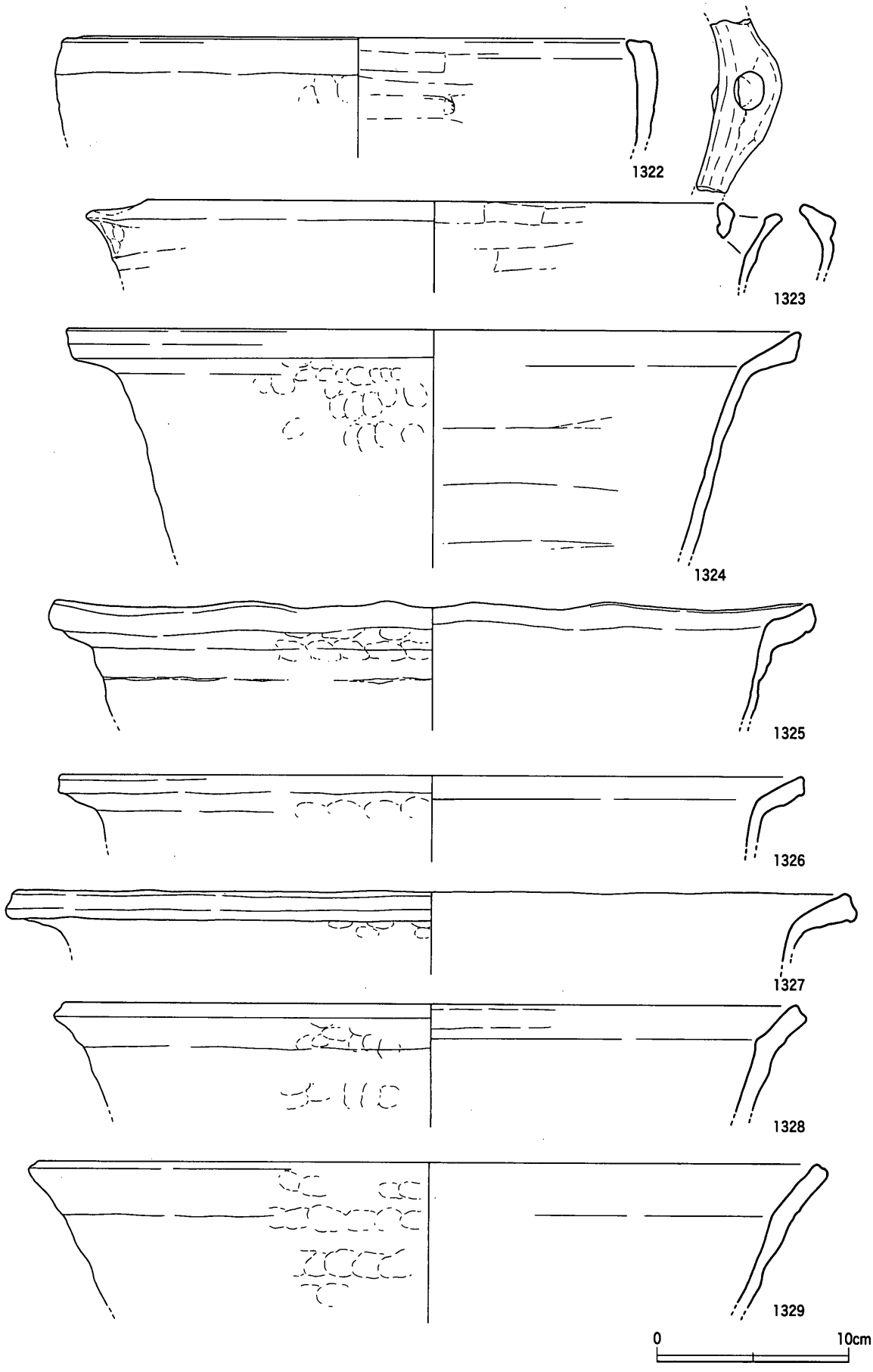
第192図　SDf49上層出土遺物（2）（1/3）



第193図　SDf49上層出土遺物（3）（1/3）



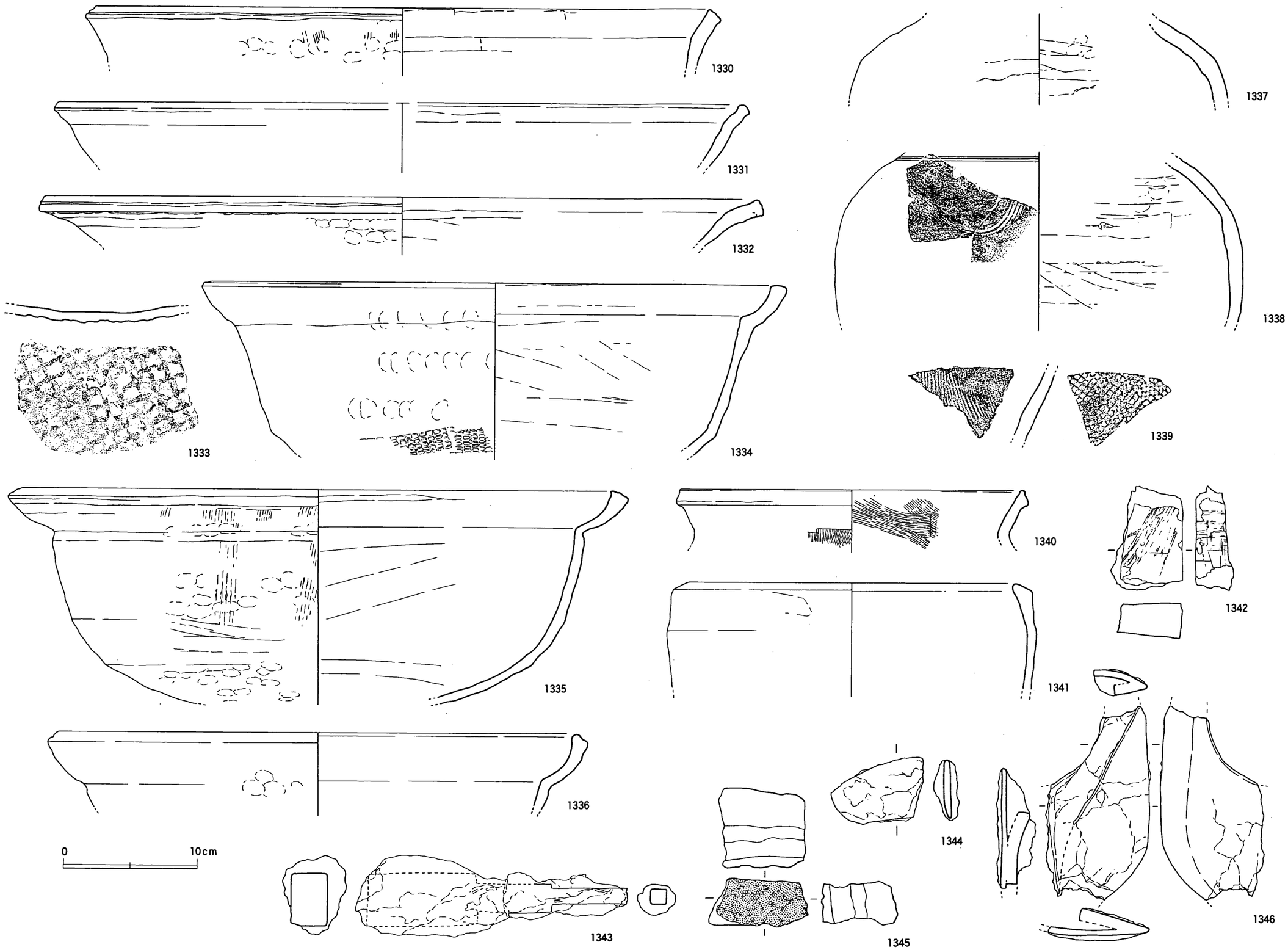
第194図　SDf49上層出土遺物（4）（1/3）



第195図　SDf49上層出土遺物（5）（1/3）

る時期に置くことができるかもしれない。輸入磁器は，白磁Ⅴ類碗（1287）・Ⅸ類皿（1288）・Ｅ－２群皿（1289），青磁Ⅰ－５ｂ類碗（1293，以上森田分類）・ＣⅡ－ａ類碗（1291）・Ｄ類碗（1290・1292，以上上田分類）があり，13世紀から16世紀までの製品が混在している。1291の見込みには「福」の押印が施される。また，胎土目積みの肥前系陶器碗がある（1294）が，これのみ大きく下降する年代観を示す。出土状況が明確でないため，混入の可能性もある。在地産の擂鉢には，楠井窯系統のものと他の在地窯系統のものがある。楠井窯系統のものは，ＡⅡ類（1295・1296）とＡⅢ類（1297），ＢⅠ類（1298・1299）がある。これらは楠井窯での所見では同一時期の所産とみることは難しく，複数時期の所産が混在している状況が指摘できる。1297の体部内面下半は，使用によって器表が剥落している。非楠井窯系統の在地産擂鉢には，外傾する凹面をもち端部をツマミ上げる褐色系のもの（1300・1301）と，内傾して肥厚する口縁部をもつ黄褐色系のもの（1302）がある。東播系須恵器捏鉢は，肥厚せずに直立する端面をもつ森田編年Ⅱ－２段階のもの（1303）と，口縁部の肥厚と上下への拡張が著しく上端が内弯するⅢ－３段階のもの（1304）がある。備前焼擂鉢（1305）は間壁編年Ⅳ期前半に属するものである。土師質土器足釜は楠井ＢⅡ類（1306）・ＢⅢ類（1307～1312・1314～1316）・BⅣ類（1313・1317）がある。1308は丸く太い口縁端部をもつのが特徴である。1312・1315の鍔部直下には，鍔部の接合作業に伴う痕跡とみられる爪形状圧痕が認められる。土師質土器把手付鍋は，口縁部上面を沈線状に窪ませて鍔状の縁帯を作出する。口縁部には把手を２方向に貼付し，口縁部との間に円孔を作る。口縁端部と縁帯が明瞭に作出されるもの（1319・1320）と，不明瞭で一体化しているもの（1322）がある。把手は正面観が五角形を呈するが，ヘラによる面取りを施し各面が明瞭に作られるもの（1321）と，強いナデ調整で各面が不明瞭に連続するもの（1323）の２者がある。これらの形態・技法差は時期差を示す可能性があるが，良好な一括資料に乏しいため，現段階では明確にできない。土師質土器鍋には，楠井ＡⅡ類（1324～1327）とＢⅡ類（1334～1336），頸部外面の屈曲が弱い非楠井窯系統のもの（1328～1332）がある。備前焼壺（1337・1338）には，無文のものと文様をもつものがある。1338は，頸部直下に数本１単位の櫛描き直線文で文様帯を作り，文様帯内に振幅の大きな波状文を施す。形態的には丸味をもった緩いカーブを描く肩部をもつ。これらの特徴から，間壁編年Ⅳ期前半の所産と考えられる。1339・1340は土師質土器甕であり，外面に格子叩き目・内面に粗いハケ目を施すことから，楠井窯産とみられる。1341は土師質土器鉢で，脚付の深鉢もしくは火鉢形のものと思われる。近世まで下る時期のものかもしれない。1343は用途不明の鉄製品である。断面長方形の部分と断面方形の柄形部からなる。1344は鉄鎌の刃部片とみられる。1346は鉄製鋤先片である。袋状に作られた刃部の幅が狭く，研ぎ直しによる摩耗した形態とも考えられる。1345は鋳造炉壁の破片であり，内壁には鉄滓が付着している。小片ではあるが，やや大型の内径が想定できる。平瓦（1347～1350）は，凸面に縄目叩き，凹面に布目がみられるもので，土師質焼成である。上層ではこの他，古代～中世前半にまで遡る遺物も出土している。土師質土器小皿（1351）・杯（1352）・椀（1354）・鍋（1363），黒色土器椀（1355・1356），十瓶山窯産須恵器杯（1353）・椀（1360）・捏鉢（1362），吉備系土師質土器椀（1361），和泉型瓦器椀（1358・1359），緑釉陶器椀（1357）などがある。

下層出土遺物（第198・199図）には，土師質土器杯（1378）・鍋（1379・1380）・足釜（1381），備前焼小壺（1382），砥石（1383）がある。土師質土器杯・鍋は，ＳＤｆ48下層中位出土土器とほぼ同時期の所産とみてよかろう。この他，古代～中世前半の遺物として，土師質土器杯

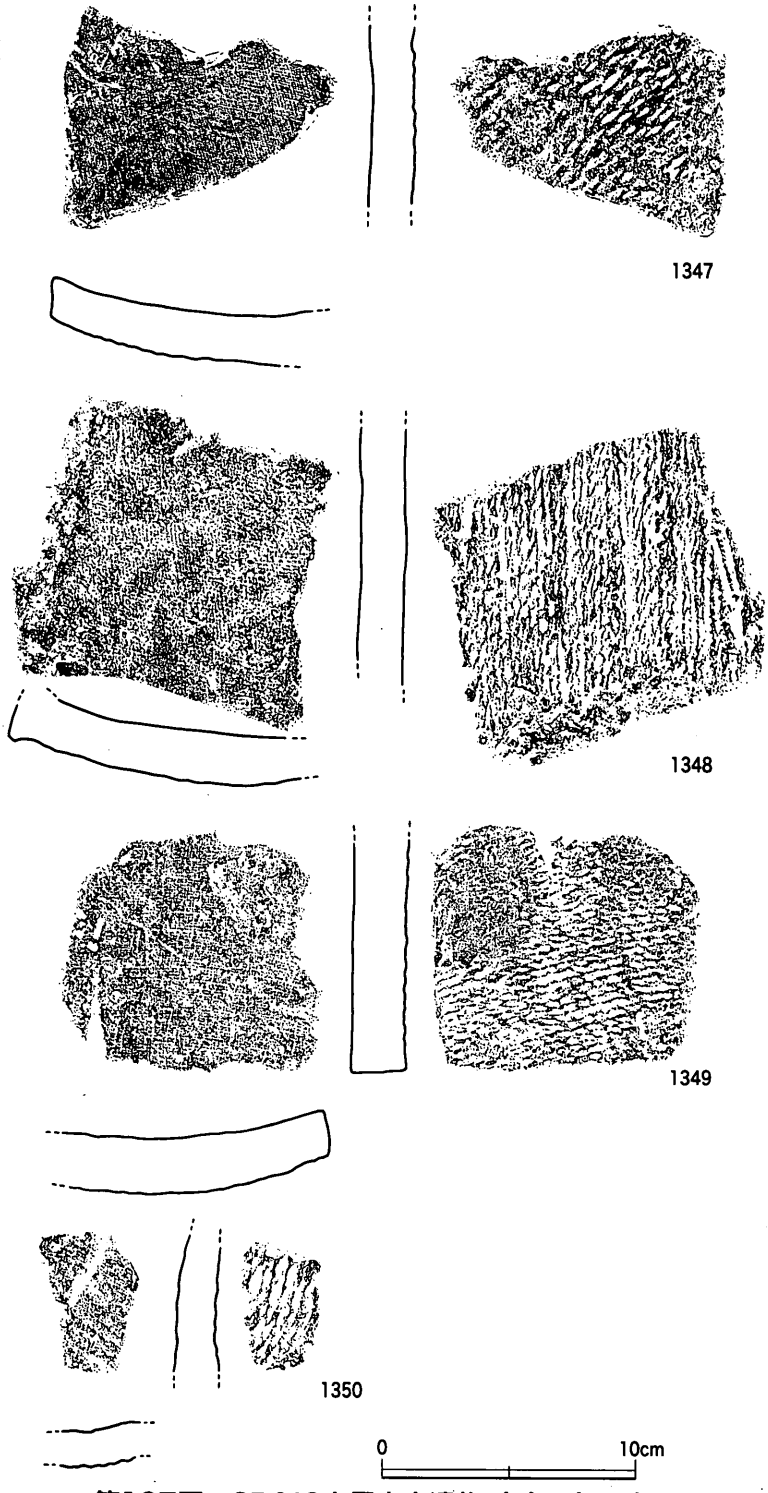


第196図　SDf49上層出土遺物（6）（1/3，1343～1346は1/2）

(**1367**～**1372**)・小皿(**1373**)・椀(**1375**)，黒色土器椀(**1374**・**1376**)，白磁Ⅴ類碗(**1377**)がある。土師質土器杯は古代後半のもので，同時期の十瓶山窯産須恵器杯と同じ形態をもつ。**1372**の底部外面には，「一」もしくは何らかの文字の一部とみられる墨書がある。

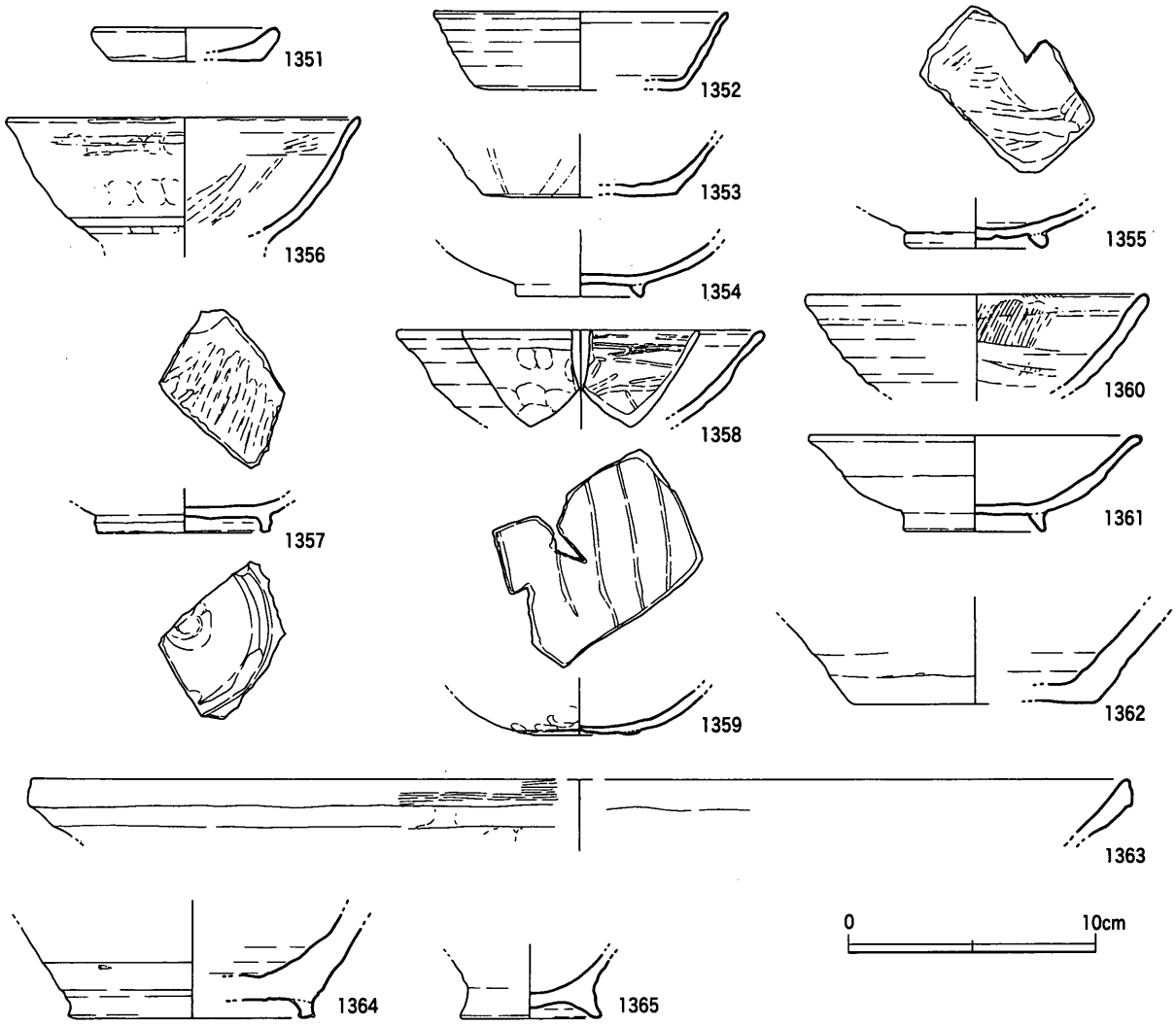
ＳＤf50　ＳＤf50は，陸橋部南側での幅3.06ｍ，深さ0.5ｍを測る。南側肩部は，陸橋部付近で南に大きく張り出す形態をもつ。また底面のレベルも陸橋部南側が最も深く，断面逆台形を呈している。こうした形態は，溝内の通水の便を無視した在り方といえ，通常の用水路とは異質な形態をもつといえよう。埋土は２層に大別できる。上層（１層）は明るい色調のシルト質土であり，下層（２～４層）は黒色系のシルト・細砂である。ａ・ｂ・ｃの３地点で下層上面のレベルを比較すると，西側ほど高い傾向が指摘できる。これは底面レベルの傾斜方向と一致しており，西側からの土砂の運搬作用によって埋没が進行したと考えられる。他の遺構との重複状況は，東端でＳＤf31，西端でＳＤf48を切り込んでいる。

出土遺物（第201図）には，土師質土器皿・杯・皿・足釜，亀山焼甕がある。土師質土器皿(**1385**)は，特徴的な「口縁部→体部ナデ手法」である。土師質土器杯(**1384**・**1386**)は，ＳＤ25下層中位出土のものに近い形態をもつ。土師質土器足釜(**1387**・**1388**)は，一応は楠井ＢⅢ類に分類できるが，丸く太い口縁端部と，やはり分厚い鍔部の形態が特徴的である。**1388**の体部外面には粗い縦ハケが施される点も楠井産足釜ＢⅢ類とは異なる特徴といえる。亀山焼甕(**1389**)は，大型品の底部の破片である。外面上端に規則的な傾きをもった体部叩きがあり，下半部にはそれを潰す乱雑な底部叩きがみられる。内面の上端には体部叩きに対応する板ナデが，下半部にはそれを切り込む粗いハケ目がある。



第197図　SDf49上層出土遺物（7）（1/3）

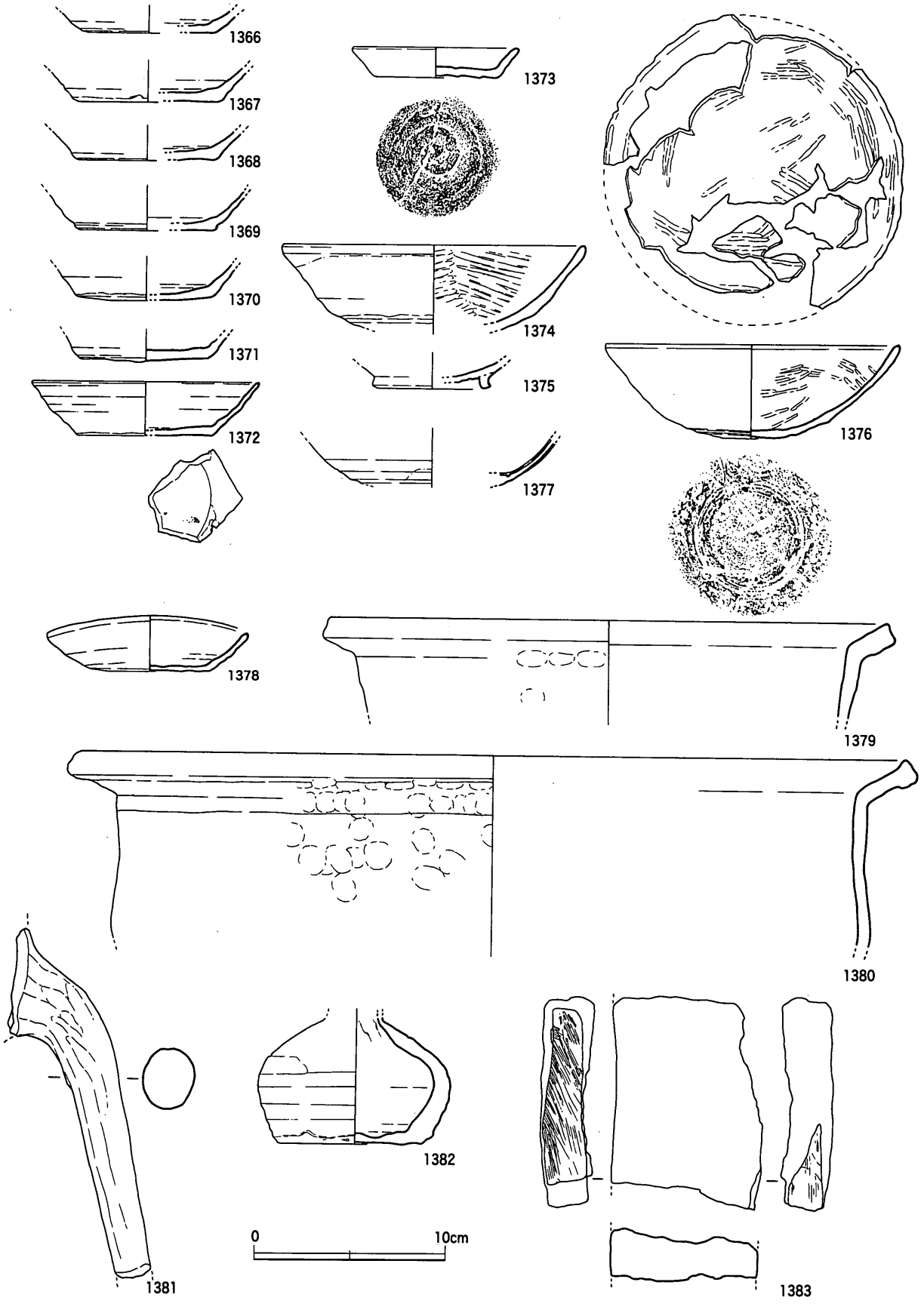
陸橋部　ＳＤf49・50に挟まれ，その掘り残し部分として作り出されている。鍵形に喰い違う直線



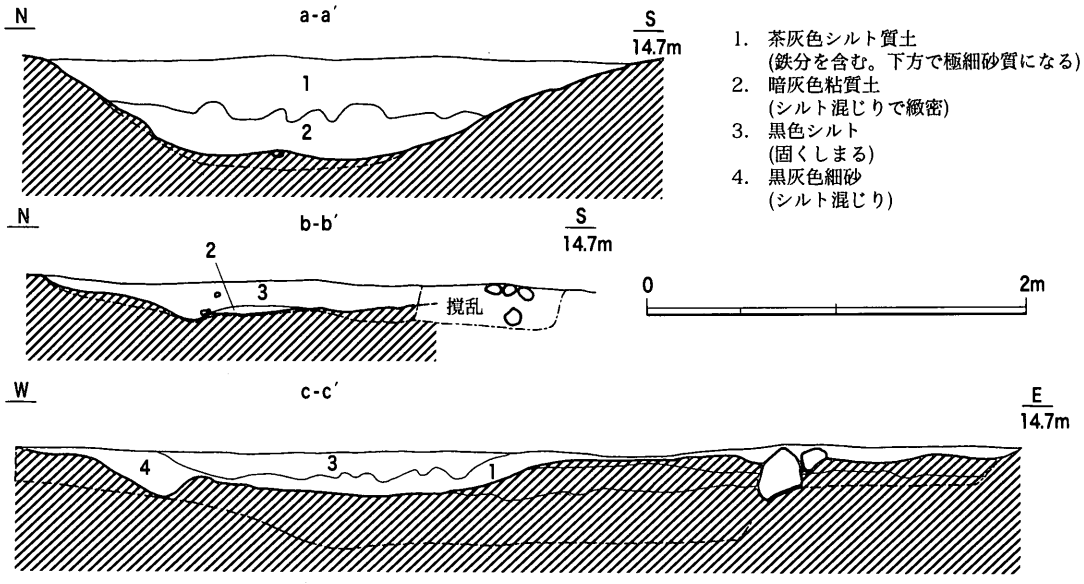
第198図　SDf49上層出土遺物（8）（1/3）

的なプランをもつ。溝底面からの立ち上がり部分を含めた幅は4.5ｍを測る。区画溝との関係でみると，陸橋部正面（南側）を画する区画溝西半部が深くなっているのが注目される。つまり，区画外からの出入りに際して防御的な構えをもっているとも評価できるのであり，区画３の性格を示唆する遺構といえる。

以上から，ＳＤf49・50の年代観を示しておく。在地土器では，中世Ⅱ－５期（13世紀末葉～14世紀前葉）を上限とすることが明確であり，この時期の土器が多くみられる点は注意すべき点である。土層堆積状況から長期にわたる緩やかな埋没過程が想定できることをも考慮するならば，本遺構の上限をこの時期まで引き上げて考えるべきであろう。下限については編年上の問題もあり，在地土器のみでは明確化できないものの，備前焼には間壁編年Ⅳ期前半のものがあり，15世紀前半頃まで継続していたことは間違いない。また，白磁Ｅ－２群皿の存在から，15世紀後葉～16世紀中葉の幅の中で下限を押さえることが可能である。これはＳＤf48の下限年代とも概ね一致し，両溝が若干の土層の違いはあるものの最終的に整地されていることを積極的に評価するならば，区画３の廃絶が限られた時間の中で行われた可能性が指摘できよう。



第199図　SDf49下層出土遺物（1/3）



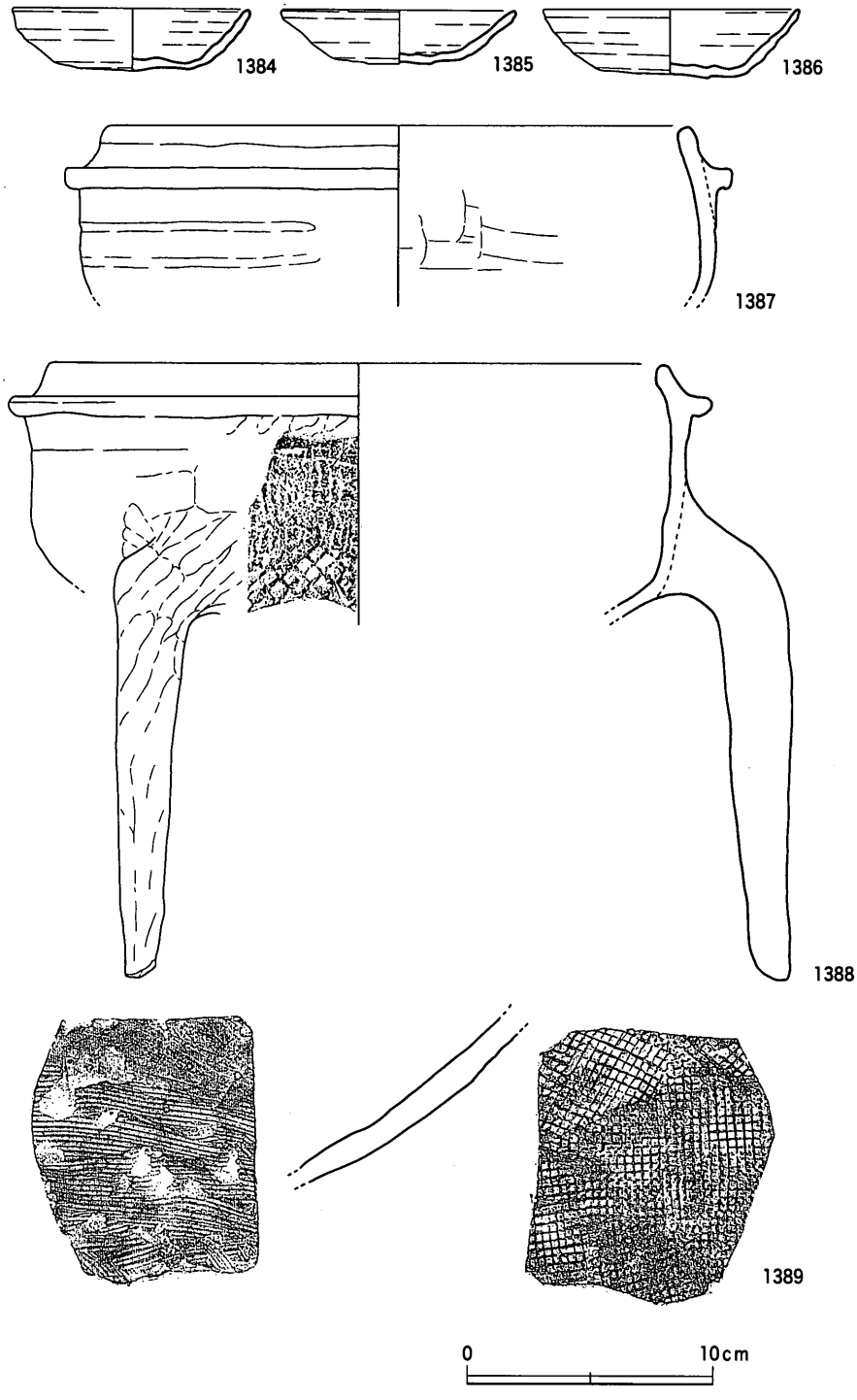
第200図　SDf50断面図（1/40）

ＳＤf51（第202・203図）

ＳＤf49南東隅の円弧状の肩部ラインにほぼ平行して延びる溝であり，南（外側）肩部のラインは半径12ｍ程度の円弧を描く。西端部では埋没したＳＤf16を切り込んで収束している。発掘調査時には，Ⅲ－２区ＳＤf16→Ⅲ－１区ＳＤf16・Ⅲ－２区ＳＤf51という理解であったが，出土遺物の年代観はⅢ－１区ＳＤf16上層よりも明らかに後出的であり，また埋土の状況も異なることからⅢ－１区ＳＤf16と一連の遺構であるとは考えられない。したがって，ＳＤf16の重複部で収束するとみておきたい。

断面形態は，やや浅い逆台形を呈しており，底面は平坦である。また検出した部分での底面のレベルは13.9～14.0ｍでまとまっており，一方に傾斜するような形状ではない。埋土は３層に細分されるが，大局的には同じ色調・土質の堆積層とみてよく，下位層で長期間の滞水状況を示す黒色系粘土がみられない点が，ＳＤf48～50とは明確に異なる特徴である。また，南肩部の一部で15～20㎝程度の円礫・角礫の集中部が検出されたが，これは下位層（２・３層）の堆積が進行した後に南側すなわち区画６側から投棄された状況を示している。人為的な護岸ではないと考える。

遺物はコンテナ1箱分出土している。一括して取り上げたため出土層位を明示できないが，比較的短期間のうちに収まる遺物で構成されるようである。土師質土器小皿（**1390**）は，短く立ち上がる口縁部をもち，口径5.5㎝と縮小化傾向が顕著である。器壁が薄い点が中世前半の諸遺構でみられた小口径の小皿と異なっており，あるいはより新しい様相を示しているのかもしれない。土師質土器杯（**1391**～**1394**）は，体部の外傾度が強く浅手のものであり，「口縁部→体部ナデ手法」が施される。いずれも体部中位内面に回転ナデによる弱いアクセントが付けられている。**1395**は，区画１の時期の土師質土器杯で底部に回転糸切りがみられる。**1396**・**1397**は十瓶山窯産須恵器杯である。**1398**は青磁Ⅰ類椀であり，体部が欠損しているため細分型式は特定できない。**1399**は東播系須恵器捏鉢であり，口縁部は上方に丸く太く拡張・肥厚し，口縁部内面に明瞭な沈線が形成される。森田編年Ⅲ－２期に該当するものと思われる。土師質土器足釜（**1400**～**1403**）は楠井ＢⅢ類に相当する。脚基部は横方向に張り出して踏ん張るような在地産通有の形態である。土師質土器鍋は楠井ＡⅡ類にあたり，口縁部の拡張がみられないＡⅡ－２類（**1405**）と上方に拡張された口縁部をもつＡⅡ－３類（**1404**）がある。



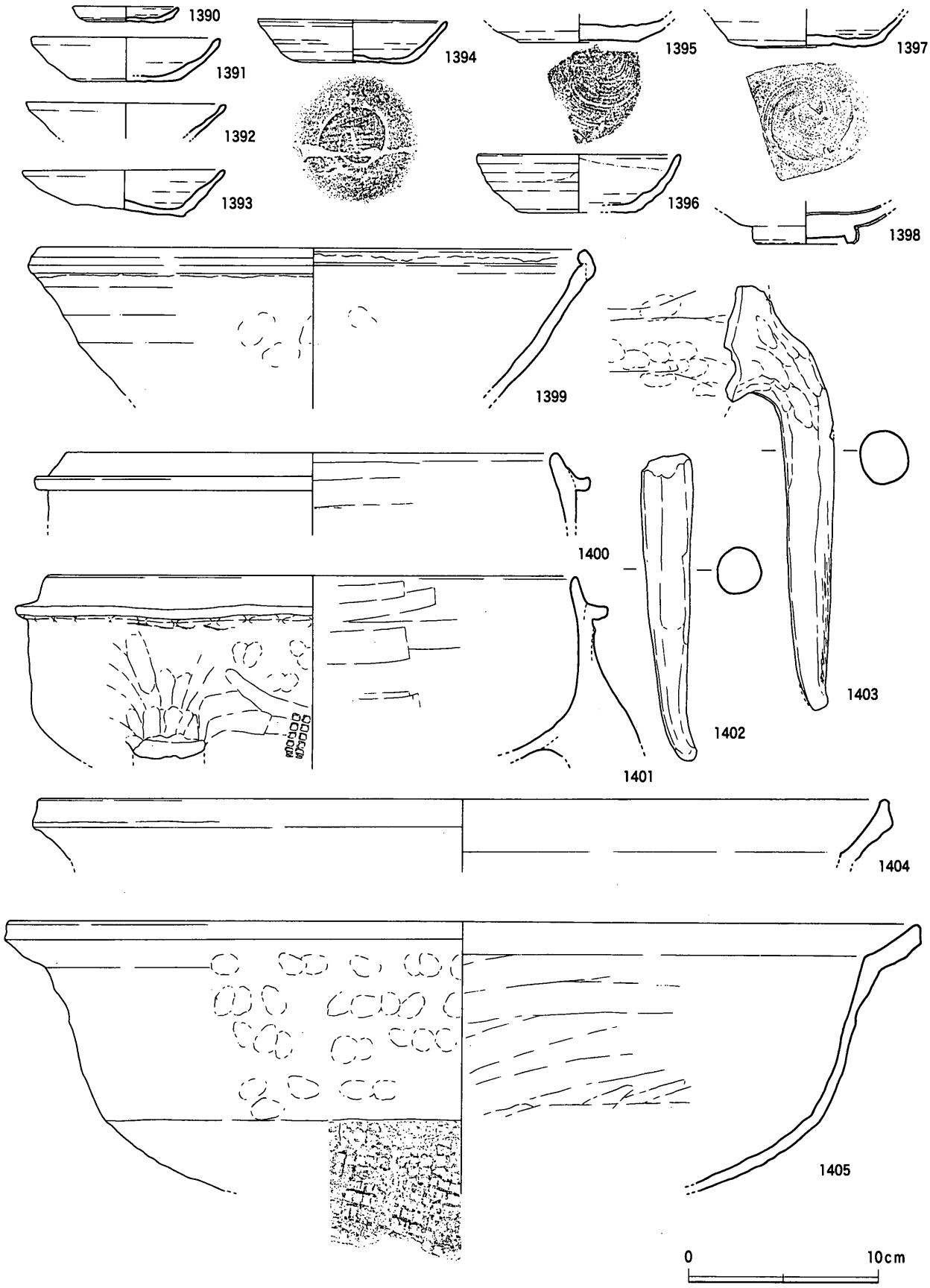
第201図　SDf50出土遺物（1/3）

備前焼甕（**1406**）は体部内外面に板ナデ調整が顕著にみられる。

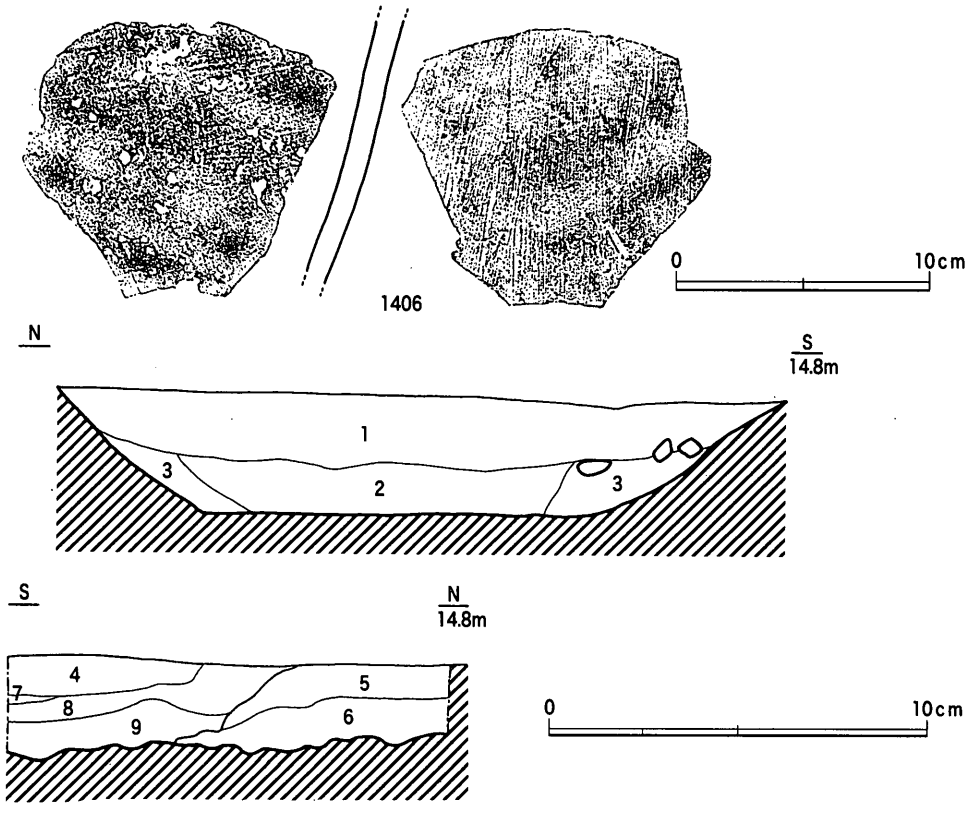
以上から，ＳＤf51は14世紀代にほぼ限定され，区画３の存続時期の比較的早い段階で埋没したと考えられる。

ＳＤf52（第203図）

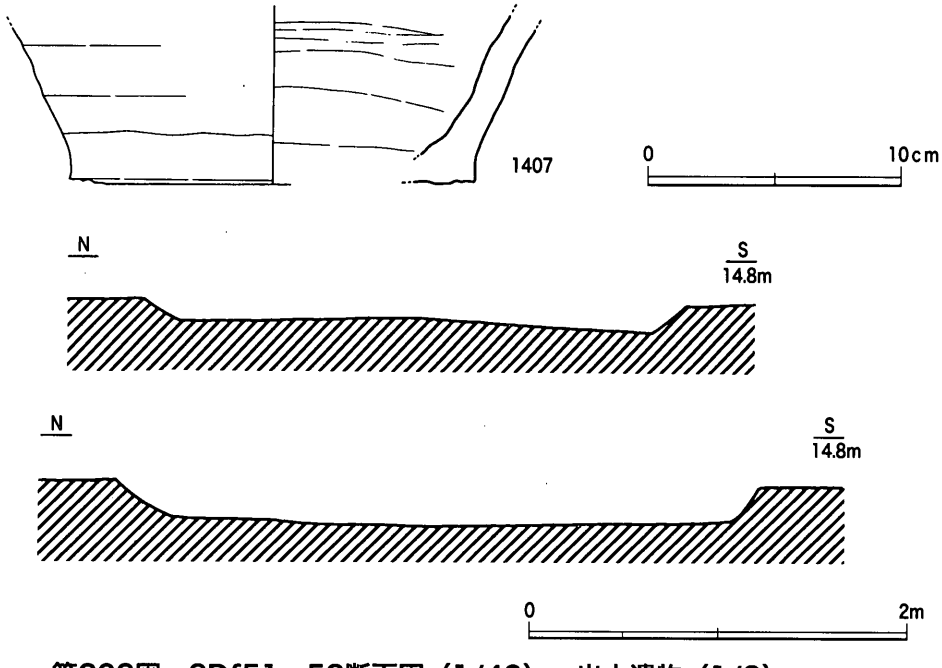
ＳＤf51の埋没後に開削されたＷ－10°－Ｎの主軸をもつ直線的な溝である。西端部はＳＤf51同様に収束している。東側はやや喰い違うプランでⅢ－６区ＳＤf84に連続しているものと推測できる。断



第202図　SDf51出土遺物（1）（1/3）



1. 茶灰色シルト質土（上部に鉄分を多く含む）
2. 暗灰色シルト混じり粘質土（鉄分をわずかに含む。１層との境界は不明瞭）
3. 暗灰色砂混じりシルト質土（灰色細砂をラミナ状に多く含む。２層との境界は不明瞭）
4. 淡茶灰色極細砂質土（粗砂を極めてまばらに含む）　SDf51上層
5. 茶灰色極細砂質土（鉄分を含む。明灰色極細砂のブロックを含む）　SDf16上層
6. 暗灰色シルト質土（鉄分をわずかに含む。明灰色極細砂のラミナ状ブロックあり）
7. 灰（～暗灰色）シルト質土（灰色極細砂ラミナをしま模様に全域に含む）　SDf51上層
8. 灰色（～暗灰）シルト質土（淘汰されている）　SDf51上層
9. 灰（～暗灰）色粘質土（灰色極砂のラミナがわずかに認められる）　SDf51下層



第203図　SDf51・52断面図（1/40），出土遺物（1/3）

面形態は極めて浅い逆台形を呈する。底面は平坦であり，東側ほど低いレベルであることから，東側に傾斜していることがわかる。埋土は灰茶色細砂の単層である。

遺物はごく微量であり，わずかに間壁編年Ⅳ期と考えられる備前焼壺の底部（**1407**）が図示できるのみである。これのみで遺構の時期を限定することは困難であるが，15世紀以降であることは確実であろう。

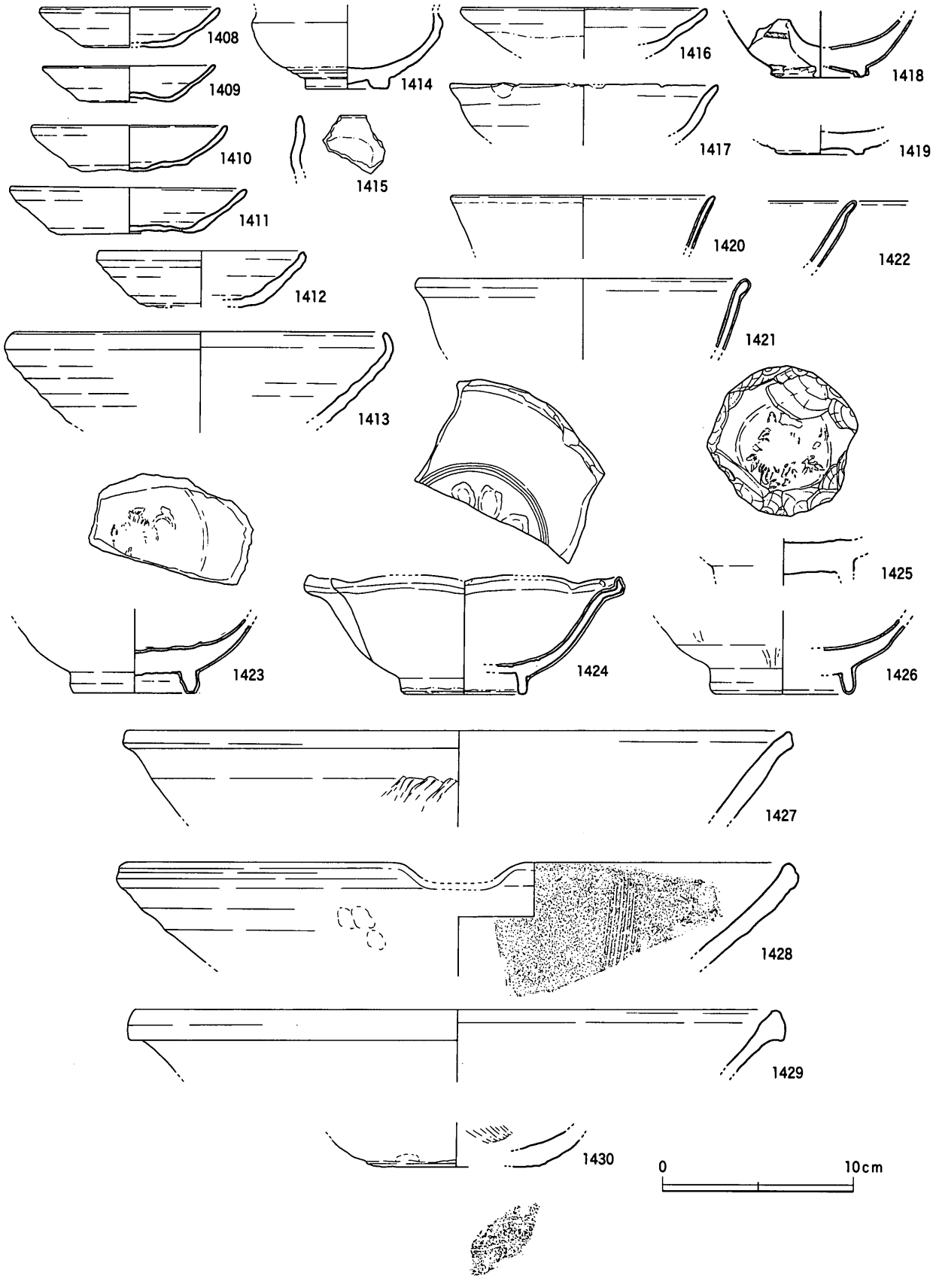
c．包含層出土遺物（第204～206図）

区画３周辺のⅢ－２区とⅡ－１区では，遺構検出面や上位層中から遺物が若干量出土している。時期的には中世後半に位置付けられるものが比較的多く，区画３に本来伴っていたと判断されるため，ここで説明する。なお，少量の近世遺物もみられるが，ここでまとめて報告しておく。

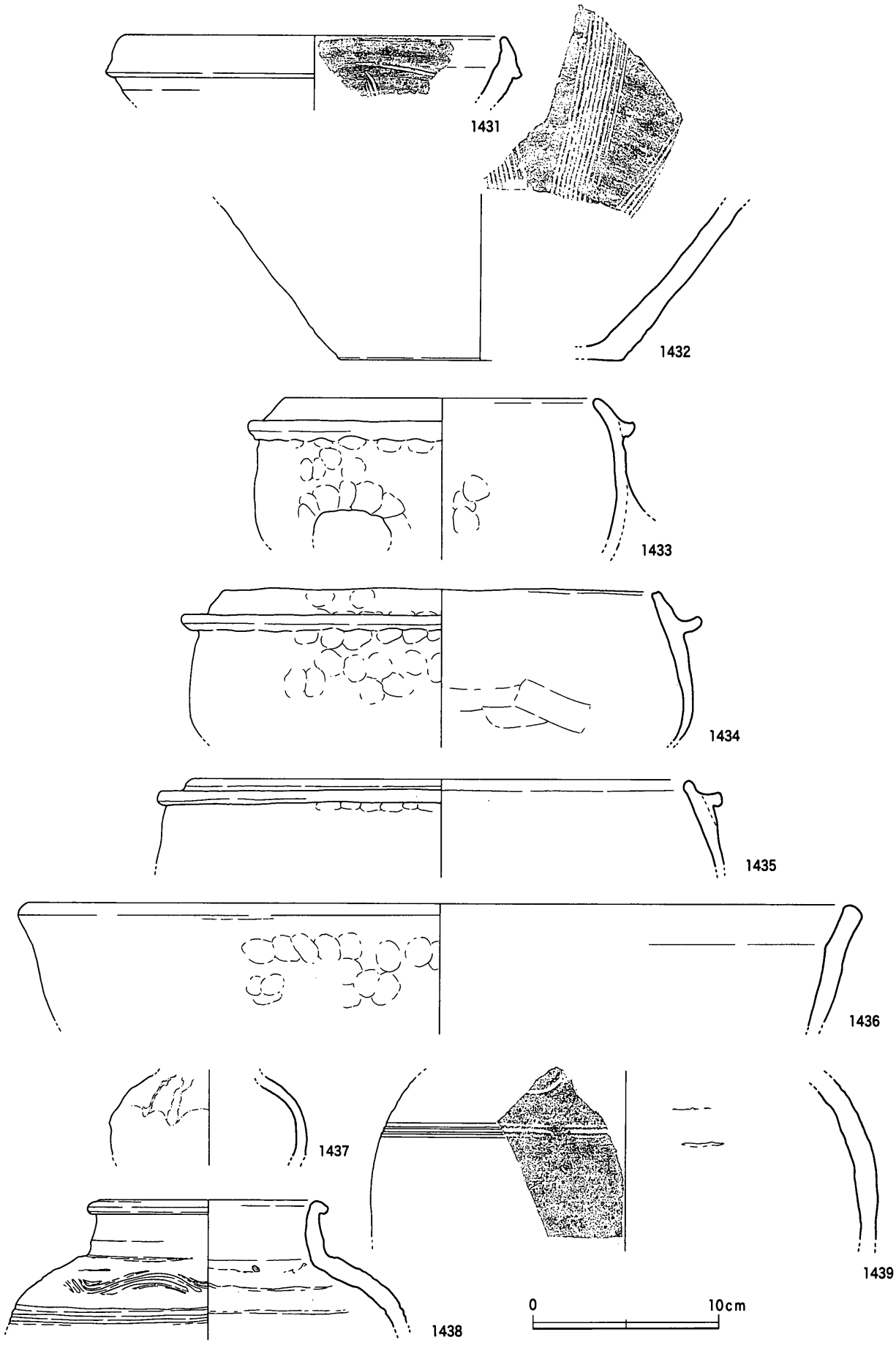
土師質土器皿（**1408**～**1411**）は，器壁の極めて薄いもので，外傾度の強い体部とそこからやや内弯気味に伸びる口縁部をもつ。口縁端部は丸く収められており，ＳＤｆ49下層出土の皿（**1286**）の口縁部調整手法とは異なることから，別系統の皿とみることができる。口径9.0～10.2㎝の範囲に収まるもの（**1408**～**1410**）と，12㎝前後の大振りなもの（**1411**）がある。土師質土器杯（**1412**）は，皿に比べて厚手の器壁と深手の器体をもち，「口縁部→体部ナデ調整」であることからＳＤf48下層中位の土器群と共通する。土師質土器捏鉢（**1413**）は，外傾する体部から緩やかに内弯して立ち上がる口縁部が特徴であり，器面には回転ナデによるロクロ目が顕著にみられる。空港跡地ＩのＳＫc77に類例がみられ，中世前半と後半の過渡期（中世Ⅱ－５期）に位置付けられる資料である。国産陶器には，瀬戸美濃系陶器天目茶碗（**1414**）・碗（**1415**），肥前系陶器皿（**1416**・**1417**）・碗（**1418**・**1419**）があるが，いずれも近世の所産である。輸入磁器には白磁Ⅸ類碗（**1420**），青磁Ｄ類碗（**1421**・**1422**）・Ｄ・Ｅ類碗（**1423**・**1425**）・ＢⅡｂ類碗（**1426**）・盤（**1424**）がある。白磁Ⅸ類碗のみやや古い時期の所産であるが，他は14世紀後葉以降に出現するものである。鉢類には，十瓶山窯産須恵器捏鉢（**1427**），楠井産擂鉢（**1428**），東播系須恵器捏鉢（**1429**・**1430**）・備前焼擂鉢（**1431**・**1432**）がある。全てが同時期ではなく，13世紀代の十瓶山窯産須恵器捏鉢を嚆矢として，14世紀代の東播系捏鉢（森田編年Ⅲ－３期），15世紀代の備前焼擂鉢（間壁編年Ⅳ期前半）・楠井産擂鉢と続く。**1432**は体部内面下半が使用によって摩滅している。土師質土器足釜は，楠井ＢⅢ類（**1433**・**1434**）・ＢⅣ類（**1435**）がある。土師質土器鍋（**1436**）は，口縁部の外反が特に外面において緩やかな，非楠井系統のものである。備前焼壺・甕類（**1437**～**1440**）は，間壁編年で**1439**がⅣ期前半，**1438**がⅣ期後半にあたる。この他，近代と思われる型作りの土人形（**1441**），古代末～中世前半の平瓦（**1442**），５世紀末葉～６世紀初頭の須恵器杯身（**1445**），７世紀中葉の須恵器杯身（**1443**），８世紀初頭の須恵器杯身（**1444**），サヌカイト製石鏃（**1446**）がある。

３．区画４

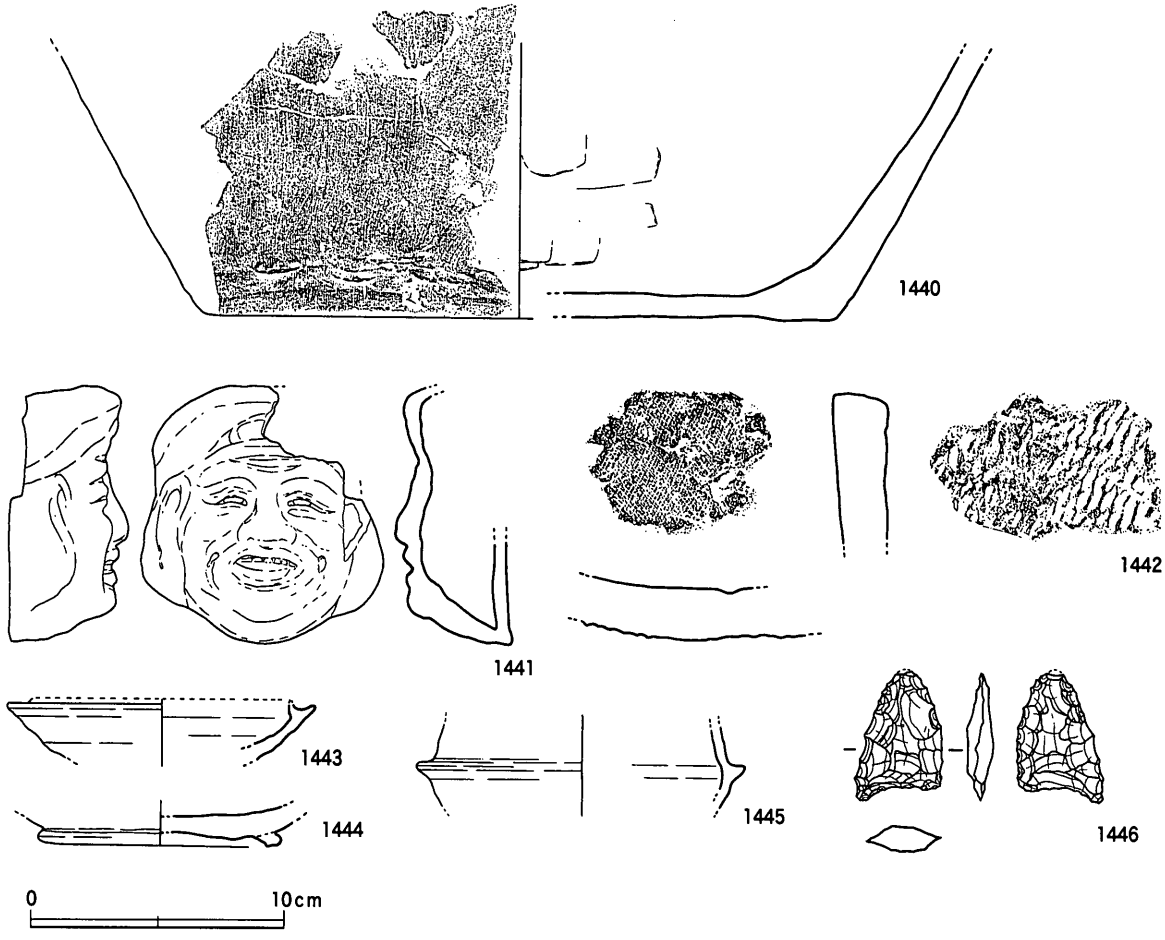
(1) 小区画の配置



第204図　Ⅱ－１・Ⅲ－２区中世包含層出土遺物（１）（1/3）



第205図　Ⅱ－１・Ⅲ－２区中世包含層出土遺物（２）（1/3）



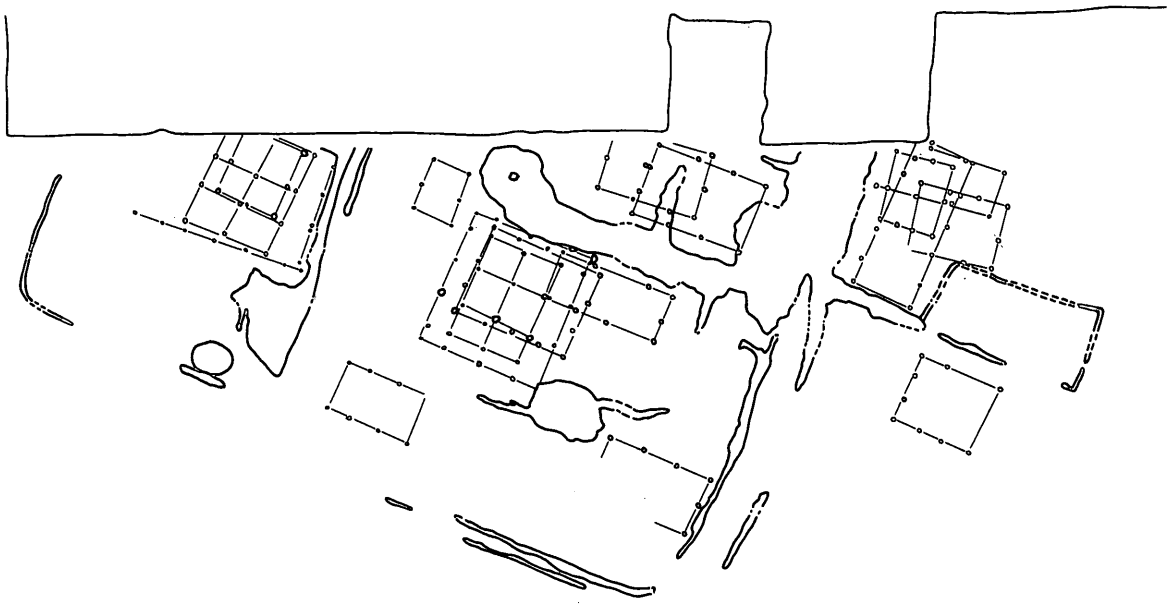
第206図　Ⅱ－１・Ⅲ－２区中世包含層出土遺物（３）（1/3，1446は2/3）

区画４は，西辺と南辺が条里型地割の坪境にほぼ合致する区画であり，その範囲は東西69ｍ，南北48ｍを測る。この範囲が小規模な溝によって細分され，掘立柱建物の分布がこれに一致することから，既に概報段階で指摘されているように，ａ～ｅの５つの小区画に区分することが可能である。なお，小区画ａの北側にはもう１区画が想定されるため，本来的には小区画の数は６つに分けられることになる。区画全体を囲繞する施設は検出されていないが，西辺・南辺については近世～近代の溝ＳＤf94・95が坪界線上にあるため，区画４に伴う先行する溝が存在した可能性もある。やや内側には幅・深さともに小規模なＳＤf53・62・63などが検出されているが，これらを詳細にみると２時期の変遷が指摘できる可能性がある（３－(4)－ａ参照)。つまり，当初は小区画ａ・ｂ・ｃが囲繞されていたものが，後に東側に拡張されて小区画ｄ・ｅが取り込まれたという見通しが提示できる。このことは，小区画ｄ・ｅのピットの密集度が他者よりも低いことからも推測できる事象である。

なお，各小区画の間には２条の小溝ないし空閑地によって遺構の存在しない部分が帯状に連続しており，通路としての可能性がある。ただし，検出面では踏み固めや汚れなど，通路の存在を示唆する基盤層の変化を認めることはできなかった。

(2) 小区画ａ（区画４－ａ）

ａ．区画範囲と区画施設



第207図　区画４概略図（1/500）

西辺と南辺をＳＤf53に，東辺と北辺をＳＤf54によって画された小区画である。規模は東西17.0m，南北16.8mを測り，ほぼ方形の範囲が区画されていることになる。

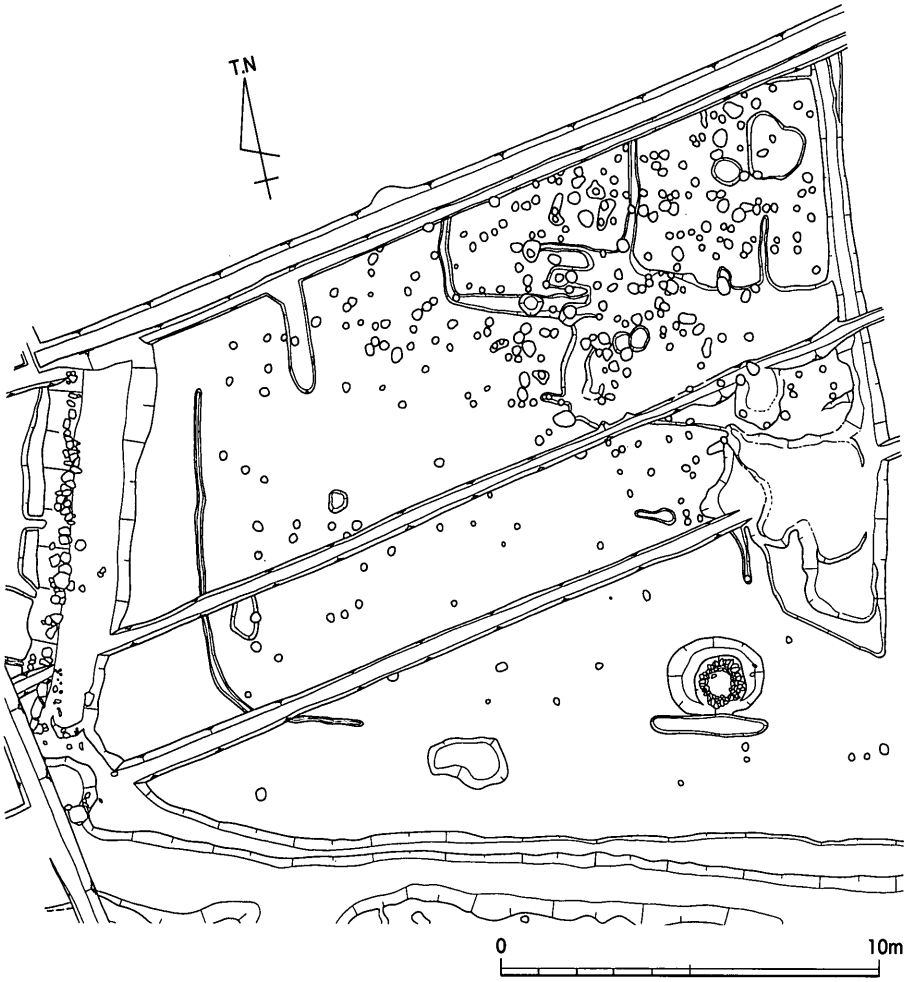
ＳＤf53（第209図）

小区画ａの西・南側を画するＬ字プランに延びる小溝である。西辺と南辺の屈曲部は鋭角的には曲がらず，緩いカーブを描く。西辺の検出長7.8m，南辺の検出長3.9mを測り，両端は途切れるが，南辺の東側延長部で再びみられることから，本来は小区画ａの西・南辺を連続的に区画していたものと推測できる。なお，南辺部ではＳＥf01の掘り方埋土を切り込んでいる。溝幅0.15～0.2m，深さ0.06mを測り，断面逆台形を呈する。

ＳＤf54（第209・210図）

小区画ａの東・北側を画する小溝である。南北の検出長10.3mを測り，南端はＳＫf65・66の東辺部に繋がっており，底面がＳＫf65底面礫敷きよりも高いレベルにある。埋土には溝幅0.6m，深さ0.11mを測り，断面は底面が丸味をもった皿形を呈する。埋土には炭化物粒を含む。なお再掘削の痕跡がみられないが，北端部の東肩部で２段掘りになっている部分があり，部分的な掘り直し（溝浚え）が行われていた可能性はあろう。

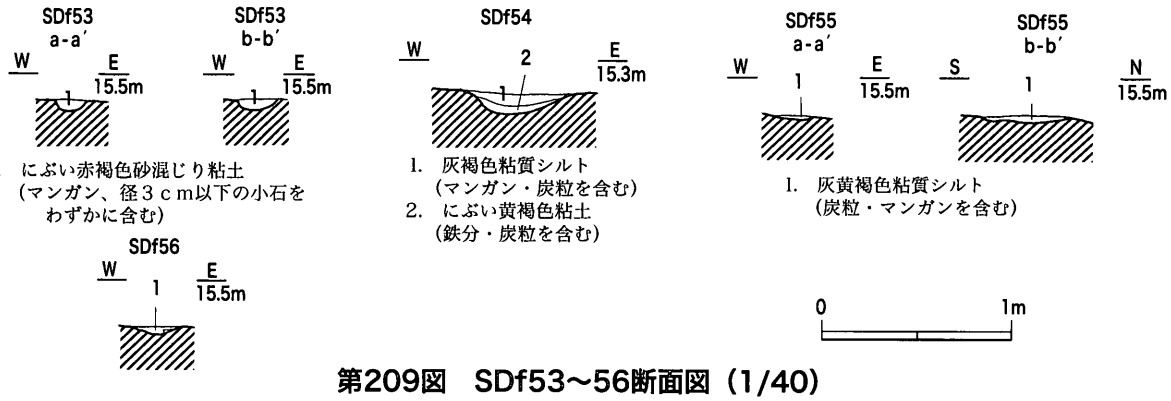
遺物はコンテナ1/4箱分程度出土している。土師質土器皿には，小口径の浅い形態のもの（**1447～1450**）と，大口径のもの（**1451～1456**）がある。前者は口径8.6～9.2㎝であり，口縁部内面に板ナデ様の木目の擦痕がみられることから，板状工具による口縁部調整（回転利用）が想定される。胎



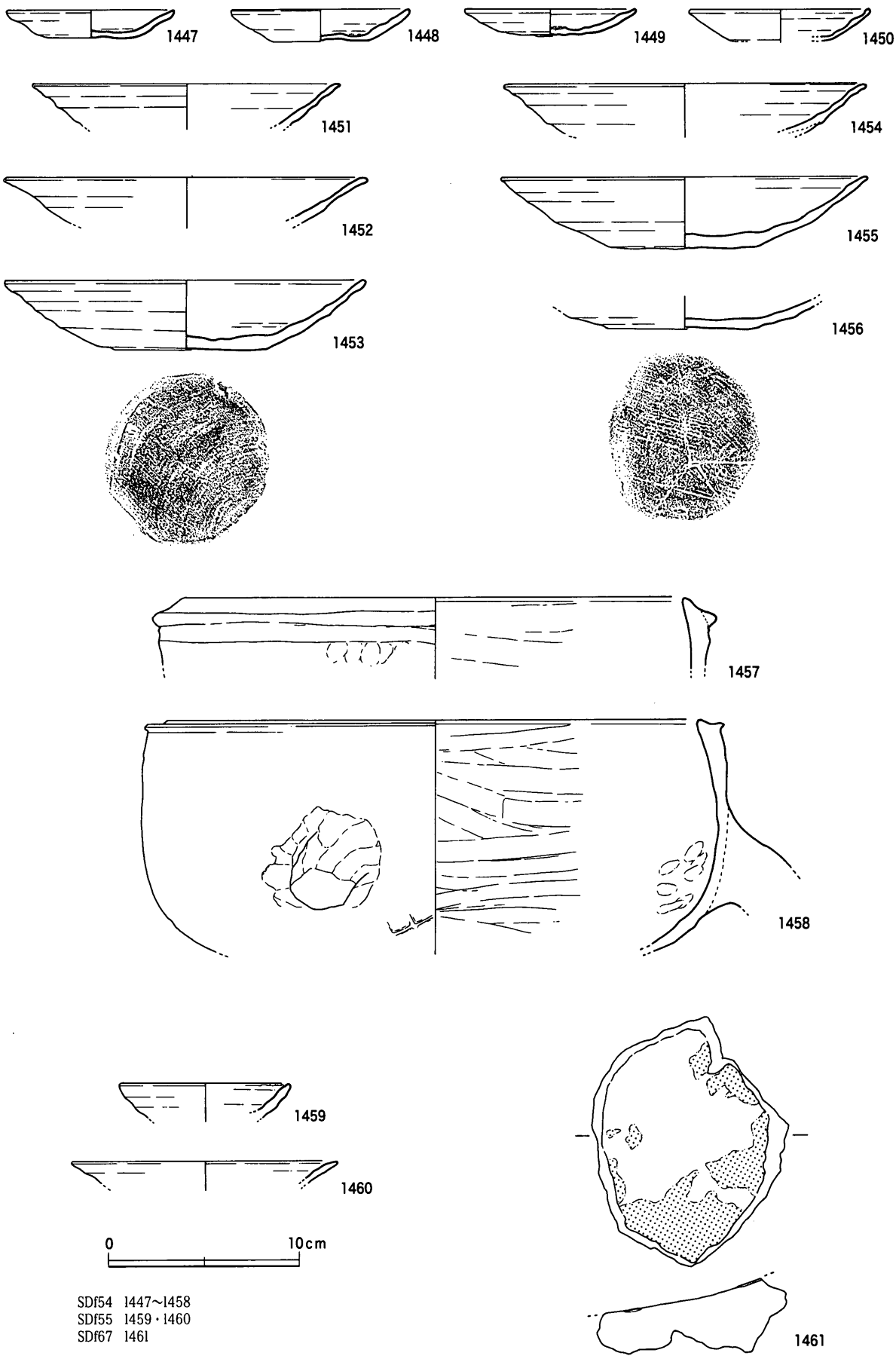
第208図　小区画a（区画4－a）平面図（1/200）

土は赤褐色ないし褐色に発色しており，細部は異なるものの同様な形態・胎土のものが前田東・中村遺跡C区ＳＫ01に存在する。後者は口径16.0～19.0㎝を計り，強い回転ナデ調整によって段状に連続するロクロ目が外面に認められる。また体部は直線的で顕著に外傾する。底部には静止糸切りが施される。現在までのところ，周辺地域での類例は確認できず，西讃地方の天霧城跡や大門遺跡などで近似したものがみられるが，口径が若干大振りであり法量的な差異が指摘できる。土師質土器足釜（**1457・1458**）は，口縁部長が短く鍔部も短い縁帯状の形態を呈する。楠井C類にあたり，足釜としては最も新しい特徴を備える。

以上，出土遺物は少量であるが各器種ともに型式的なまとまりがあることが指摘でき，短期間の一括資料として把握できる内容をもつ。編年的位置付けは第５章第１節で検討するが，区画３のＳＤf48下層中位出土土器よりも後出的な器種組成と形態であり，足釜の特徴や大皿の類例から16世紀前葉～中葉頃とするのが妥当であろう。ただし，これは溝の最終的な存続時期を示すものであり，上記したような掘り直しの可能性も考慮するならば，より遡る時期から区画溝として存在したことが推測できる。



第209図　SDf53～56断面図（1/40）



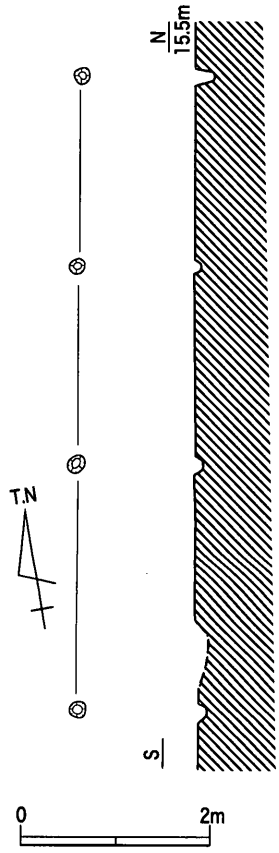
SDf54 1447～1458
SDf55 1459・1460
SDf67 1461

第210図　SDf54・55・67出土遺物（1/3）

ＳＤf55・56（第209・210図）

ＳＫf66に繋がる小溝である。ＳＤf55は溝幅0.24～0.43ｍ，深さ0.02～0.04ｍを，ＳＤf56は溝幅0.26ｍ，深さ0.04ｍを測り，断面形態は極めて浅い皿形を呈する。ともに埋土には炭化物粒を含む。両溝によって東西4.5ｍ，南北4.1ｍ以上の範囲の小規模な区画が作られ，付近では多数のピットが検出されたが，これに対応する掘立柱建物は復元できず，建物に伴う雨落ち溝かどうかは明確にできなかった。

遺物はごく少量出土しており，ＳＤf55出土のものを図示した。土師質土器小皿と大皿がある。小皿（**1459**）は，やや厚手の器壁をもつ。大皿（**1460**）はＳＤf54出土と同様，西讃地方でみられるものである。限られた遺物量ではあるが，やはり16世紀前葉～中葉に位置付けることができよう。



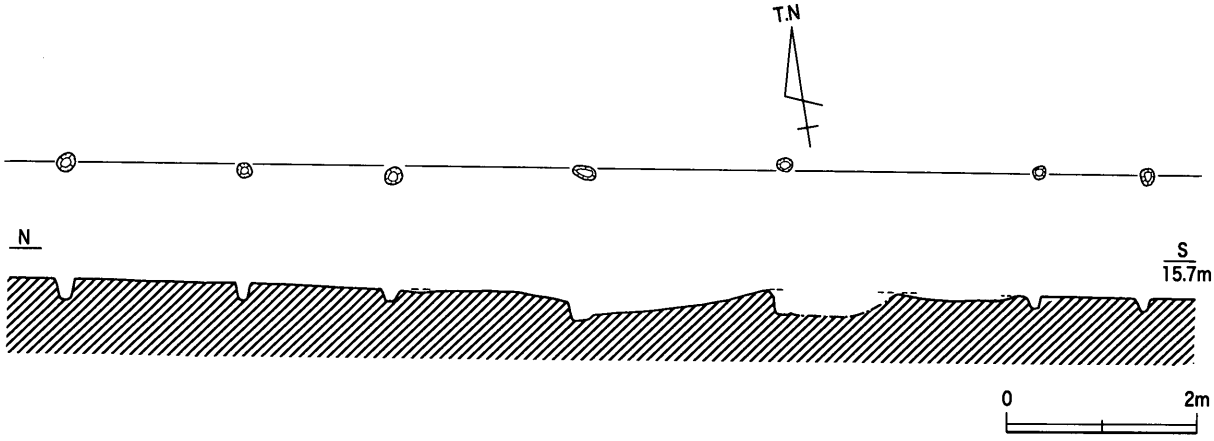
第211図　SAf02平・断面図（1/80）

ＳＡf02（第211図）

ＳＤf54の西側0.6ｍの位置を南北方向（Ｎ－10°－Ｅ）に延びる東辺部の区画施設である。柱穴は３間分検出されており，南端はＳＡf03と接して収束する。また北端についても小区画ａ北辺の区画溝（ＳＤf54）が存在するため，検出部分で収束するものと考える。したがって全長6.65ｍを測ることになる。北２間分の柱間距離は2.0ｍ前後でまとまるが，南１間分は2.55ｍとやや広い間隔となる。

ＳＡf03（第212図）

ＳＢf27の南辺に接して東西方向（Ｗ－10°－Ｎ）に延びる柵列である。柱穴は６間分検出されており，全長11.4ｍを測る。東端部はＳＡf02に接する。柱間距離は1.15～2.7ｍとかなりばらつきがあるが，そのうち３間分は1.9～2.15ｍの幅に収まり比較的まとまる。ＳＡf02とともに建物を囲む



第212図　SAf03平・断面図（1/80）

目隠し塀的な性格をもつと考えられるが，復元し得た掘立柱建物との関係をみるとＳＢf27南辺とＳＡf03は接近し過ぎているようであり，同時併存が想定できるかどうか，微妙なところであろう。

b．建物

ピットの分布状況

小区画では321個のピットが検出されたが，このうち掘立柱建物として復元できたのは２棟，柵列として復元したのは２基，ピット数に換算して27個であり，検出数全体のわずか8.4％に何らかの構築物としての解釈を与えたのに過ぎない。

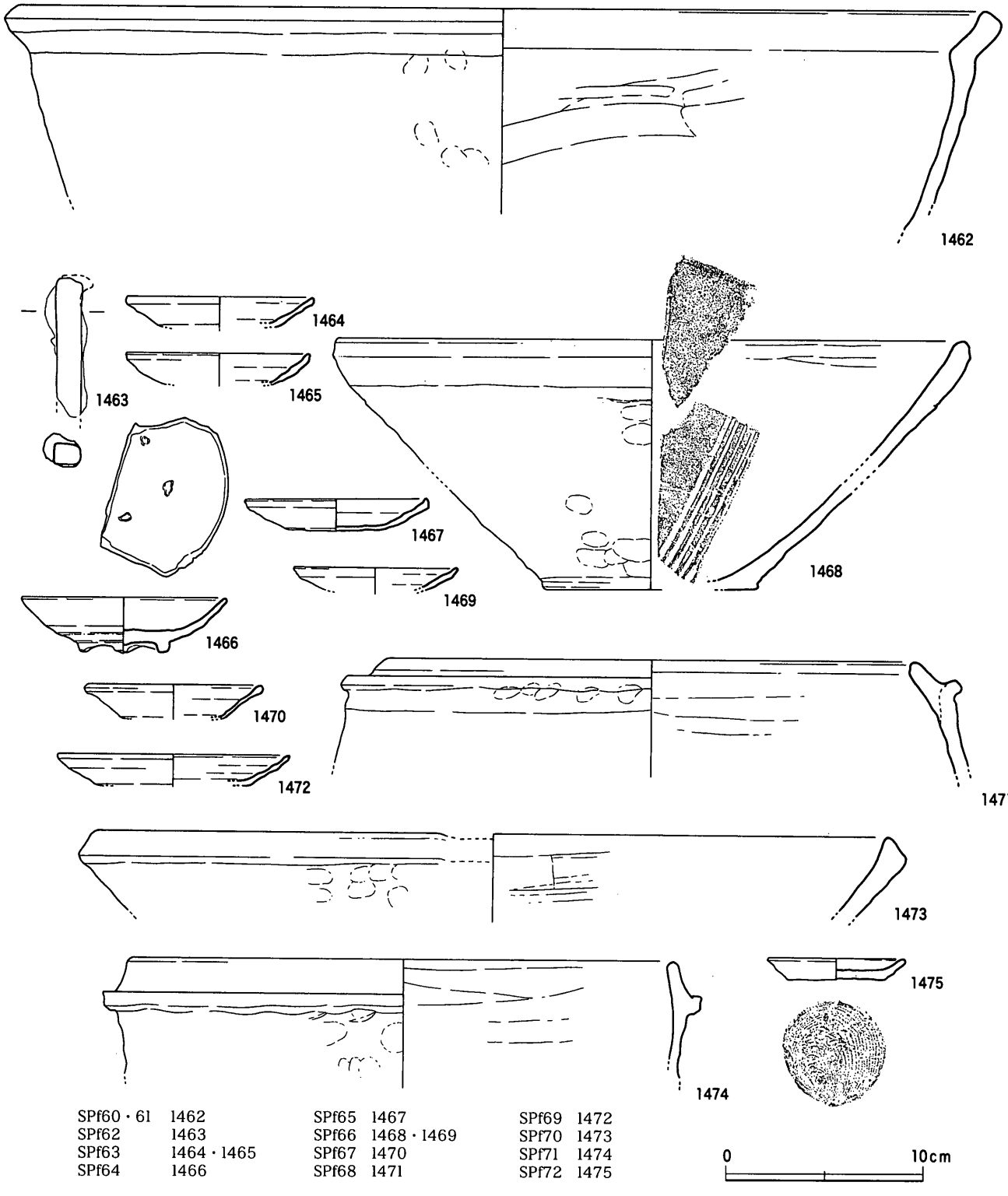
ピットは多くがＳＡf03よりも北側にあり，ＳＡf03以南のピットはわずか65個（20.2％）にとどまる。ＳＡf03が小区画ａの南北長を２等分する位置にあることを念頭に置くと，ＳＡf03以北での密集した分布状況とＳＡf03以南での散漫な分布状況が明確に看取できる。ＳＡf03以北の密集状況は，数次にわたる建物の建て替えを確実に含むと考えられるため，ピット群は短期間のうちに形成されたものではなく，かなりの長期間の集積を示しているとみるのが妥当である。なお，ＳＡf03以南では散漫な分布にもかかわらず，掘立柱建物の復元に耐え得るようなピットの配置は認められなかった。

主な出土遺物を図示した。土師質土器皿には，直線的に外傾し「口縁部→体部ナデ手法」が施されているとみられるもの（**1464・1465・1467・1469**）が注目される。これらは空港跡地ＩのＳＫc74出土の皿の系統にあたるものと考えられ，口縁部・体部がより直線的であることや浅手の器体をもつことに，異なった形態的特徴をみることができる。おそらく時間差を伴った型式差と考えられ，ＳＰf66で楠井産擂鉢ＢＩ類（**1468**）を伴うことから，ＳＫc74よりも後出する15世紀末葉～16世紀前葉頃に位置付けられるものであろう。土師質土器皿にはこの他，外反気味で端部が丸く肥厚する口縁部をもつもの（**1470**）や，口径の大振りな薄手のもの（**1472**）があるが，系統的位置付けが明確にできない。また1475の小皿は中世前半まで遡るものである。白磁皿（**1466**）は，高台に４方向の抉りを入れるもので，森田分類のＤ群にあたる。高台付近は露胎で，見込みには重ね焼きの際の目跡が４箇所（３箇所遺存する）認められる。14世紀末葉～16世紀の年代幅で捉えられるものである。楠井産擂鉢には，上記した**1468**の他にＡⅡ－１型式（**1473**）がみられ，14世紀中葉～後葉の所産と考えられる。土師質土器足釜（**1471・1474**）は，楠井ＢⅢ形式であり，既に報告したＳＤf54出土の足釜に比べて口縁部や鍔部の形態に先行的な特徴が指摘できる。楠井窯での編年から，14世紀中葉～後葉の年代が考えられる。土師質土器鍋（**1462**）は，頸部が明瞭に外反しており，口縁部が内弯することから楠井ＢⅡないしＢⅢ形式に近似するが，口縁部が短く太い形態的特徴は楠井窯産ではほとんど認めることができない。

遺物の年代観を総合すると，概ね16世紀前葉頃を下限とするようであるが，中に14世紀中葉～後葉に位置付けられるものが存在することに注意したい。周辺調査区で14世紀代の集落遺構が検出されていないことから，単なる「混入」と解釈するのではなく，密集するピット群の上限を示す資料として位置付けておく。

ＳＢf27（第214・216図）

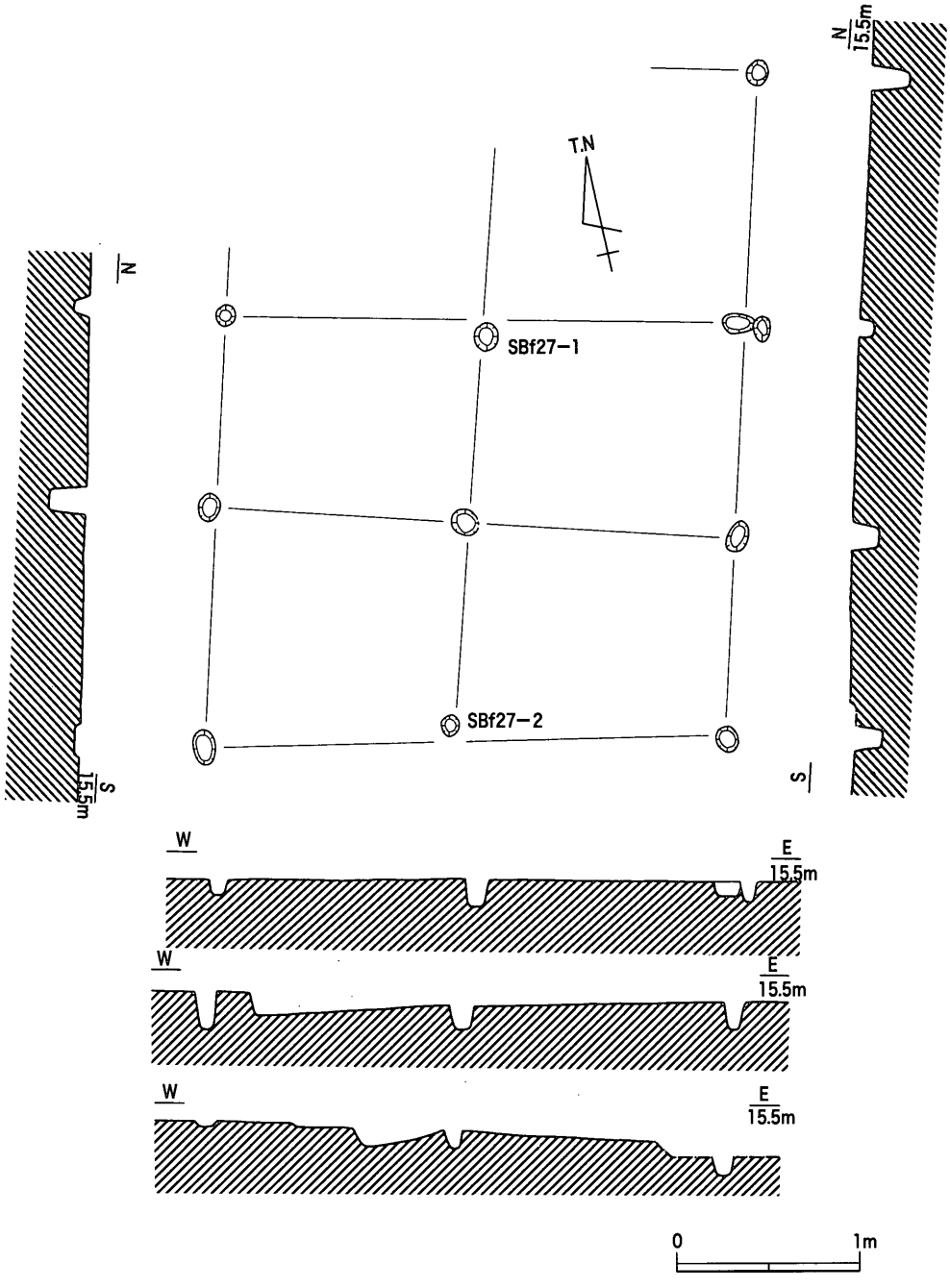
ピットの密集範囲で復元できた２×３間（梁間5.7ｍ，桁行7.2ｍ，床面積41.04㎡）の総柱建物で



SPf60・61	1462	SPf65	1467	SPf69	1472
SPf62	1463	SPf66	1468・1469	SPf70	1473
SPf63	1464・1465	SPf67	1470	SPf71	1474
SPf64	1466	SPf68	1471	SPf72	1475

第213図　区画4ーaピット出土遺物（1/3）

ある。主軸方向はN－15°－Eであり，周辺地割と概ね一致する。柱穴は，やや不揃いに並んでおり，平均柱間距離は梁間で2.9m，桁行で2.3mを測る。柱穴底面のレベルも一定していないが，中央部の柱穴は側柱と同じ深さをもつ。このため，建物構造として床を支える束柱か，梁を支える柱（土間）か，判断が難しい。他の遺構との切り合いは，建物南半部でＳＫf66と重複しており，その底面で検出され

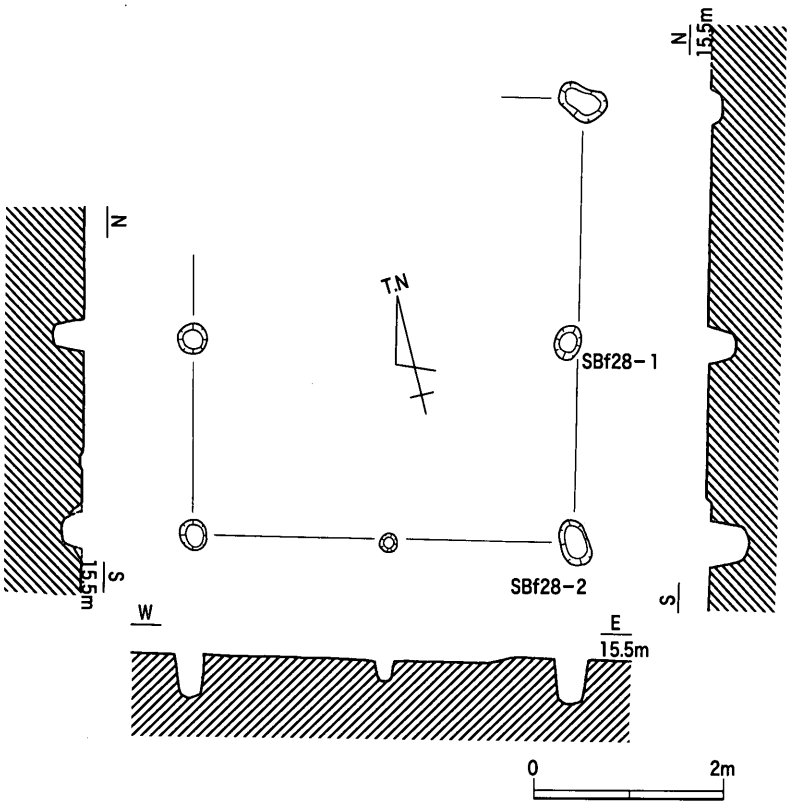


第214図　SBf27平・断面図（1/80）

たことから，ＳＢf27→ＳＫf66の前後関係が判定できる。

伴出遺物は，土師質土器足釜脚部（**1476**）と備前焼壺（**1477**）を図示した。**1476**は脚部先端に木目状圧痕がみられる。楠井窯でも同様な痕跡がみられたが，これは粘土を圧延して円柱状の脚部を作る際に，作業台の板の圧痕が転写されたものと考えられる。**1477**は若干潰れたような玉縁状口縁をもっており，間壁編年Ⅳ期前半に位置付けられる。

出土遺物からは15世紀前半という年代観が与えられるが，これは後出するＳＫf66の16世紀前葉〜中葉という年代観と矛盾しない。ただし一般的に認められる備前焼の使用年数の長さを考慮するならば，遺物の年代観はあくまで上限を示すとみた方がよいかもしれない。



第215図　SBf28平・断面図（1/80）

ＳＢf28（第215・216図）

ＳＢf27と重複する位置にある２×２間（梁間4.03ｍ，桁行4.55ｍ，床面積18.34㎡）の側柱建物である。主軸方向はＮ－15°－Ｅであり，周辺地割と一致する。柱穴はほぼ直線に揃っており，平均柱間距離は梁間2.01ｍ，桁行2.2ｍ（南１間分2.05ｍ，北１間分2.5ｍ）である。柱穴底面のレベルは一定していないが，特に南辺の中間柱穴が直径・深さともに小規模であることが注意される。この柱穴が他者とは異なる補助柱を据えたものであるとすれば，棟の方向が南北であることをより明確に示すことになる。南辺柱穴列はＳＫf66の底面で検出されたことから，ＳＢf28→ＳＫf66の先後関係が想定できる。

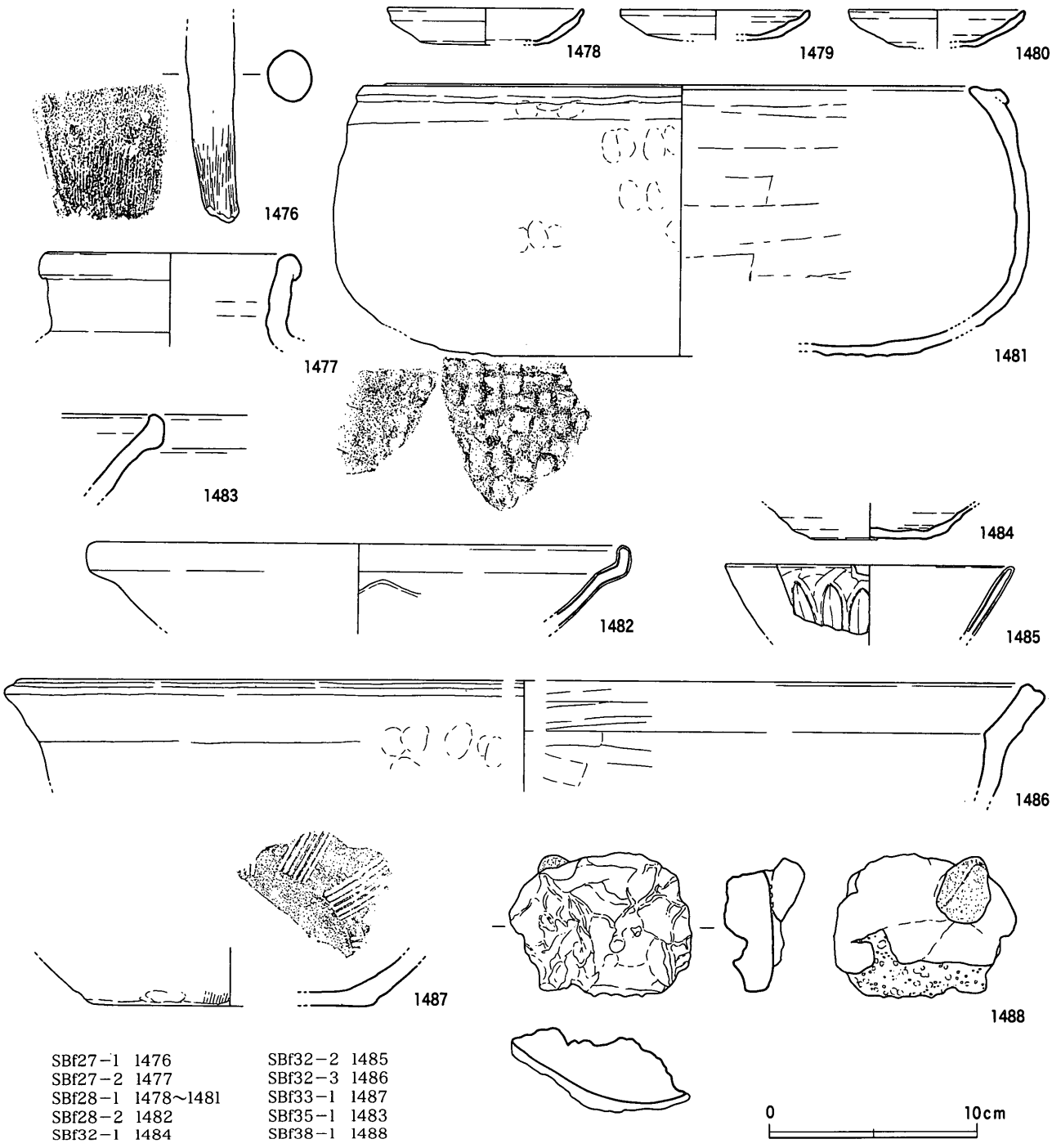
遺物は，東辺中間柱穴（ＳＢf28－１）より土師質土器皿と足釜がまとまって出土した。土師質土器皿（**1478～1480**）は，体部が著しく外傾しており，口縁部はやや内弯気味に伸びる。口縁端部外面には「口縁部→体部ナデ手法」による段状のナデ痕跡が明瞭に認められ，空港跡地ＩのＳＫc74の系統に該当することがわかる。伴出した土師質土器足釜（**1481**）は，口縁部が極端に短く，鍔も潰れた縁帯状をなしており，楠井Ｃ形式にあたる最も後出的な形態をもつ。底部外面の格子叩き目は，1.0㎝角の粗い格子からなっており，使用原体からも後出的な傾向が指摘できる。第４章第１節での検討対象としたいが，皿・足釜ともに16世紀前葉～中葉の年代観が付与できるものと理解する。この他，南東隅の柱穴（ＳＢf28－２）から外反する頸部と直立する口縁部をもつ青磁鉢（**1482**）が出土している。内面には，線彫りによる波状文のような文様が認められる。年代的位置付けは難しいが，15世紀前半にピークがあるとみられている（横田・森本・山本1989）。

以上から，16世紀前葉～中葉の幅の中で，ほぼ同時期の遺物を出すＳＫf66よりも先行する時期に，ＳＢf28の存続期を想定することが可能であろう。

ｃ．井戸・土坑

ＳＥf01（第217・218図）

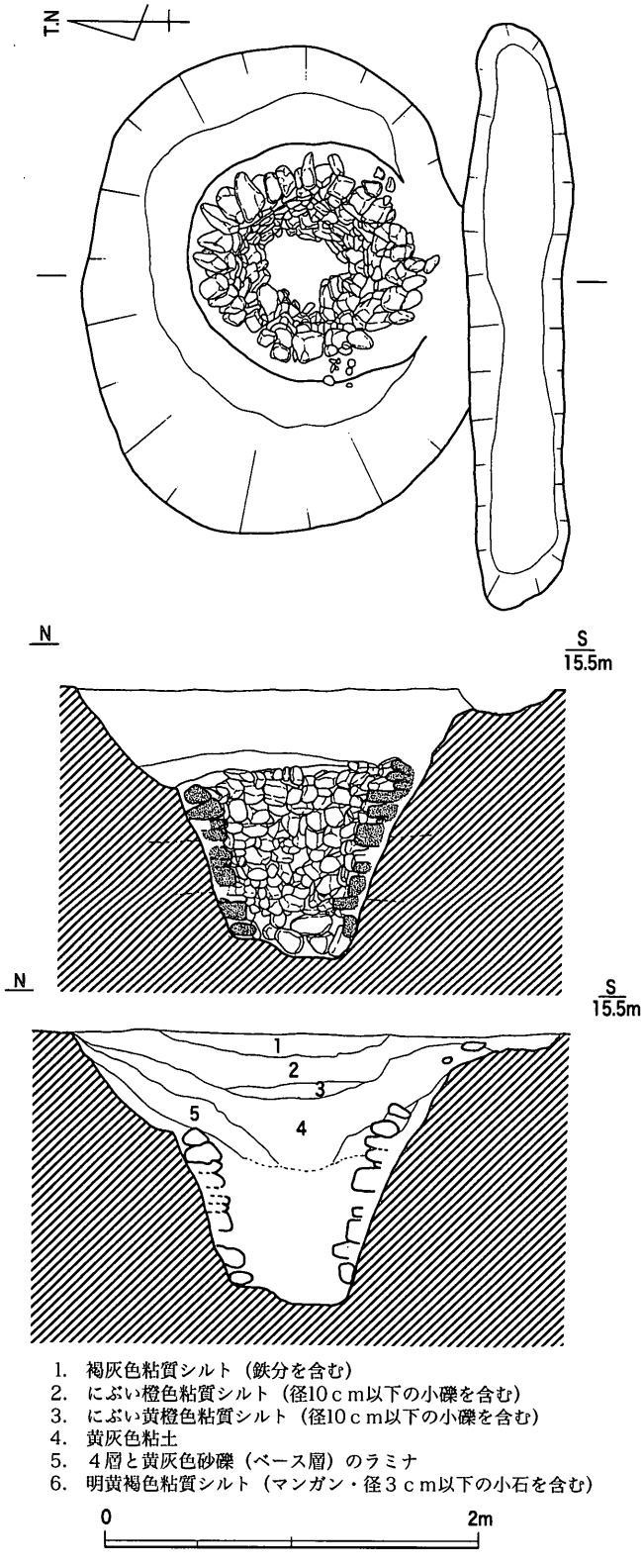
小区画ａの南東隅部に位置する石積み井戸である。掘り方は平面楕円形，断面はやや深い逆台形を呈しており，長径2.55ｍ，短径2.25ｍ，深さ1.41ｍを測る。検出面より0.4ｍ前後下ったところで掘り方北・東・西部に平坦面があり，全体としては２段掘りのような掘り方の形状をもつ。この平坦面部



第216図　区画4掘立柱建物出土遺物（1/3）

分より下位で石積みの井側が検出されたため，この部分より上側を掘り方上部，下側を石積み部ないし掘り方下部と呼称する。石積み井側は長径15〜20㎝，短径７〜15㎝の円礫ないし亜円礫（大半が砂岩で２〜３割程度花崗岩が混じる）を平面円形に小口積みして作られている。石積みは12〜13段確認でき，掘り方壁面に沿って積まれているため，上側ほど直径が大きく開いたかたちになる。上端での内径は0.95ｍ，基底部での内径は0.45ｍ，石積み高1.00ｍを測る。

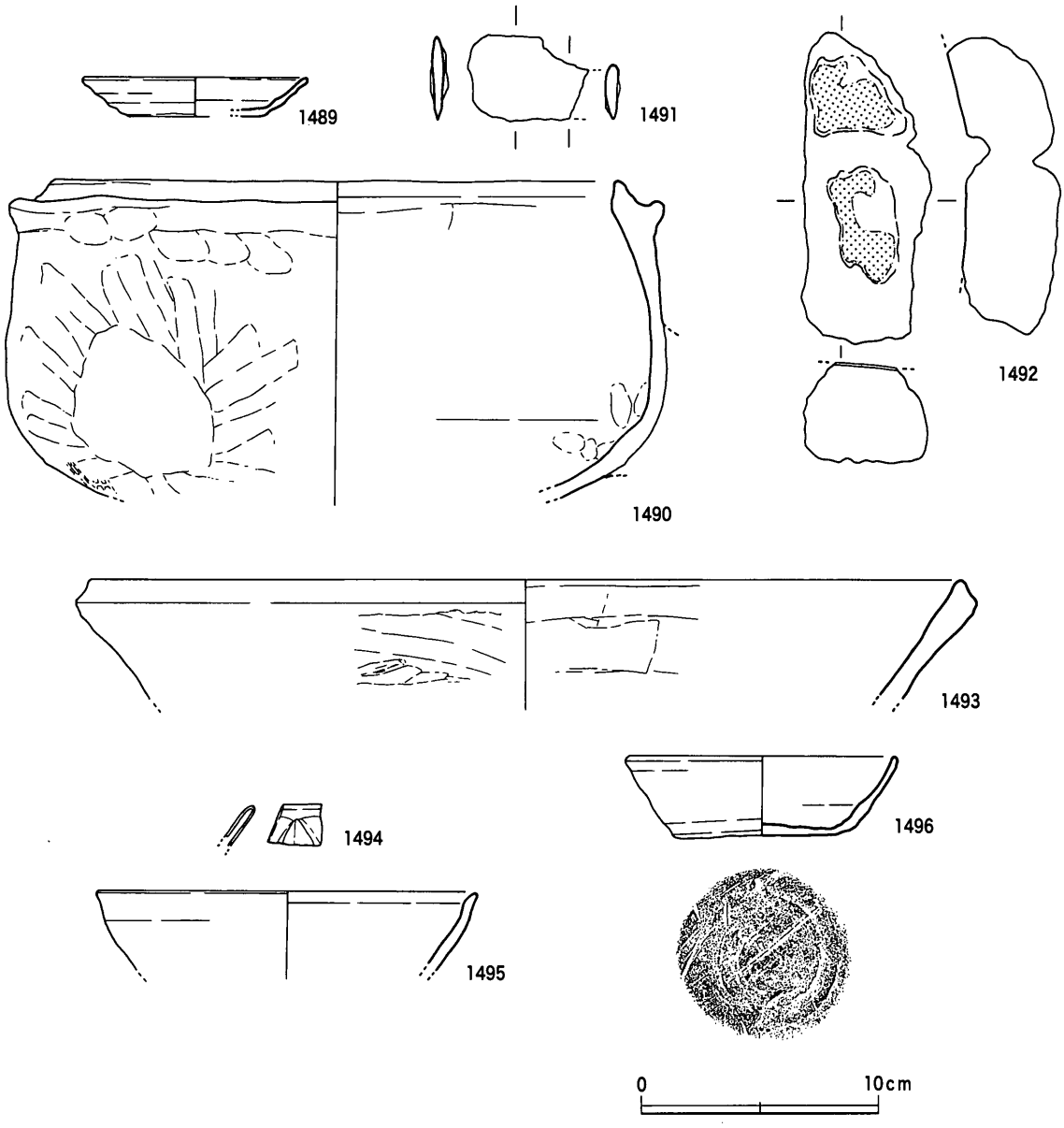
掘り方上部の埋土は，いずれも石積みの上側ないし内側に堆積しており，石積み構築以後に堆積したことが明確である。堆積状況をみると，４層が基盤層の表層に由来するとみられる粘土層，５層が４層と基盤層下位に由来するとみられる砂礫層の互層堆積がみられることから，少なくとも４・５層は人為



第217図　SEf01平・断面図（1/40）

的な埋め戻しによる可能性がある。とすれば石積み上端部が本来からこのレベルで存在したのか，あるいは埋め戻しの際に遺存するレベルまで破壊されたのかが問題となる。５層は石積み上端をかすめるように堆積していたことや，遺存していた石積み上端でやや開き気味に積まれていることを考慮すると，検出された石積み上面が本来の形状をとどめているとみてよかろう。なお，掘り方上部埋土（４層）が小区画ａの区画溝ＳＤf53に切り込まれており，ＳＥf01の埋め戻し→ＳＤf53の掘削という先後関係が読み取れる。

遺物は，掘り方上部埋土と石積み内部埋土，石積み中より出土した。掘り方上部埋土からは，土師質土器皿（**1489**）・足釜(**1490**)，鉄製刀子片（**1491**），鋳型状土製品（**1492**）が出土した。**1489**は編年的位置付けが難しいが，14世紀頃の遺構にはみられないことから15世紀以降の所産と考えられる。**1490**は短く内傾する口縁部と基部が太く短い鍔部からなる，楠井ＢⅣ形式の足釜である。楠井窯の編年では14世紀末葉～15世紀前葉に位置付けられるものである。鋳型状土製品（**1492**）は内弯したカーブを描く面をもち，そこが暗灰色に還元していることから，鋳型の可能性が考えられるものである。ただし，用いられている粘土は比較的大きな砂粒が多く含まれており，真土としては不適なように考えられ，鋳型とは断定できない。石積み内埋土からは楠井産擂鉢（**1493**），青磁碗(**1494**)，瀬戸平碗（**1495**）が出土した。楠井産擂鉢は楠井ＡⅡ形式にあたり，端部のツマミ上げが顕著ではないことから14世紀中葉～後葉の所産と考えられる。青磁碗は，外面に鎬蓮弁を彫り込むもので，横田・森田分類Ⅰ－５ｂ類碗である。細片であることから，直接的に遺構の時期を示すものではない。瀬戸平碗は，外傾する体部からやや内側に弱く屈折し，外反する端部をもつもので，古瀬戸後期様式Ⅲ期（15世紀第２四半期頃）に属する。また石積み内埋土の中～下位からは，ほぼ完形の土師質土器杯（**1496**）が出土している。区画３のＳＤf48下層中位出土杯



第218図　SEf01出土遺物（1/3，1491・1492は1/2）

と同型式であり，中世Ⅱ－５期（13世紀末葉～14世紀前葉）の所産であると考えられる。

以上から，ＳＥf01の時期を考える。石積み内埋土出土の**1496**は遺存状態が良好であり，古い遺物の単なる混入と考えるよりも，石積み内埋土の堆積の上限を示す遺物とみることができるのではなかろうか。したがって，井戸の構築時期は13世紀末葉～14世紀前葉にまで遡る可能性がある。石積み内埋土出土の他の遺物（**1493**・**1495**）は14世紀中葉～15世紀前葉の所産であり，やはり堆積年代の一端を示すものと捉えられる。また，掘り方上部埋土は井戸の廃絶年代を示す資料であるが，足釜は14世紀末葉～15世紀前葉に位置付けられ，**1495**に近接した年代観を示す。ただし，土師質土器皿の年代観が明確でないため，廃絶がこれよりも下降する年代である可能性も否定できない。

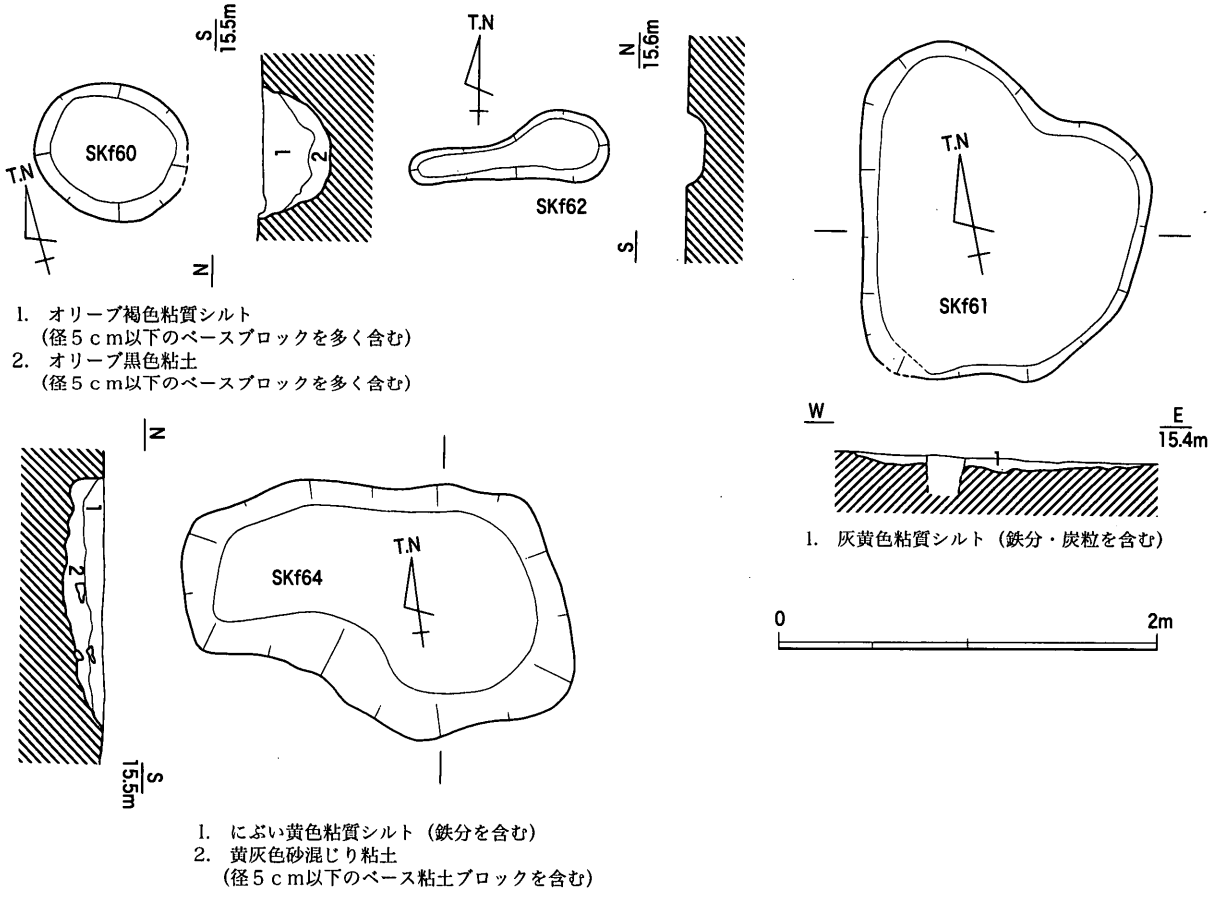
土坑（第219図）

小区画ａでは，区画溝ＳＤf53の外側に隣接するものも含めて５基の土坑が検出された。その分布状

況は，建物・ピットの集中部に２基（ＳＫf60・61），小区画南半部に２基（ＳＫf62・63），小区画南辺溝外に接して１基（ＳＫf64）みられ，極めて散漫な在り方を示す。個々の状況については第219図を参照されたい。土坑の形態は一定しておらず，また遺物の出土量も極めて少量であることから，廃棄土坑などの性格も考え難い。

d．大型土坑

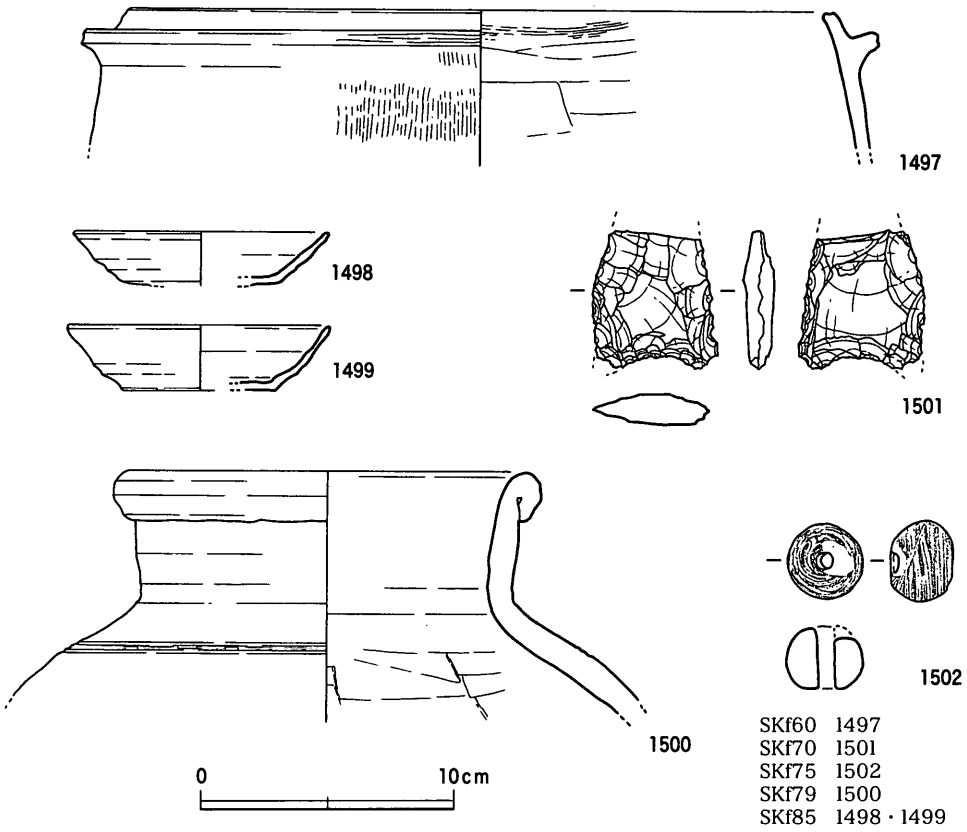
小区画東辺部中央～南部で平面長方形の浅い大型土坑が検出された。底面や埋土中には多数の礫が認められるのが特徴であり，中には人為的に置かれたことが明確なものもある。これらの性格が単一のものであるのか，あるいは別の要因で形成されたものかは判然としない。



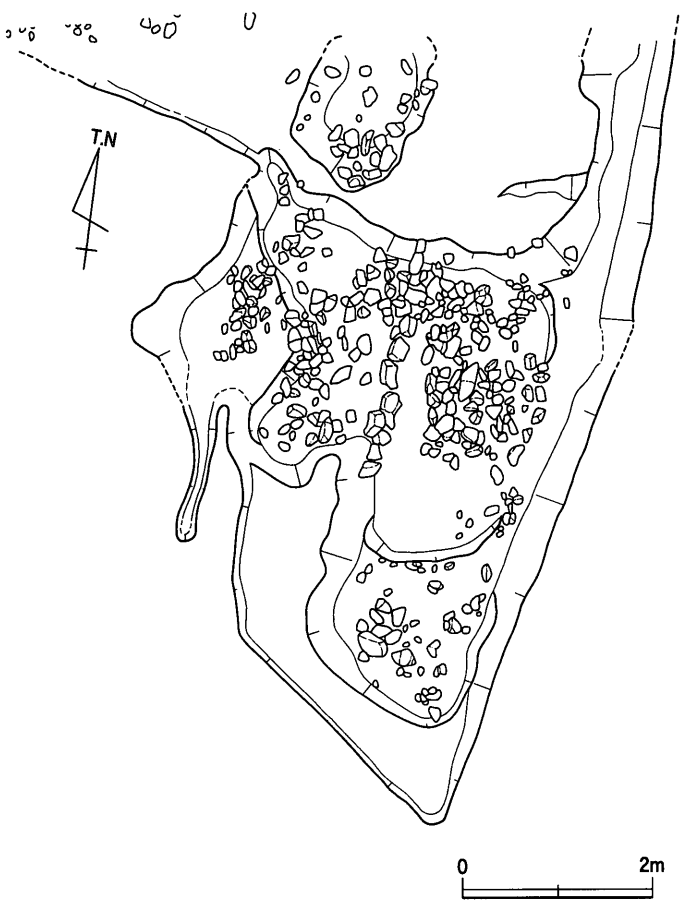
第219図　SKf60～62・64平・断面図（1/80）

ＳＫf65（第221～224図）

小区画ａの南東部で検出された大型土坑で，浅い皿形の断面形態を呈する。検出面でのプランは，南北6.0ｍ，東西4.92ｍの台形を呈しており，東縁部が小区画ａの東辺部と一致する。また，北側に区画溝のＳＤf54が繋がる。底面北半部はさらに一段落ちており，ややいびつな長方形プランの落ち（南北主軸）が東西に２基並列するような形態をもつ。東側の落ちをＳＫf65－ａ，西側の落ちをＳＫf65－ｂと呼称する。ＳＫf65－ａは長径3.15ｍ，短径1.6ｍ，深さ0.2ｍを測り，ＳＫf65－ｂは長径2.85ｍ，短径1.6ｍ，深さ0.18ｍを測る。ともに底面に10～20㎝大の円礫ないし亜円礫による石



第220図　SKf60・70・75・79・85出土遺物（1/3，1501・1502は2/3）



第221図　SKf65全体図（1/80）

敷きがみられ，両者の境界に25～30㎝大のやや大振りな礫を用いて石列を構築する。検出した石敷きの範囲は，ＳＫf65－ａで東西1.27ｍ，南北1.85ｍを測り，ＳＫf65－ｂでは東西1.62ｍ，南北2.47ｍを測る。使用石材は砂岩系のものが多く，花崗岩系のものも少量みられる。また，被熱の痕跡が確認できるものがあるが，置かれた状態で石の裏面にも被熱痕跡がみられることから，被熱した石が転用されていることがわかる。落ちの底面には被熱の痕跡は認められなかった。両落ちを画する石列の主軸はＮ－10°－Ｅであり，長さ2.5ｍを測る。石列は東西どちらか一方に面を揃えることはないが，石列を境とした東西両側の落ちに堆積した土層の状況が明確に異なる。

ＳＫf65－ｂの底面には，基盤層のブロックを多く含んだ粘質シルト（４層）が堆積しており，人為的な整地を示すと考えられる。この土層はＳＫf65－ａに連続せず，石列までで終わる。また同層の上面は，石列上面とほぼ同じレ

第222図　SKf65平・断面図（1/40）

ベルである。したがって，ＳＫf65－ａが存在した段階にはＳＫf65－ｂは埋め戻されていたことが窺え，両落ちに時期差が指摘できる。一方，ＳＫf65－ａは底面直上に砂層（３層）が堆積し，その上面に石敷きが置かれている。石敷きが人為的な施設と考えられることから，その直下の砂層にも何らかの機能的な意味合いが想定できよう。ＳＫf65－ａの石敷き上には，さらにＳＤf54から連続する粘土層（２層）が堆積しており，さらに全体が粘質シルト層（１層）で覆われる。１・２層はＳＫf65が何らかの機能を失って以後に堆積した土層とみてよかろう。

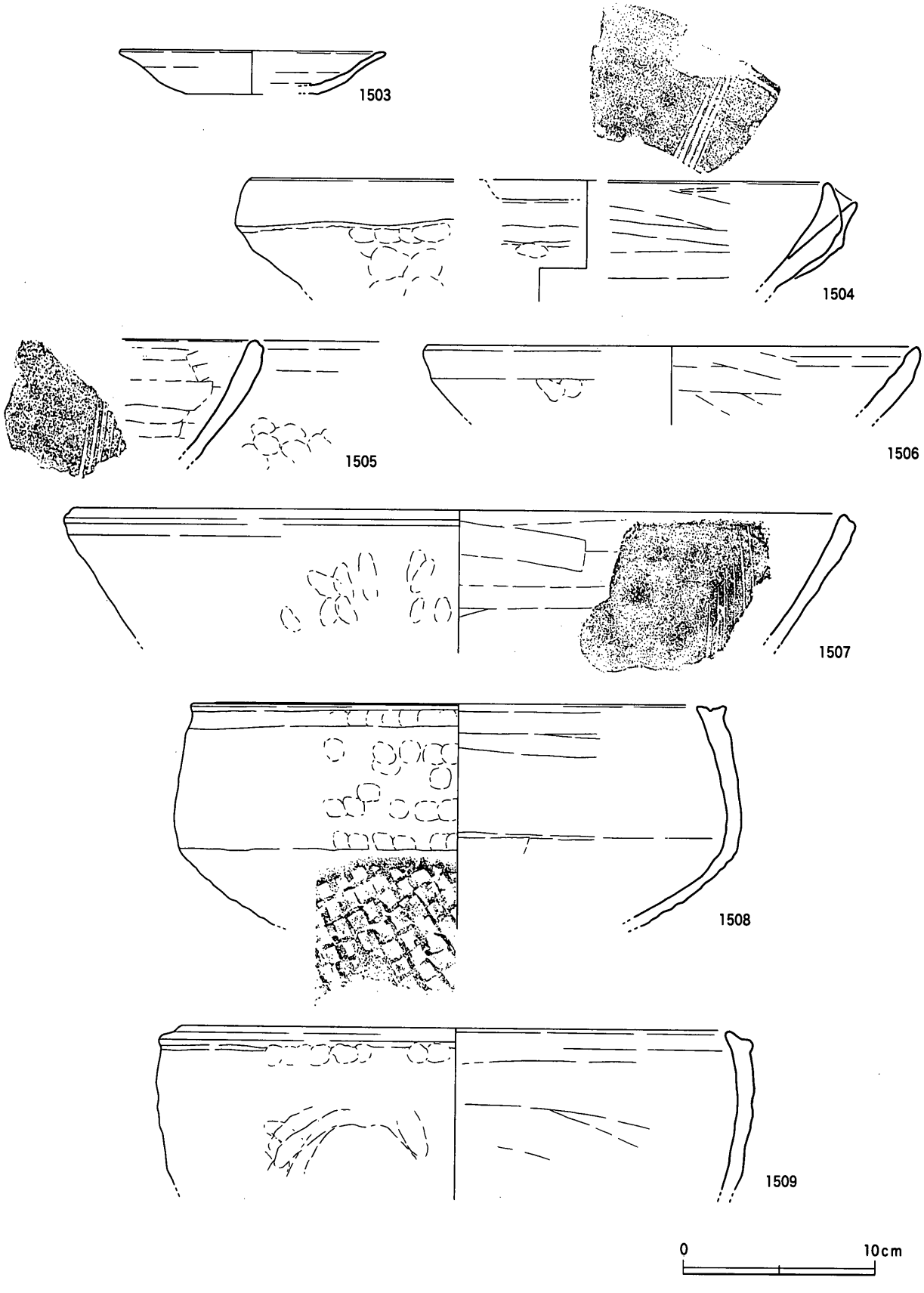
遺物は石敷きの間などから出土したが，人為的に据え置かれたようなものはなかった。土師質土器皿・足釜・鍋・擂鉢，楠井産擂鉢・甕，備前焼甕，北宋銭，須恵器などがある。土師質土器皿（**1503**）は内弯気味に外傾する体部と外反する口縁部からなる。形態的にはＳＤf54でみられたような，西讃地方の系統のものである。楠井産擂鉢には，楠井ＡⅢ類（**1504**）・ＢＩ類（**1505**）・ＢⅡ類（**1506**）がある。土師質土器擂鉢（**1507**）は６本/2.5㎝の粗い卸し目を施し，非楠井産の製品とみられる。土師質土器足釜（**1508**～**1510**）は，極めて短い口縁部と縁帯状の鍔部をもつ，楠井Ｃ類にあたるものである。土師質土器鍋（**1511**・**1512**）は，内面が板ナデ調整を行うために頸部の屈曲が明確であるが，外面は口縁端部以外ほとんど無調整であるため，口縁部と体部が連続的に繋がっている。楠井産甕（**1513**）は口縁部がやや角張った玉縁状を呈している。備前焼甕（**1514**）は垂直方向に長い玉縁状口縁をもち，間壁編年Ⅳ期前半の所産とみられるものである。北宋銭（**1516**）は，至道元宝（995年初鋳）である。須恵器皿（**1515**）は口縁端部内面に沈線を施す，土師器皿の模倣形態である。十瓶山窯では８世紀中葉から認められるが，当初は土師器同様に端部を折り込んで製作しているため，**1515**は初現期のものではない。おそらく８世紀後葉以降のものであろう。

以上から，ＳＫf65は16世紀前葉～中葉を下限とすることがわかる。上限は，土層堆積状況からさほど長期の存続期間を想定することは難しいようであることから，上記の時期幅の中で考えておきたい。なお，遺構の性格については明確にできないが，隣接する井戸ＳＥf01から鋳型状土製品が出土していること，また隣接する小区画ｃにおいて鉄鍋鋳型が出土していることを考慮すると，鋳造関連遺構としての検討の余地もあるといえる。仮にそのような前提でみると，甑炉炉台の基礎部分である可能性が指摘できる。同様な事例は長野県寺平遺跡（14世紀末）で検出されている。とすれば，被熱礫は操業時の再利用ともみられるが，遺構中からは鉄滓や炉壁などの鋳造関連遺物が出土していないため，断定はできない。

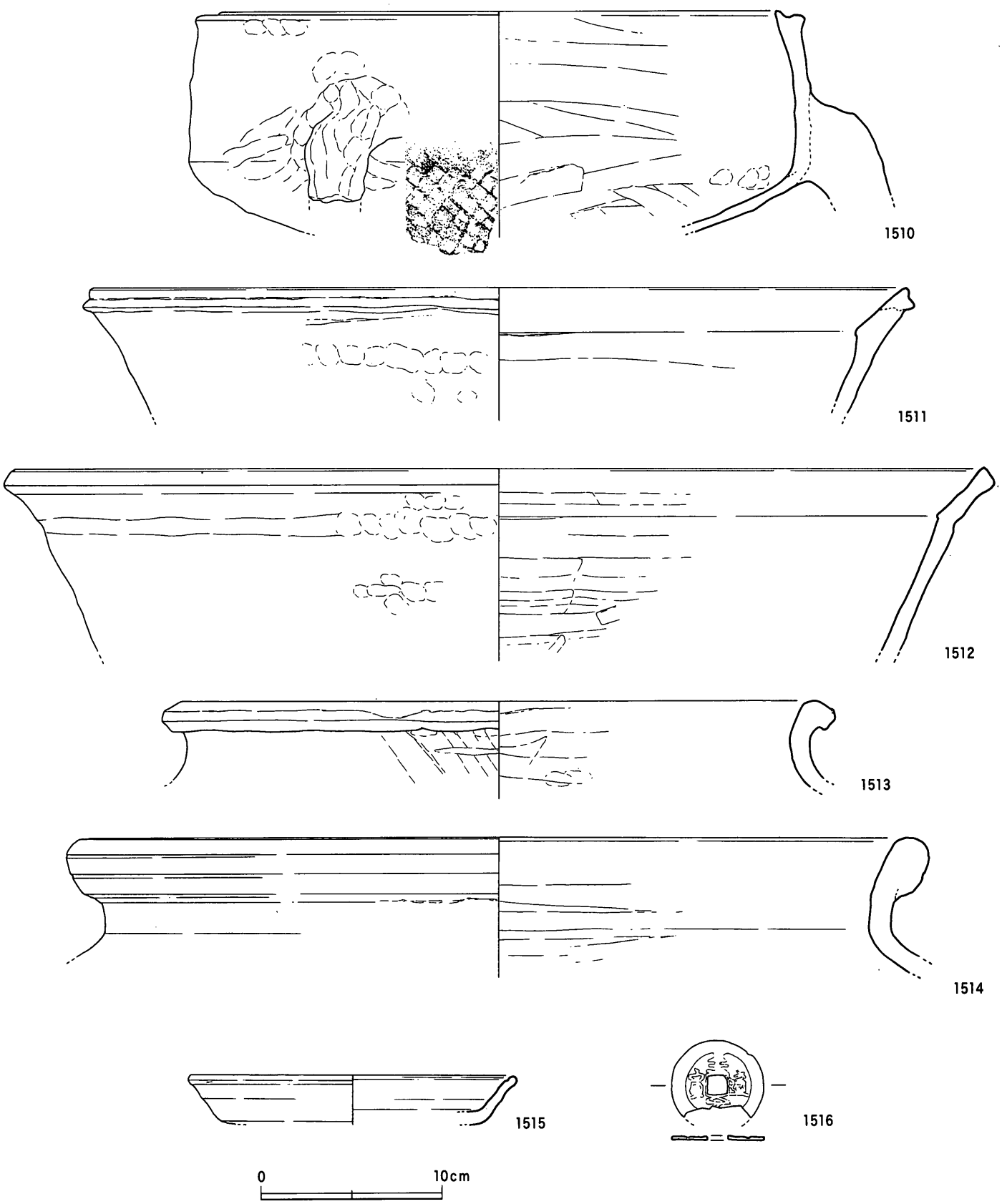
ＳＫf66（第225・226図）

小区画ａ中央部東端でＳＫf65の北側に隣接して検出された大型土坑である。平面形態は東西主軸（Ｗ－10°－Ｎ）の長方形プランを呈しており，東西7.7ｍ，南北3.78ｍ，深さ0.11ｍを測る。底面は若干の凹凸があり，西半部と中央部南端に自然礫の集積がみられた。しかしこれらはＳＫf65のように人為的に敷かれたものかどうか，明確ではない。断面形態は浅い皿形を呈しており，埋土は炭化物粒を含む粘質シルトの単層である。他の遺構との関係は，ＳＤf54～56と繋がっており，これらの小溝に近似した埋土をもっている。

出土遺物としては，土師質土器小皿（**1518**・**1525**）・大皿（**1519**・**1520**）・鉢（**1521**）・足釜（**1525**）・把手付鍋（**1526**・**1527**），楠井産擂鉢（**1522**～**1524**），備前焼甕（**1528**），用途不明鉄製品（**1529**）がある。大皿は西讃地方系統のものである。これらの中で**1521**と**1524**

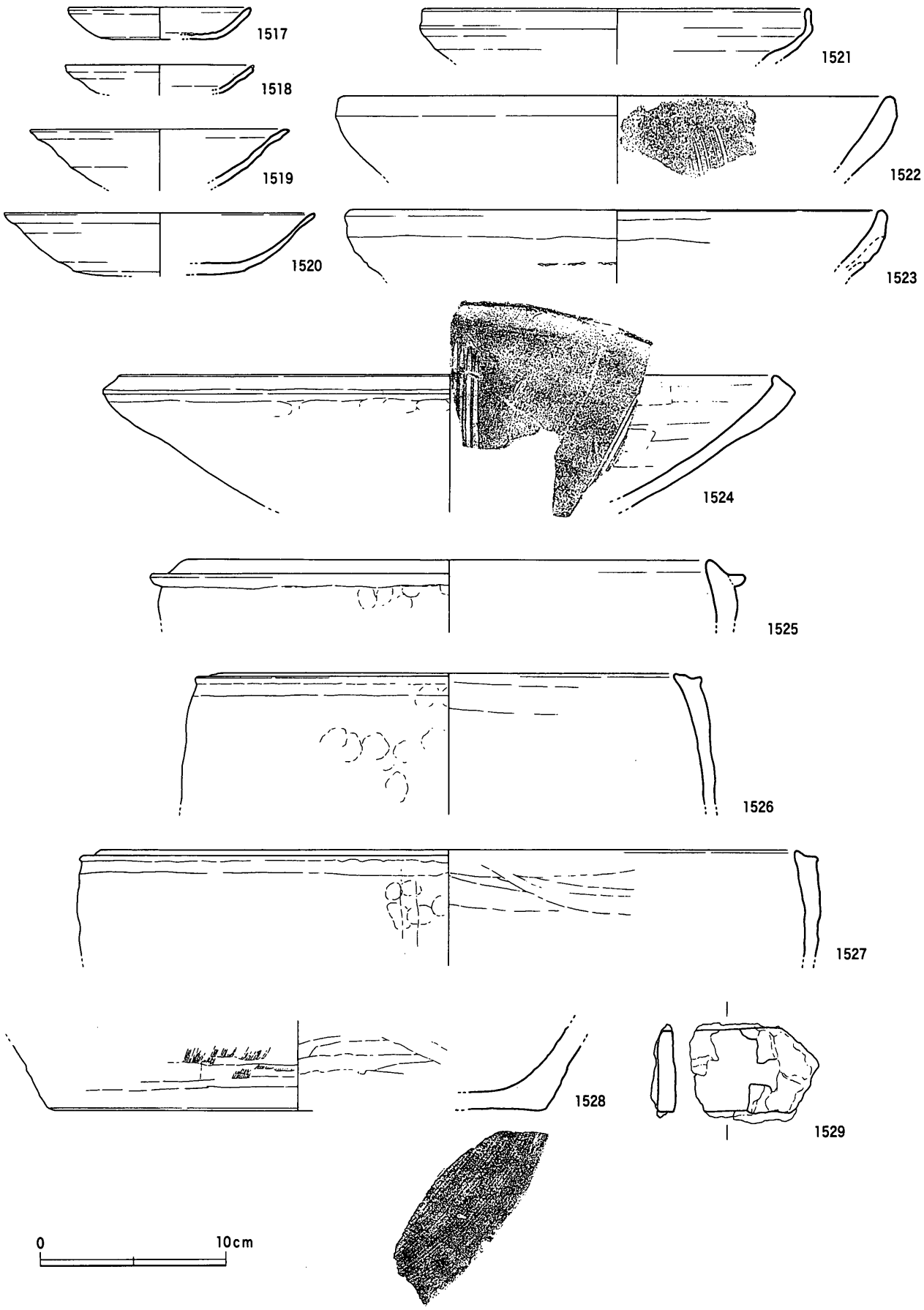


第223図　SKf65出土遺物（1）（1/3）



第224図　SKf65出土遺物（2）（1/3，1516は2/3）

第225図　SKf66平・断面図（1/40）



第226図　SKf66出土遺物（1/3，1529は1/2）

は若干遡る年代観を示すが，他者は概ね16世紀前葉～中葉と理解して大過ないものであり，これを遺構の時期とすることができよう。

(3) 小区画ｂ（区画４－ｂ）

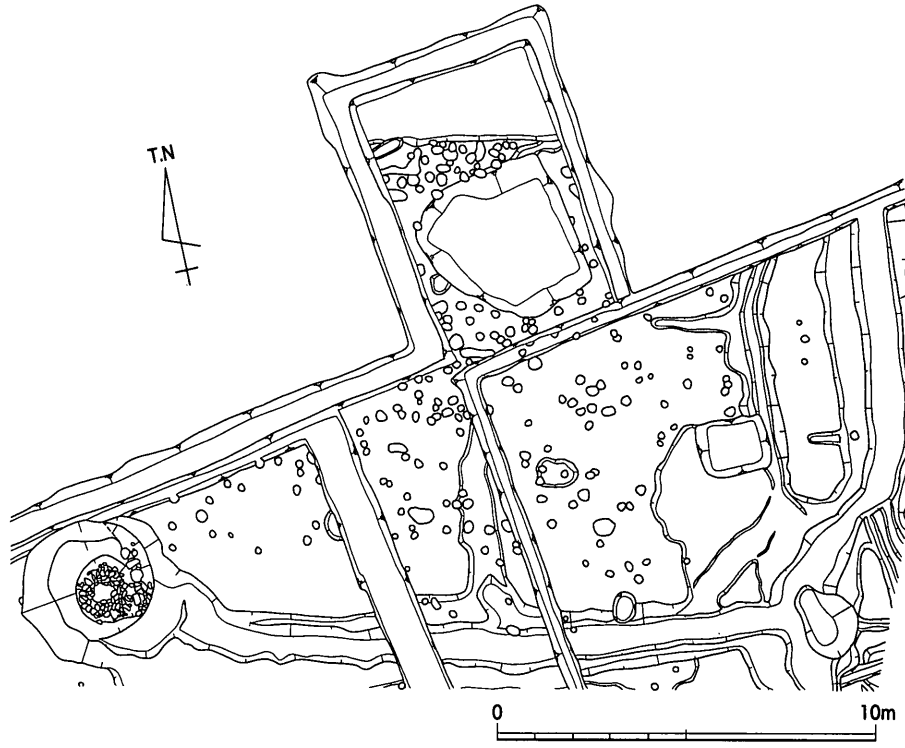
ａ．区画範囲と区画施設

南辺と東辺をＳＤf57によって画された小区画である。北辺・西辺については調査区外のため検出できていないが，南側の小区画ｃの区画溝（ＳＤf61）の延長が西辺にあたるものと思われ，また近世～近代のＳＤf96が北辺にあたる可能性が高い。これらを前提に小区画ｂの規模を想定すると，東西29ｍ，南北20ｍ前後となる。南北については確定的でないが，東西の規模については小区画ａよりも明らかに大きく，規模の差異が指摘できる。

ＳＤf57（第228～237図）

平面Ｌ字形に延びる区画溝であり，小区画ｂ南辺と小区画ｃ北辺，小区画ｂ東辺と小区画ｄ西辺を画する。小区画ｂ東辺部では主軸がＮ－10°－Ｅであり，周辺地割と一致した方向をもつ。小区画ｂ南辺部の西端で出水状遺構湧水部のＳＥf02に繋がる。小区画を画する溝としては比較的規模の大きいものであり，幅1.55～2.2ｍ，深さ0.15～0.31ｍを測る。断面形態は浅い皿形を呈しており，中央部がさらに一段落ち込んでいる。底面のレベルは南辺部では14.65～14.70ｍと大差ないが，東辺部では16.60ｍと幾分下がっており，溝内の水を西→東→北へと流す配慮が看取できる。これは，ＳＥf02を水源とする前提と一致する流下方向である。

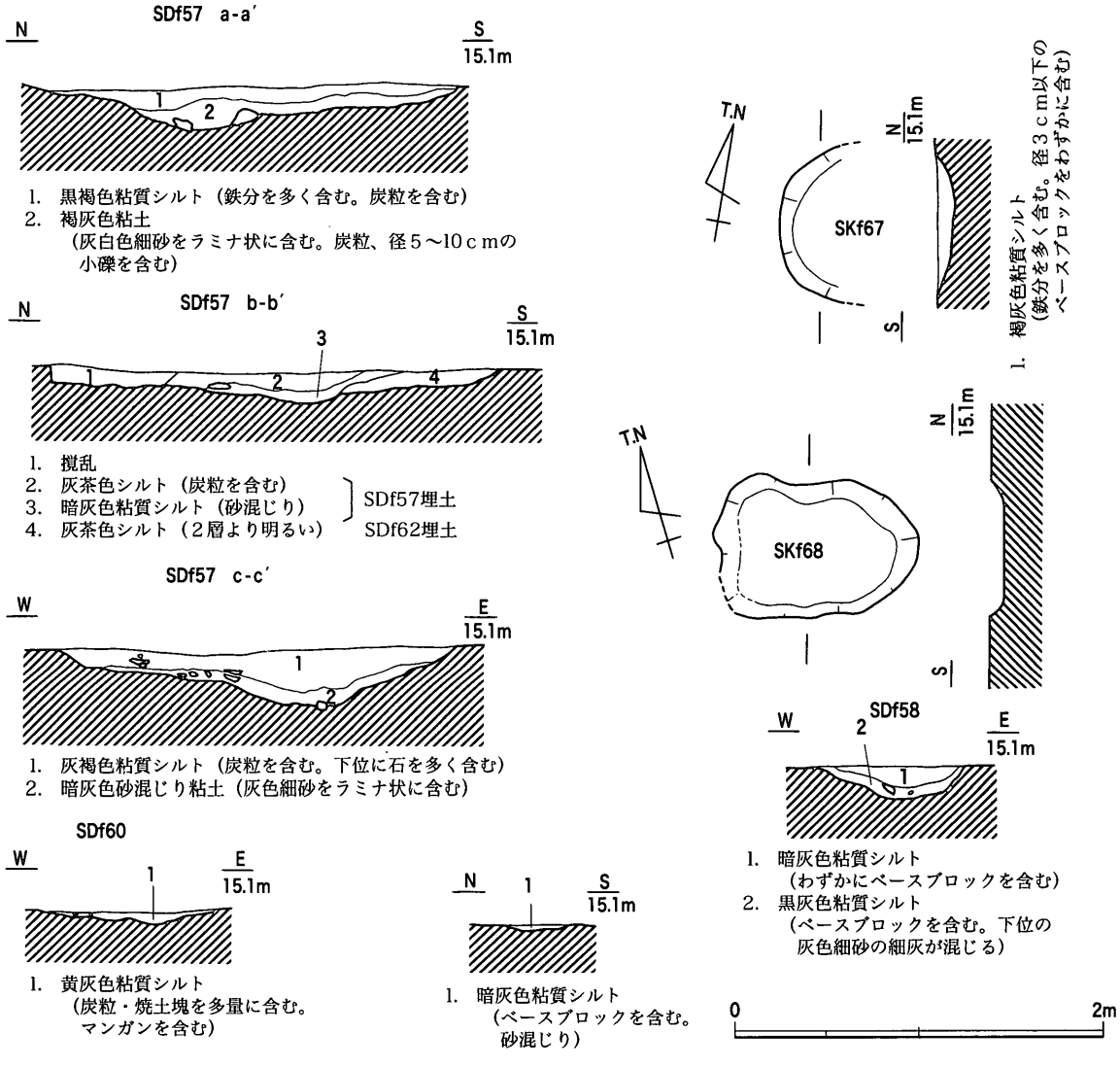
埋土は２層に分けられる。上層は炭化物粒を含んだ粘質シルトであり，下層は細砂をラミナ状に含む粘土もしくは粘質シルトである。下層の状況から，溝内には一定の流水があったことがわかるが，流水の状況は急激なものではなく，静穏であったようである。なお，ｂ－ｂ’断面地点の土層堆積状況では，南側の小区画ｃから本溝に繋がるＳＤf62の埋土を切り込んで上・下層ともに堆積している。周辺遺構の在



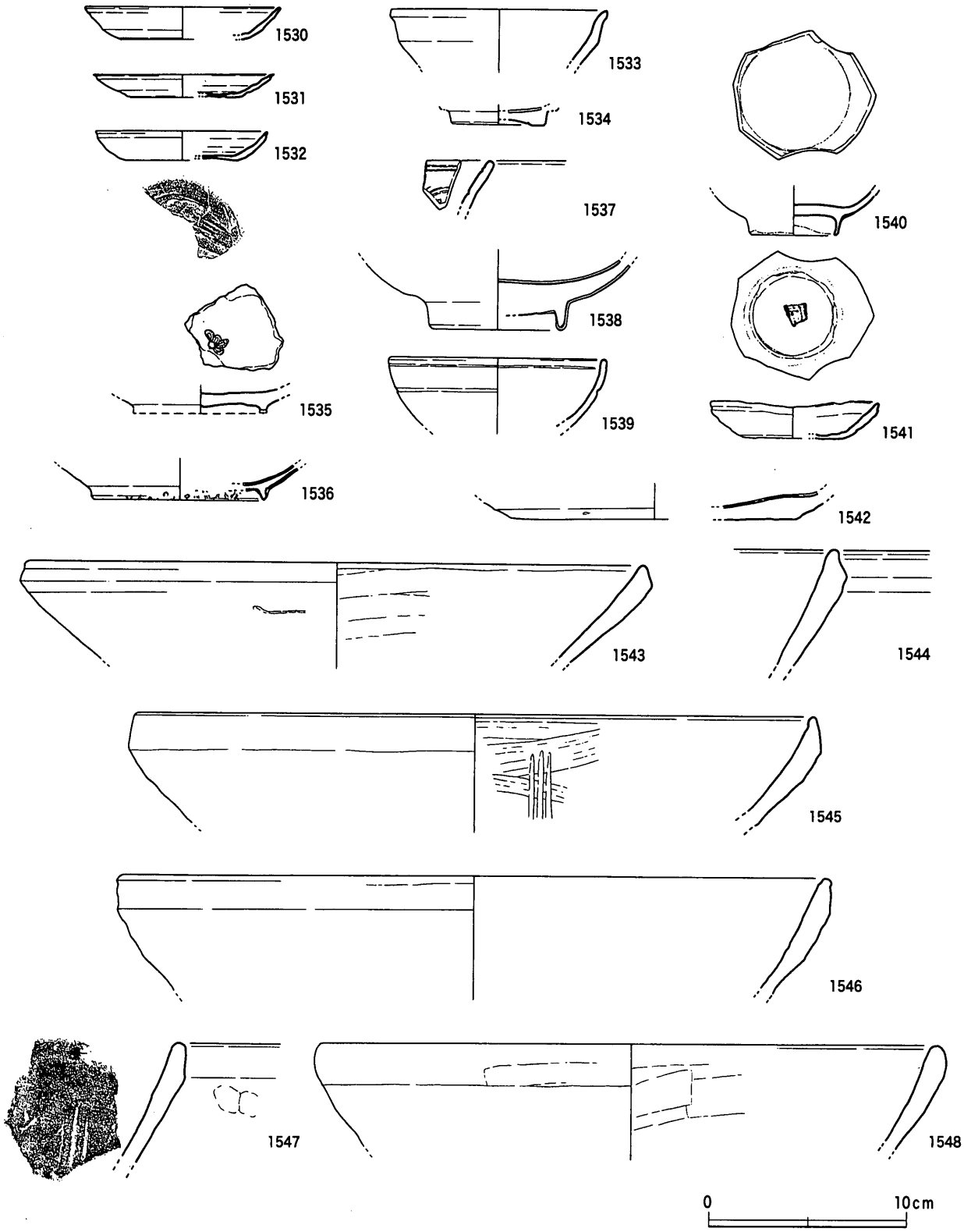
第227図　小区画b（区画4－b）平面図（1/200）

り方から考えて，ＳＤf62が単独でＳＤf57に先行するような状況は想定し難いので，この土層堆積はＳＤf57の再掘削を示す事象と捉えておく。

遺物は，南辺部と東辺部とで分けて図示した。南辺部出土遺物（第229～233図）には土師質土器皿・擂鉢・把手付鍋・鍋・脚付深鉢，楠井産擂鉢，瀬戸・美濃窯産丸皿・天目茶碗・大皿・瓶子，備前焼擂鉢・壺・甕，亀山焼甕，白磁皿，青磁碗，染付碗などがある。土師質土器皿（**1530**～**1532**・**1541**）は，口縁端部を丸く収める**1530**と，「口縁部→体部ナデ手法」による段を端部外面にもつ**1531**・**1532**・**1541**の２者が存在する。後者も直線的に外傾する口縁・体部のもの（**1531**）と，内弯して立ち上がるもの（**1532**・**1541**）に細別できる点が注目できる。瀬戸丸皿（**1535**）は，見込みに印花文を施しており，全体の形状は不明だが高台は矮小化していないようなので，瀬戸大窯第２段階（1520～1555年）の所産とみられる。天目茶碗（**1533**・**1534**）は，直立気味のやや厚手の口縁部から外反する端部と，内反高台をもつことから，丸皿同様に大窯第２段階に位置付けられるものである。白磁皿（**1536**）は灰色を帯びた釉薬が高台内側にまで施され，畳付には籾殻様の剥離材（あるいは砂か）が顕著にみられる。森田分類Ｅ－２類皿と考えられ，15世紀後葉～16世紀中葉の幅で捉えられるものである。青磁碗（**1537**～**1539**）は，中世前半まで遡る横田・森田分類Ｉ－４類碗

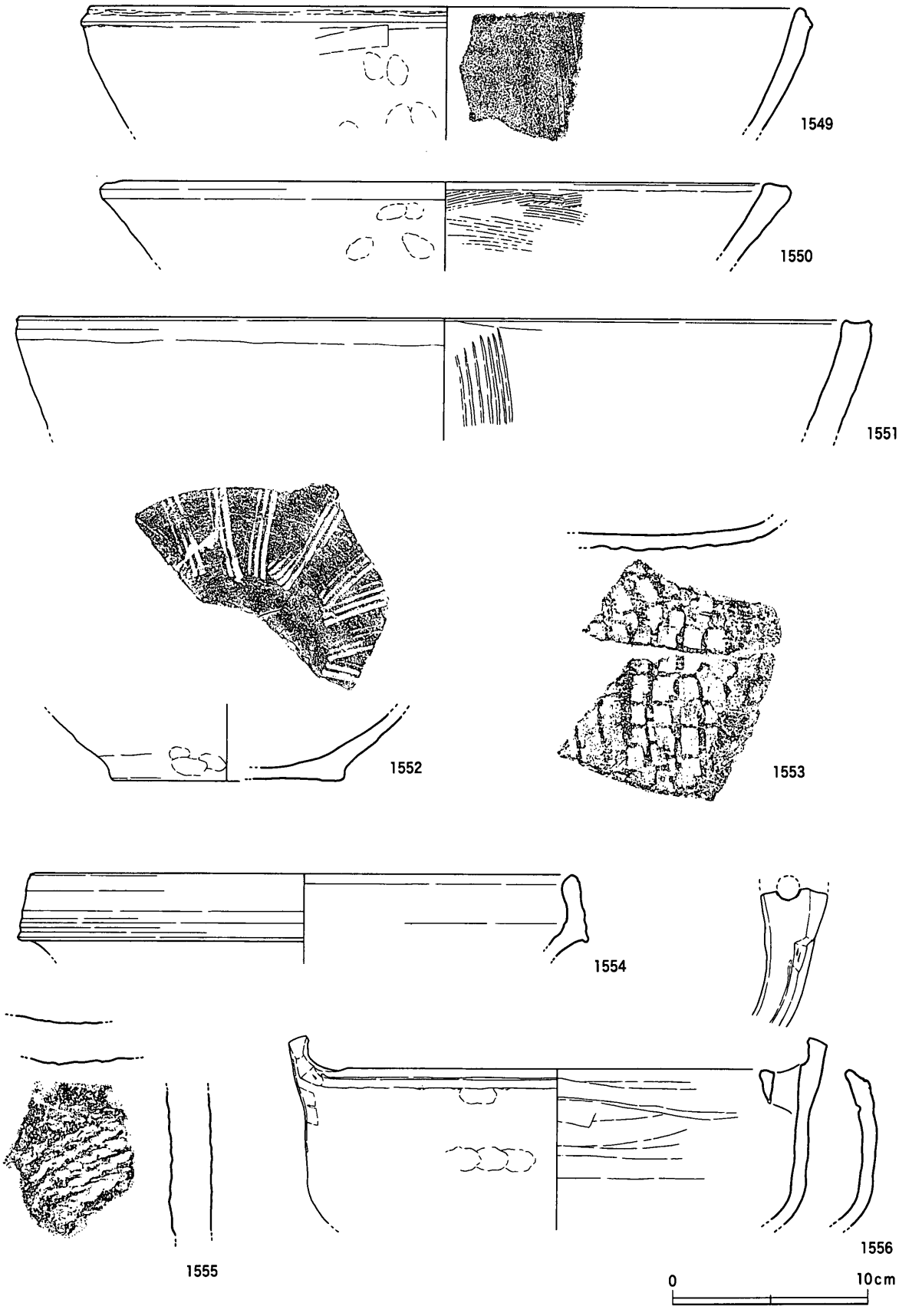


第228図　SDf57～60，SKf67・68平・断面図（1/40）

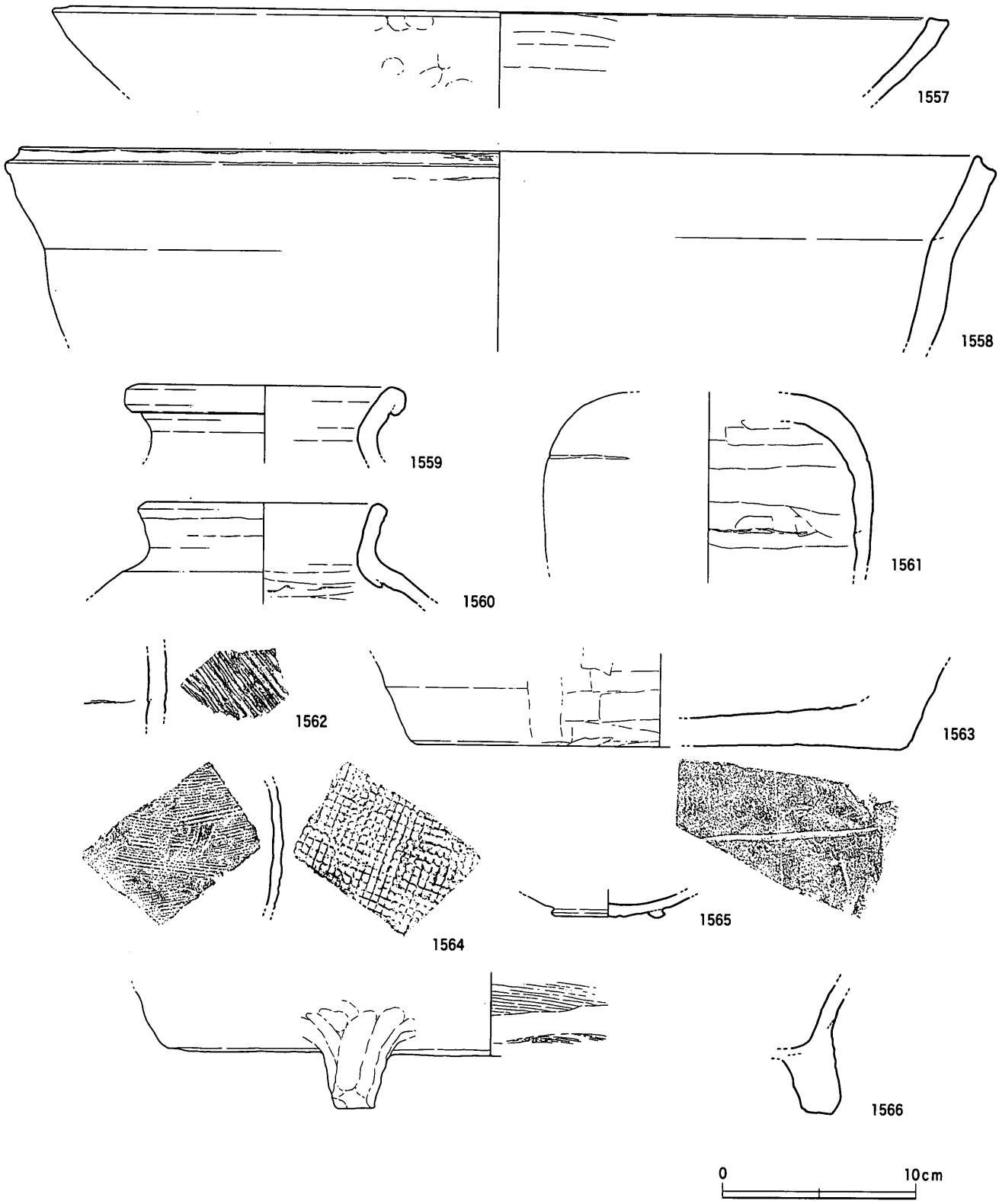


第229図　SDf57南辺部出土遺物（1）（1/3）

（**1537**）や，中世後半の上田分類D類もしくはE類碗（**1538**），C類碗とみられる小碗（**1539**）がある。**1537**は細片であり，混入である可能性が高い。染付碗（**1540**）は，見込みが盛り上がる「饅頭心」の形態をもち，高台内側に字款（「福」か）を入れる。小野分類のE群ⅦB類にあたり，16世紀第3四半期～第4四半期前半に位置付けられる。瀬戸大皿（**1542**）は底部のみの破片であるが，外面が露胎であることから古瀬戸後期Ⅱ期（14世紀末葉～15世紀第1四半期）に該当するものとみてよい。



第230図　SDf57南辺部出土遺物（2）（1/3）

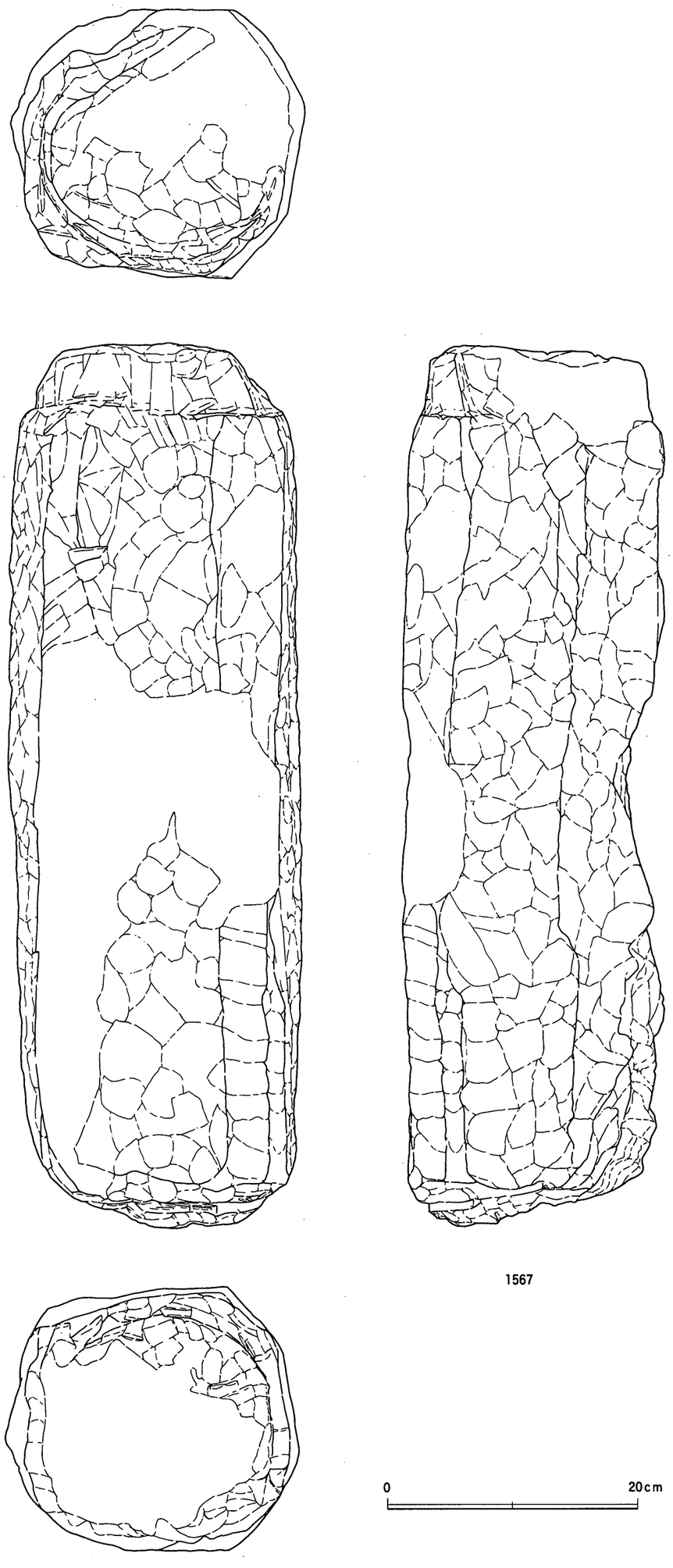


第231図　SDf57南辺部出土遺物（3）（1/3）

楠井産擂鉢（**1543～1550**）は，ＡⅠ類（**1550**），ＡⅡ類（**1543・1544・1549**），ＡⅢ類（**1545・1546**），ＢⅠ類（**1547**），ＢⅡ類（**1548**）がある。楠井窯での編年観からすれば，単一時期では収まらない，複数時期の製品が混在していることになる。ただし焼成が土師質ないし瓦質であ

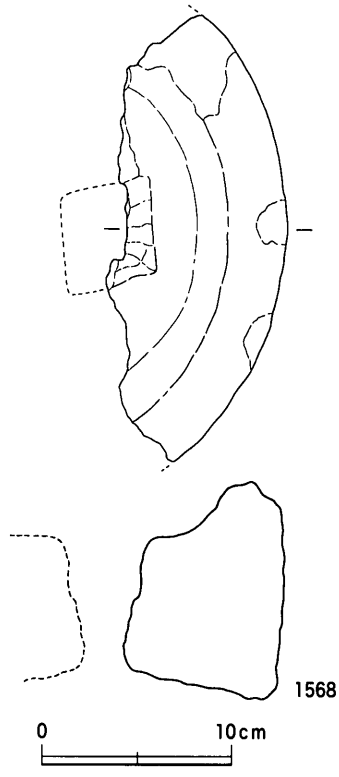
り，耐久性という点では備前焼擂鉢よりも劣るため，古い形式のものが長期間使用されたとは考え難い。土師質土器擂鉢（1551・1552）は，非楠井系統の在地産擂鉢である。1551は，砂粒を多く含んだ粗い胎土をもつ大型の擂鉢であり，口縁端部にほぼ水平の凹面をもつ。1552は1551とも別系統の擂鉢で，胎土は比較的きめ細かく明黄褐色に発色するのが特徴である。おそらく口縁部が内側に大きく屈曲する系統の擂鉢であろう。備前焼擂鉢（1554）は長く直立して拡張する口縁部をもっているが，外面に明瞭な沈線が施されていないことから，間壁編年Ⅴ期前半の所産と思われる。土師質土器把手付鍋（1556）は，ヘラによる面取りが行われた把手をもつ。土師質土器鍋（1557・1558）は，内弯する口縁部をもつ楠井B形式（1557）と，直線的な口縁部をもつもの（1558）があり，後者は頸部の屈曲が弱い。備前焼壺（1559・1560）は，丸く太い玉縁状口縁をもつ間壁編年Ⅲ期後半のもの（1559），潰れた痕跡的な玉縁を示す口縁部をもつ間壁編年Ⅴ期のもの（1560）がある。瀬戸瓶子（1561）はⅠ類（締腰形）の肩部片と思われるものであり，外面には灰釉が施されている。詳細な時期は不明だが，古瀬戸前期様式にあたるとみられ，13世紀代の年代観が付与できる。この他，柱状石製品（1567）が出土している。石材は東讃地方で産出する「火山石・相地石」と呼称される白色系の凝灰岩である。手斧のような工具で八角柱形に加工されており，両端には円柱形の突起が作出される。石製品の性格・用途は明確でない。

東辺部出土遺物（第234～237図）には，土師質土器皿・擂鉢・足釜・茶釜形鍋・把手付鍋・鍋・深鉢，瓦質鍋，楠井産擂鉢・甕，青磁碗，備前焼皿，亀山焼甕，瀬戸瓶子，平瓦，鋳造炉壁片などがある。土師質土器皿（1569）は「口縁部→体部ナデ手法」によるもので，直線的な体部をもつ。青磁碗（1570～1572）のうち，1570は口縁部外面直下に雷帯文を施すもので，上田氏C－Ⅱ類碗にあたる。1571は見込みに印花文を施すもので，上田氏分類のDもしくはE類碗である。1572は見込みに櫛描きの文様を施しており，分厚い底部をもつことから龍泉窯系Ⅰ3類碗と思われる。備前焼皿（1573）は，丸く内弯する体部下半と外反する口縁部をもち，見込みに「≠」形の刻線が施される。口縁部に近い破断面には，鉱滓状の付着物がみられる。楠井産擂鉢（1574～1577）は，AⅢ類（1574・1575）とAⅡ類（1576）がある。1578は非楠井系統の擂鉢であり，やや小型品である。口縁部が内側に屈曲する形態のものであると考えられる。備前擂鉢（1579）は体部内面下半の器表が著しく磨り減っており，長期間使用されたことを示す。底部外面には下駄印が認められる。卸し目の形状から，間壁編年Ⅳ期に該当するものであろう。土師質土器足釜（1580・1581）は，短い鍔部をもつが口縁部とは一体化していない楠井BⅣ類（1580）と，縁帯状の鍔部をもち口縁部との一体化が進んだC類（1581）がある。茶釜形鍋（1582）は，直立する口縁部が茶釜に近似した形態であるが，肩部に穿孔が施されその外側に把手が付されており，類例からみて鍔部はなかったことがわかる。穿孔方法と把手の形状は把手付鍋と共通するものであり，同系統の在地土器であるとみられる。把手付鍋（1583・1584）は，把手部の面取りがヘラ削りではなく強いナデ調整によって行われており，明瞭な各面の形成に至らないことが南辺部出土の1556とは異なる特徴である。また口縁部と把手の位置関係みても1556ほどは把手が上方に突き出ておらず，ことに1584は口縁部とほぼ同じ高さに貼付されている。把手の付かない鍋には，内弯する口縁部の端部に水平方向の平坦面を作る瓦質鍋（1585）と，弱く外反する直線的な口縁部をもつ土師質土器鍋（1586・1587）がある。瀬戸瓶子（1580）は，Ⅰ類（締腰形）のものであり，外面に灰釉が薄くかかり部分的に流下している。古瀬戸前期Ⅲ・Ⅳ期の所産とみられ，13世紀中葉～後葉の年代観が付与できる。南辺部出土資料（1561）と同一個体



第232図　SDf57南辺部出土遺物（4）（1/4）

の可能性が高いことから，細片の混入のような状況は想定し難い。周辺小区画での保有物の廃棄が考えられる。楠井産甕（**1589**）は玉縁状の口縁部をもち，体部に格子叩き目が施されている。亀山焼甕（**1590**）は直立気味に外反する口頸部と狭い凹面を作る口縁端部をもち，頸部外面に縦ハケ調整が施される。草戸千軒町遺跡Ⅳ期にあたるものである。鋳造炉壁（**1595**）は壁面部に1.0㎝程度の厚さで多孔質の鉄滓が付着している。鉄滓の表面には白色を呈する部分があり，また鉄錆が浮いている部分もある。炉壁の内径を復元するにまでは至らないが，おそらく小型の甑炉であり，また図示した下側の破断面が段状の形態をもち，あたかも下側の壁体と組み合わせる部分にみえることから，「ル」（湯溜まり）直上の溶解部の下端である可能性も考えられる。



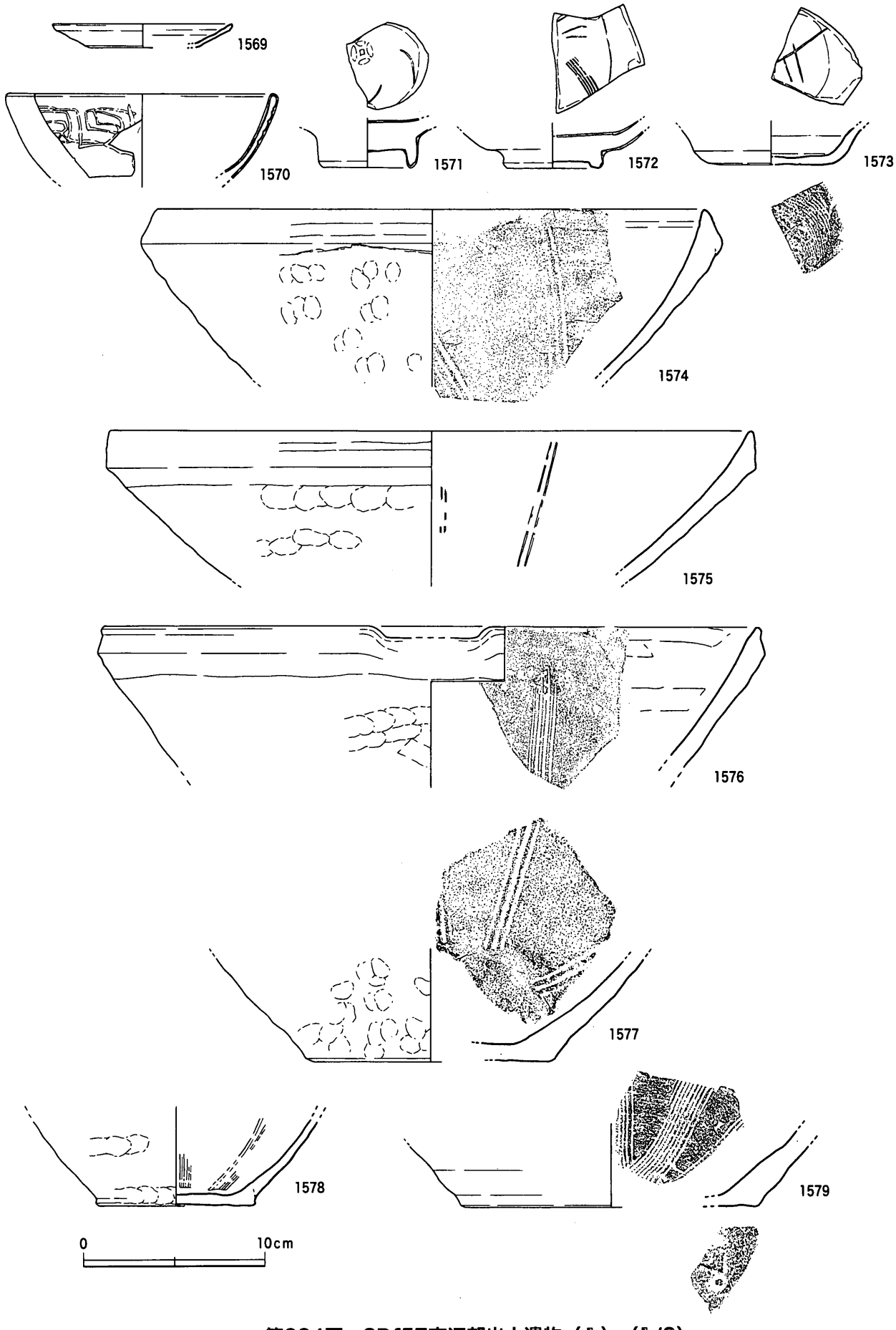
第233図　SDf57南辺部出土遺物（5）（1/4）

以上からＳＤf57の時期について検討する。瀬戸・美濃系陶器やＥ群染付，Ｖ期備前焼擂鉢からみる限り，16世紀前葉～中葉を下限とすることは間違いなく，この時期まで溝が存続していたことは確実である。在地産の土師質土器皿や足釜，楠井産擂鉢Ｂ類も概ねこの年代にあたろう。問題は上限であるが，いかにも「使い込まれた」かのように器面が摩滅したⅣ期備前焼擂鉢（**1579**）は，15世紀代からの継続的な保有・使用を示唆する。またこれとは異なり，耐久消費財とは考えられず使用→廃棄のサイクルが短期間のうちに行われたとみられる楠井産擂鉢で楠井Ⅱ－３期（14世紀末葉～15世紀前葉）までは確実に遡り得るものが多数出土していることも，逆に15世紀代まで遡る小区画での活発な消費活動を示すのではなかろうか。青磁Ｄ・Ｅ類碗（**1538**・**1539**・**1571**）やＣ－Ⅱ類碗（**1570**）も15世紀前葉～中葉を中心とした時期の所産であり，16世紀に至る伝世的な長期使用も否定はできないが，楠井産擂鉢とともに15世紀代の居住者の存在を示す資料とも理解できるのである。以上の遺物の年代観と，上記した溝の再掘削にみられる長期的な維持・管理の痕跡から，本遺構は15世紀前半頃に開削されて16世紀中葉頃に埋没したものと考えておきたい。

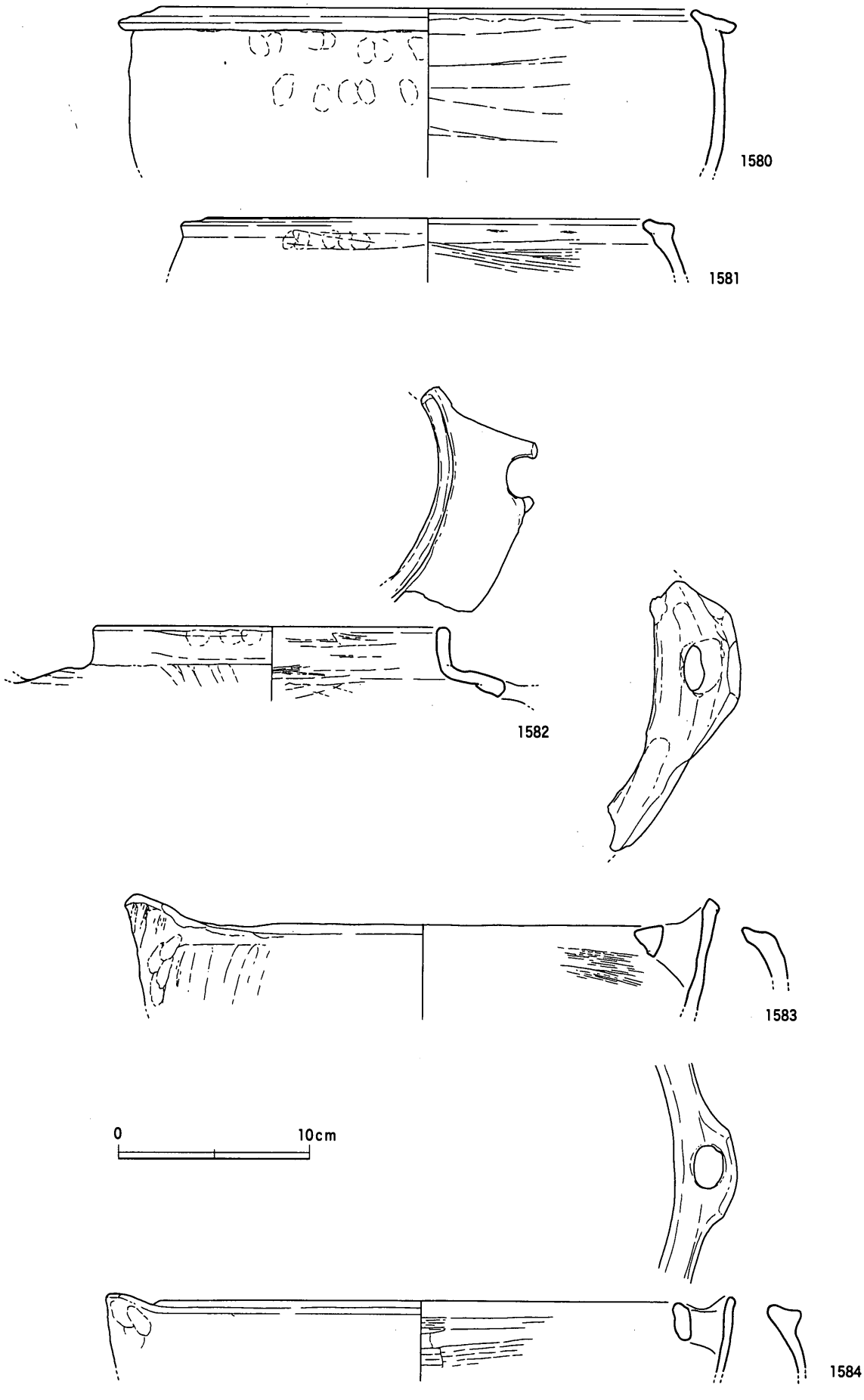
ＳＤf58（第228・238図）

ＳＤf57東辺部の西側3.3ｍ（芯々距離）を平行して延びる区画溝である。流路の主軸はＮ－10°－Ｅであるが，検出範囲の北半部で若干東側に屈折する。また南端部はＳＤf57南東隅に繋がる。また西肩部から西側にＳＤf59が分岐する。ＳＤf57東辺部との間の検出面では，ピットはわずかに３個検出されたのみであり，小区画内よりも散漫な分布状況を示す。このことから，ＳＤf57東辺部とＳＤf58に挟まれた幅1.5ｍの帯状部が小区画間の通路であったと考えられる。

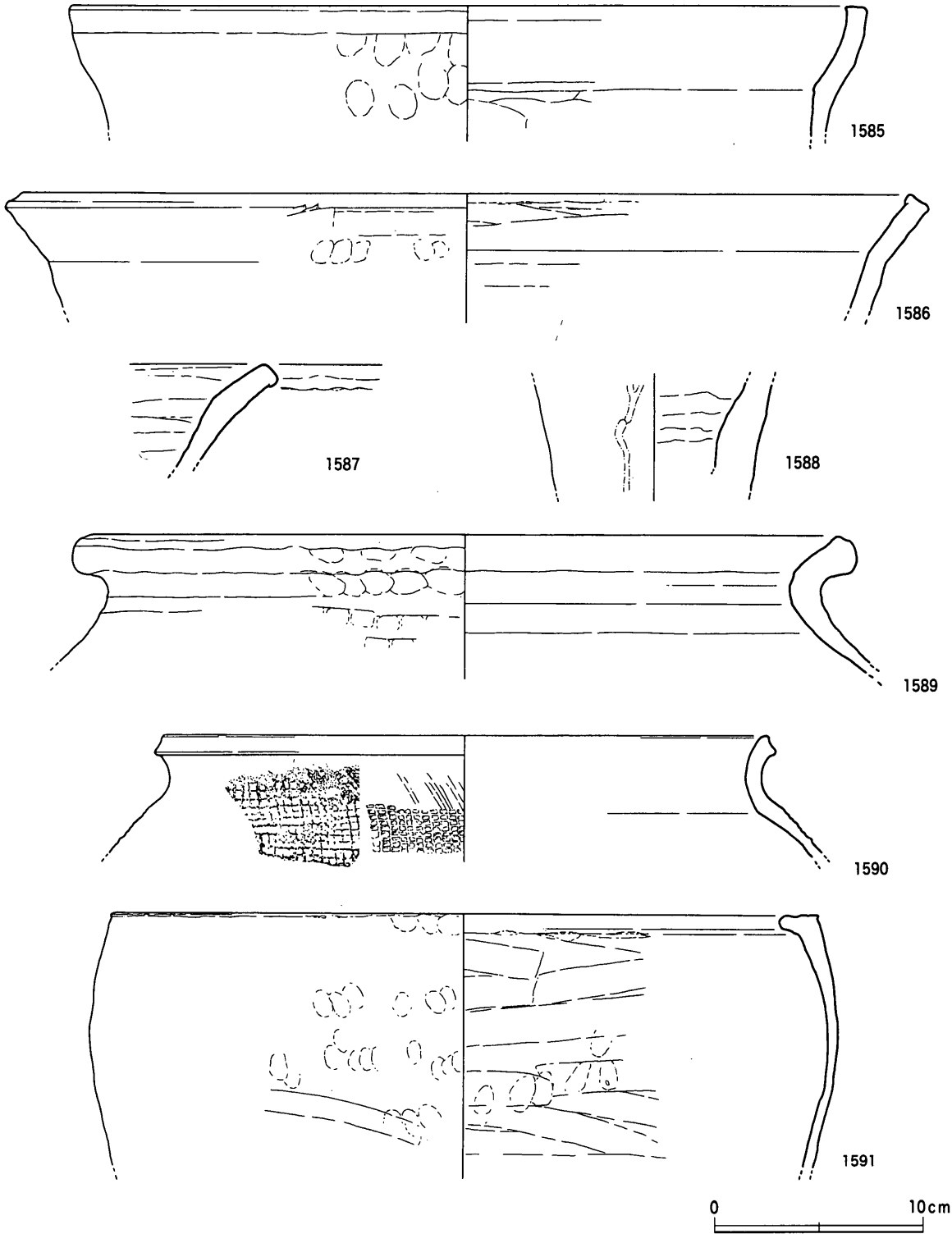
断面形態は浅い逆台形を呈しているが，西肩部上半はわずかに傾斜が緩く，二段掘りのような形態をもつ。規模は，断面図作成位置で幅0.84ｍ，深さ0.16ｍを測る。埋土は２層に分けられ，土色・土質からは恒常的な流水状態にあったとは考え難い。また基盤層のブロックを含むことが特徴である。ＳＤf57埋土との関係をみる（第251図）と，ＳＤf57下層とは連続していない。しかし堆積の方向（第



第234図　SDf57東辺部出土遺物（1）（1/3）



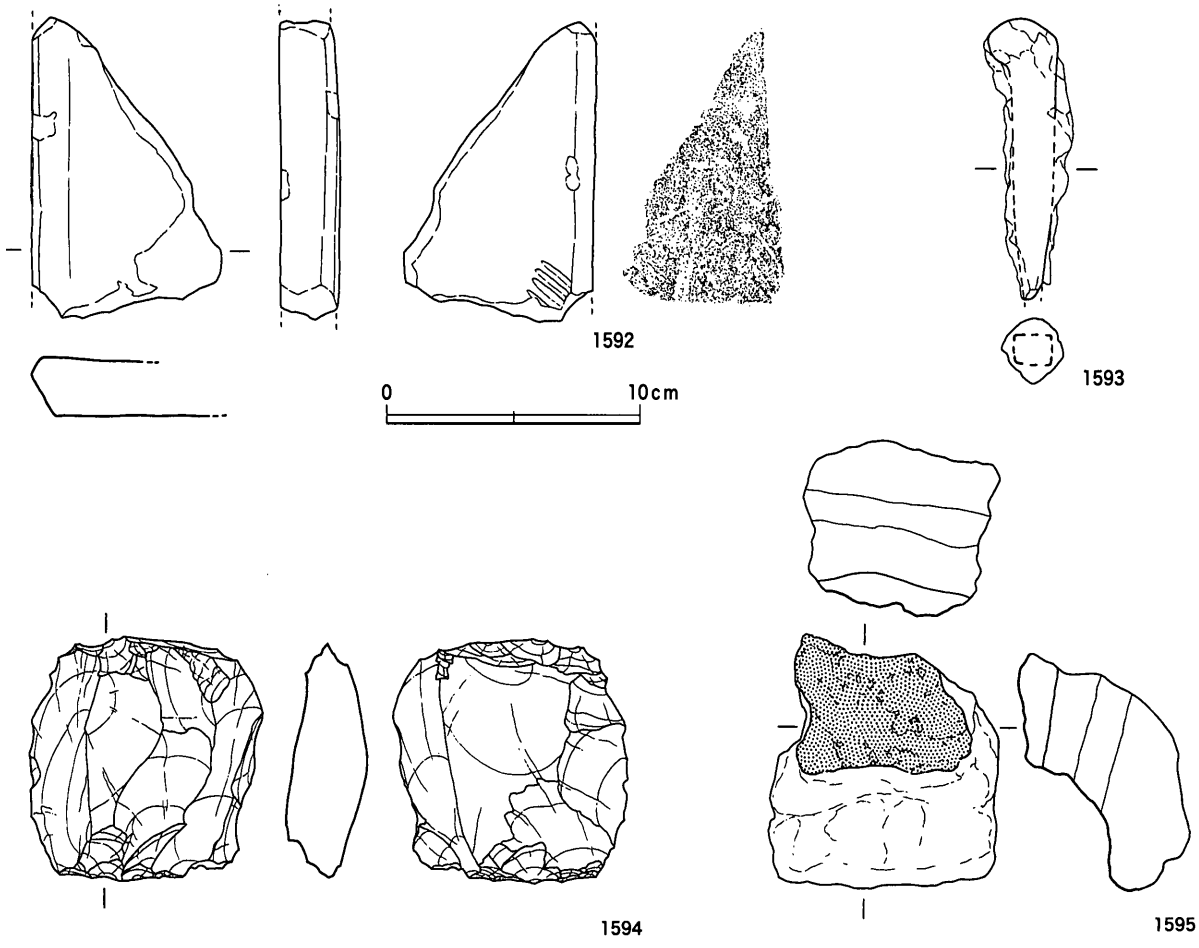
第235図　SDf57東辺部出土遺物（2）（1/3）



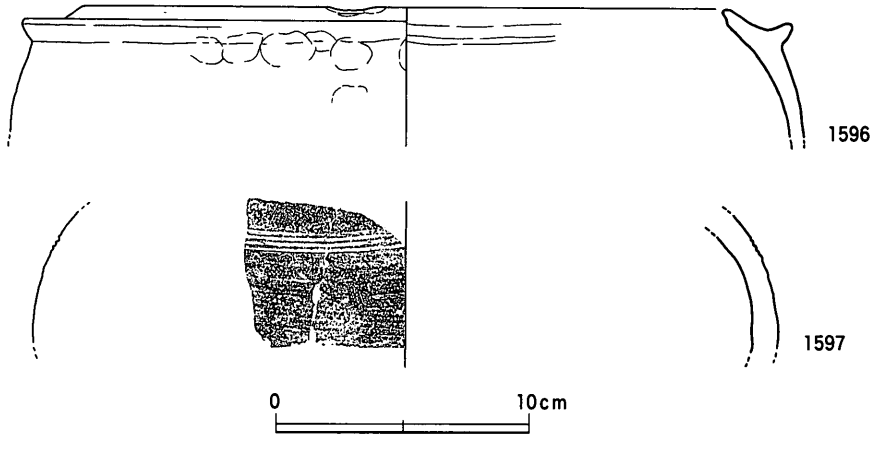
第236図　SDf57東辺部出土遺物（3）（1/3）

251図では西→東すなわちＳＤf58→57）を考慮するならば，５→４→２→３層と連続した堆積順序が辿れるため，同時併存とみてよいものと思われる。

遺物は，土師質土器皿・擂鉢・把手付鍋，備前焼皿・擂鉢・壺・甕がある。土師質土器皿（**1598**）は，直線的に外傾する体部とさらに外反する口縁部をもち，口径16㎝を超える大型品である。底部はヘラ切りであり，小区画ａでまとまって出土した西讃系統の大皿とは異なる。備前焼皿（**1596**）は，見込みに「×」形の刻線が施されており，ＳＤf57東辺部出土例（**1573**）′に近似する。備前焼擂鉢

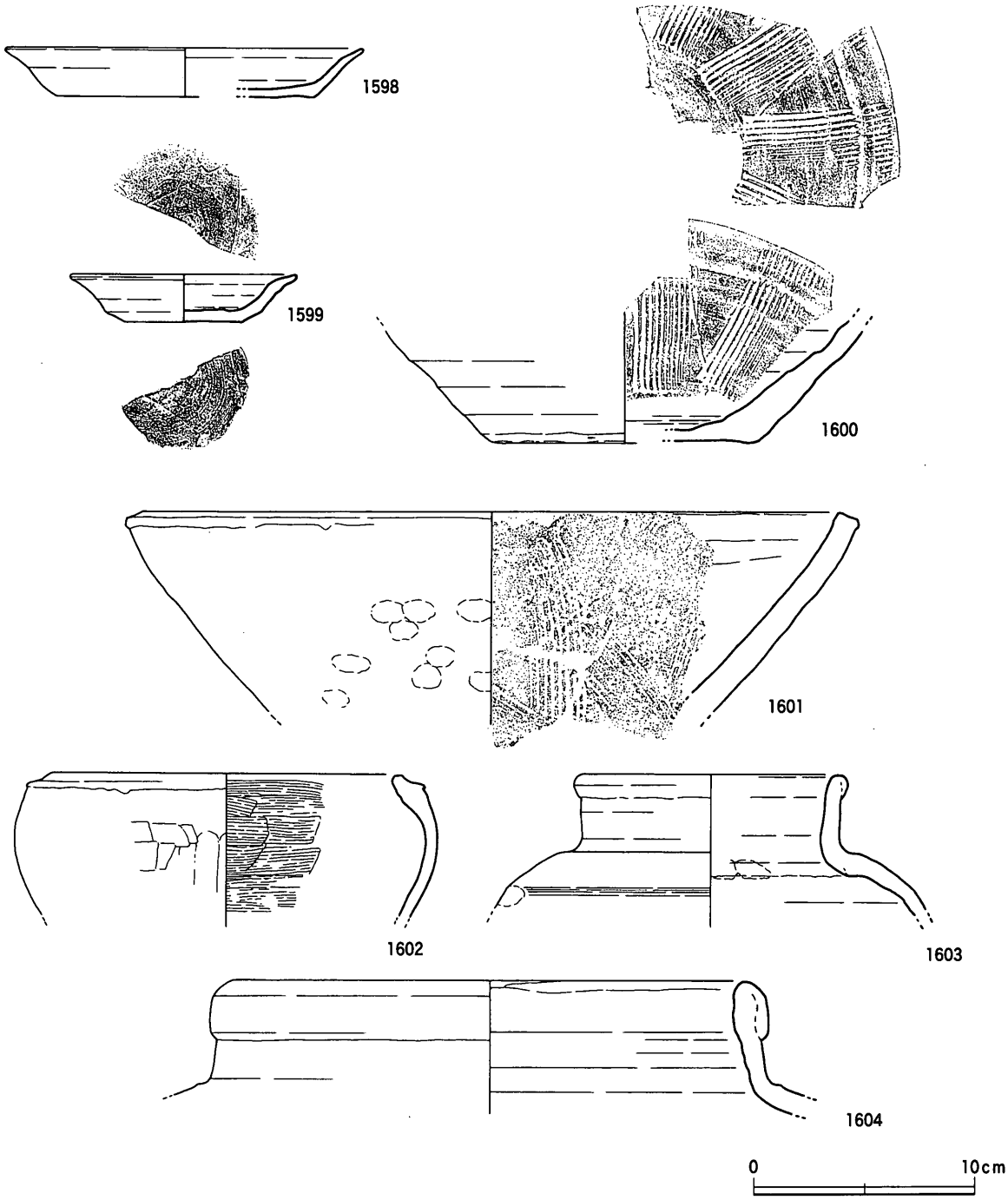


第237図　SDf57東辺部出土遺物（4）（1/3，1593・1595は1/2，1594は2/3）



第238図　SDf57・58合流部出土遺物（1/3）

（**1600**）は，口縁部が遺存していないが，内面の卸し目が多条化しつつも垂直方向に施されていることから，間壁編年Ⅳ期後半頃の所産と推測できる。土師質土器擂鉢（**1601**）は，砂粒を多く含んだ粗い胎土をもつ非楠井系統のものであり，ＳＥf02上層出土例（**1650**）やＳＤf57出土例（**1551**），区画４－ｂのＳＰf73出土例（**1605**）などど同系統のものと考えられる。この系統としては小振りであり，内面の卸し目（垂直方向→斜め方向）の間隔がやや粗いのが特徴である。あるいは時期差を反映するのであろうか。土師質土器把手付鍋（**1602**）は，通常よりも小口径である。備前焼壺（**1603**）は比較的長く直立した口縁部と，やや潰れ気味の玉縁状口縁をもち，肩部に２条の櫛描き直線文を施す。また，この文様帯の施文後に一部に施された強いナデ調整の痕跡がみられることから，四耳壺ないし三耳壺であった可能性もある。間壁編年Ⅳ期前半の所産であろう。備前焼甕（**1604**）は縦長に肥厚する玉縁状口

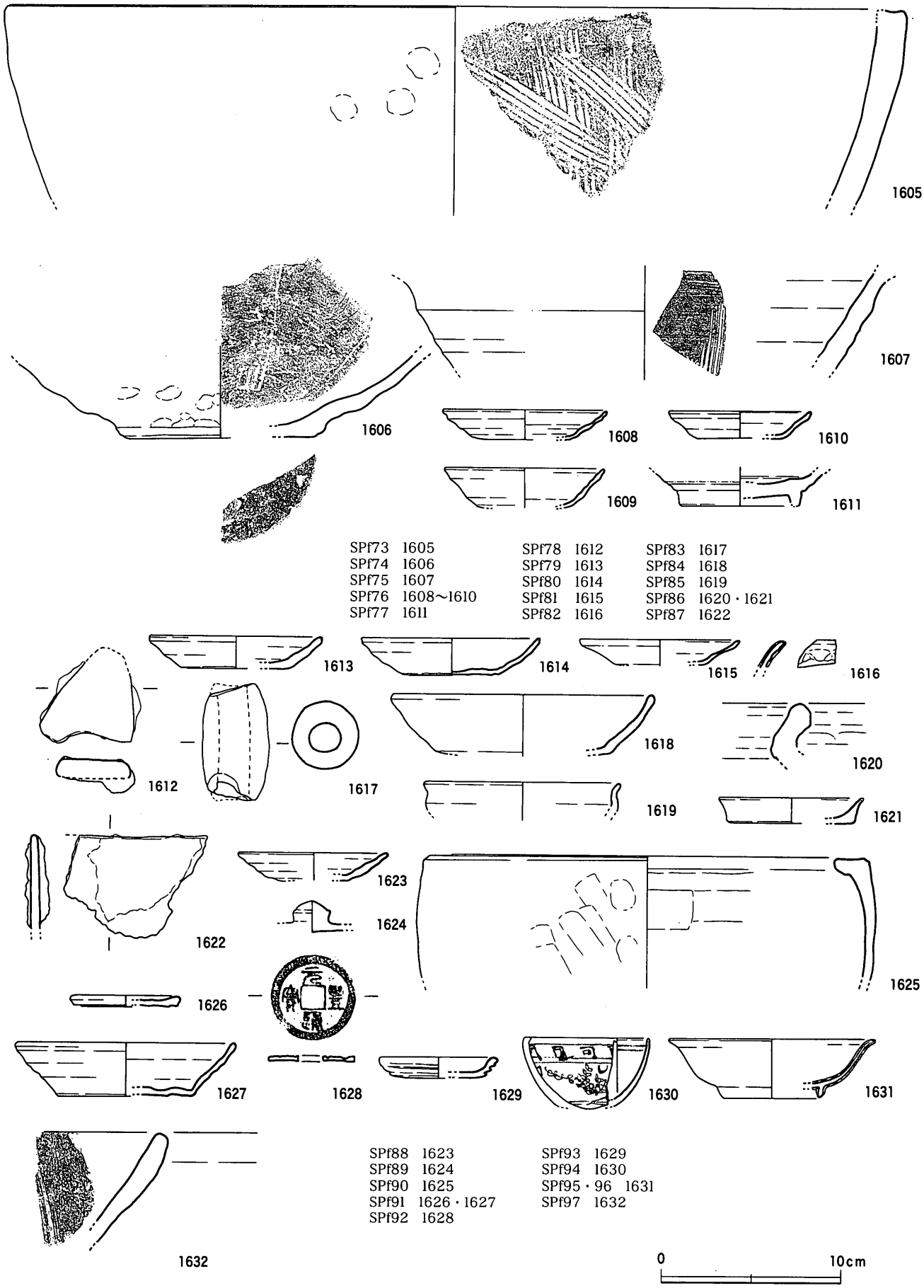


第239図　SDf58出土遺物（1/3）

縁をもつことから，Ⅳ期に属するものとみてよい。

ＳＤf60（第241図）

ＳＤf57東辺部の西側11ｍ（芯々距離）を平行して南北に延びる小溝である。主軸方向はＮ－10°－Ｅであり，周辺地割と一致する。南端部はＳＤf57南辺部に繋がる。ＳＤf59とともに掘立柱建物の雨落ち溝的な性格が考えられたが，この溝を東限もしくは西限とする掘立柱建物は復元できなかった。



SPf73	1605	SPf78	1612	SPf83	1617
SPf74	1606	SPf79	1613	SPf84	1618
SPf75	1607	SPf80	1614	SPf85	1619
SPf76	1608～1610	SPf81	1615	SPf86	1620・1621
SPf77	1611	SPf82	1616	SPf87	1622

SPf88	1623	SPf93	1629
SPf89	1624	SPf94	1630
SPf90	1625	SPf95・96	1631
SPf91	1626・1627	SPf97	1632
SPf92	1628		

第240図　区画4－b・cピット出土遺物（1/3，1612・1622は1/2，1628は2/3）

b．建物

ピットの分布状況

小区画bでは205個のピットが検出されたが，掘立柱建物として復元に至ったのは2棟（柱穴18個）であり，検出数の8.8％に過ぎない。その分布は，小区画aのような特定箇所に集中する傾向は指摘できず，検出した範囲では全域にわたってみられる。ただし，小区画b東辺を画するＳＤf57とその内側のＳＤf58との間では分布が希薄であり，この部分が通路である可能性を示唆する。また北半部は，近世以降の削平によってピットが消滅していたため，北端に至るまで同様な分布状況であったかどうか，明確でない。

主な遺物としては，土師質土器皿・擂鉢，備前焼擂鉢，白磁碗がある。土師質土器皿（**1608**～**1610**）はＳＰf76から出土しており，同時期の資料とみてよいものである。**1608**は「口縁部→体部ナデ手法」によるものであり，**1609**・**1610**はこれとは異なり口縁部を最後にナデ調整するものである。土師質土器擂鉢には，胎土の粗い大型品（**1605**）と比較的きめ細かな胎土をもつもの（**1606**）がある。ともに非楠井産の在地製品であり，**1605**は内面の卸し目が重複しており，「垂直方向→斜め方向」の順に施されている。卸し目原体は，７本/2.7㎝の幅広で粗いものである。**1606**は使用によって体部内面下半の器面が摩滅しており，水平方向の擦痕が顕著に認められる。おそらく内側に屈曲する口縁部をもつものであろう。備前焼擂鉢（**1607**）は口縁部が遺存していないが，体部上半の器壁の凹凸から拡張した口縁部が想定できること，また卸し目が垂直方向に施されており斜め方向でないことを考慮すると，間壁編年Ⅳ期の所産とみて大過ないものと思われる。白磁碗（**1611**）は，中世前半のⅣ類碗の底部片と考えられる。

以上から，16世紀前葉～中葉を下限とした年代観が付与できる。上限については良好な資料が少ないために検討できない。

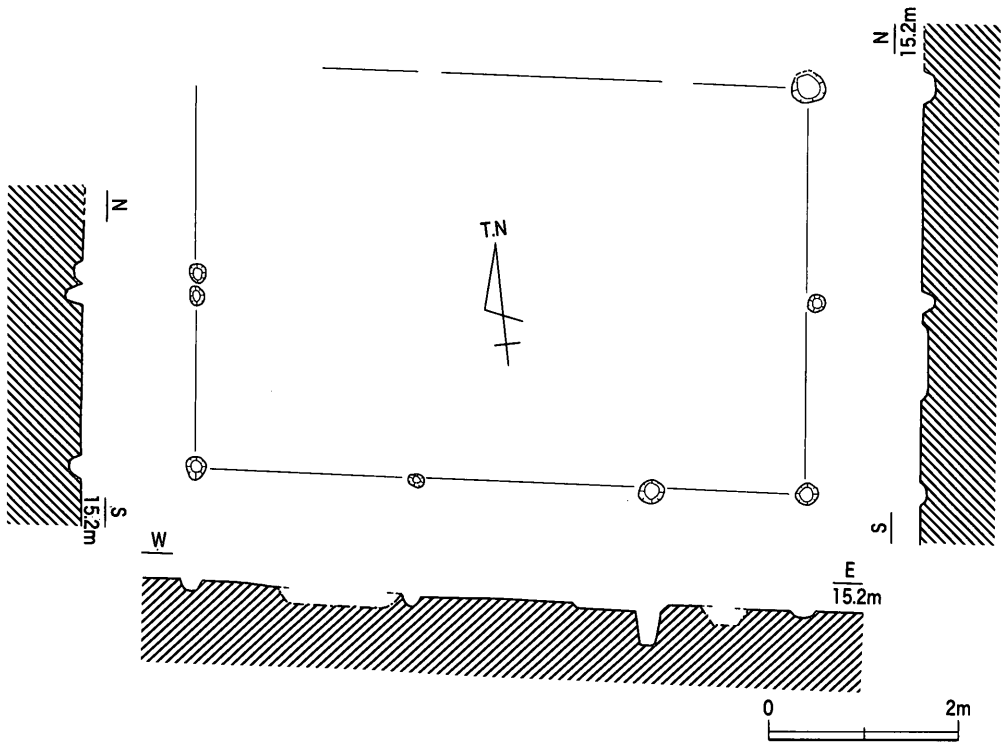
ＳＢf29（第241図）

小区画b南半中央部で復元できた２×３間（梁間4.3ｍ，桁行6.6ｍ，床面積28.38㎡）の側柱建物である。主軸方向はＷ－８°－Ｎであり，周辺地割とほぼ一致する。柱穴はほぼ直線的に揃っており，平均柱間距離は梁間で2.1ｍ，桁行で2.2ｍを測る。南辺の柱穴がＳＤf60の底面で検出されていることから，ＳＤf60→ＳＢf29という前後関係が想定できる。

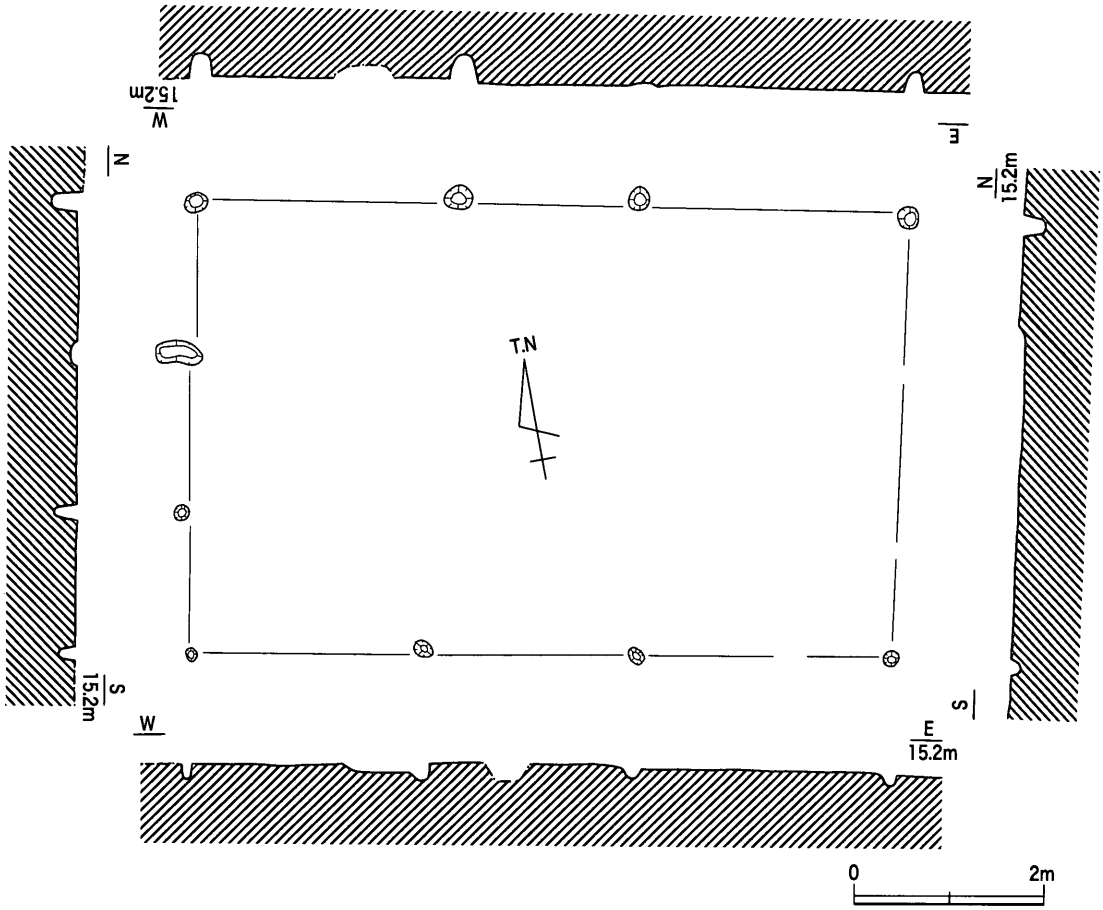
ＳＢf30（第242）

ＳＢf29の東側で一部重複するかたちで復元できた３×３間（梁間4.8ｍ，桁行7.5ｍ，床面積36.0㎡）の側柱建物である。主軸方向はＷ－10°－Ｎであり，周辺地割と一致する。柱穴の並びは若干不揃いであるが，平均柱間距離は梁間1.6ｍ，桁行2.49ｍであり，特に柱間距離が大きく異なる箇所はない。小溝との位置関係をみると，ＳＤf60とは重複するため同時併存は考えられないが，ＳＤf58・59は東辺と北辺から各1.4ｍ程度の一定した間隔にあり，関連する遺構の可能性がある。

c．井戸・土坑



第241図　SBf29平・断面図（1/80）



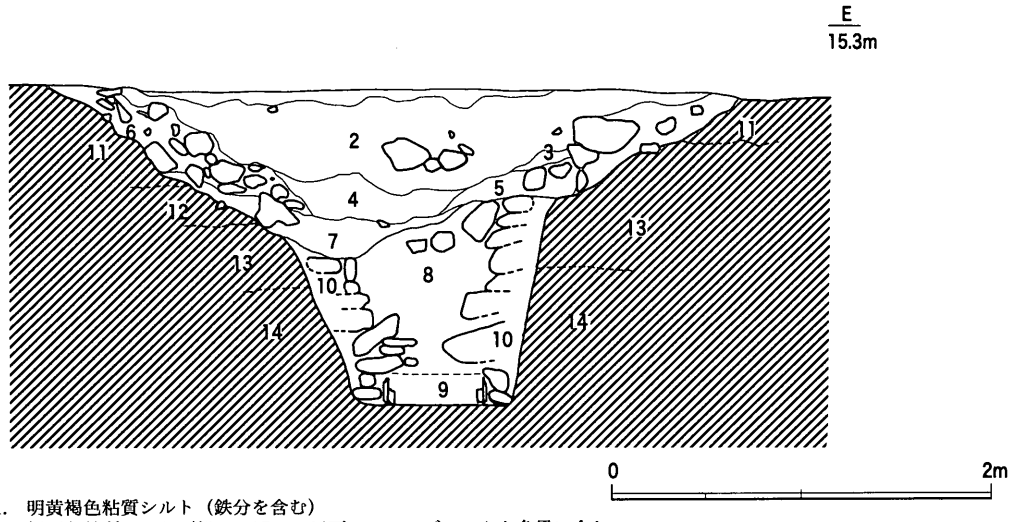
第242図　SBf30平・断面図（1/80）

ＳＥf02（第243～249図）

区画溝であるＳＤf57南辺部西端に取り付く井戸であり，ＳＤf57との切り合いも認められないことから，同時併存であったことは確実である。掘り方の内側に石組を構築しているが，形態的にみて上部と下部に分けることが可能である。以下の記述は，「上部掘り方」「下部掘り方」「上部石積み」「下部石積み」と呼称して行うこととする。

上部掘り方は，平面形態が不整形な円形，断面形態が擂鉢形を呈しており，東西4.1ｍ，南北4.15ｍ，深さ0.4～0.55ｍを測る。底面は東西2.6ｍ，南北3.15ｍのいびつな長方形もしくは楕円形プランを呈しており，中央部に掘り込まれた下部掘り方・石積みに向かって緩やかに傾斜している。上部掘り方底面とＳＤf57底面は，ほぼ同じレベルである。下部掘り方は，平面円形・断面逆台形であり，直径1.7ｍ，深さ0.87～1.05ｍを測る。基盤層との関係をみると，上部掘り方は基盤表層をなす灰黄色粘質シルトであるが，上部掘り方下端から下部掘り方は径20㎝以下の円礫を多量に含む砂礫層を掘り込んでいる。したがって，下部掘り方は透水層に達していたことになる。

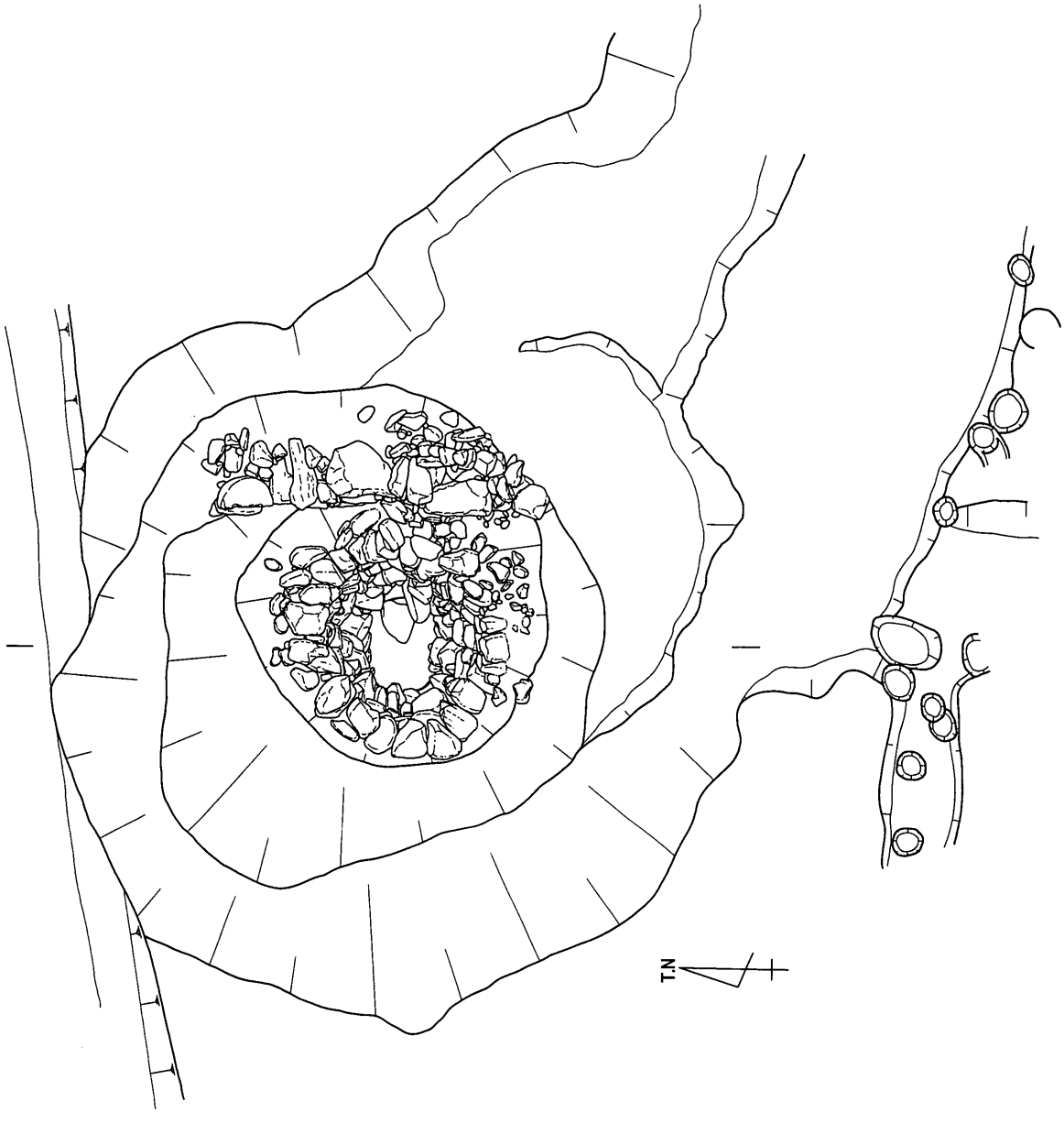
石積みは，上記したような掘り方の形状に合わせて構築されている。下部石積み上面の一部が上部石積みの下面にもぐり込んでいることから，下部石積み→上部石積みという前後関係が想定できる。上部石積みは，上部掘り方の東縁底面で検出された。30～40㎝大の自然礫や石臼を２・３段小口積みや平積みにしており，西側すなわち掘り方中央部側に面を揃えて直線的に並べられていた。検出した平面長は1.95ｍを測る。また石積みの裏込めには，10～20㎝大の礫が用いられていた。遺存していたのはこの部分にとどまるが，掘り方西側には埋め戻しに伴う土層（上層）中に多数の礫が包含されていた

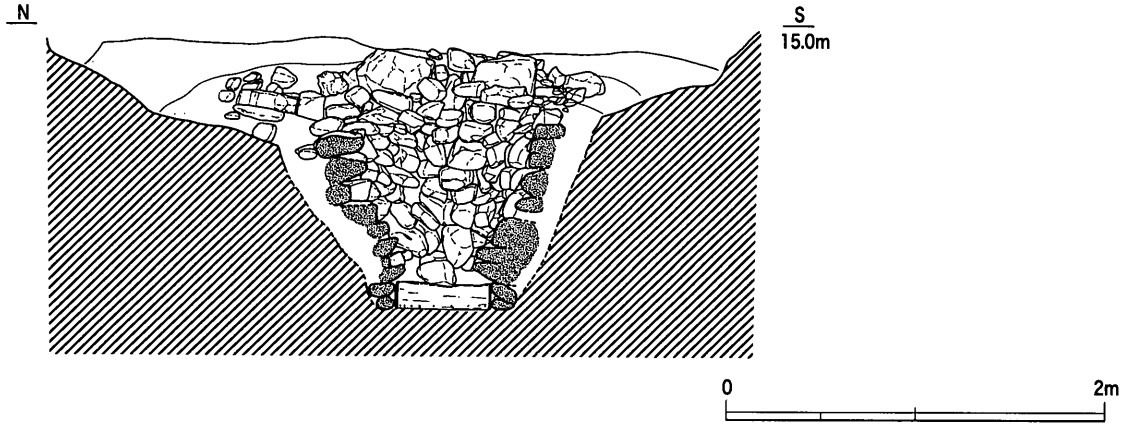


1. 明黄褐色粘質シルト（鉄分を含む）
2. 褐灰色粘質シルト（径５～15ｃｍ以下のベースブロックを多量に含む。径５～20ｃｍ以下の小礫を含む）
3. 褐灰色細砂を含む
4. 褐灰色粘土（径５～15ｃｍ以下のベースブロックを多量に含む。２層に近似）
5. 褐灰色粘土、にぶい黄橙の細砂を含む
6. 褐灰色粘土（径６～30ｃｍ以下の礫も多量に含む）
7. 灰色砂混じり粘土（植物遺体を含む）
8. 灰色粘土と中～粗砂のラミナ（植物遺体を含む）
9. 灰白色細～中砂（植物遺体を含む）
10. 褐灰色粘質シルト（荒砂混じり・径５ｃｍ以下の小石を含む）　上層石組み裏込め土
11. 灰黄色粘質シルト　ベース
12. 灰色細砂を含む
13. 黄橙砂礫（径２～20ｃｍ以下の円礫・クサレ礫を含む
14. 青灰色砂礫を含む

13・14 基本的に同じ

第243図　SEf02断面図（1/40）





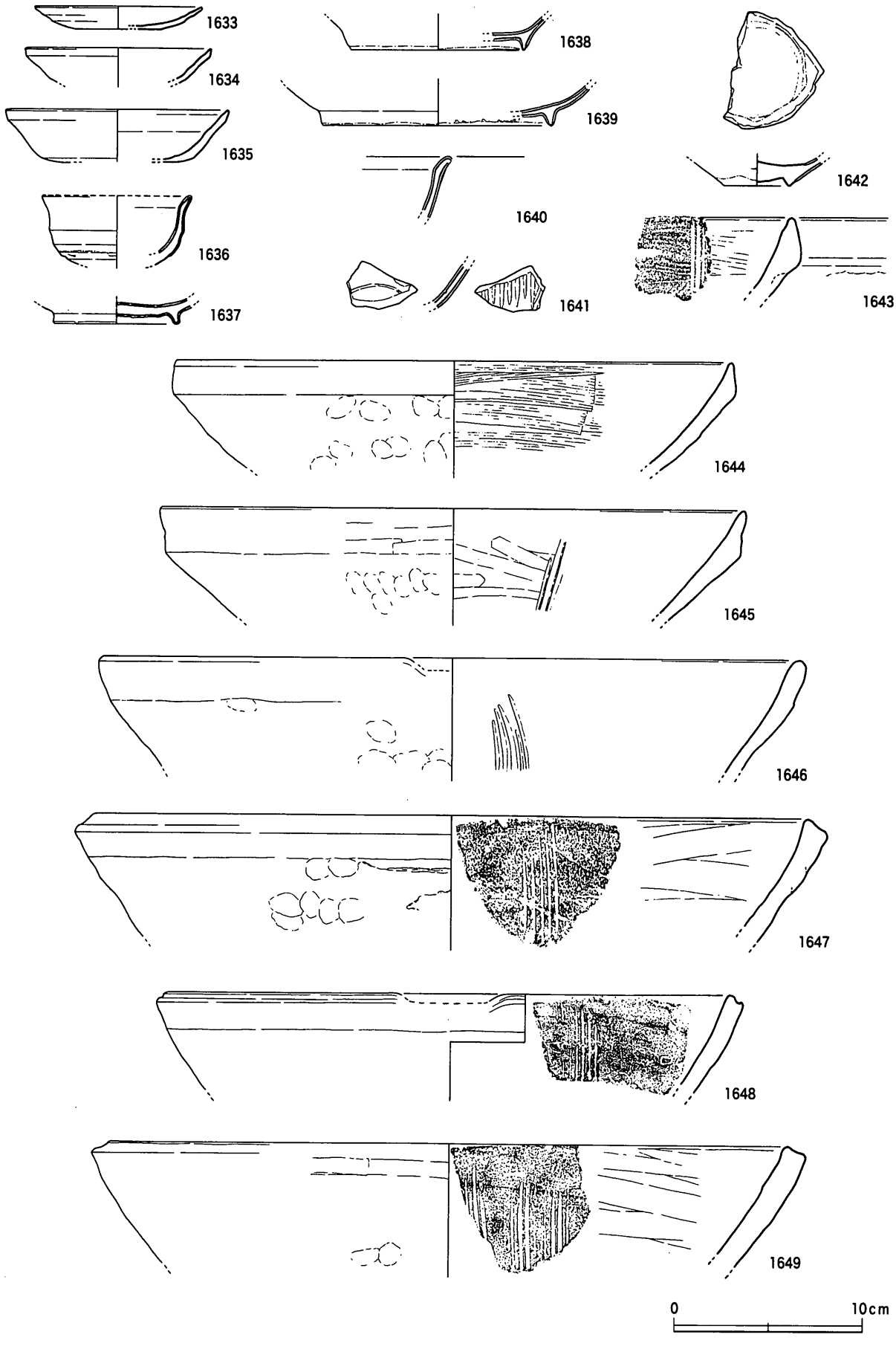
第244図　SEf02平・断面図（1/40）

ことから，少なくとも上部掘り方西側にも石積みが構築されていた可能性は考えられる。下部石積みは，20～30㎝大の円礫を円形プランに小口積みして構築されており，上面での内径0.9ｍ，基底部での内径0.55ｍ，石積み高1.2ｍを測る。西側の石積み上端は崩落しており，土層堆積状況とも併せると，埋め戻しの際に崩壊したものと考えられる。基底部石積みの内側には，直径48㎝，高さ15㎝の曲物（底板なし）が据えられていた。石材の積み方は，下部掘り方の掘り込みに沿うかたちで上開きに積まれているが，最下部の曲物直上の石積みは土圧のためか，内側に大きくせり出している。

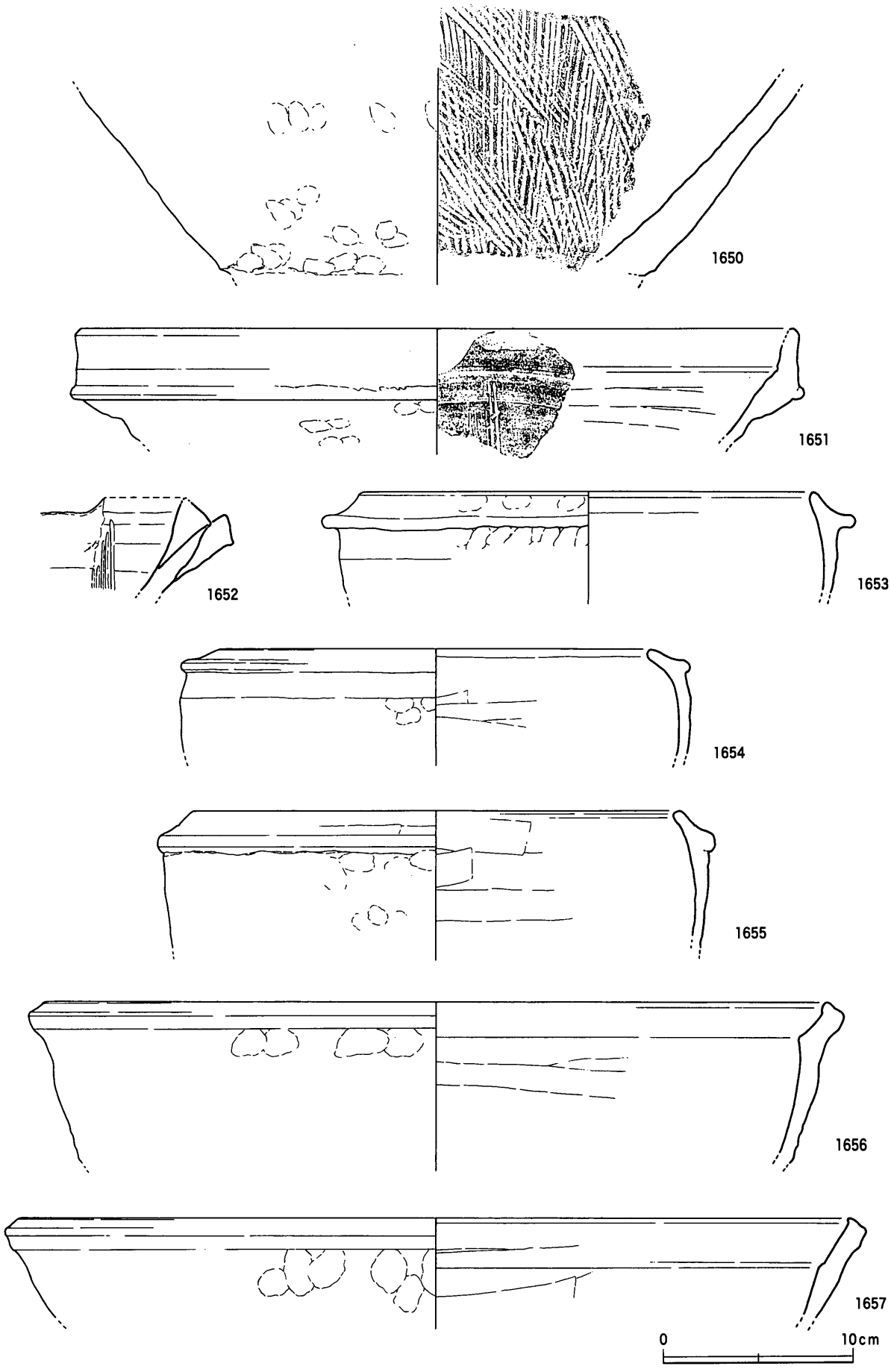
土層は，石積み内埋土上層（１～７層）・石積み内埋土下層（８・９層）・石積み裏込め層（10層）の３層に大別できる。上層は上位で基盤層ブロックを多量に含んでおり，下位で石積みの使用石材とみられる礫を多量に含んでいる。いずれも人為的な埋め戻しによる堆積層と考えられる。下層は植物遺体を含んだ砂層であり，下部石積み上面から基底部曲物上側にはラミナ状の堆積が認められた。これは自然の流水作用によるものと考えられるため，下部石積みがほぼ埋没するまで湧水が継続していたことを示しているといえよう。なお，下層はＳＤf57下層（細砂をラミナ状に含む粘土・粘質シルト）と近似しており，大局的には連続した土層と捉えることが可能である。

ＳＥf02はＳＤf57と連続することから，単なる井戸ではなく湧水点の掘り込みと導水路がセットになった灌漑施設とみることができる。讃岐地方では，このような灌漑施設を「出水」と呼称しており，香川用水による安定的な用水供給が成立するまでは，地域灌漑の極めて重要な用水源であった。高松平野南部においても香東川の扇状地先端部で多くの出水が現在もみられ，近隣では空港跡地遺跡Ｅ地区や多肥松林遺跡において近代の構造的な出水が発掘調査されている。ともに大きめの掘り方の中央で木枠を伴う湧水部が検出されており，湧水部の深さは掘り方底面から１ｍ以上（多肥・松林の出水は３ｍ以上）とかなり深い。これらは「湧水部＋水溜めの掘り方」という構造物を伴った二段掘りの形態をもつ点で，「下部石積み＋上部石積み」というＳＥf02の構造とも共通している。現在までの知見では，ＳＥf02は近・現代の出水と同じ構造をもつ最も遡る事例として位置付けることが可能であり，弥生時代～古代の素掘り形態の出水状遺構との系譜的関係が今後の検討課題となろう。

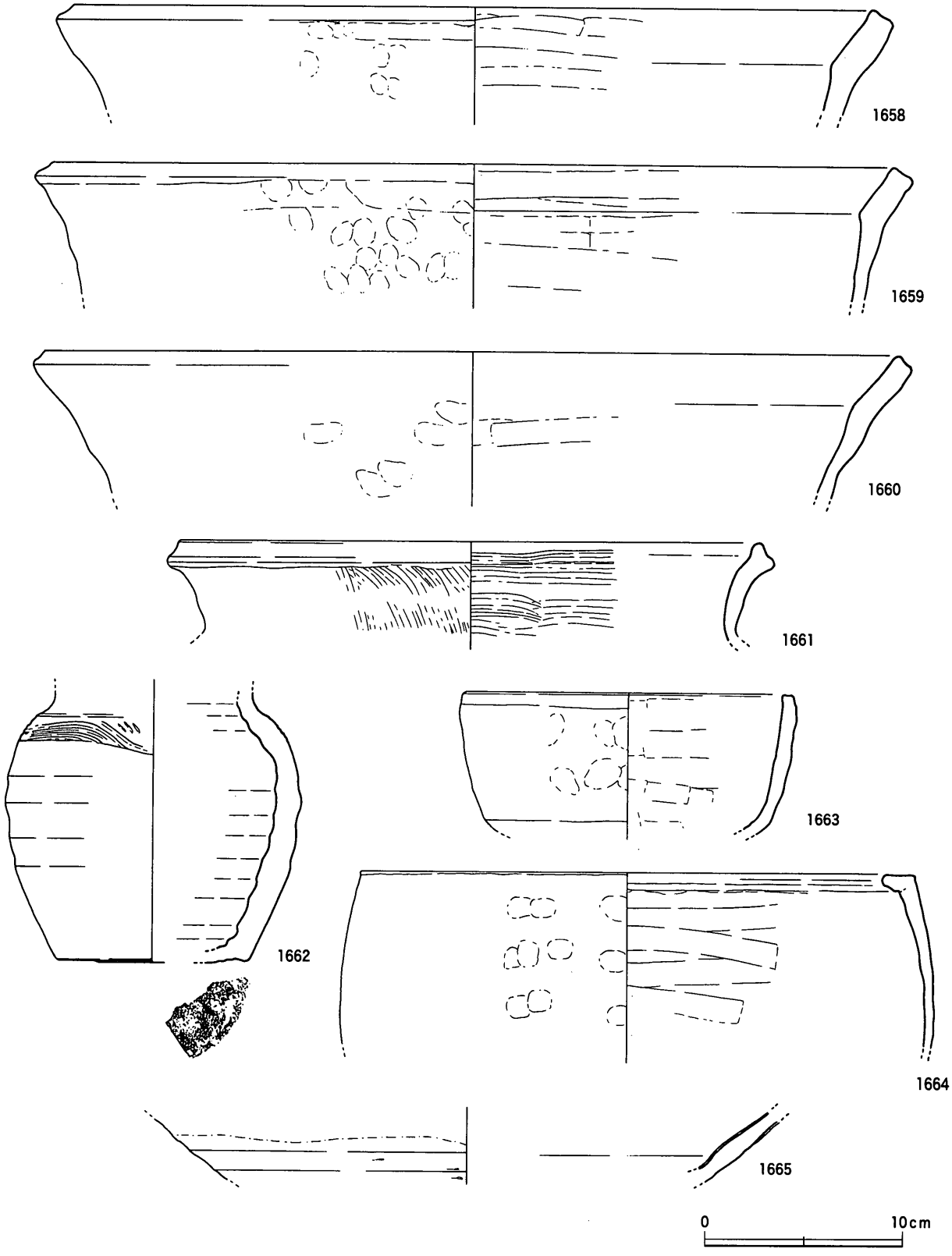
遺物は上層・下層から出土しており，両層出土遺物ならびに上層下位で崩落礫を多量に含む６層出土遺物を抽出して図示した。上層出土遺物（第245～247図）には，土師質土器皿・杯・擂鉢・足釜・鍋・鉢・深鉢，楠井産擂鉢，白磁小碗・皿，青磁碗，染付皿，備前焼擂鉢・壺，亀山焼甕，肥前系陶器鉢がある。土師質土器皿には，口縁端部を最後にナデ調整するもの（**1633**）と，「口縁部→体部ナデ手法」のもの（**1634**）がある。土師質土器杯（**1635**）は，系統の位置付けが難しい。あるいは法量分化した中型の皿とすべきか。白磁小碗（**1636**）は端反り形態のものであり，体部下半外面は露胎となっている。森田氏のＥ群碗に相当しよう。**1547**は白磁Ｅ群皿の底部とみられ，高台内側まで全面が施釉される。**1638**・**1639**は白磁Ｅ－２ｂ類皿であり，高台畳付が露胎となり砂目が認められる。釉はやや灰色を帯びる。青磁碗は口縁部が外反して丸く太い端部をもつ上田分類Ｄ－Ⅱ類（**1640**），体部外面にヘラによる線描連弁文をもつ上田分類Ｂ－Ⅳ類（**1641**）がある。染付皿（**1642**）は，いわゆる碁笥底をもつもので，小野分類の皿Ｃ群にあたる。底部外面は露胎であり，見込みに２条の界線が描かれる。楠井産擂鉢は，ＡⅡ類（**1647**）・ＡⅢ類（**1643**～**1645**）・ＢⅠ類（**1646**）がある。非楠井系統の土師質土器擂鉢は，口縁部端面に沈線状の凹面が作出されるもの（**1648**），口縁部端面にナデ調整による弱い凹面が形成され卸し目原体が太く粗いもの（**1649**），また粗く太い卸し目を垂直方向→斜め方向の順で密に施すもの（**1650**）がある。**1650**は，ＳＤf57出土例（**1551**）や小区



第245図　SEf02上層出土遺物（1）（1/3）



第246図　SEf02上層出土遺物（2）（1/3）



第247図　SEf02上層出土遺物（3）（1/3）

画bピット出土例（**1605**）と同系統のものである。備前焼擂鉢は，口縁部が長く直立するが未だ沈線を施さない間壁編年Ⅳ期後半のもの（**1651**），口縁部が肥厚・拡張しないⅢ期のもの（**1652**）がある。土師質土器足釜には，楠井BⅣ類（**1653**）・C類（**1654・1655**）がある。土師質土器鍋

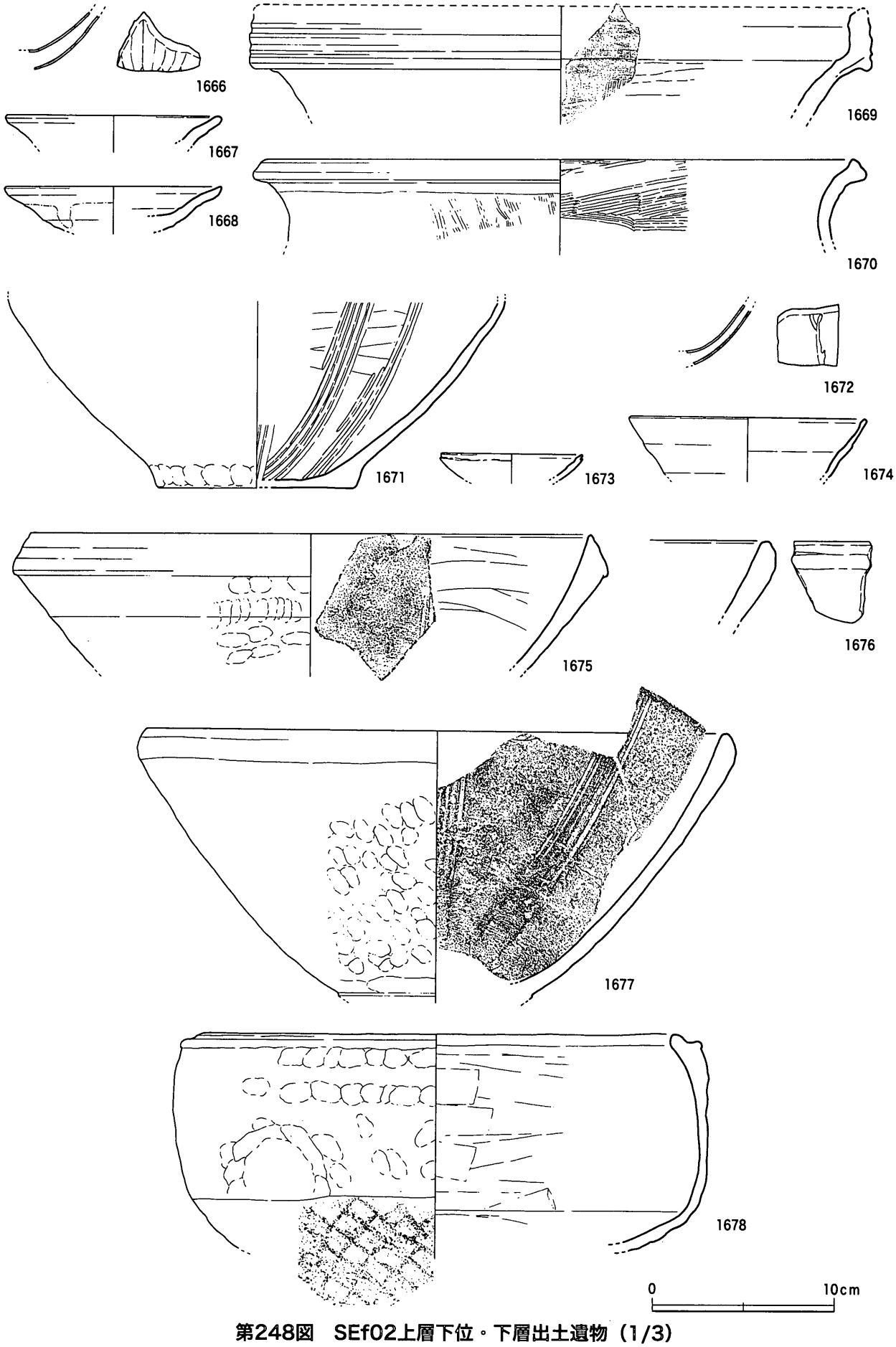
(1656～1660) は，全て非楠井系統である。頸部の屈曲は内面では比較的明瞭だが，外面では極めて緩やかなものであり，口縁部が内弯気味になるもの（1656・1657）と，直線的に伸びるもの（1658～1660）の２者が存在する。前者は楠井Ｂ類でもみられた鉄鍋模倣形態の系譜を引くとみられ，後者は中世前半以来盛行してきた楠井Ａ類的な在地産鍋の系譜を引くものと思われる。亀山焼甕（1661）は，口縁部端面に回転ナデによる凹面が形成され，上下両側に拡張する。頸部外面に縦ハケ調整，口頸部内面に横ハケ調整が施される。草戸千軒町遺跡Ⅳ期の所産であろう。備前焼壺（1662）は口頸部に比して肩部の張りが弱く，また肩部に振幅の大きな粗い波状文が施される。間壁編年Ｖ期の所産である。肥前系陶器皿（1665）は，見込みに段をもち灰釉を施すもので，大橋編年Ｉ期のものと考えられる。

上層下位の６層出土遺物（第248図）には，土師質土器擂鉢，青磁碗，肥前系陶器皿，備前焼擂鉢，亀山焼甕がある。青磁碗（1666）は中世前半の横田・森田分類Ｉ－５ｂ類碗であり，細片であることからも混入とみられる。肥前系陶器皿（1667・1668）は，見込みに段をもつもので体部外面下半は露胎である。重ね焼きの方法が特定できないため断定はできないが，大橋編年Ｉ期の可能性がある。土師質土器擂鉢（1671）は，口縁部が内側に屈曲する系統のもので，体部下半には使用による摩滅が観察される。備前焼擂鉢（1669）は，長く直立して拡張する口縁部をもち，外面には沈線が明瞭に施される。こうした特徴から，間壁編年のＶ期に該当するものといえる。亀山焼甕は，上層出土の1661と同様の特徴をもつ。

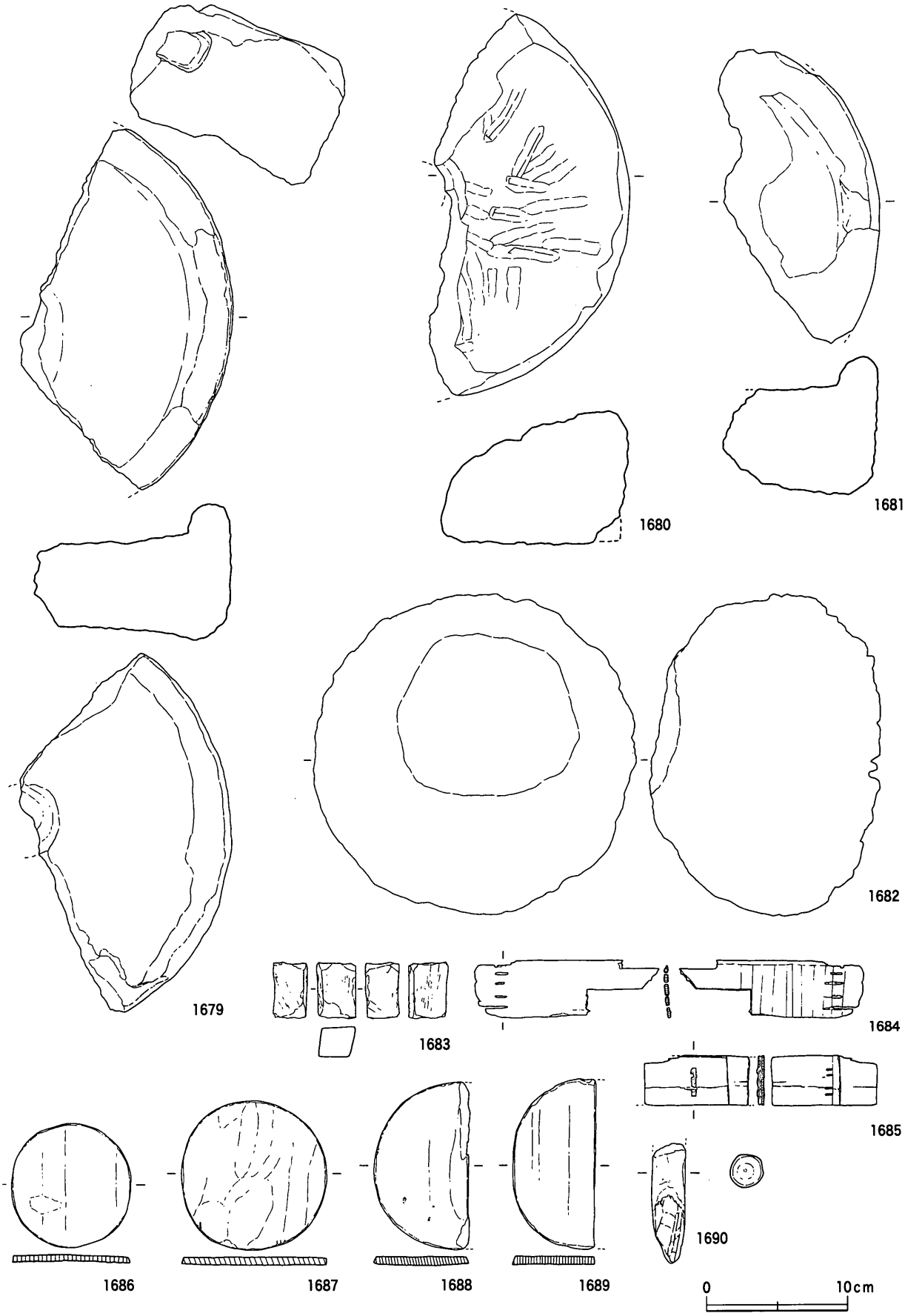
下層出土遺物（第248図）には，土師質土器皿・杯・足釜，楠井産擂鉢，青磁碗がある。土師質土器皿（1673）は，「口縁部→体部ナデ手法」によるもので，内弯気味に外傾する口縁部の形態がＳＤf57出土の1532・1541と共通する。楠井産擂鉢には，ＡⅢ類（1675）・ＢⅡ類（1676・1677）がある。1675はシャープな口縁端部をもち，Ⅳ期前半の備前焼擂鉢に近似した形態を呈する。1677の体部内面下半は，使用によって器表が顕著に摩滅している。土師質土器足釜（1678）は，楠井Ｃ類に相当するもので底部の格子叩き目は４×７㎜とかなり粗くなっている。外面には煤が付着しており，脚基部の剥離部分にも及ぶことから，脚部欠損後も煮沸に使用されていたことがわかる。

この他，各層より石製品と木製品が出土している（第249図）。石臼（1679～1681）・五輪塔（1682）は，ともに凝灰角礫岩製である。曲物は，下層から側板（1684・1685）と底板（1686～1689）が出土している。底板が直径９～12㎝前後の小型製品（柄杓などか）である。1690は先端部のみを加工した杭状の木製品である。

各層の遺物の年代観をまとめておく。上層では白磁・青磁・染付の大半が15世紀後葉～16世紀中葉に属するものであり，備前焼擂鉢・壺，亀山焼甕も同様の時期幅でおさえることが可能である。また楠井産擂鉢Ｂ類（1646）や非楠井系統の大型擂鉢（1650），土師質土器足釜Ｃ類（1654・1655）・鍋（1656～1660）などの在地製品についても，ほぼ同様の年代観が付与できよう。ただ，１点のみではあるが肥前系陶器鉢が出土していることは，上層の年代が16世紀末葉～17世紀初頭頃まで明らかに下降することを示している。土層の状況からみても大半の遺物は，埋め戻しの際に周辺の遺構・包含層から二次的に移動したとみるのが妥当であろう。上層下位の６層出土遺物は，堆積状況から遺構の廃絶時期を直接的に示すと考えるが，肥前系陶器皿は16世紀末葉～17世紀初頭に位置付けられる。下層出土遺物は，遺構が機能していた時期を示す資料であり，土師質土器皿・足釜や楠井産擂鉢Ｂ類は15世紀後葉～16世紀中葉の幅に収まるものとみられる。以上を踏まえ，ＳＥf02は15世紀後葉～



第248図　SEf02上層下位・下層出土遺物（1/3）

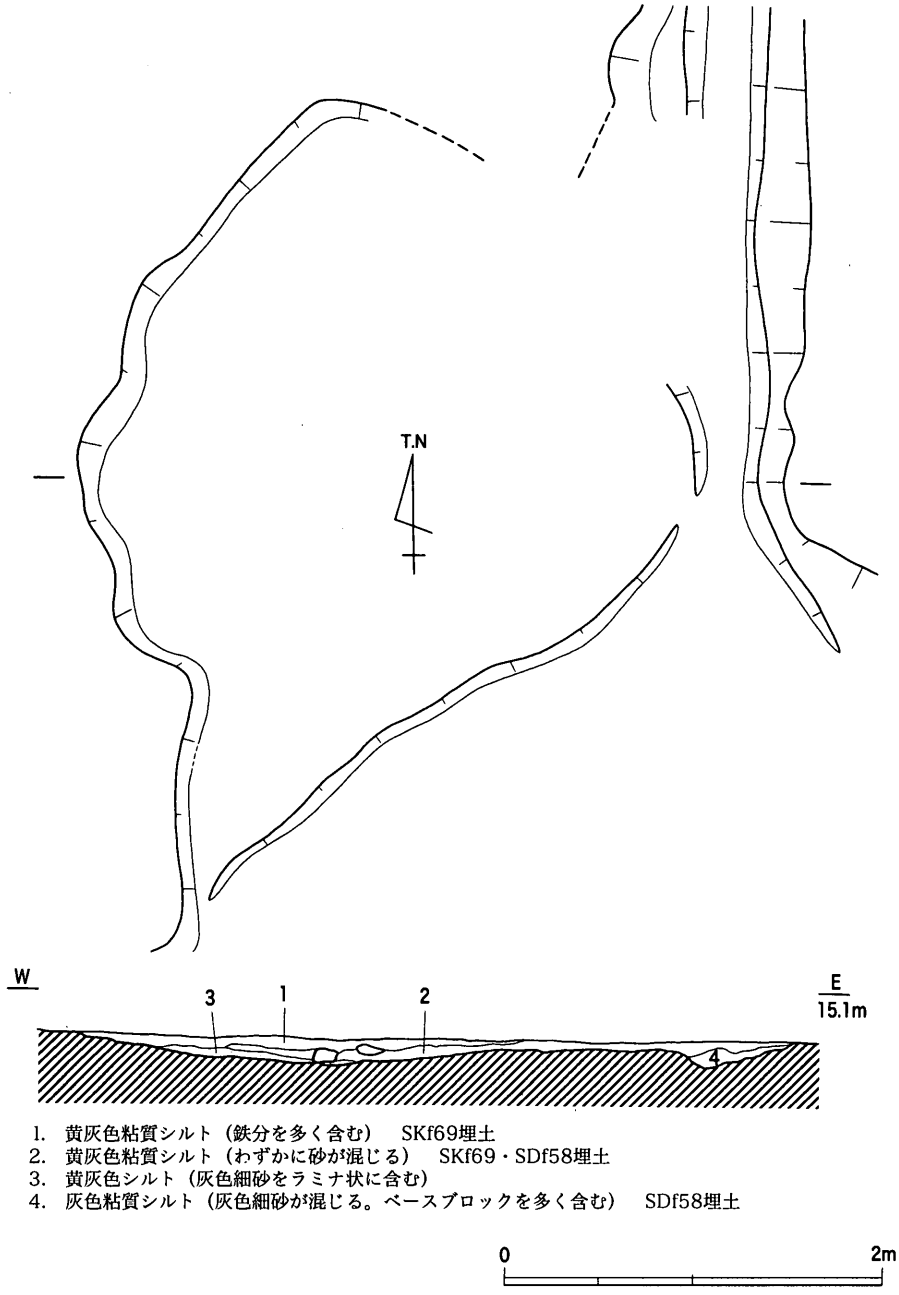


第249図　SEf02出土石製品・木製品（1/4，1683は1/2）

16世紀中葉に機能し，16世紀末葉～17世紀初頭に埋め戻されたと理解しておく。下層出土の土師質土器杯（**1674**）や楠井産擂鉢AⅢ類（**1675**）については，遺構の上限を示すものとみてよいのか，周辺からの混入とみるべきなのか，判断は難しい。しかし連続するＳＤf57の上限が一応，14世紀末葉～15世紀前半とみられることから，**1675**はＳＥf02の上限を示す資料として捉えておく。

土坑（第228図）

小区画ｂでは，２基の土坑が検出された。各土坑の形態については第228図を参照されたい。特定の地点に集中するような分布状況ではなく，ややいびつな平面・断面形態を呈する。出土遺物は中世土器の細片が出土したのみであり，分布・形態・遺物などから遺構の性格を想定することは困難である。



第250図　SKf69平・断面図（1/40）

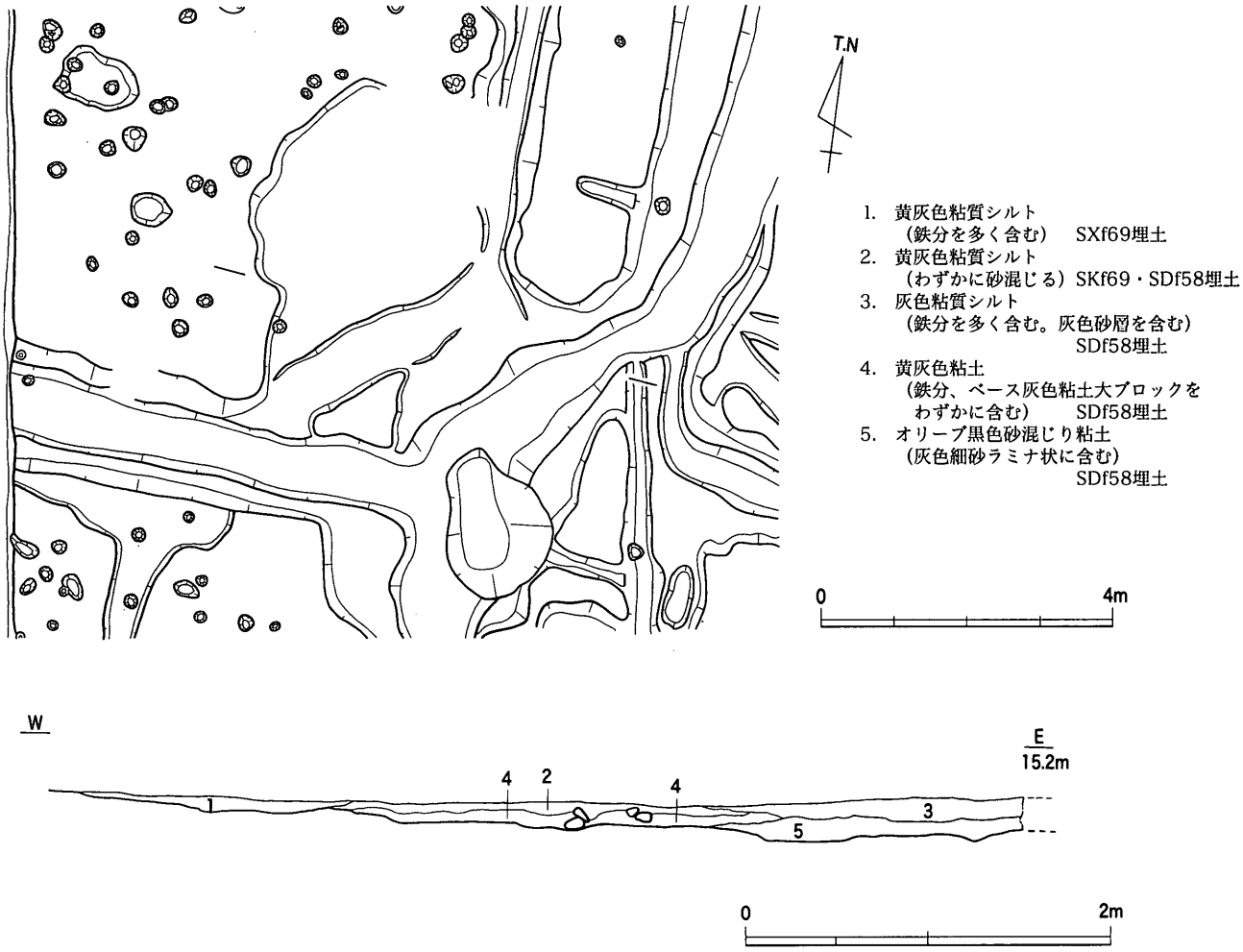
d．大型土坑

ＳＫf69（第250～252図）

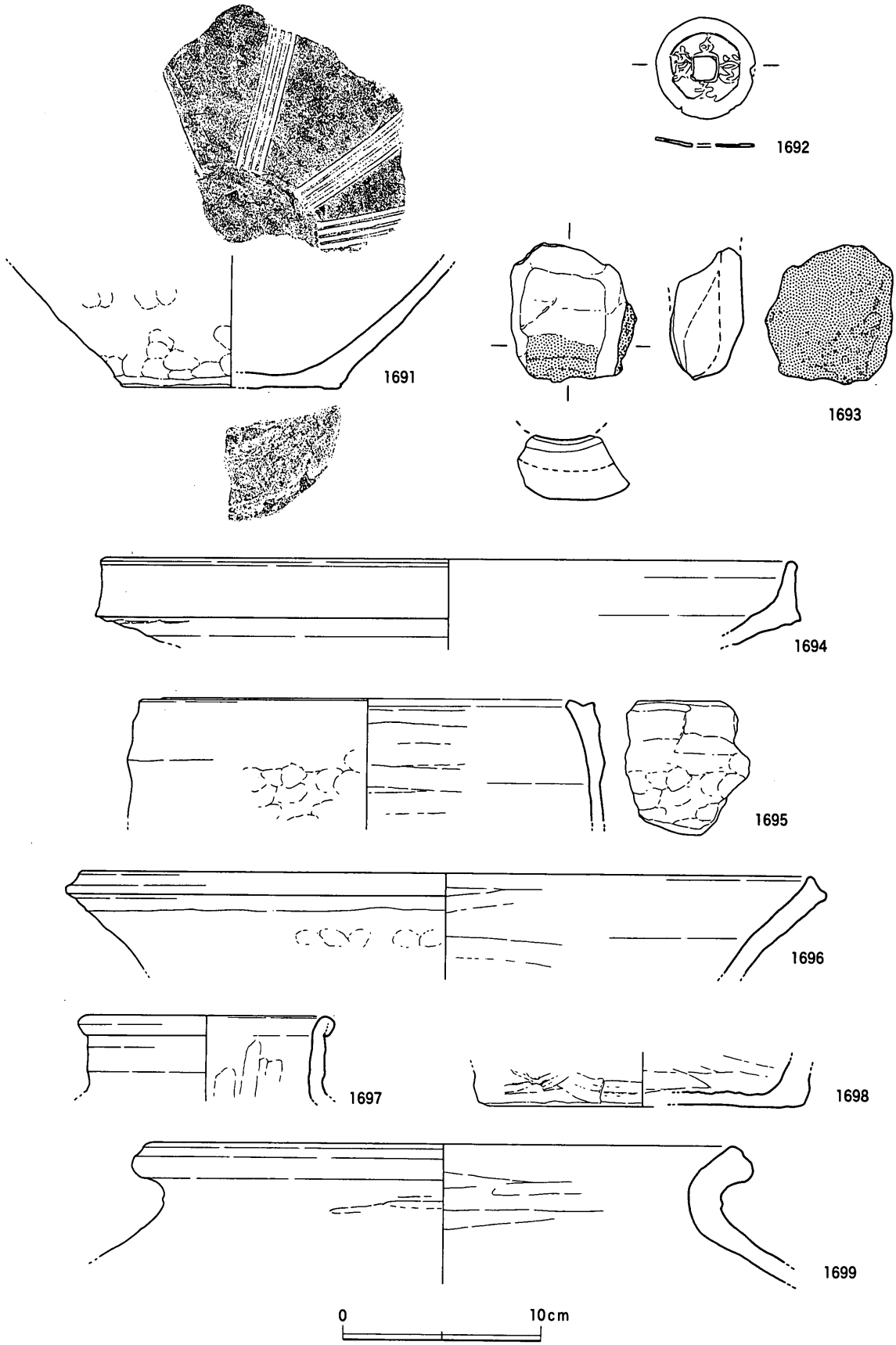
小区画ｂの南東部で検出された，平面形態が不定形なやや大型で浅い土坑である。小区画ａのＳＫf65・66に近似した規模・形態をもつが，底面や埋土に礫を含まないことが異なる。規模は南北3.43ｍ，東西3.24ｍを測る。土層は３層に細別でき，隣接するＳＤf58とは２層が共通して堆積することから，前後関係を伴うものではなく同時併存の可能性が高い。

出土遺物には，土師質土器把手付鍋・鍋，楠井産擂鉢・甕，備前焼擂鉢・壺の他，銅銭や羽口がある。楠井産擂鉢（**1691**）は，内面に４条/1.4㎝の卸し目を８ないし９方向施す。底部外面には下駄印がみられる。備前焼擂鉢（**1694**）は，間壁編年Ⅳ期後半のものである。土師質土器把手付鍋（**1695**）・鍋（**1696**）は16世紀前葉～中葉頃の所産とみられる。備前焼壺（**1697**・**1698**）は，短く潰れた玉縁状口縁をもち，四耳壺とみられる。Ⅳ期の所産である。楠井産土師質甕（**1699**）は，緩いカーブを描いて外反する短い頸部をもち，口縁部は外方へ丸く肥厚する。銅銭（**1692**）は，北宋銭の至道元宝（草書体：995年初鋳）である。羽口（**1693**）は，内径４㎝前後に復元できるものであり，炉壁内に突き出た先端部の破片である。外面には黒色を呈する多孔質の鉄滓が付着している。

以上からＳＫf69は16世紀前葉～中葉の幅で捉え得るものと考える。



第251図　SKf69・SDf57・58平・断面図（平面1/100・断面1/40）

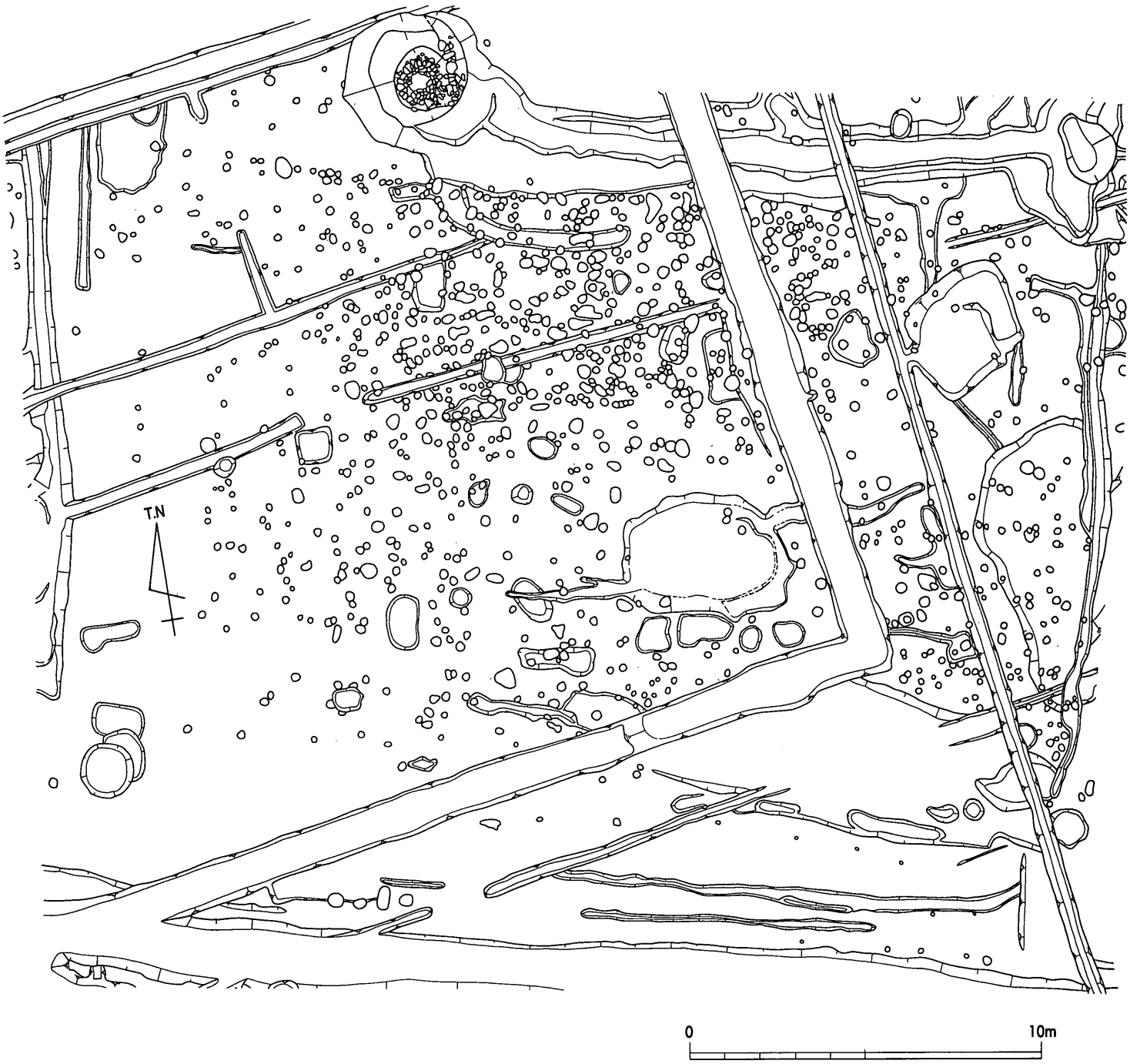


第252図　SKf69出土遺物（1/3，1692は2/3，1693は1/2）

(4) 小区画ｃ（区画４－ｃ）

ａ．区画範囲と区画施設

北辺をＳＤf57・65とＳＡf04，東辺をＳＤf64・ＳＡf05，南辺をＳＤf53・62・63とＳＡf06，西辺をＳＤf61によって各々区画された小区画である。規模は東西28.7ｍ，南北19.5ｍを測り，東西に長いプランである。



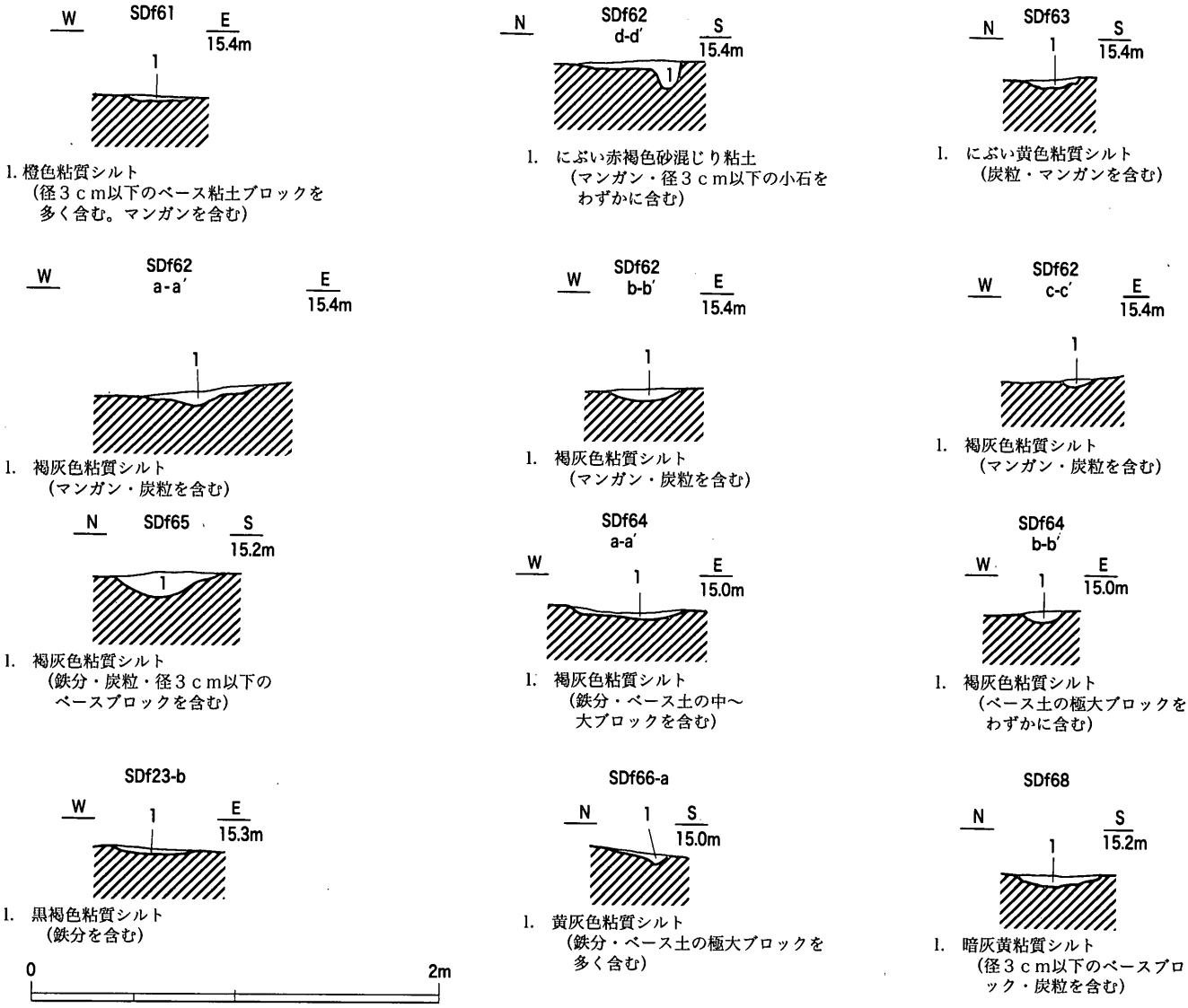
第253図　小区画c（区画４－c）平面図（1/200）

ＳＤf61（第254図）

小区画ｃの北西部を画する小溝であり，区画４－ａ東辺のＳＤf54の東側1.35ｍ（芯々距離）を併行して南北に延びる。検出長4.8ｍを測り，北端は調査区外であるが，おそらく区画４－ｂの西辺に延びているものと推測される。南端部は明確に途切れており，それより南側では隣接するＳＤf54が東側に張り出している。このため，検出した南端で本来的に収束していた可能性が考えられる。溝幅は0.3～0.4ｍ，深さ0.02ｍを測り，断面形態は浅い皿形を呈する。

ＳＤf53・62・63（第254図）

小区画ｃの南辺を画する小溝であり，３条が併行して東西方向に延びている。ＳＤf53は断続的なプランで検出されているが，位置的にみて区画４－ａの西・南辺を画する溝と同一遺構である。幅0.35～0.65ｍ，深さ0.01～0.18ｍを測る。ＳＤf62は，ＳＤf53の南側1.9～2.4ｍ（芯々距離）をほぼ併行して延びており，幅0.3～0.5ｍ，深さ0.03～0.13ｍを測る。検出した東端部でやや北側に屈折する。ＳＤf63は，ＳＤf62の南側0.75～1.0ｍ（芯々距離）を併行して延びる小溝である。



第254図　SDf61～66断面図（1/40）

以上の３条の溝の前後関係は明確でないが，区画４－ｃ・ｅを画する溝との繋がりを検討すると，ＳＤf53はＳＤf45に，ＳＤf62はＳＤf75に繋がるものとみられ，両者が併存していた可能性が考えられる。

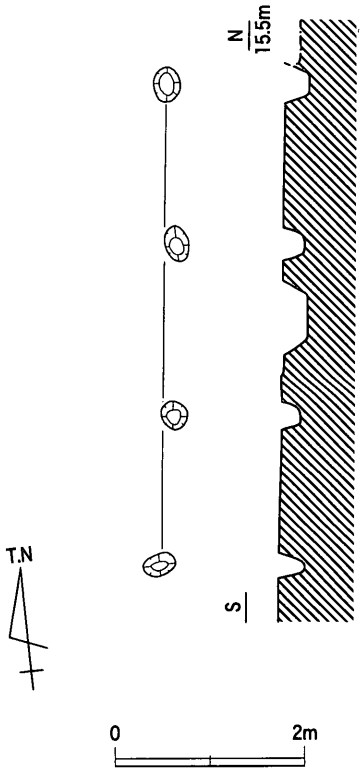
ＳＤf64（第254図）

小区画ｃの東辺を画する小溝である。上記したように，位置関係から南辺部のＳＤf53に繋がるものと考えられる。検出長は15.8ｍを測り，北端部は攪乱によって削平されているものの，ＳＫf101を介してＳＤf57に繋がるものと思われる。東側2.75ｍ（芯々距離）には区画４－ｅの区画溝ＳＤf75があり，両溝に挟まれた部分に通路としての機能が想定される。溝幅0.14～0.55ｍ，深さ0.05ｍを測り，断面形態は浅い皿形を呈する。マンガン・炭化物粒を含む粘質シルトを埋土とする。遺物には，青花碗（**1769**），楠井産擂鉢（**1770**・**1771**），土師質土器足釜（**1772**）・把手付鍋（**1773**）がある。若干の時期幅があるが，最も新しい様相をもつ把手付鍋から16世紀前葉～中葉の所産と考えられる。

ＳＤf65・66（第254図）

小区画ｃの北辺付近を東西方向に延びる溝である。ＳＤf66は，東辺を画するＳＤf64より西に分岐して1.7ｍ延びて収束する。またＳＤf65は，ＳＤf57より南に分岐した後に東側へ5.0ｍ延びて収束する。ＳＤf65は幅0.5ｍ，深さ0.09ｍ，ＳＤf66は幅0.28ｍ，深さ0.05ｍを測る。

ＳＡf04（第256図）



第255図　SAf05平・断面図（1/80）

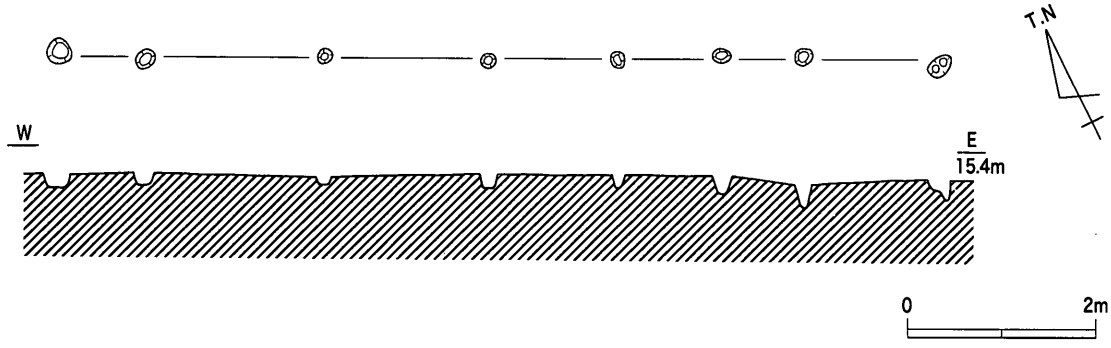
小区画ｃ北西部の溝によって区画されない箇所を画する東西方向（W－10°－N）の柵列である。ＳＢf32北辺部の西側延長部にピットが並び，ＳＤf61に至る。ピットはほぼ同じ地点で複数認められるため，柱の立て替えを経ながら継続的に存在したことが窺える。遺物は出土していないが，ＳＢf32との位置関係から中世後半に位置付けてよかろう。

ＳＡf05（第255図）

小区画ｃ東辺部の北端部で検出された。ＳＤf64の東側に隣接して４個（３間分）のピットが並ぶ。検出された延長距離は5.1ｍと短く，掘立柱建物の可能性も否定できないが，東側ないし西側に明確に対応するピット列が検出されていないことから，柵列とした。柱穴の平面形態は円形であり，柱筋は直線的に通っている。遺物は出土していないが，周辺遺構との位置関係から中世後半と考えて大過なかろう。

ＳＡf06

小区画ｃ南東部を区画する東西方向（W－10°－N）の柵列で



第256図　SAf06平・断面図（1/80）

ある。ＳＤf62の北側1.5ｍを平行して延びる。ピットの並びは不揃いであり，直線的に並ばない。しかし周辺にピットがほとんど存在しないため，これらを一連の遺構と認識して間違いないものと思われる。遺物は西端のピットから土師質土器鍋が出土しており，中世後半とみられる。

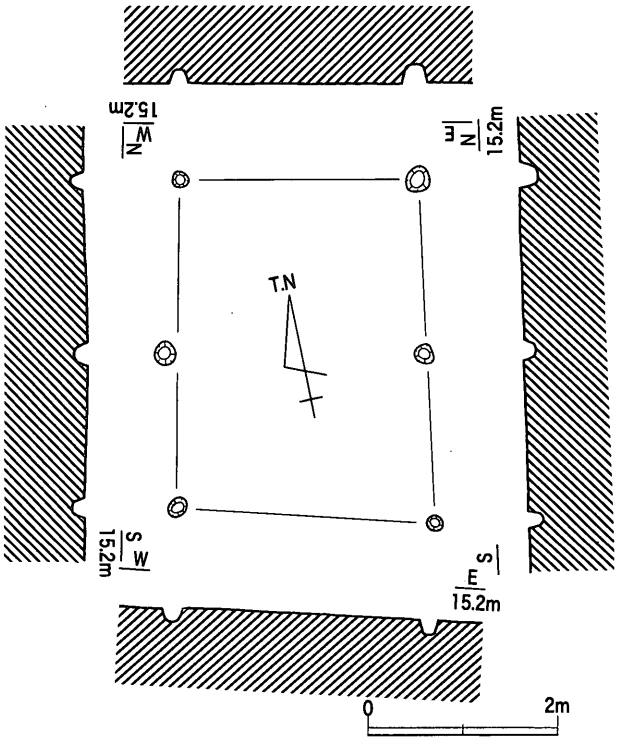
ｂ．建物

ピットの分布状況

小区画ｃでは1019個のピットが検出されたが，このうち掘立柱建物として復元できたのが６棟（柱穴75個）であり，検出数の7.3％に過ぎない。その分布は小区画ｃのほぼ全体に及ぶが，特に北半部に多く集中する傾向が看取できる。南東部のピットが比較的希薄な範囲には，不定形な大型土坑であるＳＫf103や土坑が分布しており，小区画内の機能的な分化状況を示唆する。

主な遺物としては，土師質土器小皿・杯・足釜・把手付鍋・甕・火鉢・土錘，楠井産擂鉢・甕，瀬戸天目茶碗，白磁皿，青磁碗，染付碗，用途不明鉄製品，北宋銭，砥石などがある。土師質土器小皿には，口縁部の立ち上がりが極めて短く，コースター状を呈する**1626**があり，ＳＤf16上層出土例と同一形態を呈する。**1621**・**1629**はこれより先行する13世紀代の遺物である。**1754**は口径6.0㎝の極小法量を計るが，極めて薄い器壁をもち口縁部の立ち上がりも比較的明瞭であることから，中世前半の小皿の形態とは異質である。おそらく中世後半の所産であろう。土師質土器皿（**1613**～**1615**，**1623**）は杯に近似した形態をもつが，口縁・体部の外傾度が強く，器体が浅手であることから，皿としておく。やや器壁が厚手な**1613**・**1623**と，薄手で「口縁部→体部」ナデ調整を施す**1614**・**1615**がある。両者は，胎土や色調の点では明確な区分が難しいが，上記した器壁の厚さやナデ技法の特徴から，別系統の皿とみることが可能であろう。土師質土器杯（**1618**・**1627**・**1757**）は，中世前半の所産とみられる**1618**があるが，**1627**は器壁が薄く仕上げられており，区画３のＳＤf48下層出土例と近似するものであろう。瀬戸天目茶碗（**1619**）は，大窯３期（16世紀第２四半期）の所産である。青磁碗（**1616**）は鎬蓮弁文を施した横田・森田分類のＩ－５ｂ類碗であるが，細片であるため古い時期の遺物の混入として捉えられよう。染付碗（**1630**）は，口縁部外面に３条の界線を描き，その中に「司」銘を連続的に書き込む。体部外面には草花文が描かれる。この他，楠井産擂鉢ＢＩ類（**1632**）や土師質土器足釜AⅣ類（**1758**・**1760**），口縁部の鍔状の縁帯が退化した把手付鍋（**1756**）などは，15世紀中葉～16世紀中葉のいずれかの時期に帰属させることができる。

以上のように，一部に14世紀代ないしそれ以前にまで遡るものが認められるが，概ね15世紀代から16世紀中葉頃までの幅の中で捉えることが可能である。



第257図　SBf31平・断面図（1/80）

ＳＢf31（第257図）

小区画ｃの北西部に位置する１×２間（梁間2.54ｍ，桁行3.5ｍ，床面積8.89㎡）の側柱建物である。ＳＡｆ04と重複した位置関係にあるが，両者の先後関係は明確ではない。主軸方向はＮ－11°－Ｅである。柱穴は直線的に並んでおらず，各辺も直角ではなく歪んでいる。平均柱間距離は桁行で1.73ｍである。柱穴は円形プランを呈しており，底面のレベルは概ね一定している。

遺物は土師質土器皿片と器種不明の細片が出土している。皿片は図示できないが中世後半の所産であると思われる。

ＳＢf32（第258図）

小区画ｃの北西部に位置する２×３間（梁間4.85ｍ，桁行6.9ｍ，床面積33.46㎡）の四面庇の総柱建物である。庇部分を含めると，建物の面積は76.26㎡を測り，区画４中最大規模をもつ。建物の主軸方位は，Ｎ－14.5°－Ｅである。

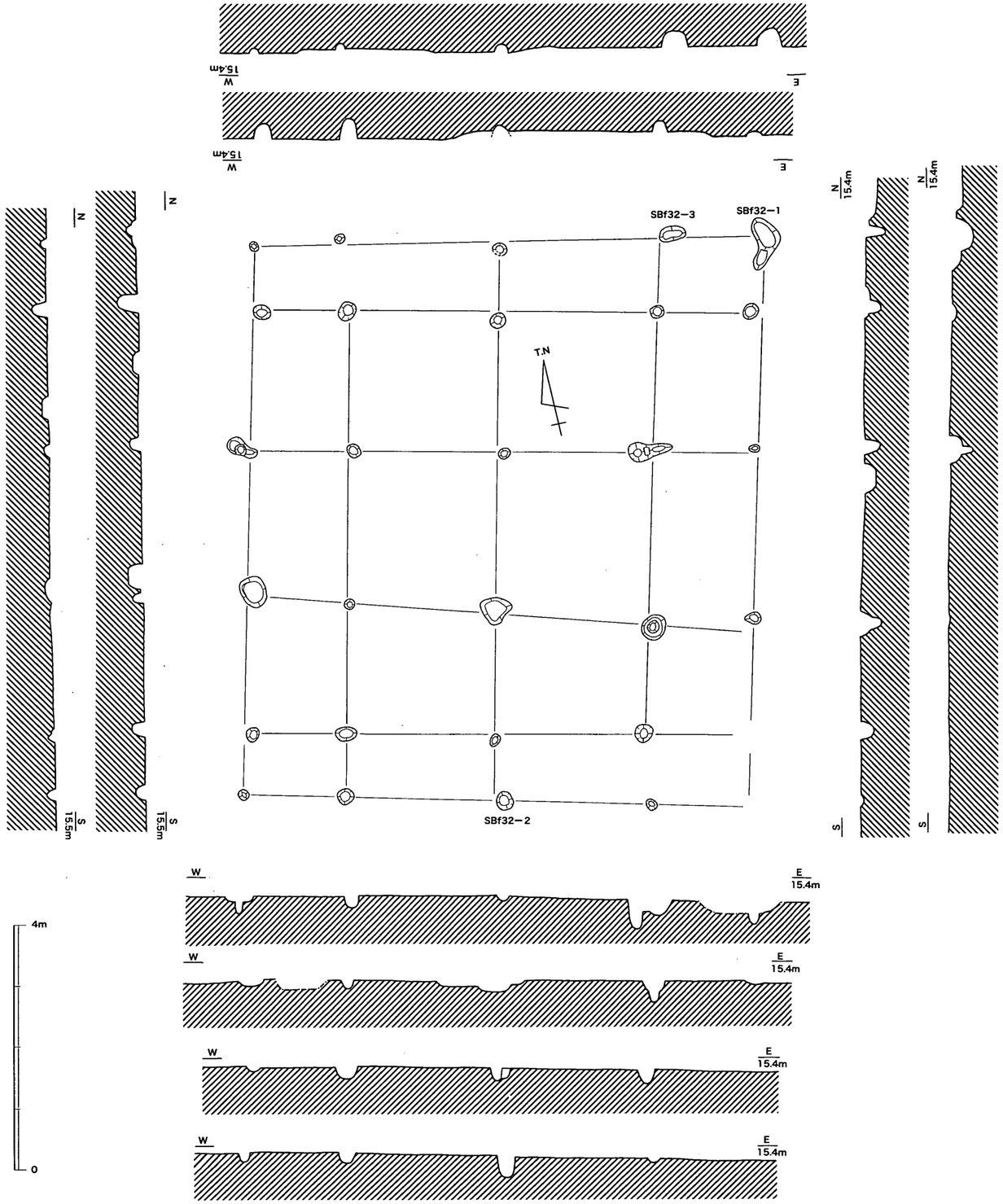
柱穴配置は，全体にやや不揃いである。柱間距離は，身舎部分では梁間方向で2.4～2.5ｍと概ね一定しているが，桁行方向で1.85～2.85ｍとかなりばらつきがある。一方，庇部分の柱間距離は北辺・南辺が1.0～1.2ｍであり，東辺・西辺が1.5～1.7ｍにまとまる。柱穴は円形プランを基調とするが，一部に不定形ないし楕円形プランのものが認められる。後者については，建て替え時の掘り直しを反映する可能性があるが，埋土の重複・切り合いは確認できなかった。柱穴底面のレベルには若干のばらつきがあるが，身舎部分と庇部分との間の差異は明瞭には指摘できない。ただし，身舎の北側２間分の梁間方向の中間柱はレベルが浅いことから，束柱であった可能性が考えられる。

遺物は，土師質土器皿（**1484**）・鍋（**1486**），青磁碗（**1485**）などが出土している。**1484**は口縁部まで遺存していないが，外傾度の強い杯形の皿であるとみられる。**1485**はやや幅狭い鎬蓮弁文を施しており，横田・森田分類のＩ５ｂ類碗である。**1486**は頸部の外反が比較的明瞭に認められるが，外面側は体部から連続的な傾向にある。これらは中世後半の所産であり，特に土師質土器鍋の形態的特徴から15世紀後葉以降に限定できよう。

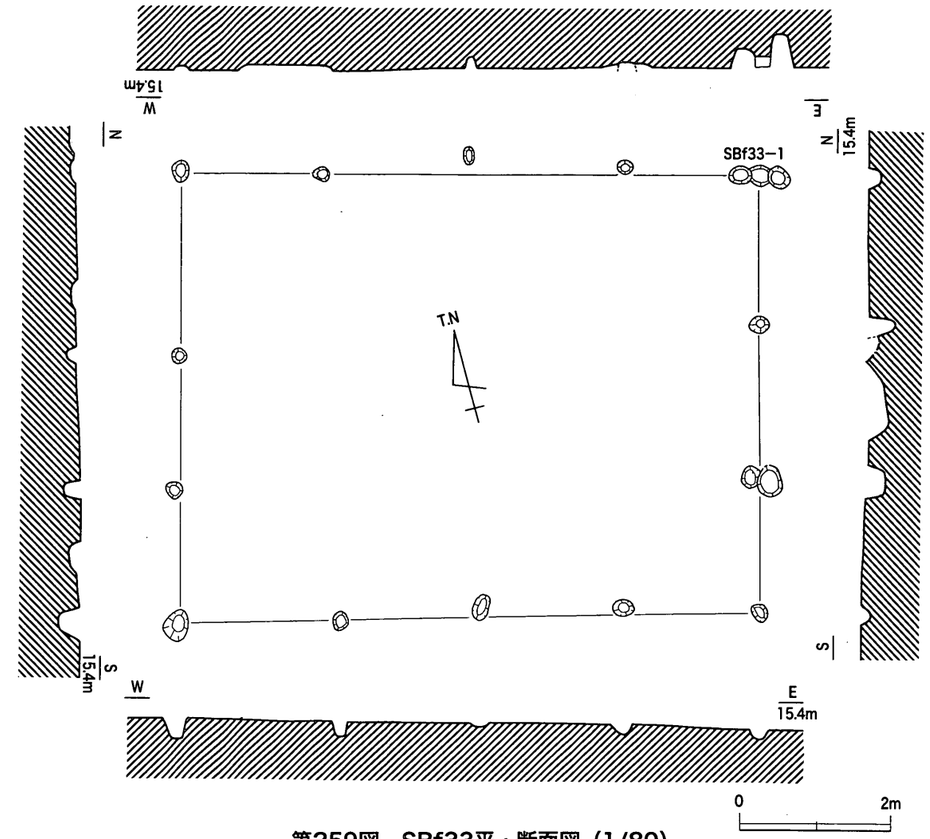
ＳＢf33（第259図）

小区画ｃの北西部でＳＢf32と重複する３×４間（梁間5.81～5.95ｍ，桁行7.6ｍ，床面積44.1㎡）の側柱建物である。桁方向に対して梁間が比較的長いプランであるが，建物中央に束柱のように対応する柱穴がないため，一応土間構造の側柱建物とせざるを得ない。建物の主軸方位は，Ｗ－14.5°－Ｎである。柱穴は一部を除いて直線的に揃っており，平均柱間距離は梁間1.96ｍ，桁行1.9ｍである。柱穴プランは円形ないし楕円形であり，底面のレベルは不揃いである。

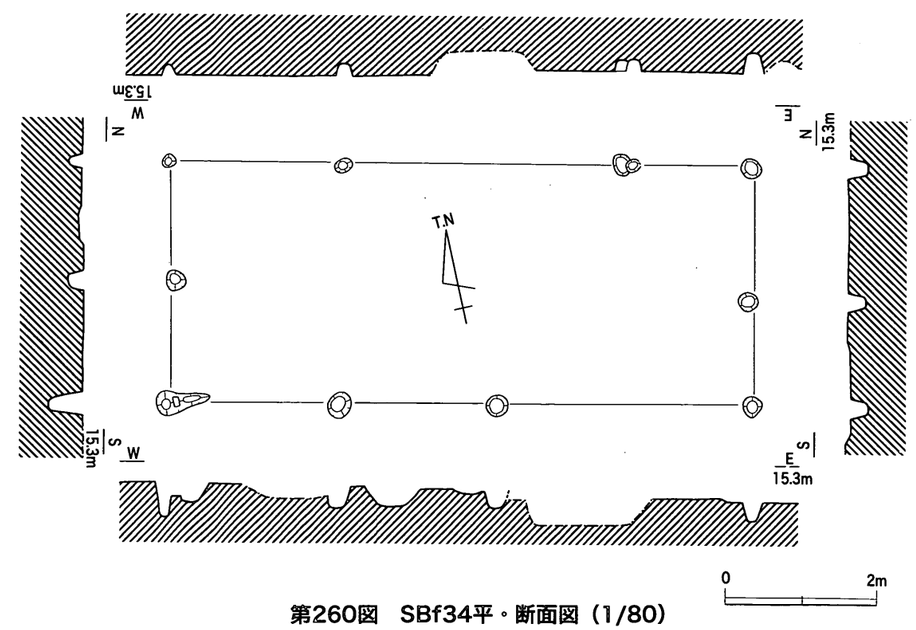
遺物は土師質土器擂鉢（**1487**）がある。時期の限定は難しいが，卸し目の単位がまとまって明瞭に



第258図　SBf32平・断面図（1/80）



第259図　SBf33平・断面図（1/80）



第260図　SBf34平・断面図（1/80）

認められることから，楠井窯での編年観を援用すると15世紀代頃の所産とみることができよう。

ＳＢf34（第260図）

小区画ｃの北部中央でＳＢf32・33と重複して検出された２×３間（梁間3.18ｍ，桁行7.65ｍ，床面積24.32㎡）の側柱建物である。主軸方向はW－12°－Nである。柱穴配置は直線的に並ぶが，柱間距離は不揃いである。すなわち桁行方向の西側２間分は2.16ｍ前後であるが，東側２間分は1.7ｍ前後である。柱穴は円形プランであり，南西隅の柱穴はＳＢf32の柱穴と重複した位置にあるが，両者の先後関係は明確でない。

遺物は，土師質土器皿・足釜・鍋の図示に耐えない細片が出土しており，細かな時期は不明だが中世後半であることは間違いない。

ＳＢf35（第261図）

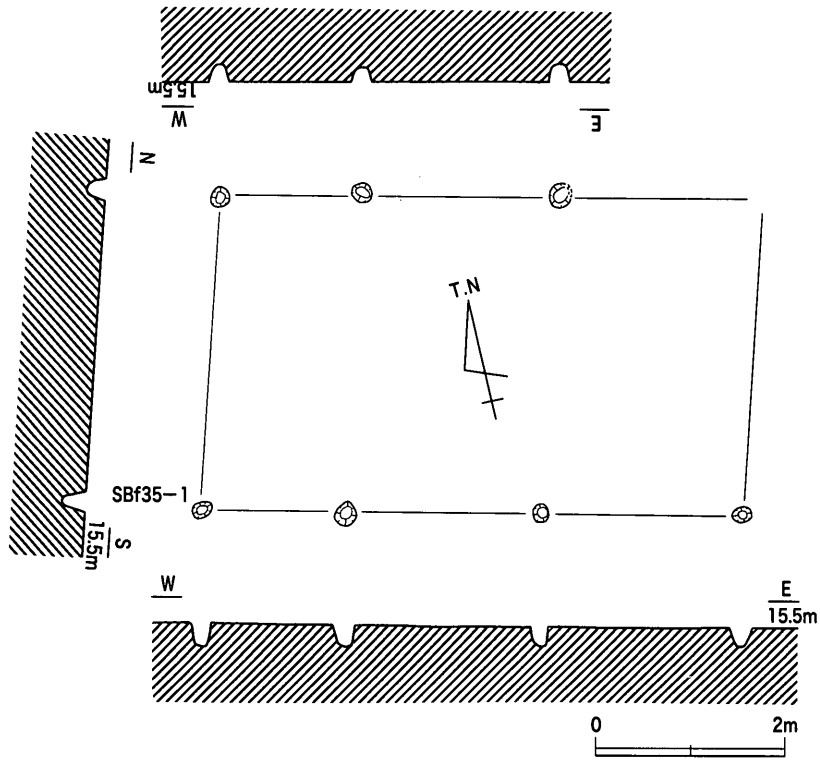
小区画ｃの南西部で検出された１×３間（梁間5.74ｍ，桁行3.32ｍ，床面積19.05㎡）の側柱建物である。主軸方位はW－13°－Nである。柱穴はほぼ直線的に並ぶが，各辺は若干歪であり平行四辺形プランを呈する。また柱間距離も桁行方向の東側２間分が2.1ｍ前後であるが，西側１間分が1.54ｍを測り，短くなっている。このため西側１間分は庇の可能性もある。柱穴の底面はほぼ一定である。

出土遺物は，土師質土器小皿・皿・器種不明細片，東播系須恵器捏鉢（**1483**）が出土している。**1483**は口縁端部が上内方に巻き込み気味に肥厚しており，山仲分類のＤ２類にあたるとみられる。東播系須恵器捏鉢から14世紀後半を上限とする時期を与えることができよう。

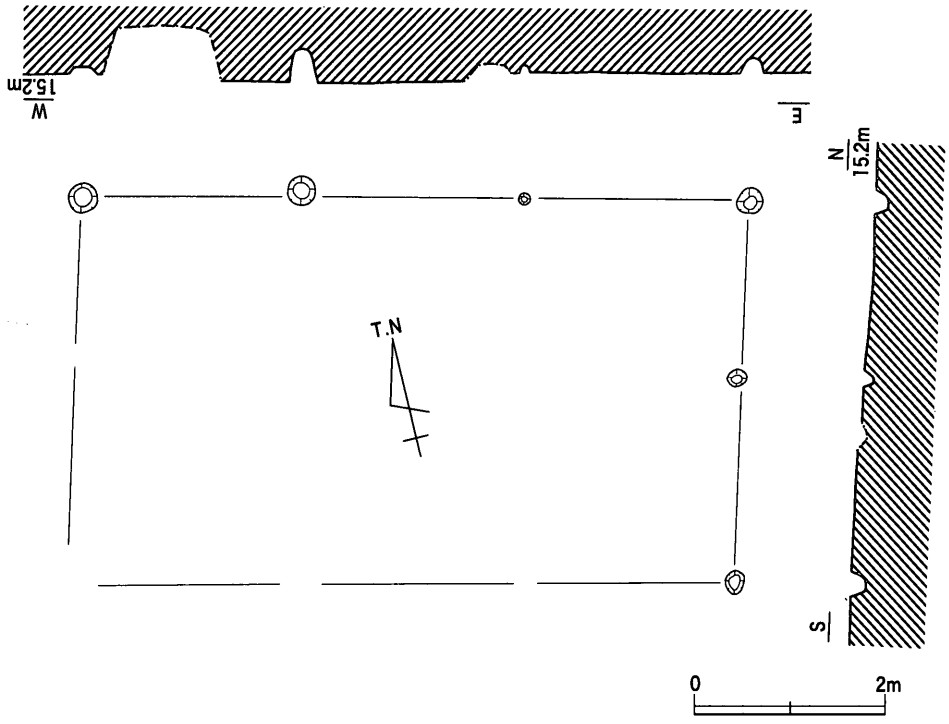
ＳＢf36（第262図）

小区画ｃの南東部で検出された２×３間（梁間3.97ｍ，桁行7.03ｍ，床面積27.9㎡）の側柱建物である。主軸方位はW－13.5°－Nである。南辺部中央～西端の柱穴はＳＫf104によって削平されているようである。北辺ならびに東辺の柱穴は直線的に並んでおり，平均柱間距離は梁間1.98ｍ，桁行2.34ｍを測る。柱穴は円形プランを呈するが，大きさや底面のレベルは一定していない。

出土遺物は土師質土器皿，黒色土器椀があるが，細片のため図示不可能である。ただし土師質土器皿から，遺構の時期は中世後半であると考えてよかろう。



第261図　SBf35平・断面図（1/80）



第262図　SBf36平・断面図（1/80）

c．土坑

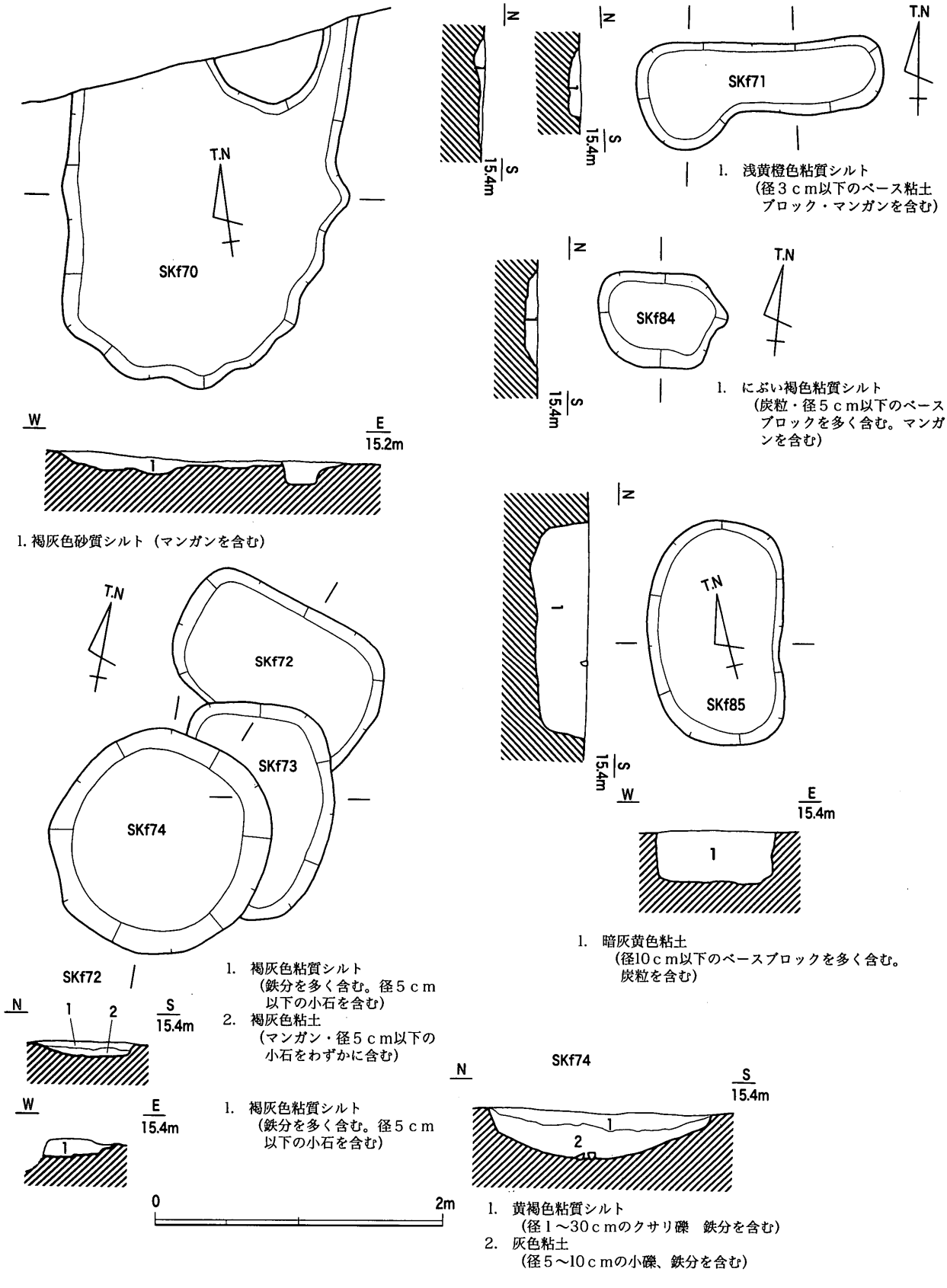
分布状況と形態

小区画cでは，不定形な平面形態を示すものも含めて30基の土坑が検出された。その分布状況としては，ピットの最も集中する範囲に9基（SKf75・76・78～84），ピットの最集中部の外側に13基（SKf84～88・91～96・99），小区画cの縁辺（西辺・南辺・東辺）に9基（SKf70～74・97・98・101・102）認められる。その分布状況をみると，特定の箇所に集中するような形態ではない。平面・断面形態や深度も一定していないため，形態から特定の機能を想定することは困難である。ただし，埋土中に基盤層のブロックを多量に含むものが多く，人為的な埋め戻しが行われた可能性が指摘できる。遺物の出土量は極めて僅少であり，廃棄土坑と考えることも難しい。主な遺物を第220図に図示した。**1498**・**1499**はSKf85出土の土師質土器杯である。器壁が極めて薄く，外傾気味の口縁部・体部をもつ。**1500**はSKf79出土の備前焼壺であり，間壁編年Ⅳ期後半の所産とみられる。**1501**はSKf70出土の凹基式石鏃であり，先端ならびに片側の基部を欠損している。

SKf101（第267～269図）

小区画cの北東隅にあたる，SDf57屈曲部において検出された。SDf57との切り合い関係はなく，同時併存とみられる。平面形態は歪な五角形状を呈しており，東西2.84m，南北2.74m，深さ0.15mを測る。掘り込み壁面は2段の緩やかな落ち込みとなっているが，この形状はSDf57の2段落ちの断面形態から連続している。これらから，単なる土坑ではなくSDf57とSDf64合流部が拡張した水溜状の遺構とみることもできる。

主な出土遺物として，土師質土器皿・擂鉢・足釜・茶釜形・把手付鍋・鍋・香炉，楠井産擂鉢，亀山焼，備前焼甕，青磁皿，染付碗，鉄滓がある。土師質土器皿（**1700**～**1704**）は口径7.6～9.4cmを



第263図　SKf70～74・84・85平・断面図（1/40）